現代日本文學全集
XVIII

杉浦非水装幀

德田秋聲集

改造社版

「徳田秋聲集」目次

書を読まざること三日、面に垢を生ずとか
昔しの賢は言つたが、読めば読むほど垢の
たまることもある

體験が人間に取つて何よりの修養だと云ふ
ことも言はれるが、これも当てにならない
むしろ書物や體験を絶えず片端から
切捨て〱するところに人の真実が研かれ
れる

秋声

新世帶

一

新吉がお作を迎へたのは、新吉が二十五、お作が二十の時、今から丁度四年前の冬であつた。

十四の時豪商の立志傳や何かで、少年の過敏な頭腦を刺戟され、東京へ飛出してから十一年間、新川の酒問屋で、傍目もふらず滅茶苦茶に働いた。表町で小さい家を借りて、酒に醤油薪に炭、鹽などの新店を出した時も、飯喰ふ隙が惜しい位クル〜と働き詰めで居た。始終襷がけの足袋跣のまゝで店頭に腰かけて、モクモクと氣忙しさうに飯を搔ッ込んでゐた。

新吉は一寸好い標致である。面長の色白で、鼻筋の通つた、口元の優しい男である。ビジネスカットとか云ふのに刈込んで、襟の深い毛絲のシャツを著て、前垂懸で立働いて居る姿にすら、何處となく品があつた。雪の深い水の清い山國育と言ふことが、皮膚の色澤の優れて美しいのでも解る。

お作を周旋したのは、同じ酒屋仲間の和泉屋と云ふ男であつた。

「内儀さんを一人世話しませう。好いのがありますぜ。」と和泉屋は、新吉の店が如何か成立ちさうだと云ふ目論見のついた時分に口を切つた。

新吉は直ぐには話に乘らなかつた。

「まだ海のものとも山のものとも知れねいんだからね。此なら大丈夫屋臺骨が張つて行けると云ふ見越がつかんことにや私ア不安心で、迚も嚊など持つ氣になれやしない。嚊を持ちや、子供が生れるものと覺悟せんけアなんねえしね。」と其淋しい額に、不安らしい笑を浮べた。

けれども新吉は、其必要は感じて居た。註文取に歩いて居る時でも、洗湯へ行つて居る間でも、小僧ばかりでは片時も安心が出來なかつた。帳合や、三度々々の飯も、自分の手と頭とを使はなければならなかつた。新吉は、内儀さんを貰ふと貰はないとの經濟上の得失などを、深く綿密に考へて居た。一々算盤珠を彈いて、口が一つ殖えれば如何、二年經つて子供が一人產れれば如何なると云ふこと迄、出來るだけ詳しく積つて見た。一年の店の利益、貯金の額、利子なども最少額に見積つて、間違のない處を、略見極をつけて、幾年目に何れだけの資本が出來ると云ふ勘定をすることぐらゐ、新吉に取つて興味のある仕事はなかつた。

三月ばかり、内儀さんの問題で、頭腦を惱して居たが、矢張貰はずにはゐられなかつた。

お作は其頃本郷西片町の、或官吏の屋敷に奉公して居た。

產は八王子のずつと手前の、或小さい町で、叔父が傳通院前に可成な鰹節屋を出して居た。新吉は、或日わざ〜汽車で乘出して女の產在所へ身元調べに行つた。

二

お作の宅は、其町の可成大きな荒物屋であつた。鍋、桶、瀨戸物、シャボン、塵紙、草履と云つた物をコテ〜と駢べて、老舗と見えて、黝んだ太い柱がツル〜と光つて居た。新吉は直ぐ近處の、怪しげな暗い飲食店へ飛込んで、チビ〜と酒を吞みながら、女を捉へて、荒物屋の身上、家族の人柄、土地の風評などを、拔目なく訊糺した。女は油くさい島

田の首を突出しては、酌をして居たが、知つて居るだけのことは話してくれた。田地が少しばかりに、小さい物置同樣の、倉のあることも話した。兄が百姓をして居て、弟が土地で養子に行つて居ることも話した。養蠶時には養蠶もするし、其方此方へ金の時貸などをしてゐる事も辯つた。

新吉自身の家柄との權衡から云へば、餘りドッとした緣邊でもなかつた。新吉の家は、今は悉皆零落して居るけれど、村では筋目正しい家の一つであつた。新吉は七八歲まではお坊ちやんで育つた。親戚にも家柄の家が澤山ある。物は亡しても、家の格は然迄低くなかつた。

けれど、新吉は其樣なことには餘り頓著もしなかつた。自分の今の分際では、それで十分だと考へた。

其事を、同じ村から出てゐる友達に相談してから、新吉は漸く談を進めた。見合は近間の寄席ですることにした。新吉は其友達と一緒に、和泉屋に連れられて、不斷著のまゝでヒョコヒョコと出掛けた。お作は薄ッぺらな小紋縮緬のやうな白ッぽい羽織のうへに、ショールを著て、叔父と田舍から出てゐる兄との眞中に、少し顏を斜にして坐つて居た。叔父は毛むくじやらの樣な顏をして、古い二重廻を著てゐた。兄は菱なりの樣な顏の口の大きい男で、此も綿ネルのシャツなど著て、土くさい樣子をして居た。横向であつたので、新吉は女の顏を能く見得なかつた。色の白い、丸ぽちやだと云ふ事だけは解つた。お作は人の肩越に、ちよい〳〵新吉の方へ目を忍ばせてゐたが、新吉は胸がワク〳〵して、頭腦が醉つたやうに爲つてゐた。

寄席を出るとき、新吉は出てゆくお作の姿をチラリと見た。お作も振顧つて、正面から男の立姿を二三度熟視した。お作は小柄の女で歩く樣子などは、坐つて居るよりも多少好いやうに思はれた。

其處を出ると、和泉屋は不恰好な長い二重廻の袖をヒラ〳〵させて、一歩先にお作の仲間と一緒に歸つた。

「如何だい、どんな女だい。」と、新吉は私と友達に訊いた。

何だか頭腦がボッとして居た。叔父や兄貴の百姓々々した風體が、何となく氣に懸つた。でも厭で堪らぬと云ふ程でもなかつた。

三

明日は朝早く、小僧を註文取に出して、自分は店頭で精々と樽を滌いでゐると、まだ日影の薄ら寒い街を、急々と此方へやつて來る男がある。柳原ものの、薄ッぺらな、例の二重廻を著込んだ和泉屋である。

和泉屋は、羅紗の硬さうな中折帽を脫ぐと、輕く挨拶して、其まゝ店頭へ腰かけ、氣忙しさうに帶から莨入を拔いて莨を吸出した。

「君の評判は大したもんですぜ。」と和泉屋は突如に高聲で辯り出した。「先方ぢやもう悉皆氣に入つちやつて、何が何でも一緒に爲たいと云ふんです。」

「冷評しちや不可ませんよ。」と新吉は矢張ザクザク遣つてゐる。氣が氣でないやうな心持もした。

「いや眞實ですよ。」と和泉屋は反身になつて、「其で話は早い方が好いからツてんで、今日にでも日取を決めてくれろと云ふんですがね、如何です、女も決して惡いて方ぢやないでせう。」と和泉屋は、其から女の身上持の好いこと、氣立の優しい事などをベラ〳〵と說立てた。星廻や相性のことなども辯じて、獨で呑込んでゐた。支度は素より有ら筈はないけれど、其でも好かれ惡しかれ、簞笥の一棹位は持つて來るだらう。夜具も一組は持込むだらう。左に右

貰つて見給へ、同じ働くにも、如何に張合があつて面白いか。あの女なら請合つて桝新のお釜を興しますと、小汚い齒齦に泡を溜めて勸めた。

新吉は帳場格子の前の處に腰かけて、何やら物足りなさうな顔をして聽いてゐたが、一ちや此はお斷り。と首を傾げながら低聲に言つた。

「だが、來て見て、吃驚するだらうな。何ぼ何でも、先達こんな亂暴な宅だとは思ふまい。けど、まあ可いや、君に任しておくとしませう。逃出されたら逃出された時のことだ。」

「其樣なこたアありませんよ。物は試し、マア貰つて御覽なさい。」

和泉屋は[illegible]もので歸つて行つた。

其から十日ばかり經つた或晩、新吉の宅には、色々の人が大勢集つた。前の車夫が一人、小野と云ふ例の友達が一人——此は殊に朝から詰めかけて、部屋の裝飾や、今夜の料理の指揮などしてくれた。障子を張替へたり、何處からか安い懸物を買つて來てくれなどした。新吉の着るやうな紺の羽織と、何やらガタ〳〵の袴を借りて來てくれたも小野である。小さい口錢取などして、小才の利く、世話好な男である。

料理の見積も此男が爲てくれた時、新吉は優しい顔を顰めた

「どうも困るな、こんな取著身上で、其樣な贅澤な眞似をされちや。何だか氣が知れねえが、其引物とか云ふ物を省いてうちやおけねえか。」

四

小野は怒りもしない。愛嬌のある丸顔に笑を漂べて、「然う吝なことを言ひなさんな。一生に一度ぢやないか。此樣な物を儉約したからつて、何程も違ふものぢやありやしない。第一見窄しくて可けないよ。」

「でも君、私ア眞實の處酷く苦面して婚禮するんだからね。何も苦しい思をして、虚榮を張る必要もなからうぢやねえか。ね、小野君私ア然う云ふ主義なんだぜ。君等のやうに懷手して好い錢儲の出來る人たア少し違ふんだからね。」

「理窟は理窟さ。」と小野は笑顔を放さず、「他の場合と異ふんだから、少しは世間體て云ふことを考へなくちや……。好いぢやないか、後でミッチリ二人で稼げば。」

新吉は黒い指頭に、臭い莨を摘んで、兵隊の煙管に詰めて、炭の粉を埋けた鐵瓶の下で火を點けると、思案深い目容をして、濃い煙を噴いてゐた。

六疊の部屋には、もう總桐の箪笥が一棹据ゑられてある。新しい鏡臺も、其上に載せてあつた。借りて來た火鉢、黄縞の座蒲團などが、新い疊の上に積んであつた。丁度晝飯を濟したばかりの處で、耳の遠い飯炊婆さんが臺所で其後始末をしてゐた。

新吉はまだ何やらクド〳〵云つて居た。小野の見積書を手に取つては、獨で胸算用をしてゐた。此處へ店を出してから食ふ物も食はずに、少許宛溜めた金が、既う三四十もある。其を此際大略費出して了はねばならぬと云ふのは、新吉に取つて些と苦痛であつた。新吉は恁うした大業な式を擧げる意はなかつた。總と與入をして、私と儀式を濟す筈であつた。強ち金が惜しいばかりではない。一體が、目に立つやうに晴々しいことや、華やかなことが、質素な新吉の性に適はなかつた。人の知らない處で働いて、人に見著からない處で金を溜めたいと云ふ風であつた。どれだけ金を儲けて、何れだけ貯金がしてあると云ふことを、人に氣取られるのが、既に好い心持ではなかつた。獨立心と云ふやうな、個人主義と云ふやうな、妙な偏つた一

挿んだ為か、丁稚奉公をしてから以來彼の頭腦に喰ひ込んで居た。小野の半袖は、彼に取つては、餘り心持好くなかつた。と言つて、此男が無くては、此場合、彼は殆ど手が出なかつた。グツ〱言ひながら、分業反抗する事も出來なかつた。

三時過になると、彼は床屋に行つて、其から湯に入つた。歸つて來ると、家はもう明が點いてゐた。

新吉は、「ア、」と言つて、長火鉢の前に坐つた。小野は自分の花嫁でも來るやうな晴々しい顔をして、「如何だ新さん待遠しいだらう。茶でも淹れようか。」

「莫迦言ひたまへ。」新吉は淋しい笑方をした。

五

するうち綺麗に磨立てられた臺ランプが二臺、狭苦しい座敷に點され、火鉢や座蒲團も整然と駢べられた。小さい島臺や、銚子、盃なども、何時の間にか淺い床に据ゑられた。臺所から、料理が持込まれると、耳の遠い婆さんが、一々丁寧に拭いた膳の上に並べて、其から見事な蝦や、蛤を盛つた、竹の色の青々した引物の鯛をも、ズラリと茶の室へ並べた。小野は新聞紙を引裂いては、埃の溜らぬやうに、御膳の上に被せて行いてゐた。新吉は氣が騒々しく來た。切立の質素の小袖を着込んで、目眩しいやうな日常で、彼方へ行つて立つたり、此方へ來て坐つたりしてゐた。

「サア、此で此方の用意は悉皆出來揚つた。何時お出でなすつても差間ないんだ。マア一服しよう。」と蜻蛉の眼顆のやうに頭を光らせながら、小野は座敷の眞中に坐つた。

「イヤ御苦勞々々々。」と新吉も外の二人と一緒に傍に坐つて、頭を掻きながら、「私ア如何も、斯様な事にや一向慣れねえもんだからね……」と分疏してゐた。

「何に、慣たつて、何を知つてるもんか、出鱈目さ。」と笑つた。

「今夜はマア媒酌なしに大いに飲んでくれ給へ。君が第一のお客様なんだからね。」

新吉は此晴々しい席に、親戚の者と云つては、唯の一人も無いのを、何だか頼りなくも思つた。如何か恁うか此まで漕ぎつけて來た、長い年月の苦勞を思ふと、迂廻くねつた小徑を色々に歩いて、廣い大道へ出て來たやうで、昨日までのことが、夢のやうに思はれた。是からが責任が重いんだと云ふ感激もあつた。明るい、紛々しいやうな感じが、風もないのに眼先に搖いで、新吉の目には涙が浮んで來た。花のやうな自分の新妻が、不思議の緣の糸に引かれて、天上からでも降りて來るやうな感じもあつた。

「然しもう來さうなものだね。」と小野は膝のうへで見てゐた新聞紙から目を離して、「ひどく思はせ振だな。」と生欠をした。

「然うですね。」

「けど、まだ暮れたばかりですもの。」と他の二人も目を見合せて、伸上つて、店口を覗いた。

店は入口だけ殘して、後は閉切つてある。小僧は火の氣のない帳場格子の傍に坐つて、懐手をしながら、コクリ〱居睡をして居た。時計が丁度七時を打つた。

小野と新吉とが、間もなく紋付袴を着けて坐直した時分に、静かな春の町をゴロ〱と腕車の響が、遠くから聞え出した。

「ソラ來た！」

小野は新吉と顔を見合つて起上つた。他の二人も新吉も何と云ふこともなし起上つた。

新開の暗い街を、鈍く曳いて來る腕車の音は、何となく物々しかつた。

四人は店口に肩を駢べ合つて、暗い外を見遣

してゐた。向うの縄暖簾屋の軒明が、暗い暗い街の片側に淋しい光を投げて居た。

六

　新吉が胸をワク／＼させてゐる間に、五台の腕車が、店先で梶棒を卸した。眞先に飛降りたのは、足の先ばかり白い和泉屋であつた。續いて降りたのが、丸髷頭の短い首を据ゑて、何やら淡色の紋附を著た和泉屋の内儀さんであつた。三番目に見榮のしない小軀のお作が、ひよッこりと降りると、其後から、叔父の連合だと云ふ四十許りの女が、黒い吾妻コートを著て、「ハイ、御苦勞さま。」と輕い東京辯で、若衆に聲かけながら降りた。兄貴は黒い鍔廣の中折帽を冠つて、殿をしてゐた。

　和泉屋は小野と二人で、一同を席へ就かせた。

　氣爽らしい叔母は些と垢脫のした女であつた。眉の薄い目尻の下つた、ボチャ／＼した色白の顔で、愛嬌のある口元から金歯の光が洩れてゐた。

「ハイ、これは初めまして……私は此の叔父の家内でございまして、實は此のお袋が生憎二三日加減が悪いとか申しまして、其で今日は私が出ましたやうな譯で、萬望まあ何分宜しく。……此度は又不束な者を差上げまして……。」とだら／＼と叔母が口上を述べると、續いて兄もキックツ張つた調子で、挨拶を濟した。

　後は少時森として、若い衆の煙が、人々の目の前を漂うた。正面の右に坐つた新吉は、テラ／＼した頭に血の氣の美しい顔、目のうちにも優しい潤みを有つて、腕組したまゝ、堅くなつてゐた。お作は薄化粧した顔をポッと紅くして、俛いてゐた。坐つた膝も詰り、肩や胸のあたりもスッとした方ではなかつた。結立の島田や櫛笄も、取つて附けたやうな頭には何だか、持つて來て載せたやうにも見えた。でも、取澄した氣振は少しも見えず、折々表情のない目を擧げて、何處を見るともなく瞻めると、目映しさうに又伏せてゐた。

　和泉屋と小野は、袴をシュッ／＼云はせながら、狹い座敷を出たり入つたりして居たが、するうち銚子や盃が運ばれて、手輕な三々九度の儀式が濟むと、赤い盃が二側に居並んだ人々の手へ順々に廻された。

「お愛でたう。」と云ふ聲と一緒に、多勢が一齊にお辭儀を爲合つた。

　新吉とお作の顔は、一様に熱つて、目が美しく輝いてゐた。

七

　盃が一順廻つた時分に、小野が何處からか引張つて來た若い衆が、末座に坐つて、突然突拍子な大聲を張揚げて、高砂を謡出した。同時にお作が次の間へ着換に起つて、人々の前には肴が運ばれ、陽氣な笑聲や、話聲が一時に入亂れて、銚子が盛に其方此方へ飛んだ。

「サア、お役は濟んだ。此から飲むんだ。」和泉屋が言出した。

　新吉も席を離れて、「私の處も未だ眞の取著身上で、御馳走と言つちや何もありませんが、酒だけア澤山有りますから、萬望マア御ゆつくり。」

「イヤなか／＼御鄭重な御馳走で……。」と兄貴は大きい掌に猪口を載せて、莫迦丁寧なお辭儀をして、新吉に差した。「私は田舎者で、何にも知らねえもんでござえますが、何分切望よろしく。」

「イヤ私こそ。」と新吉は押戴いて、「何しろ未だ世帯を持つたばかりでして……加之私ア此方には親戚と云つては一人も無えもんですから、是でなか／＼心細いです。マア一つ皆さんの

ってゐたが、やがて臺所口で飯を食つて居る傭婆さんに大聲で口を利き出した。

「婆さん、此間から話して置いたやうな譯なんだから、私ア處はもう可いよ。婆さんの都合で、暇を取るのは何時でも介意はねえから……。」

婆さんは味噌汁の椀を下に置くと、「ハイハイ。」と二度ばかり頷いた。

「でも今日はまあ、何や彼や後片付もございますし、貴女もお出でになつた早々から水弄も何でせうからね……。」とお作に笑顏を向けた。

「己ン處ア其樣なこと言つてる身分ぢやねえ。今日からでも働いて貰はなけれアなんねえ。」と新吉は愛想もなく言つた。

「ハア切……！」とお作は低聲で言つた。

「オイ婆さん、何を茫然見てゐるんだ。サッサと飯を食つてしまひねえ。」と新吉はプイと起つた。

九

午前のうち、新吉は二三度外へ出には急々と歸つて來た。小僧と同じやうに鹽や、木端を得意先へ配つて歩いた。岡持を肩へかけて、少し許りの醤油や酒をも持廻つた。店が空きさうになると、「ちよッ、鳥樣がゐないな。」と舌打して作を見込み、「オイ、帳場から出てゐてくんな。」とお作に聲をかけた。お作は顏や頭髮を氣にしながら、極惡さうに帳場の處へ來て坐つた。

新吉は昨夜來たばかりの花嫁を捉へて、醤油や酒の好惡、値段などを教へ始めた。

「此邊は貧乏人が多いんだから、皆細い商ひばかりだ。お客は七八分勞働者なんだから、酒の小賣が一番多いのさ。店頭へ來て、枡飲をや込む手合も、日に二人や三人はあるんだから、然う云ふ奴が飛込んだら、此處の呑口を斯う捻つて、枡ごと突出してやるんさ。彼奴等撮嘗か何かで、グイ〱引かけて去かア。宅は新店だから、帳面の外貸は一切爲ねえと云ふ極なんだ。」と其から賣揚のつけ方なども、一通り口早に教へた。お作は唯ニヤ〱と笑つて居た。解つたのか、解らぬのか、新吉はもどかしく思つたが、疎薬法、碌も喰はず、岡持を擔出して、又出て行つて了ふ。

晩方少し手隙になつてから、新吉は[illegible]な着を著て、古い鳥打帽を被り、店をお作と小僧とに託けて、和泉屋へ行くと言つて宅を出た。

お作は後で[illegible]としてゐた。優しい顏に似合はず、氣象はきぱ〱烈しいやうに思はれた。無口なやうで、何でも彼でも浚け出す時は、男らしいやうにも思はれた。昨夜の衣裳や袴を疊んで簞笥に仕舞はうとした時、其奴は小野が、餘所から借りて來てくれたんだから……。」と低聲に云つて風呂敷を出して、自分で丁寧に包んだ、虚榮も人前もない樣子で、何となく賴もしいやうな氣もした。初めての自分には、胸がドキリとする程荒い言をかけることもあるが、心持は竹を割つたやうな男だとも思つた。此店も二三年の中には、グッと手廣くする心算だから……と、昨夜寢てから話したことなども憶出された。自分の宅の一つも建てたり、千や二千の金の出來る時は、目を瞑つて辛抱してくれろと云つた言葉を思ひ出すと、お作は[illegible]思ひがけないやうな[illegible]な氣がして、此五六日の不安と動搖とが、[illegible]と一緒に融合つて、嬉しいやうな、[illegible]ないやうな思ひが、胸一杯に漂うてゐた。

お作は机に肱を突いて、[illegible]い新開の町を眺めた。寒い冬の日は[illegible]、寂しい影が一體に行渡つてゐた。[illegible]人の姿が夢のやうに、往來してゐる。お作の目は潤んでゐた。[illegible]した[illegible]新吉の顏が、何か知ら朦朧した靄のやうな[illegible]の中から見えるやうであつた。

十

華奢な口前は、滑るやうに遁去つた。新吉は結婚後一層家業に精が出た。其働振には以前に比して、多少用意と思慮とが交ふ餘裕が出て來た。小僧を使ふことも、仕入や得意を作ることも巧みになつた。口を動かすことは、比較的少くなつた代りに、多く頭腦を使ふやうな傾きもあつた。

けれど、お作は何の役にも立たなかつた。氣立が優しいのと、起居が鈍かなのと、物質上の慾望が少いのと、唯其だけが此女の長所だと云ふことが、愈明かに爲つて來た。新吉が出て了ふと、お作は良人に吩咐かつたことの外、何の氣働きも機轉も利かすことが出來なかつた。灘の酒の割法が間違つたり、高い醤油を安く賣ることなどは珍しくなかつた。帳面の調子、得意先の様子なども、一向に呑込めなかつた。呑込まうとする氣合も見えなかつた。

其樣なことが幾度も重なると、新吉は憤々して怒つた。

「貴様は餘程間拔けだな。商人の内儀さんが、其樣なこツて如何するんだ。三度々々の飯を何處へ食つてやがんだ。」

優しい新吉の口から惡い言葉が出るやうに爲つた。

お作は赤い顔をして、唯ニヤ／＼と笑つてゐる。

「ちよつ、仕樣がねえな。」と新吉は焦れつたさうに、顔中を曇らせる。「己ア飛んだ者を背負込んぢやつたい。不斷は泉屋も和泉屋ぢやねえか。女房效に、少しは何とか目口の明いた女房を世話するが可いや。媒介口ばかり利きあがつて。……此ぢや人の足元を見て、押附ものをしたやうなもんだ。」とブツ／＼零してゐる。

お作は、泣面かきさうな顔をして、術なげに俯いて了ふ。

「明日から引込んでるが可い。店へなんぞ出られると、反つて家業の邪魔に爲る。奥でおん襤褸でも綴くつてる方が餘程しも優だ。此位のことが勤まらねえやうぢや、何處へ行つたつて勤まりさうな譯がない。それで能くお屋敷の奉公が勤まつたもんだ。」

罵る新吉の舌には、毒と熱とがあつた。

お作の目からはポロ／＼と熱い涙が零れた。

「私は逆迴ですから……。」とおど／＼する。

新吉は急に默つて了ふ。而してフカ／＼と煙草を喫す。筋張つたやうな顔が蒼くなつて、目が涙のやうに釣つてゐる。口を利く氣にもなれないで了ふのだが、腹の中は煮え返つてゐる。

お作は默られると、一層心細くなつて、おど／＼する。

「此から精々氣をつけますから……。」と[illegible]で詫びるのであるが、新吉には自信も決心もなかつた。唯恐怖があるばかりであつた。

十一

こんな事のあつた後では、お作は必然奥の六疊の簞笥の前に坐つて、針仕事を始める。半日でも一日でも、新吉が口を利けば、例の目尻や口元に小皺を寄せた、人の好ささうな笑顔を向けながら、素直に受答をする外、自分からは熟んだ柿が潰れたとも言出せなかつた。

此老親の膝下にゐた時も、三年の間西片町の或教授の屋敷に奉公してゐた時も、唯自分の出來るだけの事を正直に、眞面目に勤めて居れば其で可かつた。親からは女らしい娘だと讃められ、主人からは氣立の好い、素直な女だと言つて可愛がられた。此家へ緣附くことになつて、暇を貰ふ時も、お前ならば必然亭主を粗末にしないだらう。世帶持も好からう。亭主に思はれるに決つてゐると、旦那樣から分に過

ぎた節祝儀を頂いた。夫人からも半襟や簪などを頂いて、門の外迄見送られた位であつた。新吉に頭から誹謗されると、お作の心はドマ〳〵して、何が何だか些張解らなくなつて來る。唯皮張つて見せるのであらうとも思はれる。故と嚴しく言つて脅して見るのだらうと云ふ氣もする。あれ位なことは、今日は失敗つても、二度三度と慣れて來れば造作なく出來さうにも思へる。孰にしても、彼人の氣の短いのと、怒りつぽいのは婆やが出てゆく時、私と注意しておいてくれたのでも解つてゐる――と、お作は恁う云ふ心持で、深く氣にも留めなかつた。怒られる時は、如何なるのかと戰々して、胸が一杯になつて來るが、其も其時限で、不安の雲はあつても、自分を悲觀する程ではなかつた。

其でも針の手を休めながら、折々溜息を吐くことなぞある。獨り長火鉢の横に坐つて、爲る仕事のない靜かな晝間なぞは、自然に涙の零れる事もあつた。寧そ宅に歸つて、舊の屋敷へ奉公した方が氣樂だなぞと考へる事もあつた。其時分から、お作は能く鏡に向つた。四下に人の影が見えないと、私と鏡の被を取つて、自分の姿を映して見た。髮を直して、顏へ水白粉など塗つて、暫く其處に恍然してゐた。而して昨日のやうに思ふ婚禮當時の事や、其から半年餘りの樂しかつた夢を繰返してゐた。自分の姿や、陽氣な華やかな其晩の光景も、歷々目に浮んで來る。――今では然うした影も漂うてゐない。憶出すと泣出したい程情なくなつて來る。

店で帳合をしてゐた新吉が、不意に「アヽ」と溜息を吐いて、此も滿らなさゝうな顏をして奥を覗きに來る。お作は赤い顏をして、急いで鏡に被をして了ふ。

「オイ、茶でも淹れないか。」と新吉は難しい顏をして、後へ引返す。

長火鉢の傍で一緒になると、二人は妙に默込んで了ふ。長火鉢には火が消えて、鐵瓶が冷くなつてゐる。

十二

お作は妙におどついて、俄に臺所から消炭を持つて來て、星のやうな炭團の火を拾ひあげては、折々新吉の顏色を候つてゐた

「焦れつたいな。」新吉は忌々しい、舌打をして、火箸を引摑るやうに取ると、自分でフウ〳〵言ひながら、火を起し始めた。

「一日何をしてゐるんだな。お前なぞ飼つておくより、猫の子飼つておく方が、何のくらゐ氣が利いてるか知れやしねえ。」と戯談のやうに言ふ。

お作は不相變ニヤ〳〵と笑つて、凝と火の起るのを瞶めてゐる。

新吉は熱つた顏を兩手で撫でて、「お前なんざ、眞實に苦勞と云ふものを爲て見ねえんだから駄目だ。己なんざ、何しろ十四の時から深川へ奉公して、十一年間苦役はれて來たんだ。食物も碌に食はずに、土間に立詰だ。指頭の千斷れるやうな寒中、炭を挽かされる時なんざ、眞實に泣いつちまふぜ。」

お作は皮膚の弛んだ口元に皺を寄せて、ニヤリと笑ふ。

「此から樂すれや可いぢやありませんか。」

「戯談ぢやねえ。」新吉は吐出すやうに言ふ。「此からが苦勞なんだ。今迄は唯體を動かせるばかりで辛抱さへしてゐれアア、其で好かつたんだが、自分で一軒の店を張つて行くことになつて見るてえと、然うは行かねえ。氣苦勞が大したもんだ。」

「其代り樂しみもあるでせう。」

「一體何が樂しみがあるね。」と新吉は目を丸くした。「樂しみつて處へは、何だ！、行かねえ。」

其差を滑ぎつけるのが大抵のことぢゃ有りやしねえ。其には内儀さんも毅然してゐてくれなけアたらねえ。……それア己は遣る。必然やつて見せる。轉んでも唯は起きねえ。けど、お前は如何だ。お前は三度々々無駄飯を食つて、毎日毎日モゾクサしてる許しぢゃねえか。だから俺は働くにも張合がねえ。厭になつちまふ。」と新吉はウンザリした顔をする。

「でもお金が殘るわ。」

「當然ぢゃねえか。」新吉は嬉しさうな笑を目元に見せたが、直に可怕いやうな顔をする。お作が始末屋と云ふよりは、金を使ふ氣働すらないと云ふことは、新吉には一つの氣休であつた。お作には、此處を切詰めて、此處を如何しようと云ふ所思もないが、其代り錢一文自分の意志で使はうと云ふ氣も起らぬ。此處へ來てから新吉の勝手元は少し宛豐になつて來た。手廻の道具も殖えた。新吉が何處からか格安に買つて來た手箪笥や鼠入らずがツヤ／＼光つて、著物も先ず一通り揃つた。保險もつければ、別に毎月の貯金もして來た。お作は唯の一度も、自分の料簡で買物をした事がない。新吉は三度々々のお菜まで殆ど自分で見繕つた。お作は唯鈍い器械のやうに引廻されてゐた。

十三

[illegible]小僧の一人が、ごろりと[illegible]、岡持を其處へ投出して、[illegible]た。

「[illegible]の小言が出ましたよ。彼樣な水ッぽい[illegible]不可いから、今度少し吟味しろッて……今持つて行くんです。」

「吟味しろッて、」新吉は顔を顰めて、「水ッぽい譯はねえんだがな。誰が然う言つた。」

「旦那が然う言つたですよ。」

「然う言ふ譯は決してございませんッて。尤も少し辛くしろッてッたから、其心算で辛口にしたんだが……。」と新吉は店へ飛出して、下駄を突かけて土間へ降りると、何やらブツクサ云つてゐた。

店では「ホイ／＼」と云ふ音が聞える。軈くすると、小僧は又出て行つた。

「碌な酒も飲まねえ癖に文句ばつかり言つてやがる。」と獨語を言つて、新吉は舊の座へ歸つて來た。得意先の所思を氣にする樣子が不安さうな目の色に見えた。

お作は番茶を淹れて、其から濕つた煎餅を猫板の上へ出した。新吉は何やら考へ込みながら、無意識にボリ／＼[illegible]な齒で、ボツ／＼[illegible]大分春めいて來た[illegible]チラホラ白い花を[illegible]光があつた。外は人[illegible]聞える。新吉は何だ[illegible]た。恁うして坐つてゐる[illegible]來たやうにも思はれた。長い[illegible]時に出て來た故もあらう。多少物[illegible]がついて來たのも、一つの原因[illegible]

お作は何かの話の序に、「[illegible]に、一度二人で田舍へ行きま[illegible]出した。

新吉は默つてお作の顔を見[illegible]

「別に見る處といつちやありゃしま[illegible]けれど、其でも田舍は好ござんすよ、[illegible]が咲いて……野良へポカ／＼[illegible]時分の[illegible]んか、眞實に面白うござんすよ[illegible]

「氣樂言つてらア。」と新吉は淋しく笑つた。「お前の田舍へ行くも可いが、其よか自分の田舍、だつて、義理としても一度は行かなけアなんねえ。」

「如何して又、七年も八年もお歸んなさらないんでせう。隨分だわ。」お作は煎餅の、喰著い

た齒莖を見せながら笑つた。

「そんな金が何處にあるんだ。」新吉は苦い顏をする。「一度行けア一月や二月の儲はフイになつちまふ。久振ぢや、豈夫手ぶらで歸られもしねえ。產故鄕となれア、トンビの一枚も引張つて行かなけアなんねえし。……第一店を如何する氣だ。」

お作は急に萎げて了ふ。

「此方や其所ぢやねえんだ。眞實だ。」

新吉はガブリと茶を飲干すと、急に立上つた。

十四

櫻の蕾みに毛蟲がつく時分に、お作はパッタリ月經を見なくなつた。お作は冷え性の女であつた。脣の色も惡く、肌も綺麗ではなかつた。齒性も弱かつた。菊が移れる頃になると、新吉に嗤はれながら、裾へ安火を入れて寢た。是と云ふ病氣もしないが時々食べたものが消化れずに、上げて來ることなぞもあつた。空風の寒い日などは、血色の惡い總毛立つた樣な顏をして、火鉢に縮かまつてゐた。少し劇しい水仕業をすると、小さい手が直に荒れて、揉手をすると、カサ〳〵音がする位であつた。新吉は、夜に寢るとき、滋養に濃い酒を猪口に一杯づつ飲せなどした。傳通院前に、灸點の上手があると聞いたので、其をも試みさした。

「今から其樣なこつて如何するんだ。全然婆さんのやうだ。」と新吉は笑ひつけた。

お作は分疏のないやうな顏をして、其度每に元氣らしく働いて見せた。

斯うした弱い體で、姙娠したと云ふのは、些と不思議のやうであつた。

「譃つけ。體が如何かしてゐるんだ。」と新吉は信じなかつた。

「いゝえ。」とお作は赤い顏をして、「大分前から如何も變だと思つたんです。占つて見たら然うなんです。」

新吉は不安らしい目色で、妻の顏を見込んだ。

「如何したんでせう、斯樣な弱い體で……。」と云つた目色で、お作も極惡さうに、新吉の顏を見上げた。

其から二人の間に、コナ〳〵した濕かな話が始まつた。新吉は長い間、絕えず惡口を浴せかけに來たことが、今更氣の毒なやうに思はれた。全然自分の妻と云ふ者を持つことの出來なかつたのを悔いるやうな心も出て來た。つい此四五日前に、長湯をしたと云つて怒つたのが因で、アクザモクザ呶つた果に、何か厄介者でも貰つてゐたやうに可悔しがつて、出て行け、今出て行けと呶鳴つたことなども、我ながら淺猿しく思はれた。

加之、姙娠でもしたとなると、何だか氣が更まるやうな氣もする。多少の不安や、厭な感じは伴ひながら、自分の生活を一層確實にする時期へ入つて來たやうな心持もあつた。

お作はもう、お產の時の心配など始めた。初著や襁褓のことまで言出した。

「私は體が弱いから、必然お產が重いだらうと思つて……。」お作は嬉しいやうな、心元ないやうな目をショボ〳〵させて男の顏を眺めた。

新吉はいぢらしいやうな氣がした。

お作は十二時を聞いて、急に針を針さしに刺した。希しく顏に光澤が出て、目のうちにも美しい潤ひを有つてゐた。新吉は恍然した目容で、其顏を眺めてゐた。

十五

お作は婚禮當時と變らぬ初々しさと、男に甘えるやうな樣子を見せて、其處らに散つた布屑や絲屑を拾ふ。新吉も側で讀んでゐた講談物を閉ぢて、「サア然うしちアゐられねえ。」と急立てられる樣な調子で、懈怠さうな身節がミリミ

り言ふ度に伸をする。

「もう親父になるのかな。」と其時を待つてゐる。

「早いものですね、全然夢のやうね。」とお作も恍然した目をして、媚びるやうに言ふ。「私のやうな者でも、子が出来ると思ふと不思議ね。」

二人は其から婚禮前後の心持などを話出して、詰らぬことをも意味ありさうに語出した。

恁うした仲の睦まじい時、能く雙方の親兄弟の噂などが出る。親戚の話や、自分等の幼い折の話なども出た。

「お産の時、阿母さんは田舎へ来てゐろと云ふんですけれど、家にゐたつて好いでせう。」

時計が一時を打つと、お作は思出したやうに、急いで床を延べる。新吉に寝衣を着せて床の中へ入れてから、自分は又一時、脱棄を畳んだり、火鉢の火を消したりしてゐた。

二三日は恁う云ふ風の交情が続く、新吉はフイと側へ寄つて、お作の頬に熱いキスをする事などもある。ふと思ひついて、近所の寄席へ連出す事もあつた。

が、然うした後では、直に反動が来る。思ひがけない事から、不意と新吉の心の平衡が破れて來る。

「……少し甘やかしておけア、もう此だ。」と新吉は茄子火鉢の前で、お作がフラ／＼と居眠をしかけてゐるのを見つけると、其鼻の先で激しく舌打をして、ついと後へ引返してゆく。

お作はハッと思つて、胸を騒がすのであるが、恁うなるともう手の著け様がない。お作の智恵では如何することも出来なくなる。よく／＼気が合はないのだと思つて、心の中で泣くより外はなかつた。新吉の仕向は、全然掌裏を飜したやうになつて、顔を見るのも胸糞が悪さうであつた。

秋の末になると、お作は田舎の實家へ引取られることになつた。其頃は人並はづれて小さい腹も大分目に立つやうになつた。傳通院前の叔母が来て、例の気爽な調子で新吉に話をつけた。

夫婦間の感情は、絲が縺れたやうに紛糾つてゐた。お作はもう飽かれて棄てられるやうな気もした。新吉はお作が此儘歸つて来ないやうな気がした。お作は左に右に衆の意嚮が然うであるらしく思はれた。

新吉は小遣を少し持たして、滋養の葡萄酒などを鞄の隅へ入れてやつた。

「其うちには己も行くさ。」

「實家に来て下さい」と、お作は出立をしながら、幾度も念を推した。

十六

お作が行つてから、新吉は稍な寂落したやうな心持であつた。家が急に寂しくなつて、三度三度の膳に向ふ時、妙に其處に坐つてゐるお作の姿が思出される。お作を叱りつけた事や罵倒した事などを考へて、傷しいやうにも思つた。何かの端に、「手前のやうな能なしを置くより、猫の子を飼つておく方が、遙に優だ。」とか、「とつとと出て行つてくれ、何うでも己も何うかする。」とか云つて叱咤つた時の、自分の荒れた感情が浅猿しくも思はれた。けれど、わざ／＼お作を見舞つてやる気にもなれなかつた。お作から筆の廻らぬ手紙で、東京が戀しいとか、田舎は寂しいとか、體の工合が悪いから来てくれとか云つて来る度に、舌鼓をして、手紙を丸めて、投出した。お袋に兄貴、從妹、と多勢一緒に撮つた寫眞を送つて来た時、新吉は、「何奴も此奴も百姓面してやがらア。厭になつちまふ。」と吐出すやうに言つて、二目とは見なかつた。

其頃小野が結婚して、京橋の岡崎町に間借

をして、小綺麗な生活をしてゐた。女は伊勢の産とばかりで、素性が解らなかつた。お作よりか、三つも四つも年を喰つて居たが様子は若々しかつた。

「君の内儀さんは一體何だね。」と新吉は初めて此女を見てから、小野が訪ねて來た時不思議さうに訊いた。

「君の目にや何と見える。」小野はニヤ〳〵笑ひながら、惡黠さうな目容をした。

「解んねえな。如何せ素人ぢやあるめえ。莫迦に意氣な風だぜ、と言つて、藝者にしちや何處か澁皮の剝けねえ處もあるし……。」

「其樣な代物ぢやねえ。」と小野は目を逸して笑つた。

小野は相變らず綺麗な姿をしてゐた。何やらボト〳〵した縮緬の小袖に、コックリした茶博多の帯を締めて、純金の指環など光らせてゐた。持物も莨入、紙入、[illegible]氣取つた物を持つてゐた。此頃何處其處に、[illegible]時節の出物があるから買はないかとか、[illegible]な貴人の[illegible]物があるから取つて置けとか、能く然う云ふ話を新吉に持込んで來る。

「私なんぞは、其樣なものを持つて來たつて駄目さ。[illegible]な隱居の身分にでもなつたら[illegible]せうよ。」と言つて新吉は相手にならなかつた。

「だが君は好いね。然うやつて年中常綺羅でもつて、加之内儀さんは綺麗だし……。」と新吉は脂ツぼい煙管を妄に火鉢の縁で敲いて、「私なんざ慘めなもんだ。眞箇失敗しちやつた。」と其からお作の事を零し始める。

「其後如何してるんだい。」と小野はジロリと新吉の顔を見た。

「如何したか、己薩張行つて見もしねえ。此限來ねえけれア、偶好いと思つてゐる。」

「子供が出來れア然うも行くまい。」

「如何な餓鬼が出來るか。」と新吉は忌々しさうに呟いた。

十七

小野は默つて新吉の顔を見てゐたが、「だが、見合なんてものは、[illegible]當にはならないよ。新[illegible]前だが、[illegible]は少し買被つたね。婚禮の晩に、初めてお作さんの顔を見て、僕はオヤ〳〵と思つた位だ。」

「[illegible]實だ。」新吉は[illegible]しく笑つた。「如何せ[illegible]なんぞに[illegible]ねえんだからね……其[illegible]は我慢するとしても、彼奴には氣働と云ふものが些ともありやしねえ。客が來ても、[illegible]法挨拶することも知んねえけれア、近處隣の交際一つ出來やしねえんだからね。俺ア飛んだ貧乏籤を引いちやつたのさ。」と新吉は溜息を吐いた。

「左も右、もつと考へるんだつたね。」と小野も氣の毒さうに言ふ。「だが爲方がねえ、もう一年も二年も一緒に居たんだし、今更別れると言つたつて、君は可いとしても、お作さんが可哀さうだ。」

「だが、彼奴も詰んねえだらうと思ふ。三日に擧げず喧嘩して、毒づかれて、打撲されてさ。……己頭から人間並の待遇はしねえんだからね。」と新吉は空笑をした。

「其奴ア惡いや。」と小野も氣の無い笑方をする。

「今度ア如何なるか。」と新吉は考へ込むやうに、「彼奴も己の氣の荒いにはブル〳〵してるんだから、お袋や兄貴に話をして、子供でも產んでしまつたら、離縁話でも持ちあがるか、如何せ此儘で收まりッこはありやしない。如何でも勝手にするが可いや。」と自分で[illegible]つけた。[illegible]〳〵する瞳の中が、[illegible]風も見えた。

「然うでもねえんださ。」と小野は自分で頷いて、

「女は案外我慢がいゝんだ。此方から逐出さうたつて、出て行くものぢやありやしねえ。」

「如何して、然うでねえ。」新吉は目を[illegible]しさうた目をハチつかせた。「君には好くしてゐるし、容貌にも愛嬌は好いし、己はこの山の神に比べると雲泥の相違だ。」

二人顔を合すと、何時でも斯うした噂が始まる。小野は如何にも暢気らしく、得意さうであつた。小野が歸つて了ふと、新吉は何時でも氣の脱けた顔をして、滿らなさうに考込んでゐる。併し彼や思詰めると、齷齪働く甲斐がないやうにも思はれた。

忙しい十二月が來た。新吉の體と頭腦はもう其樣な問題を考へてゐる隙もなくなつた。働けば又働くのが面白くなつて、一日の終には言ふべからざる滿足があつて、床に就くと、去年から見て今年の景氣の好いことや、得意場の增えたことを數へて樂しい夢を結んだ。此上不足を言ふ處がないやうにも思はれた。

「少し手隙になつたら、一度お作を訪ねて、奴にも悦してやらう。」など思つた。

十八

或朝新吉が、帳場で帳面を調べてゐると、店先へ、淡色の吾妻コートを着た束髪頭の女が一人、腕車に乘つて來た。それが小野の内儀さんのお國であつた。

お國は下町風の装をしてゐた。物の好くない、お召の小袖に、桔梗がかつた色氣の羽織を着て、意氣な下駄を穿いてゐた。女は小作で、痩しいながら目容は少し險だが、色の白い、ふツくらとした愛嬌のある顔である。「御免下さい」と言葉のやうな、無邪氣なやうな聲で言つて、スツと入つて來た。其處に腰かけて、得意先の帳面を繰つてゐた小僧は、周章てて片隅へ避けた。新吉は筆を耳に挾んだまゝ、叮寧く挨拶した。

「新さん、マア大變なことが出來ちやつたんです。」女は菓子折の包を其處に置くと、ショールを脱つて、コートの前を外した。顔が寒い風に逢つて來たので紅味を差して、潤みを持つた目が美しく輝いた。が、何處となく恐怖を帶びてゐる。唇の色も淡く、髪毛も亂けてゐた。

「如何したんです。」新吉は不安らしく其顔を瞶めたが、直に視線を外して、「マアお上んなさい。此樣な汚い處で、坐る處もありやしません。加之嬶はゐませんし、ずつと、男世帶で、氣味が[illegible]」

「いゝえ、[illegible]」

つて、其方此方を見廻した。

[illegible]

「いゝえ、[illegible]

りやしません。」

新吉は[illegible]つて、蒲團を[illegible]などして、[illegible]

「お忙しいところを、[illegible]」

國はコートを脱いで、奥へ通ると、「何うも[illegible]く[illegible]して、お辭儀をして、ジロ〱四下を見廻した。

「隨分整然としてゐますわね。加之何から何まで揃つて、小野なんぞ迚も敵やしません。」と包の中から菓子を出して、片隅へ推遣ると、低聲で何やら言つてゐた。

新吉は困つたやうな顔をして、「然うですか。」と頭を掻きながら、お辭儀をした。

「商人も店の一つも持つやうでなくちや駄目ですからね。堅い商賣して居る程確なことはありやしないんですからね。」

新吉は微温い茶を汲んで出しながら、「私なんざ駄目です。小野君のやうに、體に樂をして

ゐて金を儲ける伎倆はねえんだから。」

「でもメキ〳〵仕揚げるぢや有りませんか。前に伺つた時と店の様子が悉皆變つたわ。小野なんざアヤフヤで駄目です。」と言つて、女は落膽したやうに口を噤んだ。額の紅味が何時か褪いて蒼くなつてゐた。

十九

お國は少時すると、極惡さうに、昨日の朝、小野が拘引されたと云ふ、不意の出來事を話出した。其前の晩に、夫婦で不動の縁日に行つて、彼方此方歩いて、買物をしたり、蕎麥を食べたりして、疲れて遲く歸つて來たことから、翌日朝夙く、寢込に踏込まれて、碌々顏を洗ふ間もなく引張られて行つた始末を詳しく話した。小野は勃然起上ると、「拘引されるやうな覺はない。行けば解るだらう。」と着物を着替へて、紙入や時計など持つて、刑事に従いて出た。

「何に何かの間違だらう、直歸つて來るから心配するなよ。」とオロ〳〵するお國を窘める様に言つたが、出る時は何だか厭な顏色をしてゐた。其限何の音沙汰もない。昨夕は一晩中寢ないで待つたが、今朝になつても歸されて來ぬ處を見ると、今日も如何やら怪しい。何か惡いことでもして未決へでも投込まれてゐるのではなからうか。刑事の口吻では、オイそれと云つて出て來られさうな様子も見えなかつたが……

「一體如何したんでせう。」とお國は、新吉の顏に不安らしい目を据ゑた。

「サア……。」と言つて新吉は口も利かず考込んだ。

お國の目は一層深い不安の色を帶びて來た。

「小野と云ふ男は、如何云ふ人間なんでせうか。」

「如何なつて、畢竟あれッ限の人間だがね…………。」と又考込む。

「すると何かの間違でせうか。間違なら嫌疑とか何とか然う言つて連れて行きさうなもんぢやありませんかね。」とお國は馴々しげに火鉢に頰杖をついた。

「解んねえな。」と新吉も溜息を吐いた。「だが、今日は歸つて來ますよ。心配することはねえ。」

「でも、あの人の田舎の裁判所から、此方へ言つて來たんださうですよ。刑事が然う言つてゐましたもの。」とお國は一層深く傷口に觸るやうな調子で附加へた。「だから、私何だか變だと思ふの。田舎で何か惡いことをしてるんぢやないかと思つて。」と猜疑深い目を見据ゑた。

「田舎の事ア私にや解んねえが、マア孰にしても、今日は何とか様子が解るだらう。」

新吉の頭腦には、小野が此頃の生活の贅澤な事が直に浮んで來た。必然危いことをしてゐたに違ないと云ふことも頷かれた。「だから言はねえこッちやない。」と獨で然う思つた。

お國は十二時頃まで話込んでゐた。話のうちに新吉は二度も三度も店へ起つた。お國は新吉の知らない、小野の生活向のコマ〳〵した祕密話などして、連に小野の擧動や、金儲の手段が疑はしいと云ふやうな口吻を洩してゐた。

二十

小野の拘引事件は思つたより面倒であつた。拘引された日に警視廳から直に田舎の裁判所へ送られた。詳しい事情は解らなかつたが、田舎の或商人との取引上、何か約束手形から生じた間違だと云ふ事だけが知れた。期限の切れた手形の日附を書直して利用したとか云ふのであつた。訴へたのも彼方だつたが、小野の遣方も黠かつた。小野からは内儀さんの處へ二三度手紙が來た。新吉へも寄越した。お國には東京に力となる親類もないから、萬事お世話を願ふ。青天白日の身になつた曉、乾度恩返をす

るからと云ふ意味の依頼もあつた。辯護士を雇むに就いて、金が欲しいと云ふやうな事も言つて來た。暮の二十日邊に、お國は新吉と相談して、方々借集めたり、着物を質に入れなどして、少し纏つた金を送つてやつた。

お國と新吉とは殆ど毎日のやうに顔を合すやうになつた。新吉の方から出向かない日は、大抵お國が表町へやつて來る。話は何時でも未決に居る小野の事や、裁判の噂で持切つてゐる。若し二年も三年も入れられるやうだつたら、如何したものだらうと云ふ、相談なども持ちかける。

「色々人に訊いて見ますと、些と重いさうですよ。二年位は如何しても入るだらうと云ふんですがね。二年も入つてゐられたんぢや、入つてゐる者よりか、殘された私が耐らないわ。向は官費だけれど此方は然うは行かない。加之もう指環や櫛のやうな、少し目星いものは大概金にして送つてやつて終つたし……。」とお國は零しはじめる。

新吉は、「何、私だつて小野君の人物は知つてるから、豈夫貴女一人くらゐ日干にするやうな事はしやしない。如何かなるさ。」と言つてゐたが、此と云ふ目論見も立たなかつた。

押迫るにつれて、町は段々忙しくなつて來た。門にはもう幹竹が立てられて、さわ〳〵と風に鳴つてゐた。殺風景な新開の町にも、年の瀬の波は押寄せて、逆上せたやうな新吉の目の色が漲つてゐた。お國は何時の間にか、此二三日入浸になつてゐた。奥の事は一切取仕切つて、永い間の手練の世帶向のやうに氣が利いた。新吉の目から見ると、爲ることが少し蓮葉で、派手のやうに思はれた。けれど働振が活々してゐる。箒一つ持つても、心持好い程綺麗に掃いてくれる。始終薄暗かつたランプが何時も皎皎と明るく點されて、長火鉢も鼠不入も、テラテラ光つてゐる。無器用なお作が拵へてくれた三度々々のゴツ〳〵した煮附や、薄い汁物は、小器用なお國の手で拵へられた東京風のお菜と代つて、膳の上には美い新香を缺かした事がなかつた。押入を開けて見ても、臺所へ出て見ても、痒い處へ手が届くやうに、整理が行屆いてゐる。

二十一

新吉は何だかむづ痒いやうな氣がした。何處か氣味惡いやうにも思つた。

「そんなにキチ〳〵されちや反つて困るな。」と眉を顰めて言ふ。「商賣が商賣だから、如何せ然う綺麗事に行きやしない。」

「でも心持が惡いぢやありませんか。」お國は遠慮して手を着けなかつたお作の針函や行李や、釋ものなどを始末しながら、古い足袋、腰卷などを引張出してゐた。「何だか埃々してるぢやありませんか、お正月が來るつてのに、此ぢや爲樣がないわ。私は又、自分の損得に拘らず、見ると放抛つて置けない性分だから……。もう何時から此處が氣に障つて爲樣がなかつたの。」と色々な雑物を一束にしてキチンと行李に仕舞込んだ。

新吉は苦い顔をして引込む。

斯う云ふ樣な仕事が二日も三日も續いた。お國はちよい〳〵外へ買物にも出た。〆飾や根松を買つて來たり、神棚に供へるコマ〳〵した器などを買つて來てくれた。帳場の側に八寸ばかりの紅白の鏡餅を据ゑて、其に鎌倉蝦魚や、御幣を飾つて呉れたのもお國である。喰積とか云ふやうな物をも一通拵へてくれた。晦日の晩には、店頭に積上げた菰冠に弓張が點されて、幽暗い新開の町も、此界隈ばかりは明るかつた。奥は奥で、神棚の燈明がハタ〳〵風に搖めいて、小さい輪飾の根松の緑に、もう新しい年の影

が見えた。
お國は近所の娘達に髪を結はして、小紋の羽織など引かけて、晴々した顔で、長火鉢の前に坐つてゐた。
九時過に、店の方は略形がついた。新吉は小僧二人に年越のものや、蕎麥を饗應つてから、代番こに湯と床屋にやつた。店も奥も漸く閑寂として來た。油の乏しくなつた燈明がジイジイ云ふ微な音を立てて、部屋には何處か寂しい影が添つて來た。黝んだ柱や、火鉢の縁に冷い光澤が見えた。底冷の強い晩で、表を通る人の跫音が、硬く耳元に響く。
新吉は火鉢の前に胡坐をかいて、俛いて何やら考へ込んでゐた。未だ貢の來たてのお作と一所に過した去年の今夜の事など想出された。
「何を茫然してゐるんです」とお國は銚子を鉄瓶から引揚げて、極悪さうな手容で新吉の前に差出した。
新吉は、「何、私や勝手にやるで……。」と其銚子を受取らうとする。
「可いぢや有りませんか。酒のお酌くらゐ……」お國は新吉に注いでやると、「私もお年越だから少し戴きませう。」と自分にも注いだ。
新吉は一杯飲干すと、今度は手酌でやりながら、「何うも色々お世話さまでした。今年は私もお蔭で、何だか年越らしいやうな氣がするんで……。」

二十二

お國は手酌で、もう二三杯飲んだ。新吉は見て見ぬ振をしてゐた。お國の目の縁が少し紅味をさして、猪口を嘗める脣にも綺麗な濕を持つて來た。睫毛の長い目や、生際の綺麗な額の邊が、俛いてゐると、莫迦に好く見える。が、其を見てゐるうちにも新吉の胸には、冷い考が流れてゐた。此三四日、何だか家中引搔廻されてゐる樣な、一種の不安が始終頭腦に附絡うてゐた。今夜、女の酒の飲ツ振などを見ると、一層不快の念が兆して來た。何處の馬の骨だか……と云ふ侮蔑や反抗心も起つて來た。
お國は平氣で、「如何せ他人の爲ることですもの、お氣には入らないでせうけれど、私も此春は獨で、滿りませんよ。あの二階の部屋に、安火に當つてクヨ／＼してゐたつて始まらないから、氣晴に恁うやつてお手傳してゐるんです。春が來たつて、私は何の樂しみもありやしない。」
「だが、然うやつて私の處で働いてゐたつて仕樣がないね。私は誠に結構だけれど、貴女が滿らない。」と新吉は何處か突放すやうな、恩に被せるやうな調子で言つた。
お國は萎けたやうな顔をして默つて了つた。其顔を見ると、「新さんの心は私には了と見透いてゐる。」と云ふやうにも見えた。新吉も氣が差したやうに默つて了つた。
少時してから、女は銚子を持ちあげて見て、「お酒はもう召食りませんか。」と丁寧な口を利く。
「小野さんも、此節は酒が飲めねえで、弱つてゐるだらう。」と新吉はふと言出した。
其から二人の間には、小野の風評が始まつた。
お國はあの人と知つてゐるのは、もう二三年前からの事で、是迄にも隨分好い加減な事を聞された。其頃は自分も未だ一向初で或若い書生肌の男と一緒に東京へ出て來た。宅は田舍で百姓をしてゐる。其男が意氣地がなかつたので、長い間苦勞をさせられた。其から間もなく小野と懇意になつた。會社員だと云ふ觸込であつたが、觀ると聽くとは大違で、一緒に世帯を持つて見ると、色々の襤褸が見えて來た。今は時偶三十四十と纏めては來るが、表面に見せてゐるほど、内面は氣樂でなかつた。才は働くし、

鋳口もあるし、働いてゐれば、豈夫路つて死ぬやうなこともあるまいけれど、何だか不安でならなかつた。著物も著せてくれるし、芝居も見せて〱れるが、其は其の場限で、前途の見通がつかぬから、其だけで滿足の出來よう道理がない……とお國はシンミリした調子で、柄にないチミな話を爲始めた。

「私貞實に然う思ふわ。明けるともう二十五になるんだから、此を汐に綺麗に別れて了はうかと……。」

新吉は默つてゐた。聞いてゐるうちに、何だか女と云ふものの心持が、多少胸に染みるやうにも思はれた。

二十三

正月になつてから、新吉は一度お作を田舎に訪ねた。

町が寂れてゐるので、此處は春らしい感じもなかつた。通路は、何處を見ても皆窓の戸を鎖して寝てゐるかと思ふ宅ばかりで、北風に白く晒された路の其處此處に、凍てついたやうな子守や子供の影が、ちらほら見えた。低い軒が何も此もよろけてゐるやうである。呉服屋の店には、色の褪めたやうな寄片が看るから手薄に並べてある。薄暗い古物屋や古著屋の店なども、年々衰へて行く町の哀さを思はせてゐる。ふと何時か飛込んだことのある小料理屋が目に入つた。怪しげな其處の門を入つて、庭から離房めいた粗末な座敷へ通され、寒つたやうな獨身で、悪い酒を飲んで、お作一家の内状を探つた時は、自分ながら莫迦々々しいほど眞面目であつた。

新吉は外方を向いて通過ぎた。

然う云ふ町に育つたお作の身の上が、何だか哀なやうに思はれてならなかつた。此の寂れた淋しい町に、もう二月の以上も、大きい腹を抱へて、土臭い人達と一緒に居ることを思ふと、其も可哀想であつた。ショボ〱したやうな目、カッ詰つたやうな額、蒼白い皮膚の色、ザラ〱する掌や足、それからが目に著くやうであつた。何だか濟まないやうな氣もしたが、行つて顔を見るのが厭なやうな心持もした。

一里半ばかり、鼻のもげるやうな吹曝しの寒い田圃道を腕車でノロ〱やつて來たので、梶棒と一緒に店頭へ降されたとき、些とは歩けないくらゐ足が硬張つてゐた。

車夫に賃銀を拂つてゐると、「マア！」と云つてお作が障子の蔭から出て來た。新吉が新調のインバネスを著て、紺がかつた色氣の中折を目深に冠つて來たのが、見違へるほど綺麗に見え、俛いて目から涙を出してゐる樣子が何だか一段も二段も人品が上つたやうに思へた。

「よく來られましたね。寒かつたでせう。」とお作は帽子やインバネスを脱せて、先へ奥に入ると、

「阿母さん、宅で入らつしやいましたよ。」と聲をかけた。

新吉が薄暗い茶の室の火鉢の側に坐ると、寝惚けたやうな顔をして、納戸のやうな次の室から母親が出て來た。リウマチが持病なので、寒くなると炬燵にばかり潜込んでゐると聞いたが、何時か見た時よりは肥つてゐる。氣の故か、蒼脹れたやうにも見える。目の性が悪いと見えて、緣が爛く、變な氣味であつた。

母親は長々と挨拶をした。新吉が歳暮の砂糖袋と、年玉の手拭とを一緒に斷つて出すと、其にも二三度丁寧にお辭儀をした。

二十四

姨と云ふのも、何處か此近在の人で、口が一向に無調法な女であつた。額の抜上つた姿も恰好もない、ひよろりとした體勢である。此迄にも二度ばかり見たが、顔の印象が殘らなか

つた。先も然うであつたらしい。今日こそは一つ、お作の自慢の嫂さんの顏を能く見てやらう……と云つた風でジロ／＼と見てゐた。お作はベツたり新吉の側へ喰著いて悚つて、不相變ニヤニヤと笑つてゐた。

「サア、此處は悒鬱しくて不可ません。お作や、奧へお連申して……何はなくとも、始初めだから、お酒を一口……。」

「イヤ、然うもしてゐられません。」と新吉は頭を掻いた。「留守が誠に不安心でね……。」

「好いぢやありませんか。」お作は自分の實家だけに、甘えたやうな、浮ずつたやうな調子で言ふ。

「サア、彼方へ入らつしやいよ。」

新吉は奧へ通つた。お作が母親や嫂に口を利くのを聞いてゐると、良人の新吉のことを、主人か何かのやうに言つてゐる。嫂に對しては其れ一層慇懃しい。「餘り御酒は召食りませんのですから……」とか、「宅は眞實に急々した質でいらつしやるんですから……」とか云ふ風で……が、嫂の耳には格別其の異樣にも響かぬらしい。「ヘエ、然いですか。」と新吉の顏ばかり見てゐる。新吉はこそばゆいやうな氣がした。

少時すると、お作と二人限になつた。藁灰のフカ／＼した瀬戸物の火鉢に、炭をカン／＼起して、跼んで當つてゐた。お作は何時の間にか、小紋の羽織に著替へてゐた。が東京に居た時よりも、顏が多少水々してゐる。水ツぽいやうな目のうちにも一種の光があつた。腹も思つたほど大きくもなかつたが、其でも肩で息をしてゐた。差向になると氣が重いのか、口の利方も鈍かつた。黙つて俛いて了ふのであるが、折々媚びるやうな素振をして、私と男の顏を見上げてゐた。

新吉は外方を向いて、壁に懸つた東郷大將の石版摺の硝子張の額など見てゐた。床の鏡餠に、大きな串柿が載せてあつて、花瓶に梅が插してあつた。

「今日はお泊りなすつても可いんでせう。」お作は何かの序に言出した。

「イヤ、然うは行かねえ。日一杯に歸る心算で來たんだから。」新吉は素氣もない言方をする。

少時經つてから、「此頃、小野さんのお內儀さんが來てゐるんですつて……。」

「ア、お國か、來てゐる。」と新吉は如何云ふものか大きく出た。

お作は俛いて灰を弄つてゐた。又少時經つてから、「あの方、ずつと居る心算なんですか。」

「サア、如何云ふ氣だか……彼女も何だか變な女だ。」新吉は投出すやうに言つた。

二十五

「でも、ずる／＼べつたりに居られでもしたら困るでせう。」お作は氣の毒さうに、赤い顏をして言つた。

新吉は黙つてゐる。

「今のうち、斷つちまふ譯には行かないんですの。」

「然うもいかないさ。お國だつて、差當り行く處がないんだからね。」と新吉は胡散くさい目容をして、「加之宅だつて、全然女手がなくちや遣切れやしない。人を傭ふとなると、此亦些と臆劫なんです。だから此方も別に損の行く話ぢやねえし……。」と獨で頷いて見せた。

お作は一層不安さうな顏をした。

「でも此間、和泉屋さんが行つた時、あの方が一人で宅を切廻してゐたとか……何だか其樣なやうなお話を、小石川の叔父さんに爲てゐたさうですよ。」とお作は種々言つた。「加之、貴方は少しも來て下さらないし、氣分でも少し惡いと、私何だか心細くなつて……何だつて斯樣な處へ引込んだらうと、熟々然う思ふわ。」

「お前の方で引張つたのぢやないか。」親兄弟

此處で産せれば、何に就け安心だからと云ふんで、小石川の叔母さんが來て連れて行つたんだらう。」と新吉は邪慳さうに言つた。
「其は然うですけれど。」
「其時私が丁と小遣まで託つて、其から何分お願ひ申しますと、叔母ッ子に頼んだ位ぢやないか。」と新吉の語氣は少し急になつて來た。
「己は爲ることだけは丁と爲てゐるんだ。小野なんぞに不足を言はれる處はねえ心算だ。お前の爲ることと見ねえ、彼内儀さんと一緒になつてから、もう大分になるけれど、今に人の宅の部屋借なんぞしてる始末だ。色々聞いて見ると隨分内儀さんを困らしておくさうだ。其擧句に今度の事件だらう。内儀さんは裸になつて了つたよ。居る處もなけれア、喰ふことも出來やしない。其癖あの内儀さんと來たら、なか〳〵伎倆もんなんだ。客の應對振だつて、立派なもんだし、宅もキチン〳〵とする方だし……如何してお前なんざ、迚も脚下へも追著きやしねえ。」
お作は赤い顏をして俛いてゐた。
「私なんざ、内儀さんには好くする方なんだ。此で不足を言はれちや埋らないや。」
「不足を言ふ譯ぢやないんですけれど……。」
お作は彼方の部屋へ入つてでもするかと獨で悄々して居た。
「眞實に……」と鼻頭で笑つて、「和泉屋の野郎、餘計なことばかり辯りやがつて、彼奴に私が何の厄介になつた。干渉される謂れはねえ。」と新吉はブツ〳〵言つてゐた。
「然うぢやないんですけれどね……。」お作はドギマギして來た。

二十六

「マア一口……」と言つて、初手に甘ッ弛い屠蘇を飮まされた。其から黑塗の膳が運ばれた。膳には仕出屋から取つたらしい赤い刺身や椀や、鯔の鹽燒などが駢べてあつた。
「サア、お作や、お前お酌をしてあげておくれ。」
「生憎お相をする者が居りませんでね……。」
お作は無器用な手容で、大きな銚子から酒を注いだ。新吉は刺身をベロ〳〵と食つて、けろりとしてゐるかと思ふと、思出したやうに猪口を口へ持つてゆく。
「阿母さん、一つ如何ですな。」と旋て母親へ差した。
「然やうでございますかね。それでは……。」と母親は似而非笑をして、兩手で猪口を受取つた。而してお作に少しばかり注がせて、直に飮干して返した。
「此も久しく、東京へ出てゐた故でございますか、大變に田舍を寂しがりまして、其に、段々産月も近づいて參りますと、氣が欝々と見えまして、もう自分で穴掘つて入るやうな事ばかり言つて居るでございます。」と其からお作が亭主思ひの、氣立の至つて優しいものだと云ふことを說出した。前に奉公してゐた所で、殊の外惜まれたと云ふこと、稚い時分から、親や兄に、口答一つ爲たことのない素直な性質だと云ふことも話した。生來體が弱いから、お産が重くでもあつたら、嘸應へるであらうと思つて、朝晩に氣を注けて大事にしてゐること、牛乳を一合宛飮して、血の補をつけてゐる事なども話した。産れる子の初著などを、お作に持つて來さして、お産の經驗などを縷々と話した。
新吉は、「ハ、ハ」と空返辭ばかりしてゐたが、其時はもう酒が大分廻つて來た。
「お店の方も、追々御繁昌で、誠に結構でございます。」母親は話を變へた。
「お蔭でマア如何か恁うか……。」と新吉は大儀さうに肴を荒して了つて、今度は莨を喫出した。而して氣忙しさうに時計を引出して、「もう四時だ。」

「マア、貴方可うござりませう。春初めだから、もつと御寛りなすつて……其うちには兄も歸つてまゐります。」と母親は銚子を替へに立つた。

二人とも默つて俛いて了つた。障子の日が、もう蔭つて了つて、部屋には夕氣づいたやうな幽暗い影が漂うてゐた。風も靜つたと見えて、外は閑としてゐた。

「今日は、眞實に可いんでせう。」お作はおづおづ言出した。

「商人が家を明けて如何するもんか。」と新吉は冷い酒をグッと一口に飮んだ。

其から彼此一時間も引留められたが、暇を告げる時、お作は低聲で、「お產の時、必然來て下さいよ。」と幾度も賴んだ。

店頭へ送つて出る時、目に淚が一杯溜つてゐた。

二十七

腕車がステーションへ著く頃、灯が其處此處の森蔭から見えてゐた。前の濁酒屋では、暖かさうな煮物の匂いが流れて、濁聲で談笑してゐる勞働者の影も見えた。寒い廣場に、子守が四五人集つて、哀な調子の唄を謳つてゐるのを聞くと、自分が田舎で貧しく育つた昔の事が想出される。新吉はふと自分の影が寂しいやうに思つて、「己の親戚と云つちや、マアお作の家だけなんだから……。」と獨言を言つてゐた。

汽車は間もなく出た。新吉は硬いクッションの上に縮かまつて横になると、直に目を瞑つた。中野あたりまで取留もなくお作のことを考へてゐた。餘り可愛いと思つたこともないが、何だか深く胸に刻込まれて了つたやうにも思へた。其うちに、ウト〳〵と眠つたかと思ふと、東京へ入るに從つて、客車が追々雜沓して來るのに氣がついた。

飯田町のステーションを出る頃は、醉がもう悉皆醒めてゐた。新吉は何かに唆かされるやうな心持で、月の冴えた廣い大道をフラ〳〵と歩いて行つた。

店では二人の小僧が帳場で講釋本を讀んでゐた。默つて奥へ通ると、茶の室には湯の沸る音ばかりが耳に立つて、其隅ッこの押入の側で、蒲團を延べて、按摩に腰を揉ましながら、グッタリとお國が正體もなく眠つてゐた。後向になつた銀杏返の首が、ダラリと枕から落ちさうになつて、體が斜に俯伏になつてゐた。立働く時のキリ〳〵としたお國とは思へぬ位であつた。貧相な男按摩は、薄氣味の惡い白眼を剝出して、折々灯の方を瞶めてゐた。

坐つて鐵瓶を下す時の新吉の顏色は變つてゐた。煙管を二三度、火鉢の縁に敲きつけると、疎ましさうに女の姿を見遣つて、スパ〳〵と莨を喫つた。するうちお國は目を覺した。

「お歸りなさい。」と舌のだらけたやうな調子で聲かけた。「少し御免なさいよ。餘り肩が凝つたもんですから……貴方もお疲れでせう。後で揉んでお貰ひなすつては如何です。」

新吉は何とも言はなかつた。

少時すると、お國は懈さうに、俛いたまゝ顏を半分此方へ向けた。

「如何でした、お作さんは……。」

「イヤ、別に變りはないやうです。」新吉は空を向いてゐた。

お國は未だ何やら、寢恍聲で話しかけたが、後は呻吟くやうに細い聲が聞えて、直にウトウトと眠に陷ちて了ふ。

新吉は茶を二三杯飮むと、ツと帳場へ出た。大きな帳面を擴げて、今日の附揚を爲ようとしたが、妙に氣がイラ〳〵して、落著かなかつた。可恐しい自墮落な女の本性が、初めて見えて來たやうにも思はれた。

「莫迦にしてやがる。もう明日からお斷りだ。」

二十八

療治が濟むと、お國は自分の財布から金をくれて按摩を返した。近所ではもうハタ／＼戸が閉る頃である。

お國は何時までも、孑然と火鉢の前に坐つてゐたが、新吉も十一時過まで帳場にへばり著いてゐた。

寢支度に取りかゝる時、二人は又不快い顏を合した。新吉はもう愛想がつきたと云ふ顏で、碌々口も利かず、蒲團のなかへ潛込んだ。お國は洋燈を除したり、火を消したり、茶道具を洗つたり、何時もに通り働いてゐたが、これも氣のない顏をしてゐた。

寢しなに、ランプの火で煙草を喫しながら、氣が快々する樣な調子で、「アヽ、何だか厭になつて了つた。」と溜息を吐いた。「もう孰でも好いから、早く決つてくれゝば可い。裁判が決らないうちは、如何することも出來やしない。ね新さん、如何したんでせうね。」

新吉は寢た振をして聽いてゐたが、此時些と身動をした。

「解んねえ。けど、マア入るものと決めて置いて、自分の體の振方をつけた方が好かないかね。私あ然う思ふがね。」と聲が半分蒲團に籠つてゐた。「而して出て來るのを待つんですね。」

「ですけど、私だつて、然う氣長に構へてもゐられませんからね。」と寢衣姿のまゝ自分の枕頭に蹲跪つて、煙管をポン／＼敲いた。「あの人の體だつて、出て來てから如何なるか解りやしない。」

新吉はもう默つてゐた。

翌日目を覺して見ると、お國はまだ寢てゐた。戸を開けて、顏を洗つてゐるうちに、漸く起きて出た。

朝飯が濟んで了ふと、お國は金盥に湯を取つて、顏や手を洗ひ、お作の鏡臺を取出して來て、お扮飾を爲はじめた。それが濟むと、餘所行に著替へて、ツスと店頭へ出て來た。

「私ちよいと出かけますから……。」と帳場の前に膝を突いて、何處へ行くとも言はず出て了つた。

新吉は何處か氣懸のやうに思つたが、默つて出してやつた。小僧連は、一樣に輕蔑するやうな目容で出て行く姿を見送つた。

お國は晝になつても、晩になつても歸らなかつた。新吉は一日不快さうな顏をしてゐた。晩に一杯飲みながら、新吉は女の噂を爲始めた。

「如何せ彼奴は歸つて來る氣遣ないんだから、明朝から昔で交り番こに飯を炊くんだぞ。」

小僧は手々に女の惡口を言出した。内儀さん氣取でゐたとか、お客分の心算でゐるのが小面惡いとか、あれは唯の女ぢやあるまいなどと言出した。

新吉は唯苦笑してゐた。

二十九

二月の末――お作が流産をしたと云ふ報知があつてから暫く經つて、新吉が見舞に行つた時には、お作は尙蒼い顏をしてゐた。小鼻も目肉も落ちて、髮も多少拔けてゐた。腰蒲團など當てて、足がまだよろつくやうであつた。

胎兒は綺麗な男の子であつたとか云ふことである。少し重い物――行李を棚から卸した時、手を伸したのが惡かつたか知らぬが、其中には別に重いと云ふ程の物もなければ、棚が然程高いと云ふほどでもない。が何しろ體が脆弱い處へ、今年は別して寒じが強いのと、今一つはお作が苦勞性で、色々の取越苦勞をしたり、今の身の上を心細がつたり、表町の宅の事が氣

に懸つたり、其や此やで、餘りに神經を使ひ過ぎた故だらう……と云ふのが分疏のやうな愚癡のやうな母親の言分であつた。

「お作は流産してから、直に氣が遠くなり、其處らが暗くなつて、此まゝ死ぬのぢやないかと思つた、其前後の心持を、母親の説明の間々へ、喙を容れて話した。而してもう暗い處へやつて了つた其子が不憫でならぬと言つて泣出した。いくら何でも自分の血を分けた子だのに、顔も見に來てくれなかつたのは、私は左に右、死んだ子が可哀想だと怨んだ。

新吉も詳しい話を訊いてみると、何だか自分ながら可恐しいやうな氣もした。然う云ふ薄情な心算ではなかつたが、言はれてみると自分の心は如何にも冷かつたと、熟々然う思つた。

「私はまた、如何せ死んでるんだから、愁ひ顔でも見ちや、反つて好い心持がしねえだらうから、見ない方が優だと云ふ考で……加之あの頃は、小野の公判があるんで、東京から是非もう一人辯護士を差向けてほしいと云ふ、當人の希望だつたんだから、お國と二人で、其方此方奔走してゐたんで……友達の義理で如何も爲方がなかつたんだ。」と分疏をした。

「其なら切めて初七日にでも入らして下されば……。」とお作は目に涙を一杯溜めて怨んだ。

「加之貴方は、お國さんのことと言ふと、家のことは放抛つても……。」と口の中でブツ／＼言つた。

此が新吉の耳には際立つて鋭く響く。無論お國は今でも宅へ入浸つてゐる。一度二度喧嘩して逐出したこともあるが、初めの時は此方が宥めて連れて歸り、二度目の時は、女の方から默つて歸つて來た。連れて來た其晩には、京橋で一緒に天麩羅屋へ入つて、飯を食つて、電車で歸つた。表町の角まで來ると、自分は一町ほど先へ歩いて、明るい自分の店へ別々に入つた。何の意味も無かつたが、唯然うしなければ氣が濟まぬやうに思つた。其からのお國は、以前よりは素直であつた。自分も初めて女と云ふものの、暖かい或物に裹まれてゐるやうに感じた。

三十

其から二三日は、又仲を善く暮すのであるが、後から直に此細な葛藤が起きる。それでお國が出てゆくと、新吉は妙に其行先などが氣に引懸つて、一日腹立しいやうな胸苦しいやうな思でゐなければならぬのが、如何にも苦しかつた。

「莫迦を言つちや可けねえ。」新吉は故意と笑ひつけた。「お國と己とが、如何かしてるとでも思つてるんだらう。」

「いゝえ、然う云ふ譯ぢやありませんけれどね、子供が死んでも、來て下さらない處を見れば、貴方は私のことなんぞ、もう何とも思つて在らつしやらないんだわ。」

新吉は横を向いて默つて居た。無論お作の流産の事を想出すと、病氣に取著かれるやうであつた。彼奴も可哀さうだ、一度は行つて見てやらなければ……と云ふ氣はあつても、さて踏出して行く決心が出來なかつた。明日は／＼と思ひながら、つい延引になつて了つた。要皆が三方四方へ牽られてゐるやうで、此一月ばかりの新吉の胸の惱しさと云ふものは、口にも顔にも出せぬ程であつた。其苦しい思が、何でお作に解らう。お作は迚も然う云ふことを打明ける相手ではないと、然う決めて居た。

「それで、私が歸れば、お國さんは出て了ふんですの。」お作は畏々訊いた。

新吉は、口のうちで何やら曖昧な事を言つて居た。「義理だから、己から出て行けと云ふ譯にも行かないが、何れお國にも考があるだらう……。其でお前は何時頃歸つて來られるね。」

「もう一週間も經てば、大變好いだらうと思ふですがね……でも、お國さんが居ては、私何だか可厭だわ。阿母さんも然う言ふんですわ。小石川の叔母さんだけは、其ならば猶のこと、速く癒つて歸らなければ不可いと云ふんですけれど……。」

新吉は、二人の間が、もう然う云ふ危機に迫つてゐるのかと、胸が慄々するやうであつた。

「孰にしても、お前が速く癒つてくれなければ……。」と氣安めを言つてゐたが、然うテキハキ事情の決るのが、何だか可厭なやうな氣がした。

新吉と別れてから、十日目にお作は嫂に連られて、表町へ歸つて來た。丁度それが朝の十時頃で、三月と云つても、未だ餘寒の嚴しい、七八日頃の事であつた。腕車が町の入口へ入つて來ると、お作は何とはなし氣が詰るやうな思であつた。町の樣子は出て行つた時其まゝで、寂れた床屋の前を通る時には、其處の肥つた禿頭の親方が、細い目を瞠つて、自分の姿を物珍らしさうに眺めた。蕎麥屋も荒物屋も、向の鹽煎餅屋の店頭に孫を膝に載せて坐つてゐる耳の遠い爺さんの姿も、何となく可懷しかつた。

腕車を降りると、お作は些と嫂を振顧つて挨拶した。

「姉さん……。」と顏を赧めて、嫂から先へ入らせた。

三十一

店には增藏が一人居る限で、新吉の姿が見えなかつた。奧へ通ると、水口の方で、蓮葉な樣な口を利いてゐる女の聲がする。相手は魚屋の若衆らしい。干物の美しいのを持つて來て欲しいとか、此間の鮭は不味かつたとか、然う云ふやうな事を言つてゐる。お前さんとこの親方は威勢が好いばかりで、肴は一向新しくないとか、刺身の作方が拙くて爲樣がないとか云ふ小言もあつた。

お作は嫂と一緒に、お客にでも來たやうに、火鉢を一尺も離れて、キチンと坐つて聞いてゐた。

「それぢやね、晩にお刺身を二人前……可いかえ。」と言つて、お國は臺所の棚へ何やら收込んでから、茶の室へ入つて來た。軟ものの羽織を引被けて、丸髷に桃色の手絡をかけてゐた。生際がクッキリしてゐて、お作も美しい女だと思つた。

お國は、キチンと手を膝に突いてゐる二人の姿を見ると、

「さア。」と會釋したやうな風を裝て、

「何てえんですか、私些とも知りませんでしたよ。其でも、もう其樣に快く、お成りなすつて。汽車に乘つても好いんですか。」と火鉢の前に座を占めて、鐵瓶を持ちあげて、火を直した。

「え、もう……。」とお作は淋しい笑顏を擧げて、「まだ十分と云ふ譯には行きませんけれど……。」と嫂の方を向いて、「姉さん、此方が小野さんのお内儀さん……。」

「然やうでございますか。」と姉が挨拶しようとすると、お國はジロ〳〵其樣子を眺めて、少し横の方へ出て、洒々した風で挨拶した。而して菓子を出したり、茶を煎れたりした。

「貴方も流産なすつたんですつてね。私一度お見舞に上らうと思ひながら……何しろ手が足りないんでせう。」

お作は嫂と顏を見合して俛いた。

「其だつて、お正月だつて、私一人限ですもの。加之新さんと來たら、なか〳〵難しいんですからね……。マア此で漸と安心です。人樣の家を預る氣苦勞と云ふものはなか〳〵大抵ぢやありませんね。」

「眞實にね。」とお作は赤い顏をして、氣の毒さ

うに言つた。「如何も永々濟みませんでした。」

お作は少時すると、著物を著換へて、其から臺所へ出た。お國は、取つておいた鰺に、鹽を少しばかり撒つて、鐵灸で燒いてくれとか、漬物は下の方から出してくれとか、火鉢の側から指圖がましく聲かけた。お作は勝手なれぬ、人の家にゐるやうな心持で、ドギマギしながら、晝飯の支度にかゝつた。

飯時分に新吉が歸つて來た。新吉はお作の顏を見ると、「ホ……。」と言つた限で、話を爲かけるでもなかつた。飯の時、お作はお國の次に坐つて、我家の飯を砂を噛むやうな思で食つた。

三十二

それでも、嫂の居るうちは、多少話が持てた。而して家が賑かであつた。日の暮方になると、嫂は急に氣を變へて、此から小石川へも些と寄らなければならぬからと云つて、暇を告げようとした。お作は、遽に寂しさうな顏をした。

お作は嫂を臺所へ呼出して、水口の方へ連れて行つて、何やら密談を爲始めた。

「お國さんは、眞實變ですよ。私何だか厭で厭で、爲ようがないわ。」と顏を顰めた。

「眞實に勝手の強さうな、厭な女だね。」と嫂も心から憎さうに言つた。「でも、何時迄も居る譯ぢやないでせう。私でも歸つたら、あの人も歸るでせう。介意はないから、テキハキ極著けてやると好い。」

「でも、宅は如何云ふ氣なんでせう。」

「サア、新さんが柔和しいからね。」と嫂も曖昧な事を言つた。而して溜息を吐いた。其顏を見ると、何だか望少さうに見える。「お前さんは、餘程毅然しなくちや駄目だよ。」と言つてゐるやうにも見えるし、「あの女にや、如何せ敵やしない。」と失望してゐるやうにも見える。

三四十分、顏を突合してゐたが、別に如何と云ふ話も纏まらない。いづれ其内にはお國が歸るだらうからとか、新さんだつて豈夫、あの人を如何しようと云ふ氣でもあるまいから、暫く辛抱お爲なさいとか、其位の事であつた。

お作は嫂の口から、其事を能く新吉に話してくれと云ふ事を頼んだ。

「姉さんから、宅の人の料簡を訊いて見て下さいよ。」と言つた。

「其はお作さんから訊く方が好いわ。私が其を訊くと、何だか物に角が立つて、反つて拙かないかね。」

「然うね。」とお作は困つたやうな顏をする。

臺所から出て來た時、お國は店に居た。新吉も店に居た。お作と嫂の茶の室へ入つて來ると、一緒に、お國も茶の室へ入つて來た。其を機に、嫂が、「どうもお邪魔を致しました……。」と暇を告げる。

「オヤ、もうお歸り。マア可いぢや有りませんか。」お國は空々しいやうな言方をした。

嫂を送出して、奧へ入つて來ると、未だ灯の點かぬ部屋には夕方の色が漂うてゐた。お作は臺所の入口の柱に凭りかゝつて、何を思ふともなく、物思に沈んでゐた。裏手の貧乏長屋で、力のない赤兒の啼聲が聞えて、乳が乏しくて、脾弛いやうな嗄れた聲である。四下は闃として、他に何の音も響も聞えない。お作は亡つた子供の聲を聞くやうに感ぜられて、何とも云へぬ悲しい思が胸に迫つて來た。冷い土の底に、未だ死切れずに泣いてゐるやうな氣もした。涙がボロ／＼と頰に傳つた。

お作は水口へ出て、暫く泣いてゐた。

三十三

部屋へ入つて來ると、お國が精々と其處いらを掃出してゐた。「茫然した内儀さんだね。」と

言ひさうな顏をしてゐる。

「あの、ランプは。」とお作がランプを出しに行かうとすると、「可ござんすよ。貴方は御病人だから。」と大きな聲で言つて、埃を掃出して了ひ、箒を臺所の壁の處へかけて、座蒲團を火鉢の前へ敷いた。「サア、お坐んなさい。」

お作はランプを點けてから脊が低いので、其をお國にかけてもらつて、「へ、へ」と人の好ささうな笑方をして、其の片膝を立てて坐つた。

晩飯の時、お國の話ばかり出た。小野の公判が今日ある筈だが、結果が如何だらうかと、新吉が言出した。若し長く入るやうだつたら、私はもう破れかぶれだ……と云ふことをお國が言つてゐた。

「然うなれア氣樂なもんだ。女一人くらゐ、何處へ如何轉つたつて、正可日干になるやうなことは有りやしませんからね。」と棄鉢を云つた。

お作は惘れたやうな顏をした。

「お前なんざ幸福ものだよ。」と新吉はお作に言ひかけた。「お國さんを御覽、添つて二年になるかならぬに此始末だらう。己なんざ、假令どんな事があつたつて、一日も女房を困らすやうな事を爲て置きやしねえ。拜んでゐても好い位のもんだ。眞實だぜ。」

お作はニヤ〳〵と笑つてゐた。

飯が濟んでから、お作が臺所へ出てゐると、新吉とお國が火鉢に差向でベチャクチャと何か話してゐた。お國が歸ると云ふのを新吉が止めてゐるやうにも聞えるし、又其反對で、お國が出て行くまいと云つて、話がごてつくやうにも聞えるが、其話は大分込入つてゐるらしい。色々な情實が絡合つてゐるやうにも思へる。

お作は洗ふものを洗つてから、手も拭かずに、多時考へ込んでゐた。と、新吉は何か憤々して、ふいと店へ出て了つたらしい。お作が入つて來た時、お國は長煙管で、スパ〳〵と莨を喫してゐた。

其晩三人は妙な工合であつた。お作はランプの下で、仕事を始めようとしたが、何だか氣が落著かなかつた。加之暫く俛いてゐると、血の加減か、直に頭腦がフラ〳〵して來る。お國に何か話しかけられても、不思議に返辭をするのが臆劫であつた。新吉は湯に行くと云つて出かけた限、近所で油を賣つてゐると見えて、何時迄も歸つて來なかつた。

十一時過に、お作は床に就いても、矢張氣が落著かなかつた。それでウト〳〵するかと思ふと、厭な夢に魘はれなどしてゐた。新吉とお國と枕を並べて寢てゐる處を、夢に見た。傍へ寄つて、引起さうとすると、二人はお作に、顏を顰めて、ゲラ〳〵と笑つてゐた。目を覺まして見ると、お國は獨り離れて店の入口に寢てゐた。

三十四

小野の刑期が、二年と決つた通知が來てから、お國の樣子が、一層不穩になつた。時とすると、小野の爲に、恁麼に辛い目に逢されたのが可悔しいと云つて、小野を呪うて見たり、然うなれば、私は腕一つで遣通すと云つて、鼻息を荒くする事もあつた。

お國にのさばられるのが、新吉に取つては、もう不愉快で堪らなくなつて來た。如何かすると、お國の心持が能く解つたやうな氣がして、シミ〴〵同情を表することもあつたが、後からは直に、お國の我儘が癪に觸つて、憎い女のやうに思はれた。お作が愚癡を零し出すと、新吉は何時でも鼻で遇つて、相手にならなかつたが、自分の胸には、お作以上の不平も鬱積してゐた。

三人は、毎日不快い顏を突合して暮した。お作は、お國さへ除けば、それで事は濟むやうに思つた。が、新吉は然うも思はなかつた。

「如何するですね、矢張當分田舎へでも歸つたら如何かね。」と新吉は或日の午後お國に切出した。

お國は其時、少し風邪の心地で、蟀谷の處に卽效紙など貼つて、取散した風をしてゐた。

「其でなけア、東京で何處か奉公にでも入るか……。」と新吉は何時にない冷かな態度で、「私の處に居るのは、何時迄居ても、其は一向介意はないやうなもんだがね。小野さんなんぞと違つて、宅は商賣屋だもんだで、何だか譯の解らない女がゐるなんぞと思はれても、餘り體裁が好くねえしね……。」

新吉は何時からか、言はうと思つてゐる事を浚出さうとした。

ずつと離れて、薄暗い處で、針仕事をしてゐたお作は、折々目を擧げて、二人の顏を見た。

お國は嶮相な蒼い顏をして、火鉢の側に坐つてゐたが、少時すると、「え、其は私だつて考へてゐるんです。」

新吉は、まだ一つ二つ自分の方の都合を陳べた。お國は默と考へ込んでゐたが、大分經つてから、莨を吹し出すと一緒に、

「御心配入りません。私のことは何方へ轉んだつて、體一つですから……。」と淋しく笑つた。

「然うなんだ。……女てものは重寶なもんだからね。其代り何處へ行くと云ふことが決れば、私も其は出來るだけの事は爲る心算だから。」

お國は默つて、釵で自棄に頭を掻いてゐた。

晚方飯が濟むと、お國は急に押入を開けて、行李の中を掻廻してゐたが、帶を締直して、羽織を著替へると、二人に更つた挨拶をして、出て行かうとした。

其樣子が、酷く落著拂つてゐたので、新吉も多少不安を感じ出した。

「何處へ行くね。」と訊いて見たが、お國は、「え、ちよいと。」と言つた限、ふいと出て行つた。

新吉もお作も、後で口も利かなかつた。

三十五

高ッ調子のお國が居なくなると、宅は水の退いた樣にケソリとして來た。お作は場所塞の厄介物を攘つた氣で居たが、新吉は何となく寂しさうな顏をしてゐた。お作に對する物の言振にも、妙に角が立つて來た。お國の行先に就いて、多少の不安もあつたので、歸つて來るのを、心待に待ちもした。

が、翌日も、お國は歸らなかつた。新吉は帳場にばかり坐込んで、往來に差す人の影に、鋭い目を配つてゐた。偶に奥へ入つて來ても、不愉快さうに顏を顰めて、碌々坐りもしなかつた。

お作も急に張合が無くなつて來た。新吉の顏を見るのも切ないやうで、出來るだけ側に寄らぬ樣にした。晝飯の時も、默つて給仕をして、默つて不味ッぽらしく箸を取つた。新吉がふいと起つて了ふと、何と云ふことなし、唯涙が出て來た。二時頃に、お作はちよく／＼著に著換へて、出難さうに店へ出て來た。

「あの、些と小石川へ行つて來ても可うございますか。」と怯々云ふと、新吉はジロリと其姿を見た。

「何か用かね。」

お作は明白返辭も出來なかつた。

出ては見たが、何となく足が重かつた。叔父に厭な事を聞かすのも、氣が進まない。叔父に色々訊かれるのも、厭であつた。叔父の處へ行けないとすると、差當り何處へ行くと云ふ的もない。お作は唯フラ／＼と歩いた。

表町を離れると、其處は寂しい往來であつた。外は大分春らしい陽氣になつて、日の光も目眩しい位であつた。お作の目には、坂を降り

て行く、幾組かの女學生の姿が、如何にも快活さうに見えた。何を考へるともなく、歩が自然に反對の方向に嚮いてゐたことに氣がつくと、急に四辻の角に立停つて四下を見廻した。

何だか、元奉公してゐた家が可懷しいやうな氣がした。始終拭掃除をしてゐた部屋々々のちいんまりした樣子や、手鍋提げた臺所の模樣が、目に浮んだ。何處かに中國訛のある、優しい夫人の聲や目が憶出された。出る時、赤兒であつた男の子も、もう大きくなつたらうと思ふと、其成人振も見たくなつた。

お作は柳町まで來て、最中の折を一つ買つた。而して其を風呂敷に包んで、一端何か酬いられたやうな心持で、元氣よく行出した。

西片町界隈は、古いお馴染の町である。此の區域の空氣は一體に明るいやうな氣がする。お作は櫻の並根際を行いてゐる幼稚園の生徒の姿にも、一種の可懷しさを覺えた。此處の櫻の散る頃の、遣瀨ないやうな思も、胸に湧いて來た。

家は松木と云つて、通を少し左へ入つた處である。門から直に格子戸で、庭には低い立木の頂が、スク〳〵と新しい黑塀に見られる。

お作は以前愛された舊主の門まで來て、些と躊躇した。

三十六

門のうちに、綺麗な腕車が一臺待をしてゐた。

お作は着古した杜松の陰を脱けて、湯殿の横からコークス殼を敷いた水口へ出た。障子の隙から竊と臺所を覗くと、誰もゐなかつたが、臺所の模樣は多少變つてゐた。瓦斯なども引いて、西洋料理の道具などもコテ〳〵並べてあつた。自分の居た頃から見ると、何處か豐さうに見えた。

奧から子供を愛してゐる女中の聲が洩れて來た。夫人が誰かと話してゐる聲も聞えた。客は女らしい、華やかな笑聲もするやうである。

少時すると、束髮に花簪を插して、整然とした姿をした十八九の女が、ツカ〳〵と出て來た。赤い盆を手に持つてゐたが、お作の姿を見ると、丸い目をクル〳〵させて、「誰方。」と低聲で訊いた。

「奧樣在らつしやいますか。」とお作は赤い顏をして言つた。

「え、在らつしやいますけれど……。」

「別に用はないんですけれど、前にをりましたお作が伺つたと、然う仰しやつて……。」

「ハ、然よでございますか。」女中はジロ〳〵お作の樣子を見たが、盆を拭いて、其に小さいコップを二つ載せて、奧へ引込んだ。

少時すると、二歲になる子が、片言交りに何やら言ふ聲がする。咲溢れるやうな、今の女中の笑聲が溢れて來る。其笑聲には、何の濁も蟠りもなかつた。お作は此の暖かい聲で過した三年の靜かな夢を憶出した。

奧樣は急に出て來なかつた。大分經つてから、女中が出て來て、「あの、此方へお上んなさいな。」

お作は女中部屋へ上つた。女中部屋の窓の障子の處に、凸凹の鏡が立懸けてあつた。白い前垂や羽織が壁に懸つてゐる。少時すると、夫人が些と顏を出した。寢ぎすな、顏の淋しい女で、此頃殊に毛が拔上つたやうに思ふ。お作は平くなつてお辭儀をした。

「此頃は如何ですね。商賣屋ぢや、隨分氣骨が折れるだらうね。——お前何だか顏色が惡いやうぢやないか。病氣でもお爲かい。」と夫人は詞をかけた。

「え……。」と云つてお作は早產のことなど話さうとしたが、夫人は氣忙しさうに、「マア寛り遊

んでおいで。」と言棄てて奥へ入つた。

少時女中と二人で、子供を彼方へ取り此方へ取りして、愛してゐた。子供は乳色の顔をして、能く肥つてゐた。先月中小田原の方へ行つて居て、自分も伴をしてゐたことなぞ、お作は氣爽に話出した。話は罪のない事ばかりで、小田原の海が如何だつたとか、梅園が什うだとか、何處のお嬢さまが遊びに來て面白かつたとか……

お作は浮の空で聞いてゐた。

外へ出ると、其處らの庭の木立に、夕靄が被つてゐた。お作は新坂をトボ〱と小石川の方へ降りて行つた。

三十七

歸つて見ると、店は何だか紛擾してゐた。何時も能く來る、頬のそげた髪毛の長く伸びた、目の小さい、鼻の缺けた汚い男が、跣足のまゝ突立つて、コップ酒を呷りながら、何やら大聲で怒鳴つてゐた。小僧達の顔を見ると、一様に不安さうな目色をして、新吉を見守つてゐる。奥の方でも何だかごてついてゐるらしい。上口に亂雜な脫方をしてある、疊表の下駄は、お國のであつた。

「お國さんが歸つて？」と小僧に訊くと、小僧は、「今歸りましたよ。」と胡散臭い目容でお作を見た。

悄と上つて見ると、新吉は長火鉢の處に立膝して莨を喫つてゐた。お國は奥の押入の前に、行李の蓋を取つて、此も片膝を立てて、目に殺氣を帶びてゐた。お作の影が差しても、二人は見て見ぬ振をしてゐる。

新吉はポン〱と煙管を敲いて、「小野さんに、それぢや私が濟まねえがね……。」と溜息を吐いた。

「新さんの知つたことぢやないわ。」とお國は赤い胴着のやうな物を畳んでゐた。髪が昨日よりも一層強い紊方で、立てた膝のあたりから、友禪の腰巻などが猥めかしく零れてゐた。

「私や私の行き處へ行くんですもの。誰か何と言ふもんですか。」と凄じい鼻息であつた。

お作は茫然入口に突立つてゐた。

「それも、東京の内なら、私も文句は言はねえが、何も千葉くんだりへ行かねえだつて……。」と新吉は少し激したやうな調子で、「千葉は何だね……

「何だか、私も知らないんですがね、私ア迚も、東京で呑氣の奉公なんざ出來やしませんから……。」

「其ぢや千葉の方は、お茶屋でもあるのかね。」

お國は默つてゐる。新吉も默つて見てゐた。

「私の體なんか、何處へ如何流れて如何なるか解りやしませんよ。一つ體を沈めて了ふ氣になれア、氣樂なもんでさ。」とお國は投出すやうに言出した。

「だけど、何も、其程までに爲んでも……。」と新吉はオドついたやうな調子で、「然う捨鉢になることもねえ譯だがね。」と同じやうな事を繰返した。

「それア、私だつて、何も自分で捨鉢になりたかないんですわ。だけど、如何いふもんだか、私ア然うなるんですのさ。小野と一緒になる時なぞも、もう了と締る心算で……。」とお國は口のなかで何やら言つてゐたが、急に溜息を吐いて、「眞實に放擲つておいて下さいよ。小野の處から訊いて來たら、何處へ行つたか解らない、と然う言つてやつて下さい。此先は如何なるんだか、私にも解らないんですから。」

「ぢや、まア、行くんなら行くとして、今夜に限つたこともあるまい。」

店は急にドヤ〱して來た。醉漢は、咽喉を絞るやうな聲で唱出した。

三十八

少時すると、食卓がランプの下に立てられた。新吉は連に興奮した樣な調子で、「酒をつけろ酒をつけろ。」とお作に吩咐つた。

「それぢやお別れに一つ頂きませう。」お國も素直に言つて、其處へ來て坐つた。髪を撫でつけて、キチンとした風をしてゐた。お作は此場の心持が、能く呑込めなかつた。お國が何處へ何爲に行くかも能く解らなかつた。新吉に叱られて、無意識に酒の酌などして、傍に畏まつてゐた。

お國は險しい目を光らせながら、グイ〱酒を飲んだ。飲めば飲むほど、顏が蒼くなつた。外眦が少し釣上つて、蟀谷の處に脈が打つてゐた。脣が美しい潤を有つて、頬が削けてゐた。

新吉は赤い顏をして、俛きがちであつた。お國が千葉のお茶屋へ行つて、今夜のやうに酒など引被つて、藥鉢を言つてゐる樣子が、歴々目に浮んで來た。頭腦がガン〱鳴つて、心臟の鼓動も激しかつた。が、胸の底には、冷い或物が流れてゐた。

「新さん、ぢや私これでおつもりよ。」とお國は猪口を干して渡した。

お作が默つてお酌をした。

「お作さんにも、大變お世話になりましたね。」とお國は言出した。

「いゝえ。」とお作はオドついたやうな調子で言ふ。

「彼方へ行つたら、些とお遊びに入らして下さい……と言ひたいんですけれどね、實は私は姿を見られるのも極が惡い位の處へ行くんですの。此ツきり、もう誰方にもお目にかゝらない積ですからね。」

お作は其顏を見あげた。

醉漢はもう出たと見えて、店が森としてゐた。生温いやうな風が吹く晩で、凝としてゐると、澄切つた耳の底へ、遠くで打つてゐる警鐘の音が聞えるやうな氣がする。かと思ふと、それが裏長屋の話聲で消されて了ふ。

「ア、醉つた！」とお國は燃えてゐる腹の底から出るやうな息を吐いて、「ぢや新さん、此で綺麗にお別れにしませう。醉つた勢でもつて……。」と帶の折れてゐた處を、キュと仕扱いてポンと敲いた。

「ぢや、今夜發つかね。」新吉は女の目を瞶めて、「私送つても可いんだが……。」

「いゝえ。然うして頂いたら却つて……。」お國はもう一度猪口を取りあげて無意識に飲んだ。

お國は俥で發つた。

新吉はランプの下に大の字になつて、暫時寢てゐた。お國が未だ居るのやら居ないのやら、解らなかつた。持つて行き處のない體が曠野の眞中に横はつてゐるやうな氣がした。

大分經つてから、掻卷を被せてくれるお作の顏を、ジロリと見た。

新吉は引寄せて、其頬にキッスしようとした。お作の頬は氷のやうに冷かつた。

* * * *

「開業三周年を祝して……」と新吉の店に菰冠が積上られた其秋の末、お作は又身重になつた。

足迹

一

お庄の一家が東京へ移住したとき、お庄は漸と十一か二であつた。

まさかの時の用意に、山畑は少しばかり残して、後は家屋敷も田も悉皆賣拂つた。煤けた塗箪笥や長火鉢や蒔繪のやうなものまで金に替へて、それを不残父親が縫立の胴巻に仕舞込んだ。

「どうせこんな田舎柄は東京にや流行らないで、こんならも古着屋へ賣つちまはう。東京でうまく取着きさへすれア衆に好いものを買つて着せるで心配はない。」

とかく黒ッぽい母親が、奥の納戸でゴッゴツした手織縞の着物を引張つたり疊んだりしてゐると、前後の考へのない父親が然う云つて主張した。これ迄にも散々道楽を爲盡して、どうか然うか五人の子供を育てあげるに差閊へぬ位の身代を飲潰してしまつた父親は、妻子を引連れて何處か面白いところを見物に行くやうな心持でゐた。

それ迄に夫婦は長いあひだ、身上を仕舞ふ仕舞はぬで幾度となく揉着した。母親は其度に色々の場合の事を言出して、一つ／＼無くなつた物を數へたてた。

「あんらも今有れア假令東京へ行くにしたつて可恥しい思はしないに。」と、碌に手を通さない紋附や小紋のやうなものを縫直しにやると云つて、一背負ひ町へ持出して行かれた事などを、くど／＼と零した。自分で苦勞して、養蠶で取つた金を夕方裏の川へ出てゐる一寸の間に、ちよろりと占めて出て行つたきり、色町へ入浸つて、七日も十日も歸らなかつた事なども、今更のやうに言立てられた。すると父親は煙管を筒にしまつて腰へさすと、ぷいと爐端を立つて向の本家へ外してしまふ。

お庄は母親が、賣るものと持つて行くものとを、丹念に選分けて、仕舞つたり出したりしてゐる傍に坐込んで、是迄に見たこともない小片や袋物、古い押繪、珊瑚珠のやうな物を、不思議さうに選出して弄つてゐた。中には顎下腺炎とかで死んだ祖母さんの手の迹だと云ふ黴くさい巾着などもあつた。お庄は自分の産れぬ前のことや、稚いをりのことを考へて、暗い懐しいやうな心持がしてゐた。

家がすつかり片着いて、起つ二日ばかり前に一同本家へ引揚げた時分には思斷のわるい母親の心もいくらか紛されてゐた。明るい方へ出て行くやうな氣もしてゐた。

父親は本家の若い主と朝から晩まで酒ばかり飲んでゐた。村で目星い家は、何處かで緣が繫つてゐたので、それらの人々も、餞別を持つて來ては、入替り立替り酒に浸つてゐた。山畑の五月は漸と櫻が咲く時分で裏山の松や落葉松の間に、仄白いその花が見え、桑畑はまだ灰色に、田は雪が消えたまゝに柔かく黝んでゐた。

道中は可成に手間取つた。汽車のある處まで出るには、五日もかゝつた。馬車の通つてゐるところは馬車に乘り、人力車のある處は人力車に乘つたが、子供を負つたり、手を引張つたりして上るやうな險しい峠もあつた。父親は早目に其日の旅籠へつく／＼と、伊勢参宮でもした時のやうに悠長に構込んで酒や下物を取つて、

に飲んだり食つたりした。
「田舎の地酒も此がお仕舞だで、お前もまあ坐つて一つ遣れや。」と、父親はきちんと坐つて、しやがれたやうな聲で言つて、妻に酒を注いだ。
母親は泣立てる乳吞兒を抱へて、お庄の明朝の髪を結つたり、下の井戸端で襁褓を洗つたりした。雨の降る日は部屋でそれを乾さなければならなかつた。
「鼻汁をたらしてゐると、東京へ行つて笑はれるで、綺麗に行儀を好くしてゐるだぞ。」と、父親はお庄の涕汁なぞを拭んでやつた。氣の荒い父親も旅へ出てからの妻や子に對する心持は優しかつた。
或町場に近い温泉場へつれて行つた時、父親はそこで三日も四日も逗留して、終に藝者をあげて騷ぎだした。

二

一行が廣い上野のプラットホームを、押流されるやうに出て行つたのは、或蒸暑い日の夕方であつた。
父親は鞄に二本からげた傘を通して、それを垂下げ、ぞろ／＼附いて來る子供を引張つてベンチの處へ連れて行くと、母親も泣立てる背中の子を揺り／＼襁褓の入つた包を持つて、暑苦しい群衆のなかを目の色を變へて急いで行つた。停車場では蒼白い瓦斯燈の下に、夏[illegible]ネルを着た人の姿がちらほら見受けられた。
そこで一休みしてから、「私はまア後で行くで、お前達は人力車で一足先へ行つとれ」と云つて、能く東京を知つてゐる父親は物馴れたやうな調子で、構外へ出て人力車を三臺誂へた。行先は母親の側の縁續きであつた。父親は妻や子供をぞろ／＼引張つて、そこへ入つて行くのを好まなかつた。
「それぢや私は先へ行つてをりますで、明朝は如何でも來て下さるだらうね。」母親は行李を一つ膝の下へ插んで、車夫が梶棒を持上げたときに、咽喉の塞がりさうな聲を出して言ふと、父親は頷いて傘に包を一つ下げながら、帽子を傾げて停車場前の廣場へ出て行つた。
お庄は尻から二番目の妹と、一つの人力車に乗せられた。汽車に乗る前に、父親に町で買つて貰つた花簪などを大事さうに頭髪にさしてゐた。
人力車は湯島の邊を彼方此方まごついた。坂の上へあがると、煙突や灯の影の多い廣い東京市中が、海のやうな濛霧の中に果もなく擴つて見えたり、暗いごみ／＼した街で、幾度も／＼迷いたりした。そこらに目が慣れた。門構、[illegible]の家の多い町へ來たとき、お[illegible]た人力車の一臺が[illegible]ことしてゐた。そこは明神の深い森の闇を受けてゐるやうな處で、地面が[illegible]りして居た。梧桐の蔭に燈を遮つた瓦斯の見える或下宿屋の前へ來かゝつたとき、母親と車夫との話聲を聞きつけて、薄暗い窓の裡からお[illegible]から、「野川の姉さまかね。」と云つて、母親の實家の古い屋號を聲をかけるものがあつた。見るとそこに[illegible]深い丸い顔が、近眼鏡を光らしてニコ／＼してゐる。
その顔は直に入口の格子戸の方へ現はれた。
「おや、みんな揃つて來た／＼。」と云ふ、こゝの女主の聲も耳に入つた。
少時すると帳場の次の狭苦しい部屋で物の莫迦丁寧な母親と、此處の人達との間に長い挨拶が始まつた。
氣象の烈しい女主は、くどいお辭儀を續けてゐる母親を見下すやうにして、「東京は田舎と異つて、何にもしずに、ぶら／＼遊んでゐるやうな者は一人もゐないで、爲とあのやうな精のない人には、遣つて行かれるか如何だか私ア

知らねえけれど、まづ一通や二通のことでは駄目だぞえ。」と、づけ〳〵言つた。

「さうでござんすらいに……」と、母親は淋しい笑顔を作つて、づらりと傍に並んで坐つた子供を見遣つた。

子息の菊太郎は、ニコ〳〵しながら茶をいれて衆に侑めた。

「大きくなつたな。お庄さんは幾歳になるえ。」と、お庄の丸い顔を覗込んだ。

部屋には薄暗いランプが点されて、女主の後から三男の繁三が黒い顔に目ばかりギリ〳〵させて、田舎から来た子供の方を眺めてゐた。

やがて繁三につれられて、お庄は弟と一緒に近所の洗湯へやられた。

三

その晩お庄は迷子になつた。

「お前さんは女だから、其方へお入り。」と、お庄はパッと明るい女湯の中へ連込まれて、一人できよろ〳〵してゐた。そこには見たこともない大きい姿見がぎら〳〵してゐた。お庄は日焼のした丸い顔や、田舎々々した紅入友染の帯を胸高に締めた自分の姿を見て、ぼツとしてゐた。

湯から上つてみると、男湯の方にはもう繁三も弟も見えなかつた。お庄は一人で暗い外へ出ると、温かい湯の匂のする溝際について、ぐん〳〵歩いて行つたが、何処へ行つても同じやうな家と町ばかりであつた。お庄は先刻車夫が上つたやうな暗い坂を上つたり下りたり、同じ下宿屋の前を二度も三度も往来したりした。するうちに町が段々更けて来て、今まで明るかつた二階の板戸が、もう締まる家もあつた。

菊太郎と繁三とが捜しに来た頃には、お庄は歩き疲れて、軒燈の薄暗い、と有る店屋の縁台の蔭に蹲坐んで、目に涙を入染ませながらぼんやりしてゐた。

「お前まあ今迄どこに居ただえ。」女主は帳場の奥から、帰つて来たお庄に声かけた。「東京には人浚と云ふ可怖いものがをるで、気をつけないと可けないぞえ。」

お庄はメソ〳〵しながら、母親の側へ寄つて行つた。

ごた〳〵した部屋の隅で、子供同士頭顱を並べて寝てからも、女主と母親と菊太郎とは、長火鉢の傍で何時までも話込んでゐた。

「嫂さあは、何をして六人の子供を育てて行く心算だかしらねえけれど、取付くまでには、まあ余程骨だぞえ。」と、女主は東京へ出てからの自分の骨折などを話つて聞かせた。

「私らも、田舎でこそ押しも押されもしねえ家だけれど、東京へ出ちや女一人使ふにも遠慮をしないぢやならないで……。」

田舎では問屋本陣の家柄であつた女主は、良人が亡つてから、自分の経営してゐた製糸業に失敗して、それから東京へ出て来た。而して下宿業を営みながら、二人の男の子を普通に仕立てようとして居た。それ迄に商売は幾度となく變つた。

翌日父親が来たとき、母親と子供は、狭い部屋に蟄々してゐた。

「とにかく、如何な處でも可いで、家を一つ捜さないおや……話は其からの事ですつて。」と、父親は落着拂つて煙草を喫してゐた。

午後に菊太郎と父親とは、近所へ家を見に出た。家は直に決つた。直横町の路次のなかに、此頃新しく建てられた、安普請の平屋が並べられて、二人はまだ壁土に鉋屑の散つてゐる狭い勝手口から上つて行くと、押入の工合を見てあるいた。

「田舎の家から見れア手狭いもんだでねえ。」と、菊太郎は砂でざら〳〵する青畳の上を、浮足で

歩きながら語つた。
「まあ假だて何でも好い。新しいで結構住へる。東京ぢや、これで月二十圓もしますら。」
晩方には、もう其處へ移るやうな手續が出來てしまつた。
下宿からは、差當り必要な古火鉢や、茶呑茶碗、雜巾のやうな物が運ばれ、父親は通からランプや油壺、七輪のやうな物を、一つ／＼買つては提込んで來た。母親は木の香の新しい臺所へ出て、ゴシ／＼働いてゐた。
その間お庄は、乳呑兒を背に縛りつけられて、下宿と引越先との間を、幾度となく通つてゐた。

四

點燈頃に其處らが漸う一片着き片着いた。
廣い田舍家の奧に閉籠つて、餘り外へ出たことのない母親は、近所の女房連の集つてゐる井戸端へ出て行くのが、何より厭であつた。子供達も行つた家のなかを、其方此方うろつきながら、何にもない臺所へ出て來ては水口の處に直り喰着いて、暮れて行く路次を眺めてゐた。お庄は出たり入つたりして、そこらの門口にゐる娘達の頭髮や身裝を遠くからじろ／＼見てゐた。
父親は實直さうにバケツを提げて、水を汲みに行つたり、大きな體で七輪の前に踞んで、煮物の加減を見たりした。
「こんな流しは私ア初めて見た、東京には田舍のやうな上流しはありましねえかね。」
「無いこともないが田舍は何でも仕掛が豪いで。まア東京に少し住んで見ろ。田舍へなぞ歸つて迚も居られるものではないぞ。」
「何だか知らねえが、私は家のやうな氣がしましねえ。」母親は濟いてゐた德利をそこに置いたまゝ、何も彼も都合の好く出來てゐる、田舍のがつしりした古家を可懷しく思つた。
父親が、明るいランプの下でちび／＼酒を始めた時分に、子供達は其處にづらりと竝んで、もく／＼晩餐を喰ひはじめた。母親は額に汗を入染ませながら、荒い鼻息の音をさせて、すか／＼と乳を食つてゐる碧兒の顏を見入つてゐた。
「今漸と晩御飯かえ。」と、下宿の主婦は裏口から聲かけて上つて來た。
「皆今迄何してゐただえ。」
「お疲れなさいまし。」母親は重い調子でお辭儀をして、「何だか馴れねえもんだでね。」と、分疏らしく言つた。
「それでも一と先づ、何うか斯うか賣る處だけは出來ましたこと。まア一寸と父親は糊口をあけて笑した。
主婦は落着いて何も氣にしてゐなかつた。而しそれ／＼子供達の顏を見ながら、驚さあは是から何をする心算だか知らねえが、から大勢の口を控へてゐちやなか／＼遣切れたものぢやない、一日でも遊んでゐれア其だけ金が減つて行くで。」
父親は平手で額を撫であげながら、默つてゐた。父親の氣は、まだそこ迄決つてゐなかつた。行つて見たいやうな商賣を始めるには、資本が不足だし、體を落して働くには年を取過ぎてゐた。如何にかして取着いて行けさうな商賣を、それか此かと考へてみたが、是ならばと思ふやうなものも無かつた。
「私も考へてゐることもありますで、まア少し此方の樣子を見たうへで。」と、父親は餘り好い顏をしなかつた。
「相場でもやらうちふのかえ。」主婦はニヤニヤ笑つた。
「そんな事して、擂つてしまつたら如何する氣だえ。私はまア何でも好いから、資本のかゝらない、取着きの速いものを始めたら可からうか

と思ふだがね。」
父親は聽きつけもしないやうな顏をしてゐた。
「それに一昨日神田の方で、少し頼んでおいた口もありますで。」
「然うですかえ。けど、そんな人頼をするより、寧そ誰にでも出來る氷屋でも出せア可いに。氷屋で仕上げた人は隨分あるぞえ。綺麗事ぢや金は儲からない。」
「氷屋なぞは夏場だけのもんですつて。第一あんなものは忙しいばつかりで一向儲が細い。」
母親も心細いやうな氣がしだした。氷屋をする位ならば‥‥とも思つた。

五

「田舍ツペ、寶ツペ、明神さまの寶ツペ。」と、善く近所の子供連に囃されてゐたお庄の田舍訛が大分除れかゝる頃になつても、父親の職業はまだ決らなかつた。
父親は思案に[illegible]はれて來ると、道樂をしてゐた時分持つてゐた、印形の[illegible]、角帯[illegible]にして、のそ〱と路次を出て行つた。行先は大抵[illegible]であつた。下宿屋の主婦に[illegible]言はれるので[illegible]顏なので、[illegible]頭は其前[illegible]通りにすることにしてゐた。而して[illegible]町の方へ入込んでゐる村で同姓の知合を、神田の[illegible]に訪ねるか、石川島の會社の方へ出てゐる妻の弟を築地の家に訪ねるかした。時とすると横濱で商館の方へ勤めてゐる自分の弟を訪ねることもあつた。濱からは能く强い洋酒などを貰つて來て、黄金色した其酒を小さい杯に注ぎながら、日に透して見ては美さうに嘗めてゐた。
「濱の弟も、酒で鼻が眞紅になつてら。こんなの酒ぢや、もう利かねえと云ふこんだ。金にして餘程飲むら。」
「あの衆らの飲むのは、器量があつて飲むだで可い。身上も餘程出來たらうに。」
「何が出來るもんだ。それでも妻は二人とも大きくなつた。男の子が一人欲しいやうなことを言つてるけれど、遣らづか遣るまいか、まアもつと先へ寄つてからの事だ。」
その頃から、父親は能く夢中で新聞の相場附を見たり、夜深に外へ[illegible]出して、[illegible]と睨ッ競をしたりしてゐた。朝から出て行つて、一日歸らないやうな事もあつた。さうかうする内に金が段々減つて行つた。四月弱の居喰で、目に見えぬ出錢も少くなかつた。
「手を汚さないで、甘いことをしようたつて駄目の皮だぞえ。爲さあらまだ苦勞が足りない。」
下宿屋の主婦は留守に遣つて來ると、妻に蔭口を吐いた。而して「お安さあもお安さあだ。是迄[illegible]に[illegible]かれて此上何を[illegible]氣だえ。默つて見てばかりゐずと、些と言つてやらつし。」と云つて窘めた。母親は切ないやうな氣がして、默つてゐた。
母親は、押入の葛籠のなかから、子供の冬物を引張出して見てゐた。田舍から除けて持つて來てた、丹念に始末をしておいた手織物が、東京でまた役に立つ時節が近づいて來た。その藍の匂をかぐと、母親の胸には田舍の生活がしみじみ想出された。
父親は一日出歩いて晩方歸つて來ると、こそこそと家へ上つて、火鉢の傍に坐込んだ。傍にお庄兄弟が、消炭の火を吹きながら玉蜀黍を炙つてゐた。六つになる弟と四つになる妹とが、附燒にした玉蜀黍を甘さうに嚙つてゐる。父親はお庄の[illegible]になつて炙つてゐる玉蜀黍を一つ取上げると、押切れさうな實を三粒四粒[illegible]で[illegible]つて、前齒でほり〱[illegible]。四方はもう暗かつた。[illegible]いやうな[illegible]、障子を開けた[illegible]から吹いて來た。母親はそこに色々な[illegible]を引散らかしてゐた。

一日の暮れるまで何をしてるだか……」と、父親は舌鼓をして、煙管を筒から抜いた。
「何か遣出せア、それに凝つて、子供に飯食はすことも點火すことも忘れてしまつてゐる。」
母親は急に出てゐたものを引括めるやうにして、「忘れてゐると云ふでもないけれど、着せる先へ立つて、揚が短いなんて云ふと困ると思つて。」

六

丑年の母親は、仕舞ひさうにしてゐた葛籠の傍を誰もぞくさして居た。父親が二言三言小言を言ふと、母親も口のなかでぶつくさ言出した。きちんと坐込んで莨を喫つてゐた父親が、いきなり起上ると、子供の着物や母親の襦袢のやうな物を、兩手で掻浚つて、ジメ／＼した庭へ捏ねて投出した。庭には蟲の鳴くのが聞えてゐた。

お庄が下駄を持つて來て、それを縁側へ拾揚げる頃には、父親は箒を持出して、さつさと部屋を掃きはじめた。母親が爲うことなしに座を起つと、子供も火鉢の側を離れてうろ／＼してゐた。お庄は泣出す小さい子を負出すと、手に玉蜀黍を持つて狹い庭をぶら／＼しながら家の様子を見てゐた。父と母とは臺所で別々の事を働きながら言合つてゐた。

お庄は薄暗い縁側に腰かけて、母親のことを氣の毒に思つた。放埒な氣の强い父親が、是迄に田舍で働いて來たことや、一家のまごつき初めた徑路などが、聰けないながら頭腦に考へられた。お庄が覺えてから、父親が家に落着いてゐるやうな日は殆どなかつた。上州から流込んで來た村の達磨屋の年増のところへ入浸つてゐる父親を、お庄は能く迎に行つた。その女は腕に文身などしてゐた。繻子の半衿のかゝつた軟かものの半纏などを引被けて、煤けた障子の外へ出て來ると、お庄の手に小遣を掴ませたり、菓子を懷へ入れてくれたりした。長く家へ留めておいた上方ものの母子の義太夫語のために、座敷に床を拵へて、人を集めて語らせなどした時の父親の擧動は、今思ふと全然狂氣のやうであつた。母親も着飾つて、能く女連と一緒に坐つて聽いてゐた。父親や村の若い人達は終に浮出して、愛らしい娘を取卷いて、明るい燭臺の陰で、綺麗な其目や頬に吸ひつくやうにして巫山戲てゐた。お庄は極可恥しい念をして、其義太夫語に何やら少しづつ教はつた。

「妾に此お子を四五年預けておくれます、きつと物にしてお目にかけます」と女は言つてゐたが、父親はこんな無器用ものには、藝事は迚もダメだと言つて眞面目に失望した。

秋風が吹いて、收穫が濟む頃には、能く夫婦の祭文語が入込んで來た。薄汚い祭文語は爐端へ呼入れられて、鈴木主水や刈萱道心のやうなものを語つた。母親は時々こくり／＼と居睡をしながら、鼻を啜らせて、下卑た其文句に聽惚れてゐた。田のなかに村芝居の立つ時には、父親は頭取のやうな役目をして、高い處へ坐込んで威張つてゐた。

養蠶時の忙しい時期を、父親は村境の峠を越えて、四里先の町の色里へしけ込むと、きつと迎の出るまで歸つて來なかつた。迎に行つた男は二階へ上ると、持つて行つた金を捲揚げられて、一緒に飲潰れた。而して父親と二人で流連してゐた。

夜の目も合さず衆が立働いてゐる處へ、心も體も酒に爛れたやうな父親が、險しい目を赤くして夕方歸つて來ると、自分で下物を拵へながら、爐端で一人が迎酒を飲みはじめる。東でくさつたやうな鼻唄や笑聲が聞えて、誰も傍へ寄りつくものがなかつた。

お庄は剛情に坐込んで、薪片で打たれたり、足蹴にされたりしてゐる母親の様子を幾度も見せられた。火の點いてゐるランプを取つて投げつけられ、額からだら／＼流れる黒血を抑へて、跣足で暗い背戸へ飛出す母親の袂に喰着いて走出した時には、心から父親を可恐しいもののやうに思つた。

七

そんな事を想出してゐる間に、父親は鐵灸で鹽鮭の切身を炙つたり、浸しのやうなものを拵へたりした。

「お庄や、お前通まで行つて酢を少し買つて來てくれ。」父親は戸棚から瓶を出すと、明るい方へ透して見ながら言つた。

「酢が切れようが砂糖がなくならうが、一向平氣なもんだ。そらお鳥目……。」と、父親は懐の財布から小錢を一つ取出して、そこへ投出した。

「あれ、まだ有ると思つたに……。」と、ランプに火を點してゐた母親は素頓狂な聲を出した。が、業が沸くやうで口へ出さなかつた。母親の胸には、是迄亭主に欺れた事が、一つ／＼新しく想出された。

お庄は氣爽に、「ハイ。」と云つて、水口の後の竿にかゝつてゐた、鹽氣の染込んだやうな小風呂敷を外して、瓶を包みかけたが、父親の用事をするのが、何だか小癪のやうにも考へられた。常磐津の師匠のところへ通つてゐる向うの子でも、仲好の通の古着屋の子でも、一度も自分のやうな吝ッたれた使に出されたことがなかつた。些としたことで、弟を啼かすと、直に飛びかゝつて來て引擱んで、呼吸のつまりさうな厚い大きな田舍の夜具にぐる／＼捲にされて、暗い納戸の隅に放抛つておかれたり、霙がびしよ／＼降つて寒い狐の啼聲の聞える晩に、背戸へ締出を喰はしておいて、自分は暖かい炬燵に高鼾で寝込んでゐたやうな父親に、子供は子供なりの反抗心も持つて來た。

お庄は何の家でも、明るい餉臺の上にこてこてと食物が並べられ、長火鉢の側で晩酌の箸を動かしてゐる、賑かな夕暮の路次口を出て行くと、内儀さん達の寄つてゐるやうな明るい店家の前を避けるやうにして、溝際を傳つて歩いてゐた。何時も立停つて聞くことにしてゐる通の師匠の家では、この頃聞覺えて、口癖のやうになつてゐるお駒才三を語でらかつけて貰つてゐた。お庄は瓶を抱へたまゝ、暗い片陰に、暫く佇んでゐた。

お庄は掠めるやうな手容をして、ふいとそこを飛出すと、極悪さうに四下を見廻して、酒屋の店へ入つて行つた。

急いで家へ歸つて來ると、父親はランプの下で、苦い顔をして酒の燗をしてゐた。子供達は餉臺の周に居並んで、手々に食物を漁つてゐた。

母親は手元の薄暗い流元に跪坐込んで、ゴシゴシ米を精いでゐた。水をしたむ間、ぶす／＼愚痴を零してゐる聲が奥の方へも聞えた。お庄は父母のお株が始まつたのだと思つた。父親は其度に苛々するやうな聲に青筋を立てた。

母親が襷をはづして、火鉢の傍へ寄つて來る時分には、父親はもう散々醉つてそこに横はつてゐた。お庄は、氣味のわるいもののやうに、鼻の高い、眉毛の薄い、其大きな顔や、睫毛の疎な、色の白い長い其顔などを眺めながら、母親の方へ片寄つて、飯を食ひはじめた。

母親の口には、まだぶす／＼云ふ聲が絶えなかつた。實病なやうな白い眼が、をり／＼じろりと父親の方へ注がれた。默つた其胸を突出して、硬い首を据ゑ、東京へ來てからまだ一度も鐵漿をつけたことのないやうな、歯の汚い口に、

音をさせて飯を食つてゐる母親の樣子を、能く憎さげに眞似してみせた父親の顏に思合せて、お庄は厭なやうな氣がした。達磨屋の年増や、義太夫語の顏などをお庄は目に浮べて、母親は樣子が惡いとつく〴〵然う思つた。

八

次の年の夏が來る迄には、お庄の一家にも色々の變遷があつた。家には殘しておいた山畑を賣りに父親が田舍へ出向いて行つて、その金を持つて歸つて來ると、漸く諸拂を濟して、お庄兄弟のためにも新しい春着が裁縫され、下駄や簪も買へた。お庄等は田舍から持つて來た干栗や、氷餅の類をさも珍しいもののやうに思つて悦んだ。正月にはお庄も近所の子供並に着飾つて、羽子など突いてゐたが、其頃から父親は時々家をあけた。

下宿の主婦は、「爲さあは、金が少し出來たと思つて、何處を毎日然うぶら〳〵歩いてばかりゐるだい。」と、來ては厭味を言つてゐた。

父親はニヤリともしないで、「私も然う何時までぶら〳〵しては居られないで、今度と云ふ今度は商賣を遣らうと思つて、その事で色々用事もあるで……。」と言うてゐたが、父親の目論見では、田舍の町で知つてゐる女か淺草の方で化粧品屋を出してゐる、その女に品物の仕入方を教はつて、同じ店を小體に出して見ようと云ふ考へであつた。

お庄は一月の末に、父親に連れられて一度其女の家へ行つた。母親も薄々此女のことは知つてゐた。田舍からの父親の馴染みで、ずつと以前に、商賣を罷めて、其抱主と一緒に東京へ來てゐた。抱主は十八九になる子息と年上の醜い内儀さんとを置去にして、二人で相當な商ひに取着けるほどの金を浚つて、女をつれて逃げて來た。その頃にはその樓の内所も大分左前になつてゐた。

其亭主は大して患ひもしないで、去年の秋の頃に死んでから、男手の欲しいやうな時に、父親が何かの相談相手に、ちよい〳〵顏を出し〳〵してゐた。母親は、喧嘩の時は、其事も言出したが、不斷は忘れたやうになつてゐた。父親は櫛など薄い紙に包んで來て、私と鏡臺の上に置いてくれなどした。

「こんらも高いものについてゐるら。」と言つて、母親は櫛を手に取つて吐出すやうに言つたが、抽斗の奧へ仕舞込んで、碌に插しもしなかつた。棄てるのも惜しかつた。

お庄は手鈍い母親に、二時間もかゝつて、髷や頭を洗つて貰つたり、髪を結つて貰つたりして、もう猫になつたやうな[illegible]までつけて出て行つた。お庄は母親の髪の剃り方や結方が無器用だと云つて、鏡に向つてゐながら、頭髪をわざと振りたくつたり、手を上げたりした。父親も側で莨を喫ひながら口小言を言つた。

「人に髪を結つてもらつて、今からそんな[illegible]上を言ふものぢやないよ。」と、母親も癇癪を起して、口を尖らかしてぶつ〳〵言ひながら、髪を引張つてゐた。

「庄ちやんの髪の癖が惡いからだよ。」

「阿母さんに似たんだわ。」お庄もべろりと舌を出した。

その女の家は、雷門の少し手前の横町であつた。店にはお庄の見恍れるやうな物ばかり竝んでゐたが、そこに坐つてゐる女の樣子は、お庄の目にも、餘り好いとは思へなかつた。薄い毛を銀杏返に結つて、半衿のかゝつた双子の上に軟かい羽織を引つかけて、體の骨張つた、血氣の薄い三十七八の大女であつた。

「おや、お庄ちやん來たの。」と云ふやうな調子で、細い寢呆けたやうな目尻に小皺を寄せた。

父親は直に奧の方へ上つて行つた。奧は暗い

お庄は其晩、簪など買つて歸つた。

花見頃には、お庄も學校の隣に此處の店番をしながら、袋を結へる紙縒など綯らされた。

十

品物の出入や、書付、値段などを少しづつ覺えることはお庄に取つて、さまで苦勞な仕事ではなかつたが、此女を阿母さんと呼ぶことだけは空々しいやうで、如何しても調子が出なかつた。

加之女は長いあひだの商賣で體を惡くしてゐた。時々頭の調子の變になるやうなことがあつて、如何かすると可恐しい意地惡なところを見せられた。お庄は此女の顔色を見ることに慣れて來たが、偶に用足しに外へ出されると、家へ歸つて行くのが厭でならなかつた。

お庄は空腹を抱へながら、公園裏の通をぶらぶら歩いたり、靜かな細い路次のやうな處に佇んで、入染出る汗を袂で拭きながら、何時までも茫然してゐることが度々あつた。

慵い體を木蔭のベンチに腰かけて、袂から甘納豆を撮んでは私と食べてゐると、池の向うの柳の蔭に、人影が夢のやうに動いて、氣疎い樂隊や囃の音、騒々しい銅鑼のやうなものの響が、重い濁つた空氣を傳はつて來た。するうちに、澱んだやうな碧い水の周に映る灯の影が見え出して、木立のなかには夕暮の色が漂つた。

女は、歸つて來たお庄の顔を見ると、

「この人は如何したつて家に呢まないんだよ。」と言つて笑つた。店には此頃出來た、女の新しい亭主も坐つて新聞を見てゐた。亭主は女よりは七八つも年が下で、何處か[illegible]ンのゐのやうな樣子をしてゐた。この男は、何時どこから來たともなく、此處の店頭に坐つて、亭主ともつかず傭人ともつかず、商の手傳などすることになつた。お庄は長い其顔が何時も弛んだやうで、口の利方にも締のない此男が傍にゐると、肉がむづ痒くなるほど厭であつた。男はお庄ちやん／＼と云つて、嘗めつくやうな優しい聲で狎々しく呼びかけた。

男は晩方になると近所の洗湯へ入つて額や鼻頭を光らせて歸つて來たが、夜は寄席入りをしたり、公園の矢場へ入つて、楊弓を引いたりした。夜遊に耽つた朝は何時までも寢てゐて、内儀さんにぶつ／＼小言を言はれたが、夫婦で寢坊をしてゐることも稀しくなかつた。

お庄は寢かされてゐる暗い二階から起きて出て來ると、時々獨で臺所の戸を開け、水を汲んで來て、釜の下に火を焚きつけた。親達が横濱の叔父の方へ引寄せられて、そこで相變らず手巾シャツのやうな物を商ふことになつてから、東京にはお庄の歸つて行く處もなくなつた。

お庄は襷をかけたまゝ、そこの板敷に腰かけて、眠いやうな、うつとりした目を外へ注いでゐたが、胸には色々の事が取留もなく想出された。水汲をしてゐると、もう手先の冷々する秋の頃で、着物のまくれた白脛や膕のところから、寢熱のするやうな肌に當る風が、何となく厭なやうな氣持がした。

お庄は雜巾を絞つてそこらを拭きはじめたが、薄暗い二人の寢間では、まだ寢息がスッ／＼聞えてゐた。

お庄は襷を卸して、寢床の下の方から二階へ上つて行くと、押入のなかから何やら巾着のやうな物を取出して、赤い帶の間へ挾んだが、又偸むやうにして下へ降りて行つた頃に、亭主が漸く起出して、袖や裾の皺くちやになつた單衣の寢衣のまゝ、欠をしながら臺所から外を見ながら跪坐んでゐた。

お庄は體が縮むやうな氣がして、そのまゝバケツを提げて水道口へ出て行つた。泡を立てて充滿つて來る水を渺しながら考込んでゐたお庄は、旋て的もなしに其處を逃出した。

十一

お庄はごちやごちやした裏通の小路を、其方へ行き此方、抜けしてゐるうちに、觀音堂前の廣場へ出て來た。紙片、莨の吸殻などの落散つた濕い地面はまだ濕りして、木立や建物に淡い靄がかゝり、鳩の啼聲が濕氣のある空氣にポッポッと聞えた。忙しさうに境内を突切つて行く人影も、大分見えてゐた。お庄はこゝまで來ると、急に心が弛つたやうになつて、澁る足をのろのろと運んでゐたが、するうちに、堂の方を拜むやうにして、遽に仁王門を潜つた。

仲店はまだ雨戸を上げたまゝの家も多かつた。お庄は暗いやうな心持で、石畳のうへを歩いて行つたが、通の方へ出ると間もなく、柳の下の停留場で電車を待つて乘つた。

「湯島までやつて頂戴な。」と、お庄は四邊を見ないやうにして低い聲で言ふと、ぼくりと後の方へ、頭を落して腰かけた。

上野の廣小路まで來た頃に、空の雲が少しづつ剥かれて、秋の薄日が射して來た。ほつと蘇つたやうなお庄の目には、そこらの様が可懷しく映つた。

お庄は下宿の少し手前で電車を降りて、それから急いで勝手口の方へ寄つて行つた。

屋内はまだ靜かであつた。お庄は竈のかゝつた暗い水口の外に佇んで、暫く控へてゐた。

「如何してこんなに早く來ただい。」

主婦は上つて行くお庄の顏を見ると言出した。蒼白めたやうな顏に、薄い脂肪が粘着いたやうになつて、主婦は今起きたばかりの眠い目をして、莨を喫つてゐた。

お庄は苦笑つてゐた。

「小言でも言はれただかい。」

「いゝえ。」

「何か失敗でもしたろ。」主婦はニヤニヤした。

「いゝえ。」

「それぢや彼處から逃げて來ただかい。逃げて來たつて、お前の家はもう東京にやないぞえ。」

お庄は袂で括れたやうな丸い顎のところを掻いてゐた。

「それに彼處は御父さんが、ちやんと話をつけて預けて來たものだぞ、出るなら出るで、又その話をせにやならん。お前は黙つて出て來ただかい。」

「……。」

「そんな事しちや好くないわの。内も心配してゐるだらうに。」と、主婦は煙管を下におくと、臺所の方へ立つて行つた。そして、楊枝を使ひながら、「家へ歸つたつて好いこともないに、如何して淺草で辛抱しないだえ。銀行へ預けた金も些とはあると云ふではないかい。」

お庄は暫く見なかつたこの部屋の様子を、じろじろ見廻してゐた。

奥から二男の糺も、繁も起出して來た。今茲十九になる糺は六かしい顏をして、白地の寢衣の腕を捲りあげながら、二十二三の青年のやうに大人ぶつた様子で、火鉢の傍に坐ると、ぽかぽか莨を喫出した。

「糺や、お庄が淺草の家を逃げて來たとえ。」と主婦は大聲で言つた。

糺は目元に笑つて、黙つてゐた。

「又詫を入れて歸つて行くにしろ、此まゝ出て了ふにしろ、斷なしに出て來ると云ふのは好くないで、お前は葉書を一枚書いて出しておかつし。」

糺は煩さうに目を顰めてゐた。

朝飯のとき、お庄も糺と一緒に臺所の膳に寄つて行つた。

「淺草へ行つてから、お庄も悉皆様子が好くなつた。」糺は飯を喰るお庄の横顏を眺めながら

笑つた。

十二

この下宿は私立學校の醫學生と法學生とで持切つてゐた。長いあひだ居着いてゐるやうな人達ばかりで、菊太郎や紀とも懇しかつた。中には免狀を取りはぐして、頭髪も生活も荒んで了つた三十近い男などが、天井の低い狹い部屋にごろ／＼して、毎日花を引いたり、碁を打つたりして暮した。夜はぞろ／＼寄席へ押しかけたり、近所の牛肉屋や蕎麥屋で、火を落すまで酒を飲んだりした。北廓の事情に精しい人や、寄席仕込の藝人などもあつた。

「××さんも何時免狀をお取りなさるだか。お國の御父さんも、悉皆田地を賣つておしまひなすつたといふに、然うして毎日々々茶屋酒ばか飲んでゐちや濟まないぢやないかえ。」

主婦は煙枝を銜へて帳場の方へ上込んで來る書生の蒼白な顔を見ると、苦い顔をして言つた。

「私等ンとこの菊太郎も實地はもう澤山だで、今茲は病院の方を罷さして、此秋から田舍に開業することになつてをりますでね、私もこれで一安心ですよ。病院ももう建前が出來た樣子で、昔のことと思や建前もまた一分の一ほかないけれど、舊の家の跡へ親戚で建つてくれたといふもんだでね。」

主婦は誇らしさうな事を、一人に幾度も言つて聞かせた。

その書生は鼻で笑つて、主婦が汲んで出す茶を飲みながら、昨夜の女の話などを仕はじめた。

「あれ、厭な人だよ、手放しで惚氣なんぞを言つて」と、主婦はしれ／＼するやうな顔をした。

するうちに、奥の暗い部屋で差で弄花が始まつた。主婦は小肥りに肥つた體に、繻子の半襟のかゝつた柔かい袷を着て、年にしては派手な風通の前垂などをかけてゐた。黒繻子の帯のあひだに財布を挾んで、一勝負すむ毎に、ちやら／＼音をさせて勘定をした。

學校から皆が歸つて來ると、弄花の仲間も殖えて來た。二男の紀も途中に加はつて、出の勝つ母親の亂次のない引方を尻目にかけながら、可怕らしい顔をしてゐた。

夕方になると、主婦は[illegible]れる[illegible]の皺に白粉などを塗つて、薄い髪を大きく取り、油をてら／＼つけて、金の前齒を光らせながら、帳場に坐込んでゐた。

「お前さんも又白粉を塗つてゐるのよ」と、女中は陰でくす／＼笑つた。

「××さんが此頃奇に女が出來たもんだから、化けて仕樣がないのよ」

女中は廊下の手摺に凭れながらお庄に言つて聞かせた。

この書生は、外へ出ない時は能く、帳場の傍へ上込んでゐた。主婦と一緒に寄席へ行くこともあつた。歸りには其處らの小料理屋で一緒に酒を飲んで、出て行つた時と同じに、別々に歸つて來た。その書生は二十八九の、色の白い、目の細い、口の利方の優しい男であつた。

主婦が其部屋へ入込んでゐるのを、お庄は幾度も見た。

「ちよいと／＼、面白いものを見せてあげよう」と剽輕な女中はバタ／＼と段梯子から駈降りて來ると、奥の明みへ出て仕事をしてゐるお庄を手招きした。

女中は二階へあがつて行く／＼と、足を浮して書頭の部屋の前まで行つて、立停ると、袂で口を押へてくす／＼笑つてゐた。

十時頃の下宿は、どの部屋も／＼シンとしてゐた。置時計の音などが其處からも此方からも聞えて、偶に人のゐるやうな部屋には、書物の頁を

まくる音が洩れ聞えた。
お庄は逃げるやうに階下へ降りて行くと、重苦しく呼吸が詰るやうであつた。
お庄は冬の淋しい障子際に坐つて、また縫物を取りあげた。冷い細い疊に、針の絲が[illegible]しく、薄日に光つてゐた。

十三

横濱の店を仕舞つて、一家の人達がまた東京へ舞戻つて來るまでには、お庄も二三度その家へ行つて見た。
家は山手の場末に近い方で、色の褪せたやうな店には、品物は僅許も並んでゐなかつた。低い軒に青い看板がかゝつて、淋しい日影に曝された硝子のなかに、莫大小のシャツや靴足袋、エップルのやうな類が、手薄く並べられてあつた。
隣家の太鼓の周に寄つてゐる近所の鍛冶屋や、青物屋の子供のなかに、見たやうな弟達の姿をお庄は見出した。弟達は、もう此處らの色に染んで、田舍の色まで消えたやうに思へた。
「正ちやん〳〵」と、お庄が手招ぎすると、一番大きい方の正雄は、姉の顏をちらと見返つたきり、矢張そこに突立つてゐた。

上つて行くと、荒れたやうな家の空氣が、お庄の胸にもしみ〴〵感ぜられた。母親は、この界隈の内儀さん達の着てゐるやうな袖無などを着込んで、裏で子供の着物を洗つてゐた。日の色が褪んで、顏も手もかさ〳〵してゐるのが、目立つて見えた。
母親は傍へ寄つて行くお庄の顏をしげ〳〵と見た。顏や手足の丸々して來たのが、好ましいやうであつた。
「湯島ぢや皆變りはないかえ。」
お庄は臺所の柱のところに凭れて、頭髪を撫でたり、帶を氣にしたりしながら、母親の働く手元を眺めてゐたが、やがて奥へ引込んで、店口へ出て見たり、茶の室のなかを歩いて見たりした。部屋には、東京で世帶を持つた時、父親が小マメに買集めた道具などがきちんと片着いて、父親が蒲團の端から大きい足を踏出しながら、安火に寢てゐた。父親は何も爲ることなしに、毎日々々然うしてだらけたやうな生活に浸つてゐた。皮膚に斑點の出た大きい顏が、脹んでゐるやうにも思へた。
お庄は家が淋しくなると、賑かな大通の方へ出て行つた。馬喰町に藥屋を出してゐる叔父の家へも遊びに行つた。

叔母は其の父親が、長いあひだ或佛蘭西人のコックをして貯へた財産で有福に暮してゐた。その外人のことを、お庄は能く叔母から聞かされたが、屋敷へ連れられて行つた事もあつた。叔母は主人のゐない時に、綺麗な其部屋々々へ入れて見せた。食堂の棚から、銀の匙や、金の食鹽壺、見事なコーヒ茶碗なども出して見せた。錠を卸してある寢室へ入つて、深々した軟かい、二人寢の寢臺の上へも臥された。よく藥種屋の方へ遊びに來てゐる、お島さんと云ふ神奈川在産の丸い顏の女が、この外人の洋妾であつた。
「こゝへ、あの人達が寢るのさ。」と、色氣のない叔母は、寢臺に倚つかゝつてゐながら笑つた。
お庄は目のさめるやうな色の鮮かな蒲團や、四周の裝飾に見惚れながら、長くそこに横はつてゐられなかつた。湯島の下宿の二階で、女中に見せられた、暗い部屋のなかの赤い毛布の色が浮んだ。
淡紅い顏をしたその西洋人が歸つて來ると、お島さんも何處からか現はれて來て、白墮落な懶い風をしながら、コーヒーを運びなどしてゐた。
この叔母が死んだくれの叔父に、財産を減ら

されに行きながら、矢張思ひ斷ることの出來ない樣子で、其のまた叔父に、父親が次々に金を出し〳〵して貰つてる事情が、お庄にも見え透いてゐた。

十四

父親は時々、この叔母の所有に係る貸家の世話や家賃の取立、叔母の代のや、父親から持越しの貸金の催促――そんなやうな事に口を利いたり、相談相手になつたりした。田舍にゐたをり、村の出入を扱ふことの巧かつた父親は、自家の始末より、より大きな家の世話役として役に立つ方であつた。

叔母は手簞笥や手文庫の底から見つけた古い證文や新しい書附のやうなものを父親の前に並べて、一何だか、これも一寸見て下さいな。」と、むつちり肉附いた手に皺を熨した。

「うつかりあの人に見せられないやうな物ばかりでね。」と、叔母は道樂ものの亭主を恐れてゐたが、義兄の懷へ吸込まれて行く高も少くなかつた。

店の品物が、段々棚曝しになつた頃には、父親と叔母との間も、初めのやうにはなかつた。叔母が世話をしてくれた或生絲商店の方の口も、自分の職業となると、長くは續かなかつた。

「堅くさへしてゐてくれゝば、なか〳〵役に立つ人なんだけれど、如何もあの人も堅氣の商人向でないやうでね。」と、叔母は仕舞ひかけてある店頭へ來て、不幸な其の嫂に話した。

父親は、その姿を見ると、煙草入を腰にさして、ふいと表へ出て行つた。店には品物と云つては、もう何程もなかつた。雜作の買手もついて了つたあとで、母親は奧で色々のものを始末してゐた、横濱へ來てから、散々着切つてしまつた子供の衣類や、古片、我樂多のやうな物が又一梱も二梱も殖えた。初めて東京へ來る時、東京で流行らないやうな手縞の着物を殘らず賣拂つて來てから、不斷着せるものに不自由したことが、酷く頭腦に滲込んでゐた。

「東京の方が思はしくなかつたら、又出てお出でなさいよ。」

叔母は襤褸片や、風呂敷包の取散らかつた部屋のなかに坐つて、黑繻子の帶の間から、餞別に何やら紙に包んだものを取出して、子供に渡したり、水引をかけた有片を、火鉢の傍に置いたりした。

「さんざお世話になつて、また其樣な物をお貰ひ申して濟みましねえ。」

母親はそれを眺めてゐたが、挨拶するやうにした。

「お庄ちやんか正ちやんか、孰か一人おいて行けば好いのにね。」と、叔母は子供達の顏を眺めた。

「田舍において來た心算で、お庄ちやんを私に預けてお置きなさい。碌なお世話も出來やしないけれど、何處か好い處へ異人館へ小間使にやつておけば、運が好ければ主人に氣に入つて、西洋へでも連れて行かないものとも限らない。そして眞面目に働きさへすれア、お金もうんと出來るし、見られない處を方々見てあるいて、お負に學問まで仕込んでくれるんだから難有いぢやないかね。」

叔母はそんな人の例を一つ二つ擧げた。歸朝してから横濱で女學校の教師に出世した女や、溜めて來た金を持つて田舍へ引込んで、好い養子を貰つた女などが其であつた。母親は然う云ふ氣にもなれなかつた。叔母が亭主と一緒に洋食を食つたり、洋酒を飮んだりするのすら、見てゐて不思議のやうであつた。

「まア、もう少し大きくでもなりますれア又……」と、重い口を利いた。

「義兄さんも思切つて、正ちやんをくれると好いんだがね。」叔母は色白の、體つきのすんなりした正雄に目を注いだ。

母親はこの子は手放したくなかつた。

「何なら定吉の方を貰つておもらひ申したいつて云ふことだで……。」と母親は、縮んだやうな顔をしながら、莨を吸着けて義妹に渡した。

お庄は傍に坐つて、二人の談に注意ぶかい耳を傾けてゐた。

十五

お庄は母親と、また湯島の下宿に寄食つてゐた。正雄は、横濱から來ると直に築地の方にゐる母方の叔父の家に引取られるし、妹は田舍で開業した當太郎の方へ連れられて行つた。次の弟は横濱の[illegible]種屋の方に殘して來た。

「男の子一人だけは、奈何にか物にしないと、ゝやア。」と、叔父は、世帶が壞れた家を支へかねて、金を拵へにと云つて、田舍へ逃出してから、下宿の方へ來てその姉に話した。

その叔父は疾くから村を出て、田舍の町や東京で、長いあひだ書生生活を續けて來た。勤めてゐた石川島の方の會社で、いくらか信用ができて株などに手を出してゐたが、直に白羽二重を卷きつけて、折鞄を提げ、爪皮のかゝつた日和下駄を穿いて、偶には下宿へも遣つて來るのを、お庄もちよい／＼見かけた。體つきのほつそりした此叔父と、顔の短い母親とが、お庄には同胞のやうにも思へなかつた。

「小崎の造敢はお前だに、皆を引取れば可い。」

「この節は大分株で儲けると云ふぢやないか。」下宿の主婦は叔父を揶揄ふやうに言つたが、叔父は取澄した風をして莨を喫しながら、たゞ笑つてゐた。

それから二三日經つてから、或晩方母親は正雄をつれて行つたが、一人で外へ出たことのないお庄も一緒に家を出た。

その頃引越した築地の家の様子は、お庄の目にも綺麗であつた。三味線や月琴が茶の室の次の間のところの壁にかゝつてゐる、そこから見える座敷の方には、暮に取りかへたばかりの疊が青々してゐた。その節附も町屋風で、新しい箪笥の上に、箱に入つた人形や羽子板や鏡臺が置いてあり、其前に裁物板や、敷紙などが置いてあつた。

田舍の町で、叔父が教師をしてゐた若い時分に、そこの商家から迎へたと云ふ妻は、輕氣な風をして大儲の氣受想な女であつた。

「私のところも、人る口には交際は多いもんですし、折角正ちやんをお引受け申しても、お世話が出來ることやら出來ぬことやら……。」と、叔母は茶箪笥のなかから、皮の干からびたやうな最中に、氣取つた箸をつけて出してくれた。

「それに女のお児だと、また始末が可うござんすがね、お庄ちやんも淺草の方へお出でなさるんだとかでね……。」

「どうでござんすか。彼處も出て來たきり、此が厭がるもんだで、一向音沙汰なしで……。」と、母親は四つになつた末の弟とお庄との間に坐つて、口不調法に挨拶してゐた。

母親は病身な正雄の小さい時分の事や、食事の細いこと、氣の弱いことなどを、弟嫁に話しかけてゐたが、子供を持つたことのない叔母には、その氣持の受取れやうがなかつた。お庄は骨張つたやうな其の大きな顔を、時々じろじろと眺めてゐた。

母親は四つになる末の子を負ひかけては、寄りつきかゝる正雄の顔を見てゐた。

やがてお庄は足の遲い母親を急立てるやうにして、道を歩いてゐた。

母親は下宿にゐても、何にも手に着かないことが多かつた。父親や、妹子を此處へあづけて田舍

へ立つてから、もう一月の餘にもなつた。

一それでも蔦さあは田舎で何をしてゐるだか、また方々酒でも飲んであるいて、此方のことは忘れてゐるづら。書けねえ手ぢやなし、お安さあも茫然してゐないで、手紙を一本本家の方へ出して見たら如何だえ。」

主婦はランプの蔭で、繹ものをしながら齲齒を氣にしてゐる母親を小突いた。お庄は火鉢の傍で、宵の口から主婦の肩をたゝいてゐた。お庄は時々疲れた手を休めて、臺所の方で惡戲をしながら、此方へ手招ぎしてゐる繁三の方を見てゐた。

繁三は河童のやうな目をきろ/\させながら、戸棚へ攀上つて、砂糖壺のなかへ手を突込んでゐた。

「あらアをばさん、繁ちやんが……。」お庄は蓮葉な大聲を出した。

繁三はどたんと戸棚から飛下りると、目を剝出して睨めた。

十六

田舎から上つて來た身内の人の口から父親の消息が此家へも傳はつて來た。

その人は母方の身續きで、下宿の主婦とは從兄弟同志であつた。村では村長をしてゐて、赤十字の大會などがあると花見がてらに必然出て來た。田舎で春から廢業してゐる菊太郎の評判などを、小父が長い胡麻鹽の顎鬚を仕扱きながら從姉に話して聞かせた。

「蔦さあも、油屋の帳場に脂下つてゐるさうだで、まア當分東京へは出て來まい。」小父は笑ひながら話した。

お庄は母親の蔭の方に坐つてゐて、柱も天井も黝んだ、その油屋と云ふ暗い大きな宿屋の荒れたさまを目に浮べた。そこは繭買などの來て泊るところで、養蠶期になるとその家でも蠶を飼つてゐた。主は寡婦で、父親は田舎にゐる時分からちよい/\其處へ入込んでゐた。お庄の家とは多少血も續いてゐた。

母親は齲齒の痛痒く腐つたやうな肉を吸ひながら、人事のやうに聞いてゐた。

「それ、そんなことだらうと思つたい。」と、主婦は吐出すやうな調子で言つた。

「あすこも近年は料理屋みたいな風になつてしまつて、ベンベコ三味線も鳴れア、白粉を塗つた女もあるせえ。」

「いつそもう、そこへ居坐つて出て來なけア可い。」母親も鼻で笑つた。

「出て來なけア如何するえ。稚いものがゐちや何事も出來まいが……。」

小父は主婦とお庄とをつれて、晩方から寄席へ行つて、歸りに近所の天麩羅屋で酒を飲んだ。

「小崎の姉さまも一時どうだね。」と、田舎の小父は大きな帽子のついた、帶[illegible]着ながら、古綿の入つた折鞄を箪笥の上に仕舞込んで、出違に母親に勸めた。

「私はへイ。」と、母親は二十日頃から結はない髪を氣にしながら言つた。

「お安さあは寄席どころではないぞえ。」と、主婦は古い小紋の羽織などを着込んで、紙入を帶の間へ押込みながら、出て行つた。

母親は東京へ來てから、まだ碌々寄席一つ覗いたことがなかつた。田舎にゐた時の方が、まだしも面白い目を見る機會があつた。大勢の出て行つたあと、火鉢の傍で、母親は主婦が手酷しく遣込めるやうに云つた一言を、何時までも考へてゐた。氣樂に寄席へでも行ける體に何時なれるかと思つた。

「私は東京へ來て、商業に取着くまでには、田町で大道に立つて、庖丁を賣つたことあるぞえ。」と、主婦の苦勞ばなしが、又想出された。

自分には足手纏ひの子供のある事や、長いあひだ亭主に虐げられて來たことが、熟々考へられた。

「あの人も、えらい出ずきだね。」

やがて女中と二人で、主婦の蔭口が始まつた。

皆の跫音が聞えた時、火鉢に倚りかゝつて、時々こくり〳〵と居睡をしてゐた母親は、周章てて目を擦つて仕事を取りあげた。

主婦は眠さうな母親の額に、直に目をつけた。

「この油の高いに、今迄かん〳〵火をつけて、そこに何をしてゐただえ。」

主婦は爪楊枝を銜へながら大聲に窘めた。

「私が石油くらゐは買ふで……。」と、母親は言返した。

主婦の聲は段々荒くなつた。母親も寢所へ入るまで理窟を言つた。

暗いところで小父の脱棄を疊んでゐながら、二人の言合を可恐しくも淺ましくも思つたお庄は、終に突伏して泣出した。

十七

お庄はごた〳〵した田舍の生活で、末の弟を見てゐた。弟はもう大分口が利けるやうになつてゐた。放抛らかされつけてゐるので、家のなかでも、朝から晩までころ〳〵獨で遊んでゐた。

「どうせもう其樣に澤山はいらないで、此子を早く手放してお仕舞ひやれと云ふに――。」と、主婦は氣を苛立たせたが、母親は思斷つて餘所へくれる氣にもなれなかつた。

弟は大勢子供の群れてゐる方へ、ちよこ〳〵と走つて行つた。仕舞つておいた簾が、又井戸端で洗はれるやうな時節で、裾を塞つておいても、お尻の寒いやうな事はなかつた。お庄は薄暗くなつた溝際に跪坐んで、海酸漿を鳴してゐた。

そこへ田舍から上野へ着いたばかりの父親が、日和下駄を穿いて、蝙蝠傘に包を持つて遣つて來た。

「庄そこにゐたか。」

父親はしや嗄れたやうな聲をかけて行つた。

お庄は猫脊の大きい父親の後姿を、ぼんやり見送つてゐた。

お庄が弟をつれて家へ入つて行くと、父親は才然と火鉢のところに坐つて、莨を喫してゐた。母親も傍に默つてゐた。お庄は父親と顏を合すのを避けるやうにして、臺所の方へ出て行つた。

「女房子を人の家へ打つつけておいて、田舍で今まで何をしてゐなさつただえ。」と、主婦は傍へ寄つて行くと、ニヤ〳〵笑ひながら言つた。

父親は何處かきよと〳〵したやうな調子で、低い聲で分疏をしてゐた。

「それなら其で、手紙の一本も寄越せア可いに……。」と、主婦は父親に厭味を言ふと、「ちつと彼方へ行つて、臺所の方でも見たら如何だえ。」と母親を逐立てた。

母親は始終不興氣な顏をして、父親が臺所へ出て聲をかけても、碌々返辭もしなかつた。

「酒を一本つけてくれ。私が買ふから。」と、暫く東京の酒に渇ゑてゐた父親は、暗いところで財布のなかから金を出して、戸棚の端の方においた。

「そんな金があるなら、子供に簪の一本も買つてやれば可い。」母親は見向きもしないで、二階から下つて來た膳の上のものの始末をしてゐた。

「それアまた其さ。來る早々からぶす〳〵いはないもんだ。」

お庄が弟を負つて、裏口から酒を買つて來

た頃には、二人の言合も大分募つてゐた。お庄は水口の框に後向に腰かけたまゝ、眠りかけた弟を膝の上に載せて、目から涙を入滲ませてゐた。

父親が自分でつけた酒をちび／＼遣りながら、荒い聲が少し靜まりかけると、主婦がまた母親を煽動けるやうにして、傍から口を添へた。

やがて父親は酒の雫を切ると、財布のなかから金を取出して、そこへ置いた。

「私はこれから、濱の方へ少し用事があるで：：持つて來た金は皆こゝへ置きますで：：。」

母親は鼻で笑つた。

「行けアまた何時來るか解らないで、子供を持つて行つて貰つたら可からづに。」

「子供をどうか連れて行つてお貰ひ申したいもんで：：。」と、母親も強いやうな調子で言つた。

父親の出て行くあとから、お庄は弟を負せられて、ひた／＼と尾いて行つた。

十八

父親は時々途に立停つては後を振顧つた。聖堂前の古い醫學校の黒門の脇にある長屋の出窓、坂の上の出張つた床屋の店頭、そんな處をのろ／＼歩いてゐる父親の姿が、狹い通を忙しく往來してゐる人や車の隙から見られた。濱へ行くといつて潔く飛出した父親の頭腦には何の成算もなかつた。

父親が立停ると、お庄もまた立停るやうにしては尾いて行つた。するうちに、父親の影が見えなくなつた。道の眞中へ出てみても、端の方へ寄つてみても見えなかつた。

「お前氣が弱くては駄目だで、どうでもお父さんに押着けて來るだぞえ。」

お庄は、主婦が帽子や袖無も持つて來て、吩咐けたことを憶出しながら、坂を降りて、暗い方へ曲つて行つた。おろ／＼してゐた母親の顏も目に浮んだ。

お庄は廣々した靜かな眼鏡橋の袂へ出て來た。水の黝んだ川岸や向の廣い通には淡い濛靄がかゝつて、蒼白い街燈の蔭に、車夫の暗い看板が幾個も竝んでゐた。お庄は橋を渡つて、廣場を見渡したが、父親の影は何處にも見えなかつた。お庄は柳の蔭に馬車の動いてゐる方へ出て行くと、暫くそこに立つて見てゐた。駐つた馬車からは、のろくさしたやうな人が降りたり乘つたりして、幾臺となく來ては大通の方へ出て行つた。

暗い明神坂を登る時分には、背で眠つた弟の重みで、手が痺れる樣であつた。

「それぢや又何處か其處いらを彷徨いてゐるら。」と、主婦は獨で呟いてゐたが、お庄は母親に弟を卸して貰ふと、帶を結直して、額の汗を拭き／＼、臺所の方へ行つて餉臺の前に坐つた。

お庄が或朝、新しいネルの單衣に、紅入メリンスの帶を締め、買立の下駄に白の木綿足袋を穿いて、細く折つた手拭や鼻紙などを懷に插み、兜町へ出てゐる父親の友達の内儀さんに連れられて、日本橋の方へやられた頃には、この稚い弟も父親に連れられて、田舍へ旅立つて行つた。父親はそれまでに、横濱と東京の間を幾度となく往つたり來たりした。弟の家の方を視たり、淺草の女の方に引つかゝつてゐたりした。終にまた子供を突着けられた。

お庄はまた弟をつれて、上野まで送らせられた。弟は衆の前にお辭儀をして、紐のついた草履を穿きながら、ちよこ／＼と下宿の石段を降りて行つた。

お庄は構内の隅の方の腰掛の上に子供をおろして、持つて來たビスケットなどを出して食べさせた。子供はそれを掴んだまゝ、賑かな四下

をきよろ〳〵眺めてゐた。

父親の顏は、長いあひだの放浪で、目も落窪み骨も立つてゐた。昨日淺草の方から、母親に搜出されて來たばかりで、懷のなかも淋しかつた。母親は、主婦に噬みつくやうに言はれて、切なげに子供を負つて馬車から降りると、二度も三度も店頭を往來して、その擧句に漸と入つて行つた。

父親はその時二階に寢てゐた。女の若い情人は、其頃勸工場のなかへ店を出してゐた。父親は山の入つた博多の帶から、煙草入を拔出して、マッチを擦つて傍で莨を喫つた。お庄は髭の生えた其顎の骨の動くさまや、瘦せた手容などを橫目に眺めてゐた。

汽車の窓から、弟は姉の方へ手を擴げては泣面をかいた。

お庄は父親に、巾着のなかから、少し許りの銀貨まで浚はれて、とぼ〳〵とステーションを出た。

十九

お庄は日本橋の方で、殆どその一夏を過した。

その家は奧深い塗屋造で、廣い座敷の方は始終薄暗いやうな間取であつたが、天井に厚硝子の嵌つた明取のある茶の室や、臺所、湯殿の方は雨の降る日も明るかつた。お庄はその茶の室の隅に据つた、釜の傍に番してゐる時が多かつた。

朝起きると、お庄は赤い襷をかけ、節のところの落窪むほどに肉づいた白い手を二の腕まで見せて塗壁を拭いたり、床の室の見事な卓や、袋棚の蒔繪の硯箱などに絹拭巾をかけたりした。主の寢る水淺黃色の縮緬の夜着や、郡内縞の蒲團を疊みなどした。

主人は六十近い老人で、禿けた頭顱の皮膚の汚い斑點が出來てをり、裸になると、曲つた脊骨や、尖つた腰骨のあたりの肉も薄いやうであつたが、此處に寢泊する夜は稀であつた。

お庄は時々、こんな電話を向島の方の妾宅から受取つて、それを奧へ取次ぐことがあつた。

「たゞ今お歸りですよ。」

内儀さんは脊の低い、品のない、五十四五の女で、良人に羽織を着せる時、丈一杯爪立する樣子を、お庄は後で思出笑をしては、年增の仲働に睨まれた。

客の多い家で、老主人が家にゐると、お庄は朝から茶を出したり、菓子を運ぶのに忙しかつた。店の方を切廻してゐる三十前後の若主人や、其内儀さんも、折々來ては老人の機嫌を取つてゐた。緣づいてゐる娘も二人ばかりあつた。

年取つた内儀さんは、能く獨で、市中や東京居周の佛寺を獵つてあるいた。嫁や娘達が、海邊や湯治場で、暑い夏を過すあひだ、内儀さんは質素な扮裝をして、川崎の大師や、羽田の稻荷へ出かけて行つた。此春に京都から越前まで廻つて秋はまた信濃の方へ出向く、などの計畫もあつた。その度に寺へ寄附する金の額も少くなかつた。お庄は時々、そんな内幕のことを、年增の女中から聽かされた。

内儀さんは、家にゐても夫婦一つの部屋で細々話をするやうなことは、滅多になかつた。悧發さうなその優しい目には、始終淚が入染んでゐるやうで、狹い額際も曇つてゐた。階上の物置や、暗い倉のなかに閉籠つて、數ある寢道具や衣類、こま〳〵した調度の類を、彼方へかへし此方へ返し、整理をしたり置場を換へて見たりしてゐた。着物のなかには、もう着られなくなつた、色氣や模樣の派手なものが澤山あつた。

「私が死ねば、此をお前さん達みんなに片身分にあげるんですよ。」

内儀さんは其の中に坐りながら言つた。
老人は、頭脳が朦となつて來ると、この内儀さんの顔へ、物を取つて投着けなどした。得難い瀬戸物が、柱に當つて碎けたり、大事な持物が、庭の隅へ投出されたりした。
お庄等は、この老人の給仕をしてゐるあひだに、袖で顔を掩うて、勝手の方へ逃出して來ることが屡あつた。内儀さんに附いて可いのか、老人に附いて可いのか、解らないやうな事も度度であつた。
夜は若いものが店の方から二三人來て泊つた。酒好きな車夫も來て、臺所の方に能くごろ寢をしてゐた。若い人達は時間が來ると入込んで來て、湯に入つてから、茶の室の次で雜誌を見たり、小説を讀んだりした。湯に入つてゐると牡丹色の仕扱を、手の屆かぬところへ隠されなどして、お庄は帶取裸のまゝ電燈の下に縮まつてゐた。

二十

此方の仲働が向島のと入替つた。その頃からお庄の心もいくらか自由になつた。向島の方のお鳥と云ふ女が、何か落度があつて暇を出される處を、慈悲のある内儀さんが、入替らせて本宅で使ふことにした。
「お前が暫く行つて、彼處を取締つておくんなさいよ。お絹には若いものは迚も使切れないから。」
此方の仲働は内儀さんから恁う言渡されたとき、奥から下つて來ると厭な顔をして、默つて火鉢の傍で莨ばかり喫してゐた。顔に蕎麥滓の多い女で、一度は亭主を持つたこともあると云ふ話であつた。腹には苦勞もありさうで、絶えず奥へ氣を配り、放心してゐるやうなことはなかつた。
お庄は目見えの時、内儀さんから此女の手に渡されて、二三日色々の事を敎はつた。お茶の運び工合から蒲團の直しやう、煙草盆の火の埋け方、取次の爲方、光澤拭巾のかけ方などを、少しシャ嗄れたやうな聲で舌速に言つて聽かせた。お庄が笑出すと、女はジ〱其顔を瞶めて、「いやだよ、お前さんは、眞面目に聞かないから。」と、煙管をポンと敲いた。お庄はこの「お前さん」などと言れるのが初めのうち強く耳に障つて、如何しても素直に返辭をする氣になれなかつた。そんな時にお庄は、低い鼻のあたりに皺を寄せて止度なく笑つた。一緒に膳に向ふ時、この女の汚らしい口容をみるのが厭な氣持で、白い頸巻をひら〱させて其處ゝを飛[illegible]いたり、食物を鹽梅したりする樣子も、如何かすると氣にかゝつてならなかつた。お庄は然う云ふ時にも、顔に袂を當がつて笑ふ癖があつた。
一緒に湯に入ると、女はお庄の肉着の好い體を眺めて、「わたしは一度もお庄ちやんのやうに肥つたことがなくて濟んだんだよ。」と、可羨しがつた。
お庄はまた、骨組の纖細なこの女の姿だけは好いと思つて眺めた。髮の癖のないのも取柄のやうに思へた。
「まア此方のお宅に辛抱してごらんなさい。此方も餘りパッパとする方ぢやないけれど、内儀さんが目をかけて使つて下さるからね。何處へ行つたつて、然う好い家と云ふのはないものですよ。」と、女はお庄がやゝ呢んだ時分に、寢所でしみ〲言つて聽かせた。
お庄は然うして奉公氣じみたことを考へるのが、厭なやうであつた。
女が包と行李とを蹴込に積んで、或晩方向島の方へ送られて行くと、間もなくお鳥がやつて來た。
お鳥は軀の小さい、顔の割に年を喰つた女であつたが、一目見た時から、何處か氣がおけ

なさうに思へた。

お鳥は來た晩から、洗ひ浚ひ身上ばなしを始めた。向島の妾宅のこと、是迄に渉りあるいた家のことなども、明ッ放しに話した。

お庄は時々この女に、用事を吩咐けるやうになつた。女は「さう」「さう」と云つて、小捷く働いたが、そゝくさと一働きすると、直に懈さうな風をしてべつたり坐つて、圓い目をハチ／＼させながら、何時までも話込んだ。この女が平氣で辯ることが、終には可恐しくなるやうなことがあつた。

お鳥は冷ッこい臺所の板敷に、脹ら脛のだぶだぶした脚を投出して、また淺草で關係してゐた情人のことを言ひだした。

「堅氣の家なんか眞實につまらない。奉公するならお茶屋よ。」

お鳥は溜息をついて、深い目色をした。

お庄も足にべとつく着物を捲しあげて、戸棚に凭れて、うつとりして居た。奧も臺所の方も、閑としてゐた。

二十一

水天宮の晩に、お鳥は奧の方へは下谷の叔母の家に行くと言つて、お庄に下駄と小遣とを借りて、裏口の方から出て行つた。この女は來た時から何も持つてゐなかつた。押入のなかに轉した風呂敷のなかに、寢衣と着換が二三枚に、白粉の壜があつた限で、晝間外へ出る時は傘までお庄のをさして行く位であつたが、金が一錢もなくても買食だけはせずに居られなかつた。お鳥と一緒にゐると、お庄は自分の心までが爛れて行く樣に思へた。

臺所ばかりを働いてゐる田舍丸出の越後女は、能く、お鳥に拭巾と雜巾とを混合にされたり、奧からの洗濯物のなかに汚い物のついた腰卷をつくねておかれたりするので、ぶつ／＼小言を言つた。

「お前が來てから、何だかそこいらが汚くなつたやうだよ。」と、内儀さんは時々出て來ては其處いらに目を配つた。

「私口を搜しに行くんですから、奧へは默つてゐて下さいね。何處か好い處があつたら、貴方も行かないこと。」お鳥は出て行く時お庄にも勸めた。

お庄は何とか默つてゐたが、此女の口を聞いてゐると、然うした方が、何だか安易なやうな氣もしてゐた。貰の澤山あるやうな處なら、自分の手一つで、母親一人くらゐは養つて行けさうにも思へた。

お庄は落着かないやうな心持で、勝手口の側の鐵の格の嵌つた出窓に凭れて路次のうちを眺めてゐた。するうちに外は段々暗くなつて來た。一日曇つてゐた空も到頭雨になりさうで、冷い風は向の家の埃ふかい廂間から動いて來た。

お庄はじれつたいやうな體を、窓から引込めて行くと、自分達の荷物や此家の我樂多の物置になつてゐる薄暗い部屋へ入つて、隅の方に出してある鏡立の前に跪坐んだ。ふと呼鈴が氣たゝましく耳に響いた。茶の室へ出て行くと、今店の方から來たばかりの小僧が一人、奧へ返辭もしないで、明るい電燈の下で、寢轉んで新聞を讀んでゐた。お婆は臺所で、夕飯の後始末をしてゐた。

「お前さん一寸行つてくれたつても可いぢやないの。」

お庄は小僧に言ひかけて、手で髮のあたりを撫でながら、奧の方へ行つた。奧は四五日甲高な老人の聲も聞えなかつた。内儀さんは、時々二階へあがつて、そこで一人隱れて冬物を縫つてゐるお針の傍へ行つたり、物置の方へ物を搜しに行つたりして、日を暮した。お鳥に聞き

れる色々の話に引寄せられてゐたお庄は、暫く此主人とも疎くなつたやうな氣がしてゐた。
内儀さんは樟腦の匂の染込んだやうな軟かい釋物を一枚出して、お庄に渡した。
「お前、旦那がお留守で、餘り閑なやうなら、些とこんなものでも釋いておくれ。」
お庄はそれを持つて引退つて來たが、今急に手を着ける氣もしなかつた。
水天宮へ出かけて行つた店の若い人達が、雨に降られてどか／＼と歸つて來た時分には、お庄もお鳥の歸りが待遠しいやうな氣がして來た。そして明の下で釋ものをしながら、心に色々のことを描いてゐた。
お鳥の歸つたのは、其翌朝であつた。
「どうも濟みません。」
お鳥は疲れたやうな顔をして、紅梅燒を一袋、袂の中から出すと、それを棚の上において、不安らしくお庄の顔を見た。お庄はまだ目蓋の腫れぼつたいやうな顔をして、寢道具をしまつた迹を掃いてゐた。お鳥は急いで襷をかけて、次の室へハタキをかけ始めた。

二十二

お庄は久振で湯島の方へ歸つて行つた。舊居た近所を通つて行くのは餘り好い氣持でもなかつたし、母親の顔を見るのも厭なやうな氣がして、お庄は日蔭もののやうに道の片側を歩いて行つた。昨夜お鳥の處へ此間の話の人に好い口があると云つて、淺草の方から葉書で知らせて來た。先方は食物屋で、家は小さいけれど、客種の好いと云ふことは前からもお鳥に聞されてゐた。それに忙しいには忙しいが藝者なども上つて、收入も多いと云ふことであつた。體が大きいから、年などは如何にも胡麻化せると云つて、お鳥は女文字の其の葉書を見せた。お庄は何だか擔がれでもするやうで、可怕かつたが、行つて見たいやうな心が切に動いた。お庄はもう半分、此處にゐる氣がしなかつた。
下宿へ入つて行くと、下の方には誰もゐなかつたが、見馴れぬ女中が、臺所の方から顔を出して胡散さうにお庄を眺めた。そこらはもう薄暗くなつてゐた。
母親は二階の空間で、物干から取込んだ蒲團の始末をしてゐた。窓際に差出てゐる碧梧の葉が黄色く蝕んで、庭續きの崖の方の木立に蜩が啼いてゐた。そこらが古臭く汚く見えた。お庄は自分の古巣へ落着いたやうな心持で、低い窓に腰かけてゐた。
「阿母さん、私お茶屋などへ行つちや可けなくて。」お庄は訊いた。
母親は畳んでゐた赤い四布蒲團をそこへ積みあげると、こつちを振顧つて、以前より一層肉のついたお庄の顔を眺めた。
「お茶屋つて如何なとこだか知らないが、堅氣のものはまア餘り行くところぢやあるまい。」
「ちやんとした家なら、行つたつて可いぢやないの。」
「さア、如何なものだかね、私らには一向解りもしないけれど……何處かそんな處でもあるだか。」母親は立つてゐながら言つた。
お庄はこの母親に言つて聞せても解らないやうな氣がして擂しかつた。
「お前さうして、そこへ行くと言ふだかい。」母親はマジ／＼娘の顔を見た。
「如何だか解りやしない。行つて見ないかと云ふ人があるの。」お庄は外の方を見てゐながら、氣疎いやうな返辭をした。
「誰からそんな事を言はれたか知らないけれど、まア餘り人の話にや乘らない方が可い。もしか間違でもあつて、後で親類に話の出來ないやうなことでもあつちや濟まないで。」と、母親は暗いやうな顔にニヤ／＼笑つて、

「その人は矢張彼處へ出入する人でもあるだか。」

「一所に働いてゐる人さ。その人も近いうちに彼處を出るでせうと思ふの。」

「ぢや、其人はお前より年とつた人づら。自分が出るでお前も一緒に引張つて行かづかと云ふ氣でもあるら。」

母親は蒲團の前に坐込んで莨を捻りながら、深く思入つてゐるやうであつた。夕榮の色が、横向に腰かけてゐるお庄の顏にもかゝつて來た。

「よくせき困つてくれば、時と場合で女郎さへする人もあるもんだで、身を落す日になれア、何處でもできるけれど、家ぢや田舍にちやんとした親類もあるこんだもんだで、あの人達に東京で何してゐると聞かれて、返辭の出來ないやうな妄なことも出來ないと云つたやうなもんせえ。彼處へ世話してくれた人にだつて、そんな事を言出せた義理ぢやないしするもんだで……。」

お庄は、重苦しい母親の調子が、息せはしいやうであつた。

やがて下から聲かけられて、母親が板戸を締めはじめると、お庄もむつと黴くさい部屋から脱けて、足元の暗い段梯子を降りて行つた。

二十三

「おや厭だぞえ、誰かと思つたらお庄かい。」

段梯子の下に突立つてゐながら、目の惡い主婦は、降りて來るお庄の姿を見あげて言つた。お庄は牡丹の模樣のある中形を着て、紅入友禪の帶などを締め、香水の匂をさせてゐた。揉揚の延びた額にも濃く白粉を塗つてゐた。

「お前今頃何しに來たえ。鹽梅でも惡いだか。」

主婦は帳場のところへ來てお辭儀をするお庄の滅切大人びたやうな樣子を見ながら訊いた。

お庄はそこにあつた團扇で、熱つた顏を煽ぎながら、疊に片手を突いて膝を崩してゐた。

「これがお茶屋に行かづかと言ひますが如何なもんでござんすら。」と母親が大分經つてから、おづ／＼言出したとき、主婦はお庄の顏を見てニヤリと笑つた。

「そろ／＼好い着物でも着たくなつて來たら、そして先ア何處だえ。」

「何だか淺草に口があるさうで……」

主婦は詳しくも聞かなかつた、そこへ客が入込んで來たりなどして、話がそれ限になつた。

お庄は臺所の隅の方で、また母親とこそ／＼立話をしてゐた。

九時頃にお庄は、通りの角まで母親に送られて歸つて行つた。

「それぢや世話する人にも濟まないやうだつたら、今居る家へ知れないやうに目見えだけでもして見るだか。」

母親は別れる時からも言つた。お庄は斷るのに造作はなかつたが、それ限にするのも飽足らなかつた。

歸つて行くと、奥はもう閴してゐた。茶の室と若い人達の寢る次の部屋との間の重い戸も締められて、心張棒がさゝれてあつた。お鳥は寢衣のまゝ起きて出て、私と戸を開けてくれた。

「私あの事どうしようか知ら。」

お庄はお鳥の寢所の傍にベツタリ坐つて、顏を抑へながら深い溜息を吐いた。

お鳥は亂次のない風をして、細い煙管に煙草を詰めると、マッチの火を擦りつけて、すぱ／＼喫みはじめた。

「どうでも貴方の好きなやうにすれば可いぢやありませんか。餘りお勸めしても惡いわ。」お鳥はお庄の顏をマジ／＼見てゐた。

「そこは眞實に堅い家なの。」

「それア堅い家でさね。だけど、どうせ客商

賣をしてるんですから、堅いと云つたつて、此處いらの堅いとはまた違つてますのさ。」お鳥は鼻にかゝつた聲で言つて澄してゐた。

お鳥は寢所へ入つてからも、自分の知つてゐる然うゆふ家の風を色々話して聞した。

二三日經つてから、お鳥が淺草の叔母の方へ歸つて行つた頃には、店の方から能く働く女か一人こゝへ廻されてゐた。方々ですれて來たお鳥の使ひにくい事が、その前から奥へも能く解つてゐた。店の荷造をする男と、一緒に仕舞湯へ入つてべちやくちやしながら、肌の綺麗な男の背を流したりしてゐるところを、臺所働に見られて、言ひつけられた、内儀さんはお鳥を呼びつけて、しね〳〵叱言を言つた。

「もう厭になつちやつた。どうせこんな處は腰かけなんだから、如何だつて介意やしない。」

お鳥は奥から出て來ると、太くさつたやうな口を利いて、茶の室にごろ〳〵してゐた。

お鳥は出て行くとき、荷部屋へ入つて、お庄と暫く話込んでゐた。それから借りた金なども綺麗に返して、包を一つ抱へて裏から脱けて行つた。

後で多勢でこの女の噂が始まつた。若い男達は、お庄らの氣附かぬことまで見てゐた。お庄も一緒になつて、時々切なげな笑方をした。

二十四

お庄の行つた家は、お鳥の言ふほど洒落てもゐなかつた。

お庄は家からかゝつた體裁に、お鳥から電話をかけて貰つて、或晩方日本橋の家を脱けて出た。其日は一日氣色の悪い日で、店から來た束髪の女とも餘り口を利かなかつた。お庄には若い夫婦の傍にゐつけて、理窟ッぽくなつてゐる此女の幅を利すほど、煮物や汁加減が巧いとは思へなかつた。學校出の御新造を笠に被て、お上品ぶるのも厭であつた。

その晩は、白地が目に立つほど涼しかつた。お庄は母親に頼んであるネルの縫直しがまだ出來てゐなかつたし、袷羽織の用意もなかつたので、洗濯してあつた、裄丈の短い絣の方を着て出かけて行つた。

馬車のなかは、水のやうな風がすい〳〵吹通つた。お庄は輕く胸をそゝられるやうであつた。

お庄は賑かな池の畔から公園の裾の方へ出ると、旋て家並のごちや〳〵した狹い通へ入つた。氷屋の簾、果屋の姿見、食物屋の窓の色硝子、幾個となく並んだ神燈の蔭からは、媚かしい女の姿などが見えて、濕つた暗い砂利の道を、人や俥が忙しく往來した、こゝはお庄の目にも昵みのない所でもなかつた。

お鳥のゐる家は直に知れた。大きい木戸から作庭の燈籠の灯影や、橋がかりになつた離室の見透されるやうな家は二軒とはなかつた。お庄は店頭の軒下に据ゑつけられた高い用水桶の片蔭から中を覗いて、其前を往つたり來たりしてゐたが、するうち下足番の若衆に頼んで、お鳥に外まで出て貰つた。やがてお鳥は下駄を突かけて料理場の脇の方から出て來た。

その家は仲見世寄りの靜かな町にあつた。お鳥は花屋敷前の暗い木立のなかを脱けて、露店の出てゐる通を突切ると、やがて淺黄色の旗の出てゐる、板塀圍の小體な家の前まで來てお庄を振顧つた。お庄は片側の方へ寄つて、遠くから入口の方を透視してゐた。

裏から入つて行くと、勝手口は電氣が薄暗かつた。内も閑としてゐて、蒞被の掘つた帳場の方の次の狹い部屋には、懶さうに坐つてゐる痩せた女の櫛卷姿が見えた。上に熊手のかゝつた帳場に、でツぷりした肌脫の老爺が、立て

た膝を兩手で抱へて、眠さうに倚りかゝつてゐた。

お島は女中を一人片蔭へ呼出すと、暗いところで立話をしはじめた。然うしてから外に立つてゐるお庄を呼込んだ。

「ちやこの人よ。どうぞ宜しくお願ひ申します。」お島は口輕にお庄を紹介すと、旋て歸つて行つた。

女中はお庄を[illegible]卷の女の方へつれて行つた、女は落着いだヒステリー性の力のない目でお庄をじろ／＼眺めたが、言ふことはお庄は能く聽取れなかつた。

お庄は[illegible]前の廊下へ出ると、そこから薄暗い硝子障子の嵌れた、だだッ廣い庭が、お庄の目にも安ッぽく見られた。ちぐはぐのやうな小室の澤山ある家造も、普請が粗雜であつた。お庄はビーヤ、サイダーの廣告がかゝつた、取着の廣い座敷へ連れられて行くと、そこに商人風の客が一組、ぐわ／＼煮立つ鷄鍋を眞中に置いて、酒を飲んでゐるのが目についた。お庄は入口の方に坐つて、少時ぼんやりしてゐた。

「貴方も來て手傳つて頂戴。」

女は骨盤の押開いたやうな腰つきをして、片隅に散らかつたものを忙しさうに纏めてゐた。

お庄は氣爽に返事をして、急いで傍へ寄つて行つた。

その晩から、お庄は樂に眠んだ。

二十五

正雄が或晩十時頃に、一の家を訪ねて行くと、お庄は牛欅のかゝつた双子の薄綿入などを着込んで、幾個も眞鍮の火鉢を持出して灰を振つてゐた。お庄が身元引受人に湯島の主婦を頼みに行つたとき、主婦はニヤ／＼笑つて、

「お前そんな事をしても可いだかい。自分の娘のことぢやないから、私はまア何とも言はないが、長く居るやうぢやダメだぞえ。」と、念を押しながら判を捺してくれた。

お庄は二日ばかりの目見えで、毎日の仕事も大略判つて來た。家の樣子や客の風も大抵呑込めた。何處の如何な家のものだか知れないやうな女連の中に交つて立働くのも厭なやうで、自分にもそれほど氣が進んでもゐなかつたが、日本橋の方へ歸つて、氣むづかしい老人夫婦ばかりの、陰氣な奧の方を勤めるのも張合がなかつた。

「今居る家は、[illegible]でも[illegible]つて不可いさうで……。」と、母親も傍から口を添へた。

お庄は此處へ書附を入れてから、もう二月になつた。

お庄は裏口の戸の外に待つてゐる正雄の姿を見ると、顏を紅くして傍へ寄つて行つたが、目に涙が入染んだ。明けると十四になる正雄の樣子は、暫くのまに滅切下町風になつてゐた。頭髮を短く刈込んだ顏も明るく、紺の縞の綿入に角帶をしめた體つきも暢びりしてゐた。

「何か用があつたの。」とお庄は何か詰りさうな弟の顏を見た。

「いゝえ。」正雄は頭を振つた。

「どうして此にゐることが解つたの。阿母さんに聞いて來たの。」

それ限で、二人は話すことも、想出せないやうな風で立つてゐた。

少時たつと、お庄は髮や襟などを直して、出直して來た。大きい素足に後齒の下駄を穿いて、意氣がつたやうな長い縞の前垂を蹴るやうにして戸外に歩出すと、やがて芝居や見世物のある通へ、弟を連出して來た。

見世物場はまだそれほど雜沓してゐなかつた。[illegible]も[illegible]らないで、ピンヘットを耳の處に挾んだやうな、[illegible]らしい男や、[illegible]足袋

を穿いて襷がけしたやうな女の往來してゐる中に、子供の手を引いた夫婦連や、白い巾を頸に巻いた女と一緒に歩いてゐる、金縁眼鏡の男の姿などが、ちらほら目についた。二人はその間をぶら〳〵と歩いてゐたが、弟は何處を見せても厭なやうな顔ばかりしてゐて、張合がなかつた。お庄は見世物小屋の木戸口へ行つて、帯のなかから巾着を取出しながら、弟を呼込まうとしたが、弟は矢張寄つて來なかつた。

「何か食べる方が可いの。」お庄は橋の手摺に倚りかゝつて、彼方を向いてゐる弟の傍へ寄添ひながら訊いたが、弟は矢張厭がつた。

「ぢや、何か欲しいものがあるなら然う言ひなさい。姉さんお鳥目があるのよ。」

「うゝん、お鳥目なんか使つちや不可い。」弟はニヤ〳〵笑つた。

二人は橋を渡つて木立の見える方へ入つて行つた。弟は姉と一緒に歩くのが厭なやうな風をして、先へずん〳〵歩いた。

別れる時、お庄は片蔭へ寄つて、巾着から銀貨を大略取出して渡した。

「姉さんも早くあの家を出るやうにしておくれ。」と、弟の言つたを時々思出しながら、お庄は裏通をすご〳〵と歸つて行つた。

二十六

歸つて行くと、内儀さんが帳場の方に頑張つてゐた。

内儀さんは上州邊の女で、田舎で藝妓をしてゐた折に、東京から出張つてゐた土木の請負師に連出されて、此方へ來てから深川の方に囲はれてゐた。この老爺と一緒になつたのは、其の男に放棄られてから、淺草邊をまごついてゐた折であつた。前の内儀さんを逐出すまでには、この女も多少の金をかけて引張つて來た老爺の手から、幾度となく逃げて行つた。今茲十三になる前妻の女の子は、お庄が此處に來ることになつてから、間もなく鳥越にゐる叔母の方へ預けられた。この継子を、内儀さんがその父親の前で打つたり毒突いたりしても、爺さんは見て見ない振をしてゐた。

「それア酷いことをするのよ。」と、女中達は蔭で顔を顰め合つた。

「あんなに窘るくらゐなら、餘所へくれた方が可いわ。」

「あの年をしてゐて、我子よりは内儀さんの方が可愛いなんて、お爺さんも随分だわね。」

蒼い顔をして、女中と一緒に、隅の方で飯を食つてゐる、其女の子の様子を見ると、お庄も厭な氣がした。「それでもお前達子供が可哀さうだと思つたもんで……。」と、いつか母親の言つた語を思出された。

「外聞が悪いから、好い加減にしときなよ。」と、爺さんは内儀さんの窘り方が酷しくなると、眠いやうな細い目容をして、重い體をのそ〳〵と表へ出て行つた。然うでもしなければ、此女の病氣が何處まで募るか解らなかつた。内儀さんは、請負師の妾をしてゐる頃から、劇しいヒステリーに陥つてゐたらしく思はれた。

「おい〳〵、家は忙しいんだよ、朝ツぱらから何處を遊んであるくんだ。」

隙のない目で、上つて來るお庄の顔を見て、内儀さんは怒鳴つた。その顔には毎時のやうに酒の氣もするやうであつた。何處かやんばらなやうな處のある内儀さんは、継子がゐなくなつてからは、時々劇しくお爺さんに喰つてかゝつた。喧嘩をすると、直に菰冠の呑口を抜いて、コップで冷酒をも呷る。

「どうも済みません。」

お庄は笑ひながら言つて、奥の方へ入つて行つた。

座敷の方では、赤いメリンスの腰巻を出して、

まだ雑巾がけをしてゐる女もあつた。並べた火鉢の側に寄つて、昨夜仲店で買つて來た櫛や簪の値の當ツこしてゐる連中もあつた。

「あれお前さんの弟……。」一人はお庄に係う言つて訊きかけた。

「え、さう。」お庄は頷いた。

「道理で似てゐると思つた。」

「同胞だつて似るものと決つてやしないわ。」

「當然さ。親子だつて似ないものもあるぢやないか。」

手々に下らなく笑つて、顏の話などをしはじめた。お庄は形の惡い鼻を氣にしながら、指頭が時々その方へ行つた。奥の小室では、お庄が出る前から飲みはじめて、後を引いてゐる組もあつた。都々逸の聲などが其方から聞えて、頻く手が鳴つた。誰かが、「ちよッ」と舌うちして、鼻唄を謳ひながら起つて行つた。お庄も寒い外の風に吹かれながら鼻頭を赤くして上つて來た客に聲かけて、垢染みた蒲團などを持出して行つた。

夜お庄は、弟から端書を受取つた。端書には、讀めないやうな生意氣なことが、拙い筆で書いてあつたが、茶屋奉公などしてゐる姉を怒つてる弟の心持は、お庄の胸に深く感ぜられた。

二十七

正月の十五日過に、お庄は肩にショールをかけ、銀杏返に白い鬢搔などをさして奥山で撮つた手札形の自分の寫眞と、主婦や母親、女中に半襟や櫛のやうなものを買つて、湯島の方へ訪れて來た。その頃湯島ではもう大根畠の方の下宿屋を引拂つてゐた。田舍で潰れた家を興して、醫師の玄關を張つてゐる菊太郎から、儉約すれば弟二人を學校へ出して行けるだけの金が、月々送られることになつてから、主婦は下宿を賣拂つて、その金の幾分で路次裏に一寸した二階家を買つて、そこへ引越してゐた。二階には極氣のおけない人を一人二人置いてあつた。

主婦のお元は、お庄の風を見て餘り悦ばなかつた。

お庄が半襟などを取出して、「阿母さんが色々お世話になりまして……。」と、ひねた挨拶振をすると、婆さんは紙に包んだその品を見もしないで、苦い顏をしてゐた。

「お前は、そして其家で何をしてゐるだい。矢張出てお客のお酌でもするだかえ。」

「え、時々……。」お庄はニヤ／＼しながら、「矢張ね、其をしないと怒る人があるものですから。」

「そんなことをしては不可いぞえ。碌なお客も上るまいに。金でもちつと溜つたと云ふだか。」

お庄は笑つてゐた。

「お定さあのとこへ時々送ると云ふ話だつたぢやないかえ。」

「それは然うなんですけれど、あゝしてをれば何だ彼だと云つてお小遣も入りますから……。」

「それぢやお前、初めの話と違ふぞえ。その位なら日本橋にゐた方が何しも優だ。續いて今までをれば可かつたに。」

お庄もそんなやうな氣がしてゐないこともなかつた。お西さま前後から暮へかけて、お庄は隨分働かされた。一日立詰で、夜も一時二時を過ぎなければ、火を落さないやうなこともあつた。脚も手も憊れ切つた體を、硬い蒲團に横へると、直にぐツすり寝込んだ。朝起きると又同じやうに、重い體を動かさなければならなかつた。お庄は婆さんの前に坐つてゐると、膝やお尻の、血肉が醜く肥つたことが情ないやうであつた。

「それに彼處いらは可恐しい風儀が好くないと

云ふぢやないかい。お前もそんな事をしてゐれア、一生頭があがらないぞえ。」
　お庄の耳には、根強いやうな婆さんの聲が、びし／＼響いた。お庄は聞いて聞かないやうな振をして、矢張笑つてゐた。そして時々涙の入染出る目角を、指頭で拭つてゐたが、終にそこを立つて暗い段梯子の方へ行つた。お庄は婆さんに何か言はれる度に、下宿の二階で見たことなどが直に頭に浮んだ。髯の薄い、脣の黒赭いやうなその顏が、見てゐられなくなつた。
「兄さんはお二階……。」お庄は落着かないやうな調子で訊いた。
　二階では、取着の明るい部屋で、紀が褞袍を着込んで、机に向つて本を見てゐた。
「御免なさい。」と云つて、お庄はそこへ上込んで行つた。
「誰が來てゐるのかと思つたらお庄か。」從兄は此方を向いて、長い煙管を取上げた。
　お庄は挨拶をすますと、窓のところへ寄つて來て、障子を開けて外を覗いた。そこは直女學校の教室になつてゐた。曇つたガラス窓からは、でこ／＼した束髮頭が幾個も見えた。お庄は珍しさうに覗込んでゐた。
「どうしたい。」從兄はお庄の風に目を瞬つてゐる。
「今下で、お婆さんに散々油を絞られましたよ。」
「お前のゐる處は何處だえ。」お庄はそこへ坐つて、煙管を取りあげた。
「何だ、お庄ちやんか。」と云つて、繁三も次の室から顏を出した。

二十八

　日の暮方まで、お庄はこゝに遊んでゐた。二階の連中と出しッこをして、菓子も水ものを買つて、それを食べながら、花を引いたり、燥いだ調子で話をしたりするうちに、夜寄席へ行く約束などが出來た。
「そんな事をしてゐても可いかえ。築地の小崎もお前のことを心配してゐたで、今夜にも行つて見た方が可くはないかえ。お前の風を見て、小崎が何と言ふだか。」
　婆さんは、飯も食はずにそは／＼してゐるお庄に小言を言つた。もうランプが點れてゐた。お庄は隅の方へ鏡を取出して大人ぶつた樣子をして髮の形などを直してゐた。
「今日でなくとも、明日と云ふ日もありますから……。」と、お庄は安火に入つて、此方を見てゐる紀の苦い顏を見ながら言つた。
「餘所へ出て働くといふのは辛いものだらう。」と、紀は傍から口を利いた。
「どうせそれは樂ぢやないわ。」と、お庄も鏡に映る自分の髮の形に見入りながら、氣無に言つた。
「今初めてそんなことが解つたかい。お前が獨で口を捲いて行つたぢやないかえ。」
　お庄も紀も默つてゐた。
「さあ、暗いものは遲くなると危いで、化粧など好い加減にして、早くお出で。」と、婆さんは遣瀨なく急立てた。
　築地の方へは、此家が下宿を引拂つた時分から、母親が引取られてゐた。弟も相變らず居た。そこへ行くには、叔母にも丁とした挨拶をしなければならず、自分の身の上の相談を持込むのも厭であつた。
「それぢや行つたら可いだらう。そして小崎の叔父に話をして、淺草なぞは早く足を洗つた方が可ささうだぜ。」紀も興のない顏をして言つた。
「え、それぢや行きます。」お庄は急に髮の道具を仕舞ひかけた。
「どうせお前達を見るのは、一番緣の近い小崎

の外にアないもんだで、行つたら能く話して見るが可い。彼處には子供がないで、其位のことをするが當然だ。」

するうち古茶箪笥の上の方に懸つてゐる時計が五時を打つた。お庄は何だか氣が進まなかつた。寄席へも行きそびれたやうな氣がして、心がいら／＼した。紀に話したいことも胸に閊へてゐるやうであつた。お庄は思の紀には、家もなくて方々まごついてゐるお庄の心持が、一番能く解つてゐるやうに思へた。

お庄は帶を締直すと、二階に忘れて來た手帕を捜しに上つた。二階には薄い夕方の光が立籠め、黒い障子ががた／＼鳴して、そこらの壁や机の上にまだ薄明がさしてゐた。お庄はその薄暗いなかに坐つて、暫く考へ込んでゐた。するうちに卒と起ちあがつて、段梯子を降りた。

お庄はやがて、堅く凍てついた溝板に、駒下駄の歯を鳴しながら、元氣よく路次を出て行つた。外は北風が烈しく吹きつけてゐた。十五日過の通には人の往來もなく、兩側の店も淋しかつた。砂埃に吹曝されてゐる、薄暗い寄席の看板などが目についた。

お庄はまた思断つて、獨で築地へ行く氣がしなかつた。それよりは、淺草の方へ歸つて行つた方が、まだしも氣樂なやうに思へた。そして時々立停つて思案してゐた。

淺草へ歸つたのは、八時頃であつた。お庄は馬車を降りると、何とはなし仲店の方へ入つて行つたが、暫く其處らを彷徨いてゐるうちに、四下が段々更けて來た。

お庄は其晩大道で、身上判斷などして貰つて、それからとぼ／＼と家の方へ歸つて行つた。身上判斷は思つてゐるほど惡い方でもなかつた。

二十九

築地へ行くと云つて出かけたきり行かなかつたことが後で知れてから、お庄は紀に電話で酷しく小言を喰つた。電話のかゝつて來た時、客が立込んでゐて、お庄は落着いて先の話を聴くことも出來なかつたが、衆が意のほか心配してゐることと、叔父や湯島のお婆さんの怒つてゐることだけは受取れた。お庄は何だか輕佻なことをしたやうに思つて、一日その事が氣に懸つた。

「それぢやこゝ二三日の中に必然行くね。度々そんなことをすると、終に誰も介意つてくれなくなつて了ふからね。」と、紀が念を押した詞も、お庄の頭腦をいら／＼させた。お庄は客のゐない部屋の壁のところに倚りかゝつて、腹立たしいやうな心持で、ぢつと考へ込んでゐた。築地へはこれ限行かないことにしようかとも思つた。一生誰の目にもかゝらないやうな處へ行つてしまひたいやうにも思つた。暮に田舍へ流れて行つたお鳥のことなどが想出された。

「もし工合が好いやうだつたら知らしてあげるから、事によつたらお前さんも來ると可いわ。少しは前借も出來ようと云ふんだから可いぢやないか。」

立つ少し前に、奥山で逢つた時、お鳥は恁う言つて、その土地の事を話して聞せた。それは茨城の方で、以前關係のあつた男が、そこで鰻屋の板前をしてゐることも打明けた。

「お前さんなんざまだ幼だから、行けばきつと流行りますよ。」お鳥は恁うも言つた。

お庄は可恐しいやうな心持で聴流してゐたが、時々然うした暗い方へ向いて行くやうな氣もしてゐた。

「お清さん／＼。」と、廊下で自分を呼んでゐる朋輩の鋭い聲がした。（お庄は此家ではお清と呼ばれてゐる。）お庄は聞いて聞えない風をして默つてゐた。するうちに手帕で目を拭いて、客の方へ出て行つた。

それから二三日して、お庄は菓子折などを持つて、築地の方を尋ねた。奥の方では叔母の爪彈の音などが聞えて、靜かな茶の室のランプの蔭に、母親が誰かの不斷着を縫つてゐた。お庄が私と其側へ寄つて行くと、母親は締のない口元に笑を見せて、娘の姿にじろ〳〵目をつけた。

「お前が此處へ來ると云つて、それ限來ないもんだで、如何したららかと言つて、叔父さんも豪い心配してゐなすつたに。」と言つて、今夜は同役のところへ碁を打ちに行つてゐることを話した。正雄も二三日前田舍から出て來た叔母の弟をつれて銀座の方を見に行つて、居なかつた。

お庄は、そこで二三服ふかしてから奥の方へ叔母に挨拶に行つた。寒がりの叔母は、炬燵のある四疊半に入込んで、三味線を弄りながら、低い聲で端唄を口吟んでゐたが、お庄の姿を見ると直に罷めた。

「おやお庄ちやんかい。暫くでしたね。」と云つて振顧つた。叔母はその晩氣が面白さうに見えた。そして、堅苦しく閾のところにお辭儀をしてゐるお庄に氣輕に話をしかけながら、茶の室へ出て來た。

暫くすると、叔母の弟が正雄と一緒に歸つて來た。色の白い目鼻立の優しい其弟は、いきなり其處にべたりと坐つて溜息を吐いた。

「あゝ、魂げてしまつた。實に剛氣なもんですね。」

「この人は銀座を見て驚いてゐるんだよ。」弟は笑出した。

部屋が急に陽氣になつた。お庄も晴々した顏をして、衆の話に調子を合した。

三十

「叔父さんは事によると今夜も歸つて來ないか知らん」叔母は柱時計を見あげながら氣にしだした。時計はもう十二時近くであつた。

「あの人の碁も、此頃は一向當にならないでね。」

茶簞笥から出した煎餅も、弟達が食盡し、茶も出殼になつてしまつた。母親は傍の話を聞きながら時々針を持つたまゝ前へ突伏さるやうになつては、又重い目蓋を開いて、機械的に手を動かした。お庄はその樣子を見て腹から笑出した。

「阿母さんは何ていふんでせうね。そんなに眠かつたら御免蒙つて寢んだら可いでせう。」

「お寢みなさい。どうせ今夜は歸らないでせうから。」叔母はその方を見ないやうにして言つた。

「いゝえ、眠つてやしません。」

可恐しい情張な母親は、居睡をしながら、一時二時まで手から仕事を放さない癖があつた。頭腦が惡いので、夜も深い睡に陷ちてしまふと云ふことがなかつた。

「僕は如何しても兄貴の世話に何ぞならないで、きつと獨で行り通してみせる。」と、昨日から方々東京を見てあるいて、頭腦が興奮してゐるので、口から泡を飛ばして自分の事ばかり饒つてゐた叔母の弟も、叔父の机のところから持つて來た、古い實業雜誌を見てゐながら、段々氣が重くなつて來た。この少年の家は、田舍の町で大きな雜貨店を出してゐた。お庄は時々その狂氣じみた調子に釣込まれながら、妙な男が來たものだと思つて綺麗な其顏を眺めてゐた。

「さあ、鶴二も正ちやんもお寢みなさいよ。」と、廣い座敷の方へ寢道具を取出して、そこへ二人を寢かせてしまふと、叔母は心配さうな顏をして、火鉢の傍へ寄つて來た。近所はもう寢靜つて、外は人通りも絕えてしまつた。靈岸島の方で、太い汽笛の聲などが聞えた。

叔母はその晩、しみ〴〵した調子で、家の生活向のことなどを、お庄母子に話して聞せた。今の會社で多少信用が出來るまで、二度も三度もまごついた事や、堅くやつて居りさへすれば、如何にか恁うにか取着いて行けさうな會社の方も、少し尻が暖まると、もう外の事に手を出して、事務がお留守になりさうだと云ふことなどを氣にしてゐた。叔父はその頃から株に手を出したり、礦山の賣買に口を利いて、方々飛歩いたりした。そして儲けた金で茶屋小屋入りをした。

「良人も彼處は、今年が丁度三年目だでね、どうか巧い工合に失敗らないでやつてくれゝば可いと思つてね……三年目には必然失敗るのが、是迄のあの人の癖だもんですからね。」

母親は性のないやうな指頭に、矢張針を放さなかつた。

「もう年が年だから、弟も些とは考へてゐますらい。」と、弟贔屓の母親は眠さうな顔をあげた。

「それに私も、此年になるまで子がないものですからね。」

「まだ無いと云ふ年でもござんすまいがね。弟だつて、四十には三年も間のあることだもんだから……。」

お庄は旋てこの叔母の傍へ寢かされた。叔母は床に就いてからも、折々寢返をうつて、表を通る俥や人の足音に耳を引立ててゐるやうであつた。するうちお庄はふか〴〵した蒲團に暖められて快い眠に沈んだ。

三十一

翌朝目がさめて見ると、叔父はまだ復つてゐなかつた。明方近くに、漸く寢入つたらしい叔母は、口と鼻の大きい、蒼白いその顔に、何處か苦惱の色を浮べて、優しい寢息をしながら、すや〳〵とねてゐた。頬骨が際立つて高く見えた。お庄は何だか淋しい顔だと思つて眺めてゐた。

お庄は假りて着て寢た叔母の單衣物をきちんと疊んで蒲團の傍におくと、そつと襖を開けて、暗い座敷から茶の室の方へ出た。臺所では、母親がもう働いてゐた。七輪に火も興りかけてゐたし、鐵瓶にも湯を沸す仕掛がしてあつた。お庄も襷がけになつて、長火鉢の掃除をしたり茶簞笥に雜巾をかけたりした。

そこらが一片着き片着いて了ふと、衆は火鉢の傍へ寄つて、母親が汲んで出す朝茶に咽喉を潤した。鶴二も正雄も、もう朝飯の支度の出來た餉臺の側に新聞を擴げて、叔母の起きて出るのを待つてゐた。

するうちに座敷の方へ日がさして、朝の氣分が漸く惰けて來た。東京地圖を疊んだり擴げたりして、今日見て歩くところを目算立してゐた鶴二は、氣がいら〳〵して來たやうに懷中時計を見ては、頻に待遠しがつてゐた。母親も茶碗を手にしながら欠をしだした。お庄は二人に飯を食べさしてから、正雄に小遣を少し持たして鶴二と一緒に出してやつた。正雄は暮から學校の方も休してゐた。

「頭腦の惡いものは、強ひて學問などさして苦しますより、寧そ商賣を覺えさすか職人にでもした方が早道だそうでね。」と母親は叔父の言つたことをお庄に話した。

「孰にしても、叔父さんが今に資本を卸して、店を出さしてやるといふこんだから、何が正雄の得手だか、それが決ると口を見つけて、直ぐ其方へ行くことになつてゐるだけれどね……。」

「正ちやんは何が好いていふんです。」

「それが自分にも解らないさうで……。」母親は茶の湯氣で逆上目を冷してゐた。

叔母が起きて來て、三人で飯を濟しても未だ

叔父は歸つて來なかつた。叔母は出勤の時間を氣にしながら、始終表の方へ耳を引立ててゐた。額に淡く白粉などを塗つて、髪も綺麗に撫でつけ、神棚に榊をあげたり、座敷の薄端の花活に花を活けかへなどした。お庄はそんな手傳をしながら、晝頃までずる〳〵に居た。

叔父は三時頃に漸と歸つて來た。叔母は待ち憊れて安火に入つて好きな講釋本を讀んでゐたし、お庄は歸らう〳〵と思ひながら、もう外へ出るのが臆劫になつて、暖かい日のあたる縁側で、雲脂の多い母親の髪を釋いて梳いてやつてゐた。

叔父は何處か酒の氣もあるやうであつた。細い首に襟卷を卷いて、角帶の下から重い金時計を垂下げ、何事もなささうな顏をして入つて來た。

「叔父さんの棊は大變長いつて、今も然う言つてゐたところだに。」と母親は笑ひながらその方を振顧つた。

叔父は默つて火鉢の傍に坐ると、赤く充血したやうな目をして、そこにあつた新聞を長い膝の上で擴けて見てゐたが、奥で叔母に床を延べさせて大欠をしながら寢てしまつた。

「お庄ちやんも昨宵から來て待つてゐますのに……。」と、叔母は言ひかけたが、叔父は深く氣にも留めなかつた。

お庄は座敷で叔父の脱棄を疊みながら今日も夜まで引懸つてゐるのかと思つた。叔母は簞笥の上に置いた紙入のなかを檢べなどしてゐた。

夜になつても、叔父の目は覺めさうにもなかつた。

三十二

晩飯の時、叔母は叔父の好きな取つておきの干物などを炙り、酒も好いほど銚子に移して銅壺に浸けて、自身寢室へ行つて二度も枕頭で聲をかけて見たが、叔父は起きても來なかつた。ランプに火を點けてお庄が呼起しに行くと、叔父は顎の骨をガク〳〵動かして、細長い筋張つた手を蒲團の外へ延して、ぐつたり寢込んでゐた。お庄は、「厭な叔父さんね。」とげら〳〵笑ひながら出て來た。

「あんなに疲れるまで遊んであるいて、體に障らにや可いが……。」

叔母は拍子ぬけがして、自分で猪口に二三杯酒を注いで飮んだ。叔母と叔父とは、年がそんなに違つてゐなかつた。

お庄は叔父の寢相を眞似をしながら、「どうすればあんなに正體なくなるんでせう。」といつてまだ笑つてゐた。

飯を濟したところへ、小原と云ふ會社の男が遊びに來た。三十少し出たくらゐの、色の蒼白い、敏捷さうな目をした小柄の男で、給仕から仕上げたのだと云ふことを、お庄は後で聞いた。

「小崎さん今日は見えませんでしたね。」と小原は叔母が火を入れて出す手炙の側へ、お庄が奥から持つて來た座蒲團を敷いて、小綺麗な指頭で雨切の短く切つたのを、象牙のパイプに嵌めて喫みはじめた。お庄は古こびれたやうな其の顏を横から見ながら、時々傍を向いて何やら思出笑をしてゐた。するうちに叔母に睨まれて奥の方へ逃込んで行つた。

小原は袱紗に包んだ紙入のなかから、女持の金時計を一つ鎖ごと取出して、ランプの心を搔立て、鎖の目方を引いたり型の說明をしたりして叔母に勸めてゐた。お庄も傍へ行つて見た。その時計は同じ會社の上役の某と云ふ人の細君の持物であつた。その女が花に負けて、一時の融通に質屋へ預けてあつたのを、今度厭氣がさして、質の直で賣るのだと云ふことを、小原は繰返して、出所の正しいことを證明し

た。

　叔母は散々弄りまはした果に、氣乘のしない顔をして男の手へ品物を返した。

「また餘所へお賣りになればつたつて、決して御損の行く品物ぢやありません。」小原は傍に手を突いて覗いてゐるお庄と叔母との顔を七分三分に見比べながら言立てた。お庄はまた顔に袖を當てて笑出した。

「いや眞實に。」と、その男も笑出した。そして一順人々の手を經廻つて來た時計を、私と懐へ仕舞ひこんだ。

　やがてランプの釣手を掛けかへて、此男と叔母と母親とで、花が始まつた。

「貴方もお入りなさいな。」と、お庄も仲間に引入れられた。お庄は身幅の狭い着物の膝を搔合せながら、目にちら／＼する花札を手にした。

　小僧は後の方で今日の日記を小さい手帳に書きつけてゐた。

　叔父が奥から、のそりと起出して來た頃には、花も大分進んでゐた。

　叔父はお庄の背後の方に坐込むと、時計を見あげて險い欠をしてゐた。時計はもう九時を過ぎてゐた。

「そんな手で出るといふのがあるものか、お庄は花を知らないかい。」叔父はお庄の肩越に覗込んで、煙管を咬へながら一勝負後見した。

　やがて叔父が褞袍を羽織つて、連中の間へ割込むと、お庄は席をはづれて、酒の燗をしたり、弟と二人で寒い通へ衆の食べる物を誂へに走つたりした。

　花札の音が夜遲くまで、籠つた部屋に響いた。

三十三

　去年薬くさい日本橋で過した初夏を、お庄は今年築地の家で迎へた。淺草から荷物を引揚げた來た頃から見ると、叔父の稼は一層忙しくなつてゐたし、家も景氣づいてゐたのだ、お庄も叔父が見立ててくれた新しい浴衣などを着せられて、夕方化粧をして、叔母と一緒に鐵砲洲の稲荷の縁日などへ出かけた。

　叔母は何處へ行つても、氣の浮立つといふやうなことは無かつた。好きな芝居を見に行つても、始終家のことを氣にかけてゐた。お庄は倹約家の叔母が、好きな狂言があるとわざ／＼横濱まで出向いてまで見に行くのを不思議に思つた。度重なると叔母は袋へ食物などを仕入れて行つてお庄と二人で大入場で濟して來ることもあつた。

　家にゐると、仕立ものをするか、三味線を彈くかして、漸と日を暮したが、然うしてゐても矢張心が淋しさうであつた。

「私は子がないで眞實につまらない。」お庄と二人で裁物板に坐つてゐる時、叔母は氣が鬱いで來るとしみ／＼言出した。

「お庄ちやんを貰つて養子でもしようかね。」

　叔母は時々そんな事も考へた。そして親身になつて着物の裁方や縫方を教へた。少しは縫道が明いてゐるのだからといつて、三味線も教へてくれた。お庄は體の大きい叔母と膝を突合して、湯島の稽古屋で囀つたことのある夕立の雨や春景色などを時々一緒に謳つた。叔母の知つてゐる端唄なども教はつたが、聲がそんなものには太過ぎたし、手も模かに動く方ではなかつたので、自分でも氣がはずまなかつた。

「わたしは駄目ですよ。」と、お庄は叔母が三味線を取出すと、次の室へ逃げて行つた。叔母は田舎風の節廻しで、獨で謳つてゐた。

　叔母はお庄の欲しがるやうな大きな人形を買つて來て、それに好みの衣裳を縫つて着せなどした。向の子供を呼込んで、玩具を買つて懐かしたり芝居の眞似をさして可笑しがつたりしてゐたが、曖昧なほどませたその子供は、お庄

に馴染んで、夜も一緒に抱かれて寝た。お庄は子供を負つて日に幾度となく自分の家と向の家とを往復した。
　金毘羅で講元をしてゐた大きな無盡の掛金を持つて、お庄は取纏る此子供を負ひながら、夕方から出かけて行つた、こゝから金毘羅までは可也の道程であつた。お庄は鐵道馬車で行ける處まで乘つて、それからえツちらおツちら歩いて行つた。その晩は銀座の地藏の縁日であつた。お庄は歸りに其方へ廻つて、人込のなかを子供を負つたり歩かせたりして彷徨いてゐた。土の臭と油煙と人瘟氣とで、呼吸のつまりさうな通をり〳〵涼しい風が流れた。お庄は背や股のあたりに、びつしより汗を搔きながら、時々蓄音機の前や、風鈴屋の前で足を休めて、背で眠りかける子供を搖起した。汚い三尺に草履を突かけた職人などが、幾度となくお庄の顏を覗いて行つた。「こんなに若くて子持かい。」などと大聲に言つて、後から押して來る連中もあつた。
　歸つて子供を卸してから、お庄は袂のなかに惡戲されたことに漸と氣がついた。
　翌日お庄は、涼しい朝のうちに、水口の外へ盥を持出して、外の浴衣と一緒に昨夜の汚れもの洗濯をしてゐた。手拭を姉さん冠りにして着物を膝までまくつて、水を取替へ〳〵漱いでゐた。そこへ腹掛に半纏を着込んだ十三四の子供が、封書のやうなものを持つて來た。そして、「…公が、一寸これを見て下さいツて。」と言つてお庄に手渡した。
「變な小僧さんが、こんなものをくれましたよ。」とお庄は前垂で手を拭き〳〵上へあがつて、叔父の前へ差出した。そして其小僧の樣子をしながら、笑出した。封書のなかには、汚い墨で妙なことが書いてあつた。叔父は嫣然ともしないで、袋ごと丸めてそこへ棄てた。
　お庄は赧い顏をして、また水口へ降りて行つた。胸が暫くどき〳〵してゐた。

三十四

　燥ぎ切つた廂にぱち〳〵と音がして、二時頃雨が降つて來た。その音にお庄は目をさまして、急いで高い物干竿に懸つてゐた洗濯物を取入れた。中にはまだ濕々してゐるのもあつた。
　お庄はそれを緣側の方へ取入れてから、障子に懈い體を凭せて、外の方を眺めてゐた。水沫と一緒に冷い風が、熱つた顏や手足に心持よく當つて、土の臭が強く鼻に通つた。お庄は遲い晝飯がすむと間もなく、四疊半の方で針を持ちながら居睡をしてゐた。
　座敷の方では、暑さに弱い叔母が長い廣東[illegible]をしながら、新聞と團扇とを持つたまゝ午睡をしてゐた。叔母は夏に入つてから、手足に多少水氣を有つた氣味で、肥つた體が、懈かつた。飯も茶をかけて、漸と流込んでゐるくらゐで、其方へ行つてはばツたり、此方へ來てはばツたり仆れてゐた。それに下の方の病氣などがあつて、日本橋の婦人科の病院に通ひはじめてから、もう二週間の餘にもなつてゐた。神經も過敏になつて、一寸した新聞の三面記事にも酷く氣を惱ました。人殺し、夫婦別れ、亭主の發狂ひと云ふやうなものを讀むと、「厭なことだね。」と云つて〳〵顏を顰めてゐた。
　三四日叔父がまた何處かに引かゝつてゐた。晩に家で酒を飲んでゐると、向島の社長の家から電話がかゝつて來たと云つて、酒屋の小僧が取次いでくれた。お庄がその酒屋へ行つて聞取つてみると、社長の夫人が例の賭場を開いてゐるのだと云ふことが、直に解つた。こんな連中は用心深い屋敷の奧の室へ立籠つて、可恐しい大きな花を引くと云ふことをお庄も叔母から聞いて知つてゐた。その見張には巡査が傭はれ

ると云ふことも強ち譃ではないらしかつた。
　叔父は着物を着換へると俥に來つて急いで出かけて行つたが、其れ限家へ歸つて來なかつた。向島へ聞合しても、社へ問合しても、叔父のその後の居所が解らなかつた。
「あの晩の電話だつて、どこから掛つて來たのだか解りやしない、お庄ちやん此間の紙入を貰つて、それで叔父さんと共謀になつてゐやしませんか。」猜疑深い叔母は淋しい顔にヒステリー性の笑を洩した。
　お庄は呆れた顏をしてゐた。然うしてから笑出した。
「然うでせう。」叔母は火鉢の緣を拭きながら言つた。
「私そんな事しやしませんよ。あの時はもう確に社長さんのお宅だつたんですもの。」お庄は眞顏になつた。
「それぢや然うかも知れない。」叔母は苦笑した。
　それからお庄は、また方々電話で聞合した。近い處は步いて尋ねて見た、終には洲崎の引手茶屋へ問合してみると、そこでは返事が少し曖昧であつた。お庄はそれから叔母に相談して、俥でそこまで出かけて行つた。其頃會社の方では叔父がゐなければ解らないやうな用事が出來てゐた。
　お庄を載せた俥は、段々明るい通を離れて暗いしつとりした町へ入つて行つた。舫や材木のぎつしり詰つた黒い堀割の水に架つた小橋を幾個となく渡ると、其處にまた賑かな一區劃があつた。川縁の柳の蔭には、俥屋の看板が幾個となく見えて、片側には食物屋がぎつしり並んでゐた。
　廣々した廓内はシンとしてゐた。じめ〳〵した汐風に、尺八の音の顫へが夢のやうに通つて來て、兩側の柳や櫻の下の暗い蔭から、行燈の出た低い軒のなかに人の動いてゐるさまが見透された。

三十五

　お庄は芝居の書割のなかに誘入れられたやうな心持で、走る俥の上にぢつと坐つて居られなくなつた。ふは〳〵するやうな胸の血が輕く躍つてゐた。
　叔父が行きつけの福本と云ふ茶屋は、軒並では比較的大きくて綺麗な方であつた。お庄は其の少し手前の處で俥を降りて、それから薄明るい中へ入つて行つた。端の方に坐つた二十三四の色の淺黑い女が、酸漿を鳴しながら、膝を崩して坐つてゐたので、お庄は私と其傍へ行つて聞いてみた。
「今ちよつと電話で伺つたんですがね、こちらに小崎と云ふ人が來てをりませんですか。」
　女は輕く頷いてみせて、「石川島の小崎さんでせう、それならば、もう少し前にお連の方と御一緒にお歸りになりましてすよ。」
「さうですか。」と、お庄は考へてゐた。
「まア お上んなさいまし。」長火鉢の方に坐つてゐた四十四五の、是も色の黑い女が奧から聲かけた。
「小崎さんは、彼此もうお宅へお着きの時分でございますよ。」
　お庄は何だか譃のやうな氣がした。
「急に用事が出來たものですからね、今夜も歸らないやうだと家で大變困るんです。」
　内儀さんは其切外の方へ氣を奪られてゐた。若い女も酸漿を鳴しはじめた。お庄は叔母から、叔父の上る樓まで行つて突留めなければ駄目だと言はれたことを憶出して、暫く押問答してゐた。
「それぢや念晴しに行つてごらんなさいまし、御案内しますから。」と女は笑ひながら言出し

た。
「それが可いでせうよ。花魁の部屋も些と見てお置きなさいまし。」内儀さんも言つた。
お庄は店頭へ出してくれた出花も飲まずに又俥に乘つた。
家へ歸ると、叔父はもう着いてゐた、奧の四疊半で、一揉着した後で、叔父の羽織がくしやくしやになつて隅の方に束ねてあつた。叔母は赤い目縁をして、お庄が上つて行つても、口も利かなかつた。其晩叔父は按摩などを取つて、宵のうちから寢床へ入つた。お庄等も、早く戸締をして寢かされた。
その翌日の今朝、叔父は早めに社の方へ出て行つた。朝飯の時、お庄が洲崎へ迎に行つた話が初めて出て、衆は大笑ひした。
叔父が出て行くと、叔母はまたせツせと體を動かしてゐたが、長く續かなかつた。涼しい處へ枕を移しては、寢臥つてゐた。
お庄は目につかぬほどの石炭の滓のついた、白い洗濯物に霧を吐きかけては、皺を熨しはじめた。雨は直に霽つて、また暑い日が簾に射して來た。
「お庄ちやん、私氷が飲みたいがね。」と、叔母は傍から唸つた。
お庄は洗濯ものに押をしておいて、それから近所の氷屋へ走つた。
氷が來た時分に、表から風の吹通す茶の室の入口の、簾屏風の蔭に眠てゐた正雄も、漸と目を覺しかけて來た。正雄はその頃、叔父の知つてゐる八重洲河岸の洋服屋へ行つてゐた。東京で一番古い其洋服屋は、外國へ行つて來た最初の職人であつた。お庄は外から歸りがけに、正體なく寢込んでゐる弟の二の腕に彫りかけた入墨のあるのに目を着けた。
「正ちやんは大變なことをしてゐますよ。」お庄が叔母に言付けると、叔母も吃驚して出て來て見た。弟の腕には、牡丹のやうな花が、碧黑く墨を入れられてあつた。
「誰にそんなことをされたんです。こんなもの早く取つてお仕舞ひなさい。正ちやんは自分の體を何と思つてゐるの。」と、お庄は叔母と一緒になつて小言を言つた。
夕方に弟はすご〳〵歸つて行つた。お庄は又釜の下へ火を焚きつけて、行水の湯を沸かしにかゝつた。

三十六

少し涼氣が立つてから、叔母が上州の温泉へ行つた留守に、暫く田舎へ行つてゐた母親がまた戻つて來て、お庄と一緒に留守をすることになつた。夏の中頃に年取つた伯母の老病を見舞ひに行つた母親は、その頃までも伯母の傍に附いてゐた。伯母の病氣は長い間の脊髓やリウマチでこの幾年といふもの床に就きづめであつた。周圍の人達も介抱に倦んで病人は自分の業を果敢んだ。何時死ぬか解らない其病人の臭い寢所の側に、母親も際限なく附いてゐられなかつた。加之久しく東京で母子ともまごついてゐる母親は、村の表通を晴れて通ることすら出來なかつた。身裝が見すぼらしいので、久振で墓參をするにも、窃と裏山の裾を傳つて行かなければならなかつた。母親は如何なことをしても、賑々した東京の方が矢張住み好いと思つた。
母親が歸つて來ると、父親の近頃の樣子も略解つた。父親は在家の方の家の世話をしたり、町で長く公立の病院長をしてゐて、金を拵へて村へ引込んでから、間もなく腐骨症の胴を切つて死んだ親類の、妾と、獨取殘された其の祖母との家を見たりして日を暮してゐた。田舎で見聞して來た厭な出來事を、母親から話を聞されると、お庄は十一の年に出たばかりの自分の家

や周圍の暗い記憶が、また胸に浮んだ。
「あのお祖母さんも、若い時分に何處のものか知れない庭男と私通いて院長の御父さん……つまりお祖母さんの添合に髮を切られた騷もあつたでね。その庭男が癩病筋だつたと云ふこんで、院長の脚の病氣も何だか知れやしないて風評をする人もあるさうで……。」と、母親は歸つた晩に、弟夫婦やお庄の前で話した。
「そんな莫迦なことがあるもんで。」と、叔父は笑つた。
「さうすれば、院長の祖母さん處へ入浸つてゐる義兄さんなぞも危い譯ぢやないか。」
「それだで私も氣味が惡くて、歸つてゐるうちに一度も彼の人と行逢はずしまつたに。」と母親は其のやうな其婆さんの處へ浸つてゐる良人の事を惡く言立てた。
お庄は父親が、何時のまに其のお婆さんと其樣な關係になつたものかと、恥ぢもし呆れもした。
「お庄さ、野口屋で貰ひたいなどと云ふ話もあつたけれども、彼處へくれる位なら、まだ遣る處もあらうと思つてね。」と、母親はお庄の顏をまじ／＼見ながら言出した。その家は、村で呉服物などを商ふ家だと云ふことを、お庄も思出した。お庄は自分の帶などを買ふ時に、その店から板に卷いたなりの長い友禪片などを、其處の亭主が擔込んで來て、納戸で母親が彼此と柄を見立ててゐた事などを想出すと、ばかばかしいやうな氣がした。
「あすこも近頃は身上を作つたさうで、良人からお庄をくれてやらうかなんて言つて寄越しましたけれど、私は返事もしましねえ。」母親が父親の事を怒つてゐる風がお庄にも可笑しく思はれた。
「お庄はまた會社の方で、くれろと云ふものもあるて。少し裁縫でも上手になつたら、私が東京で片附ける。」と、叔父は自分の目算を話した。
お庄の縁談は、其頃も無いことではなかつた。小原と云ふ男なども、その肝煎の一人であつた。お庄を見に、小原と一緒に花など引きに來る男も一人二人あつた。
叔母が湯治に行く時、叔父も湯治場迄送つて行つて二三日逗留した。
叔母が居なくなると、其日々々の經營を、お庄は叔父から委されることになつた。
お庄は長火鉢のところに坐つて、世帶女のやうな氣取で、時々小遣帳を攤げて拙い字で色々の出錢を書きつけた。

三十七

叔母は荒れた秋田の湯治場に、長く獨で留まつてゐられなかつた。宿は滅切閑になつて、廣くて見晴の好い部屋が幾個も空いてゐた。經費も何程もかゝらなかつたので、叔父はその一つに病氣のある身體を入れておいて歸つたのであつたが、叔母はそこが寂しいと云つて、端書で零して來た、その度に家の事を氣にかけてあつた。戸締や火の元の用心、毎日の小遣の事などが必然書いてあつた。
「こんな位なら、湯治に行つたつて效驗がありやしないな。」と云つて、叔父は笑つてゐたが、するうちに叔母は二十日も居ないで歸つて來た。
叔父は留守の間も能く家を明けた。時とすると五六日も家へ寄着かないことがあつた。馴染の女を落籍すとか、落籍して圍つてあるとか云ふ風評が、お庄等の耳へも傳はつた。假にしても叔父が女に夢中になつてゐることは確であつた。母親が竊と小原に樣子を聞いてみると、小賢しい小原はえへいら笑ばかりしてゐて容易に話さなかつた。
「どんな女でごさんすかねえ。」母親は女のこと

を切に聞きたがつた。

「なに、女はそれほど好かありませんよ。けどなか〳〵如才のない女です。まア手取でせう。小崎さんも大分使つたでせう。」

叔母に隱して、叔父が無理算段をしては入揚げてゐることが、この男の話でも解つた。叔父の持株で、近頃小原の手で、他へ讓渡された口の幾個もあることも、その口から洩れた。其なかで女の身に着くものも少くなかつた。お庄は話を聞いただけでも惜しいと思つた。此處へ來てからお庄はまだ是と云つて、纏つて叔父に拵へて貰つたやうな物もなかつた。

「お此さんも餘り家を約めるもんだで、反つて大きい金が外へ出るらね。」と母親は後で弟嫁のことを非しはじめた。母親はお庄が叔母から讓受けた小袖の薄いだやうな處に、丹精して色紙を當てながら、ちよく〳〵着の羽織に縫直す見積をしてゐた。お庄はその柄を、田舍くさいと思つて眺めてゐた。

「お前達の御父さんが、親讓りの身上を飲潰したことを考へれア、叔父さんのは自分で取つて使ふのだで、まア〳〵可いとしておかにやならん。」母親は恁うも言つた。

また母親の長たらしい愚癡が始まつた。二人は色紙ものを弄りながら何時までも目が冴えてゐた。腹がすいて口が水ッぽくなつて來ると、お庄は晝間仕舞つておいた、蒸した新芋の冷いのを盆ごと茶箪笥から取出して來て、又茶を煎れかへ、などした、もうお終ものの枝豆なども持つて來た。

叔父はその晩も歸つて來なかつた。お庄は汚れた茶道具や、食殘しの芋を流しへ出しておいて、それから寢しなに、戸棚のなかから醋を茶碗に汲んで、暗いところで顏を顰めながら飲んだ。

刳盆や絲卷の様な土産物を、こて〳〵持込んで、湯治から歸つて來た叔母は、行つた時から見ると、血色が多少好くなつてゐた。體の肉にも締が出來て、歸つた當座は食も進み夜も心持よく眠れた。

叔父がまた旅へ出ることになつた。線路の枕木を切出す山林を見に、栗山の方へ、仲間と一緒に出向いて行つた。大分費込の出來た叔父は一層儲口を見脱すまいとして燥つてゐた。

「これが當れば、お前にだつて水仕はさしちや置かん。」と、叔父はお庄にも悦ばせた。

叔父は行つた限、何時までも今市の方に引懸つてゐた。一行はそこから馬に乘つて、栗山の方へ深く入つて行かなければならなかつた。日光で遊んでゐるやうな噂も傳はつた。

雷雨で、大谷川の激流に水が出たと云ふことが、新聞で解つた時、叔母は蒼くなつて心配した。そしてお庄と一緒に良人の安否を八方へ聽合した。

十月の末に、家から電報で取寄せた旅費で、辛々歸つて來た叔父は、酷い睾丸炎で身動きもならなかつた。

三十八

お濱といふ茶屋の女中をつれ出して、近所の料理屋へ行つた叔父を送出してから、叔母は屈託さうな顏をして、今紙入を出してやつた手箪笥の鍵を弄りながら、そこに落膽して坐つた。

「私がせッせと骨を折つて、家を始末したつて、此おやぢや何にもなりやしないわね。」と、叔母は散らかつたそこらを取片着けてゐるお庄に寄すともなく溜息をついた。

お庄は前に茶屋の店頭で一寸口を利いたことのある其女が、手土産に持つて來てくれた半衿を、しみ〴〵見ることすら出來ずにゐた。半衿は十六のお庄には澁過ぎるくらゐであつたので、お濱は最中の折と一緒に取次をしてくれた、

お庄の前に差出してから、年を聞いて惘れてゐた。

「それぢや不可ませんでしたわね。」と、お濱は幾度も分疏をしてゐた。

日光の方で散々の失敗を演じてから、叔父は借の溜つてゐる洲崎の方へは寄着きもしなかつた。女にも厭氣がさしてゐたので、河岸をかへてちよく／＼鳥森の方へ足を運びはじめてゐた。

「お立替の分なぞは如何でも可ござんすから、些と入らして下さいよ。此頃また好い花魁が出ましたから。」と女は如才なく店の閑なことを零した。

叔父は自分の病氣のことや、暮で會社の忙しいことなどを大袈裟に言立ててゐた。お濱はお庄にも、色々の話をしかけて、今度遊びに來るなら、大八幡を案内して見せるなどと、愛想を言ひながら出て行つた。叔父は奥へ引込んで、叔母に紙入を出さすと、餘所行の羽織を引懸けて、ぶらりと女をつれ出した。

暮の決算報告などに忙しい時期であつたが、叔父は會社の方も餘り顔出しなかつた。出にくい事情のあるらしいことだけは叔母にも解つてゐたが、それを訊かうとしても、無口な叔父はにや／＼笑つてゐて、何事をも語らなかつた。

戰捷後持ちあがつた色々の事業熱が、そろ／＼下火になつて、一時浮立つた人の心がまた沈んでゐた。叔父もそんなやうな波動に漂はされた端くれの一人であることが、お庄の胸にも朧げに感ぜられた。

會社の提灯を持つた爺さんが、叔父の居所を捜しに來た。お庄はへどもどして奥へ駈込んだ。

「困るね。」と、叔母は厭な顔をして、玄關口へ現はれた。

「何、小崎さんがお預かりになつてゐる鍵さへあれば解ることなのです。別に御心配なことぢやありませんでせう。けど、愈鍵がないとなると、今夜中に金庫を打壞さんけれアならんさうですからな。」

實體さうな其爺さんは、上框の處に腰を懸込んで、脱目のない目で奥口を覗込んだ。

側に聞いてゐる母親もお庄も、胸がどき／＼してゐた。

「まさか弟が費消をするやうなことはありやしまいと思ふがね。」母親は目を擦りながら、傍から呟いた。

「いづれ小崎さん一人の責任と云ふんでもござんすまい。」爺さんは、小倉の洋服の衣兜から莨を出して吸ひながら、何時までもそこを動かなかつた。

お庄は又俥で夜遲く叔父を迎に出かけた。叔父の居所は直に解つた。そこは鳥森の或小さい待合で、叔父は其奥まつた小室に閉籠つて女ぬきで、酒を飲みながら花に耽つてゐた。一座はお庄の知らない顔ばかりであつた。顎鬚の延びた叔父の顔は、蒼白い電燈の光に窶れて見えた。

三十九

叔母の健康が、また縒が戻つたやうに惡い方へ引戻されて來た。暮から春へかけての叔父の一身の動搖が、一家の人々にも差響を起さずには居なかつた。

責を引いて會社を罷めてから、叔父は閉籠つて毎日碁ばかり打つてゐた。叔父の可也に使へることを知つてゐる人達は、他へ周旋しようと云つて勸めてくれたが　叔父は當分遊ぶ心算だと云つて應じなかつた。

「何を計畫んでゐるだか知らないが、月給は些と下つても、矢張出た方が可いかと思ふがね。」と、母親は、弟嫁と一緒になつて、叔父の心を

動かさうとしたが、叔父は姉や妻にも、へこたれたやうな顏を見せるのが、忌々しかつた。

株屋仲間と云つたやうな連中が、時々遊びに來た。一緒に會社を退いた人達も、その當座寄ると觸ると借口を嗅ぎつけようとして、花を引いてゐても目の色が變つてゐたが、そんな人達も長く此家を賑しては居なかつた。會社で引立ててやつたやうな人達や、一緒に遊んであいた仲間も姿を見せなくなつた。

「あれほど繁々來た小原さんも、近頃はかんぎらともしないね。」と、叔母は、お庄や母親を奥へ呼んで、内輪だけで花札を調べながら、時々その頃の賑かだつたことを想出してゐた。然うして花を引いても氣の興むと云ふことがなかつた。やがて母親の巾着から捲揚げた小錢をそこへ投出して、叔母は張が拔けたやうに、札を引散らかした。

始終眠つてゐるやうな母親は、自分の番が來たのも知らずにゐては、お庄に笑はれた。

「阿母さんは誰にお辭儀してゐるんでせう。」と、お庄は下から覗込んでは、げら〳〵笑出した。

母親は、然うしてゐながら、何時までも札を手から棄てなかつた。

「もう濟んだのよ。堪忍してあげますよ。」

「姉さまも花はどんなに好きだか……。」と、叔母も業腹のやうな笑方をした。

「好きと云ふでもないけれど……。」と、母親は漸と性がついた様な顏をあげた。

お庄はせツせと札を匣へ仕舞込んで、蒲團の上に置いた。まだ寢るには早かつた。三人は別の部屋へ散つて行つた。

母親は、茶の室の方で、また針箱を攤げはじめた。するうちに、叔父が講釋の寄席から歸つて來た。

淋しくなると、叔父は能くお庄を引張出して、銀座の通へ散歩に出かけた。芝居や寄席のやうな、人の集りのなかへも入つて行つたが、傷を負つたやうな其心は、何に觸れても、深く物を考へさせられるやうであつた。お庄は高座の方へ引牽けられてゐる叔父の樣子を眺めると、傷しいやうな氣がしてならなかつた。叔父の横顏には、四十年前とは思はれぬくらゐ、肉の衰へが目に立つた。

「私も、もう一度盛返してみせる、でその時は、お前にだつて立派な支度をしてくれる。」と、叔父は通の陳列などを見て行きながら分疏らしくお庄に言つて聞せた。

土地で掛りつけの醫師に、局部を洗つてもらつてゐた叔母の姙娠したと云ふことが、間もなく其の醫師にも感づけて來た。叔母はまた日本橋の婦人科の醫師に診てもらつた。

「こんなものを無暗と洗つちや堪らない。確に姙娠です。もう四ヶ月になつてゐます。」其の醫師は斷言した。

去年の夏のやうな水氣が、また叔母の手足に張つて來た。陽氣が暖かくなるにつれて、體が段々重くなつて來た。産をするまでは、荒い療治もしかねる局部の爛れが、攟つて來るばかりであつた。叔母は聞いてゐても切なさうな呻吟聲を擧げて、夜も寢られない大きな體を床の上に轉がつてゐた。

四十

簞笥の抽斗のなかに、赤兒に着せる白や赤や黄のやうな着物が、一枚々々數が殖えて來る時分に、叔母の體も段々重くなつて來た。叔母は幾ど十年目で三度目の出産に逢ふのであつた。始末の好い叔母は、田舍住居のその頃から持越して來た、茜木綿や麻の葉の型のついた着物をまた古葛籠の底から引張出して來て眺めた、産れて百日生きてゐた子供のために拵へたと云

ふ、節の多い田舍織の黑斜子の紋附などもあつた。こんな子供の顏は、今想出さうとしても何の印象も殘つてゐなかつた。お庄はその着物を見ながら、げら〳〵笑出した。三十にもなつて、まだ初產のやうな騷をしてゐる叔母の樣子が可怪しかつた。

「四十になつて初產する人だつて、世間には隨分ありますよ。お庄ちやんだつて何彼と言つてるうちに、もう直三十ですよ。」

「三十ですつて……。」お庄は餘り滿高なやうな氣がして、そんな年數の考が、如何しても頭腦へ入らなかつた。

「私三十なんて厭ですね。」

「厭だつて爲方がない、もう目擦る間だから。それにお嫁にでも行つて自分で世帶を持つてごらん、それこそ爲ることは多くなつて來るし、苦勞は殖えるばかりだし、年を拾ふのが可笑しいくらゐ早いものですよ。」

產婆が、手提鞄をさげてやつて來ると、叔母は四疊半の方へ自分で蒲團を延べて、診てもらつた。

「男か女か、まだ判りませんかね。」叔母は[illegible]を[illegible]つてゐる產婆に顏出しに訊いた。

お庄も手洗水を持つて行つて、襖の際で聞いてゐた。

「さうね、解らないこともありませんよ、まア男と思つて入らつして下さいませ。何しろ大きうございますからね。おゝこの動くこと。」と、九州訛のある其產婆は、此が手、此が肩などと云つて、一々妊婦の手に觸らせてゐた。

「六月やそこいらで、然う育つてゐるのでは、お產がさぞ重いでせうね。」叔母はまた自分の年取つてゐることを氣にした。

「そんな事があるもんですか。少しぐらゐ體が弱つてゐたつて、私が大丈夫巧く產せておあげ申しますから……加之貴方は初產ぢやないのですからね。年取つてからの初產は少し辛うございますよ。」

產婆は象牙に綺く脂の染込んだ聽診器を鞄に仕舞込むと、色々のお產の場合などを話して聽せた。畸形や雙兒を無事に產せた話や、自分で子宮出血を止めたといふ手柄話などが出た。

叔父は苦い顏をして、座敷の縁の方に新聞を見てゐた。叔母が姙娠と解つてから、夫婦はまだ見ない子の事を、色々に考へてゐた。が、叔父は時々自分の年と其の子の年とを繰つて見たりなどした。

「もう晩い、私が五十七になつて漸と二十だで。」

叔母はまた死んだ子の年など數へはじめた。

去年の夏よりも一層、叔母は冷い物を欲しがつた。氷や水菓子を、叔父に祕密でちよく〳〵お庄に取りに走らせた。暑い日は、半病人のやうな體を、風通の好い臺所口へ持出して來て、腫の脹んだ重い足を、冷い板敷の上へ投出さずにはゐなかつた。下の方も始終苦しさうであつた。婦人科の若い醫者が時々廻つて來ては、その方の手當をしてゐた。腹に子があるので、思切つた療治もできなかつた。

痛痒くなつて來ると、叔母は苦しがつて泣いてゐた。それが堪へられなく〳〵なると、近所から呼んで來た按摩を蚊帳のなかへ呼込んでは、小豆の入つた袋で、患部を敲かせた。

お庄が朝目をさますと、薄野呂のやうな其按摩は、ずつと坐つたきりまだ機械的に疲れた手を動かしてゐた。明方から眠つたらしい叔母の蒼白い顏に、蚊帳の影が涼しく戰いでゐた。

四十一

やがて胎兒の死んでゐることが、出產前から醫師や產婆に解つて來た。暫く床に就きツ切で

あつた叔母が産氣づいて來たのは、其から間もない或日の夕方であつた。奥で腹痛を訴へる産婦の聲を聞きながらお庄等はその時食べかけてゐた晩飯を急いで濟した。

産婆は直に驅けつけて來た。

「ちつと早く出るかも知れませんよ。」と、産婆は直に白い手術着を被て産婦の側へ寄つて行つた。産婦は蒼脹れたやうな顏を顰めて、平日よりは一層切なげな唸聲を洩してゐた。そのうちに、電話で報知を受けた醫師が、助手を連れてやつて來た。

叔父は客と一緒に、座敷で碁を打つてゐた。

「如何せ死んだ塊を引張出すだけのもんだからね、素人が騷いだつて何にもなりやしない。」と云つて、平氣でぱちり〳〵やつて居た。

二三度腹が痛んだかと思ふと、死んだ胎兒は直に押出された。死兒はふやけたやうな頭顱が、處々潰爛のやうに赭く靡爛して、脣にも紅い血の色がなかつた。

「男の子ですかね、女の子ですかね。」産婦は後産の始末をして貰ふと、ぐつたり疲れて其まま凋んで行きさうな鈍い目で醫師や産婆の顏を眺めて不安さうに尋ねだした、そして落入りさうな細い喘ぐやうな呼吸遣をしてゐた。

「赤さんは大きな男のお兒ですよ。」と、産婆は死兒を私と次の室へ持出した。そこには母親が、疊の上に桐油を敷詰めて、盥に初湯か湯灌かの加減を見てゐた。どの部屋も、人が動くばかりで、誰も聲を立てるものはなかつた。

死んだ赤兒は、やがて眞白い産着を着せられて、二枚折の屏風の蔭に臥かされた。醫師や産婆の歸る時分には長い惱みのあと産婦も安靜な眠に沈んでゐた。

「餘り氣を揉まして、後で力を落さしても惡いですから、少し落着いたら子供の死んでゐることをお話しなすつた方が可いでせう。」醫師は叔父に注意して引揚げに行つた。

産婆の指圖で、「その夜のうちに、子供は壺のなかへ入れられた。何か事があると來てもらふことに決つてゐる植木屋の幸さんと云ふ男が、通から火消壺を買つて來て、自分で小さい其死骸を中へ收めた。其上へ白い片が被けられた。

「そんなことだらうと思つた。どうせ私は子に縁がないのだでね。」

叔父と母親とが、赤子の死んで出たことを話して聞すと、叔母は片頰に淋しい笑を見せて、目に冷い涙を浮べた。

その一夜は、何となく家が寂しかつた。母親と幸さんとは、壺の前に時々線香を立てたり、樒に濕ひをくれたりしてゐたが、お庄は觸れた頭顱を見てから、氣味が惡いので、傍へ寄つて行く氣になれなかつた。

「お此さんは、餘り氷や水菓子が過ぎたもんで、それで腹が冷えて、赤兒があんなになつたらうえね。」と母親は、夜更けてから、茶の室で衆が鮨を摘んで茶を飲んでゐる時言出した。

叔父はそこへ臥そべりながら、默つてゐた。長いあひだ叔母の體が根柢から壞されてゐることや、血の汚れてゐることが、深く頭腦に考へられた。

叔父はやがて、悄々と座敷へ入つて寢てしまつた。

蒸暑いやうな、藥くさいやうな産室の蚊帳のなかから、また産婦の呻吟聲が洩れた。お庄と一緒に、其處いらの後片着をしてゐた母親は、急いで其部屋へ入つて行つた。

四十二

叔父にお庄と植木屋と、この三人が翌日に死んだ赤兒を谷中の寺へ送つて、午過に歸つて來ると、母親は産婦に熱が出たと云つて、心配さうに一同を待つてゐた。

「……それに昨夜から見ると、また今朝水氣が出たやうでね。重い病が體に在れば、反つてお産が輕いと云ふくらゐのものだから、まだ〳〵安心は出來ないよ。」

母親は叔父の着換などを、私と奧から取出して來て、そこへ脱棄てられた白足袋の赭土を、早速刷毛で落しなどした。

産婦は疲れた顏を此方へ向けて、縁側へ出て羽織の埃を拂つたり、汗ばんだ襦袢を軒に干したりしてゐる人々の姿を、じろ〳〵と眺めてゐた。

「皆さん御苦勞でしたね。」と、其口から呻吟くやうな聲も洩れた。

「それでお庄ちやん如何でした、坊さんは能くお經を讀んでくれましたか。」産婦はお庄の顏に、淋しく微笑んで見せたが、目に涙が浮んでゐた。

「えゝ、もう長いあひだ……。」と、お庄は浴衣に着換へながら、ぽき〳〵した顏をして、紅入メリンスの帶を締めてゐた。

「お墓はどんなとこだかね……癒つたらお庄ちやんに連れてつてもらつて、お詣りをしてやりませうよ。そして小さい石塔を建つてやりませう、間から聞つて云ふのは、ほんたうにあの事だわね。」産婦は泣くやうな聲で言つてゐた。

壺は楢木屋の幸さんが、紐で首から下げて持つて行つた。その後へ叔父とお庄の俥が續いた。三人は歸りに蓮の咲いてゐる池の畔を彷徨きながら、廣小路で手輕に晝飯などを食つたのであつた。お庄は久振で、こんな晴々した處を見ることが出來た。

二時頃に、昨夜の醫師が來て診て行つた。醫師は首を傾けながら、丁寧な診察の爲方をしてゐたが、別に深い話もしなかつた。少し血暈氣の氣味もあるやうだし、産褥熱の出たのも氣にくはぬが、これで如何か恁うか餘病さへ惹起さなければ、大して心配することもなささうだと云つて局部へ手當を施し、新しい處方などを書きつけて置いて行つた。

この醫師から、病人が見放されたのは、それから八日目であつた。叔母の體は、手をかければ崩れでもしさうに、顏も手足も黄色く脹ついて來た。時々差引のある熱も退かなかつた。下の方からは厭な臭氣が立つて、爪や脣に血の色がなかつた。腹膜、心臟、そんなやうな餘病も加はつて來た。

「かう何も彼も一時になつて來ては、迚も手のつけやうがありませんな、何なら大學へでも入れて御覽になりますか。」醫師は絶望的に言斷つた。

その日の暮方に、湯島の紐の方へ大學の病室の都合を訊いて貰ひに駈けつけたお庄は、九時頃に紐と一緒に歸つて來た。大學の方は明がなかつた。紐は方々駈けずりまはつた果に、前に下宿してゐたことのある友達が助手をしてゐる、駿河臺の病院の方へ漸く掛合つてくれた。

「孰にしたつて死ぬ病人だもんだで、病院に望みはない。」叔父は恁う言つて直入院の準備に取りかゝつた。

體の重い病人は、床のなかで着替をさせられると、母親や叔父や、多勢の手が上口へ据ゑられた吊臺の上に漸と運込まれた。そんなにまでして病院へ擔込まれるのを、病人は餘り好まなかつた。

「どうか早く癒つて歸るやうになつておくれよ。」母親は目に涙をためながら、門まで出て、擔出される吊臺の中を覗込んだ。

「留守を何分お願ひ申します。」叔母は喘ぐやうな聲で言つた。

叔父と紐とは、提灯をさげた楢木屋と一緒に、默つて吊臺の傍へ附添つたが、その灯影にちら〳〵見える人々の姿が見えなくなるまで、

母親とお庄は門に立つて見送つてゐた。静かな夜であつた。

四十三

この病人には、重にお庄と、田舎から出て來た病人の母親とが、附添ふことになつた。

田舎の母親の出て來たのは、入院した翌日の晩方であつた。お庄はその日、朝はやく手廻のものを少し取纏めて、それを持つて病院へ行つた。病室には、糺が知合の醫員に話して、自由を利せて、特別に取入れた寝臺のうへに、叔父が一人、毛布を着てごろりと轉がつてゐた。床の上には、蓆を敷いて幸さんも寝てゐた。看護婦と雑仕婦とが、體温を取つたり、氷の世話をしたりしてゐる。朝の病院は、何の部屋もまだ静かであつた。

叔父と幸さんとは、食堂の方で、賄から取つた朝飯を済したり、お庄が持込んで行つたお茶や菓子を食べたりしてから、やがて十時頃に歸つて行つた。

「それぢや私は又來るから……。」と、叔父は深いパナマの帽子を冠つて、うと〳〵してゐる病人の枕頭へ寄ると、低聲に聲をかけた。

體を動かすことの出來ない病人は昨夜初めて特に院長の診察を受ける時、手を通し易いやうに、濶く裁かれた白地の寝衣の廣袖から、力ない手を良人の方へ延した。

「私もこんな體になつて、何時如何なことがあるか知れないで、夜分だけは何處へも出でなされないやうにね。」と、水ッぽいやうな目で叔父の顔を眺めながら言つた。

叔父は頷いて見せた。

「そのうちには阿母さんも必然出て來るで。電報は遅くも昨夜のうちに着いてゐる筈だからね。」

お庄は母親の來るまで、病人の側に一人でゐた。そして雑仕婦に手傳つて、時々氷を取換へたり、下の方の始末をしたりした。氷は頭と云はず、胸といはず幾個も當てられてあつた。もう長いあひだの床摺も出來てゐた。

「重い患者さんね。」と、雑仕婦は背へ油紙を宛がふときお庄に話しかけながら笑つた。

「昨夜寝臺へお載せ申すのが、大變でしたよ。」

患者も極わるさうに力ない笑方をした。

家に簞笥に仕舞つてある着物の話が出た。まだ仕立てたばかりで、仕着も取らない夏帯のことなどを、病人は寝てゐて氣にしはじめた。白牡丹で買つたばかりの古渡の珊瑚の根掛や、堆朱の中挿を、何時かけるやうな體になられることやらと、そんな事まで心細さうに言出した。

お庄はこの叔母が、長いあひだ自分の物ばかりに金をかけて來たことを思出してゐた。母親の物を、叔父も父親と一緒に田舎の町で道樂に耽つてゐた時分、取出して行つた。叔父の學資を、父親は少しは助けたこともあつた。昔から油を絞つて暮して來た母親の實家は、その時分村の大火に逢つて、家も土藏も灰になつてから、叔父は殘つてゐた少し許りの田地を賣つて、漸と學校へ通つてゐるのであつた。其代りにお庄の支度を叔父が引受けることになつてゐた。叔父は時々それを言立てては、お庄の身につく物を買はうとした。其度に叔母は好い顔をしなかつた。

話に疲れると病人は、長い溜息を吐いて、水蒸氣の立つ氷枕に、痺れたやうな重い頭顱を動かした。

「私も永いあひだ、世帯の苦勞ばかりして來て、今死んで行つては眞實に溜らない。」叔母は唸るやうに獨語を言つた。

お庄は心から憎いと思つて、その顔を眺めた。

部屋に電氣がついてから間もなく、叔母の母親が幸さんに連れられて遣つて來た。母親は五十五六の脊の高い女であつた。田舍にしては洒落た風をしてゐるのが、先づお庄の目に着いた。

「私もこんな體になつてしまつてね。」と叔母は母親の顏を見ると、めそ〳〵と泣出した。

母親の優しい小さい目にも、一時に涙が湧立つた。そして何にも言はずに、手巾で面を抑へた。お庄も傍で目を潤ませながら、擽つたいやうな氣がした。

四十四

「私は、それやお庄さんに後をお願ひ申して、此の髮を結ひに歸つて來ますわね。」と、洒落ものの母親は、來た晩から氣にしてゐた小さい丸髷を撫でながら言出した。二三日側についてみると、親子の間にはもう大方話の種がなくなつてしまつた。來ると早々窮屈な病室の寢臺などに臥かされて、まだ碌々帶を解いて汽車の疲勞を休めることすら出來なかつた。

牛乳とスープだけで活きてゐる叔母が時々、

「あゝ、美しいおかうこでお茶漬が食べたいね。」

と言ふと、老人は傍から羨しがつて、看護婦に尋ねてみたが、看護婦やお庄は笑つてゐて取合はなかつた。

「院長さんに伺つて見ませう。」看護婦は其場遁れに言つて出て行つた。

「それでも、些とは何か食べさすものの工夫がつきさうなものだね。」と、母親は隅の方で、お庄が運込んで來ておいた、細いかき餅の罐を見つけて振つて見たり、罐のなかの林檎を取出して眺めたりした。そして口淋しくなると、自分にポリ〳〵噛んで食べては、お庄に田舍の嫁の話などをして聞せた。その嫁の荷の澤山あることが母親の自慢であつた。夜になると、母親はまた腹をすかして、お庄に近所で鮨を買へさせ、私と茶盆を持込ませなどして、少しの間も食つたり飲んだり、お饒舌をしてゐなければ氣が濟まなかつた。

「私の病氣が好くなつたら、阿母さんもゆつくり東京見物でもして下さいよ。」病人は寢臺のうへから話しかけた。

「私もこんなことでもなければ、滅多に出て來るやうなこともないでせう。」母親は、銀の延煙管に[illegible]をつめて、[illegible]て[illegible]に煙草を喫つてゐた。

これが[illegible]田舍で見た、東京役者の[illegible]の話などが始まつた。東京で聞えた役者のことをこの母親も何役となく知つてゐて、獨で調子に乘つて喋つた。

母親が出て行くと、病室は俄に淋しくなつた。暑い日中、熱に浮されたやうな患者は、時々牀の[illegible]のうへに[illegible]れて居睡をしてゐるお庄を、幾度となく呼んだ。お庄が周章てて枕頭へ顏を持つて行く〳〵と、叔母は[illegible]いふうつとりした目を開いて、一兩日姿を見せない叔父のことを氣にかけて訊いた。

「叔父さんに急いで來てもらふやうに、電話で然う言つてね……。」と、患者は囈言のやうに呟いた。

患者も附添も倦んだやうに默つて、離れてゐた。埃深い窓帷には、二時頃の暑い日がさして來た。そこへ院長が、助手を二人つれて入つて來た。

院長が先の見えすいてゐる患者の體に綿密な診察をしてゐる間、叔母は傍に立つてゐる、髮のちよんびりした、愛嬌のある若い助手の顏を、下からまじ〳〵眺めてゐた。

「この助手さんは別品だねえ――。」と言つて、狂氣じみた笑方をした。

お庄も看護婦も、後の方でくす〳〵笑出した。

嚴肅な院長は、嫣然ともしないで、ぢつと聽診器に耳を當ててゐた。拔けた患者の大きい下腹が、呼吸をするたびにひこ／＼して、衰れた內臓の喘ぐ音が、靜かな病室の空氣に聞えるのであつた。

院長は、物慣れた獨逸語で、低聲で助手に何やら話しかけると、旋て靜かに出て行つた。

お庄は後で暫く笑が止まらなかつた。

夕方になると、叔母はまた叔父の來ないのに、氣を焦立たせた。お庄は幾度となく家へ電話をかけた。

四十五

六尺ばかり隔てをおいて、寢臺のうへに臥てゐながら、叔母と叔父とは嫉妬喧嘩をした。昨夜あのくらゐ電話をかけて來てもくれなかつたとか、氣塞な病院よりも他に面白いところがあるから來なかつたのだとか、愚にもつかぬことを言出して、叔母は終に泣いた。

「どこも行くところなぞ有りやしない、私ア丸山さんの許で捕つて花を引いてゐたんだ。」と、叔父は小川町の通で買つて來たばかりのウキスキーの口を開けて、メートルグラスに注いで飲んでゐた。

「それは何でございますね。」と、叔母は淡い、橙色のその盞を遠くから透して見た。

「自分ばかり飲まないで、私にも少し飲まして下さいよ。」叔母は水張つた蒼白い手を延した。

「こんなもの飲めば死んぢまふ。」叔父は澁い顏をして、瓶に口をさすと、それを寢臺の端の方へ隱した。そして、ごろりと背後向になつて怖い目を瞑らうとした。

「いやな人だね、後向なぞになつて……病氣をするものは何のくらゐ割がわるいか。」叔母はじろ／＼叔父の寢姿を見ながら溜息を吐いた。晝眠れば夜は眠れないのが自分には苦しかつた。

晝からお庄は、汚れた病人の寢衣や下の帶のやうなものを一包蹴込に入れて家へ歸つて行つた。

叔母はまた家のことを色々賴んだ。

「田舍の阿母さんも、疲が癒つたらまた少しお出でなすつて下さいつてね。そしてあの帶が重いやうなら、私の不斷帶でもおしめなすつてね、着物もぢみなのが幾許もありますから……。」

病人は自分の母のことばかり心配した。

お庄はその顏を眺めて立つてゐた。

「お庄ちやんも、行つたり來たりするんだから、私の雪駄でも出して穿いたら如何だね。」病人は喰つけたやうにお愛想を言つた。「私は穢ればまた買ひますわね。」

お庄は隅の方で帶を締直したり、顏を直したりして、それから出て行つた。

田舍の母親が、もう片身分の見立てもする樣に、座敷で色々なものを擴げて見てゐた。大抵は叔母が此三四年に丹精して拵へたものばかりで、つい此春に裾廻を取替へてから、まだ手を通したことのない、淡色の模樣の三枚襲などもあつた。お庄は嫁に行くとき、此の古い方の紋附を叔母から讓つてもらふことになつてゐたことを思出した。

樟腦の匂の芬々するなかで、母親を相手に、老婆はまたお饒舌を始めてゐた。

やがて母親は濟まぬ顏をして、茶の室の方へ出て來た。

「あの人は妙なことを言ふ人だえ。」母親は白い目をしてお庄に呟いた。

「何でも彼でも、自分の家で拵へてやつたやうなことばかり言ふでね。それも可いけれど、あの紋附を、もう此さんには派手だで、歸るとき田舍へ持つて行つてお花さんに着せるさうだ

よ。」

「いゝわねそんなこと……私は叔父さんに又拵へてもらふから。」お庄は日燒のしたやうな顏を手巾で拭いた。

「何處から搜して來たか、あの碧い石の入つた大きい指環まで出して來て、指環といふものはまだ嵌めたことがないで、少しお借り申したいなんてね。」と、母親は齒莖に泡を溜めながら言立てた。

昨日から家中引掻廻してゐる、老婦の仕打が、母親には可憐しくもあつた。

「どれさ。」と、お庄も面白さうに訊いた。

「ほれ、あの……いつか丸山さんとお揃に、叔父さんが拵へたのがあるぢやないかえ。」母親は意込んで、同じやうなことを幾度も繰返した。

四時頃に、老婦は娘の意氣な櫛などを插込んで、衣物にきちんと衣を卸して、また病院の方へ出かけて行つた。

四十六

三週間も經つた。その頃には、病人の體も、ただ葡萄糖の注射で保してあるくらゐであつた。顏面が腫れあがりして、言ふことも辻褄が合はなかつた。意識が衰えて、爪に血の色が亡せて來ると、醫師が還つて來て注射を施した。患者は須臾のまに渾身が縮まつて來た。

「事によると、今夜もたたないかも知れませんよ。御親類へお報せになつた方が宜しいでせう。」

老婦やお庄が、昏睡狀態にある患者の傍で、醫師から恁う言渡されるのも、もう二三度になつた。

息を吐返して來ると、患者は暗い穴の底から、緣に立つてゐる人を見あげるやうに、人々の顏を搜した。

「私だよ。」母親はその手を握つて、娘の頰のところへ自分の顏を摺寄せて行つた。

患者は心から疲れたやうな、長い重な唸聲を立てた。

「おゝ可哀さうだな。」と、母親は鼻を詰らせた。

病人の聲は少しづつ分明して來た。

「そこの茶簞笥に、私の湯呑があつたかね。」

患者はにちや〳〵する口をもが〳〵させた。

看護婦が、渇を止めるやうな藥を、管で少しづつ口へ注いでやつた。

「病氣が癒つたら、湯あげに福松から美味しいものを澤山取つて、食べませうね。」患者は思出したやうに言出して、皆を笑はせた。

「あゝ、其どころぢやない。如何なお料理のかゝることでもして上げるで、もう一度癒つておくれよ。」母親は泣くやうな聲を出した。

集つて來た人達は、また寢臺を離れて、牀のうへに坐つた。

「この鹽梅ぢや、また二三日もちますかね。」

「お庄ちやん、叔父さんは……。」患者はうとうとしたかと思ふと、又訊きだした。

「叔母さん、いま直ですよ。」

お庄は叔父を見に行く風をして、病室を出て行つた。そして廊下の突當にある醫員の控室に入つた。

控室は十疊ばかり敷ける日本室であつた、組の知合の醫員を、お庄も湯島時代から知つてゐた。兩して一緒に茶を呑んだり、菓子を摘んだりした。この部屋へ能く遊びに來る、若い藥局の人、患者の、向の寫眞屋のハイカラ娘とも、ちよくちよく口を利くやうになつた。お庄は叔父の吩咐で、この連中へ時々すしや西洋のやうなものを贈つた。叔母が別品だと言つた助手が、西洋料理などを取寄せて食べてゐるのを見て、お庄は時々口に手巾を當てて思出笑をした。

「あゝ、何て暑い晩でせう。」お庄はその入口に膝を崩して、ペツタリ坐つた。

「暑けア この上の物干へでもお上んなさい。」

そこにワイシャツ一つになつて臥そべつてゐた知合の醫員は、傍から揶揄ふやうに言つた。

紅の兄弟の噂が二人の間に始まつた。紅に近頃女が出來たと云ふ事も男がお庄に話して聞した。

「然うですかね、私ちつとも知りません。」お庄は額を顰めて、小猫のやうな低い鼻頭を氣にして、時々指で觸つた。

お庄は暗い物干で、暫く涼んでゐた。中形の浴衣に、夜露がしつとりして、肩のあたりが冷くなつて來た。

暑い病室へ入つて行くと、患者の呻吟聲がまた耳についた。お庄は老婦に替つて、患者の傍の椅子に腰かけた。

夜明方から、叔母の樣子が可怪しくなつて來た。寢臺に倚りかゝつて、疲れてうと／＼してゐたお庄が目をさますと、看護婦が出たり入つたりしてゐた。助手も注射器を持つて入つて來た。

お庄は外の白むのを待つて、俥を築地へ走らせた。

四十七

家の戸がまだ締つてゐた。格子戸も板戸も開かなかつた。お庄は俥屋を表に待たしておいて、裏口へ廻つて、母親を呼んだ。母親は「おいおい。」と返辭をしながら出て來た。

「如何したえ。お此さんの容體がまた惡いだか。」母親は臺所の框に腰掛けて訊いた。

お庄も懈い體を水口の柱に凭せかけながら、叔母の容態を話した。

「それぢや到頭駄目だかな。」と、母親はがつかりしたやうに言つて、天窓を引いたり、窓を開けたりした。

「それでもまあ保つた方さ。あのくらゐにして駄目なのなら、熟々壽命がないのだ……。」

叔父がまた家を空けてゐた。

「丸山さんへ行つて、花でも引いてゐるら。」と母親は昨夜も二時頃まで待たされたことを話しながら、床をあげたり、板戸を開けたりした。

お庄は人氣のない家のなかを、落着かぬ風で彼方ゆき此方行きしてゐた。葬式や骨あげに着て行く自分の着物の事などが氣にかゝつた。田舍から來る、叔母の身内の人達の前も、餘り見すぼらしい身裝はしたくないと想つた。

母親とお庄は、奥座敷の簞笥の前に立つてゐながら、其事に就いて色々と相談した。

「何に間に合うて。今日の午前に目を落したつて、葬式は明後日だもんだで……それも氣を染めてゐたぢや間に合ひもすまいけれど、紋付と云ふぢやなし石無地でも用は十分足りるでね。それでなけれアお此さんの紺の方のを直すだけれどな。」

母親は落着きはらつて、色々の見積を立ててゐた。

左に右お庄は、叔父を搜しに出かけることにした。入舟町の方から渡つて行く中ノ橋あたりは、まだ朝靄が深く、人通りも少かつた。その家では、女中と娘の子とが起きてゐる限で、遊びに疲れた主人夫婦も叔父も、今漸く寢たばかりの處であつた。叔父の仆れてゐる座敷には、帶や時計や紙入や飲食した殘骸などが亂次なく散らばつてゐた。

「まア好い、大丈夫今に行くで……。」正體なく眠つてゐる叔父は、頤をがく／＼させながら、お庄の顏をじろりと見た限で、長い體をぐらりと横へ引くら返つた。

お庄はそこへ俥をおいて、途に近所の髮結のところへ一寸聲をかけてから家へ歸つた。

死んだと云ふ電報が、八時頃にお庄の髮を結つてゐる處へ舞込んだ。

「それぢや矢張然うだつたんだ。」と、母子は幾

度も電報を請求した。

母親は慌しさうに起上つたが、差當つて何をすると云ふ考へも思浮ばなかつた。お庄は急いで含嗽をしながら、紙で頸などを拭いて、また叔父のところへ驅けつけた。

その家では、衆がぞろ〳〵起きて、腫ぼツたい様な顔をして茶の室へ集つた。

叔父は内儀さんの汲んでくれた茶を飲みながら、電報の時間附などを見てゐたが、するうちにお庄と一緒に家を出た。主夫婦も、着換をして後から續いた。

衆が病院へ驅けつけた時分には、死骸はもう死亡室の方へ移されてあつた。げつそり背の殺つたやうな叔母の死骸には、白い布が被けられて、薄い寢蓐の敷物のうへに、胸を押立てながら、安らかに臥かされてあつた。母親は皆の顔を見ると、また泣出した。そして側へ寄つて死者の冷い顔から、白い布を取除けた。衆は寄つて其顔を覗込んだ。

四十八

「貞實に難有ないもんでござんした。」と、母親は目を潤ませながら咽泣てた。

「すうツと息を引取つて行くところを、お醫者さま達は、傍に多勢立つて黙つて見ておいでなさるだけのものでございましたよ。それで愈日を落してしまつた處を見屆けると、また黙つて、各々すいと出ておいでなすつてね。それに平常はあんなに多勢入交り立替り附いてゐて下すつたのに、生憎今朝は貞の私一人きりでね。」と、母親は後の方に立つてゐるお庄の結立の頭髪や、お化粧をして來た顔に目をつけた。

「何の爲に使をして下すつただか、此方ちや今日を落すと云ふ騷だのに、行けば行たきりで、氣長にお洒落なぞなすつてお出でなさるでね。」

母親はお庄に繰返し〳〵厭味を言つた。

お庄も少し逆上せた様になつてゐた。そして自分は自分だけの理窟を言つた。人中にゐるのに、然う委振に介意はない譯にも行かないと思つた。自分の身じんまくもする代りに、病人の看護も、長い間傍しも好くして來た方だとも思つた。

お庄は理も非も判らないやうな老婦の愚痴に終に泣出した。

吊臺で、死骸が擔出されるまでには、大分時間がかゝつた。其頭にはまだ温味の殘つてゐる死人の肉體も、段々冷えて來た。家を出ると、聲をかけて來た手傳の人達も夫々集つて來た。中には叔父も資本の幾分を卸して、車を五六十臺ばかり持つて、挽子に貸車をしてゐる安と云ふ物馴れた男もゐて眞先に働いた。

「小崎さん、患者さんの代りに、貴方の記念の寫眞を一枚撮つて下さいな。」中頃から替つて來た氣のやさしい上方産の看護婦が、聞かされた病人の唸聲が、まだ耳についてゐるやうな病室を取片着けてゐるお庄の傍へ寄つて來て言ひかけた。

お庄は氣忙しいなかで、叔父に斷つて看護婦と一緒に向の寫眞屋へ行つた。看護婦の望みで、母親にも勸めたが、母親の心はそれ處ではなかつた。

やがてお庄は積めるだけの物を、蹴込に積んで、母親と一緒に一足先に病院を引揚げた。

格子戸や上口の障子を外して、吊臺を家のなかまで持込んだのは、午後の三時過であつた。叔父はこれまでに丸山の主や紐に手傳つてもらつて、死亡の報知を大方出して了つた。病院の歸りに、電話や電報を出した口も少しはあつた。その中に、墨西哥公使館の通譯をしてゐると云ふ佛の從弟に當る男などもゐた。

「濟みませんが、六尺を一本づつ切つて戴きたいもんで。」安公は座敷に蓙を敷いて、佛に

湯灌を使はさうとするとき、女達の方へ聲かけた。吊臺から移された死體は屏風の蔭に白い蒲團の上に臥かされてあつた。

晒木綿を買ひに、幸さんが表へ飛出して行つた。

女達は、別の部屋の方で、經帷子や頭陀袋のやうなものを縫ふのに急がしかつた。母親はその傍で又臨終の時の手頼なかつたことを零しはじめた。

四十九

「田舍の人は眞實に物が解らない。」と、お庄はまだ叔母の母親に言はれたことが、頭腦にあつた。

お庄は手傳に來てゐる安公の處の、お留と云ふ十四五の娘に吩咐けて買はした、乾物や野菜ものをそこへ擴げながら、お通夜の人に出す食物の支度に取りかゝらうとしてゐた。母親のお安も仕事の手を休めて、そこへ來て見てゐた。

お庄は蓮の白煮を拵へる心算で皮を剝きはじめた。傍には僅ばかり殘つた食荒しの鮨の皿や空になつた丼のやうなものが投出されてあつた。

奥ではもう湯灌もすんで、佛の前には色々の物が形のごとく飾られ、香の匂が臺所までも通つて來た。座敷の話聲が鎭つたと思ふと、時々鈴の音などが聞えて來た。

「お婆さん達は何にもしないで、病人の傍にめそ〳〵泣いてれば好いと思つて。それは病人だつて、大切にしなければならないけれど、其爲に看護婦がつけてあるんぢやないか。病院だつて、叔母さんだけが患者ぢやないんだわ、お婆さんは眞實に勝手が强いんだよ。」

「何彼と云つたつて、お此さんは幸福せえ。田舍ぢや如何して、あんな手當は出來るもんぢやない。」母親も言つた。

「如何いふものでせうかね、明日の葬式に小崎さんはお出でなさるでせうね。」

丸山の主が、何やら長い帳面と筆とを持つて、白足袋を氣にしながら、散らかつた臺所口へ來て跪坐んだ。

「然うでござんすね。」と、母親は椎茸を丼で湯に浸けてゐながら、思案ぶかい目色をした。

「後を貰ふものとすれば、矢張お寺まで行くべきものでせうかね、弟もまだ四十にや二三年間のある體だもんですからね、是限貰はないて云ふ譯にも行きませんが知らんて。」

「それア其れ處ぢやない。」

「それとも、田舍から姑も來てゐるものですから、お葬式の時だけは遠慮すべきもんでせうか。」

「豫め再婚を發表するやうでも餘り感服しないでね。」丸山は恁ういつて、母親とお庄の顏を見比べた。

「それでお庄ちやんは香爐持、正ちやんがお位牌、それア可うござんすね。」

「まア然う云つた順ですかね。」

葬儀社が來たとか云つて、丸山は奥へ呼込まれて行つた。

叔父はぼんやりしたやうな顏をして、時々そこいらへ姿を現した。

「電報はもう屆いてゐますらね。」と叔母の母親も、田舍の倅夫婦の出て來るか來ぬかを氣にしては、訊いてゐた。

この晩、お庄は經を讀んでゐる法師の傍へ來て坐る隙もなかつた。座敷の方が散らかつて來ると、丸山の内儀さんと一緒に、時々そこらを取片着けて歩いた。そして又新しく酒や食物を持運んだ。

夜が更けてから、母親は晝間しかけておいた、お庄の襦袢などを、茶の室の隅の方で、また縫ひにかゝつた。

「私はそれぢや、御免蒙つて少し横にならしておもらひ申しますわね。」
叔母の母親は、一時佛の前へ行つて來ると、腫爛れたやうな目縁を赤くして、茶の室の方へ入つて來た。而して母親と一緒に茶を飲んだり、煮豆を摘んだりしてゐた。
「さあ〳〵明日もあるもんだに、一休みお休みなすつて……。」と、母親も眠い目をしながら、四疊半の方から掻卷や蒲團を持出して來てやつた。
靜かになつた座敷の方からは碁石の音などが響いて來た。

五十

「さあ皆さん打着けてしまひますよ。」葬儀屋の若いものと世話役の安公とが、大聲に觸立てると、衆はぞろ〳〵と棺の側へ寄つて行つた。
細長い棺の中には、布の茶袋が一杯詰められてあつた。莨や、草鞋のやうな物が其端の方から見えた。生前に色々の着物を縫つて着せるのが樂しみであつた人形を入れてやらうか遣るまいかと云ふことに就いて、女の連中がまた揉着してゐた。
「入れないさうです。」と、誰やらが大分經つてから聲かけた。
衆が笑出した。
「殘しておいても何だか氣味がわるいやうですから入れて下さい。」とお庄は言つたが、母親は惜しがつた。
「私が娘の片身に田舍へ連れて歸らしてお貰ひ申しますわね。」と、姑も言出した。安公が凹凸の棺のなかを均しながら、ぐい〳〵壓しつけると、「おい來たよ。」と蓋が旋て直りと卸された。白襟に淡色の紋附を着た姑は、其側に立つて泣いてゐた。母親も涙を拭きながら、口のなかにお題目を唱へてゐた。
田舍から來た人達も、皆着替をすまして、そこらに彷徨いてゐた。
お庄は今朝から、今日の着物のことで氣が浮ついてゐた。昨日の晝過に漸と註文した紋附が、一時出棺の間にあひさうにもなかつた。
「矢張お此さんのをお前のに直した方が早手廻しだつたかな。」今朝の九時頃までかゝつて、漸と家で縫へるやうなものを縫ひあけた母親は、そんな物を積重ねた、茶の室の隅の方で、お庄とひそ〳〵話合つてゐた。田舍から出て來た叔母の弟嫁が良人と一緒に入つて來た。而して端からそこに出して置いた着物の包を解きながら、良人の羽織や袴を取別けて、着替をさせに取りかゝつた。鄙の綺麗なその良人は、ごりごりした帶や袴の紐に金鎖を絡ませながら、ぬツとした顔をして出て行つた。嫁けそれから隅の方で、背後向になつて自分の支度に取りかからうとした。
「どうも濟んません、遲くなつて……。」お冬と云ふ叔母やお庄の結ひつけの髪結が、ごたくさのなかへ、おづ〳〵入つて來た。
「さあ、貴女からお結ひなすつて……後はお婆さんにお庄に私くらゐなもんですで……。」
「さうですか。ぢやお先へ御免蒙つて……東京でも矢張島田崩しに結ひますかね。」と、嫁はそこへこて〳〵取出した着替を不殘片寄せておいて、明るい方へ出て來て坐つた。姑も側へやつて來て、嫁の着物の衿緣を締めなどした。お庄はそこへ鏡臺や櫛道具を持運んで來た。
「東京ぢやもう、大抵毛卷なんですがね。如何しませうか。」髪結は油でごち〳〵した田舍の人の髪を、氣味わるさうに扱いて梳きはしてゐた。
お庄も母親も、案外したその髪の道具に側から目をつけてゐた。
葬式にたつ人や、人夫に食べさすものを拵へてゐる臺所の方を、母親はその隙にまた見に行

つた。
「皆さんも、今のうち何か食べてお置きなすつて……。」母親は其處らを片寄せて、餉臺の上へ食物を持運んだ。
お庄は食べる氣もしなかつた。
「あの人達は、あれでなか〱金目のものを插してゐますよ。」
「何しろ有る身上だでね。」
お庄は隙になつた茶の室で、今漸と裏口から屆けて來た、着物の包を釋きながら、母親と額を鳩めて話合つた。包のなかには、正雄に着せる紋附や袴も入つてゐた。二人は氣忙しさうに、仕着絲を拔りはじめた。母親はその中で、紋を一つ〱透しては見てゐた。
長く田舍に蟄居んでゐる父親に物を亡された愚痴が、また言出された。

五十一

「……後をお貰ひなされば と言つても、私はまたちよく〱寄せてお貰ひ申しますわね。」と、姑が皆に暇乞して歸つてしまつてからは、叔父の家も急に寂しくなつた。弟夫婦は、葬式がすむと、直に立つて行つた。
それ迄に、姑は形見分に自分の持つて歸るやうなものを、母親と一緒に、悉皆箪笥のなかから擇分けた。中には叔母が田舍にゐた時分から離さなかつた頭髪のものなどもあつた。姑は自分がそれを拵へてやつた頃の事を言出して、三十や其處いらで死んでしまつた娘の不幸をまた零しはじめた。
そんな物を擇分けるに、二人は毎日々々暇を潰した。出して見ては仕舞つたり、遣つて見ては又惜しくなつたりした。
「欲しいと云ふものは何でも持つて行かした方が可い。姉さまやお庄には、どうせ又拵へるで……。」と、叔父は蔭で母親を窘めた。
姑はお庄に案内してもらつて、久振で淺草や増上寺を見てあるいた。芝居や寄席へも入つた。姑はその度に、何か知ら死んだ娘の持ものを一つや二つは體に着けて出ることにしてゐたが、お庄も叔母の帶などを締めて、何時もめかしこんで出て行つた。四疊半にはまだ白い位牌が飾つてあつた。姑は外から歸つて來ると、その側へ寄つて、線香を立てたり鈴を鳴らしたりした。
「新佛さまにまた線香が絶えてをりましたに。」と云つて、姑は餘所行のまゝで、茶の室へ來て坐つた。
「へ、然うでござんしたかね。」と、母親は此間中の疲が出て、肩や腰が痛いと云つて、座敷の隅の方に蒲團を延べて按摩に療治をさせながら、好い心持に寢入つてゐた。
叔父は明後日の初七日のことで、宵から丸山へ相談に行つてゐた。
「あゝ、お蔭さまで、私も好い氣保養をさして貰ひました。」と、姑は誰もゐない部屋や、火の消えてゐる火鉢のなかを寂しさうに眺めた。
二三日滅切涼氣が立つて來たので、姑は單衣の上に娘の紋附の羽織などを着込んでゐた。お庄も中形のうへに縞の羽織を着て、白粉を塗つた顏を撫でながら傍へ來て坐つた。そして母親に小言をいひながら火を興しはじめた。
「たまに私が按摩でも取れば、直に口小言だでね。」と、母親は座敷の方から寢惚けたやうな聲で言つた。「自分は遊んであるいて、さら親ばかり窘めるもんぢやないよ。」
「またあんな解らないことを言ふんだよ。いくら遊んであるいたつて、歸つてお茶一つ飲まずにゐられますかね。その爲の留守ぢやありませんか。」お庄も逆返した。
「まあ可いわね。」と、姑は優しい調子で宥めた。「姉さまもお疲れなさんしたらうに、私でも

歸つたら、また寛らと骨休めをなすつて……。」

「そんなことを言や、病院で長いあひだ、夜の目も合さずに看護したものは如何するでせう。」

お庄はまた母親を極めつけた。勝手の強い姑の作ばかりして、毎日行かせられるのを、お庄も飽々してゐた。口で言ふほどでもない姑は、外へ出れば出たで腥いものにも箸を着けてゐた。「氣晴しに、御酒を一つ。」と云つて食物屋で飯を食ふとき銚子を誂へてお庄にも注いでくれた。

「自分が出不精の癖に、人が出ると機嫌がわるいのだよ。眞實に妙な人。」お庄は終に笑つた。

湯が沸く時分に姑は着替をすましてまたそこへ坐つた。母親も側へ來て、お愛想をした。然うしてから又、明後日のお寺詣りに着て行く、自分の襦袢の襟をつけにかゝつた。

五十二

姑が歸つてから二三日の間、お庄母子は家の片着にかゝつてゐた。簞笥の抽斗が殘らず抽出され、錠の卸された用心籠や風を入れたことのないやうな行李が、押入の奥から引張出された。そんな物のなかから、傷んだ古い錦繪が出たり、妙な讀本が現れたりした。母親は叔母が嫁入當時の結納の目錄のやうな汚點だらけの紙などを擴げて眺めてゐた。

「お此さんも、こんなにして嫁入したこともあつたにな。十年と一緒にゐなかつた。」

お庄は袋のなかから、こま／＼した叔母の細工物を取出して見てゐた。縮緬の小片で叔母が好奇に拵へた、蕃椒ほどの大きさの比翼の枕などがあつた。それを見ても叔母の手頭の器用なことが解つた。體の頑固な割に、恁うした女らしい優しい心を有つてゐた事が、荒く育つたお庄にも可羨しかつた。叔母の側に喰着いてゐて、もう少し何かの手業を教はつておくのだつたとも考へた。

「叔母さんのすることは、少し厭味よ。」お庄は捻ねくつてゐた枕をまた袋の底へ押込んだ。能く四疊半で端唄を謳つてゐた叔母の艶ツぽいやうな聲が想出された。

「阿母さんも其樣なものを持つて來て。」

お庄も目錄を取上げて疊の上に擴げた。

「阿母さんだつて、木曾へ行つた時分はねえ。」と、母親は木曾の大百姓の家へ馬に乘つて嫁に行つたことを想出してゐた。

「あの家に辛抱して居りさへすれば、今になつてまごつく樣なことはなかつたに。」

「如何して辛抱しなかつたの。」

「如何してつて、家の遠いのも厭だつたし、姑と云ふ人が、物が澤山有餘る癖に吝くさくて、三年ゐても前垂一つ私の物と云つて拵へてくれたことせえなかつた。田地もあつたが、種馬を何十匹となく飼つておいて、それから仔馬を取つて、馬市へも出せば伯樂が買ひにも來る。――」と、母親は重い口で、大構なその暗い家の樣子を話した。お庄は、そんな處にもゐたのかと思つて、口に泡をためてゐる母親の顏を瞶めた。

「その家ぢや機もどん／＼織るし、飯田あたりから反物を賣りに來れば、小姑達にそれを買つて着せもしたが、私には一枚だつて拵へてくれやしない。萬事がそれだで、私も欲しくはなかつたけれど、好い氣持はしなかつた。それで初産の時、駕籠で家へ歸つたきり行かずにしまつたと云ふ譯せえ。」

「その人は如何な人さ。」

「如何なつて、馬飼ふやうな人だで、それは如何せ粗いものせえ。其でも氣は優しい人だつた。私は今ぢや何でも餘程の身上を作つたらうえ。」

その時分は、身上のことなぞ考へてもゐなかつたで、お産のあと子供が死んでから、如何言

はれても歸る氣になれなかつた。それでも、その子が育つてでもゐれば、また歸る氣になつたかも知れないけれど。」
「然うすれば、私達だつて居なかつたかも知れないわ。」
「さうせえ。」と、母親は弛んだやうな口元に笑を浮べながら、娘の顔を眺めた。
田舍の思出噺が色々出た。お庄はべつたり體を崩して、何時までも聽耽つてゐた。するうちに疲れたやうな頭腦が懈くなつて來た。
「叔父さんは又内儀さんを貰ふでせうか。」お庄は訊出した。
「さあ、如何するだかね。先がまだ長いでね。」
お庄は倦疲れたやうな心持で、壁に凭れた。

五十三

四十九日の蒸物を、幸さんや安公に配つてもらつてから、其翌日母親とお庄とは、谷中へ墓詣に行つた。その日は重に女連であつた。公使館の通譯の細君に、丸山の内儀さん達が家へ集つて、それから一緒に出かけた。子供が能く遊びに來るので、近しくしてゐた向の或大店の通番頭の内儀さんも、その子供をつれて遣つて來た。この内儀さんは、叔母が存命中ちよくちよく芝居を見に行つた。入院中も時々來て見舞つてくれた。その子供は見て來た芝居の眞似をして衆を笑はせるほど、ませて來た。お庄は子を膝に抱いて俥に乘つた。
寺で法師がお經を讀んでゐる間も、一同はにやけた風をさせた其子供の仕草で始終笑はされ通しであつた。お庄も母親も何處かに叔母の遺して行つた物を體につけてゐた。お庄は小紋の紋附に、帶を締めて、指環で目立つ大きい手を氣にしながら、塔婆を持つて衆と一緒に墓場の方へ行つた。
「そんなに塗くつて如何する心算だ。まるで粉桶から飛出したやうだ。」と、出がけに叔父はお庄の顔を見て笑つたが、お庄は慾にかゝつて矢張塗立てて出た。
歸りに衆は上野をぶら〱した。池には蓮が悉皆枯れて、舟で泥深い根を掘返してゐる男などがあつた。森もやゝ黄ばみかけて、日射が目眩しいくらゐであつた。學生風の通譯の細君が、そこから一足先に別れて行つてから、一同は廣小路の方へ出で、それから梅月で晝飯を食べた。大阪産の丸山の内儀さんは、お庄に然う言つて酒を一銚子誂へて、天麩羅に箸をつけながら、猪口の遣取をした。
斑點の多い母親の目縁が、少し紅味ばんで來た時分に、お庄の顔もほんのり染つて來た。色の淺黑い、瘦ぎすな向の内儀さんは、膝に擴げた手拭の上で、飯を食べはじめた。
そこを出たのは、もう日の暮方であつた。叔父がまた新たに成立たうとしてゐる會社のことで、家で仲間と相談會を開いてゐた。叔父は眞面目な他の會社などへ勤めて、間弛つこい事務など執つてゐられなかつた。子供に續いて、妻が長患ひの擧句に死んでから、家と云ふものを、餘り考へなくなつた。それだけ心が安易にもなつてゐたし、緩んでもゐた。
暫く絕えてゐた烏森の方へ、叔父はまた往足を運び始めた。家にゐる時は、寢ても起きても新しく企てられた會社の事を考へてゐた。
「どんな向の會社だか知らないけれど、そんな事を遣りはねて、又失敗るやうなことがあつては困るでね。それよりか矢張口を搜して、月給を取つてゐた方が氣樂のやうに思ふがね。」母親は時々弟に賴むやうに意見をした。此と云ふ資本もない考案中の會社が、どうせいかさまなものだと云ふことが、母親の頭腦にも不安に思はれた。

「まあ默つて見てお在でなさい。私も今となつて、不味い辨當飯も食つてゐられないで。」

石川島へ出てゐる時分セメントの取引をして親しくなつた男や、金貸や地所賣買の周旋屋をしてゐる丸山などと一緒に叔父はその會社を盛立てようとしてゐた。中には古い友達の中學の先生もあつた。

金六町の方に設けられた其事務所へ、旋て一家が引移ることになつた。そこは灰問屋と稻荷との間に建つた河岸に近い處であつた。田舍から出た當時から、方々持廻つたお庄親子の古行李が、叔父の荷物に紛れて、また其處の二階へ積込まれることになつた。

五十四

この家の格子先へ、叔父の能筆で書いた看板が掛けられたり、事務員募集の札が貼られたりした。毎日寄つて來る人達は、店に竝べた椅子卓子に依つて、趣意書や規則書のやうな刷物の原稿を書いたり、集會や會員募集の方法を講じたりした。基金はまだ刷物に書入れてある額に達してゐなかつた。會社の爲る仕事は、無盡のやうな性質を帶びた手輕な一種の相互保險であつた。

二三人の募集員が、汚い折鞄を抱へて、時々格子戸を出入した。晝になると、お庄は能く河岸の鰻屋へ、丼を誂へにやられた。

こゝに寢泊りしてゐる、若い事務員が唯獨、新しい帳簿の列んだデスクの前に坐つて、退屈さうに、外を眺めたり、新聞を見たりしてゐた。そして時々想出したやうに、會員名簿のやうなものを繰つたり、照會の端書に返辭を書いたり、會費の集り高を算盤で彈いたりしてゐた。

事務員が、日當の惡い三疊の室に、薄い蒲團に包つて、まだ寢てゐるうちに、叔父は朝飯の箸も取らずに、蒼い顏をして出かけて行つた。

長いあひだ少し積んで來た貯金を提げて仲間に加はつて來た中學の教師が二階で昨夜遲くまで、叔父と何やら爭論めいた口を利合つてゐたことが、お庄母子も傍で聞いてゐて氣にかゝつた。後では一緒に碁など打つて、平常のやうな調子で別れたが、叔父の顏色は好くなかつた。

二人は事務員に帳簿を持つてこさして、長いあひだ細しいことを話合つてゐた。

「あの人は、もう手を退きたいとでも言ふだか。」ランプの下で、白足袋を綴ぢくつてゐた母親は、手の屆かぬ背の痒いところを搔りながら訊いた。

叔父はお庄の退いた火鉢の前の蒲團に坐つて、莨を喫した。

「なあに構うでもない。あの男に取つては、大切な金だで矢張氣を揉むだ。」

「金を返せと云ふ話にでも來たらう。」

「それほど大した金でもない。」叔父は欠をしながら言つてゐた。

お庄は剛愎なやうな叔父の顏を、傍からまじまじ見てゐた。この會社の崩れかゝつてゐる事は、あれ程毎日集つて來た人が、遽に足踏をしなくなつたことだけでも解ると思つた。頸筋や肩のあたりが、叔母のゐた頃から比べると、著しい瘦が目立つて、影が薄いやうに思へた。

叔父が出て行くと、旋て母子は差向ひに朝飯の膳に向つた。

「昨夜の人に返す金の工面にでも行つたらう。」

二人は、また叔父の噂をしはじめた。叔父が遊んでゐる女に貢ふ金だけでも、此頃の收入では落着きさうなこともなかつた。應募者も豫期した十分の一もなかつたことが、女達にも段々呑込めて來た。

事務員が、寢起きたやうな腫ぼツたい顏をして、暗い三疊の開き戸を開けて出て來た。そし

て目眩しさうに目を擦つた。綻びた袖口からは綿が喰出し、シャツの襟も垢や脂で黑く染つてゐた。お庄はくす〳〵笑出した。この男が此處へ來てから、もう三月にもなつた。
「もう何時です。」事務員は目を瞠つて時計を眺めた。
それから水口の方へ出て顔を洗ふと、間もなく膳の側へ寄つて來た。紫色に爛れたやうな面皰が汚らしかつた。
飯がすむと、お庄は叔父の寢所を片着けに二階へあがつた。冬の薄日が部屋中に行遍つてゐる。お庄は蒲團や寢衣を持出して手擦にかけながら、灰問屋の庫の竝んだ向河岸を茫然眺めてゐた。

五十五

向河岸は靜かであつた。倉庫で働いてゐる男や、默つて荷積をしてゐる人夫の姿が、時々お庄の目に侘しく映つた。碧黑くおどんだ水には白い建物の影が浸つて、荷船が幾個か棧橋際に繫がれてあつた。お庄はもう暮が近いと思つた。
部屋を掃除してから、雜巾バケツに水を張つてゐると店頭で事務員と押問答してゐる、聞きなれぬ聲が耳についた。會員から、會費の拂戻請求を受けてゐるのだと言ふ事が直に解つた。臺所を働いてゐる母親も、茶の室へ出て、氣遣しさうに店の方へ耳を引立ててゐた。勤め人とも商人ともつかぬやうなその男は、社主に逢ひたいと言つて、物慣れぬ事務員を談じつけてゐるらしかつた。
「いやだ〳〵、叔父さんは……。」と、お庄は此前の事を思出した。
「だつて叔父さんが一人で引被る譯のものでもあるまいがね。」と、母親も臺所の隅に突立つて溜息を吐いてゐた。
お庄は、この家を何時引拂ふことになるか解らないと思つた。拭掃除をする氣にもなれなかつた。そしてバケツを其處へ投出したまゝ、うんざりして居た。
叔父は出て行つた限、二三日家へ寄りつきもしなかつた。その間に中學の先生だと云ふ例の男が、二度も來て店へ坐込んでゐた。お庄は色の褪せたインバネスに、硬い中折を冠つたその姿を見ると、又かと思つて奥へ引込んで行つた。火の氣の少い店頭で、事務員は此男と日が暮れるまで向合つてゐた。男は近所の蕎麥屋へ行つて、空いた腹を滿して來ると、赤い顔をして又やつて來た。
「まだお歸りになりませんか。どこか心當はありますまいかね。」男は楊枝で口を弄りながら、奥を覗込んで、晩飯を食べてゐる三人の方へ聲をかけた。
「あゝして來て待つてゐるのに、餘り放擲り放しておいてもね。」と、お庄は晩飯をすますと、顔を直したり、着物を着替へたりして、仕立直しの叔母の黑いコートを着込んで、叔父を搜しに出かけた。
しばらく出なかつた間に、町はそろ〳〵暮の景氣がついてゐた。早手廻しに笹の立つた通などもあつた。賃餅の張札や、カンテラの油煙を立てて乾鮭を商つてゐる大道店などが目についた。
やがて湯島の伯母の家の路次口に入つて行つたのが、九時近くであつた。
「私のとこへは、小崎はまだ葬式の挨拶にも廻つて來やしないぜ。」と、伯母は二階から降りて來て、火鉢の前に坐ると、めかし込んだお庄の樣子をじろ〳〵眺めた。
「何だか會社を始めるとか、始めたとか云ふことを聞いたが、そんな投機を遣つてまた失敗らなけア可いが。」伯母は苦い顔をして恁うも言

つた。
　二階で組の友達が多勢寄つて花を引いてゐた。お庄は暫く、そんな音を聞いたことがなかつた。
「お前いくらか懐にあるだかい。」花には目のない伯母がにや／＼笑ひながら、段梯子を上つて行くお庄に言ひかけた。
　その晩おそくまで、お庄は其處で花を引いてゐた。取られ分を取復さう／＼と焦心つてゐるうちに、夜が更けて來た。連中には古くから昵みの男もあり、もう髭を生して細君を持つてゐるらしい顔もあつた。お庄はそんな中に交つて燥いだ調子で饒つたり笑つたりした。
　明日晝頃に、お庄は金六町の家へ歸つて來ると、昨夜歸つた叔父が二階にまだ寢てゐた。梯子段上に脱いである見なれぬ女の下駄がお庄の目を惹いた。
「……藝者だか何だか……。」と、母親は笑つてゐた。

五十六

　お庄等は母子の仕事として、ひつそりした下宿を出さうと思ひついたのは、この事務所を疊んでから、一家が丸山の隣の小さい借家へ逼塞してからであつた。それ迄に會社の方はパタパタに爲つてゐた。缺損を補ふべき金や、下宿の資本を拵へると言つて、叔父は疾に田舍へ逃出したきり、何時までも歸つて來なかつた。
　河岸の家で、叔父が一二度二階へ連込んで來た女が、丸山の田舍の嫂の姪であることが、お庄母子に直に解つた。その女はお照と云つて年はお庄から漸と一つ上の十九であつたが、もう處女ではなかつた。東京へ出るまでには思斷つたこともして來た。
　丸山の隣へ引越して行つてから、この女とお庄は直に近しい間になつた。女は瘦ぎすな尫弱いやうな體つきで、始終默つて可羞しげにしてゐたが、表に見えるほど柔順ではなかつた。お庄には何處か調子はづれの所があるやうにも思へた。叔父は丸山へ行つて碁を打つてゐるうちに、此女と親しくなつた。女は碁も可也に打てたが、字なぞも巧かつた。
　一晩中、女は安火に當つて、お庄母子に自分の爲て來たことを話して聞した。田舍で親々が早いあひだ取決めてあつた許婚の人を嫌つて北國の學校へ入つてゐる男を慕つて行つた時のことなどが詳しく話された。女は暑中休暇に歸省してゐる親類先の其男の家へ、[illegible]の手助に行つてゐるうちに、男と相識るやうになつた。男が學校へ歸つて行つてから間もなく、女は目星い衣類や持物を詰込んだ幾個かの行李を竊と停車場まで持出して、獨で長い旅に上つた。
「その時のことは、今から想ふと眞實小説のやうよ。」と、女は汽車のない越後から暗い森や可恐しい河ばかりの越中路を通るとき、男に跡を尾けられたことや脅迫された事などを話した。
　制裁の嚴しい寄宿に寢泊りしてゐた男は、一二度女の足を止めてゐる宿屋へ來て、自分の事情を話して歸つたきり、幾度訪ねても逢はなかつた。手紙を出しても來なかつた。
　三月ほど經つて、兄が女を連戻しに行つた頃には、女は金も持物も無くして、雪の降る北國の寒空に、着るものもなくて、下宿屋に下女働をしてゐた。田舍へ引戻されてからも、町に落着いてゐる事も出來なかつた。許婚先へ對しても、家にゐるのが極惡かつた。
「どうせ私は田舍などへ歸りやしませんよ。嫁にだつて行きやしません。家で怒つて介意はなくなつたつて何でもありやしない。金澤で下宿の厠の掃除までしたことを思や、自分一人ぐらゐ何をしたつて食べて行かれますよ。」女

は太腐れのやうな口を利いた。

「一人でやつて行くなら、茶會所でも出したら如何だ。」叔父は此女に時々そんな心持も洩した。

「彼奴も讀んだが、小崎さんも少し酷いや。」と丸山は、叔父の田舍へ行つてゐる留守に、折々茶を呑みに來ては、お照の噂をして母親に厭味を言つた。

女はお庄の家へ來て、机に坐つて叔父へ長い手紙を書いた。手紙にはお庄に解らないやうな難しいことが書いてあつた。女は小説でも讀むやうな氣取で、母子にその文句を讀んで聞かせた。お庄は狂氣じみた其顏を瞶めながら笑出した。

叔父から返事が來た。女は手紙の字が巧いと云つて、獨で感心してゐた。

「貴方の叔父さんは眞實に深切よ。」

「深切だか何だか知らないけれど、家の叔父さんはもうお爺さんよ。」

「お爺さんだつて可いぢやないの。一生一つに居やしまいし……。」

五十七

繁三をつれて、三月の東京座を見に行つた叔父が、がちがち顫へて歸つて來た。顏が眞青になつて、唇に血の氣がなかつた。

叔父は田舍から歸つてからも、家に閉籠つて考へて許りゐたが、氣が塞つて來ると、時々想出したやうに、誰かを引張出して芝居や寄席へ行つた。その日はちらちらと雪が降つてゐた。芝居のなかも暗く時雨んだやうで、底冷が強く、蒲團を被けてゐても、膝頭が寒かつた。叔父は脊筋へ水をかけられるやうで、永く見てゐられなかつた。

日の暮方に、俥で金助町の新しい家へ歸つて來ると、褞袍を引かけて、火鉢の傍に縮つてゐた。

「如何したと云ふんだらう。」と、母親は會社の紛擾から引續いて、心配事ばかり多い弟の體を氣遣つた。

「何に感冒だ。ヘブリンの一服も飲めば癒るで。」叔父は然う言ひながら、繁三を相手に酒を飲んで芝居の話などしてゐた。

お照が暫く此處の家に隱れてゐた。彼方の家を引拂ふ頃から、お照のことで、叔父と丸山とは互に氣持を惡くしてゐたが、此處へ引越してからも、餘り往來をしなかつた。丸山が女を搜しに來ると、女は二階へあがつて客の部屋に隱れてゐた。丸山は終に女を介意ひつけなくなつた。

[illegible]以來懇意になつた此の近所の醫者が、その晩もぶらりと遊びに來て、叔父と碁を打ちはじめた。叔父は一勝負濟すと、[illegible]を探遣つて額を顰めた。石を持つてゐる間も時々顫へてゐた。

「可怪しいな。」と、醫師は繁三に紙の聽診器を取寄せさして、叔父の體を見た。

醫師は骨立つた叔父の胸を其方此方當つて見てゐるうちに、急に首を捻つて肺の處をとんとん強く敲きはじめた。

「どうも少し可怪しい。」醫師は側を離れると、溜息を吐いて、急いで緣側へ手を洗ひに行つた。

「肺病にでもなつてゐるのぢやないらか。」母親は傍から心配さうに言つた。お照もお庄も、默つて叔父の顏を瞶めてゐた。

「私の肺は、人に優れて丈夫だと言はれたもんだが……。」と、叔父は肩を入れながら呟いた。

醫師も繁三も、直に歸つた。

「とにかく院長に一度診てもらひなさい。放擲つておいちや不可い。」醫師は繰返し然う言つて出て行つた。

醉のさめた叔父は、また酒でも飲まずには居られなかつた。

「そんなに酒を飲んでも可いらか。あの醫師があゝ言ふ位だで、何處か好い醫師に診てもらふまで、妄なことをしない方が可い。」

「あの竹の子醫師に何が解るもんで……。」

叔父はお照に酌をしい／＼自分にも飲んだ。湯島の伯母に引張出されて、叔父は其翌日駿河臺の病院へ診て貰ひに行つた。

「結核も結核、ひどい結核だと云ふでないかい。」と、伯母はお庄と母親が朝飯を食べてゐるところへ飛込んで來て顏を顰めた。

二人は吃驚して、箸を休めた。

「昨夜の××さんの話だや、片肺全然無いと云ふこんだぞえ。」

叔父はまだ奥座敷に寢てゐた。昨夜二人でおそく迄起きてゐたらしいお照も、まだ目が覺めなかつた。

叔父は院長から分明した診斷を下されるのを怖れて、行くのを澁くつた。

「やつぱり肺だと云ふことだぞえ。」と、晝頃に叔父をつれて歸つて來た伯母は、蔭で母親に告げた。

治療に望のないことが、診察を了つた叔父が帶を締めてゐる背後から、大きい手と首を振つて見せた院長の様子でも知れてゐた。

五十八

「叔父さんが歸つて來たら、僕から能く話をする。」二階の部屋を借りて、此處から一ッ橋の商業校學へ通つてゐる磯野と云ふ群馬縣産の書生が、藥師の縁日に手を引合つて通を歩いてゐるときお庄に話しかけた。磯野は乳の友人の知合で、乳とも知つてゐた。そんな關係から此處の二階を借りることになつた。家は肥料問屋で磯野はその時分から色々の遊友達を持つてゐた。酒も飲んだり唄も謳つた。叔父とも碁を打つたり、花を引いたりした。深川へ荷かつくと、母親が託けて寄越した着物や、麥藁菓子のやうなものが届いて、着物のなかから可愛い末の子に心づけてくれた小遣錢などが出て來たが、家をやつてゐる兄の方には餘り信用がなかつた。磯野は一二の官立學校の試驗を、何時も失敗して、今通つてゐる學校は、學課の程度が低く、卒業生の成績や氣受も香しい方ではなかつた。磯野はそこへ學籍を置きながら、月々の學費を取寄せてゐた。

叔父は四月の末頃から海岸へ行つてゐた。前の會社の用事で素行きつけた浦賀から、三浦三崎の方へ廻つて、そこで病を養つてゐた。田舍から取つて來た金も、會社の跡始末に消えてしまつて、此家へ引移つて來た時も、懸けてあつた取殘しの無盡を安く競つて落した位であつたので、病氣になつてからも思ふやうな保養も出來なかつた。母親の内職に出とした素人下宿も間數が少く、まだ整つてもゐなかつた。

「生身の體は何時どんな事があるか知れないで、それで私が言はないことぢやなかつた。好い加減に締つておくだつたい。」と、母親は弟に怨を言つた。

叔父は立つ間際まで、お照を傍から離さなかつた。寢衣に重ねた白地の單衣がじつとり脂汗に黄んで蒲團をまくると熱くさい息がむれてゐる位であつたが、瘦我慢の強いお照は平氣で叔父の處へ寄つて行つた。一緒に食物に箸を突込んだり、一つ湯呑で茶を呑んだりした。

「厭ねお照さんは。あんな中へ入つて行くと、傳染しますよ。」とお庄は蔭で眉を顰めた。

「大丈夫だよ。私の體には病氣が移りやしませんよ。」と、お照は黄色い、かさ／＼した顏に寢白粉を塗つて、色の褪せた紡績織の寢衣に、派手な扱帶などを締めながら、火鉢の傍に立膝

をして寝しなに莨を喫つてゐた。
「移るものなら、もう疾に移つてゐますよ。今から用心したつて追付きやしない。」お庄は尖つたやうな其顔を、まじ〱眺めてゐた。
「滅多に移る案じはないけれどね。」と、母親も、傍で茶を呑みながら言つた。
「それに叔父さんのは咳も痰も出ないもんだで、未だそれほど悪いのぢやないと思ふ。」
「それが尚悪いのですよ。」お庄は打消した。
「どうして彼様な病氣が出たものかな。家にや肺病の筋はなかつたがな。」
「いゝえお女郎から傳染るといひますよ。お女郎にや随分あるんですつて。」
酒や女に耽つてゐた弟の亂次のない生活が、母親の胸に想回された。
「あれで臥つきでもしたら如何するだか。」
「可いですよ。叔父さんだつて可哀さうぢやありませんか。私きつと叔父さんを見達けてあげますよ。」お照は痩こけた手で、豆ランプに火を點けると、聽てずる〱した風をして、段梯子を上つて行つた。
「田舎へ歸れアあれでも丁とした家の娘でゐられるに。」母親は後で呟いた。
自棄になつたやうな此女の心持が、母親には呑込めなかつた。

五十九

島田髷に平打をさして、こて〱白粉や紅を塗つて、瘟氣のする人込のなかを歩いてゐるお庄の猥らなやうな顔が、明るいところへ出ると、羞らしげに赧んだ。薬師裏を脱けた廣場には、もう夏菊の株などが擴げられてあつた。
歸りに暗い路次のなかの家へ入つて、衝立の蔭で一緒に麥とろなどを喰べた。酒も取つて飲んだ。そこを出たとき、お庄は紅い顔をしてゐた。
「阿母さんも行くなら行つておいでなさいよ。偶にや外へも出て見ると可いのよ。」お庄は家へ歸つて行くと、今漸と行水から上つたばかりの母親を促した。母親はにや〱した顔で二人を見迎へたが、女中と一緒に買物がてらお庄から金を渡されて出て行くまでには、大分暇がかかつた。
中江と云ふ醫學生のところへ能く遊びに來る、お増と云ふ女が二階から降りて來ると、二人のなかへ割込んで、辻占入の細い鹽煎餅を摘みながら、間借をしてゐる自分の宿や此處へ出入する男の品評などを始めた。この女はもう二十六七であつた。續いてゐた田舎醫師の家で不都合なことがあつて、子供のあるなかを暇を出されてから、東京へ來て長い間まごついてゐたことを、お庄も中江などから聞いて知つてゐた。「お前のやうな女には手切の金より着物の方が身について安全だらう。」と云つて、其良人から拵へてもらつた支度が亡なつた時分には、もう色々の男を亭主に持つて來たことを、女の口からも度々聞された。女はしみ〱した調子で亭主運の悪いことを能く零した。行詰つて、田舎の醫師の家へ又詫を入れに行つたとき、姑が頑張つてゐて、近所に取つてゐた宿から幾度逢ひに行つても逢ふことが出來なかつた。女は夜更けてから梯子をさして、私と二階の主の部屋の戸を敲いたが、矢張入ることが出來ずに、外から悪體を吐いて歸つて來た。
「私あんな可悔しかつたことはありやしませんよ。」と、女は目に涙を入染ませて、自分と自分の興味に耽りながら話してゐた。
「まあ聞いて下さいよお庄ちやん。」と、女は今度の試験を、長く一緒にゐる男がまた取外して了つたことを零しはじめた。
「あんなに私が一生懸命になつて、圖書館へ通はしてやつても、駄目なものは矢張駄目なん

でせうかね―是から又一年、毎日々々お辨當を拵へてやらなけアならないのかと思ふと、私うんざりしちまひますよ。」お増は磯野に莨を吸ひつけてやりながら、哀れな聲で言つた。
「今度私磯野さんに芝居を奢つて頂きませう。ねえお庄ちやん好いでせう。」お増は歸りがけに、甘い調子で磯野に強請つた。
「あの人は芝居が何のくらゐ好きだか―。」と、お庄は後で磯野に話した。
「芳村さんには煮豆ばかり食べさしておいて、暇さへあると自分は芝居へ行つてるの。」
「ふとすると家の中江に乗換へようとしてゐるんかも知れないね。若い人から絞ると云ふ話もあるがと、磯野は笑つた。
「然うでもしなくちや、芝居道樂が出來ないでせう。」
磯野がお庄の詰めてくれた辨當を持つて、朝おそく學校へ出て行つた。
お庄は磯野の出たあとの部屋を、自身綺麗に取片着けたり、磯野の蒲團のうへに坐つて、昨夜のオルゴルを鳴して見たりした。
お庄は机の抽斗を開けて見た。抽斗からは、コスメチツクや香水のやうな物が出た。寫眞や手紙なども出た。手紙のなかには磯野が能く行つたことのある小塚から來たらしいのもあつた。お庄はそれを讀みながら、劇しい耳鳴を感じた。舌も乾くやうであつた。
晝過に、輕い夏の雨が降つて來た。お庄は着物を着替へて、蝙蝠傘を持つて學校まで出かけて行つた。そして路傍の柳蔭に佇んで、磯野の出て來るのを待つてゐた。

六十

盆時分に問屋の決算をしに出て來て小網町の方に宿を取つてゐた兄が歸る時、磯野も一緒に田舍へ行くことになつた。磯野が兄の取引先から二十圓三十圓と時借をした金の額の少くないことが、その時悉皆解つた。お庄の處へ來たてに磯野はそんな金で、軟かい着物を拵へたり、持物を買つたりして景氣づいてゐたが、湯島界隈の料理屋にもちよい〳〵昵近の女があつた。お庄と一緒に歩いてゐる時、磯野は途で知つた女に逢ふと、此方から聲をかけて、お庄を其方退けに、片蔭でひそ〳〵話をすることが度々あつた。
「あれには僕が少し義理の惡い借金もある。いつか藝者の祝儀を立替へとして其ッ放しさ。」
と、磯野は何か思出したやうな顏をして、またお庄と一緒に歩いた。
磯野が色々の女を知つてゐることが、お庄にも解つて來た。
部屋で机のなかから寫眞を出して見てゐると、磯野は手切まで取られて別れた一年前の女を又憶出した。そしてお庄の見てゐる傍で急に思着いて手紙を書きはじめた。
「厭な人ね。」と、お庄は机の端に兩肱をついて目を睜つてゐたが、行きなり手を伸して卷紙を引攫つた。
「何大丈夫だよ。如何してゐるか些と訊いて見るだけだ。」磯野はお庄を宥めておいてまた手紙を書きはじめる。
半分ほど書くと、お庄はまたべつたり墨を塗つた。
女は手紙で呼出されて、それから三度ばかり遊びに來た。二度目には自家で拵へた紙入などを、お庄へ土産に持つて來てくれて、二階で二三時間ばかり遊んで歸つて行つた。女の父親は袋物の職人で、家は新右衛門町の裏店にあつた。磯野の郷里の町へ旅稼者に出てゐた時分からの馴染で、土地で暫く一緒に暮したこともある。女は亡つた磯野の父親の氣に入で、町でも評判の好い素人くさい藝者であつた。

磯野はその女を一二度引張りまはすと、またふつつりと忘れて了つた。

亡つた叔母の弟が田舍へ歸省するときお庄はその男と約束しておいて、自分で路費を少し許り拵へて、叔父にも母親にも祕して、磯野の田舍へ遊びに行つた。叔父は海邊から歸つて、又家にぶら〳〵して居た。病氣が快くなつてゐたとも思へなかつたが、多少肉附も好くなつてゐたし、色澤も出て元氣づいてゐた。叔父は自分では肺尖加答兒だと稱してゐた。

狹い田舍の町では、姿が人の目に立つて、長くも居られなかつた。磯野とも一度鰻屋で三人一緒に飯を食つた限で、三日目の午後には、もう利根川の危い舟橋を渡つて、獨で熊谷から汽車に乘つた。

停車場で買つた五加棒などを土産に持つて、お庄はその夕方に家へ歸つた。

歸つて來たことが知れると、湯島の伯母が直に遣つて來た。

「お前まあ何てことをするだえ。」と、伯母は前から感づいてゐたお庄の不亂次を言立てた。

「田舍へでも知れて見ない、其こそ親類の好い顏汚しだぞえ。」

叔父は傍に默つてゐた。

「お安さあも、年中傍についてゐて、何をしてゐるだい。」伯母は母親にも當散らした。

叔父と伯母とのあひだに、お庄を片附けるやうな家の詮索が始まつた。伯母はその男との關係が係り縺れて來ないうちに早くお庄の體を始末をしなければならぬことを主張した。

「矢張田舍が可いらと思ふが――」

六十一

お庄を田舍へ片附けると云ふ話が、本家の從兄の出て來た時伯母の口から又言出された。

叔父の知合で、本家と同じ村から出た男に勸められて、石川島の廢れ株をうんと背負込んだ從兄は、其頃惱まされてゐた神經痛の療治旁、株の配當を受取に出て來てゐたが、そんな株に何の値打もないことが知れて來ると、急に落膽して毎日の病院通も張合が脫け、背や腕に貼り板を結着けられた自由の利かぬ體を、二階の空間に蒲團を被つて寢てばかりゐた。

株をすゝめられた時、のぼせがちの從兄が親類の誰彼と仲違までして、二度も三度も田地を抵當に入れて、銀行から金を借りた事情を、母親も傍へ聞いて知つてゐた。が是れまでに村の大火の火元をしたり、多勢の妹を片附けたりして、漸く左前になりかけてゐた身上を、盛返さうとして氣を燥つてゐた。お庄母子兄弟のことも始終氣にかけてゐた。

峠を一つ越して十里ばかり隔れた町の或る家に、丁度お庄の片附くやうな家が一軒あつた。從兄はその家のことを話して母子の心持を讀めようとした。

そこには家着の娘に養子が貰つてあつたが、この春その娘が死んだと云ふことや、病氣は肺病だと云ふ評判もあつたが、實際はそんな惡い病氣でもなかつたらしいと云ふ事や、昔からの親類關係、人柄財産の高なども、從兄は詳しく話して聞かした。

「如何だお庄さん、行く氣はないかい。」

從兄はお庄親子と三人額を突合してゐる時笑ひながら言つた。

「叔父さんの病氣も、あの様子ぢや如何も面白くないやうだし、恁うしてゐちや段々窮つて來るばかりだで、少しでも物のあるうち片附いた方が可かないかい。」

お庄はたゞ笑つてゐた。東京から離れると云ふことを考へるだけでも厭な氣がした。肺病で死んだ娘の後へ坐るのも薄氣味が惡かつた。磯野の產れ故鄕で見せつけられて來たやうな百

姓家で一生を送る人の慘さが、想遣られた。その町では、宿へ呼んで貰ふやうな髪結一人なかつた。

「如何云ふものだかね。」と、母親もお庄を手放したくはなかつた。

「東京に育つたものには、百姓家に迚も辛抱が出來まいらと思ふが――」

「百姓家だつて、野原仕事をするやうなこともないで。」

「それでも、やれ田の草取だことの、やれ植附だことの、養蠶だことのと云つて、づぶ働かないでゐる譯にも行かないでね。」

「そんな事くらゐ何でもないぢやないか。氣に苦勞がないだけでも好い。またあの位好く出來た養子もないものせえ。働くことも働くし姑も大事にする。」

母親もお庄も、我を張つて斷ることも出來ないと思つた。

お庄は日が暮れると、大通下にある磯野の叔父の家へ、時々訪ねて行つた。以前は可也の金持であつたと云ふ、磯野の叔父は素女であつた女と一緒に、その頃そこに逼塞してゐた。下谷で營つてゐた待合も潰れて、人手に渡つてから、爲ることもなく暮してゐた。

お庄は夏の末に、また出て行くと云つた磯野の言を想出しては、この叔父から、田舎の消息を聞出さうとした。

六十二

お庄と母親とが障子張をやつてゐると、そこへお増も來て手傳つた。免狀を取ると一緒になる筈の芳村が、學資の繼續問題で、秋の末に郷里へ歸つてから、お増は始終こゝへ入浸つてゐた。四つも五つも年上のこの女に附絡はれるのを煩がつて、二階にゐた中江と云ふ書生も、その頃は何處へか引越して行方が知れなかつた。

お増はお庄と一緒に、茶の室で障子を張りながら、自分の身の上の手頼ないことを話した。

お増は自分の親を知らなかつた。濱町の或遊人の家で育つたことだけは解つてゐるが、その外のことは何にも知れてゐなかつた。漸く小學校を出た時分から男と關係して、田舎の醫師の妾、藝者、前には、或石炭商の隱居の世話になつてゐた。

「貧乏に私ほど苦勞したものは有りませんよ。」と、お増は因業な障子の張方をしながら、自分のことばかり話つた。

「これで芳村が又駄目となれア、私だつて考へまさね。」

お庄も母親も人の事とばかり聞流しても居られなかつた。

奥では磯野が叔父と碁を打つてゐた。磯野が又東京へ出て來たのは十一月の初旬で、お庄は叔父や母親に隱れて、時々叔父の家で逢つてゐた。問屋の方を悉皆封ぜられた磯野は、前のやうに外を遊び行いてばかりも居られなかつた。碁敵や話相手に渇ゑてゐる叔父も、磯野の寄りついて來るのを、結句悦んでゐた。醫師の糺や藥主が來ると、直に石を消毒して、濟んだあとでも又自分の手を注意深く消毒するのが氣にくはなかつたが、それすら今は餘り相手をしてくれなくなつた。

障子張が一片着片着いてから、衆は一緒に晩飯を食べた。お増は芳村のゐない宿の部屋へ歸つて、昨日から持越の冷い飯を獨で食べる氣がしなかつた。

「話を聞いてみれば、あの人だつて可哀さうですよ、寄りつく處がないんですからね。」と、お庄は後でお増のことを噂した。

「一生懸命芳村さんに縋りついてゐたつて、その芳村さんが如何なるか知れやしない。」

お庄は然う言ひながら、奥へ茶道具[illegible]に置

かれた鏡の前に立つて、髪を直してゐた。磯野とお増と三人で、晩に寄席に行く相談が、飯の時取決められてあつた。磯野はお増に寄席を強請られると、その心算で、飯が済んでからお増と一緒に、一旦歸つて行つた。

お庄は顏も化粧り、着物も着替へて待つてゐたが、時計が七時を打つても八時を打つても誰も來なかつた。お庄はぢつとして落着いてゐられなかつた。

軒の外へ出て見ると、雨がしぶり／＼と降出してゐる。お庄は出たり入つたりしてゐたが、待切れなくなつて、傘を持出して、つい近所のお増の宿の前まで様子を見に行つた。

お増の宿は、その番地の差配をしてゐる家の奥の方の離房で、黒板塀の切戸を押すと、狭い庭から其縁側へ上るやうになつてゐる。お庄はその切戸の節穴から、私と裏を覗いてみると、離房の方の板戸は、直り締つてゐて、中に人氣もしなかつた。お庄は急いで天神の通の方へ出て行つた。

磯野の叔父の家では、漸と飯を済したところであつた。叔父は茶の室の火鉢のところに胡坐を組んで、眼鏡をかけて新聞を見てゐた。

お庄は上框の處に膝を突いて、奥の方を覗込んだが、磯野は三時頃にぶらりと出て行つた限、まだ歸つてゐなかつた。

「私アまた庄ちやんのとこだと思つたら、其奴ア可怪しいね。」叔父は然う言ひながら、また新聞に目を移した。

寄席へ入つて行くと、目をきよろ／＼させながら、四下を見廻してゐるお庄の直ぐ目の前に、磯野とお増が狎々しげに肩を竝べて坐つてゐた。

六十三

お庄は其側へ割込んで行くことも出來なかつたが、其儘そこを出る氣にもなれなかつた。幾度も聲をかけようとしたが、咽喉が渇きついてゐるやうで、聲も出なかつた。高座からは調子はづれの三味線の音ばかり耳について、二人竝んだ鈍人の顏なぞは、目にも入らなかつた。二人は時々顏を見合つて話をしてゐた。お庄は其度に胸がいら／＼した。何時か番傘を借りて行つてから顏を覺えられて了つた、近所の折を拵へる家の子息だと云ふ顋の長い中賣の男が、姿を見つけて茶を持つて來ながら、

「お連さんがそこへ來て入らつしやいやすよ。」

と言つて其顎を杓つた。その時にお増が後を振向つた。磯野も振向つた。

お庄は開けてくれた磯野の右側の方へ座を移した。

「人を出抜いたり何かして随分ね。私を誘ふと云ふ約束だつたぢやありませんか。」と、少し強いやうな調子で言つた。

此前にも夜天神を散歩してゐる時、お増は浮いた調子で磯野に歌を謳つて聞せたり、暗いところをしな垂れかゝるやうにして歩いてゐた。その時は男に媚びることに慣れてゐる厭味な此女の然うした癖だと思つて見て見ぬ振をしてゐたが、爾うとばかりに濟してゐられなくなつた。

「然う云ふ譯ぢやないのよお庄ちやん。」とお増は小さい可愛い手頭に摘んだ巻莨などを喫して、「誘はうと思つたけれど、もう時間も遅かつたし必然お庄ちやんが先へ來てゐるだらうと思つたのよ。決して出抜いた譯ぢやないんですから、何卒惡からずね。」

御簾がおりてからも、二人は暫くそんなことを言合つた。

「まあ可いぢやないか。己が惡かつたんだから。」と、磯野は制した。

お庄は世間擶れした年上の女に、然う突か

お庄は途中まで出て行つたが、矢張その部屋のことが氣にかゝつた。家へ歸ると、母親が一人火鉢の處に坐つてゐた。お庄は其側に寄つて行くと、叔父の冷つてゐる座蒲團を側へ退けて坐りながら、不興氣に火を搔廻してゐた。自分獨では口上手のお增と喧嘩をすることも出來なかつた。磯野の氣心も解らなかつた。

「また喧嘩でもして來たらうえ。」と、母親は何を言ひかけても、お庄がつんけんしてゐるので、腹のなかで然うも思つた。此迄にも、お庄は磯野と能く言合をした。天神下の叔父の家で、友達と一所に酒を飲んで、それから一同遊びに出かけようとしてゐる處へ行合せた時も、外へ出てから雨のなかで喧嘩を始めて、傘で腕を撲たれたりした。女を引張込んでゐる處へ踏込んで行つたこともあつた。

お庄は押入から夜具を降してゐながら、ぴしやんと閉てつけた戸と柱の間へ挾んだ指を舐めながら、「お痛い。」と大袈裟な聲を立てて突立つてゐた。母親が戸締をしてから其處へ寄つて來た。

「外で氣に喰はないことがあつて、家で然うぷりぷりするものぢやないよ。手が如何かなつたかえ。舐めてやらうかい。」と笑つた。

「阿母さんに舐めてもらつたつて爲樣がないわ。」と、お庄は囁きながら、矢張突立つてゐた。胸がむしやくしやして、其まゝ床に就く氣もしなかつた。

寢てからも、お庄は始終外を通る人の跫音に氣をいら〳〵させた。

翌朝床を離れて手洗をすますと、お庄は急いで、お增の宿まで行つて見たが、切戸はまだ締つてゐた。隙間から覗くと、沓脱の上にあつた下駄も取込んだらしく、板戸も直り締つて、日當の惡い庭の、立枯の鉢植の菊などが目についた。差配の方の格子戸もまだ開かなかつた。お庄は暫くそこを彷徨してゐた。

晝少し前に、お庄が臺所で飯の支度をしてゐる處へ、磯野はぶらりと遣つて來た。そして奥で叔父や母親に調子を合せて、何やら話込んでゐた。お庄はその顏を一目見たきりで口を利くことも出來なかつた。

飯の支度の出來た時分に、磯野は母親の止めるのも聞かずに、そは〳〵した風で歸つて行つた。

お庄は目に涙を入染ませながら、臺所の方から出て來ると、「昨夜のこと如何したんです。」と出口で外套を着かけてゐる磯野に聲かけた。

「如何もしやしないよ。」と、磯野はにや〳〵笑ひながら、「後で遊びにおいで。」と言つて出て行つた。

六十五

田舍にゐる芳村の許へ、友達が私と電報を打つてやつた時分には、磯野は公然にお增の部屋に入込んでゐた。

紺や芳村の友達仲間に後援をされて、或晩お庄が磯野を連出しに行つた時、お增は丁度臂を切つてゐた。磯野も褞袍などを着込んで、火鉢の前に構込んでゐた。その前にも、お庄は天神の年の市に二人一緒に歩いてゐるところを人中で見つけて、一度お增に突懸つて行つた。

「貴方も何か惡いことがあるから、家へ寄着かないんでせう。私ちやんと知つてゐますよ。隨分酷い人ね。」とお庄は暗いところで、磯野に厭味を言つてからお增を詰つた。

「お庄ちやん、貴方には濟まないが、お察しの通りよ。」とお增は磯野を庇護ふやうにして落着きはらつてゐた。

「恁うなれば、意地にも磯野さんは私が一緒になつて見せますよ。お氣の毒ですけれど、まあ然う思つて貰ひませうよ。」お增は假聲のやう

な調子で言つた。
「爲方がないから磯野さんも、お庄ちやんに分明した挨拶をして下さい。」
「そんなことを言ふもんぢやないよ。此處で逢つたんだから、先に一緒に歩かう。」と、磯野は二人を明るい方へ連出して行つた。
それからも逢つて、話をするやうな折もなかつた。
お庄は夜になると、能く一人で家を脱出して、お増の部屋の切戸の外に立盡してゐた。
「お前が騒ぐから尚不可い。」と、母親は窘めたが、お庄は靜としておけなかつた。
紀や芳村の友達が集つて、そんな相談をしてゐる時も、叔父は棄てておく方が可いと言つて、傍で笑つてゐたが、一同はお庄を連れて押しかけて行つた。
「誰の許で貴方は人の家へなんか入つて來ました。家宅侵入罪ですよ。」と、お増は可怕い目をして、磯野を外へ連出す心算で、獨で入込んで行つたお庄を睨めつけながら呶鳴つた。
「可いぢやありませんか。私は磯野さんに用事があつて來たんですから。貴方こそ誰に斷つて磯野さんなどを斯樣な處へ引張込んでゐるんです。」
「引張込まうと如何しようと私の勝手ですよ。その爲に、貴方にもお斷りしたぢやありませんか。」
「いゝえ、私はまだ磯野の口から、一言も斷つたと言はれたことはありません。貴方だつて、芳村さんと云ふ人があるぢやありませんか、餘りづう／＼しいことをなさると私吩咐けてやるから可い。」
「えゝ好いんですとも。芳村が歸つて來たつて、私逃げも隱れもするぢやありません。餘計な心配などして頂かなくとも、私が綺麗に話をつけて別れますよ。憚りながら、そんな意氣地のないお増ぢやありませんよ。」
二女は長い間、凄い勢ひで言合つた。傍で制する磯野の詞も耳に入らなかつた。
「貴方になぞ係合つてゐませんよ。」と、お庄は終に磯野の方へ向いて、
「磯野さん、ちよつと其處まで私と一緒に來て頂戴。」
「お氣の毒ですが行きやしませんよ。磯野は私の良人です。」
お庄は紀や友達に呼出されて、其まゝ引取つた。田舍から出て來た芳村は、上野へ着くと直其足でお庄の家へやつて來た。友達からの報知を受取つた時、芳村は何のことも想像がつかなかつたが、直宿へ乘込むのは不得策だと云ふことだけは、電文にも書入れてあつた。
一同から事情を聞いてから、芳村は自分の宿へ歸つて行つた。

六十六

其晩芳村は行き切であつたが、お増と綺麗に手を切つたことは、翌朝芳村が友達の處へやつて來てから、漸と解つた。その事を話しに二人はお庄の處へも遣つて來た。
芳村は旅の疲勞やら、昨夜の騒やらで滅切顔に窶れが見えた。今朝友達の宿で飲んだ酒の氣もまだ殘つてゐた。
「それにしても可哀さうな女です。彼自身も思ひ設けない結果になつてしまつて――。」と、芳村はまだ女の心持を憫んでゐた。
「それにしても隨分づう／＼しいやね。」と、友達は芳村から聞いた昨夜の事情を、お庄や母親の前で話した。磯野とお増とが、芳村の顏を見ると、行きなり二人が然うなつた動機を話して、芳村にも同情してくれろと言つたことや、お増が部屋にあつた色々の世帶道具や夜の物、行李のなかの芳村の持物までを強請つて、大方殘つ

「東京で開業なさるなら、資本ぐらゐは家で如何にかしますよ。」と、その娘は伯母の前にも公然に言つてゐた。

紋が田舍の身内續きの或醫者の家を繼がなければならぬことになつてからも、この交際は續いて居た。その頃には、畫家から籍を取復されて、娘に養子が迎へられた

この女が、母子と一所に有餘る財産を持つてゐながら、何時着物らしい着物を引張つてゐたこともなく、顔に白粉一つ塗らずに、克明な姿をして、家賃を取立てて歩いてゐるのがお庄には不思議なやうであつた。化けものの美術家に緣づいて、若い盛りを嫌な借金取の分疏に過して來た話を、お庄は時々この女の口から聞された。

この家へ、紋や祭三と一緒に、正月カルタを取りに行つた時、女はしみ〴〵した調子でお庄に緣談を勸めた。

「何處か堅いところへ速くお片附なさい。矢張商賣屋が好いんですよ。商ひは何といつても強ござんすからね。」

女は父親の死ぬ間際に、質に入つてゐる着物が出せなくて、見舞に來ることも出來ずにゐた時の切なかつたことなどを、また新しく語りだした。晝間煩く借金取に襲はれる畫家は、夜戸締をしてから、漸と落着いて畫板に向ふことが出來た。幾晩もかゝつて其繪が出來揚つてから、久振で漸く父親を見舞つた頃には、病勢がもう餘程進んでゐた。女の體は、それ限實家へ押へられて了つた。

眼鏡屋の話は、その晩も母子の口から言出された。そこは可也に古い店で、財産と云ふほどのものも無いけれど、子息は小さい時から大事にして育ててあつたから、世間擦のしてゐるやうなこともないし、母親は少しは藝事なども出來て、氣爽な女だから、そんなに窮屈な家ではなからうと云ふことであつた。

磯野との關係を深くも知らない此の母子の前で、お庄は應答の爲樣もなかつた。纏まつて何一つ躾けられたことのない體で、そんな母子のなかへ入つて、日が暮せさうにも思へなかつた。

その子息が、遊びに來てゐる時、お庄は迎を受けて、湯島の伯母に連れられて爲うことなしに出て行つた。

「改まつた姿をして行くには及ばんで、羽織でも一枚上へ引被けて……。」と、母親と二人、支度でごた〳〵してゐる奥の方へ伯母が聲をかけた。

子息は茶の室の火鉢の處に坐つて、老人と茶を呑んでゐた。撫肩の男の後姿が、上[illegible]障子の腰硝子から覗くお庄の目につい[illegible]同時に振顧つた男ののつぺりした色白な細面も、瞥と目に入つた。

裏口の方へ廻されたが、お庄は其處からも入り得ずに、やがて逃げて歸つた。

六十八

春の末に郊外の或町へ片附いて行く[illegible]、お庄は家にぶら〳〵してゐた。

その町は飯田町から汽車で行つて、[illegible]はかりの道程であつた。家は古い料理[illegible]、東京から新井の藥師やお祖師樣へ參詣する人[illegible]寄つて飲食する場處であつたが、土地[illegible]も少くなかつた。中野の方の電信隊へ通[illegible]ゐる[illegible]校連も、時々來ては騷いだ。

四谷に緣づいてゐる父方の從姉の家へ[illegible]してゐる男が、その家を能く知つてゐた[illegible]から、大藏省へ出てゐる從姉の良人と[illegible]間に其樣な話が[illegible]ることになつた。

それ迄に、お庄は二度も三度も四[illegible]家へ遊びに遣された　從姉の家と[illegible]

だ打絶えてゐた。互に居所も知らずにゐたのが、此三月頃田舍から出て來た人の口から、ふと其消息を聽くことが出來た。古い頃の早稻田を出たと云ふ其良人の淺山は、或會社の外國支店長をしてゐる自分の姉の添合の家宅の門內にある小さい家に住つてゐた。家には、幼い時に二度逢つた限で、顏も覺えてゐない從姉の母親も一緒にゐた。

媒介人はそこでお庄を見てから、思ひついて雙方へ口を利くことになつた。

先方の家の母親だと云ふ、四十四五の女が、媒介人と一緒にお庄を見に來たとき、お庄は淺山の晩酌の世話をしてゐた。下の病氣で始終惱されてゐた從姉は、頭が痛むと云つて奧で臥つてゐた。

むかし品川で藝者をしてゐたとかいふ其母親は、脊の小肥に肥つた、口容に愛嬌のある鼻の低い婆さんであつた。半衿のかゝつた軟かい着物のうへに、小紋の羽織などを拔衣紋にして、淺山が差してくれる猪口を兩手に受けなどして、お庄にもお愛想を言つてゐた。

お庄も酒の酌をしてゐたが、この婆さんの氣質を知らうとして、時々顏色を見てゐた。

「一家は別に難しいことはございません。お爺さんはもう極氣の好い人ですし、私も此ッきりの人間なのですから、唯子息のお守をしてもらひさへすれば其で好いのです。」と、母親は歸りがけに、ずつと打釋けたやうな調子で、猪口を淺山にさしながら言つた。

少年のやうな顏をした淺山は、ぐつり／＼した調子で、媒介人とこの婆さんとを相手に、ちびちび何時までも後を引いてゐた。そして時々お庄の失笑すやうな笑談口を利いた。お庄は奧の方へ逃込んで行つた。

母親の話では、嫁が巧く落着いてくれて、錢遣の荒い子息がそれで締つてくれさへすれば、自分等夫婦は早晚商賣を若夫婦に讓渡して、この春建てた裏の離房へ別居して了ひたいと云ふことであつた。自分が來て世話を燒くやうになつてから、メキ／＼商賣が繁昌するやうになつたと云ふ自慢談も出てゐた。

婆さんが媒介人と一緒に、好い機嫌で歸つて行つてから、從姉は鬱陶しい顏をして、茶の室へ出て來た。淺山は手酌で、まだ其處に飮んでゐた。

「どうだお庄さん行つて見るかね。己のやうな安官員のところなぞへ行つて、年中びい／＼してゐるよりか、何のくらゐ氣が利いてゐるか知れないよ。」淺山は景氣づいて言出した。淺山が何彼につけて、始終實姉の家の厄介になつてゐることは、お庄も從姉の愚癡談で知つてゐた。

「腰辨當こそ駄目よ。」と、從姉も毛羽立つた頭髮を押へながら呟いた。

「お庄の前祝ひに、私も一つ頂きませうかね。」と、酒ずきな伯母が傍から淺山に猪口を催促した。

お庄は伯母にも愛想よく酌をしてやつたが、まだ其處まで氣が進んでゐなかつた。

六十九

婚禮の日にも、お庄は母親と一緒に、晝間から從姉の家に行つてゐて、そこから媒介人夫婦と淺山夫婦とが附いて行くことになつた。

四谷から汽車に乘つたのは、其日の夕暮であつた。線路沿の濠端には櫻ばかりが殘つてゐて、暗い客車の窓には若葉の影が流れた。お庄はもう其樣な時節かと思つて、初めて其處等を見廻した。先が急いでゐたのに叔父の手許が苦しく、持つてゐる物も、其日の間に合はすことも出來なかつた。じみな色合の紋附の上に、衿の型の少し古くなつたコートを着て、手に指環一つないのが心淋しかつた。

た。何時も其頃になると、お庄は東京を憶出してゐた。
　こゝへ来る少し前に、茨城の方から叔父の處へ長い手紙を寄越したお照のことなどが、思浮べられた。叔父が悪い病氣に罹つてからも、一日も傍を離れなかつたお照は、田舎から持つて来た着物まで無くして、終に遣切れなくなつて、姿を隠してしまつた。それが茨城まで流れて行つたことは、叔父も知らなかつた。手紙には相變らず狂氣じみた文句ばかり並べてあつたが、何をして暮してゐるかと云ふことを考へると、人事の様にも思へなかつた。
　女達は、そこに置忘れて行つた敷島を吸ひながら、客の品評などを為合つてゐた。此女達も方々を渉り歩いて、色々の男を知つてゐた。いつも能く来る中野の陸の方の、若い將校連の風評なども出た。
　こんな連中にも評判の好い洋服屋の様子は、お庄にも悪くはなかつた。男はお庄に東京へ出たら、是非店へ遊びに来いと言つて、其所を委しく教へてくれた。お庄のことも色々聞きたがつた。お庄は女達に其事を色々言はれた。
「私は彼様なのつぺりしたやうな人嫌ひですよ。」と、お庄は顔を背向けながら言つた。
「それでも家の芳ちやんよりかも可いでせう。」と、年増の方の女は、そこにべつたり坐つてゐた。
「芳ちやんも可哀さうね。」と、若い方の女は、卓袱臺の上を拭きながら呟いた。
　八時頃に、お庄はお袋に斷つて、一寸四谷まで出かけた。何だか今夜は家にぢつとしても居られなかつた。
　停車場前まで来ると、前の床屋で將棊仲間に加はつてゐた芳太郎が、直にお庄の姿を見つけた。お庄が客の前へ出るのを、芳太郎は快く思はなかつた。そんな時には必然料理場で菰冠の飲口を抜いてコップで酒を呷つたり、お袋に突かゝつたりした。然うした擧句に、金を掴みだして、ぷいと家を飛出して行つた。手近に金のない時は、板片の端に黐をつけて、錢函の中から銀貨を釣出した。
「家のものは皆己のものだ。己の物を己が持出すに不思議はない。」
　芳太郎は慥う云つて、錢函の前に、どかりと胡坐をかきながら、銀貨の勘定をしてゐた。
「それが厭なら、身上を速く己に渡すがいんだ。」と、駄々を捏ねた。
　親父は苦い顔をして、帳場の方を見ぬ振をしてゐた。
「誰が此の身上を作つたとお思ひだい。其廻お言ひでないよ。」と、お袋は窘めたが、強ひて止めることも出来なかつた。お庄が来る少し前に、親子の間が揉めて暫く家を出てゐた親父を、また引張込まうとして大喧嘩をした時、外から食酔つて歸つて来た芳太郎に、刃物を振廻されたことが、お袋にも氣味が悪かつた。
　芳太郎は金を持出して行くと、宿の方へ入浸つて、二日も三日も歸らなかつた。お庄が来てからも、新婦の仕打に癇癪を起して、夜中に家を飛出すことも希しくなかつた。
　お庄はぷり／＼して出て行く芳太郎を送出すと、私と戸締をして、また寝所へ復つた。そして樂々と手足を伸して、甘い眠に沈むのであつた。

七十三

「おい／＼。」
　母屋の店から、芳太郎が聲をかけた。お庄は默つて行過ぎようとした。
「おい、お庄どこへ行く。」と芳太郎は後から追ひかけて来た。
「四谷の從姉さんとこまで行つて来ますの。」

と、お庄は振顧りながら言つた。

「何しに行くんだい。」芳太郎は眥けかゝつた太い白縮緬の兵兒帶をぐる〳〵卷きつけながら、「お前今夜は歸りやしないんだらう。己も一緒に行かう。」

「人に嗤はれますよ。」と、お庄は後齒の下駄を鳴しながら、停車場へ入つて行つた。

お庄が切符を買ふと、芳太郎も改札口から金を出して同じやうに四谷行を買つた。

「一緒に行つたり何かして、後で叱られても可いんですか。」お庄は念を押しながら埒の外へ出て行つた。

お庄は內密で、從姉に色々話したいこともあつた。此前にも一寸從姉の耳へ入れておいた家の樣子や自分の立場について、媒介人の利いた口と大した相違のあることを、今一度委しく話して見たかつた。

「可いんだよ。」と、芳太郎は耳に挾んでゐた兩切の莨に火を點けて喫ひながら、お庄の傍を離れなかつた。帽子もかぶらない顏が蒼白く、目の色も濕んでゐる。二人は此頃、滅多に話をするやうな折もなかつた。芳太郎は晝間も酒の氣を絶さず、夜はまたふら〳〵と其處らをほつき廻り、友達と一緒に宿場を覗き歩いた。

お庄は時々お袋から吩咐かつて、心の荒びたやうな男の機嫌をも取らなければならなかつた。

座敷の閑な時は、お庄も寄りついて來る芳太郎と一緒に偶には打解けた話をすることもあつた。隱し立てのない芳太郎の口から、お袋や親父の噂を聞出すのも興味があつたし、芳太郎の關係した女のことを知るのも面白かつた。

「お前が出て行けア、己だつて家にア居ねえ。」と芳太郎は駄々ッ兒のやうに言出した。

そんな處を見つけると、お袋は直に厭な顏をした。

「ふざけて居ちや不可いよ。」と、お袋は呶鳴りつけて、お庄に用事を吩咐けた。

酒で頭腦の爛れたやうになつてゐる芳太郎は、汽車のなかでも、始終いら〳〵して居た。そして時々獨語のやうな棄鉢を言つた、金を攫つて家を逃出してくれるとか、お袋を撲殺して商賣をするとか、そんな事をすらお庄の耳元で口走つた。是迄にも、醉つて正體がなくなると、芳太郎は、時々然うした口吻を洩した。

お庄は暗い窓の外を眺めながら、頻に笑つてゐた。

新宿まで來た時、お庄は芳太郎と一緒に降りることにした。然うでもしなければ、男を撒くことが出來ないと考へた。

停車場を出ると、二人は竝んで暗い片側町を歩いてゐた。芳太郎は時々狂氣の發作のやうに、お庄の手を引張つて、明の影もない草ツ原に連出した。足場の惡い草叢には處々に水溜が、ちら〳〵と空明に黒く光つた。お庄は消魂しい聲を立てながら、芳太郎の手に攫つてそこを渉つた。四方はシンとしてゐた。

廣い通へ出ると、兩側の妓樓の二階や三階に薄暗い瓦斯燈が點れて、人影がちらほら見えた。水淺黄色の暖簾のかゝつた家の入口からは、奧に色硝子の障子の嵌つた中庭や、つる〳〵した古い光澤のある廊下段梯子などが見透された。芳太郎は時々そこらの門口に立佇つた。

「今夜中に、私きつと歸つてよ。」と、お庄が漸と芳太郎と手を分つたのは、それから大分經つてからであつた。

お庄は大木戶から俥を傭つて、荒木町の方へ急がせた。二度と歸つて來るやうな氣がしてゐなかつた。

七十四

荒木町の家では、從姉が相變らず色澤の惡い

て來た。本家が銀行から差押を喰つて、ふたゝび庫を封ぜられ、若い主が取詰めたやうになつて氣の狂出したと云ふ消息の傳はつたのは、お庄が行つてから間もないことであつた。
　頭腦に異狀のある本家が、わざ／＼町から診察に來た醫師の頭を、撲りしたと云ふことを言出して、正雄もお庄も、腹を抱へて笑つた。
　宵から奥で寢てゐる叔父が、目をさましたと見えて、力ない咳の聲が洩れて來た。

七十六

　家へ歸つて行つたのは、其翌々日の午後であつた。それ迄お庄は伯母の家へ行つたり、親しい近所の家を訪ねたりして遊んでゐた。伯母の家では、不相變皆と花など弄いたが、其間も心は始終今の家に辛抱して可いか惡いかと云ふことに就て思惑うてゐた。
「前途に見込がないから、私もう彼處を逃げて了はうかとも思つてゐるんです。」と、お庄は思斷つて伯母や糺にも、自分の心持を打明けてみたが、二人とも餘り眞面目に聞いてもくれなかつた。
「そんなことを言つて、今家へなんか歸つて如何する心算だい。」と、伯母は頭ごなしに言つて、先の家の深い事情などには、碌々耳へもしないらしかつた。
「妾なことをして、中へ入つた淺山の顏を潰すやうでも惡いぢやないか。」と、糺も言つた。
　始終聞きたい／＼と思續けてゐた何時やお増のことを、お庄は時々言出さうとしたが、それも詳しくは二人の口から聞出すことが出來なかつた。
「何だかまた別れたとか云ふ話だぜ。」と言つて糺は笑つてゐた。
　芳村が前から能く行きつけてゐた集會所の娘と約束が出來て、そこへ荷物を持込んで引越すやうになつてから、お増がまた氣を焦つて、此頃では礒野の手を離れて、芳村との關係が舊へ復つたとか、芳村がお増を何處かに隱しておくとか云ふことだけは、糺の話でも解つた。お庄は礒野と自分との緣が、また何處かで繋がれてゐさうな氣もして、懷しいやうであつたが、此方から訪ねて行く心にもなれなかつた。
　お庄は、叔父が愈田舍へ歸るやうになつたら、些と報してほしいと其事を母親に賴んで歸つて行つたが、途中で小石川の傳通院前の赤門の家で占の名人のあると云ふことを想出して、ふと其處へ行つて觀てもらふ氣になつた。占や御籤は是迄に、度々引いて見たことがある。礒野との緣が切れさうになつた時も、淺山の地內で觀てもらつたし、今の家へ行く時も、わざ／＼水天宮で御籤を引いた。其時の籤は其樣に惡くもなかつたが、三十過ぎる迄は、心に苦勞が絕えないと云ふやうなことは、一二度易者にも聞かされた。着ることや食ふことには大して不足もないが、處るところが未だ決らないと云ふやうなことも言はれた。
　赤門では其日が丁度休日であつた。お庄は更に傳通院橫にある、大黑の小さいお寺へ行つて、其處に出張つてゐる法師に見て貰ふことにした。
　派手な衣を着けて、顏のてら／＼したその法師は、じろ／＼お庄の顏を見いみい水晶の珠數玉などを數へてゐたが、示されたことは餘り望ましいことでもなかつた。法師は古びた易書を繰つて、卦などを讀んで聞かせた。
「貴方の心は、今二つにも三つにも迷つてゐる。」と、言つて、お庄が亭主運のまだ決つてゐないことや、今居る場所と動かうとしてゐる方角の好くないことなどを說いて聞かせた。孰にしても、當分足搔がつかないと云ふことだけは確められた。

お庄は銀貨を一圓紙に捻つて、傍に出してあつた三方の上に置いて、そこを出て來た。出る時、俥で乘着けて來た一人の貴婦人に行逢つた。その婦人は錦紗の合財袋を提げて、ぱツとした色氣の羽二重の被布などを着け、手にも寶石のきら／＼する指環を幾個も嵌めてゐた。夫人は法師に目禮をすると、直にどたばたとお庄等の控へてゐる傍を通つて、本堂の奥の方へ入つて行つたが、其を見受くる法師のしを／＼した目元には、卑しいやうな笑が潜んでゐた。

お庄は何となし物足りぬやうな暗い心持で、夏の日ざしの強い傳通院前の廣い通を、片蔭づたひに歩いてゐた。

七十七

「お前は帳場に見張をしてゐておくれ、芳が來てまた鳥目を持出すと可けないから。」と、お袋に然う言はれて、お庄は店の方へ來て坐つてゐた。

爺さんは二三日東京へ出てゐて、留守であつた。お庄が歸つて來る前に、親子三人のあひだに大揉があつて、お袋も爺さんに頭腦を絶か撲られた。お庄には深い事情の解りやうもなかつたが、牛込の自分の弟の處に様子聞合になつてゐる親爺の添合や子供のことから、時々起る紛紜が、その折も二人の間に起つてゐた。お庄が四谷へ行つたきり歸らなかつたことも一つの問題であつた。芳太郎が其事で暴れ出して、二人に突かゝつて行つたのが、一層騷を大きくした。

お庄が歸つて來た時分には、家が閑寂してゐた。お袋は頭が痛むと云つて結髮のまゝ氷袋をつけて奥で寢てゐたし、芳太郎もそこらで自棄酒を飲んで歩いて家へ寄りつきもしなかつた。

奥の客座敷で、お庄は年增の女中から其話を聞いて、體がぞく／＼するほど厭であつた。お庄を速く呼還せと云つて、芳太郎がお袋と長いあひだ悶着した擧句に、矛先が爺さんの方へも移つて行つた。お袋が死んで了ふと云つて、素足のまゝ帶しろ裸で裏へ飛出して行つたことや、狂氣のやうに爺さんに武者振ついて泣いたことなどを、女中は手眞似をして話した。

「お爺さんが獨でゐさへすれば、何のことはないんでせうがね。」と、世帶崩しの此女中は、婆さんの男意地の汚いのを憎んだ。

「自分が穉い時分から育てた芳ちやんが、まんざら可愛くないこともないんでせうけれど、矢張あのお爺さんと別れられないんでせうよ。お爺さんだつて、今となつちや手おや出て行きやしませんからね。」

お庄は、お袋からは何のことも聞かされなかつた。

今日もお袋は、朝のうち料理場や帳場の方を見廻つてゐたが、まだ顔色が悪く、氣も取亂したまゝであつた。そして掃除がすむと神棚へ切火をあげて、お庄と一緒に帳簿に向ひながら、是迄に自分の苦勞して來た話などをして聽かした。

「何も辛抱ですよ。辛抱のない人間は何處へ行つても駄目だよ。」と、お袋は、東京へ行つて二日も歸らなかつたお庄の心が、まだ十分こゝに落着いてゐないのを淋しく思つた。

晩からお袋は、また頭が痛むと云つて奥へ引込んで行つた。

三時頃、お庄は帳場の格子の中で、新聞の三面記事に讀耽りながら、然うした世間と自分の身のうへなどを色々に考へてゐた。暑い外には折々荷車が通つて、燥ぎ切つた砂埃がぼこ／＼と立つた。箪笥や鏡、嫁入道具一式を賣る向の古い家具屋の前に置いた天水桶に、燃えるやうな日が赫々と照して、薄暗い陳列所の硝子のなかに、色々

について、手切の金の算段にも出歩かなければならなかつた。

「僕はあの時の間が來て、實に酷い目に逢はされた。」と言つて、磯野は涙を出しながら愚癡を零した。

　お庄は終に笑出した。

「お庄ちやんも、此處に辛抱おしなさい。こゝの家には、相當に金もあると云ふぢやないか。」と、磯野は手帕で眼鏡を拭きながら、お庄の顏を眺めた。

「どうですか。何だか餘り面白いこともないんですけれど。」と、お庄は自分の立場を打明ける氣にもなれなかつた。

「然し湊だね、何にも取らないで話ばかりしてゐちや。」と、磯野は氣にし出した。

　お庄は然うして長く坐込まれても困ると思つた。母屋の座敷で晝寢をしてゐる芳太郎のことも氣にかゝつたが、左に角酒だけは出すことにした。少時してから、卵燒に海苔などお酒と一緒に上衣を脱いで寛いでゐる磯野の前に持運ばれた。

七十九

　磯野がちび／＼酒を飲んでゐる間も、お庄はちよい／＼母屋の方を氣にして覗きに來た。磯野は切揚げさうにしては、また想出したやうに銚子を吩咐け／＼したが、お庄が傍ではら／＼するほど、氣が焦れて話がこじくれて來た。

「僕はこゝの家の人に紹介して貰はう、そしてお庄ちやんのことも頼んで行きたいと思ふが惡いかね。」磯野は衣兜のなかから、帳場へおく祝儀などを取出して、お庄の前におきながら言つた。

「そんなことを爲なくとも可いんですよ。却て可笑しうござんすから。」と、お庄は押戻した。

「芳太郎といふ人にも、此處でちよつと逢つて行からぢやないか。僕は第三者として、お庄ちやん夫婦のために聊か健康を祝したいと思ふ。」と酒の廻つた磯野は芝居じみたやうな調子で、眞面目に言出した。

「それも可笑しいでせう。家は今少しごた／＼してゐるんですよ。」と、お庄は逆人肌のやうな處のある芳太郎を、磯野に見らるゝのも厭であつた。

　日が翳りかゝる時分に、磯野は漸と歸つて行つた。

　お庄が帳場へ勘定をしに行つた時、何時の間にか起出して、庭の植木に水をやつてゐた芳太郎が、橋廊下の上の方に行つて、煙草を喫しながらうつとりした顏をして居た。廊下に雜巾がけをしてゐた年増の方の女中が、手を休めて此方に凭れながら、芳太郎と何か話しをしてゐる處であつた。

「お客さまはもうお歸りですか。」と、女中は落ちかゝつた着物の裙を帶の間へ押込んで、また働きはじめた。西日を受けた廊下の板敷は、砂埃でざら／＼してゐた。

「ちよいと勘定なんですがね。」と、お庄は立停つて、芳太郎に聲かけた。

　帳場へ上つて來た芳太郎の目には不安の色があつた。

「お前にあんな親類があるなんて、何だか可笑しいぢやないか。」と、芳太郎は昔仲の言きはじめながら詰つた。

「私にだつて親類がありますとも。」と、お庄は顏を赧めながら言つた。

「それぢやお前の何に當る人だ。」

　お庄はへどもどして、もう口が利けなかつた。目にも涙が出た。

「お前の親類が、座敷へあがつて酒を飲むなんて、變ぢやないか。」

「え、だから皆さんにもお目にかゝるつて、然

ら言つたんですけれど、阿母さんは加減がわるいし、貴方だつて、今まで寢んで入らしつたぢやありませんか。また其ほど近しい親類でもないんですもの。あの人が思ひがけなく此處を通つて、一寸寄つたまでなんです。」

「巧く言つてら。四谷へ行つて聞いて見るから可いや。」

「え、可いんですとも。私そんな譃なぞ吐きやしませんよ。」

暫く言合つたが、お庄は祕し遂せないやうな氣がした。そして袂で顏に入染出る汗を拭きながら、默つて裏口の方へ出て行つた。

女中に呼びに來られて出て行つた時分には、磯野は書付を前に置いて、座敷に茫然してゐた。

お庄は目に涙を一杯溜めてゐた。

「如何かしたの。」と、磯野は薄笑をしてゐた。

少時してから、勘定が足りなくて、磯野のもぢもぢしてゐる事が解つた。

「勘定なんぞ如何でも可いんです。」と、お庄は邪慳さうに言つたが、磯野はまだ其處に忸怩してゐた。

八十

磯野を送出してから、お庄は暫く座敷に茫然してゐた。磯野はまだ話したいこともあるから、金助町の方へ來たら、一度訪ねてくれと、帶の紐を結びながら言つてゐたが、お庄は磯野の此處へ來たことを、伯母たちの耳へ入れたくないと思つた。十八の年に初めて男に逢つたのが磯野で、それから三年ばかり關係してゐた。田舍から出て來てからは、磯野も比較的落着いて勉強してゐたし、お增の事件さへなければ二人の交情は何のこともなく續けられたかも知れなかつた。磯野も始終氣の移つて行く男だから、あれで別れて反つて好かつたやうにも思へたが、やきもきして此方から騷を大きくした傾のあつたのが可悔しかつた。

お庄はそこに坐つて少し許り銚子に殘つてゐた酒を注いで、獨で飲んだ。器などの散つた部屋には今まで射してゐた西日の影が消えて、野良くさい夕風が吹いてゐた。お袋の耳へ入れば、如何せ一騷持上らずには濟まないだらうし、もう長くは此處にも居られないやうな氣がしてゐた。書付ばかり持つて帳場へ行くのも厭であつた。

お庄は勘定前を合さうと思つて、帶の間の財布から自分の小遣を浚け出して、磯野の置いて行つた仲居と一緒にとつてある處へ、芳太郎が入つて來た。お庄は急いで財布を帶の間へ挾んだ。

「情人でも何でもないものなら、お前さん自身を切る譯はないぢやないか。家だつてお前の親類の人から、勘定を取らうとは言やしまいし。」芳太郎はお庄の側へ來て、胡坐を搔いておなかから言つた。もう盃を捻つて二三杯呷つて來たらしかつた。

「それア然うですけれどもね、然うしないと私も何だか厭ですから。」と、お庄は氣味惡さうに其處らを片着けはじめた。

「まア其樣なことは如何でも好いや、お前に誤魔化されるやうな己ぢやないんだからな。」

「それは然うですとも。私もこんな心算で此方へ來たんぢやないんですよ、話と實際とは、隨分違つてゐたんですからね。」

がちやがちやと軍刀の音をさして、何時も來て飲む大隊の方の將校が、二人門の方から入つて來て、緣側へ腰かけて靴を脱いだ頃には、芳太郎もお庄も大分頭が熱してゐた。芳太郎はそこにあつた、盃洗を取つて投げつけるし、お庄は胸から一杯に水を浴びながら、橋廊下の方へ逃げて行つて、手帕で頸首などを拭いてゐた。

芳太郎はまた空の銚子を持つて、部屋を飛出した。
　こゝの家の様子を能く知つてゐる、頭の禿げた年取つた方の將校は、ふら／＼と追つかけて行く芳太郎の姿を見ると、次の部屋から出て來て見た。
「おい／＼如何したんだい。」と、その將校が聲をかけた時分には、お庄はもう素足で庭へ飛出してゐた。
　暗い物置のなかへ逃込んだお庄が、料理場から引返して來た芳太郎に隅の方へ押へつけられて、目のうへで刺身庖丁を振廻されてゐるところを、將校も母親も駈けつけて行つて、漸と取押へた。刃物を捥取られた芳太郎が、披けた胸を苦しげな荒い息に波立たせながら上へ引張りあげられると、お庄も壊れた頭髪を手で押へながら眞蒼になつて物置を出て來た。そこらはもう暗くなつてゐた。
　その晩、牛込から親父が呼寄せられた。
「脅かすんだよ。私なんざ慣れッこで平氣なのさ。」と、お袋は暫振で歸つて來た爺さんと、酒を飲みながらお庄に言つた。
「こんな事は、四谷なぞへ行つて、餘り饒舌つちや不可いよ。」お袋は恁う言つてお庄に口留をした。
　芳太郎も醉がさめると、早くから奥へ引込んで寢てしまつた。

八十一

　爺さんが來て、また帳場に頑張ることになつてから、芳太郎は暫く四谷の媒介人の家に預けられた。
　その話が決まるまでには、お庄も媒介人から事をわけて色々に言つて聴された。火災保險の重立ちの役員であつた媒介人の中村の言ふことには、お袋などの所思とはまた違つた處もあつた。中村は爺さんやお袋やお庄の顔を揃へてゐる折にも、自分の考を述べて、爺さんと反の合はない芳太郎を、お庄と一緒に一時自分の家へ引取ることに話を纏めた。
　忙しい時は、ちよい／＼手傳に來ると云ふ約束で、お庄が中村の家へ移つて行つたのは、病氣で困り切つてゐた金助町の叔父が、丁度上野から田舎へ立つた日の夕方であつた。お庄は正雄と一緒に停車場まで見送つてやつた。
　叔父の家は、その三四日前に疊れてあつた。造作も藥實にして、それで滯つてゐた拂をすましたり、自分も多少懐へ入れて、町に涼氣の立つた時分に、湯島の伯母の家を俥で出て行つた。
　叔父は田舎へ行つても、快く自分を迎へて、養生をさしてくれさうな隠れ家の的とてもなかつた。東京で世話をしてやつた友人が町で可也な歯科醫の玄關を張つてゐるそこへ行くか、亡つた妻の實家の持家が少しばかりある、その中の一つを借りて起臥するかより外なかつた。孰にしても、こんな病人に來て寢込まれるのを迷惑がるのは、解り切つてゐた。
　田舎でみつちり養生をして、癒つたら又出て來て、運を盛返さうと云ふ心組のあることは、痩衰へた叔父の顔にも現はれてゐた。
「私はまだ結核にはなつてをらん心算だで――。」と、叔父は立つ前にも然う言つて、一人では道中が氣遣はれると云つて危む母親や伯母に笑つて言つた。
「そんな事いつて、汽車のなかで血でも吐いたら如何すらい。」と、母親は弟を窘めた。事によつたら紀か繁三に行つてもらつても可いし、正雄がついて行つても可いと思つたが、強ひて勸めもしなかつた。
「工合が惡かつたら、直宿屋へ入つて何方へでも電報を打たつし。」と、伯母も言添へた。

叔父の手荷物と云つては、書生で出て來た時分ほどの物すらない位であつた。時計や指環なども疾に亡つて、汚れたパナマだけが、京橋で活動してゐた時分の面影を遺してゐた。そのパナマも、遊びに來る乳の友人に買つてもらはうとした位であつたが、買値を言へば嗤はれるほどであつたので、叔父は氣持を惡くして、それだけは冠つて行くことにした。

正雄もお庄も、形の古いその帽子を冠つて、三等客車に乘込んで行く叔父の、窶れて老けたやうな姿を見て、後からくすくす笑つてゐた。

叔父はお庄のことなどは、口へ出して聞きもしなかつた。出來る時分に餘り世話をして置かなかつたことが、心に省みられたからでもあらうし、この頃樣子や心持の惡皆擦つた姪の身のうへを知るのも厭はしいやうに見えた。お庄も自分のことを言出すどころではなかつた。

「叔父さんには、もう逢へやしませんよ。」と、お庄はプラットホームを歩いてゐながら、歸りに弟に話しかけた。弟はまだ貰損ねたパナマが可笑しいと云つて思出笑をしてゐた。

送つた人達と一緒に、お庄は湯島の家へ引返して來たが、今日は中村の家で初めて泊る日だと思ふと、ほつとした。一緒に出て來た、鏡臺や着替を入れた行李なども、もう運込まれてゐる頃だとも思つた。

「あゝなるのも自業自得で爲方がない。」と、母親は、また茶の室で茶を呑みながら、今立たしてやつた叔父の噂をしてゐた。

お庄もそれに釣込まれながらも、時の移るのが氣が氣でなかつた。

八十二

「眞實に可怕い人ですよ。」と、お庄は立際に、伯母と母親の前で、この間芳太郎に刃物で追つかけられた話をしながら言出した。お袋も一度は斬りつけられて怪我をして、長いあひだ奧州の方の温泉へ行つてゐたと云ふことも話した。

「それぢや全然話が違ふがな。」と、母親は顔の色を變へてゐた。そんな處へお庄を取持つた四谷の人達の心持も疑はしいと思つた。

「お前が客の前へ出るが惡いといつて、そんなことをするだかい。」と、伯母も訊いた。

「まア然うなんでせうね。婆さんはまた私が然うしないと機嫌が惡いんですの。あの人の腹では、芳太郎が可愛くないことはないんでせうけれど、何にしても子供がないんですから、色々お婆さんに言はれると、其氣になるんでせうよ。私が不束なんですね。」

「その代り[illegible]にしてゐたつて、何時迄も上に立たれてかなはない、と云つたやうなものせえ。」母親は[illegible]さうに言つた。

「それで居て、私には色々甘いことを言つて聽かせるんですの。」と、お庄は長く客商賣をして來たお袋の自分に對する心持を話した。

「お前のやうな娘が一人あれば、斷樣な吝ツたれな料理屋なんかしてゐやしないなんて、そんなことを言ふんですよ。」

「あゝ云ふ人は、女さへ見れア商賣にしようと、其樣なことばかり思つてゐるで。」と、伯母は冷笑つた。

母親と伯母とのあひだに、また門間の話が出た。田舎にゐる父親が、また得心してゐなかつたので、籍を送らずにおいたことが、反つて幸であつたやうにも思へた。

「まア當人とも能く相談して見るだい。片輪にでもされてから、何を言つて見たつて追着かない話だで。」伯母は心配さうに言つた。

お庄は家のなくなつた母親のことも氣にかゝつた。どうせ針仕事もあるから、お庄さへ辛抱

て、ランプの蔭に引くらかへつてゐた。ほつそりした足が踵まで眞紅であつた。

お庄は聲もかけずに、私と押入から小掻巻を取出して被けてやると、腰床のうへに据ゑた鏡臺の前に坐つて、崩れ落ちた髷の鬢を直したり、白粉をつけたりして、旋てまた部屋を出て行つた。

その晩十時過まで、お庄は茶の間で話込んでゐた。主が寝てからも、細君に引留められて、身上談などして聞された。舅がまだ世に在つた時分の良人の放蕩が原因で、自分達が到頭賑かな下町から、こんな山のなかへ運びあげられたと云ふ細君の話では、この夫婦の若い頃の豐な生活の有様が想像され、子供が育つ時分から、段々落ちて來て、斯うした貧乏世帯に慣されるまでの細君の氣苦勞も窺へるやうに思へた。

「私も、まさか彼様な家とは思ひませんでしたよ。」

お庄もつい引込まれて、自分の家の事情など話しながら言出した。お庄は此處の人達の心持も知つておきたいと思つた。

「あのお爺さんの居るうちは、迚も丸く行かないだらうつて、良人でも心配してゐるんですよ。」と細君は此婚禮についての主の苦心を話つた。これ迄にも、芳太郎が往々こゝへ[illegible]けてゐたことも言出された。

「あの人が、一番可哀さうです。」と細君は低うも言つた。

八十四

芳太郎が、中村の知つてゐる或酒造會社へ出ることになつてから、お庄も時々外へ出られるやうになつた。

これ迄芳太郎は、中村から小遣を強求つては、浪花節や講釋の寄席へ入つたり、小料理屋で飲食をしたりして、ぶら／＼遊んでゐた。昔は邸の裏の池に鐵網を張つて飼つてある家鴨や家鶏を弄つたり、貸本を讀んだりして、ごろ／＼してゐたが、それにも倦んで來ると、お庄を嫁つたり、揶揄つたりした。お庄が些とでも家を出ようとすると、芳太郎の目の色が忽ち變つた。家へ訪ねて來たお庄の前の男のことも始終言出された。

木立の深い此部屋は、晝も滅多に日光が通はなかつた。三時頃から暫くの間斜に射込む西日の影は、可也暑かつた。お庄は芳太郎の晝寝をしてゐる側で、自分もぐつたり眠つて了ふ様なことが間々あつた。森に蜩の聲が、聞える時分に、ふと[illegible]あたりに、激しい騒ぎ[illegible]目がさめると、芳太郎も[illegible]して、起直つてゐた。兩手を上へ伸して、欠伸しになつてゐたお庄は、眠い瞼を開いて、ぐつたりと寄りかゝり、大きい手で胸を撫でたり、腕を揉つたりしてゐた。邇に豆腐屋の聲などがして、邸のなかは閑寂してゐた。

紙に悪戯をされたことに心づくと、お庄は妙に腹が立つた。子供のやうな芳太郎はお庄のぶよ／＼した白い胸のあたりに、何やら人間のやうなものを描いて、にや／＼してゐた。

「知つてゐますよ。」

お庄はその悪戯書を見て見ぬ振をしてゐたが、終に一緒に噴出してしまつた。

「叱られますよ。」とお庄はまた本氣になつて見せた。その顔は紅かつた。

く、く、くと鳴いてゐる鶏の世話をしに芳太郎は裏の方へ出て行つた。お庄も砂埃を拭掃除しようと思つたが、初め來た頃日課にしてゐたやうには働けもしなかつた。今日遊けようか、明日は出ようかと云ふ氣が、始終頭腦にあつた。

淺田のうちでも、長く續かないことが解つて來た。いつかお庄が、夜その相談に行つたとき

も、夫婦は、もう断念めてしまつたやうな口吻を洩してゐた。

「私達が邪魔になるやうに思はれちや、事が面倒ですよ。中村さんにも気の毒ですから、誰も知らない風にして、巧く逃げられたらお逃げなさい。然うすれば、私達にも責任はないし、中村の顔も立つんですから。」と、従姉は内々でお庄を唆かした。

お庄はそれから、時々風呂敷に包んで、着物や何かを、夜従姉の家へ持込むことにした。家からも、中村の家へ持運ぶやうに見せかけて、少しづつ取出すことを怠らなかつた。中には以前磯野から受取つた手紙を封じ込んだ有色揚や、死んだ叔母から傳はつた歌麿の絵本などがあつた。その絵本を、外の物と一つに、お庄は磯野と質に入れたこともあつたが、芳太郎のところへ来てから間もなく、漸と取出すことが出来た。お庄はその値打のものだと云ふことを、磯野に聴いて知つてゐた。

「萬間違つて、其里にあるお照さんのところへ訪ねて行くにしても、是を賣りさへすれば旅費ぐらゐは出来る。」

お庄は中村や芳太郎の手から逃れたとき、切迫つまつて来れば、自分は何處へ行く許か知らないと思つた。そして、其方が如何に自由だか知れないとも考へた。

お庄は箪笥の底から持出して、従姉の家へ其絵本の入つた手匣を持込む時も、私と中から出して、穢くさい絵を従姉に見せながら、その値踏などをして貰つた。

八十五

「然う毎日ぶら〳〵遊んでばかりゐるのが、大體宜しくない。」世話好きな中村は、會社から退けて来ると、芳太郎に何か叱言を言ひながら言つた。

芳太郎はまだ庭で鶏を折打してゐた。鶏は驚きと怖れに充血したやうな目をして、きよときよと木蔭を其方こつち逃廻つた。木の下や塀の隅はもう薄暗くなつてゐた。芳太郎は半分でその鶏を灌に逐廻してゐた。そこへ、洋服姿の主が、縁から降りて来たのであつた。

二人で鶏を籠へ始末をしてから、縁側の方へ戻つて来ると、中村は愚かしい芳太郎に、何時も言つて聞かせるやうなことを、また繰返した。

「まさか労働する譯にも行くまいが、何しろ若いものが遊んでゐては可けない。貴方が怠けるばかりだ。お前は堅くなつたと云ふ證據を見せる心算で、一時然う云ふところへ出てみては如何かね。」と、中村は其時自分の知つてゐる通運會社のことを言出した。

芳太郎は荒い息をしながら、縁に腰かけて黙つて莨を喫してゐたが、するうちに手拭や石鹸を持出して湯に行つた。

やがて麹町の方の會社へ出るやうになつてから、芳太郎は是迄のやうに朝寝をしてゐることも出来なかつた。

店の忙しいとき、芳太郎は夜おそく歸るやうな日が二三日續いた。

お庄は押入の行李のなかに殘つてゐたものを、萌黄に唐草模様の四布風呂敷に包んで、近所から傭つて来た俥に積み、自分もそれに乗つて、晩方中村の家を出た。

大雨がさあ〳〵降つてゐて、外は眞暗であつた。中村は丁度留守であつたし、嫂は茶の室で晩飯の飯臺に就いてゐる細君も老人も、そんな荷を持出したことに気がつかなかつた。荷の中には、箪笥のやうな後取つた物も積まれてあつた。お庄は自分の部屋の襖際から、ぽし〳〵雨の滴のおちる軒際に沿いて、庭の木戸から門まで、それを持出さなければならなかつた。少し古り

の軟かい着替や手廻り物を、芳太郎の目の前に
遺しておくのは不安心であつた。
「阿母さんの手傳に洗濯や縫直をしてもらひた
いものがありますから。」と、お庄はそんなに
びく／＼することもないと思つたので、荷を持
出す前に些と二人の前へ出て斷つた。
「御門から堂々と風呂敷包を持出すのも可笑しご
ざんすから。」
この女達は、何時お袋や爺さんの機嫌が
直つて、芳太郎が家へ入るやうになるか解らな
かつた。これまで往々人に貸したりなどして
ある部屋を、此夫婦のために長く空けておくの
も惜しかつた。細君が主の好奇を喜ばない氣
振が、お庄には見えすくやうに思へて來た。お
庄等夫婦が此家へ住込むやうになつてから、も
う一月と十日餘になつてゐた。
俥の梶棒が持上げられた時、お庄は漸く吻
としたやうな目付になつた。
從姉の家へ着くまで、お庄は後から追驅けら
れるやうな氣がしてゐたが、着いてからも氣が
氣でなかつた。
包は直與に押入へ隱されたが、お庄は下駄や
傘まで氣にして、裏の方へ廻した。
「芳がきつと來ますよ。」と、お庄は落着いて坐
つてもゐられなかつた。
「今頃は押入でも開けて見て、吃驚してゐるか
も知れませんよ。」
時計を見ると、芳太郎が何時も歸つて來る時
分までには、たつぷり一時間の餘裕があつた。

八十六

その晩のうちに、お庄は雨のなかを湯島まで
逃げて來た。
目立たぬ黒絣の單衣のうへに、小柄な淺山
のインバネスなどを着込んで、半分窄めた男
持の蝙蝠傘に顏を隱し、裾を端折つて出て行く
お庄の恍けた姿を見て、從姉は腹を抱へて笑
つた。
「介意ふもんですかよ。彼奴にさへ見附からな
けア可いんだ。」と、お庄は用心深く暗い四下を
見廻しながら出て行つた。
寂しい士官學校前から、廣い濠端へ出た頃に
は、強い風さへ吹添つて來た。お庄は兩手で
傘に攫まりながら、すた／＼と走るやうにして
歩いた。俥があつたら乘らうと思つたが、提
灯の影らしいものすら見當らなかつた。見附の
方には、淋しい柳の蔭に停車場の明が見えて
ゐたが、そんな處へ迂濶に入込んで行くこと
も出來なかつた。
そこからは[illegible]であつた。[illegible]下ま
で來ると、[illegible]に明るくなつた。人の[illegible]も
あらはに見えてゐた。ぐつしより雨に濡れたお
庄は、灯影を避けるやうにして、[illegible]
いて行つた。
湯島の家へ着いたのは、もう九時頃であつた。
元町の水道の傍を通るとき、擦々に行違つた脊
の低い男が一人あつた。お庄は傘の下から、
ふつと顏を出すと人家の薄明に、ちらと見えた
白いその男の顏が、芳太郎であることに氣がつ
いた。お庄は息が窒るやうな心持で、急いで
堤について左の方へ道を折れた。店屋の立込ん
だ狹い町まで來た時、お庄は冷汗で體中びつ
しよりしてゐた。
湯島の家では、衆が入口まで出て來て、異つ
たお庄の姿や、眞蒼なその顏を眺めた。お庄
は上口でインバネスを脫ぐと、[illegible]した體を
運ぶやうにして流しの方へ出て行つた。
「芳が今こゝへ俥で驅けつけ尋ねて來たぞえ。」
伯母はお庄の顏を見るなり、言出した。
「矢張さうでせう。」と、お庄は呼吸がはずんで、
口が利けなかつた。
その晩は早くから戶を閉めた。

黴

一

笹村が妻の入籍を濟したのは、二人のなかに產れた幼兒の出產屆と、漸く同時くらゐであつた。

家を持つといふことが唯習慣的にしか考へられなかつた笹村も、其頃半年弱の西の方の旅から歸つて來るゝ、是迄長いあひだ厭々執著してゐた下宿生活の荒れたさまが、一層明かに振顧られた。彼方此方行李を持廻つて旅してゐる間、笹村の充血したやうな目に强く映つたのは若い妻などを連れて船へ入込んで來る男であつた。九州の溫泉宿では又無聊に苦しんだ擧句、湯に浸りすぎて熱病を患つたが、時々枕頭へ遊びに來る大阪下りの藝者と口を利くほか、一人も話相手がなかつた。

「どう云ふのが好いんのや。私が氣に入りさうなのを見立てて上げるよつて……東京ものは蓮葉で世帶持が下手やと言ふやないか。」笹村が湯に中つて蒼い顏をして一先大阪の兄のところへ引揚げて來たとき、留守の間に襟垢のこびりついた小袖や、袖口の切れかゝつた襦袢などをきちんと仕立直しておいてくれた嫂は斯う言つて、早く世帶を持つやうに勸めた。

笹村はもう道頓堀にも飽いてゐた。齷齪しい大阪の町も厭はしいやうで、直に歸支度をしようとしたが、長く離れてゐた東京の土を久振で踏むのが樂しいやうでもあり、何だか不安のやうでもあつた。歸路立寄つた京都では、舊友がその愛した女と結婚して持つた樂しげな家庭振をも見せられた。

「我々の仲間では、君一人が取殘されてゐるばかりぢやないか。」

友達は長煙管に煙草をつめながら、靜かな綺麗な二階の書齋で、溫かさうな大振な厚い蒲團のうへに坐つて、何やら蒔繪をしてある自分持の莨盆を引寄せた。そこからは紫だつたやうな東山の圓つこい背が見られた。

「京の舞妓だけは一見しておきたまへ。」友はそれから新樹の蔭に一片二片づつ殘つた櫻の散るのを眺めながら、言ひかけたが、笹村の餘裕のない心には、京都と云ふものの匂を嗅いでゐる隙すらなかつた。それで二人一緒に家へ還ると、細君が敷いてくれた寢所へ入つて、醉のさめた寂しい頭を枕に就けた。

東京で家を持つまで、笹村は三四年住古した舊の下宿にゐた。下宿では古机や本箱がまた物置部屋から取出されて、口金の錆びたやうなランプが、また毎晩彼の目の前に置かれた。坐りつけた二階のその窓先には楓の青葉が初夏の風に戰いでゐた。

笹村は行きがかり上、これ迄係つてゐた仕事を、漸く眞面目に考へるやうな心持になつてゐた。机のうへには、新しい外國の作が置かれ、新刊の雜誌なども散らかつてゐた。彼は買ひつけの或大きな紙屋の前に立つて暫く忘られてゐた原稿紙を買ふと、また新しくその匂をかぎしめた。

けれど、ざら／＼するやうな下宿の部屋に落著いてゐられなかつた笹村は、晩飯の膳を運ぶ女中の草履の音が、廊下にばた／＼する頃になるといら／＼するやうな心持で、ふらりと下宿を出て行つた。笹村は、大抵これまで行きつけたやうな場所へ向いて行つたが、何處へ行つ

其處らをきちんと取片着けた。そして友達の伯母さんと一緒に、三味線などを搾へてくれた。

晩飯には、芋頭などの煮たのが、丼に盛られて銘々の小皿に置かれ、几帳面に排列されたランプの灯も、不斷より明るいやうに思はれた。

こゝに寝泊をしてゐた友達も、笹村にはぼつぼつ話をしながら、箸を取つてゐた。始終胃を氣にしてゐた彼は頼んだやうな顔をしながら、食べるあとから腹工合を氣遣つてゐた。

直に婆さんに被せる夜の物などが心配になつて來た。友達は着てゐた蒲團を押入から引出して、

「これを著てお寝みなさい。」と二階の方へ顔を出した。

婆さんは落著のない風で、鐵瓶落しの汚い長火鉢の傍に坐つて、いつまでも茶を呑んでゐた。

「いゝえ私は一夜で澤山でござんす、もう著ござんすで……。」

三

笹村の甥が一人、田舎から出て來た頃には家が狭いので、一緒にゐた深山と或る友人は同じ長屋の別の家に住むことになつた。如何なる場合にも離れることの出來なかつた深山には、笹村の旅行中に新しい友人なども出來てゐた。生活上の心配をしてくれる後見者とも往來してゐた。歸京してから、笹村は深山と一緒に住つてゐても、何處か相手の心に奥底が出來たやうに思つた。可也な收入もあつて、暮に旅へ立つとき深山の生活状態は甚く切迫してゐるやうであつたが、笹村の心は、曾て漂浪生活を送つたことのある大阪の土地や、そこで久振で逢へる兄の方へ飛んでゐて、それを顧みる餘裕がなかつた。深山が荷造の手傳などしてくれるのを、當然のことのやうに考へてゐた。今度歸つて來ても、矢張それを氣附かずにゐた。けれど深山が、自分にばかり調子を合してゐないことが少しづつ解つて來た。

「笹村には僕も隨分努めてゐるつもりなんだ。今度の家だつて、あの男が寂しいから居てやるんだ。」

こんなことが、ちよい／＼此處へ來て飯を食つたり、徹夜話に耽つたりして行く、或男を通して、笹村の耳へも入つた。笹村には甥の來たのが、丁度二人が別々になるのに好い機會であるやうに思はれて來た。笹村は自然に思つてゐることを口へ出さないで、深山の胸に横はつてゐる力強い、或ものに打突かつたやうな氣がしてゐた。笹村は時々癇癪を起して、深山に衝突かるやうなことは少しもなかつた。

深山は古い笹村の二階の机などを持つて、別の家へ入つて行つた。そこへ、此家を周旋した笹村の友達のT氏も、駒込の方の下宿から荷物を持込んで、共同生活をすることになつた。そして、二人は飯を食ひに、三度々々笹村の方へやつて來た。

甥が著いたその晩に、家主のKやT―、深山も一緒に來て、多勢持寄つたものを出合つて、讃多汁のやうなものを拵へた。

臺所には、纏にに無器用な婆さんを助に、その娘の若いといふ若い女も來て、買物をしたり、お汁の加減を見たりした。

「私あ甘うて……。」と、可愛らしい顔を赧くして、甥が眉根を顰めた。

「笹村君は、これでもう何年になるいな。」と、否宿の健啖家のT―は、胃病を患つてから、此度もなく丸くなつた背を一層丸くして、顔を替へながら苦笑した。彼は胃のために大學を休んでから、もう幾年にもなつた。その時は、丁

度色々な調査書類などを鞄につめて、二三年視學をしてゐた小笠原島から歸つたばかりであつた。

一作かね。」

笹村も擽つたいやうな笑方をした。而して長いあひだの習慣になつてゐる食後の胃の藥を、四疊半の机の抽斗から持つて來て、茶碗の湯で嚥下した。それが少し落着くと、曇つたやうな顏をして、後の窓際へ倚りかゝつて、パイレートを舌の痛くなるほど續けて吸つた。

衆は食飽きて氣懈くなつたやうな體を、窓の方へ持つて行つて、夕方の涼しい風に當つた。

やがてお銀が、そこらに散らかつたものを引取つて行つた。

お銀が初めてこゝへ來たのは、つい此頃であつた。ある日の午後、何處かの歸りに、笹村が硝子製の菓子器やコップのやうなものを買つて、袂へ入れて歸つて來ると、茶の室の長火鉢のところに、素人とも茶屋女ともつかぬ若い女と、細面の瘦形の、どこか小僧氣の取れぬ商人風の少い男とが、駢んでゐた。揉上の心持長い女の顏はぽき／＼してゐた。銀杏返の頭髮に、白い櫛を插して、黑繻子の帶をしめてゐたが、笹村のそこへ突立つた姿を見ると、笑顏で少し前みで丁寧に兩手を支いた。

「……娘がお世話さまになりまして。」

四

近所で表へ水を撒く時分に、二人は挨拶をして歸つて行つた。

「ちよつと好い女ぢやないか。」

笹村が四疊半の方で、其時また一緒に居た深山に話しかけると、深山は、「むゝ。」と口のうちで言つた。

「あの男は。」

「あれは情夫さ。」深山は恍けて然う言つた。

「さうかね。」

飯のとき笹村は笑ひながら婆さんに、「お婆さん好い子供がありますね。」と言ふと、婆さんは「えゝ。」と言つて嬉しさうに嫣然してゐた。

それから娘だけ二三度も來た。

「あれも緣づいてをりましたけれど、些と都合があつてそこを逃げて來とりますもんで、門だから、つい……。」

婆さんは娘が歸つて行くと、然う言つてゐた。

娘は時々バケツを提げて、母親に水など汲んで來てやつた。臺所をきちんと片著けて行くこともあつた。娘が拵へてくれた小鰺の煮びたしは誰の口にも美かつた。

「これア美い。お婆さんより餘程手際が好い。」

笹村は臺所の方へ言ひかけた。

「これは燒いて煮たんだね。」

「私は何だか一向不調法ですが……娘の方はいくらか優でござんす。」

母親はそこへ來て愛想笑ひをしたが娘は餘り顏出をしなかつた。

使あるきの出來ない母親の代りに、安くて新しい野菜物を、通からうんと買込んで來た娘が、傘をさして木戸口から入る姿が、四疊半に坐つてゐる笹村の目にも入つた。

見なれると、この女の窄まつた額の出てゐることなどが目についた。

この女が、深山の若い叔父の細君と友達であつたことが直に解つて來た。この女と一緒になる筈であつた田舍の或肥料問屋の子息であつた書生をその叔父の細君であつた年増の女が、横間から褫つて行つたのだと云ふやうな事も、解つて來た。

「あの女のことなら、僕も聞いて知つてゐる。」と、深山は此女のことを餘り好くも言はなかつた。

「深山さんのことなら、私もお鈴さんから聞いて知つてますよ。」女も笹村から其話の出たとき、思當つたやうに言出した。

「いゝえ、深山さんといふのは、あの方ですか。あの方の內輪のことならお鈴さんから、もう度々聞されましたよ。」

母親も閾際のところに坐つて、その頃のことを少しづつ話しはじめた。

「それでお鈴と云ふ女は、貴女のその男と一緒ですかね。」笹村は壁に倚りかゝりながら、立てた兩膝を兩手で抱へてゐた。

「いゝえ、それはもう直別れました、そんな一人を守つてゐるやうな女ぢやないんです。深山さんの叔父さんと云ふ方も、私能く存じてをります。この方も直に後が出來たでせう。」

娘は低い鼻頭のところを、をり〳〵手で掩ふやうにして、二十二にしては大人びたやうな口の利方をした。

「隨分面白いお話なんです。」

笹村はそんな話に大した興味も持たなかつた。相手もその事は深く話したさうにもなかつた。

「ほんとに不思議ですね。」娘は少し膝を崩して、俛いてゐた。

五

幼年學校とかの試驗を受けに來た頭が、歸省の氣味で、一時國へ歸る前に婆さんはその弟の臨終を見屆けに、田舍へ歸らなければならなかつた。

その弟が、色々の失敗に續いて、傷しい肺病に罹り、一年程前から田舍へ引込んでゐたことを、婆さんは立つ前に笹村に話した。

「私が歸つて來るまで、娘をおいて行つても可うござんすが、若いものの事だで如何でござんすか。それさへ御承知なら、娘も當分親類の家にぶら〳〵して居りますもんだで……」と、婆さんは立つ前に、重苦しい調子でこんな話を切出した。

お銀がその頃、夕方になると、派手な浴衣などを著て、こつてり顏を塗つてゐるのを、笹村は見て見ぬ振をしてゐた。

「困るね、あんな風をされるやうでは、君から能く言つてくれたまへ。近所でも變に思ふから。」笹村は蔭で深山に其事を話した。それでも此女の時々助に來ることは、別樣に厭はしいことでもなかつた。お銀が來るやうになつてから、一々自身で臺所へ出て肴の選擇をする必要もなくなつたし、[illegible]使さん[illegible]料理屋になつた[illegible]に[illegible]ない[illegible]請ず、[illegible]な味の[illegible]物など何うも[illegible]うへに絶えなかつた。長いあひだ情味に[illegible]い[illegible]た生活を續けて來た笹村には、其が其日々々の色彩でもあつた。

「それでは娘はお預けして行きますで……。」と、婆さんは無口で陰氣な笹村なら、安心して娘をおいて行けると云つた口吻であつた。

家は直に甥とお銀と二人の暮しになつた。お銀は用がすむと、晩方からをり〳〵湯島の親類の方へ遊びに行つた。そして夜更けて歸ることもあつた。笹村が、書齋で本など讀んでゐると、甥と二人で、茶の室で夏蜜柑など剝いてゐることもあつた。

「眞實に新ちやんは好い男ですね。」お銀は甥の留守の時笹村に話しかけた。甥は笹村の異腹の姉の子であつた。

「叔父甥と云つても、些ともお話なんぞなさいませんね。見てゐても倒氣ないやうですね。その癖新ちやんは、私には色々のことを話しますよ。來るとき汽車のなかで綺麗な女學生が、菓子や夏蜜柑を買つてくれたなんて……。」

「然うかね。」笹村は苦笑してゐた。

甥に脚氣の出たとき、笹村はお銀に吩咐けて、小豆などを煮させ、醫者の藥も飲ませたが、脚が段々脹むばかりであつた。
「醫者が轉地した方が可いと言ふんですよ。大分苦しさうですよ。それで、叔父さんに旅費を貰つてくれないかつて、私に然う言ふんですがね。田舍へ歸してお上げなすつたら如何です。」
間もなく笹村は甥を歸國の途に就かせた。通まで一緒に送つて行つて、鳥打の代りに麥藁を買つて被せたり、足袋に麻裏草履なども穿せた。
「どうも贅澤を言つて困つた。」
笹村は歸つて來ると、臺所を片著けてゐるお銀に話しかけた。
「安いもので押著けようとしたつて、なか／＼承知しない。」
甥のゐなくなつた家を見廻すと、其處らがせいせいするほど綺麗に拭掃除がされてあつた。裏の物干には、笹村が押入に束ねておいた夏襯衣や半帕、寢衣などが、片端から洗はれて、風のない靜かな朝の日光に曝されてゐた。
「どうも然う何でも彼でも引張出されちや困るね。」
笹村は水口で渇いた口を漱ぎながら言つた。
「さうですか。」
女は鬢の毫毛を掻揚げながら振顧つた。
「でも私、癇性ですから。」

六

笹村は机の前に飽きると、莨を袂へ入れて、深山の方へ能く話しに行つた。T―は前の方の四疊半に、旅行持の敷物を敷いて、そこに寢轉んでゐた。T―は長いあひだ無駄に月謝を納めてゐる大學の方を、愈罷めて好きな繪の研究を公然遣出さうかと云ふやうな事を、毎日考へ込んでゐた。父兄の財産によらずに、如何かして洋行するだけの金の儲けやうはないものかなどと思續けてゐた。島へ行つてから聖書などに親しみ、政治や戰爭などを厭がるやうになつてゐた。思想の毛色も以前より大分變つてゐた。
「僕は今小説を一つ書きかけてゐるところなんだ。」と、鼻の高い、骨張つた顏の相を崩しながら横に半身を起して、くら／＼笑つた。
傍らへには、半紙に何やら書きかけたものがあつた。T―の頭には、小笠原島で見た漁夫や、漂流の西班牙人や、多勢の土人種に就いて、小説にして見たいと思ふやうなものが澤山あつた。笹村のガラクタの中から拾出して行つた「海の勞働者」の古本などが側にあつた。
二人は此頃T―の處へ届いた枚ごとのバナヽを手斷りながら、色々の話に耽つた。薄暗い六疊から臺所の横の二疊の方を透してみると、そこに深山が莨の煙のなかに、これも原稿紙に向つてゐる。傍にパインナップルの罐や、びしよびしよ茶の零れてゐる新聞紙などが散らかつてゐた。そして顏が氣味わるく其處らまで逆上つてゐた。
「あの女が島田などに結ふのは目障りだね。笹村は是迄能く深山に女の苦情を言つた。夜家を明けて、女が朝夙く木戸をこぢ明けて入つて來ることも、笹村の氣にくはなかつた。お銀は時々湯島の親類の家で、つい花を引きながら夜更しをする事があつた。
「近所へ體裁が惡いから、朝木戸をこぢあけて入つて來るなどは不可いよ。」
笹村は一度女にも直に言聞したが、負けず嫌ひのお銀は餘り好い返辭をしなかつた。
「世間などは、あれを細君にしたのだと思つてゐるがる。女もそんな態度をするだらうかこ」
「矢張若い女なぞは不可いんだ。」深山は女の事に就いて、餘り口を利かなかつた。

Tーは傍で、くすり〳〵笑つてゐた。
笹村が裏から歸つて來ると、お銀は二疊の茶の室で、不亂次な姿で、べつたり疊に粘着いて眠つてゐた。障子には三時頃の明るい日が射して、お銀の顏は上氣してゐるやうに見えた。起と、跫音に目がさめて、愕然ともしないで、起きあがつて足を崩したまゝ坐つた。それを、ちらりと見た笹村の目には、世に棄腐れてゐる女のやうにも思へた。笹村は默つてその側を通つて行つた。
二三日降續いた雨があがると、蚊が一時にむれて來た。それでなくともお銀は暑くて眠られないやうな晩が多かつた。そして蚊帳が一張しかなかつたので、夜おそく迄、蠟燭の灯で壁や襖の蚊を燒き〳〵してゐた。そんな事をして、夜を明すこともあつた。
「私も四谷の方から取つて來れば二張もあるんですがね。」
お銀は肉づいた足にべたつくやうな蚊を、平手で敲きながら、寢衣姿で蒲團のうへに何時までも起上つてゐた。
翌日笹村は獨寢の小さい蚊帳を通で買つて、新聞紙に包んで抱へて歸つた。そして其をお銀に渡した。
「こんな小さい蚊帳ですか。」お銀は擴げて見てげら〳〵笑出した。そして鼠の暴れる臺所の方を避けて、其をわざと玄關の方へ釣つた。土間から通しに障子を開けておくと、茶の室より其處の方が多少涼しくもあつた。
「こんなに狹くちや、ほんとに寢苦しくて……。」大柄な浴衣を著たお銀は、手足の支へる蚊帳のなかに起きあがつて、唸るやうに呟いた。
笹村は、六疊の方で、窓を明拂つて寢てゐた。窓からは、すや〳〵した夜風が流込んで、輕い綿蚊帳が、隣の廂間から射す空の薄明に戰いでゐた。
ばた〳〵と團扇を使ひながら、何時までも寢つかれずにゐるお銀の淡白い顏や手が、暗いなかに動いて見えた。

七

「……厭なもんですよ。終に別れられなくなりますから。」
お銀は或晩、六疊へ蚊帳を吊つてゐながら眞面目に然う言つた。
互に顏を突合すのを避けるやうにして過ぎた日の事を、振顧つて話合ふやうに二人は接近して來た。
お銀は机の傍へ來て、お鈴に奪はれた男の事を、ぼつ〳〵話出した。
「どんな男です。」笹村もそれを聞きたがつた。
お銀は括られてゐるやうな其頸を突出して、秩序もなく前後の事を話した。
「晩方になると、私家を脫出して、お鈴の部屋借をしてゐた家の前へ立つてゐたんですよ。すると二人の聲がするもんですから、何時迄もぢつと聽いてゐるんでせう。私莫迦だつたんですね。自分から騷いで、反つて不可くしたやうなもんですの。」
お銀はそれから、親類の若い男と一緒にそこへ捻込んで行つたことなどを話した。
「男も莫迦なんですよ。それから私の片附いてゐる先へ、ちよい〳〵手紙を寄越したり、訪ねて來たりするんです。其處はちよつとした料理屋だつたもんですから、お客のやうな風をして上つて來るんでせう。洋服なんぞ着込んで、伯父さんの金鎖など垂さげて……私帳場にゐて、ふつとその顏を見ると、もう胸が一杯になつて……。」お銀は目のあたりを紅くしながら笑出した。
「それで大變惡いことをした。お蔭で今度は學校の試驗を失敗つたなんて……それも可いんで

すけれど、如何でせう飲食した勘定が足りないんでせう。磯谷はそれア鈍な男なんです。宛然芝居のやうなんです。」

お銀は黒い壁に喰着いてゐる蚊を、ぴた〳〵叩きはじめた。

「よく貴方は、こんな蚊が氣にならないんですね。」

「僕は蚊帳なしに、夏を送つたこともあるからね。」笹村は頭の萎えたやうな時に呑む鐵劑をやつた後なので、脂の入染出たやうな額に血の色が出てゐた。ランプの灯に、目がちか〳〵するくらゐ頭も興奮してゐた。

お銀は笹村の蒲團の汚いことを言出して笑つた。

「初めての蒲團を敷いたとき、喫驚しましたよ。食物や外のことはそんなでもないのに、一體どうしたんでせうと思つて……敷いてから何だか惡いやうな氣がして、又押入へ仕舞込んだり何かして。」

「その家は如何いふ家なんだ。」笹村はまた訊いた。

「そこの家ですか。それがまた大變に込入つた家なんです。阿母さんと云ふのが、繼母で、もと品川に藝者をしてゐたとか云ふんですがね、榮と云ふその子息と折合がつかなくて、私の行つた時分には、餘所へ出て居つたんですがね、それをお爺さんが入れるとか入れないとか云つて、始終ごた〳〵してゐましたつけがね。子息も面白くないもんですから、矢張お金を使つたり何かするんですね。背は些とした男でしたけれどね、私初めから何だか厭で〳〵、居る氣はしてなかつたんです。」

逃げて來てからも、その男に附纏はれた事などを附加へて話した。

「それに、づう〳〵しい奴なんです。」お銀は火照つたやうな顔をして、そこへ片附いた晩の事を話した。

「深山は、お前がまだ磯谷と一緒になるんだらうなんて言つてゐた。」

「いゝえ、然うは行きません。」お銀は笑ひながら言つた。

「その方は、もう悉皆駄目なんです。」

八

時々、大徳寺などに立籠つてゐたことのあるTが、ぶらりと京都へ立つて行つてからは、深山と笹村との間の以前からのこだはりが、お銀のことなどで一層妙になつて來たので、深山は餘所にゐた出戻りの姉などと、世帯道具を買込んで、別に食事をすることになつた。笹村よりか寧ろ一歩先に作を公にしたことなどもあり、自負心の高い深山が、一端働き出さうとしてゐる樣子があり〳〵笹村の目に見えた。色々の人がそこに集つてゐる樣子なども、笹村の神經に觸れた。

女同士のことで、深山の妹とお銀とは、裏で互に往來してゐた。妹が茶の室へ來て、お鈴や磯谷のことでも話してゐるらしいこともあつたし、お銀から蟲を借りに行つたり、洋傘を借りに行くやうなこともあつた。懇意づくで新漬を提出すこともあつた。

「煩いな。」笹村は憤々した。

「お前はまた如何して深山の處へなぞ行くんだ。」と極めつけると、お銀は笑つて默つてゐた。

それでなくとも、心持の能く激變する笹村は、ふつとお銀の氣もつかずに言つたことが、癪に觸つて怒出した。

「歸つてくれ。お前に用はない。」

女は上眼遣に人の顔をじろ〳〵見ながら、低い腰窓の下に體を崩して、むつとしてゐた。そこへ腰かけてゐる笹村は、踵で女を小突いた。

「貴方私を足蹴にしましたね。」お銀は險しいやうな目色をした。

然う云ふ女の太てたやうな言葉が、笹村の心を愈荒立たしめた。女は額の汗を拭きながら、臺所へ立つて行つた。伯父が失敗してから愚な母親と弱い弟を扶けて今日迄やつて來たお銀は、そんな事を自然に見覺えて來た。然うしなければ生きられないやうな場合も多かつた。

靜かな夏の眞晝の空氣に、機械鍛冶で廻す運轉器の音が、苦しい眠から覺めた笹村の頭に重く響いて來た。家のなかを見廻すと誰もゐなかつた。臺所には、青い枝豆の束が、射込んで來る日に炙られたまゝ、竈の傍においてあつた。風が裏手の廣い笹原をざわ〳〵と吹渡つてゐる。笹村は物を探るやうな目容で、深山の家へ入つて行つた。

六疊の窓のところに坐つてゐる深山は何時もの通り、大きい體をきちんと机の前に坐つて俛いてゐた。お銀が一疊ばかり離れて、玄關の閾際に、足を崩して坐つてゐた。意味を讀まうとするやうな笹村の目が、ちろりと女の顏に落ちた。

「家を開けちや困るぢやないか。」笹村は獨語のやうに言つて、直ぐに出て行つた。お銀も間もなくそこを起つて來た。

「何も言つてやしませんわ。お鈴さんのことで話してゐたんですわ。」

お銀は深山が同情してゐるお鈴との一件のことで、自分が深山に惡く思はれるのも厭であつた。笹村は左に右、お鈴を通して自分の以前のことを知つてゐる筈の深山に、然う變な顏も出來ないと云ふやうな心持もあつた。機嫌の取りにくい笹村の性質に就いても、深山の話に道理があるとも考へた。

「ほんたうに酷いことをしますよ。」

お銀は晩に通まで散歩に行つた時、伴の妹に話しかけた。

「私の手紫色……。」お銀は誇大に然うも言つた。歸りに家の前で、「遊びにお出でなさいな。もし兄さんがゐなかつたら。」と、妹が聲をかけて別れて行くのを、笹村は暗い窓口から聞いてゐた。怜悧な深山が、何時かお銀の相談相手になつてゐるやうに思へた。

九

笹村との間隔が、段々遠くなつてから深山は遠くへ越して行つた。其頃は一時潤うてゐた深山の生活狀態がまた寂しくなつてゐたので、家主のK―へ遣るべきものも一時猶豫して行くことになつた。後から笹村の處へ掛合に來る商人も一人二人あつた。

「お鈴さんから聞いてはゐたけれど、隨分酷しい人ですね。」と、お銀が言つてゐたが、笹村も初めのやうに推想する代りに、總てを善い方へ解釋したかつた。深山に聯絡してゐる周圍が、女のことについて、色々に自分を批評し合つてゐる其聲が始終耳に蔽被さつてゐるやうで、暗い影が頭に絡り附いてゐた。

「貴方の遣方が拙いんですもの、深山さんと間たがひなどしなくたつて可かつたのに……。」と、女は笹村の一國なのに飽足りなかつた。

「いつそ潔く結婚しようか。」

お銀は支度の事を、何彼と言出した。笹村もノートに一々書きつけて、費用などの計算までして見た。

「叔父さんが丈夫で東京にゐると可かつたんですがね。小說なんか好きで能く讀んでましたがね。……遊んでゐる時分は、隨分亂暴でしたけれど、病氣になつてからは、氣が弱くなつて、好きな小淸の御殿なぞ聞いて、ほろりとして居ましたつけ。」

「東京で多少成功すると、誰でも必然踏込む徑

路さ。」
「それでも、自分はまだ盛返す心算でゐますよ。今頃は死んだかも知れませんわ。途中で宿屋へ擔込まれた位ですもの。」お銀は叔父の死よりも、亡した自分の着物が惜まれた。
「私横濱の叔母の處へ行けば、少しは相談に乘つてくれますよ。」お銀は燥いだやうな調子で、披露の事などを色々に考へてゐた。
笹村は、旅行中羽織など新調して、湯治場へ貽つてくれた大阪の嫂に土産にする心算で、九州にゐるその嫂の叔母から讓受けて來て、其まゝ鞄の底に潛めて來た珊瑚珠の入つたサックを、机の抽斗から出してお銀にやつた。
「如何して貴方が斯樣な物を持つてゐるんです。」お銀は珠を捻繰りながら、不思議さうに笑出した。
「唯安いから買つておかないかと、叔母さんから勸められたから……」
「でも誰か、的がなくちや……可笑しいわ。幾許に買つたの此を……私質屋で踏ましてみるわ。」
結婚するとなると、笹村はまた樣々の事が考へ出された。
「僕に世話すると云つてゐた人は、一體如何なつたんだ。」笹村は笑ひながら言つた。
「好い女ですがね。」お銀は窓の外を瞶めながら薄笑をしてゐた。
暗くなると、二人は別々に家を出て行つた。そして明るい店屋のある通を避けて、裏を行き行きした。暗い雲の垂下つた雨催ひの宵であつた。片側町の寂しい廣場を歩いてゐると、歩行べたのお銀は、蹌けさうになつては、故意とらしい聲を立てて笹村の手に掴つた。笹村の小さい冷い手には、大きい女の手が生温かつた。
寄席の二階で、電氣に照されてゐる女の顏には、けば〳〵しいほど白粉が塗られてあつた。脣には青く紅も光つてゐた。笹村の目には暗い影が閃いた。
「そんな……。」女は俛いて顏を赧くした。
お銀の話で此處へ礒谷と能く一緒に來たと云ふ事が、笹村の目にも甘い追憶のやうに浮んだ。
「ちよつとあゝ云つたやうなね、頸つきでしたの。」女は下の人込の中から、形の好い五分刈頭を見つけ出して、目をしを〳〵させた。笹村もこそばゆいやうな體を前へ乘出して見下した。

十

母親が果物の罐詰などを持つて、田舍から歸つて來てからも、お銀は始終笹村の部屋へばかり入込んでゐた。笹村は女が自分を愛してゐるとも思はなかつたし、自分も女に愛情があるとは思ひ得なかつたが、身の周の用事で女のしてくれることは、痒い處へ手の屆くやうであつた。男の時々の心持は鋭敏に嗅ぎつけることも出來た。氣象もきび〳〵した方で不斷調子の好い時は、能く駄洒落などを言つて人を笑はせた。緊のない肉附の好い體、輪郭の素直さと品位とを闕いてゐる、どこか崩れたやうな顏にも、心を惹きつけられるやうな處があつた。
笹村の頭には、結婚するつもりで近頃先方の寫眞だけ見たことのある女や、以前大阪で知つてゐた女などの事が、時々思出されてゐたが、不意に何處からか舞込んで來た恁うした種類の女と、爛合つたやうな心持で暮してゐることを、然程悔ゆべき事とも思はなかつた。
「深山がゐさへしなければ、僕だつてお前を放抛つておくんだつた。」笹村は時々そんな事を言つた。礒谷と女との以前の關係も、笹村の心を責める幻影の一つであつた。そして其時の

話が出る度に、色々の新しい事實が附加へられて行つた。

「……それがお前の幾歳の時だね。」

「私が十八で、先が二十四……。」

「それから何年間になる。」

「何年間と云つた處で、一緒にゐたのは、眞の時々ですよ。加之私は其頃まだ何にも知らなかつたんですから。」

笹村はお銀が其頃、四谷の方の親類の家から持つて來た寫眞の入つた函を顚覆して、そのうちからその男の撮影を見出さうとしたが、一枚もないらしかつた。中にはお銀が十六七の時分、伯母と一緒に寫した寫眞などがあつた。顎が括れて一癖ありさうな顏も體も不恰好に肥つてゐた。笹村はそれを高く持ちあげて笑出した。

母親から歸京の報知の葉書が來た。その葉書は、父親の手蹟であるらしかつた。お銀は是迄餘り故鄕の事を話さなかつたが、父親に對しては餘り好い感情を有つてゐないやうであつた。

「私達も、田舍へ來いつて、能く然う言つてよこしますけれど、田舍へ行けば、いづれお百姓の家へ片附かなくちやなりませんからね。如何に困つたつて、私田舍こそ嫌ですよ。その位なら、何處へ行つたつて、自分一人くらゐ何をしたつて食べて行きますわ。」

お銀は田舍へ流込んで行つてゐる叔父の昔の情婦の事を想出しながら、如何かすると、檻へ入れられたやうな、此處の家から放たれて行きたいやうな心持もしてゐた。磯谷との間が破れて以來、お銀の心持は、動もすると頽れかゝらうとしてゐた。笹村は荒んだお銀の心持を、優しい愛情で慰めるやうな男ではなかつた。お銀を妻とするに就いても、女を好い方へ導からうとか、自分の生涯を慮ふとか云ふやうな心持は、大して持たなかつた。

「私が此處を出るにしても、貴方のことなど誰にも言やしませんよ。」

女は別れる前に、ある晩笹村と外で飲食をした歸りに、暗い草原の小逕を歩きながら言つた。女は口に楊枝を銜へて、兩手で裾をまくしあげてゐた。

「田舍へも、暫くは居所を知らさないでおきませうよ。」

笹村は叢のなかに跪坐んで、悄れたやうに女の樣子を眺めてゐた。

「そんなに行詰つてゐるのかね。」

「だけど、もう何だか面倒くさいんですから……。」女は棄鉢のやうな言方をした。

二三日暴れてゐた笹村の頭も、其時はもう鎭まりかけてゐた。自分が女に向つて爲てゐることを靜かに考へて見ることも出來た。

十一

母親と顏を突合す前に、どうにか新しい始末をしようとしてゐたお銀は、母親が歸つて來ても、如何もならずに居た。出て行く支度までして、心細くなつて又考へ直すこともあつた。此の新開町の入口の寺の迹だと云ふ處に、田舍の街道にでもありさうな松が、埃を被つて立つてゐた。賑かな處ばかりにゐたお銀は、夜その下を通る度に、歩を速める癖があつたが、或日暮方に、笹村に逐出されるやうにして、そこまで來て彷徨してゐたこともあつた。しかし矢張歸つて來ずには居られなかつた。

「失敗つたね。私阿母さんに來ないやうに、一枚葉書を出しておけば可かつた。」

母親が歸つて來さうな朝、お銀は六疊の寢床に蚊帳をはづしかけたまゝ、ぐつたり坐り込んで思案してゐた。部屋の隅には疲れたやうな蚊の鳴聲が聞えた。笹村もその傍に寢轉んでゐ

た。
歸つて來た母親は、著替もしずに、笹村の傍へ來て堅苦しく坐りながら挨拶をした。そして田舍の水に中てられて、病氣をした爲に、歸りの遲くなつた分疏などをしながら、此のなかに唯一つの力であつた一人の弟の死んで行つた話などをした。
「親族は田舍に澤山ござんすが、私の實家は、これでまア綺麗に死絶えて了つたやうなものだで……。」
笹村は擽つたいやうな心持で、それに應答をしてゐた。そして母親の土產に持つて來た果物の鑵詰を開けて試みなどしてゐた。
二三日お銀は、餘り笹村の側へ寄らないやうにしてゐたが、何時迄も其を續ける譯に行かなかつた。
「言ひましたよ私……。」
お銀は或時笑ひながら笹村に話した。
「阿母さんの方でも大抵解つたんでせう。」
笹村も待設けた事のやうな氣もしたが、矢張今それを言つてしまつて欲しくないやうにもあつた。
仕事の方は、忘れたやうになつてゐた。笹村の頭は、蝎が出直して來た時分、また蘇つたやうになつて來た。蝎は暫くのまに滅切大人びてゐた。肩揚も卸したり、背幅もついて來た。著いた日から、一緒に來た友達を二人も引張つて來て、飯を食はしたり泊らせたりして田舍語の高聲で巫山戲あつてゐた。ちよい／＼外から訪ねて來る仲間も、その當分は多かつた。
「何を言つてゐるんだか、あの方達の言ふことは薩張解りませんよ。」と、お銀はその眞似をして、轉つて笑つた。
「それにお米のまア入ること。全然御飯のない國から來た人のやうなの。」
蝎が日のめきに裏の井戸端で、或日運動シャツなどを洗濯してゐた。その時分には、連中も落著場所を見つけて、夫々散らばつてゐた。お銀は手拭を姉さん冠にして、暫く不精してゐた臺所の棚のなかなぞを雜巾がけしてゐた。
「洗濯ぐらゐしてやつたら如何だ。」仕事に疲れたやうな笹村は裏へ出て見るとお銀を詰問するやうに言つた。
「え、だから爲てあげますからつて、然う言つたんですけれど。」お銀はそんなことぐらゐと云ふやうな顏をして笹村を見あげた。
食物などのことで、女のすることに表裏がありはしないかと、始終そんな事を氣にしてゐた笹村は、その時もそれとなく厭味を言つた。
「さうですかね。私其樣な事はちつとも氣がつきませんでした。」女は意外のやうに、そこへべつたり坐つて額に手を當てて考へ込んだ。
「そんな事をして、私何の得があるか考へてみて下さい。」お銀は息をはずませながら爭つた。母親も釋物をしてゐた手を休めて、喙を容れた。
そこへ蝎と前後して、出京してゐた家主のKーが裏から入つて來た。Kーは、外の三軒が容易に塞がらないので、歸省して出て來ると、自分で盡頭の一軒を占めることにした。その日もお銀に冬物を行李から出させて、日に干させなどしてゐた。そして母親が、その世話をすることになつてゐた。
片耳遠いKーは、立つたまゝ首を傾けて二人の顏を見比べてゐた。

十二

Kーは、鄕里では名門の子息で、稚い時分、笹村も學校歸りに、その廣い邸へ遊びに行つたことなどが、朧げに記憶に殘つてゐた。其後久しく懸離れてゐたが、或夏熊本の高等中學から、鄕里の高等中學へ戾つて來たKーのでく／＼し

た、貴公子風の姿を、學校の廊下に認めてから間もなく、笹村は學校を罷めてしまつた。偶然に此處で一つ鍋の飯を食ふことになつても、雙方話が合ふと云ふほどではなかつた。

笹村は友人思ひの京都のT―から、自分等二人の其後の動靜を探るやうにK―へ言つてよこしたので、それでK―が貸家監理かた〴〵此處へ來ることになつた……と然うも考へたが、K―自身は、其事について一言も言出さなかつた。

「如何だい、男の機嫌を取るのはなか〳〵骨が折れるだらう。」K―は、二人の中へ割込むやうに火鉢の傍へ來て坐込んだ。

それでその話は腰を折られて、笹村も笑つて、引込んで行つた。

夜笹村は、かん〳〵したランプに向つて、その頃書始めてゐた作物の一つに頭を集中しようとしてゐた。機械鍛冶の響はもう罷んで、向の酒屋でも店を閉めてしまつた。此町のずッと奥の方に、近頃出來た石鹼工場の職工らしい醉漢が、呂律の怪しい咽喉で、唄を謳つて通つた。荷車を挽いて歸る惰い音などもした。

K―は、茶の室でお銀を相手に、ちび〳〵何時までも酒を飲續けてゐた。しんみりしたやうな話聲が時々聞えるかと思ふと、お銀の笑聲などが漏れて來た。男は眞中の六疊の隅の方で、もう深い眠に沈んでゐた。

夜になると、分明して來る笹村の頭は、痛いほど興奮してゐた。筆を執るには、目がちかちかし過ぎるほど、神經が冴えてゐた。

「酒と云ふものは陽氣で好うござんすね。」客商賣の家にゐたりしたことのあるお銀が、先刻酒好きなK―に媚びるやうに言つてゐたことなどが想出された。

然う云ふお銀は、笹村の客が歸つたあとで、麥酒などの殘りをコップに注いで時々飲んでゐた。酒が顏へ出て來ると、締のない膝を少し崩しかけて、猥らなやうな充血した目をして人を見た。齒齦の見える口元も弛んで、浮いた調子の駄洒落などを言つて獨で笑ひこけてゐた。お銀の體には、酒を飲むと氣の浮いて來る父親の血が流れてゐるらしかつた。

「女の酒は厭味でいけない。」

時々顏を顰める笹村も、飲むと何處か色ッぽくなる女を醉はすために自分でわざと飲みはじめることもあつた。

外が鎭まると、奥の話聲が一層耳について來た。女が臺所へ出て、酒の下物を拵へてゐる氣勢もした。

厠へ立つとき、笹村は苦笑しながらそこを通つた。女は俛いて、肴を拵つてゐたが、白い顏には酒の氣があるやうにも見えなかつた。

「Kさんにお自慢を聽かされてゐる處なんですの。如何してお安くないんですよ。」お銀は沈んだやうな調子で言つた。

痛い頭を萎さうとして、笹村は席を離れてふと外へ出て見た。そして裏の空地を彷徨して、また明るい部屋へ戻つて見た。K―はまだちびりちびり飲續けてゐた。そのうちに女は裏の木戸を開けて、ざく〳〵した石炭殻の路地口から駒下駄の音をさせて外へ出て行つた。向の酒屋へ酒を買ひに行くらしかつた。

「おい、少し靜かにしないか。」

大分たつてから、堪りかねたやうに、笹村が奥へ大聲で叫んだ。

茶の室は、閑して了つた。

十三

「そんなにお耳に障つたんですか。だつてKさんが折角お酒を召食つていらつしやるのに、厭な顏も出來ないもんですから。……」

心持のゆつたりしたやうなK―が、間もな

く默つて歸つて行つてから、お銀は何氣なげに遠くの方で言つた。後で氣のついたことだが、ちびり／＼酒を飲みながら、自慢まじりのK－の話のうちには、女を友達から引離さうとするやうな意味も含まれてあつた。それが今の場合K－自身として、笹村を救ふ道だと考へてるたらしかつた。以前下宿をしてゐた家の軍人の未亡人だとかいふ女主と出來合つてゐたK－は、外にも田舍の女が一人と二人あつた。その頃もK－は、手まで出來た間を爲れてしまつた女のことを虚實取混ぜて話してゐた。同じやうな心の痛みのまだ何處かに殘つてゐる女は、しみじみした深い好みで諦りついたやうな心持でそれに聽惚れてゐた。笹村の胸にも、それが感ぜられた。

　笹村は深山から聞いてゐた、お銀の以前のことなどを言出した。

「それはあの方が、能く私達のことを知らないからですわ。」お銀は口惜しさうに言つた。

「今こそ恁うしてまごついちや居りますけれど、田舍なら押しも押されもしねえ、是でも家柄はそれなに悪いもんでもごさんしねえに。」母親も傍で辯解した。

「家柄が何だ。そんなことを今言つてるんぢやないんだ。」笹村は苦々しいやうな言方をした。

「貴方から見れば、それは然うでもござんせうが、田舍には親類もござんすで、娘がまた斷様なことでまごつくやうなことぢや、私が寔に辛うござんすで……。」

　呆れたやうな不愉快な氣分が、明朝も一日續いた。

　晩方K－が、ぶらりと入つて來た頃には、甥と一緒に、外を彷徨いて歸つて來た笹村が、薄暗い部屋の壁に倚りかゝつて、茫然してゐた。茶の室では母親とお銀とが、聲を潜めて時々何やらぼそ／＼と話してゐた。

「おい／＼、酒を持つて來んか。」

　笹村はK－と話してゐるうちに、ふと奥の方へ聲かけた。

「昨夜の今夜ですから、酒はお罷しなすつた方が可うござんすらに。」

　大分經つてから、母親がそこへ顔を出した。

「可いぢやないか。僕が飮むと言つたら。」笹村は吐出すやうに言つた。

　暫くすると、出し澁つてゐた酒が、そこへ運ばれて、鍋を掻く音などが臺所から聞えて來た。

「お銀に來て酌をしろつて……。」

　笹村が言つて笑ふと、K－も顔を見合せて無意味にニタリと笑つた。

「おい酌をしろ。」笹村の聲が又突走る。

　夕化粧をして着物を着換へたお銀が、そこへ出て來ると、おど／＼したやうな樣子をして、銚子を取りあげた。寢不足の顔に著しく窶れが見えて、美い目も窪み、唇も乾いてゐた。

K－は繋りのない無邪氣な顔をして何時飮んでも美味さうに續けて二三杯飮んだ。

「お前行き處がなくなつたら、今夜からK－さんの處へ行つてると可い。」笹村はとげ／＼した口の利方をした。

「うむそれが可い。己が當分引取つてやらう。今のところ貴方のために其が一番可ささうだぜ。」

　K－は光のない丸い目を睜つて二人の顔を見比べた。

　おど／＼したやうな目を伏せて、俛いて默つてゐたお銀は、銚子が一本あくと、直に起つて茶の室の方へ出て行つた。そしていくら呼んでも再び顔を見せなかつた。

　何時も彼も忘れるくらゐに醉つて、笹村は寢床の上にぐつたり横はつてゐた。目を閉いてみる

と、傍へ來て坐つてゐる女の蒼白い顏が、薄暗いランプの灯影に寂しく見えた。
「……ほんとに濟みませんでした。是から氣をつけますから、どうか堪忍して下さい。」お銀の呟く聲が、時々耳元に聞えた。
笹村は冷い濡手拭で、どき〳〵する心臟を冷してゐた。

十四

四谷の親類に預けてあつた蒲團や鏡臺のやうなものを、お銀が腕車に積んで持込んで來たのは、もう袷に羽織を著る頃であつた。町には其方此方に、安普請の貸家が立竝んで、俄仕立の蕎麥屋や天麩羅屋なども出來てゐた。
お銀は萌黄の大きな風呂敷包を夜六疊の方へ持込むと、四谷で聞いて來たといつて、先に緣づいてゐた家の、其後の紛擾などを話して蒼くなつてゐた。お銀が逃げて來てからも、始終跡を追つかけまはしてゐた其處の子息が、此頃刀でとかく折合の惡い繼母を斬りつけたとか云ふ話であつた。
その話には笹村も驚きの耳を聳てた。
「係合にでもなると不可いから、うつかり此處へ來ちや不可いなんてね、お蝶さんに私逐出されるやうにして來たんですよ。」
「へえ。」と、笹村に呆れた目をして女の顏を瞶めてゐた。
「私可怕いから、もう外へも出ないでおかう。此間暗い晩に菊坂で摺違つたのは、慥に榮ですよ。」
傍で母親は、包のなかから、お銀の不斷著などを取出して見てゐた。外はざあ〳〵雨が降つて、家のなかもじめ〳〵してゐた。
「私は顏色が大變惡いつて、然うですか。」と、お銀は氣にして訊出した。
お銀は此月へ入つてから、時々腹を抑へて獨で考へてゐるのであつた。そして、
「私姙娠ですよ。」と笑ひながら言つてゐたが、暫くすると、また其を打消して、
「冷性ですから、私には如何したつて子供の出來る氣遣はないんです。安心して在らつしやい。」
しかし如何しても姙娠としかおもはれない處があつた。食物の工合も變つて來たし、飯を食べると、後から嘔吐を催すことも間々あつた。母親に糺してみると、母親も孰とも決しかねて、首を傾げてゐた。
「今のうちなら、如何かならんこともなささうだがね。」
また一苦勞増して來た笹村は、まだ十分それを信ずる氣になれなかつた。弱い自分の種で、子が出來るなどと云ふことは寧ろ不思議なやうであつた。
「そんな譯はないがな。もし然うだつたとしても、己は知らない。」などと言つて笑つてゐた。女の操行を疑ふやうな、口吻も時々洩れた。
「私はこんながら〳〵した性分ですけれど、そんな浮氣ぢやありませんよ。そんな事があつてごらんなさい、いくら私がづう〳〵しいたつて一日も此家にゐられるもんぢやありませんよ。」お銀も半分眞面目で言つた。
「お前の兄さん〳〵と云つてゐる、其親類の醫者に診てもらつたら如何だ。」
「そんな事が出來るもんですか。あすこのお婆さんと來たら、それこそ口喧しいんですから。」
お銀は三人の子供を、夫々醫師に仕揚げた其老人の噂を爲はじめた。
こんな話が、二人顏を突合はすと、火鉢の側で繰返された。火鉢には新しい藥灰などが入れられて、机の端には猪口や蓋物がおかれてあつた。笹村は夜が更けると、眞の三四杯だけれど、

時々酒を飲みたくなるのが常であつた。

「そんなに氣にしなくとも、愈々姙娠となれば、私が巧く私と産んぢまひますよ。知つた人もありますから、そこの二階でも假りて……。」お銀は言出した。

「叔父さんが世話をした人ですから、事情を言つて話せば、引受けてくれないことはないと思ひます。貴方からお鳥目さへ少し頂ければね。」

「そんな處があるなら、今のうちそこへ行つてゐるんだね。」

お銀は京橋にゐる其人の事を、色々話して聞かした。叔父が盛に切つて廻してゐた頃のことが、それに連れて又言出された。

「その時分、貴方は何處に何をしてゐたでせう。」

お銀は自分の十六七の頃を追憶しながら、水々した目でランプを瞶めてゐた。

「眞實に不思議なやうなもんですね。」お銀は笹村の指先を揉みながら、呟いた。

十五

暮近い頃に、K—が[illegible]の褞袍などを着込んで、火鉢の傍へ來て飯を食つてゐると、お銀が臺所の方で甲斐々々しく辨當を詰めてゐる、それが如何かして朝起をすることのある笹村の目にも觸れた。お銀の話に、商業學校へ通つてゐた礒谷に辨當を持つて行つてやつたり、雨が降ると傘を持つて行つて、能く學校の傍で出て來るのを待つてゐたと云ふその時の女の心持が二人の樣子にも思合された。笹村と通へ買物などに出かけると、お銀は翌朝の辨當の菜を、通りがかりの煮物屋などで見繕つてゐた。

そのK—も貸家の差配を例の若い後家さんに託して、自分は谷中の舊居た下宿へ引移つて行つてからは、貸家にも色々の人が出入したが空いてゐる時の方が多かつた。

甥は、その空家の一軒へ入込んで寢起をしてゐた。時には友達を大勢引張込んで、叔父の方から色々の物を持運んで、飲食をしてゐた。笹村が渡す月謝や本の代が、その頃甥の捲込まれてゐた不良少年の仲間の飲食のために浪費されるらしい形迹が、少しづつ笹村に解つて來た。

「甥ちやんは、何時のまにか私の貸本を持つて行いてますよ。」

お銀は、笑ひながら笹村に言告げた。月極にしてある貸本屋の內儀さんが甥の持つて行く貸本の多いのを不思議がつて、注意してくれたことなどもあつた。

机の抽斗を開けてみると、學校のノートらしいものは一つもなかつた。その代りに手帳に吉原の樓の名や娼妓の名が列記されてあつた。妾——仲居——などと樂書してあるのは、此場合お銀のこととしか思へなかつた。

「あゝ云ふ團體のなかに捲込まれちや、それこそお終だぞ。呼出をかけられても、今後決して外出しない方が可い。」

笹村は甥を呼びつけて吩咐けたが、甥は癇性の目を伏せてゐるばかりで、身にしみて聞いても居なかつた。そして表で口笛の呼出がかゝると、直にずるりと脫けて行つてしまつた。

「いつかの朝、額を瘤だらけにして歸つて來たでせう、あの時吉原で、袋叩に逢つたんですつて……言つてくれるなと言つたから言ひませんでしたがね。」お銀は笹村に言告げた。

「その時も、あの連中につれられて行つたやうですよ。あの中には、髭の生えた人なんか居るんですもの。それに甥ちやんは[illegible]なんです。喧嘩ッぱやいと來たら大變なもんですよ。國で、氣に喰はない先生を取つて投げたなんて言つてますよ。」

お銀は嫂が、この近所で近頃評判になつてゐることを詳しく話した。
「だけど、何しろ友達が惡いんですからね。貴方も餘り嚴しく言ふのはお休しなさいよ。可怕いから。」
笹村の小さい心臟は、この異腹の姉の愛兒のことについても、少からず惱まされた。
「僕も餘り好い事はして見せてゐないからね。」
笹村は苦笑した。
「だつて、十六や其處いらで、色氣のある氣遣はないんですからね。」
笹村は暫く打絶えてゐた俳友の一人から、或夕方ふと手紙を受取つた。少しお話したいこともあるから、手隙のをり來てくれないかと云ふ親展書であつた。
お銀は、體の工合が一層惡くなつてゐた。目が始終霞んで、手足も氣懈さうであつた。その晩も、近所の婦人科の醫者へ行つて診てもらふ筈であつたが、それすら臆劫がつて出遲れをしてゐた。
「私のこと……。」
お銀は手紙を讀んでゐる笹村の顏色で、直にそれと察した。
「きつと然うでせう。」

十六

笹村は、寒い雨のぼそ〳〵降る中を、腕車で谷中へ出かけて行つた。此日頃、友を自ら避けるやうにして來た笹村は、あの窪ッためにある暗い穴のやうな家を、滅多に出ることがなかつた。是迄人の前で俛いて物を言はなければならぬやうな事の無かつた笹村は、八方から遠寄せに押寄せてゐるやうな壓迫の決潰口とも見られる友人が、如何た風に此事を切出すか、それが不安でならなかつた。深山と氣脈の通じてゐるらしく思へる此俳友B―に對する輕い反撥心も、腕車に搖られる息苦しいやうな胸に微に波うつてゐた。
閑した二階の一室に通ると、B―は口元をにこにこしながら、直に深山との事を言出した。暫くB―は笹村の話に耳傾けてゐた。
二人の間には、チリの鍋などが火鉢にかけられて、B―は時々笹村に酌をしながら喙を插んでゐた。
「……左に右深山のことは餘り言はんやうにして居たまへ。然うしないと反つて君自身を傷けるやうなもんだからね。」B―は戒めるやうに言つた。
笹村は深山との長い間の交渉に就いて、胸に ぶす〳〵燻つてゐるやうな餘憤があつたが、其を言へば言ふだけ、自分が小さくなるやうに思へるのが淺猿しかつた。
「……僕はいつそ公然と結婚しようと思ふ。」
女の話が出たとき、笹村は瞑諾めたやうな心持で言出した。
「その方が潔いと思ふ。」
「それ迄にする必要はないよ。」B―は微笑を目元に浮べて、「君の考へてゐるほど、難しい問題ぢやあるまいと思ふがね。女さへ處分してしまへば、後は見易いよ。人の噂も七十五日といふからね。」
「奈何だね、やるなら今のうちだよ。僕下及ながら心配してみようぢやないか。」B―は促すやうに言つた。
笹村はこれ迄誰にも守つてゐた沈默の苦痛が、いくらか弛んで來たやうな氣がした。そして何時にない安易を感じた。それで話が女の體の異常なことにまで及ぶと、そんな事を案外平氣で打明けられるのが、不思議なやうでもあり、慘しい恥辱のやうでもあつた。
「へえ、爾うかね。」
B―は目を瞠つたが、口へは出さなかつた。

そして暫く考へてゐた。
「それなら其で、話は自然身輕になつてからのことにしなければならんがね。然し可いよ方法は幾多もあるよ。」
蕭かな話が、少時續いてゐた。動物園で猛獸の唸る聲などが、時々聞えて、雨の小歇んだ外は靜かに更けてゐた。
「僕はまた君が、そんな事はないと言つて怒るかと思つて、實はそれを心配してゐたんだよ。」
歸りがけに、Bーは然う言つて又一銚子階下へ吩咐けた。
打明けてくれて僕も嬉しい。」
幌を彈ねた笹村の腕車が、泥濘の深い町の入口を行惱んでゐた。空には暗く雨雲が垂下つて、屋並の低い町筋には、湯歸りの職人の姿などが見られた。
「今歸つたんですか。」
腕車と擦違に聲をかけたのは、青ツぽい双子の着物を着たお銀であつた。
「如何でした。」
「醫者へ行つたかね。」
「え、行きました。そしたら、矢張さうなんですつて。」
腕車の上と下とで、こんな話が氣忙しさうに取交された。
笹村が腕車から降りると、お銀もやがて後から入つて來て、火鉢の方へ集つた。

十七

「醫者は如何いふんだね。」
笹村は少し離れたやうな心持で、女に訊出した。笹村は先づそれを確めたかつた。
「お醫者はいきなり體を見ると、もう判つたやうです。これが病氣なものか、確に姙娠だつて笑つてゐるんですもの。加之少し體に毒があるさうですよ。その藥をくれるさうですから……。」
「幾月だつて……。」
「四月ださうです。」
「四月。厭になつちまふな。」
笹村は太息を吐いた。そして可恐しいやうな氣持で、心のうちに二三度月を繰つて見た。
その晩は一時頃まで、三人で相談に耽つてゐた。笹村は出來るだけ穩かに、女から身を退いてもらふやうな話を進めた。その話は二人にも能く受入れられた。
「貴方の身が立たんと仰しやれば、如何も爲方のたい事と諦めるより外はござんしねえ。御心配なさるのを見てゐても、何だかお氣の毒のやうで……。」母親は縫物を前に置きながら言つた。
「どうせ娘つことは、體さへ輕くなれば如何にでもなつて行きますで。」
さう決ると、笹村は一刻も速く、この重荷を卸してしまひたかつた。そして輕卒のやうな可恐しい相談が、如何かすると三人の間に彈かれるのであつた。笹村の興奮したやうな目が、異様に輝いて來た。
「さうなれば、私がまた如何にでも始末をします。――その位のことは私がしますで。」
さう言ふ母親の目も冴々して來た。
「だけど、迂闊したことは出來ませんよ。」お銀は不安らしく考へ込んでゐた。
「なアに、滅多に案じることはない。」
明朝目がさめると、昨夜張詰めて居たやうな笹村の心持が、又だらけたやうになつてゐた。頭も一層重苦しく淀んでゐた。昨夜進んだやうな心持で母親の言出したことを、考へ出すと可笑しいやうでもあつた。
笹村は何も手につかなかつた。そして究るところは、矢張昨夜話したやうにするより外なさうに考へられた。

一産れて來る子供の顏を、平氣で見てゐられさうもないからね。」

笹村は、冴々した聲でいつに變らず裏で地主の大工の内儀さんと話してゐたお銀が入つて來ると、直に捉へて其問題を擔出した。

「さうやつて置けば、一日ましに形が出來て行くばかりぢやないか。」

「え、さうですけれど……。」

お銀は唯笑つてゐた。

「今朝は何だかから動くやうな氣がしますの。」

お銀は腹へ手を當てて、揶揄ふやうな目をした。

「だけど、然う一時に思究めなくても可いぢやありませんか。貴方は然うなんですね。」

お銀は不思議さうに笹村の顏を見てゐた。

氣が快々して來ると、お銀は下谷の親類の家へ遊びに行つた。

「今日は一つ小遣を儲けて來よう。」と言つて化粧などして出て行つた。

親類のうちでは、何時でも二三人の花の相手が集つた。一兄さんのお袋に友達、近所に闘はれてゐる商賣人あがりの妾などがゐた。お銀はその人達のなかへ交つて、浮々した調子で花を引いた。そこで磯谷の噂なども、ちよいちよい耳に挾んだ。

「お前も何だぞえ、さう何時もぶらぶらしてゐないで、また前のやうな失錯のないうちに田舍へでも行つて體を固めた方がいゝぞえ。」

そこのお婆さんは顏さへ見ると言つてゐたが、お銀は何方へ轉んでも親戚の厄介になぞなりたくないと思つてゐた。どんなに困つても家のない田舍へなぞ行かうとは思はなかつた。

十八

暮に産をする間の隱場所を取決めに、京橋の知合の方へ出かけて行つたお銀は、年が變つても矢張笹村の家に閉籠つてゐた。

笹村にせつかれて、菓子折などを持つて出かけて行く迄には、お銀は幾度も躊躇した。丸藥なども買はせられて、笹村の目の前で飲むことを勸められたが、お銀は賣藥に信用がおけなかつた。「其うち飲みますよ。」と、其まゝ火鉢のなかに仕舞つておいた。藥好な笹村は、始終色々な藥を机の抽斗に絶さなかつた。知合の醫者から無理に拵へて貰つたのもあるし、その時々の體の狀態を自分自身で考へて、其に應じて藥種屋から買つて來たのもある。それにお銀の體に毒氣があると云ふことを聞いてからは、一[illegible]自分の胸に不安を增して來た。血色は薄いが、表情だけは綺麗であつたお銀の顏に、此頃時々自分と同じやうな、ぼつりとしたものが出來るのも不思議であつた。明るかつた瞳から目のあたりも一體に窪んで來た。そして何か考へ込みながら、窓から外を眺めてゐる時の横顏などが、その氣分と相應はないほど淋しく見られることがあつた。

「お産をすると肉は皆おりて了ふさうですよ。」

病氣を究めようともしないお銀は、大して氣にもかけぬらしかつたが、何處へ如何なつて行くとしても、産れる子に負ふべき自分の責任だけは笹村も感じない譯に行かなかつた。

「其ぢや貴方は、自分にそんな覺えでもあるんですか。」お銀は笹村に反問した。

笹村は學校を罷めて、檢束のない放浪生活をしてゐた二十時分に、ふとしたことから負はされた小さな傷以來、體中に波うつてゐた若い血が遂に頓挫つたやうな氣か、始終爲てゐた。頭も頽れて來たし、懈い體も次第に蝕まれて行くやうであつた。酒、女、貧、放肆な生活、それらの所爲とばかりも思へなかつた。其樣なものを追はうとする興味すら、即てそこから漂つて來る影に消れ醉はうとする心に過ぎなかつた。太

陽の光、色彩に對する感じ——食物の味さへ年一年荒れた舌に失はれて行くやうであつた。頭腦が惰くなつて來ると、笹村は手も足も出なかつた。然ういふ時には、かゝりつけの按摩に、頭腦の碎けるほど力まかせに締めつけて貰ふより外なかつた。

「それは此方の氣の所爲ですよ。」

お銀は顏に出來たものを氣にしながらも、醫者からくれた藥すら碌々飮まなかつた。

「…逢つて話してみましたらばね。」と、お銀は京橋から歸つて來た時、待ちかねてゐた笹村に話しだした。

「そんなことなら二階があいてるから、何時でも來ても可いつて、然う言つてくれるんですがね。——だけど女ばかりで、そんな事をして、後で迷惑を見るやうなことでも困るから、能く考へてからにした方が可いつて言ふんですの。正直な人ですから、矢張心配するんでせうよ。」

「……」

「その人の息子は新聞社へ出てゐるんですつて。」お銀は思出したやうに附加へた。

「へえ。それは記者だらうか、職工だらうか。」

「何ですか、さう言つてましたよ。」

笹村は餘り好い氣持がしなかつた。

「それで、その二階は極狹いんですの。天井も低くつて厭な處なんです。お産の時には貴方も來て下さらないと、あんな處で私心細い。」

笹村は默つてゐた。お銀も張合がなささうに口を噤んだ。

正月に着るものを、お銀はその後また四谷から運んで來た行李の中から引張出して、時々母親と一緒に、茶の室で針を持つてゐた。此の前に片附くまでに、少し許り有つたものも皆亡して行李を開けて見ても、ちぐはぐの物ばかりで心淋しかつた。

氣がつまつて來ると、煙草の煙の籠つたなかに、筆を執つてゐる笹村の傍へ來て、往來向の窓を開けて外を眺めた。門々にはもう篠竹が立つて、向の酒屋では積樽などをして景氣を添へてゐた。兜をきめてゐる勞働者の姿なども、暮らしく見られた。熊谷在から嫁入つて來たと云ふ、鬼のやうな顏をしたそこの内儀さんも、大きな腹をして、帳場へ來ては坐込んでゐた。

十九

笹村は、少し手に入つた金で、手詰りのをりにお銀が餘所から借りて來てくれた金を返さしたり、質物を幾口か整理して貰つたりして、殘つた金で蒲團皮を買ひに、お銀と一緒に家を出た。

「私達のは綿が硬くて、迚も駄目ですから、今度お金が入つたら、外の方は少しぐらゐ延ばしても蒲團を拵へてお置きなさいよ。」と、笹村は能くお銀に言はれた。

「十年もあんな蒲團に包まつてゐるなんて、瘦ツぽちの癖に能く辛抱が出來たもんですね。」

初めて汚い笹村の寢床を延べた時のことが、また言出された。

「僕は餘りふか／＼した蒲團は氣味がわるい。」

笹村は笑つてゐたが、それを言はれる度に、自分では氣もつかずに過して來た、長いあひだ滿足に足腰を伸したこともない、行成な生活が追想された、そして矢張その蒲團に可懷しみが殘つてゐた。安机、古火鉢、それにも其時々の忘れがたい思出が纏まれてあつた。そのぺと／＼になつた蒲團も、今は此人達の手に引剝されて、襤褸屑のなかへ突込まれることになつた。

通まで來ると、雨がぽつり／＼落ちて來た。何か話して歩いてゐるうちに、ふと笹村の氣が塞つて來た。

「お前は先へお歸り。」

笹村はずん／＼行出した。

「それぢや蒲團皮は買はなくてもいゝの。」

女は悄れて立つてゐた。

笹村は恍とした女の言葉に、自分の気持を頓挫ると、暫く萎されてゐた女に對する憎悪の念が、一時に勃々活復つて来た。

お銀は一二町ついて来たが、旋て悄々と引返して行つた。

その晩笹村は帰らなかつた。

朝家へ入つて来ると、女は興奮したやうな顔をして火鉢の前に坐つてゐた。甥も傍へ来て火に當つてゐた。

書齋へ引込んでゐると、女は嶮しい笑顔をして入つて来た。

「随分ひどいわね。私口惜しかつたら腹が立つたから、新ちやんに皆話して了つた。貴方は餘り新ちやんのことも言へませんよ。」

「莫迦、少いものには少し氣をつけて物を言へ。」

「新ちやんだつて、叔父さんは今夜帰らないつて、然う言つてゐましたわ。昨夜はお友達も来てゐましたからね。三人で花を引いて、いつまで待つてゐたか知れやしない。――私ぐんぐん蹤いて行つてやれば可かつた。どんな顔して遊んでゐるんだか、それが見たくて……。」

「煩い。」笹村は顔ちら顰めた。笑ふにも笑へなかつた。

日が暮れかゝつて来ると、鍛冶屋の鉄槌の音が途絶えて、坐つてゐても堪らないやうであつた。

お銀は惑はしいことがあると、能く御籤を取りに行く近間の稲荷へ出かけて行つた。通の賑かなのに、こゝは廣々した境内がシンとして、逢い木隠れに金燈籠の光がぼんやり光つてゐた。鈴を引くと、ぢやらんぢやらんと云ふ音が、四邊に響いて、奥の方から小僧が出て来た。

「貴方のも取つて来ましたよ。」と、お銀は笹村のを攤げて机の端においた。笹村は心を細めにしたランプを置いて、火鉢の傍に丸くなつて、臥そべつてゐた。

「私は今宙に引懸つてゐるやうな身の上なんですつてね。家があつてないやうな……居るところに苦勞してゐるんですつて。」

笹村は默つて其文章に讀惚れてゐた。

「私、京橋へ行からか行くまいか、如何しようか知ら。」

お銀はBさんと云ふ後楯のついてゐる笹村と、迂濶した相談も出来ないと思つた。

「B君の阿母さんの説では、一緒になつた方が可いと言ふんださうだけれど……。」と言ふ笹村は、その後もB――と一二度逢つてゐた。

晩に笹村は、賑やかな通りの町へ出て見た。そしてふと思ひついて、女のために指輪を一つ買つて戻つた。

お銀は嬉しさうに其を嵌けて見ると笑出した。

「私前に持つてゐたのは、もつと大きくて光澤がありましたよ。それにコートだつて持つてたんですけれど……叔父さんが病氣してから、皆亡くしてしまひましたわ。」

「さうかい。お前贅澤を言つちやいかんよ。入らなけア田舎へ還らう。」

笹村は顔色をかへた。

二十

春になつてから笹村は時々思立つては引移るべき貸家を見て行いた。お銀の傍をおくのに、此家の間取の不適當なことも一つの原因であつた。茶の室から通ふやうになつてゐる厠へ、客の起つ毎に、お銀は物蔭へ隠れてゐなければならぬ場合が度々あつた。その頃お銀は京橋の家へ行くことを悉皆思止つてゐた。二階は危いと云ふのも一つの口實であつたが、此處を離れてしまへば、後は何うなつて行くかと云ふ不安が、日増に初めの決心を鈍らせた。

「……それに私だつて、餘所へ出るとなれば手廻の世帶道具くらゐ少しは用意しなけァ厭ですもの。いくら何でも餘り見すぼらしいことしてお產をするのは心細うござんすから。」

お銀の此頃の心には、そこへ身のうへの相談に行つたことすら、輕擧のやうに思はれて來た。

「あんな窮屈な二階住居で、お產が輕ければ可うござんすけれど、何しろ初產のことですから、どんな間違がないとも限りませんもの。」

「此ばかりは重いにも輕いにも限がないんですからね。」と母親も傍から口を利いた。

笹村は默つて火鉢に倚りかゝりながら、まじまじと煙草を喫してゐた。麻の葉の白くぬかれた赤いメリンスの前掛の紐を結へてゐるお銀の腹の減切大きくなつて來たのが目についた。水氣をもつた樣な顏も、白蠟のやうに透徹つて見えた。

「妾なことをして、萬一のことでもあつては、田舍にゐるこれの父親や親類のものに私が分疏がないやうな譯でござんすでね。」

そんなことから、笹村は家を搜すことに決めさせられた。

笹村はずつと奧まつた方を搜しに出て行つた。その邊には可也手廣な空家がぽつ／＼目に着いたが、周が汚かつたり、間取が思はしくなかつたりして、どれも氣に向かなかつた。

然うして步いてゐると、二枚小袖に羽織は重いくらゐ、陽氣が暖かくなつて來た。垣根の多い靜かな町には、柳の芽がすい／＼伸出して、梅の咲いてゐる處などもあつた。空も深々と碧み渡つてゐた。笹村は然うした小石川の奧の方を一わたり見て步いたが、友人の家を出て、普通の貸家へ移る時の生活の不安を考へると、矢張居馴んだ場所を離れたくないやうな氣もしてゐた。

「今日はたしか先生の入院する日だ。」

笹村は或日の午後、家を搜しに出て、途中からふと思出したやうに引返して來た。その日は薄雲のした氣の重い日であつた。青木堂でラヘルを二函紙に包んでもらつて、大學病院の方へ入つて行くと、蕾の固い櫻の片側に植つた人道に、薄日が照つたり消えたりしてゐた。笹村は自分のことにかまけて、暫くM先生の閾もまたがずに居た。先生と笹村との間には、時々隔りの出來ることがあつた。

M先生は、笹村の胃が漸く回復しかけて來る頃から、同じ病氣に惱まされるやうになつた。

「今の若さで、さう藥ばかり飲んでるやうぢや心細いね。美いものも齒で嚼んで食ふやうぢや、迚も駄目だよ。」

茶一つ口にしないで、始終萎つた顏をしてゐる笹村に、先生は元氣らしく言つて、生效のない病軀を嘲つてゐたが、先生の唯一の幸福であつた口腹の慾も、その頃から、少しづつ裏切られて來た。

定められた病室へ入つて、大分待つてゐると、旋て扉を開けて長い廊下を覗く笹村の目に、丈の高い先生の姿が入口の方から見えた。O氏とI氏とが、その後から手周の道具や包のやうなものを提げて入つて來た。

先生の目には深い不安の色が潛んでゐるやうであつたが、思ひがけない笹村の姿を此處に見つけたのは、心嬉しさうであつた。

二十一

俥車から直に石段で上つて來たM先生は、淺い味噌濾帽子を冠つたまゝ、疲れた體を壁に倚りかゝつて暫く椅子に腰かけてみたり、眞中の寢臺に肱を持たせなどして、初めて自分が意想外の運命で、入るやうに定められた冷い病室の厭はしさを紛らさうとしてゐるやうに見え

た。
「謂はゞ客を入れるんですから、病室ももつと如何かしたら可さゝうに思ひますんですがな。」
O氏が言出すと、
「うむ……堪らんさ。」と、先生も部屋を見廻して輕く頷いたが、眉のあたりが始終曇つてゐた。それでも斯様な日に衆が集つて來てゐると云ふことが、大いなる滿足であつた。そして何時もより調子が低く、氣分に思屈したやうな處はあつたが、話は不相變はずんだ、力のない微笑と一緒に輕い洒落も出た。
「こゝを推してごらん。」
先生は、病氣の話が出たとき、痩せた下腹のあたりを露はして、瘤のある處を手で示した。
「痛ござんせう。」
「いや介意はんよ。」
「成程大分大きうござんすですな。」
M先生は瘤の何であるかを診察させる爲に、二週間こゝに居なければならなかつた。先生が此瘤を氣に爲出したのは、餘程以前から素地のあつた胃病が、大分嵩じて來てからであつた。先生はその頃から、筆を執るのが臆劫らしく見受けられた。
「それは然し誰か好い醫師に診ておもらひになつた方が可うござんせう。」
笹村も瘤に不審を抱いて、一二度勸めたことがあつた。
「お前の胃はこの頃奈何かね。」
先生は時々笹村に尋ねた。其顔には、少しづつ躙られて行くやうな氣の衰へが見えた。
笹村は新に入つた社の方の懸賞俳句の投稿などが、山のやうに机の上に積んであるのを見受けた。今まで道樂であつた句選が、此頃先生の大切な職務の一つとなつたのが、慘しいアイロニイのやうに笹村の目に閃いた。
「己は病氣になるやうな惡いことをしてゐやしない。周圍が己を斃すのだ。」
先生は激したやうな調子で言つた。其聲には此二三年以來の忙しい仕事や煩ひの多い社交、冷かな世間の批評に對して、始終鼻張の强かつた先生の心からの溜息も聞かれるやうであつた。
ある胃腸病院へ診察を求めに行つた頃は、そこの院長もまだ分明した診斷を下しかねてゐた。するうちに瘤の部分に痛みさへ加はつて來た。
その日は、日暮方に衆と一緒に、病室を引揚げた。
笹村が、或晩二度目に尋ねて行つた時には、廣い部屋に色々の物が持込まれてあつた。見馴れぬ美しい椅子があつたり、綺麗な盆栽が飾られたりしてあつた。火鉢、鍋、茶碗、盥、飲料、果物、匙やナイフさへ幾色か、こちや／＼持込まれてあつた。新刊の書物、本の意匠の下圖、其様なものも無暗に散らかつてゐた。船艙の底にでもゐるやうに、敷詰めた敷物の上に胡坐を搔いて、今一人來客と、食味の話に耽つてゐる先生の調子は、前よりも一層元氣が好かつた。
「朝日のさめた時なんざ、こんなものでも枕頭にあると、ちよつと好いものさ。」
先生は其處にあつた鉢植の菫の話が出ると、花を瞶めてゐながら呟いた。先生は早咲花などに趣味を有つたことはなかつた。
瘤の胃癌であることが確められた日に、O氏とI氏とが、夜分打連れて笹村を訪ねた。笹村は友人の醫者に勸められて、初めて試みた注射の後、丁度氣懈い體を出來たての蒲團に横へて、うつら／＼して居た。
お銀は狼狽へて、裏の方へ出て行つた。

二十二

「それで問題は、切開するか爲ないかと云ふこ

となんだがね。Ｊさんなどは、如何せ其儘にしておいて不可いものなら、思断つて手術した方が可いと云ふことを言つてゐるんだ。」
「然うすれば確に效果があるのかね。」
「それが解らないんださうだ。體も隨分衰弱してゐるし、反つて死を早める危險がないとも限らんと云ふのだからね。」
「それに切開と云ふことは如何もね……先生もそれを望んでは在らつしやらないやうだ。」
ひそ／＼した話聲が暫く續いた。やがて二人は略笹村の意嚮をも確めて歸つて行つた。
「へえ……お氣の毒ですね。」
お銀は客の歸つた部屋へ入つて來て、火鉢の傍へ坐つた。
「三十七と云ふ年は、よく／＼惡いんだと見えますね。私の叔父が矢張さうでしたよ。」
笹村は劇い頭の髮毛を撫でながら、蒲團のうちに仰向いて考へ込んでゐた。注射をした部分の筋肉に時々しく／＼痛みを覺えた。
「……傳通院前の易者に見ておもらひなすつたら如何です。それは能く判りますよ。」お銀はまた易者のことを言出した。
笹村は翌日早く、その易者を訪ねたが、その日は生憎休みであつた。歸りに傳通院の横手にある大黑の小さい祠へ入つて、そこへ出てゐる或法師について觀てもらふことにした。法師は綺羅美やかに著飾つた四十近くの立派な男であつた。在から來たらしい屈託さうな顏をした婆さんに低い聲で何やら言つて聞してゐたが、髮の蓬々した陰氣さうな笹村の顏を時々じろ／＼と見てゐた。指環や時計をぴか／＼さした貴婦人が一人、手提袋をさげて、腕車から降りて入つて來ると、法師は笑交すやうにしを／＼した目をした。女はそのまゝ奧へ入つて行つた。
「これア迚も……。」
法師は水晶の珠數の玉を指頭で繰ると、目を開けて見ながら笹村に言ひかけた。
「もう病氣が悉皆根を張つてゐる。」
「手術の效はないですか。」
「とても……。」と反りかへつて、詳しく見る必要はないと云ふ顏をした。
笹村は金の包を三寶に投込むやうにしてそこから出た。
その日M先生を訪ねると、仕事場のやうであつた先生の部屋は綺麗に取片著いてゐた。先生は髮などもきちんと分けて、顏に入院前のやうな暗い影が見えなかつた。傍には他の人も來てゐた。
「今朝も××が來て、この際何か書けるなら、出來るだけのことはするとか言つてくれたがね、まあ病氣でも癒つてから願はうと言つておいた。己はこんなに迄なつて書かうとは思はん。」
と先生は其の苦ッたれを嗤ふやうに苦笑した。何もこの病人に書かさなくたつて好意があるなら……と云ふ意味も聽取れた。
「それに己は病氣してから冷淡になつたよ。△△が昨日も來てハンドレッドばかり置いて行つてくれるし、何なら些と御用立しませうかね。」
と言つて笑つた。
笹村は、M先生の或大きな仕事を引受けることになつてから、牛込の下宿へ獨で引移つた。その前には、家族と一緒に先生の行つてゐた海岸の方へも一度訪ねて行つて、二三日をそこで遊んで過ごした。海岸はまだ風が寒く、浪も每日荒れつゞいて、分明した日とてはなかつた。笹村は丁度また注射の後の血が溷濁したやうになつて、頭が始終重く鬱かつた。酒も禁じられてゐた。
牛込のその下宿は、棟が幾個にも分れて、綺麗な庭などがあつたが、下宿人は二人ばかりの紳士と、支那人が一人居る限であつた。笹村は、机とランプと置時計だけ腕車に載せて、或日の

午後そこへ移つて行つた。そして立木の影の多い庭向の窓際に机を据ゑた。

二十三

下宿は晝間もシンとしてゐた。笹村は机の置場などを幾度も替へて見たり、家を持つまで長いあひだ此近傍の他の下宿に居た頃行きつけた湯へ入りなどして、氣を落着けようとしたが、旅にゐるやうな心持で、何も手に著かなかつた。それで寢轉んだり起きたりしてゐると、もう午になつて、顏の蒼白い三十ばかりの女中が、膳を運んで來て、默つてそこらに散らかつたものを片著けなどする。膳に向つても、水にでも浸つてゐたやうに頭がぼーッとしてゐて、持ちつけぬ竹の塗箸さへ心持が惡かつた。病氣を虞れるお銀の心著で、机のなかには箸箱に箸もあつたし、飯食茶碗も紙に包んで持つて來たのであつたが、其は其まゝにして置いた。

加之生死の境にあるM先生の手助であるから、仕事をしても報酬が得られるか否かと云ふことも疑問であつた。妙な廻合せで、上草履一つ貰へずにゐる笹村は、舊下宿にゐた時のやうに氣儘に擧動ふことすら出來なかつた。

飯がすむと、袋に多量貯へおきの胃の藥を飲んで、廣い二階へ上つて見た。二階には見晴の好い獨立の部屋が幾個もあつたが、孰も明いてゐた。病身らしい、頬骨と鼻が隆く、目の落窪んだ、五十三四の主の高い姿が、庭の植込の間に見られた。官吏あがりでもあるらしい其主の聲を、笹村は一度も聞いたことがなかつた。細君らしい女が二人もあつて、時々厚化粧にけば〳〵しい扮裝をして、客の用事を聞きに來ることのある十八九の高島田は、孰の子だか解らなかつた。

飲食店にでもゐたことのあるらしい若い女中が、他に二人もゐた。そして拭掃除がすんで了ふと、手摺にもたれて、お互に髮を結合つたり、櫛や簪の話をしてゐた。

一客もゐないのに、三人も女がゐるなんて可笑しいね。」笹村は其處らをぶら〳〵しながら笑つた。

「それア然らですけれど、家は一晩二晩の泊客がちよい〳〵ありますから……。」

笹村は階下へ降りて來て、また机の前に坐つた。大きな西洋紙に書いた原稿の初めの方が二三冊机の上にあつた。笹村は錘のかゝつたやうな氣を引立てて、ぼつ〳〵筆を加へはじめた。遣始めると惰力で仕事が左に右暫くの間は進行した。時とすると、原書を繙つて照合しなどしてゐた。ふと筆をおいて、疲れた體を後へ引くら反ると、頭がまた色々の考へに捉へられて、何時迄も打切ることが出來なかつた。

氣が腐さつて來ると、笹村は私と逃げるやうに宿の門を出た。足は自然に家の方へ向いた。

お銀は寂しい下宿の膳のうへに載せるやうなものを臺所で煮てゐた。

「私今車夫に持たしてやらうと思つて……。」

お銀は暑さうに額の汗を拭きながら、七輪の側を離れた。

火鉢の傍に坐つてゐると、ゴー〳〵云ふ銀冶屋の機械の音が、いつも聞馴れたやうに耳に響いた。此音響のない世界へ行くと、笹村は反つて頭が散漫になるやうな氣がした。

夜おそく笹村は蓋物を提げて下宿へ還つて行つた。そして部屋へ入つてランプを點けると、机の上の灰皿のなかに、赤い印肉で雅號を捺したM先生の小形の名刺が入れてあつた。笹村は、暫く机に坐つてみたが、直に火を細くして寢床へ入つた。

上總の方の郷里へ引込んでゐる知合の詩人が、旅鞄をさげて、ぶらりと出て來たのはその頃

て茶漬でも食へるやうになつたら書かう。」
笹村は黙つて俛いて了つた。
二三の人が寄つて來ると、先生は何時までも話に耽つた。
「お前は此頃何を食つてゐる。」
先生は思出したやうに訊ねた。
「然うでござんすな。格別此と云ふものもありませんですからな。私ア鹽辛ばかり嘗めてゐますんです。」
O氏は揶揄ふやうに言つた。
「笹村は野菜は好きか。」
「慈姑なら美いと思ひます。」
「さうさな、慈姑はちと美すぎる。」先生は呟いた。
笹村は持つて行つた金の問題を言出す折がなくて其まゝ引退つた。

二十五

出産の時期が迫つて來ると、笹村は何となく氣になつて時々家へ歸つて見た。暫く脚氣の氣味で、足に水氣を有つてゐたお銀は、氣懈さうに臺所の框に腰かけて、裾を捲つて裏から來る涼風に當つたり、低い窓の腰に體を持たせたりして、可恐しい初産の日の來るのを考へてゐた。興奮したやうな顏が小さく見えて、水々しく落着のない目の底に、一種の光があつた。
笹村はいくら努力しても、尨大な其原稿の未だ手を入れない部分の少しも減つて行かないのを見ると、筆を持つ腕が思はず澁つた。下宿の窓の直下には、黝い青木の葉が、埃を被つて重なり合つてゐた。乾いたことのない地面からは、土の匂が鼻に通つた。笹村は視力が萎えて來ると、アゝと胸で太息を吐いて、疊のうへに直りと骨ばつた背を延した。そこから廊下を二三段階段を降りると、更に離房が二間あつた。笹村はそこへ入つて行つて、寢轉んで空を見てゐることもあつた。空には夏らしい乳色の雲が輕く動いてゐた。差當つた生活の缺陷を埋合すために何か自分のものを書く心算で、其材料を考へようとしたが、其樣な氣分になれさうもなかつた。
往來に水を撒く時分、笹村は迎へに寄越した腕車で、西日に照りつけられながら、家の方へ歸つて行つた。窪みにある靜かな町へ入ると、笹村はもだ〳〵した胸の惱みが何時も吸取られるやうであつた。
まだ灯も點さない家のなかは、空氣が冷々して薄暗かつた。お銀は丁度茶の室の隅の方に坐つて、腹を抑へてゐた。臺所には母親が竈の下にちろ〳〵火を焚きつけてゐた。
「今夜らしいんですよ。」
お銀は眉を歪めて、絞出すやうに言つた。
「なか〳〵其樣な事ぢや出る案じはないと思ふが、でもこゝ産婆だけは呼んでおかないと……」
母親は強ひて不安を押へてゐるやうな、落着いた調子であつた。
「それぢや使を出さうか。」
笹村は其處に突立つてゐながら、押出すやうな聲音で言つた。
「さうですね。知れるでせうか。……それよりか貴方お鳥目が……。」と、お銀は笹村の顏を見上げた。
「私拵へに行かうと、然う思つてゐたんですけれど、まだ斯樣に急ぢやないと思つて……。」
笹村は、不安さうに部屋を其方此方動いて居た。無事に此一夜が經過するか否かが氣遣はれた。稚い時分から、始終劣敗の地位に虐げられて來た、總ての點に不完全な自分の生立が、まざ〳〵と胸に浮んだ。それよりも一層退化されて此世へ出て來る、赤兒の事を考へるのも厭であつた。
お銀も、子供の話が出る度に、能く其を言ひ

言ひした。

「どんな子が産れるでせうね。私見たいな悪い子は産みたくない」

「瓜の蔓に茄子は成らない。だけど、どうせ、育てるんぢやないんだから。」笹村も言つてゐた。

お銀は一時苛々してゐた腹の痛みも薄らいで来ると、自分に起つてラムプを點したり、膳拵へをしたりした。

「何だか私、このお産は重いやうな気がして……」

夜食を食べてゐたお銀は間もなくするとまた箸を措いて顔を顰めた。

笹村も箸を措いたまゝ、お銀の顔を眺めた。その目の底には、胎児に対する一種の後悔の影が閃いてゐた。

慌しいやうな夕飯が済むと、笹村は何やら持出して家を出た。母親もそれと前後して、産婆を呼びに行つた。

二十六

少し許りの金を袂の底に押込んで、笹村は町をぶら〳〵歩いてゐた。お産が気にかゝりながら、其処に居合したくないやうな心持もしてゐたので、少時顔を出さなかつた代診の処へ寄つて見た。笹村は好い加減に翫弄にされてゐるやうに思つて、三四月頃注射を五本ばかり試みた限籠あてゝゐたが、矢張それが不安心であつた。

「此頃は些とは快いかね。」

医師はビールに酔つた顔を団扇で煽ぎながら云つた。

笹村は今夜産れる子供を、直引取つてもらへるやうな家はあるまいかと、其相談を持出した。穉い時分近所同士であつた此男には、笹村は何事も打明けることを憚らなかつた。

「ないことはない。けど後で後悔するぞ。」と、医師は或女とのなかに出来た、自分の子を里にやつておいた経験なども話して聞かした。

「後のことなど、今考へてゐられないんだからね。」

笹村は其心当りの家の様子が詳しく聞きたかつた。二人目で、後妻の腹から産れた子を、其先方へくれる話を取決めて、先方の親達がほく〳〵と引取に来た時、可哀さうな乳呑児を手放しかねて涙脆い父親が泣いたと云ふことを、母親から曾て聞かされて、余り好い気持がしなかつた。それをふと笹村は思浮べた。

「まア産れてからにする方が可い。」

医師は相当に楽に暮してゐる先方の老人夫婦の身のうへを話してから言つた。

笹村は丸薬を少し貰つて、そこを出た。

家へ帰ると、小さい家のなかは、闃としてゐた。母親は暗い片隅で、お産襁褓を出して見てゐたが、傍にお銀も脱脂綿や油紙のやうなものを整へてゐた。

可恐しい高い齒のついた下駄を穿いて、産婆が間もなく遣つて来た。笹村は四畳半の方に引込んで寝転んでゐた。

「大丈夫大船に乗つた気でおいでなさい。私は是迄何千人と手に掛けてゐるけれど、一人でも失敗つたといふ例があつたら、お目にかゝりません。安心してお在でなさいよ。」産婆は喋々と自分の腕前を矜つた。

お産は空家の方で為ることにした。母親は一人で薬罐を運んだり、産婆の食べるやうなものを見繕つたりして、裏から出たり入つたりしてゐた。笹村も二三度傍へ行つて見た。

産気が次第について来た。お銀は充血したやうな目に涙をためて、顔を顰めながら、笹村の出した手に取着いていきんだ。その度に顔が真赤に充血して、額から脂汗が滲み出た。い

きみ込むと、せい／＼肩で息をして、術なげに手をもぢ／＼させて居た。そして時々頭を擡げて、當がはれた金盥にねと／＼したものを吐出した。宵に食べたものなども其まゝ出た。

九時十時と不安な時が過ぎて行つた。産婦は産婆に勵まされて、徒らにいきむばかりであつた、體の疲れるのが目に見えるやうであつた。

「あゝ苦しい……。」

お銀は強い母親の手に縋りついて、宙を見詰めてゐた。

「如何いふもんだかね。」

十二時過に母親は家の方へ來ると、首を傾げながら笹村に話しかけた。

「難産の方かね。」

火鉢の傍に番をしてゐた笹村は問ひかけた。

「まア餘り輕い方ぢや無ささうですね。」

「醫者を呼ぶやうなことはないだらうか。」

「さあ……產婆があゝ言つて引受けてゐるから、間違はあるまいと思ひますけれどね。」

そのうちに笹村は疲れて寢た。

魘されてゐたやうな心持で、明朝目のさめたのは、七時頃であつた。

茶の室へ出てみると、母親は臺所でこちやこちや働いてゐた。

お銀はまだ悩み續けてゐた。

二十七

産婆が赤い背の丸々しい産兒を、兩手で束ねるやうにして、次の室の湯を張つてある盥の傍へ持つて行つたのは、もう十時近くであつた。

産兒は初めて風に觸れた時、二聲三聲啼立てたが、其時はもうぐつたりしたやうに成つてゐた。

笹村は産室の隅の方から可怕々々それを眺めてゐたが、啼聲を立てさうにすると體が縮むやうであつた。此處では少し遠く聞える機械鍛冶の音が表にばかりで、四邊は靜かであつた。長いあひだの苦痛の脱けた産婦は、「こんな大きな男の子ですもの。」と云ふ産婆の聲が耳に入ると、漸と蘇つたやうな心持で、涙を一杯ためた目元に莞然してゐたが、直に眠に沈んで行つた。汗や涙を拭取つた顏からは血の氣が一時に退いて、微弱な脈搏が辛うじて通つてゐた。

産婆は慣れた手つきで、幼毛の軟かい赤兒の體を洗つて了ふと、續いて汚れものの始末をした。

部屋には然う云ふものから來る一種の匂が漂うて、涼しい風が疲れた産婦の顏に、心地よげに當つた。笹村の胸にも差當り輕い歡喜の情が湧いてゐた。

「隨分骨が折れましたね。」

産婆は漸と立つて額を拭つた。

「この位長くかゝりますと、産婆も體が疲れますよ。私もちよつと考へたけれど、一旦さへ出ればもう此方のものですからね。」

「そんなだつたですかね。」と云ふやうに笹村は産婆の顏を見てゐた。

頭が出たきりで暫く閊へてゐた時、「それ、もう一つ。」と産婆に聲をかけられて、死力を出してゐた産婦の醜い努力が、思出すと可笑しいやうであつた。

「もつと自然に出ると云ふことに行かないもんですかね。」

「そんな人もありますよ。けど何しろ此位の赤ちやんが出るんですもの。」と、産婆は笑つた。

笹村は當てつけられてゐるやうな氣がして、苦笑してゐた。

汚い聽診器で産婦の體を見てから、産後の心著などを話して引揚げて行くと、部屋は一層靜かになつた。

母親は默つて、そこらを片著けてゐたが、笹村も風通しの好い窓に腰かけて、何時回復するとも見えぬ眠に陷ちてゐる産婦の蒼い顏を眺め

てゐたが、時々傍へ寄つて赤兒の顏も覗いて見た。

その日は產婆を氣遣つて訪ねてくれた醫師と一緒に、笹村は次の室で酒など飲んで暮した。產婦は目がさめると、傍に寢かされた赤兒の顏を眺めて淋しい笑顏を見せてゐたが、母親に扶けられて厠へ立つて行く姿は、見違へるほど瘦せてもゐたし、老けてもゐた。赤兒は時々、じめじめしたやうな聲を立てて啼いた。笹村は、牛乳を薄く延してしめたガーゼに浸して、自分のに飲ませなどした。

翌朝谷中の佩友が訪ねて來た時、笹村は產婦の枕頭に坐つてゐた。

「さう、それは可かつた。」

裁卸の夏羽織を著た佩友は、產室の次の室へ入つて來ると、何時もの調子でお愛でたを述べた。沈んだ家のなかの空氣が、遽に陽氣らしく見えた。

「どうだね、それで……。」と、佩友は色々の話を聽取つてから、此場合笹村の手元の苦しいことを氣遣つた。

「少し位なら如何にかしよう。」

「さうだね、若し出來たら然う願ひたいんだが……。」笹村はその事も頼んだ。

二人の前には、產婦が產前に好んで食べた苺が皿に盛られてあつた。

二十八

產婦は長くも寢てゐられなかつた。足や腰に少し力がつくと、匍出して何かして見たくなつた。大きな厄難から首尾よく脱れた喜悅もあつたり、產れた男の子が、人並すぐれて醜いと云ふほどでもなかつたので、何がなし一人前の女になつたやうな心持もしてゐた。

七夜には自身で水口へ出て來て、肴を見繕つたり、その肴屋と醫者とが贈つてくれた鯉の入れてある盥の前に蹲坐んで見たり、佩友が持つて來てくれた、派手な浴衣地を取りあけて見たりしてゐた。產婆は自分の世話をするお終の湯をつかはせて、涼風の吹く窓先に赤兒を据ゑ、剃刀で臍の緒を切つて、米粒と一緒に其を紙に包んで、其處におくと、「こゝへ赤ちやんの名と生年月日時刻をお書きになつて仕舞つておいて下さい。」と、笹村に言つた。

「貴方何か好い名をつけて下さいよ。」

產婦は用意してあつた鰹節や、包金のやうなものを色々盆に載せて、產婆の前においた。

「初めてのお子さんに男が出來たんだから、貴女は鼻が高い。」と、無愛想な產婆もお愛想笑ひをして猪口に口をつけた。

笹村は苦笑ひをしてゐたが、時々子供を抱取つて、窓先の明るい方へ持出したりした。赤兒は時々鼠の子のやうな目を微に明いて、口を窄めてゐたが、顏が日によつて違つた。漸く整つた輪郭を見せることもあるし、その輪郭が悉皆頽れてしまふこともあつた。

「目の邊が貴方に似てますよ。だけど此子はお父さんよりか好い兒になりますよ。」

お銀はその顏を見込みながら言つた。

七夜過ぎると、笹村は赤兒を抱いて、竊と裏へ出て見た。そして藪疊のなかを彼方此方歩いて見たり、杜松などの植つた崖合の狹い處へ入つて、青いものの影を見せたりした。赤兒はぽつかり目を開いて目を動かしてゐた。目には木の影が青く映つてゐた。その顏を見てゐると、笹村は淡い憐愍の情と哀愁とを禁じ得なかつた。

そして何時までも其處に蹲坐んでゐた。

「早く遣らうぢやないか。今のうちなら私生兒にしなくても濟む。」

笹村は氣持を痛んでゐる赤兒の顏を見ながら、時々想出したやうに母親の決心を促した。

「私育てますよ。貴方の厄介にならずに育て

ますよ。乳だつて斯樣に澤山あるんですもの。」
お銀は終に餘所々々しいやうな口を利いたが、自分一人で育てて行けるだけの自信も決心もまだ無かつた。
笹村は暫く忘れてゐた仕事の方へ、また心が向いた。別れることに就いて、一日評議をした擧句、晩方ふいと家を出て、下宿の方へ行つて見た。夏の初めにお銀と一緒に、通へ出て買つて來た質素な柄の一枚しかないネルの單衣の、肩のあたりがもう日燒のしたのが、體に厚ぼつたく感ぜられて見すぼらしかつた。手や足にも汗が滲み出て、下宿の部屋へ入つて行つた時には、睡眠不足の目が昏むやうであつた。笹村は著物を脱いで、築山の側にある井戸の傍へ行くと、冷い水に手拭を絞つて體を拭いた。石で組んだ井筒には青苔がじめ〳〵してゐた。傍に花魁草などが丈高く茂つてゐた。
部屋はもう薄暗かつた。机のうへも二三日前に一寸來て見たとほりであつたが、そこにカチカチ言つてゐる筈の時計が見えなかつた。笹村は何だか物足りないやうな氣持がした。押入や違棚のあたりを搜して見たが、矢張見當らなかつた。机の抽斗を開けてみると、そこには小錢を少し入れておいた紙入が失くなつてゐた。

二十九

女中に聞くと、時計は日暮方から見えなかつた。多分横手の垣根を乘越えて、小偸盗が入つて持つて行つたのであらうと云ふことであつた。その垣根は北側の狹間に沿うて、隣の廣い地内との境を作つてゐた、人氣のない地内には大きな古屋敷の左右に、荒れた小家が二三軒あつたが、立木が多く、草が茂つてゐた。奥深い母屋の垠にある笹村の部屋は、垣根を乘越すと、そこが直離房と向合つて机の据ゑてある窓であつた。
「何分此處までは目が届かないものですから。」と女中は乘越した垣根から此方へ降りる足場などに就いて説明してゐたが、竹の朽ちた建仁寺垣に、そんな形跡も認められなかつた。
笹村は部屋に音響のないのが手頼なかつた。そして此十四五日許り煩の多かつた頭を落着けようとして、机の前に坐つて見たが、此處へ來て見ると、家で忘られてゐたことが、色々に思出されて來た。M先生から折々せつかれる仕事のことも然うであつたが、自分が暫く何も書かずにゐることも不安であつた。國にゐる年老つた母親から來る手紙に、下宿へ出る前後から、まだ一度も返事を書かなかつたことなども、時々笹村の心を曇らした。笹村は先刻封を開けた時も、月の初めに家で受取つて、そのまゝ袂へ入れて持つて來ると、封も切らずに仕舞つておいた手紙が、二通目についた。笹村は長いあひだ、貧しく暮してゐる母親に、送るべきものも送れずに居た。
其處らが薄暗くなつてゐるのに氣がつくと、笹村はマッチを擦つてランプを點けて見たが、餘熱のまだ冷めない部屋は、息苦しいほど暑かつた。急にまた先生の方の事が氣になつて、下宿を出ると、足が自然に其方へ向いた。笹村は是迄にも些とした反抗心から、長く先生に背いてゐると、何かしら一種の心寂しさと不安を感ずることが度々あつた。
先生は丁度按摩を取つて寢てゐた。七月に入つてから、先生の體は一層衰弱して來た。腰を痛がつて、寄つて行く人に時々揉ませなどしてゐた。唯一の賴みにしてゐた白屈菜を、或藥店の大家に製藥させて服んでゐたが、大してそれの效驗のないことも判つて來た。
笹村は玄關から茶の室へ顏を出して、夫人に先生の容態を尋ねなどした。
「先刻も著物を著替へるとき、あゝ悉皆痩せて

しまつた、斯様にしても快くならないやうだし、迚も望がないんだらうつて、じれ〳〵してゐるんですよ、しかし笹村も癒つたくらゐだから、涼氣でも立つたら、些とは好い方へ向くか知らんなんて然う言つてゐますの。」

先生のじれてゐる様子を想像しながら、笹村は玄關を出た。

そこから遠くもないI氏を訪ねると、丁度二階に來客があつた。笹村はいつも入りつけてゐる階下の部屋へ入ると、そこには綺麗な簾のかかつた縁の檐に、岐阜提灯などが點されて、青い竹の垣根際には萩の軟かい枝が、友染模様のやうに撓んでゐた。暫く來ぬまに、庭の花園も悉皆手入をされてあつた。机のうへに堆く積んである校正刷も、I氏の作物が近頃世間で一層氣受の好いことを思はせた。

三十

客が歸つて了ふと、瀟洒な浴衣に薄鼠の兵兒帶をぐる〳〵卷にして主が降りて來たが、何となく話が滑さしてゐた。昔の作者を思はせるやうな此人の扮裝の好みや部屋の裝飾は、周圍の空氣と懸隔れた其心持に相應したものであつた。笹村は此處へ來る度に、お門違の世界へでも踏込むやうな氣がしてゐた。

奥には媚いた女の聲などが聞えてゐた。草双紙の繪にでもありさうな花園に灯影が青白く映つて、夜風がしめやかに動いてゐた。

「一日これにかゝり切つてゐるんです。彼方へ植ゑて見たり、此方へ移して見たりね。もう弄りだすと際限がない。秋になるとまた蟲が鳴きます。」と、I氏は莨を撮みながら、健かな呼吸の音をさせて吸つてゐた。緊張した其調子にも創作の氣分が張切つてゐるやうで、話してゐると笹村は自分の空虚を感じずにはゐられなかつた。

そこを出て、O氏と一緒に歩いてゐる笹村の姿が、人足のやうやく減つて來た、縁日の神樂坂に見えたのは、大分たつてからであつた。O氏は其年迎へた細君と、少し奥まつたところに家を持つてゐた。I氏の家を出た笹村は足がまた自然に其方へ向いて行つた。O氏は二階の手摺際へ籐椅子を持出して、午後からの創作に疲れた頭を安めてゐたが、本をぎつしり詰込んだ大きな書棚や、古い裝飾品のこて〳〵飾られた部屋へ入りつけてゐる笹村の目には、寂しい自分の書齋よりも一層懐しかつた。机のうへに心を細くしたランプがおかれて消や書入の多い原稿が其前にあつた。

二人はO氏の庭に植ゑるやうな草花を見て歩いたが、笹村は始終いら〳〵したやうな心持でゐながら、書生をつれたO氏に矢張ついて歩いたが、坂の下で、これも草花を獵りに出て來たI氏に行逢つた。植木の竝んだ坂の下は人影が疎であつた。そこでO氏は臺灣葭のやうなものを見つけると、それを二株ばかり買つて、書生に持たせて歸した。I氏は花物の鉢を提げて歸つて行つた。

O氏は殘つた小錢で、ビーヤホールへ咽喉の渇を癒しに入つたが、笹村も一緒にそこへ入つて行つた。二人は奥まつた部屋で、ハムなどを突つきながら、暫く話してから外へ出た。往來の雜沓は大分鎮つてゐた。O氏に別れた笹村は暗い横町からぬけて、人氣のない宿へ歸つて來た。

「僕の宿へ來てみないかね。」

別れる時笹村はO氏を誘つて見た。

「いや止さう。君の下宿もつまらんでね。」

下宿では皆な寝靜つてゐた。長い廊下を傳うて、自分の部屋へ入ると、戸を閉切つた室内には、また晝間の餘熱が籠つてゐた。笹村は高い方の小窓をすかして、暫く風を入れてゐたが、す

るうち疲れた體を蒲團のうへに横へた。

二三日笹村は、朝の涼しいうちから仕事に取りかゝつた。前の二階の二室へは、急に下町の商家の內儀らしい、四十前後の女が、息をぬきに來たと云ふ風で入つて來た。何處か體に惡い所のあるやうな其女は、毎日枕を出して臥そべつてゐた。時々三十許りの女が小さい娘をつれて訪ねて來ると、水菓子などを食べて、氣樂さうに半日喋舌つて遊んで行つた。宿の娘から借りた琴が、主人公の方の拙い唄の聲につれて掻鳴らされた。

「騷々しくて爲方がない。」

笹村は給仕してゐる女中に顏を顰めたが、部屋を移らうともしなかつた。

三十一

二つに岐れた經濟が持切れなくなつて、笹村が程なく下宿を引拂つたのは、谷中の友人の盡力でお銀の體の極が漸く著いてからであつた。その頃には、甥もその姉婿につれられて、田舍へ歸つてゐた。

甥は益々惡い方へ傾いてゐた。夜おそく淺草の方から車夫を引張つて歸つたり、多勢の仲間をつれ込んで來て、叔父を威嚇するやうなことも爲かねなかつた。同勢は空家へ寄つて來て恣に酒を呷つたり、四邊憚らぬ高聲で流行唄を謳つたりした。

「どうか漬物を少し。」などと、腕まくりした年嵩の青年が、裏口から醉ぱらつて來てお銀に強請つた。

「新を呼んでおいで。」と、笹村は顏色を變へてゐた。

「放擲つてお置きなさいよ。可怖くて迚も寄つけませんから。」

お銀は裏から覗いて來ては、その様子を笹村に話した。

同勢は近所の酒屋や、天麩羅屋などを脅した。

「叔父さんが何か言や、殺してしまふなんて言つてますよ。」

笹村はお銀から斯樣な事も一二度聞いた。

「おい、お前は己を殺すとか言つてるさうだが……。」

笹村は日暮方に外から歸つて來た甥の顏を見ると、いきなり詰つた。

酒氣を帶びて居た甥は坐りもしなかつた。そして「殺してやらう。」と險しい目をしながら、臺所の方へ刃物を取りに行つた。

「貴方まあお逃げなさいよ。」

お銀が消魂しく叫ぶまもなく、出刃を持つた甥が、後からお銀に支へられながら入つて來た。

臺所で水甕の引覆る音などを聞きつけて、隣に借家してゐた大學生が裏口へ飛出して來てくれた。

外へ逃出した笹村が、家へ入つて來た頃には、甥の姿はもう其處には見えなかつた。

「あんな優しい顏してゐて隨分亂暴なことをするぢやありませんか。」

お銀は一時氣味惡がつてゐたが、笹村も餘り好い氣持がしてゐなかつた。そして甥が行李の底に收つてゐた白鞘の短刀を搜したが、それは見つからなくて、代りに笹村が大切に保存してゐた或人の手蹟を留めた唐扇などが出て來た。

笹村の從弟にあたる甥の義兄が、騙して連れて行つてからも、笹村の頭には始終一種の痛みが殘つてゐた。家人の笹村は、從弟などに好く思はれてゐなかつた。

あの方は、新ちやんのことを其樣に惡くも思つてゐないですよ。」

お銀も二人を送出してから、其を氣にしてゐた。

女人がお銀のことについて、笹村の意嚮を確めに來たのは、そんな騷があつてから間もなくであつた。それ迄に二人は度々顏を合して、其事を話合つてゐた。笹村は不相變M先生の仕事を急いでゐたが、別れる別れぬの利害が、二人のあひだに暫く評議された。

「僕の母なぞは別れるのは不贊成なんだが、左に右子供の餘り大きくならんうちに片づけて了ひたまへ、手切れさへやれば無論承知するよ。それも君の言ふ半分で、大抵話がつかうと思ふ。」

世故に長けた女人は、然う言つて下宿を出て行つた。

「君のことも些とは惡く言ふかも知れんから、それは承知してゐてくれたまへ。」女人は出るとき笹村に念を押した。

女人が歸つて來るまでには、大分手間が取れた。笹村は寢轉んだり起きたりして、心に落着がなかつた。そして其が何方へ轉んだ方が幸なのか自身に判斷がつかなかつた。強ひて判斷しようとも思つてゐなかつた。

「色々逆つて話をしてみたがね。」女人は笹村の部屋へ引返して來ると、豫期と反したやうな顏をして、低聲で言つた。

「あれは君、一緒になつた方が反つて可いかも知れないね。」女人は息をついでから斷れ〴〵に話出した。

「君のあの女に對する態度から、あの女が今日まで君のために盡して來たことなどを聞くと、先方の言分にも理窟があるよ。それに段々話してみると苦勞もしてゐるし、相當に譯も解つてゐるやうなんだ。本人の考へも、僕等の思惑と些と違つたところもある。第一、乳を吞ましてゐる赤ちやんの顏を眺めて泣かれるには、僕も閉口したよ。」

一緒になる場合の條件などについて、二人は暫く話合つた。

「ちよつと男をチャームするところのある女だ。」女人は呟いた。

「いづれ話のすんだ時分に僕も後から行かう。」笹村は再び出向いて行く女人を送出しながら言つた。

三十二

女人が一緒になる場合の條件などを提げて出て行つてから、二時間ばかり經つと、笹村も[illegible]められた[illegible]が[illegible]へ[illegible]るやうな心持で家へ歸つた。

夜になつてから、二人は奥の六疊で花など引いて遊んだ。女の態度や仕打について、笹村の始終女人に零して居た事が、その日の女の辯解で略女人の胸に解けてゐたことは、女人の口吻でも受取ることが出來た。女の言ふことには、きちんとした條理が立つてゐた。

「僕も笹村君とは長いあひだのお交際ですが、今度のやうに困つたことは嘗てなかつたですよ。」と、いきなり女人の打つかつて行つた時に、女は默つて聞いてゐた。

「……左に右僕に委して下さい。別れてから貴女が商賣でもしようと云ふのなら、不及ながら僕も出來るだけの心配はして見るつもりです、決して惡いやうにはしない。」

女人はそこまで話を進めて行つた。

女は笹村に對する自分の態度について反つて女人に批判を仰がうとした。夜具一つなかつた此家へ來てからの自分の骨折——笹村の可恐しい氣むらな事、苦しい稼をして始終質屋通ひまでしたこと、自分の手で拵へた金で、ちよい〳〵笹村の急場を救つたことなどが言出された。

「笹村さん、私が何か慾にでも絡んで此家にゐるやうなことを始終言ひますけれど、その位なら

私だつてもつと行く處もありますんです。私もこの子には引かされますし、一度失敗つてもゐるものですから、今度またまごつくやうなことでもあれば、それこそ親類に顏向も出來ませんのでございます。」

母親も重い口で、傍から言添へるのであつた。

そんな話の順序や、お銀のその時の態度は、友人の簡短な話で想像することが出來た。笹村は冷いやうな其條理だけは拒むことは出來なかつた。そして一緒になるについても不服はなかつたが、女の心持がしみ〴〵自分の胸に通つて來るとは思へなかつた。打解けたときの女の樣子や口の利方には心を惹かれる處があつたが、温かい感情の融合ふやうなことは餘りなかつた。笹村の頭の底には、そこに淡い不滿も暗い憂愁もあつたが、今はそれを深く顧みる餘裕もなかつた。

花は可也にはずんだ。頭腦の惡い笹村は引いてゐるうちに、時々札の見えなくなるやうなことがあつた。そして思ひがけないところで、思ひがけない手違をやつた。お銀は笹村を庇護ふやうにしては、花が引きづらかつた。

お銀の手で、青が出來かゝつた時、じらしてゐた女人が、牡丹を一枚すんなりした其掌に載せて、剽輕な手容でちらりとお銀の目前へ突きつけて見せた。

「お氣の毒さま、一人で花を引いてゐるんぢやありませんよ。」

「ちよつと憎らしい。」お銀はぴしやりとその手を打つた。

花札が箱のなかへ仕舞込まれたのは、大分遲かつた。皆の顏には疲勞の色が見えてゐた。笹村は頭がぼうツとしてゐた。

「どうも飛んだ御心配をかけまして、有難うございました。おかまひもしませんで……お家へも何卒よろしく……。」

暫く話をしてから、歸つて行く女人を送出しながら、お銀は戸を締めて入つて來た。髮を引詰に結つたその顏は、近頃漸く肉があがりかけて來た。

笹村はランプを瞶めながら、舌にいら〳〵する手卷莨を喫してゐたが今日話をきめてしまつたことが何となく悔いられるやうにも思へて來た。花を引いてゐた間の女のだらけたやうな態度が、腑に落ちかねるやうな氣もした。

「あゝ云ふ輕卒なことは愼んでもらひたい。」

笹村はお銀が友人の手を打つた時のことを口へ出して言つた。

「あれがBさんだつたから可いやうなものの、外の人だつたら、隨分變に思ふだらう。あんな事をしてお前は可恥しいとも思はんのか。」

「……ちつとも氣がつきませんでしたよ。私そんなことをして。それは花を引いてゐるんですから、然う愼くばかりもしてゐられませんから、調子に乘つて爲たかも知れませんけれど……。」

お銀は然う言ひながら、子供に乳房を含ませた。そんな事を氣にする笹村の言草が反つて不思議に思はれた。

三十三

仕事は少しづつ捗取つて來た。進行するにつれて原文に睨んでも來たし、訂正の骨も自然に會得されて來た。作其物にも興味が出て來た。それに長いあひだの問題が、左に右一先づ解決を告げたので、多少頭も輕くなつてゐたから、息もつかずずん〳〵筆を着けて行くことが出來た。

二三日手から放さなかつた筆をおいて、笹村はふと想出したやうに家の方へ行つて見た。入つて行くと、子供は産衣そのまゝの姿で、蚤を避

けるために、風通しの好い窓の側に取出した一閑張の窶い机のうへに寢かされてあつた。八月の半ばで、暑さはまだ烈しかつた。子供の目の先には、くる／＼風に廻つてゐる風車などがあつた。笹村はその顏を見ると、哀れなやうな氣がした。

お銀は簞笥のうへにおいてあつた浴衣地を卸して來て、笹村に示せた。

「もう正一のお宮詣ですよ、着のみ着のまゝで餘り可哀さうですから、私昨夜こんなものを二枚分買つて來ましたの。安いもんぢやありませんか、是で漸く七十五錢……。」と言つて、お銀は淋しい笑方をした。

笹村は窓の傍に腕まくりをしながら、脚を投出してゐた。母親は臺所で行水の湯を沸してゐた。

「この子に初めて拵へる着物が七十五錢なんて、私何だか可哀さうなやうな氣がして……。」と、お銀は涙含んでゐた。

「一枚で澤山ぢやないか。それに此の柄と云ふものはないな。」笹村は呟いた。

「さう云ふけれど、些と好いぢやありませんか。子供には恁う云ふものが可いんですよ。それに有片だから、不足も言へませんわ。」

「醫師のところへ、くれてやれば可かつたんだ。」

「でもまア可いわ。いくら物がなくたつて、他人の手に育つことを考へれば……。」

お銀はせめて銘仙かメレンスぐらゐで拵へてやりたかつたが、其を待つてゐると拵へる時が來さうにも思へなかつた。

「それに、お宮詣に行かないとしても、祝つてもらつた處へだけは配物をしなければなりませんからね。先の煙草屋などでは、毎日それを聞いてるんですよ。こゝはお品のわるい處ですけれど、然う貧乏人はゐませんからね、出來ることなら氏神さまへ連れて行つてやりたいんですがね。」

西日のさす臺所で、丹念な母親は子供に行水をつかはせた。お銀も袂を搭りあげて、それを手傳つた。やがてタオルで拭かれた子供の細い躰には、まだらに天花粉がまぶされた。

「きれいな子ですよ。お腫物一つできない……。」と云つて、お銀は艶々した其股のあたりを撫でながら、ばさ／＼した襁褓を宛つてやつた。子供は吹込む風に、心持よささうに手足をばちや／＼さしてゐた。

夕方飯がすんでから、笹村はM先生の許を訪ねた。先生は涼しい廂下の離房の方へ床をのべて臥てゐた。其頃先生の腫物は大分痛みだしてゐた。面變したやうな顏にも苦悶の迹が見えた。話してゐるうちに、時々意識がぼんやりして來るやうな事があつた。起直るのも大儀さうであつた。

笹村は下宿の不自由で、仕事をするに都合の惡いことと、そこを引拂ひたいと云ふことなどを話して、それとなく金を要求した。

「なにか用だつたか。」

先生は全然見當違の挨拶をした。口の利方も何時ものやうな明晰を缺いてゐた。病勢のおそろしく增進して來た先生の內部には、生きようとする苦しい努力、果敢ない悶えがあつた。日毎に反抗の力の弱つて行く先生は、笹村の苦しい事情に耳を傾けるどころではなかつた。

「己もまだ先方から受取らんのだから……。」と先生はしぶ／＼傍にあつた鞄から、札を幾枚か取出して笹村に渡した。そんな鞄を控へてゐると云ふことは、先生の是迄には見られない圖であつた。

笹村は寂しいやうな氣がした。原稿の出來るのと、先生の死と——孰が先になるか、それは笹村にも解つてゐなかつた。

三十四

汚い下宿を引拂つて來た笹村は、また舊の四疊半へ机を据ゑることになつた。近所にはその一夏のあひだに、人が大分殖えてゐた。正一と前後して產れたやうな子供を抱いて、晚方門に立つてゐる內儀さんの姿も、ちらほら笹村の目についた。お銀が能くつれて來て、菓子をくれたり御飯を食べさしたりして懷けてゐた四つばかりの可愛い男の子も、暫く見ぬまに大分大きくなつてゐた。その子は近所の或有福な棟梁の家の實の姉弟なかに產れたのだと云ふ話であつた。

「自分に子をもつてみると、世間の子供が目について來るから不思議ですね。」

お銀は格子に摑つて、窓へ上つたり下りたりしてゐる其子供の姿をぢつと眺めてゐた。その姿は何處か影が薄いやうにも思へた。

「今のうちは何にも知らないで、然うやつて遊んでゐるけれど、大きくなつたら、これでも色々のことを考へるでせうよ。」

笹村も陰氣な其家のことを考へない譯に行かなかつた。嫁に行くこともできずにゐる子供の母親は、近頃また年取つた町內の頭と可笑しいなかになつてゐた。

向の煎餅屋の娘が、二つになる男の子を、お銀の處へ連込んで來て、不幸な自分の身のうへを話しながら、子供の顏を眺めて泣いてゐた。その子供の父親は、芝の方の或大きな地主の道樂息子であつた。そして今は親から勘當されて、入獄してゐた。子供は女がお茶屋に奉公してゐる時に出來たのであつた。お銀も貰ひ泣をしながら、子供に涎掛を出してくれなどした。

「あの子は育たないかも知れませんよ、阿母さんは心配して乳が上つてゐるんですもの。脚など、自家の子くらゐしけアありませんよ。」

「死ねばあの女の體も浮ぶんだらうが……。」

と、然う云ふ笹村は、まだ子供を育てるやうな心持になり切つてゐなかつたが、それでも子供の病氣をした時には、心を惹きつけられずには居られなかつた。

夕方お銀に抱かれて、表を見せられてゐた子供は、不意にどーッと乳を吐出して、泣くことも出來ずに苦しんだ。

「貴方々々、正一が大變ですよ……。」と、お銀は叫びながら家へ駈込んで來た。

子供は先天的に、胃腸の弱い父親の素質を受繼いでゐるやうに思へた。お銀は急いで醫者へ連れて行つたが、その晩は徹宵付切で枕頭へに坐つて、冷えやすい病兒の躰を、自分の懷で溫めてゐた。笹村はしみ著くやうな其泣聲に責度々目を覺されたが、無慈悲な考へが時々頭に閃いてゐた。

久しくお銀母子が顏を見せなかつたので、下谷の祖母の婆さんが或日の晚方、不意に訪ねて來た。子供を寢かしつけてゐたお銀は、頓狂なその聲が耳に入ると、急いで裏へ子供を抱出したが、小さい枕だけは隱す隙がなかつた。

「どうしたえ、此の枕は……。」と、婆さんはじろじろ其を眺めてゐた。

お銀は笑ひ笑ひ、やがて子供を抱いて入つて來た。

「お前の子かえ、それは……。」婆さんも笑出した。

「道理で樣子が變だと思つた。倅などは疾から氣がついてゐたぞえ。」

三十五

この婆さんの報知で上京して來たお銀の父親が、また田舍へ引返して行つてから間もなく、籍が笹村の方へ送られた。

東京でも色々の事をやつて、味噌をつけて行

昔二人が押合つた時のことが、笹村にも想像
され得るやうであつた。

三十六

M先生が病苦を忘れるために折々試みてゐたモルヒネ注射も、秋の頃は不斷のやうになつてゐた。注射が效力を有つてゐる間の先生の頭腦は頸垂れた草花が夜露に霑つたやうなものであつた。

「何ともいへぬ微妙な心持だ。」と云つて、先生も限られた其時間の消えて行くのを惜みくした。

先生の仕事のもう揚つてゐる笹村は、慌忙しいやうな心持で、自分の創作に執りかゝつてゐた筆をおいて、時々先生の樣子を見に行つた。衆は交替に、寂しい病室に夜のお伽をすることになつてゐた。先生の發言で各々食物を持寄つて、それを攤げながら夜すがら酒をちびく飮んでゐることもあつた。お銀は笹村のために、鷄と松茸などを蓋物に盛つた。

「美いものを食つてゐるね。」などと、先生は戯れた。

ある日も笹村は、八時頃まで書いてゐて、それから思出して出かけた。雨風の可也劇しい晩で、町には人通りも少かつた。

床ずれの痛い寢所にも飽いて、暫く安樂椅子にかゝつてゐる先生の面は悉皆變つてゐた。淺黑かつた皮膚の色が、蠶兒のやうな蒼白さを有つて、ぢつと目を瞑つてゐる時は、石像のやうに氣高く見えた。髮も短く刈込まれてあつた。先生が睡に沈んで來ると、衆は次の室へ引揚げた。來合せてゐた某の畫家が、そこにあつた畫仙紙などを攤げて、恍けた漫畫の筆を揮つた。先生や皆の似顏なども描かれた。俳句や狂句のやうなものも、思ひくに書きつけられた。夜が更けるにつれて、興も深くなつて來た。その笑聲が、ふと先生の睡をさました。

「あーツ。」と長い溜息が、持餘してゐるやうな先生の軀から漏れて來た。じろりと皆の顏を見る目のうちにも、包みきれぬ不安があつた。

「どれお見せ。」

いらくしたやうな先生の顏には、淋しい微笑の影がさして來た。そして自身にも筆を取つて、句案に耽つた。

夜があけてから、一同はそこを引揚げた。山の手の町には、柿の葉などが道に落散つて、生暖かい風に青臭い匂があつた。

「先生は自覺してゐるんだらうか。家族の人達を失望させたくないために、わざとあゝした態度を取つてゐられるやうにも見えるね。しかし病人の顏は案外晴々しいからね。」

門を出てからO氏と笹村とはこんな話をしながら行いてゐた。

初めて慘ましい診斷を受けたをりの先生に對した時の絕望の心持は、二人の胸に少しづつ萎されてゐた。

「もう癌は胃の方ばかりぢやないさうだ。咽喉の邊へも來てゐると云ふことだ。」

こんな私語が、誰からともなく皆の耳に傳つた頃には、笹村も先生と話をするやうな機會が餘りなかつた。

醫師の發言で使や電報がそれぐ近親の人達の家へ差向けられたのは、それから間もない或夜の深更であつた。

高く積みあげられた病床の周へ、人々はぼつぼつ寄つて來た。

「こらこんなだ。」と、心臟の惡い或畫伯が、眞先に駈著けて來ると、蒼い顏をしてせいく息をはずませながら入つて來た。

昏睡狀態にあつた患者が、朝注射で蘇つたやうに睜いた日に、取捲いてゐる多勢の人の顏がふと映つた。部屋には蕭かな不安の空氣が

漲つてゐた。静かに梯子を上り下りする音も聞えた。そして、それが患者に可恐しい暗示を與へた。

三十七

一時劇しい昂奮の状態にあつた頭が、少しづつ鎮つて來ると、先生は時々近親の人達と話を交しなどした。その調子は常時と大した變りはなかつた。

昂奮――寧ろ激昂した時の先生の頭腦は傷しいほど調子が混亂してゐた。死の切迫して來た肉體の苦痛に堪へかねたのか、それとも脱れることの出來ぬ冷い運命の手を駄々ッ子のやうに憤つたのか、喚りあげるやうな聲で色々の事が叫出された。

苦痛が薄らいで來ると、先生の樣子は平調に復つた。時々うと〳〵と昏睡状態に陥ることすらあつた。長いあひだの看護に疲れた夫人を湯治につれて行つてやつてくれとか、死體を醫學界の爲に解剖に附してくれとか言ふやうなことが、ぽつ〳〵言出された。

「死んでしまへば痛くもなからう。」先生はかうも言つて、淋しく微笑んだ。

「みんなまづい顔を揃つて來い。」と叫んだ先生は、寄つて行つた連中の顔を、澱んだ目にじろりと見廻した。

「……まづい物を食つて、成たけ長生をしなくちや不可い。」先生は言聞かした。

腰に絡りついてゐる婦人連の歔欷が、しめやかに聞えてゐた。二階一杯に塞がつた人々は息もつかずに、静まり返つてゐた。後の方には立つてゐる人も多かつた。

先生の息を引取つたのは、その日の午後遅くであつた。

葬式が出るまでには、笹村は二度も家へ歸つた。急いで書揚げられた原稿を賣りに、或雜誌の編輯者の自宅を訪ねなどもした。生前に先生と交渉のなかつた其記者は、周に色々の陶器を集めて樂しんでゐた。そしてとろ火で湯を沸かしてある支那製の古い土瓶について説明して聞かした。

薄汚い燒物が、棚から卸されたり、箱のなかから恭しく取出されたりした。そして一々説明が附せられた。その記者が書きかけてゐる小説の思構なども話された。それは昔の吉原の地震を材料にしたもので、佛教から得て來た因果律のやうな觀念が纏はつてゐた。

笹村は嫌な顔もせずに、それを聽いてゐたが、葬式の時の自分の準備のことが氣にかゝつた。話好の記者は、サビタのパイプを磨きながら、話を色々の方へ持つて行つた。

牛込へ歸つて來ると、今朝しと〳〵降る雨のなかを、縁先から釣臺に載せられて、解剖室の方へ運ばれて行つた先生の死骸が、また舊のとほり綺麗に縫ひあはされて、戻つて來てから、大分經つた後であつた。玄關には弔に來る人の影もまだ稀であつた。

「先生は矢張異常な腦を持つてゐられたさうだ。」

玄關ではそんな話が始まつてゐた。

「如何して解剖などと云ふことを言出したらう。」

笹村は死際までも幾分人間衒氣のついて廻つたやうな、先生の言出を思はない譯に行かなかつた。

「私もお葬式が見たい。」

支度をしに、笹村が家へ歸つた時お銀は甘えるやうに言つたが、先に半年ばかり縁づいてゐた家の親類のゐる牛込のその界隈が、心遣でもあつた。

葬式の出る前は沸騰るやうなごたつきであつた。家の内外には、ぎつしり人が塞つて、それ

が秩序もなく動いてゐた。
　葬式から歸つて來た笹村の顔は、疲切つてゐた。
「私腕車で駈けつけたけれど、お葬式が今そこへ行つたと云ふ後……。」と、お銀は婦人達の様子などを聞きたがつた。
　笹村は晴がましくもない自分の姿を、誰にも見られたいとは思はなかつた。

三十八

　町内の頭の手で、笹竹がまた門に立てられた。笹村はかさ〲と北風に鳴るその音を耳にしながら、急立てられるやうな心持で、田舍へ送る長い原稿を書いてゐた。笹村の肩には、去年の暮よりか一層重い荷がかゝつてゐた。生活も多少複雑になつてゐた。そして其原稿を抱いて、朝夙く麹町の方にゐる或仲介者の家を訪ねたのは、町に悉皆春の装ひが出來た頃であつた。久しく一室に閉籠つてばかりゐた笹村の目には、忙しい暮の町は何となく心持好かつたが、持つてゐる原稿の成行は心元なかつた。笹村は是までにも、幾度となくこんな場合を經驗してゐた。そして天分の薄い自分の寂しい身の周を見廻さない譯に行かなかつた。

「これが外れると大變ね。」
　その日雙方の思惑ちがひで、要領を得ずに歸つて來た笹村の傍へ來てお銀は心配さうに言出した。
　赤兒が持つてゐる一種の厭な臭の漸くぬけて來た正一を、笹村は時々机の傍へ抱出して來て、弄りものにした。そして終には泣かした。
「可哀さうに、貴方餘りしつこいから……。」
　お銀は抓られたり、噛まれたりする子供を抱取りながら、乳房を口に當がつた。
　思立つて人の少い朝湯へ連れて行くこともあつた。すると其後からお銀がタオルを持つて、揚げに來た。
「御父さんは赤ン坊を扱ふのが上手ですよ。」
　お銀は歸つて來ると母親に話した。
　赤ン坊はこの町の裏にゐる、或貧民の娘の背に負はれて、近所の寺の境内や、日當の好い駄菓子屋の店頭へ連れて行かれたが、外で賺しに菓子などを口へ入れられて、腹を壞すことも間々あつた。お銀は困つてゐる其子守の家族の口を、一人でも減すのを功徳のやうに考へてゐたが、それも長くは續かなかつた。
「こんな寒い砂埃のなかへ、病氣してるものを出しておいちや不可い。」
　餘所から歸つて來た笹村は、背負つた子守の背に縛られて、ぐつたりしてゐる子供の顔を見て、家へ入つて來ると、いきなり難しい顔をした。
「二人まで女がゐて、餘り氣無しぢやないか。それに負はしておくと云ふことが、一體子供の體によくないのだ。」
　お銀は急いで子守を呼びに行つた。子守の家では、亭主に死なれた母親が、棕櫚繩などを綯つて、多勢の子供を育ててゐた。お銀はその家の慘な様子を能く知つてゐた。
「田舍の百姓家ぢや、一日負ひ通しだけどね。それでも子供は皆丈夫で……。」
　母親は言譯らしく言つた。お銀も弟達のかかつて來た子守の亂暴であつたことや、自分達を蒲團捲にしたり、夜更に閉出を食はしたりした父親の氣の荒かつたことなどを話出して笑つた。おぼろげに目に殘つてゐる田舍家の様子や、幼時の自分の姿が懷しげに思出された。
「それでも皆恁うして育つて來たんですからね。それで私が子持になるなんて……。」
　押詰つてから、思はぬ方から思はぬ金が入つて來たりなどして、お銀は急に心が浮立つた。そして春の支度に、ちよい〱外へ買物に出か

げた。笹村も一緒に出かけて、瀬戸物などを提げて歸ることもあつた。晦日になると、狹い部屋のなかには鏡餅や飾藁のやうなものが一杯に散らかつて、お銀の下駄の音が夜おそくまで家を出たり入つたりしてゐた。母親も臺所でいそ／＼働いてゐた。神棚には新しい注連が張られて燈明が赤々と照つてゐた。
笹村は餘所の騷ぎを見せられてゐるやうな氣がしないでもなかつた。そして、それを引掻廻さなくてはゐられなかつた。
「そんな大きな鏡餅を何にするんだ。」
笹村はふと頭が暈つて來ると、得意になつて二人のしてゐる事に、片端から非をつけずにはゐられなかつた。

三十九

正月は淋しく過ぎた。氣むづかしい笹村の部屋へは、珍らしいことなしに小さい方を据ゑた鏡餅の側に、貧弱な盆栽の梅の花瓣が干からびて、机の傍は相變らず淋しかつた。笹村は大阪にぶら／＼遊んでゐた一昨年の今頃のことが時々思出された。そこでは貸間のインバネスなどを著込んで動きの取れないやうな道頓堀のあたりを、毎日一人で歩いてゐた。そして芝居や寄席や飲食店のやうな人いきれのなかへ紛ひ寄つて行つた。
時としては薄暗い、せゝこましい路次のあひだに、當度もなしに彷徨いてゐる其姿が見出されたり、何處へも入りそびれて、思ひがけない場末に人氣の少い鶏屋などの二階の部屋の薄白い電燈の下で、淋しい晩飯に有りついて居たりした。それで懐が淋しくなつて來ると、靜かな郊外にある、兄の知合の家に引込んで、刺戟に疲れた頭を休めたり、仕事に耽つたりした。
九州からの歸途、二度目に大阪を見舞つた時には、二月も渉つてゐたそこの惡辣い空氣に堪へられないほど、飽き荒んだ笹村の頭は冷されかけてゐた。そして靜かに思索や創作に耽られるやうな住居を求めに、急いで東京へ歸つた。
笹村は自分の陷ちて來た處が、此頃漸く解つて來たやうな氣がした。
「どこかへ行かうか。」
少し殘つた金を、机の抽斗に入れてゐた笹村は、船や汽車や温泉宿で獨旅の淋しかつたことを想出してゐた。
「それから道具を少し買はなけア。家みたいに何にもない世帶も些と希しいですよ。」
お銀は火鉢に寄りかゝりながら部屋を見廻した。
「もし行くなら、一度坊やにお詣をさせたいから成田さんへ連れて行つて下さい。お鳥目がかからないで可ござんすよ。」
「あすこなら人に逢ふ氣遣がないから、それも可からう。鑛泉だけど、一晩位泊るに丁度好い湯もあるし……。」
「いつ行きます。」
「今日はもう遲いだらうか。」
「向へ行けば日が暮れますわ。」
翌朝笹村が目をさますと、お銀はもう髪を束髪に結つて、襦袢の半衿などをつけてゐた。それは二月の末で、昨夜からの底冷が強く、雪がちら／＼降出したが、それでも時々障子に日影がさして來た。
汽車のなかで子供は雫のたら／＼流れる窓硝子に手をかけて、お銀の膝に足を踏張りながら聲を出して騷いだ。背後の方から、顏を覗いて感したり、手を出してお出で／＼をする婦人などがあつた。
プラットホームを歩いて行くお銀の束髪は笹村の目にも可笑しかつた。
「家鴨のやうだね。」

笹村は後から呟いた。
「そんなに私肥つてゐて。」お銀は自分の姿を抓顧り／＼した。
子供を車夫に抱かせて、二人は其方此方の石段を昇つたり降りたりしたが、明るい山内の空氣は、少しも佛寺らしい感じを與へなかつた。寄附金の額を鏤りつけた石塔や札も、成田山らしく思へた。笹村は御護符や御札を慾にかゝつて買はうとするお銀を急立てて、直にそこを出た。
周に梅の老木の多い溫泉宿では、部屋が孰もがら空であつた。お銀は子供をお手かけ負して、翌日も一日廣い廊下を歩いたり、小雨の霽間を、高い崖の上に仰がれる不動堂へ登つたりした。梅園には時々鶯が啼いて、其日も一日じめ／＼して居た。
「やつぱり自分の家が一番いゝ。」
夕方雨戸が繰られる頃になると、お銀は廣い部屋に坐つてゐながら言出した。

四十

子供が摑り立をする頃に、K―の手から裏の大工へ讓渡された其家を笹村は立退かなければならなかつた。大工は買取ると直改築の目算を立てたが、其以前にK―から分割して借りてゐた裏の地所に、新築の貸家がもう出來あがつてゐた。K―の借家は失敗に終つたが、大工の方は四軒建てて四軒とも明がなかつた。
「裏へ家が建つやうでは、此處にもゐられませんね。加之二階家と來てるんですもの。」
「出來あがつたら其方へ移つても可いね。」
笹村とお銀とはこんな話をしながら、時々裏へ出て見てゐたが、家は孰もせゝツこましく厭味に出來てゐた。
壁が乾かぬうちに、もう贅澤な夜具やランプなどを擔込んで來る人もあつたが、それは出來星の紳士らしい、始終外で寢泊してゐる獨身ものであつた。
「あの家は何をする人でせうね。仕事に失敗して、どこか下町邊から家を疊んで來たらしいんですよ。」
お銀は手摺に干してある座蒲團の柄合などから、その人柄を嗅ぎつけようとしてゐた。
ある寒い朝、十時頃に楊枝をつかひながら臺所へ出て來た笹村の耳に、思出したこともない國訛で饒つてゐる男女の聲が聞えて來た。それが此方の裏口と向合つてゐる眞中の一軒へ入つて來た若い夫婦であつた。
背のすらりとした、目鼻立の整つた其細君と、お銀は直に懇意になつた。氣心が解つて來ると、細君は茶の室へあがつて來て、お國言葉丸出で自分の身のうへを明け透けに話した。夫婦はつい此處へ來るまで、早稲田の方で下宿屋をやつてゐたが、東京なれぬ細君には手が廻らなかつた。そこから本郷の大學へ通つてゐた良人とは、國で藝者をしてゐる頃からの馴染で、年は七八つ女の方が上であつた。お銀も子供を抱いて、その家へ能く話しに行つたが、男同士も直に隔のない仲になつた。岡田といふその男は、角帽子を冠つて出るやうなことは滅多になかつた。そして始終長火鉢の傍にへばり著いてゐた。
子供はその細君の膝に引取られて、頬を接吻されたり抱締められたりしてゐた。
五月には、笹村が通から買つて來た内飾が、その家の明るい二階に飾られた。ヒステリーの氣味のあつた細君は岡田が留守になると、獨で長火鉢の傍に、しく／＼泣いてゐるやうなことも希しくなかつた。二人で言合をしてゐる聲も、時々裏から洩聞えた。
お銀母子と、その時分寄宿してゐた笹村の親類先の私立大學へ出てゐる一人の青年との入つ

てゐられるやうな家を一軒取決めて、荷物をそこへ運込む時も、子供は中日岡田の細君の背に負はれてゐた。その家はそこから本郷へ出る間の、或通の裏であつたが、笹村はそこへ三人を落著かしてから、また自分の下宿を搜しに出なければならなかつた。

「この家で、到頭お正月を二度しましたね。」

お銀は引越の日に、色々のものの取出された押入の前にベッタリ坐つて、思の深さうに言出した。

「こんな家でも、さア出るとなると何だか厭な氣のするもんですね。」

笹村も、お銀が初めて此處へ來てからのことが、思出された。足かけ二年のあひだに、こゝの臺所の白い板敷も、つる〳〵と黝い光澤をもつて來た。

時々袷羽織の欲しいやうな、風のじめつく頃であつた。笹村が持込んで來た行李に腰かけて、落著のない家を見廻してゐると、岡田の細君は、背で泣く子を搖りながら縁側をぶら〳〵してゐた、お銀はせツせと其處らを雜巾がけしてゐたが、時々思出したやうに、「バア。」と子供の方へ顏を持つて行くと、蹲んで默つて來る母を見せた。障子の取りはづされた縁側から吹込む風が、まだ肌に寒いくらゐであつた。

四十一

笹村の出て行つた下宿は、お銀達のゐるところからは、坂を一つ登つた高臺にあつた。見晴しの好いバルコニーなどがあつて、三階の方の部屋は、敷物などを當ててゐる女中の所管と決つてゐた。暑中休暇の來るまで笹村は落著悪い二階の四疊半に閉籠つてゐたが、去年の夏居た牛込の宿よりは居心が好かつた。

氣が塞つて來ると、笹村はぶら〳〵家の方へ行つて見た。家には近所の蒟蒻閻魔の縁日から買つて來た忍が檐に釣られ、子供の悦ぶ金魚鉢などがおかれてあつた。お銀は障子を傳步行してゐる子供の樣子に目を配りながら、晩に笹村の食べるやうなものを考へなどしてゐたが、笹村は餘所の家へでも來たやうに、柱に倚りかゝつて莨を喫してゐた。笹村は下宿にゐる人達などと、自分との距離の大分遠くなつてゐることを、しみ〳〵感じずにはゐられなかつた。下宿人のなかには、役所から退けて來ると、友達と一緒に夜おそくまで酒を飲んで、棋など打つてゐる年老つた紳士も二三人紛込んでゐたが、その心持は、周圍の學生達と大した相違はなささうに見えた。それが笹村には羨しいやうであつた。

夜になると、お銀は子供を連出して、坂のうへあたりまで一緒について來たが、子供に「ハイちやい」をして下宿へ入つて行く笹村は、下宿の空氣とは如何しても融合ふことのできぬ或物が、胸にこだはつてゐた。もう試驗を濟してしまつた學生連は、何處の部屋にも賑な笑聲を立ててゐた。俥で遠歩いてゐる連中や、荷物を纏めてゐる人達もあつた。笹村は臺所の上になつてゐる暑い自分の部屋を出て、バルコニーの方へ出ると、雨に晒された椅子に腰かけて、暗いなかで莨を喫してゐた。そこへ二三人の學生が出て來た。白粉の匂のする女中達も出て來た。

笹村は蟲齒が痛出して、その晩おそくまで眠られなかつた。笹村は逆上せた頭腦を冷さうとして、男衆に戸を開けさせて外へ出た。外は雨がしぶ〳〵降つて、空は眞闇であつた。風も出てゐた。その中を笹村は春日町の方へ降りて行つた。

暗い横町で、ばた〳〵と後を追驅けて來て[illegible]を捕へる二人の角袖に出逢ひなどしたが、足は自然に家の方へ向いて行つた。

一敵——の——生命——賴みたる……。」

こんな軍歌の聲に襲はれながら、笹村は翌朝十時頃漸く目がさめたが、睡眠不足の頭は一層重かつた。軍歌は板塀を隔てた背後の家の子供が謳つてゐるのであつた。

庭向の下の座敷へ移つた頃には、笹村も大分下宿に呪んで來た。時々お銀に厭な氣質を見せられると、笹村の神經は一時に尖つて來た。そして寄食してゐる法律書生を呼びつけて、別れる相談をした。然う云ふ時の笹村は一圖に女を憎むべきものに思窮めた。

「私だつて恁うしてゐても詰らないから……。」女も、母親や書生の前で、負目を見せまいとした。その言草が一層女の經歴について笹村に惡いヒントを與へた。そして不斷は胸の底に閉籠められてゐたやうなことまでが、一時に夫々の意味をもつて、笹村の頭をいら立たせた。

「お前達は丸で妾根性か何かで、人の家にゐるんだ。」

「えゝ、どうせ私達のやうな物の解らないものは、貴方のやうな方の家には向かないんです。」お銀は蒼い顏をしながら言募つた。

「それなら其で、父でも呼寄せて話をつけて下されば好いのに、いくら法律を知つてゐるたつて、若山さんなどと相談して、まるで私達を叩き出すやうな事ばかりなすつて……。」

いらいらした二人の心持は、何處までもはぐれて馳らずにはゐなかつた。

四十二

一定の時が經つと、憎惡後悔の念が迹方もなく胸に拭去られて、女はまた新しいもののやうに笹村の目に映つた。そんな時のお銀は、初めて逢つた時の女の印象を喚起さすに十分であつた。

一日二日、笹村はまた家の人となつてゐた。そして下宿へ歸つて來ても、頭はまた甘い追想に浸されてゐた。直にまたそれの裏切られる時の來るのを考へようとすらしなかつた。

「私はほんとに逐出されるかと思つた。貴方は如何してあんなでせう。」

お銀は發作的に來る笹村の感情の激變を不思議がらずにはゐられなかつた。

「僕も苦しい。」笹村も苦笑した。

「出て行くところがないと思つて、あゝ言ふかと思ふと、私も倘強味に出るんです。」お銀は笑ひながら言出した。

「お前の言草も隨分ひどいからね。當にかゝつて來られると、理窟など言つてゐる暇がない。」

「私はまた貴方に、カッと來られると氣がおどおどして了つて、如何して好いか譯が解らなくなつて了ふんですよ。……それが矢張教育がない所爲なんですねえ。その爲に、私貴方の前でどのくらゐ氣が引けるか知れない。[illegible]を怨みますよ。」お銀は羞れたやうな聲で言つた。

笹村は、女に對する自分の態度の間違つてゐることが惻るやうな氣がした。お銀に不憫な細君を強ひながら、矢張妾か何かを扱ふやうな荒い心持が自分にないとも言へなかつた。そして、其處にまた其日々々の刺戟と興味を充して行くのではないかとも思つた。

「それでも學校へは行つたらう。」

笹村はお銀の生立について、また何かを嗅出さうとしてゐるやうな口容で言つた。

「え、それは少しは行つたんです、湯島學校へ……。お當を振り振り、私あの邊を歩いてましたわ、先生の言ふことなんか些とも聞きやしなかつた私……。」お銀は誤魔化すやうに笑ひ出した。

「叔父さんが何故行らなかつたらう。」

「叔父ですか。如何してですかね。景氣の好い時分は、自分で遊んでばかり居たんでせう。そ

れに其時は、私ももう年を取つてゐたのですから學問なぞは、私の柄になかつたんでせう。」
「でも手紙くらゐは書けるだらう。」
「いゝえ。」
「少しやつて御覽。僕が教へてやらう。」
「え教へて下さい。眞實に……。」と言つたが、笹村はついお銀の字を書くのを見たことがなかつた。
　下宿へ歸ると、笹村は或雜誌から頼まれた戰爭小說などに筆を染めてゐた。その雜誌には深山も關係してゐた。笹村は深山の心持で、自分の方へ出向いて來たその記者から、時々深山のことを洩聞いた。
　筆を執つてゐる笹村は、時々自分の前途を悲觀した。M先生の歿後、思ひがけなく自然に地位の押進められてゐることは、自分の才分に自信のない笹村に取つて、寧ろ不安を感じた。
「君は觀戰記者として、軍艦に乘るつて話だが、然うかね。」
　谷中の女人が或日、笹村の顏を見ると訊出した。
「けど、それは子供のない時のことだよ。危險がないと言つたつて、何しろ實戰だからね。」
　女人は然う言つて、笹村の意志を翻さうとした。
　そんな仕事の不似合なことは、笹村にも能く解つてゐた。

四十二

　夏の半過に、お銀達の近くの或靜かな町で、手頃な家が一軒見つかつた頃には、二人の心はまた新しい世帶の方へ嚮いてゐた。前の家を立退く時、話が急だつたので、笹村は一緒に出るやうな家を借りる準備も出來なかつた。假に別居してゐるうちに、結婚を發表するに適當な時機を見つけようとも考へてゐた。
「ばか／＼しい、こんな事してゐては、矢張駄目ですよ。何時まで經つても、道具一つ買ふことも出來やしない。」
　お銀は下宿の帳面を見ながら、時々呟いてゐた。
　通りかゝりに見つけた其家の事をお銀の口から聞くと、笹村は急いで見に行つた。
　家は人通りの少い崖と崖との中腹のやうな地面にあつた。寄りかけた門のあたりは、二三本繁つた桐の枯葉が暗かつたが、門内には[illegible]などが伸かつて、建物は往來からは可也奧の方にあつた。三方にある廢れた庭には、叢草が繁つて、家も勝手の方は古い板戸が破れてゐたり、根太板が凹んでゐたりした。けれど庭木の多い前庭に臨んだ部屋は、一區劃離れたやうな建方で、落著がよかつた。
　笹村は直に取決めて歸つたが、何の用意もなしに然う早急に移つて行くことは、お銀には余り好ましくなかつた。愈住むとなると、廢れたやうな其家にも不足があつた。
「もつと如何とかいふ家がないものですかね。井戸が坂の下にあるんぢや爲樣がないわ。」
　お銀は笹村から家の樣子を詳しく聞くと進まぬらしい顏をした。お銀の頭腦には、曾て住んでゐた築地や金助町の家のやうな格子戸造の小瀟洒した住家が、始終描かれてゐた。掃除ずきなお銀は、そんなやうな家で、長火鉢を磨いたり、鏡臺に向つたりして小綺麗に暮したかつた。それに、此處を出るにしても、少しは餘裕をつけて、手廻のものなど調へてからにした方が、近所へも體裁がいゝとも考へてゐた。
「貴方は門さへあれば好いと思つて　」お銀は然うも言つた。
「だけど、さう好い家があるもんぢやないよ。彼處なら客が來ても當分子供のゐることも解らないし、井戸の遠いくらゐは我慢してくれなく

ちや困る。」

やがてバケツに箒などを持たせて、書生と一緒に出かけて行つた笹村は、裏から水を汲んで來て黴くさい押入や疊などを拭いてゐた。そして疲れて來ると、縁側へ出て莨をふかしてゐた。

高臺に建てられた周の廣い廢屋は、さうしてゐると山寺にでもゐるやうに、風も涼しく氣も澄んでゐた。

直にお銀が子供を負つて來て、笹村の傍において行つた。

「お願ひ申しますよ。狹い處を危くて爲樣がありませんから。」

子供は白い女唐服を著ながら廣い部屋のなかを、よち〳〵と笹村の跡へついて來ては步いてゐた。そして少し步くと疊の上に尻餅を搗いた。口も少しは利けた。

落著いてからも、井戸の遠いことや、疊のじめじめする茶の室の陰氣くさいことが、女達の苦情になつてゐたが、笹村は初めて庭の廣い家へ來たのが、心持よかつた。そして外へ出ると、時々配けてもらつた草花を、腕車の蹴込へ入れて歸つて來た。中庭の垣根のなかには、色々のものが植ゑられた。中にはお銀と二人で、藥師の緣日で買つて來たものもあつた。

子供は靴をはいて、嬉々と聲を出して庭を步き廻つた。笹村はそれを前庭の小高い丘の上へ逐ひあげ〳〵しては悅んだ。

お銀は少しづつ家に馴れて來たが、それでも日が暮れてからは、一人外へ出るやうなことは滅多になかつた。夜もおち〳〵眠らないことが多かつた。

櫻の葉が黃ばんで散る時分に、姙娠の徵候がまたお銀の體に見えて來た。

四十四

お銀からその話を聞かされた時、笹村は、

「また手を咬まれた」と云ふやうな氣がした。そして責任を脫れたいやうな心持は、初めての時よりも一層激しかつた。

次第に好奇心の薄らいで來た笹村は、憑いてゐたものが落ちたやうに如何かすると女から醒める事が時々あつた。そんな時の笹村の心は、幻影が目前に消えたやうで寂しかつた。然うして一度頓挫した心持は、容易に挽回されなかつた。厭はしいやうな日が幾日も續いた。

そんな事はお銀にも同じやうにあるらしかつたが、冷熱は何時も男よりか順調であつた。

「貴方は人を玩弄にする氣だつたんです。あの時の言葉が然うだつたんですもの。男はづうづうしいものだと、私はさう思つた。」

お銀は以前の話が出ると、時々そんな事を言つて淋しさうに笑つた。

「何だか可笑しいやうだね。」

笹村は、腹を氣にしてゐるお銀の顏を眺めながら言つた。

「二月も三月も踊つてゐて、それで子ができるなんて……。」

笹村の頭腦には、磯谷と云ふ男のことがふと閃いてゐた。磯谷の伯父の處に奉公してゐたと云ふ年增の女に、お銀は近頃思ひがけなく途中で邂逅してから、手の利くその女の處へ、時々仕立物を賴みなどしてゐることは、笹村も見て知つてゐた。その女は今は近所に住んでゐる小工面の好い或大工に嫁入してゐた。仕立物を持つて來た女は、笹村の部屋の入口へも顏を出してお辭儀などした。

「變な女でせう。」と、お銀は後で若い亭主を持つてゐる其女のことを笑つた。

「あれでも手はどんなに利くもんだか……私の叔父は始終あれに縫はしたんですの。」

然う言つて見せる仕立物は、笹村の目にもいかにも手際が好いやうに見えた。

此女を通して、お銀と磯谷との消息が通じてゐるのではないかと、笹村は時々さう云ふことを感ぐつて見たりなどした。夜使に出たお銀の歸りの遲いときも、笹村の頭にはをり〳〵暗い影がさゝない譯に行かなかつた。さう云ふとき、笹村は泣出す正一を抱出して、灯影の明るい通の方へ連れて行つた。さうしてお銀の歸るのを待受けた。

買ひものの好きなお銀は、出た序に色々なものをこま〳〵と擁へて、別の道から冴々した顏をして家へ歸つて來てゐた。

「これを召食つてごらんなさい、名代の鹽煎餅ですよ。金助町にゐる時分、私よくこれを買ひに行つたものなんです。」

お銀は白い胸を披けながら、脹詰めた乳房を銜ませると、子供の顏から涙を拭取つて、につこり笑つて見せた。

「私途中で、岡田さんの奧さんに逢つたんですよ。暫く來ないから、如何したのかと思つたら、あの方達も世帶が遣切れなくなつて、二三日前に夫婦で下宿へ轉げ込んぢやつたんですつて……。」

お銀は鹽煎餅を壞しながら、そんな話を爲はじめるのであつた。

笹村の當座の疑惑は、その時はそれで消えて了ふのであつたが、外出をするお銀の體には、矢張暗いものが絡つてゐるやうに思へてならなかつた。

「三度目に、こんな責任を背負はされるなんて、僕こそ貧乏籤を引いてるんだ。」笹村は揶揄半分に言出した。

「三度目だつて、可哀さうに……片附いてゐたのは眞の四ケ月ばかりで、それも厭で逃げたくらゐなんだし、磯谷とは三年越の關係ですけれど、先は學生だし、私は叔父の側にゐるしするもんだから、養子になると云ふ約束ばかりで、然う度々逢つてやしませんわ。」

四十五

笹村の口から磯谷のことを色々に聞かれるのは、お銀にも惡い氣持はしなかつたが、その話も二人に取つて、次第に初めほどの興味がなくなつてしまつた。お銀と磯谷との關係と磯谷の人物とが分明解つて來れば來るほど、笹村の女に對する好奇心は薄らいで來たが、お銀の胸にも其時々の淡々しい夢は段々色が剝げて來た。それでも時々笹村に身を投げかけて來るやうなお銀の態度には、破れた戀に對する追憶の影が見えぬでもなかつた。その時の女は、さう想像して見ると、笹村の目に美しく映つた。

「でも、あの女から、磯谷が今どうしてゐるかと云ふことぐらゐは、お前も聞いたらう。」

笹村はその男が持つてゐたと云ふ銀の煙管で莨をふかしながら聞いたが、お銀にしては、それは笹村の前に話すほどの事でもないらしかつた。

「矢張ぶら〳〵してゐるつていふ話ですがね。」

お銀の目には、以前男のことを話す時見せた樣な耀きも熱情の影も見られなかつた。

「お前の胸には、もうそんな火は消えてしまつたんだらうか。」

笹村はもう一度その餘燼を掻廻して見たいやうな氣がしてゐた。

「何時まで其樣な事を思つてゐるものですか。思つてゐるくらゐなら、かうしちやゐませんよ。それに一度でも逢つてゐれば、それを隱してゐるなんてことは、迚も出來るもんぢやありませんよ。」

妊娠と云ふことが、日が經つにつれて段々確實になつて來た。

「如何しても貴方には子種があるんですね。だつて、深山さんの妹さんが貴方の相を見て、然う言つたていふぢやありませんか。」と、お銀

は笹村の顔を見て笑つた。
「でも可いわ。一人ぢや子供が可哀さうだから、三人くらゐまでは可いですよ。」
笹村は其頃から、少しづつ金の融通が利くやうになつてゐた。新しい本屋から、原稿を貰ひに来る向も一二軒あつたし、仕舞つておいた新聞の古も、いつとはなしに出て行つた。それだけ暮しも初めほど手詰でなくなつた。笹村は下町の方から帰つて来ると、きつと買ひつけの翫具屋へ寄つて、正一のために變つた翫具を見つけた。子供は翫具を持つて一人で遊ぶやうになつてゐた
お銀はその頃まだ長火鉢の抽斗に仕舞つてあつた丸薬を取出して、時々笹村に見せた。
「あの時のことを思ふと、情ないやうな気がする。」
お銀は目を曇ませながら、傍に遊んでゐる子供の顔を眺めた。
「坊は阿母さんが助けてあげたんだよ。大きくなつたら、また阿母さんが能く話して聞かしてあげるからね。」
お銀は笹村を厭がらせるやうな調子で言つた。
「あの時のことを忘れないために、この丸薬は何時までも恁うやつて仕舞つておきませうね。」
「莫迦。」笹村は苦笑した。
お銀は胎児のために乳を奪はれようとして、日に／＼気のいぢけて来る子供の傾きを、少しづつ感じて来た。そして老人の手に懐けさせようとしたが、子供は母親よりも懐かでない老人の手を嫌つた。夜笹村の部屋で寝ようとするお銀の懐へ絡りついて来る子供は、時々老人の側へ持つて行かれたが、矢張駄目であつた。子供に對して細しい理解のない老人の手に扱はれて泣いてゐる子供の聲は、傍に見てゐる笹村の頭脳に針を刺すやうに響いた。
「お前見たらいゝぢやないか。」
笹村はお銀に顔を顰めたが、長いあひだ襁褓の始末などについて、母親に委しきりにして来たお銀は、そんな事には鈍かつた。お銀の體の極のつく前と後とでは、子供に對する父と母との心持は、全然反對であつた。

四十六

お銀の遠縁にあたると云ふ若い畫家が一人神田の方にゐた。山内と云ふその男と笹村も一二度どこかで顔を合して相知つてゐた。お銀のことを表向にするに就て、笹村は自分のところへ出入してゐる山内の従弟の吉村によつて、ふと山内のことを思ひ出させられてゐた。吉村の家と近しくしてゐたお銀の父親は、山内の父親とも相識の間柄であつた。
春、笹村が幾年か振かで帰省する前に、笹村夫婦と山内とは互に往来するほどに接近して来た。
ある晩方年始の禮に来た山内は、ぐで／＼に醉つてゐた。一度盛んに賣出したことのある山内は、不謹慎な態度から、その頃一部の人の反感を受けてゐた。その風評を耳にしてゐた笹村の頭にも、山内といふ名は餘り好い印象を遺してゐなかつたが、吉村やお銀の母親から聞かされる山内の家柄や父親の事から推すと、外に現れた山内と丸違つた山内が笹村の頭に映つて来た。
山内は、お銀がつぐ酒を、黒羽二重の紋附や、ごり／＼した袴に零しながら、爛れたやうな目をして、やつと坐つてゐた。杯を持つ手が始終顫へてゐた。
「畫家と云ふものは、面白い扮装をしてゐるもんですね。」と、お銀は山内のよろ／＼と帰つて行つた後で言出した。
「私達の従姉のお房さんの片附いてゐる、あの

人の從兄の神崎も、矢張大酒飲みださうですよ。」

「あの方の御父さんが、矢張おそろしい酒家でね。……母親も杯盤の亂れてゐる座敷へ入つて來て話した。

「何しろ大きい身上を飲み潰したくらゐの人だもんだでね。大氣な人で盛りに遊んでゐる時分溫泉場から町へ來るあひだ札を撒いて歩いたといふ話を聞いてゐるがね。」

笹村夫婦が訪ねて行つたとき、その父親も子息と竝んで坐つて、始終落著かぬやうな調子で、酒を飲んでゐた。口の利方も、女達が腹を抱へるやうな突飛なことが多かつた。そして笹村に猪口を差して、

「私は笹村さん、こんな人間ですよ。」といつて、愉快さうに笑つた。

山內はにや／＼笑つてゐた。

「あゝ厭だ／＼、父子であんなにお酒ばかり飲んで……家の父のことを思出す。」

お銀は正一の手を引きながら外へ出ると言出した。

「でも皆好い人達ですね。東京に親戚がないから、人なつかしげで……。」

人のところの世帶振に、直目をつけるお銀は、家へ歸つてからも山內の暮し方を、見透して來たやうに話した。

花の散る時分に、お銀は歸省する笹村の支度を調へるのに忙しかつた。四五年前に歸省した時、笹村はまだ何もしてゐなかつた。身裝も見すぼらしかつた。自分の腹に出來た子の初めての歸省を迎へたその時の母親の不快げな顏が、今でも笹村の頭に深く刻まれてゐた。

「母のために、少しは著飾つて行かなくちや……。」

笹村はお銀にも、そんな話をして聞かした。

こま／＼した土産物などを買集めるに腐心してゐるお銀の頭にも、笹村の鄉里へ對する不安が始終附纏つてゐた。

「新ちやんが、あゝ云ふ風で歸つて行つたから、如何せ私なども阿母さんや姉さんに好く思はれてゐないに決つてゐる。」と、時々それを言出してゐたお銀は、此機會に出來るだけの好意を示すことを忘れなかつた。

新しく仕立てたり、仕立直したりした幾色かの著物の上に、お銀は下谷から借りて來た欽一の兵兒帶なども取揃へた。

「角帶もいゝけれど、此も持つておいでなさいよ。」

欽一はその頃、その弟と前後して、軍醫として戰地へ渡つた。

四十七

鄉里へ歸つて行つた笹村は、長くそこに留まつてゐられなかつた。大きな舊城下の荒れた屋敷町の一つに育つて來た笹村は、長いあひだ自分の生立つて來た土地の匂を思出す隙もない程、目が始終前の方へ嚮つてゐたが、其頃時々幼い折の慘な自分の姿や、陰鬱な周圍の空氣を振顧るやうな事があつた。姉に手をひかれて初めて歩いてみた珍しい賑かな町や、近所の女の友達と一緒に蟋蟀を取つてあるいた寂しい石垣下の廣い空地の叢の香、母親の使で草履の音を忍ばせて、恐る／＼通りぬけて行つた、男の友達の頑張つてゐる木蔭の多い、じめ／＼した細い橫町、惰けものの友達と一緒に、嫌な學校の課業のあひだを寢轉んでゐた公園の薫かな森蔭の芝生――日に／＼育つて行く正一を見るにつけて、笹村は此十年來の奮闘に疲れた頭に、しみ／＼其處のなつかしい空氣が嗅ぎしめて見たいやうな氣がした。荒れてゐる父親の墓の前で、今一度敬虔なその頃の、やさしい心持を味つてみたいと考へた。

そんなことを胸に描いてゐた笹村は、郊外に建てられた暗い夜のステーションへ降りて行くと、直にがさ〳〵した、荒れたその町に包まれた自分の青年時代の厭な記憶に、面を背けたいやうな心持になつた。
　黙つて粗雑な木造の階段から、凹凸した廣い土間に降りて行く群集の下駄の音や、田圃面から闇を流れて來る一種の臭氣、ステーション前の廣場の柳の蔭に透して見られる、假小屋めいた薄暗い旅籠屋、大阪風に赤い提灯などを出した兩側の飲食店――その間をのろ〳〵した腕車で、石高な道を揺られて行く笹村は、初めて來る新開の町をでも見るやうな氣がした。
　檐の低い家の立竝んだ町を、あちらへ曲り此方へくねりしてゐるうちに、やがて見覺えのある大通の町が目の前に現れた。そんな通を幾個も通過ぎて、腕車は石垣や土塀の連續いた寂しい屋敷町の方へ入つて行つた。雲の重く垂下つた空から、雨がしぶ〳〵落して來た。暗い木立や垣根の隙から、まだ灯影が洩れてゐて、靜かな町はまだ全く寝靜つてゐなかつた。
　その晩笹村は、廣い二階の一室で、二三杯の酒に酔つて、物を食べたり、母や姉達と話に耽つたりして、鷄の鳴くまで起きてゐた。初めて昔風の廣い式臺のところまで出迎へた母親や姉は、さうして話してゐるうちに、初めて目に映つた時の汚さが漸くとれて來たが、それでも顏は昔變つてゐた。長いあひだの氣苦勞の多い生活と闘つたり、悶踠いたりして來た痕が、傷しいほど此女達の老けた面に現れてゐた。
　翌朝笹村は、汽車のなかで舞込んだ左の目の石炭滓を取つて貰ひに、近所の醫師を訪ねた。中學に通つてゐる時分、輕い熱病にかゝつたり、腦脊髓に痛みを覺えたりすると、こゝへ駈けつけて來たが、家はその時の樣子と少しも變りがなかつた。髮の薄かつた醫師も、夫より以上禿げてもゐないのが不思議のやうであつた。
　笹村は二三日、姉達の家や、兄の養家先などを廻つてみたが、町には何處を探ねても、昔の友人らしいものは一人もゐなかつた。
　忘られてゐた食物の味が舌に昵んで來る頃には、笹村の心にはまた東京のことが想出されてゐた。そして久振で逢ふわが子の傍へ寄つて、手紙では迚も言盡せない周圍の紛糾つた事情や、自分の生活狀態について、誰に打ちあけやうもない老人の弱い心持を聽いてもらへるやうな機會を捕へようとしてゐる老母の沈んだ冷い目から逭れるやうに、笹村はいつも落著なく外を出歩いてばかりゐた。

四十八

　笹村は氣苦勞の少い甥や姪と、一人の義兄とに見送られて、その土地を離れようとする間際に、同じ血と血の流れあつた母親の心臓の弱い鼓動や、低い歔欷の聲を初めて聞くやうな氣がした。
　する〳〵と停車場の構内から、初夏の日影の行渡つた廣い野中に辷出た汽車の窓際へ寄せてゐる笹村の曇つた顏には、すが〳〵しい朝の涼風が當つて、目から涙がにじみ出た。
　笹村は半日と顏を突合して、しみ〴〵話したことも無かつた母親の今朝のおど〳〵した樣子や、此間中からの氣苦勞な顏色が、野面を走る汽車を、後へ引戻さうとしてゐるやうにすら思へてならなかつた。孤獨な母親の身の周を取捲いてゐる寂寞、貧苦、妹が母親の手元に遺して行つた不幸な孤兒に對する祖母の愛著、それが深々と笹村の胸に感ぜられて來た。
　……まことに本意ないお別れにて、この後またいつ逢はれることやら……門の外までお見送りして内へ入つては見たれど、坐る氣にもなれずおいて行かれし著物を抱きしめてゐると、鼻血がたら〳〵

流れて、氣がとほくなり申候……

東京へつくと、直に、こんな手紙を受取つた笹村の目には、今日までわが子の生つてゐた部屋へ入つて行つた時の、母親のおろ〳〵した姿があり〳〵浮ぶやうであつた。

「これだから困る。この位なら何故ゐるうちに、もつと母子らしく打解けないだらう。」

笹村は手紙をそこへ投出して、淋しく笑つた。そして「もう自分の子供ぢやない」と然う思つてゐる母親を憫れまずにはゐられなかつた。

居るうちに、笹村は一二度上京を勸めてみたが、母親の氣は進まなかつた。東京へ來て、知らない嫁に氣を兼ねるのも否だつたし、孫娘も人なかへ連れて行くのは好ましくなかつたが、其よりも、笹村の考へてゐるやうに然う手輕に足を脱くことのできない事情が、そこに色々絡つてゐた。そして其を言出す程の親しみが、まだ二人の間に醸されてゐなかつた。

「好い畫が家にあつたが、あれも賣つてしまつたんだらうな。」

笹村は少年時代に、ふと暗い物置のなかの、黴くさい長持の抽斗の底から見つけたことのある古い畫本のことを思出して、母親に訊ねるともなしに言出した。その畫が紛ひもない[illegible]の筆であつたことは、其後見た同じ描者の手に成つた畫の確かな線や、落著の好い色彩から推すことができた。

笹村は姉の家の二階に預けてある、その古長持のなかにある軸物や、刀のやうなものを引くら返して見た時、その畫本を捜して見たが、何處にも見つからなかつたので、ふと母親に確めてみる氣になつた。

母親は怪訝さうに、嫣然ともしないで、我子の顔を眺めた。

「嫁さんは素人でないとか云ふ話やが、さうかいね。」

母親はふと訊いた。

「戯談ぢやない。新がさう云ふ事を吹聽したんでせう。」

笹村はそれを手強く打消した。

母親の方からも、笹村の方からも、それきり雙方の肝要な問題に觸れずにしまつた。笹村は時々外で泊ることすらあつた。

お銀のところから、歸りを促した手紙が來ると、母親は口へ出して止めることさへ憚つた。

「……詰らんこつちや。」

立つ間際、いそ〳〵と荷造をしてゐる笹村の傍で、母親はふと言出した。そして何か手傳はうとして、笹村に一層邪慳に叱飛されて、そのまま手を引込めてしまふのであつた。

四十九

この慈母の手を離れて、初めて東京へ出た當時のことなどを笹村は思出してゐた。その頃は笹村も時々長い手紙も書いたし、何處かへ勤めることになつたと言つては、手許の苦しいなかから禮服なども送つて貰つた。少し許りの收入に有りつくやうになつてからは、其なかから幾許かづつ割いて贈ることも怠らなかつた。

「これからは金も些とはきち〳〵送らなけア……。」

笹村は心に領いたが、汽車が國境を離れる頃には、自分の捲込まれてゐる複雜な東京生活が、もう頭に潮のやうに差しかけてゐた。妻や子のことも考へ出された。

翌朝新橋へ著いた時分は、町はまだ靜かであつた。地面には夜露のしとりが未だ乾かぬくらゐで、葭簾をかけた茶屋の軒からは、濃い花の色が鮮かに目に映つた。都會人のきりゝとした顔や、どうかすると耳に入る[illegible]の響も[illegible]が透くやうであつた。

腕車から降りて行つた笹村は、まだ寢衣を著

たまゝの正一が、餡麺麭を食べながら、ひよこひよこと玄關先へ出て來るのに出逢つた。子供は合羞んだやうな、嬉しさうな顔を赧めて、父親の顔を見あげた。その後から、お銀も母親も出て來た。丈の高いお銀の父親の姿も現れた。弟も茶の室にまご／＼してゐた。

此弟の出て來ることは、國へ立つ前から笹村も承知してゐた。東京で育つた此弟は、お銀が笹村のところへ來てから間もなく、脚氣で田舍へ歸つた。そして其處で今日迄暮して來た。東京で藥劑師にならうとしてゐたこの弟は、そんな事を嫌つて、洋服裁縫に可也な腕を持つてゐた。

「弟も東京で早くこんな店でも出すやうにならなけア……。」と、外で洋服屋の前を通ると、お銀は時々田舍にゐる弟のことを言出してゐた。二十四五になつたら、田舍の親類からそれだけの資本は出してもらへる的もついてゐた。

「田舍においちや腕が鈍つてしまふだらうがね。」笹村も時々それを惜しむやうな口吻を洩した。

「一體田舍で何してゐるんだ。」

「この頃は體もよくなつて、町で仕事をしてゐると云ふ話ですがね。女が出來たと云ふ噂もあるんですけれど……その事は、去年欽一兄さんが養家先へ歸つた時聞いて來たんです。」

その日は、留守中の出來事や子供の話で日が暮れた。お銀はそこへ取散らされた色々の土産もののなかから、梅干の一折を見つけて、嬉しさうに蓋を開けて見てゐた。その梅干には東京やお銀の田舍では、味ふことのできぬ特殊の味があつた。かき餅もお銀の好物であつた。

「阿母さんが、まア澤山下すつた。お國の梅はどこか異ふんですかね。」

子供は叔母からの贈物の大きな軍艦や起あがり小法師のやうなものをあつち弄り此方いぢりして悦んだが、父親の傍へは寄つて來なかつた。そして時々視線が行會ふと、妙にそれを避けるやうな樣子があつた。

「何だか窶れてゐるやうだね。」

笹村は腺病質の細いその頸筋を氣にした。

「いゝえ、そんなことはないでせう、隨分元氣がいゝんですよ。御父さんはと聞くと、電車ちんちん餡パン買ひに行つたなんて、それは面白いことを言ひますよ。」

「ふとしたら、僕甥が一人來るか知れんがね。到頭また推つけられた。」

笹村は久振でお銀と一緒に書齋へ入つた時言出した。そのことはお銀も得心けないことでもなかつた。

お銀は浮々した調子で、飲みつけない酒を強ひつけて笹村の口に當がひなどした。

五十

旅で養つて來た健康は、直に損れて來た。田舍の母の同居してゐる家では、リウマチを患つてゐる老人のために、上州の方から取寄せられた湯の花で藥湯が殆ど毎日のやうに立てられた。笹村もその度にその湯に浸つた。それに其處は川を隔てて直山の木の繁みの見えるところで、家の周を取繞らした築土の外は田畑が多かつた。廣緣のゆつくり取つてある、廂の深い書院のなかで、偶に物を書きなどしてゐると、青蛙が鳴立つて、窓先にある柿や海棠林檎の若葉に雨がしと／＼灑いで來る。土や木葉の匂が、風もない靜かな空氣に傳つて、塵埃の多い都會生活に疲れた尖つた神經が、軟かいブラシで撫でられるやうであつた。そこへ母や妹が入つて來さへしなければ、笹村は何時までも甘い空想を亂されずにゐることが出來た。

偶には傘をさして、橋を渡つて、山裾の遊廓の方へ足を入れなどした。京の先斗町をでも

思出させるやうな靜かな新地には、青柳に雨が煙つて樺に金網造の行燈が點され、入口に青い暖簾のかゝつた、薄暗い家のなかからは、しめやかな爪彈の音などが旅客の哀愁をそゝつた。笹村は四五歳のをり、父親につれられて行つて、それらの家の一軒の二階の手摺際から眺めた盆踊のさまや、祭の日に此方の家の二階から向の家の二階へかゝつた廊に催される手踊などを思出してゐた。

笹村は奥まつた二階の座敷で、燭臺の灯影のゆらぐ下で、二三杯の酒に醉の出た顔を焦らせながら、偶には上方語のまじる女達の話に耳を傾けた。女達のなかには、京橋の八丁堀で産れて、長く東京で左褄を取つてゐたと云ふ一人もあつた。

「こゝは駄目です。さアと言ふ場合に片肌ぬぐなんてことはありませんから。」

その女は生温い土地の人氣が肌に適はぬらしく見えた。

「その代りお座敷は暢氣ですの。」

東京へ歸つて來てからの笹村は、しばらく惰け癖がぬけなかつた。時には庭に出て草花の種を蒔いたり、大分足のしつかりして來た子供を連出して、淺草へ出かけなどした。

段々腹の大きくなつて來たお銀は、側に寄りつく子供に對して、一層險しくなつた。そして、「おッぱい、ない〳〵。」と言つて、襟を堅く掻合した。

「貴方に乳をのまれると、阿母さんは體がぞッとするやうで……御父さん辛い辛いをつけても可ござんすか。」

お銀はさう言つては唐辛を少しづつ乳首になすりつけた。

子供は二三度それをやられると、直に臺所から雜巾を持つて來て、拭取ることを覺えた。

「どんなにお乳が美しいもんだか。」と、老母は相好を崩して、子供の顔を覗込んだ。

爲うことなしに老母の懷に慣らされて來た子供は、夜は空乳を吸はせられて眠つたが、朝になると、背に結びつけられて、老母の焚きつける火のちろ〳〵燃えて來るのを眺めてゐた。

「煙々山へ行け、錢と金こつちへ來い。」

子供は老母から、いつか其樣な唄を教はつて、時々人を笑はせた。

母親から突放された此幼兒の廻らぬ舌で辯ることは、自分自身の言語のやうに、誰よりも一番よく父親に解つた。いら〳〵したやうな子供の神經は、時々大人を手古摺らすほど意地を悪くさせた。湯をつぐ茶碗が違つたと言つて、甲高な聲で泣立てたり、寢衣を著せたのが悪いと言つて拗ねたりした。

「床屋へ行つて髮でも刈つてやりませう。そしたら些とせい〳〵するかも知らない。」

お銀は思ひついたやうに、下駄をはかして正一を連出して行つた。

五十一

旅から歸つて來た時ほど、軟かい心持のいいベッドに寢かされたことは、これまで笹村になかつた。前庭と中庭との間に突出た比較的落着のいゝ四疊半に偶々お銀の手で延べられる寢道具は、皆ふか〳〵した新しいものばかりであつた。

お銀の赤い枕までも新しかつた。板戸をしめた薄暗い寢室は、どうかすると蒸暑いくらゐで、笹村は綿の厚い蒲團から、時々冷々した疊へ熱る體を辷りだした。

「敷の厚いのは困る。」

「さうですかね。私はどんな場合にも蒲團だけは厚くなくちや寢られませんよ。家でも絹蒲團の一組くらゐは拵へておきたい。」

お銀は軟かい初毛の見える腕を延して、合歡

莨などをふかした。

お銀の臆病癖が一層嵩じてゐた。それは笹村の留守の間に、つい此處から二筋目の通の或店家の内儀さんが、多分その亭主の手に殺されて血反吐を吐きながら、お銀の家の門の前に蹌つて死んでゐたと云ふ出來事があつてからであつた。その血反吐のどす黒い斑點が、つい笹村の歸つて來る二三日前まで、土に染みついてゐた。

女はこの界隈を、のたうち廻つたものらしく、二三町隔つた廣場にある、大きな榎の下に、下駄や櫛のやうなものが散つてゐた。自身に毒を服んだと云ふ話もあつた。

お銀は床のなかで、その女が亭主に虐待されてゐたと云ふ話をして、自分の身のうへの事のやうに怯悄れた。お銀の一時片附いてゐた男が、お銀に逃出されてから間もなく、不斷から反の合はなかつた繼母を斬りつけたと云ふことは、お銀の頭にまた生々しい事實のやうに思はれて來た。男はその時分、どんなに血眼になつて他人の手から巧く逃れた妻を搜しまはつてゐたか、毎日酒ばかり呷つて、近所をうろつき廻つてゐた男の心が、どんなに狂つてゐたか、それは聞いてゐる笹村にも解つた。

「貴方と一緒に歩いてゐる時、いつか菊坂の裏通で出會したぢやありませんか。あれが其ですよ。」

「へえ。」

笹村は其時お銀が、ふいと暗闇で擦違つた男のあつたことだけは、今でも思出せたが、お銀がその時泡を喰つて、聲を立てながら笹村の手に摑つたのは、わざとらしい此女の不斷の癖だらうと考へてゐた。お銀はその時、はつきり其男をそれと指ざすほど笹村に狎れてゐなかつた。その晩はしよぼ／＼雨が降つてゐたが、男は低い下駄をはいて、洋傘をさしながら、びしよ／＼濡れてゐた。

「あれが然うですよ。お銀つて、私の名を呼びましたわ。」

「へえ。」

「あの時貴方がゐなかつたら、私は如何かされてゐたかも知れないわ。それは亂暴な奴なんです。酒さへ飲まなければ、不斷は極氣が小さいんですけれどね。」

その家のことについて、新しい事實がまたお銀の口から話出された。

「……私行つた時から厭で／＼、如何しても一緒にゐる氣はしなかつた。日が暮れると、裏へ出てぼんやりしてゐましたよ。裏は淋しい田圃に、蛙が鳴いてるでせう。その厭な心持といつたら……私泣いてゐたわ。そして何かといつちや、汽車に乗つて逃げて來たの。」

「その家を、僕は一度たづねてやる。」

笹村は揶揄半分に言つた。

「そしてお前の此處にゐることを知らしてやらう。」

五十二

けれどそんなベッドの新しみは、長く續かなかつた。枕紙に染みついた女の髮の油の匂に鼻を塞らす時が直に來た。笹村が渇ゑてゐた本を枕頭で擴げるやうになると、解放された女も長四疊の方で、のび／＼と手足を伸して寢るのを淋しがらなくなつた。

「あゝ、何でもいゝから速く身輕になりたい。」

お銀は澄んだやうな目を光らせながら、懶い體を持ちあぐんでゐた。

笹村も、一度經驗したことのある、お產の時のあの甘酸ツぱいやうな血腥いやうな臭氣が、時々鼻を衝いて來るやうに思へてならなかつた。

それにお銀の背後には、多少の金を懷にし

て田舎から出て來て、東京でまた妻子を一つに集めて落さうとしてゐる父親や弟が居た。お銀は夫婦きりでゐる四疊半の自分の世界を離れると、直にその渦の中へ引込まれずにはゐられなかつた。お銀の頭には、一家離散の悲しみが深く染みついてゐた。

「直この先の車屋の横町に、家が一軒あるんですがね。」

お銀は或日笹村に相談を持ちかけた。

お銀はそれまでに、時々曇る笹村の顏色を幾度も見せられた。

「それを左に右借りることにしようと思ふんですが如何でせう。父はそこから何處かへ勤めるんださうです。芳雄も、今ゐるところは辛苦しくて爲樣がないとかで、矢張通ひにしたいと言つてゐますから、二人で稼げば、そんなに難しいことぢやないと思ふんですがね。」

「それぢやお爺さんも此方に永住か。」

「やれるか行れないか、まあ然う云ふ心算なんでせう。」

「まあ行つて見たら可からう。」

「然うすれば、私もお産をする處ができて、大變に都合がいゝんです。近くにゐれば、赤ン坊の世話もして貰へますから。」

三人がそこへ移住んだ時、笹村も正一をつれてぶら／＼行つて見た。そして些とした庭を控へた緣側から上り込んで、偶には母親が汲んでくれる番茶に口を濡して歸ることもあつた。

茶具の入つた笊などがやがて運ばれて、正一も大抵そこで寢泊することになつた。

「正一はどんなにお婆さんの懷がいゝんだか。」

話に行つてゐたお銀が、夜笹村の部屋へ歸つて來ると、子供の言つたことや爲たことを報告した。

「あれもお婆さんは嫌ひなんだけれど爲方がないんだ。」笹村は打消した。

お銀が枇杷の葉影の蒼々した部屋で、呻吟き苦しんでゐると、正一はその側へ行つて、母親の手につかまつた。その日お銀は朝から少しづつ産氣づいて來た。晝頃には時をおいては來る痛みが一層間近になつて來た。

「さあ私もう出ます。」

お銀は晝飯のお菜拵などをしてから、草履を穿いて、産室の方へ出向いて行つたが、笹村はさほど氣にもかけずに居た。二人はその頃、不快な顏を背向け合つてゐるやうなことが幾日も續いてゐた。

「貴方も來てゐて下さいよ。」

お銀は出がけに笹村に言つた。

「みんな居るから可いぢやないか。」

笹村は呟いたが、矢張見に行かない譯には行かなかつた。

外には眞夏の目眩しい日が照つてゐたが、木蔭の多い家のなかは涼しい風が吹通つた。

「くるちい？」

子供は母親の顏を瞶めて、いきむ度に傍へ寄添つて、大人がするやうに自分の小さい手を假してやつた。そして手帕で玉のやうに入染み出る鼻や額の汗を拭いた。

「おゝ、何てお悧巧さんでせう。自分もかうして阿母さんを苦しめた時もあつたのにね。」

産婆は泣くやうな聲を出した。

五十三

産れた女の兒が、少しづつ皮膚の色が剝げて白くなつて來るまでには大分間があつた。くしやくしやした目鼻立も容易に調つて來なかつた。笹村は見向きもしなかつたが、乳房を銜ませてゐるお銀の樣子には、前の時よりも母親らしい優しみが加はつて來た。

産婆は毎日來ては、湯をつかはせた。笹村も

産兒がどう云ふ風に變化して行くかを見に行つたが、子供の數は不相變殖んでゐた。
「何だいこれは……。」
笹村はお七夜の時、産婆の手で白粉や紅をつけられて、目眩しさうな目を細めに開いてゐる赤兒を眺めて笑出した。
お銀も裤のうへに起きあがつて、蠢動く産兒を見て嫣然してゐた。
「いゝですよ。斯樣な兒が却つて好くなるものですよ。」
お銀は自信がありさうに言つた。
老人のやうな皺を目のあたりによせて、赤兒は泣面をかいた。胴の長い痩ッぽちな其の性格と、狹い額際との父親そつくりである外、この子が母親の父方の顏容を受繼いでゐることは、笹村に取つて却つて一種の安易であつた。
緣側を電車を引張つて歩いてゐた正一も、側へ寄つて來ると、赤兒と一緒に苦痛らしい顏を顰めた。そして、「おッぱいやれ……。」と、母親に促した。
「どうも有難うございました。」
少しは力の恢復して來たお銀が、卷髮姿で裏から入つて來たとき、笹村の顏色がまだ嶮しかつた。笹村はその時、臺所へ出て七輪の火を起して晝のお茶を煮てゐたが、甥も側に働いてゐた。晝過から學校へ通つてゐる甥が出かけて行つた後は、笹村は毎日獨で靜かな家のなかに臥たり起きたりしてゐた。時々母親が來て、飯を運んだり、臺所を見たりするのであつたが、笹村はその度に餘り好い顏を見せなかつた。かうして兩側を見たり見られたりしながら、親達や弟に幅を利かせようとしてゐるらしいお銀の心持が、哀でもあり苦々しくもあつた。笹村は自分の力を買被られてゐることも、苦しかつた。老先の短い田舍の母親、自分の事業、子供の事も考へなければならなかつた。
「僕が今、金で衆をどうすると云ふ譯に行かんことはお前も知つてゐてくれなけア困る。」
笹村は衆の前で時々お銀に言つた。
「えゝそれ處ぢやありませんとも。」
お銀も言つたが、笹村は矢張不安でならなかつた。目に見えぬ侵蝕の力が、迚も防ぎ切れないやうに考へられた。
「子供一人を取つて別れるより外ない。そして母と妹とを呼寄せて、累のない靜かな家庭の空氣に頭を涵しでもしなければ……。」
笹村は時々さう云ふ方へ氣が嚮いて行つた。物慾の盛な今迄の盲動的生活に堪へられないやうな氣もした。虚弱な自分の體質や、消極的な[illegible]、[illegible]然うなつて行かなければならぬやうにも考へられた。
十日ばかりの男世帶で、家のなかが何となく荒れてゐた。お銀は上つて來ると、希しさうに我家を見廻したが、目には不安の色があつた。
「お前に歸つて來てもらはない心算なんだがね。」笹村は侵入者を拒むやうな調子で言つた。
「でも私だつて自家が氣に掛りますから……。」
叔父と甥と、何か巧んでゐるらしく、その場の光景が、暫くぶりで歸つて來たお銀の目に映つた。お銀の猜疑は、笹村に解けないほど、何時も暗いところまで入込んで行かなければ止まなかつた。

五十四

産は前より輕かつたが、お銀の健康は冬になるまで恢復しなかつた。一度水々しい艶を持ちかけて來た顏色は、殘暑にめげた體と一緒に、また蝕んで來た。手足もじり〳〵痩せて、稜立つた胸の鎖骨のうへの處に大きな窪みが出來てゐた。
ある知合の醫師は、聽診器を鞄に仕舞ふと、

目に深い不安の色を見せて、髭を捻りながら黙つてゐた。
「肺ぢやないか。」
お銀が茶の室へ立つて行つてから、笹村は訊ねた。
笹村は比較的骨格の岩丈な妻の體について、これまで病氣を豫想するやうなことは滅多になかつた。どうかすると鼻っ張りの強いその氣象と同じに、迚も征服しきれない肉塊に對してでもゐるやうな氣がしてゐたが、それも段々覆されさうになつて來た。笹村は自分の體を流れてゐる惡い血を、長いあひだ注ぎかけて來たやうにも思つて、可恐しくもあつた。
「濱田さんか橋爪さんに、私一度見てもらひたい。」
お銀は時々さう言つて、思ふやうに肥立つて來ない自分の體を不思議がつたが、矢張ずるずるになり勝であつた。
「一遍でもいゝから養生をしてもらつたら可いぢやないか。」
笹村もお銀の氣の長いのを、時とするとじれつたく思ふこともあつたが、夏頃からここまで漕[illegible]に來るあひだ[illegible]ゐたいやうな氣もした。
[illegible]は[illegible]勝利を占めるか……さうしたこ[illegible]タルな氣分に涸くこともあつた。若いその醫師は、容易に症状を告げなかつた。
「まあ大學か順天堂へでも行つて診ておもらひなすつた方が可い。偶然すると、肺に少し異状がありやしないかとも思ふ。」
「何だか少し可笑しいぜ。」
笹村は醫師が歸つてから、お銀に話しかけた。
「何だつて言ふんです。」
お銀は若い醫師に、頭から信用をおかないやうな調子で言つた。
明日その醫師と一緒に病院へ診てもらひに行つたお銀の病氣が、産後には有りがちな輕い腎臓病だと云ふことが解るまではお銀は何も手につかなかつた。
「さうですかねッ私も到頭そんな病氣になつたんですかね。」
平常のやうに赤兒を抱いたり、臺所働きをしてゐるお銀の姿が、笹村の目にも傷しげに見えた。
「どれ、ちよつとお見せ。」と、笹村は氣遣はしさうに胸を出さして見た。肋骨のぎと〲した胸は看るから弱さうであつた。
「何て厭な體でせう。骨ばかり太くて……。」
お銀は淋しさうに自分の首や胸に觸つて見た。そして肌をいれながら、
「私死んでもいゝ。子供さへなければ……。」
「何大丈夫だよ。きつと癒してやる」
笹村は心丈夫さうに笑つて見せた。
「して見ると、貴方の方が丈夫なんですかね。」
「けれど、女の方はお産があるから。」
お銀は一月ばかり牛乳と薬を服み續けてゐたが、腎臓の方が快くなると、直に飽いて來た。涼氣の立つ頃には、痩せてゐた子供も丸々肉づいて來るくらゐ、乳もたツぷり出て來たが、時とするとお銀は矢張かゝりつけの醫者へ通つた。
「貴方にちよいと來て下さいつて、高橋さんが然う言ひましたよ。」
お銀はある日醫者から歸ると、笹村に言出した。
「何ですか、貴方に逢つて、よく相談したいことがあるんださうです。」

五十五

女のやうに柔和な其の醫者は、子供を診るのが上手であつた。噛んでくゝめるやうに、容體なども詳しく話してくれるので、お銀も自然心易くしてゐた。一緒にゐた[illegible]もあかりらし

い女と、母親との折合がわるくて、此頃後釜に田舎から嫁が來てゐると云ふ事情などもお銀は能く知つてゐた。

「あの書生さんが、また何處となく人ずきのする男ですよ。」とお銀はその藥局まで氣に入つてゐた。

お銀のことなどで、その醫者に呼びつけられることは笹村に取つて、餘り心持よくなかつた。

「何んだつまらない、わざ〳〵人を呼びつけたり何かしやがつて……。」

笹村は歸つて來ると、お銀に憤りを洩らした。笹村を詰問でもするらしい調子に出ようとした醫者の態度は、お銀の若い其醫者に對する甘えたやうな様子を想像せしめるに十分であつた。

「今度は一つ、好い醫者に診ておもらひなさらなけア不可ませんよ。」

醫者の然う云つた口吻には、妻に對する良人の冷酷を責めでもするやうな心持がないとは言へなかつた。

「高橋さんは何か貴方に失禮なことでも言つたんですか。」

お銀は不思議さうな顏をした。

「だつて私獨で病院へ行つても、明盲ですからね。もし行くなら、高橋さんが婦人科の掛を知つてゐるから、一緒について行つて能く話をしてあげても可い。左に右一應貴方にも話すから……と然う言つたまでぢやありませんか。」

この前にも知合の醫者に連れて行つてもらつたことのあるお銀が、勝手の解らない廣い病院で、彼方へまご〳〵此方へまご〳〵するのが厭さに始終出無精になつてゐたのは笹村にも呑込めないことでもなかつたが、然うした筋道の立つたお銀の言分は、一層笹村の心をいら〳〵させずには置かなかつた。

不快な顏を背向合つてゐることが、幾日も續いた。笹村はそのまゝ病院へ行かうともしないでゐる妻の無精を時々笑つたが、お銀はさほど氣にもしないらしかつた。

前にもついて行つたことのある知合の醫者と一緒に、ある日大學の婦人科へ診てもらひに行つたのは、其から大分經つてからであつた。

「今どこと言つて、別に惡いところはないんですつて……。」

歸つてくると、お銀は晴著のまゝ、笹村の傍へ來て話出した。

「たゞお産の時に、子宮が少し曲つたんださうですけれど、それは今度のお産の時にでも直せば可いさうです。今は眞の一週間も、洗ふなら洗つてみても可いつて云ふんですの。」

「え、さうかね。」笹村はその診斷が呆氣ないやうな氣がした。

潤澤も緊張もないお銀の顏色は、冬になると、少しづつ見直して來たが、お産をする毎に失はれて行く、肉の軟かみと血の美しさは恢復せさうもなかつた。

五十六

その頃から、お銀はをり〳〵笹村の古い友達の前へ出て、酒の酌などをした。髮の拔上らうとしてゐる鬢際の地の薄くすけて見えるお銀のやゝ更けたやうな顏は、前よりはいくらか落着いてもゐたし、媚かしさも見えた。そして遠慮なく膝を崩すやうな客に對する時の調子も、笹村が氣遣つたほどには粗雜でもなかつた。

笹村が一週間ばかり、色々紛糾つてゐた家庭の不快さを紛らしに、ふいと少しばかりのマネーを懷にして、海邊へ出て行つた留守のまに、子供の帽子などを懷にして、宅を見舞つてくれる人などもあつた。その男は、上框に腰かけて暫く話込んで行つた。

「ぜひ遊びに入らつしやい。笹村君が何か言へば、私が巧く言つておきますから…。」と、氣輕にそんな愛想を言つて行つたことなどを、お銀は後で笹村に話した。

「あの方なぞのお宅もさぞ立派でせうね。――どんな風だか、後學のために餘所の家も私見ておきたい。」

お銀は笹村の説明を聞いて、何にもない自分の家の部屋を氣にしだした。

海邊へ出て行くときの笹村の頭はくさ〳〵してゐた。じめ〳〵した秋の雨が長く續いて、崖際の茶の室や、玄關わきの長四疊のべと〳〵する疊觸が、いかにも辛氣くさかつた。そんな雨を潛りながら赤兒を負つて裏木戸から崖下の總井戸へ水を汲みに出て行つた母親が、坂のところで躓いて轉んで、前齒が二本ぶら〳〵になつてから、此處の家の住みにくいことが、また母子の口から繰返されなどした。

飯を食ふ度に、その齒を氣にしてゐる母親の顏を、お銀は傷しさうに眺めてゐた。笹村には、それが何か大きな犧牲でも拂つたかのやうに思はせようとしてゐるらしくも見えた。

「だから老人には無理ですよ。眞ちやんに汲んでもらへば可いんだけれど、矢張さうも行かないし…。」お銀は笹村に當こするやうな調子で言つた。

家を疊んで、その頃澁谷の方のある華族の邸に住込んでゐた父親が、時々羽織袴のまゝで此處へ立寄ると、珍らしい菓子などを袂から出して正一にくれなどした。

「御隱居が、こんな物をくれたで…。」と、綺麗な巾著を、紙に包んだまゝ娘の前に出すこともあつた。

「工合は如何です。」と、笹村は偶に愛想らしい口を利いた。色々の才覺のある此老人が、段々奥向のことに係はるやうになつてゐることは、笹村にも頷かれたが、そこの窮屈な家風に、漸く厭氣のさしてゐることも、時々の口吻で想像することができた。

「何分私も年を取つてゐるもんだで…。」

此の五六年田舍で懶惰に日を暮した父親は、外に何か氣苦勞のない仕事があるならばと、もう其を考へてゐるらしくも見えた。

笹村は、そんな内輪の事情を、その頃また舊の友情の恢復されてゐた深山にだけ時々打明話をしたが、矢張獨でもだ〳〵と頭を惱してゐることが多かつた。さうして氣が結ぼれてゐると、苦しい頭が狂出しさうになつた。

五十七

そんな周圍の事情は、お銀の些とした燥いだ口の利方や、焦だち易い動物をおひやらかして悦んでゐるやうな氣輕な態度を見せられる度に笹村をして妻を太々しい女のやうに思はしめた。そして壓潰されたやうな厭な氣分で、飯を食ひに出るほかは、狹い檻のやうな自分の書齋のなかに、默つて閉籠つてばかりゐた。笹村の臆病な冷い目は、是迄に觸れて來た女の非點ばかりを捜して行つた。

朝の食膳に向つてゐる時、さうして張合つてゐる不快な顏の筋肉が、ふと擽られるやうな弛を覺えて、雙方で噴飯して了ふやうなことは是迄に希しくなかつたが、此頃の笹村の嫌厭の情は妻の然うした愛嬌を打消すに十分であつた。

笹村の目には、是までにない醜い女が映つて來た。そして其を見詰めてゐる苦しさに堪へられなかつたが、お銀の頭にも、夫婦間に迫つてゐる危機が感ぜられた。そして時々自分の前途を考へない譯に行かなかつた。

茶の室で、怯えたやうなお銀が顏で私と差圖して指へさした膳に向つて、母親の給仕で飯を

食ふのが苦しくなつて来ると、笹村はそれを書斎の方へ運ばした。そして独りで寂しい安易な晩飯を取つた。夜も冷々する寝床のなかで、うと〳〵しかけた眼がふと醒めると、痛いほど冴えた頭脳が興奮して来た。笹村はランプの心を掻立てて、時々蒲団のうへに起直つた。そして本など披けて、酷苦しい頭を慰さうとあせるのであつたが、性のよくない目は、刺すやうな光に堪へられないほど涙が滲み出して来た。呼吸も苦しかつた。

笹村は、能く夜更に寂しい下宿の部屋から遁れて、深い眠に沈んでゐる町から町を彷徨ひ、静かな夜にのみ生つてゐる、深山の昔宵の窓明を慕うて行つた頃のことを思出してゐた。そして、しら〳〵した夜明方に、草臥れて森や池の畔を歩いてゐた二人の姿を考へた。

笹村は、黙る指頭についてとれる墨の臭汁を拭ひながら、部屋を出て台所へ行つて食物を捜しにでも行くか、お銀がお用心深く鎖した戸を推開けて、ふらと外へ出てみるより外なかつた。

明くる朝も笹村は早く目がさめた。頭にいらいらする昨夜の疲に、顔の皮膚がまだ厚ぼつたく熱つてゐて、縁側に射込む朝日が目に沁みるやうであつた。

庭をぶらついてゐる笹村の目に入つたお銀の蒼い顔にも、疲労の色が見えた。お銀は茶の室の縁先に子供を抱いてぼんやり坐つてゐた。

その日は昼飯をすますと、お銀は子供を負つて、珍しく外へ出た。

「快々するから何処かへ行つて遊んで来ませうね。」

さう言つて出て行くお銀の調子には、何時にない落著と、しをらしさとがあつた。

午後の三時頃に、お銀が能く往来してゐる友達と一緒に帰つて来た時、笹村は襖を閉めきつて自分の部屋に寝てゐた。

五十八

「……私もいつ逐出されるか知れないから、偶然したら彼處を出て了はうかとも思ふんですがね。」

お銀は芝の方に家を持つてゐるその友達を訪ねて、そんな話をしはじめた。

商売人あがりの其友達は、お銀が南谷助町に居た頃、親しく近所交際をしたことのある女であつたが、この頃遣出したその良人は可也派手な生活をしてゐた。女は寒い時にも、時好の流行におくれないやうな身装をしてゐた。

「須田さんでは、きつと此頃景気が好いんですよ。」

笹村はお銀の口から、是迄にもちよい〳〵其様なことを聞かされたが、然う言ふお銀には自身の矜持がないこともなかつた。

「私だつていつ出されるか知れやしないわ。」

須田の細君もお銀に同じやうなことを言つて笑つてゐたが、そんな不安は実際時々あつた。

お銀は自分の此頃の苦しいことを友達に話した。須田の細君も、笹村をおとなしいとばかりも言へないと思つた。

「でも男といふものは、皆そんなものですよ。」

細君は自分などから見ると、まだ真面目に家といふことを考へてゐないらしいお銀を慰めた。

「それに子供があるんだもの、どんな苦しいことがあつたつて、出ようなんて思ふのは間違ですよ。」細君はさうも言つて慰めた。

二人は日比谷公園などをぶら〳〵歩いて、それからお銀の家の方へやつて来た。どこか寂しい處のある此細君が来ると、笹村も仲間入をして、いつも一緒に花などを引いて遊ぶことに

なつてゐた。其日は顏を出さずにしまつた。

そして茶の室で二人で話したり笑つたりしてゐる間が、一層寂しい笹村の心をいら〳〵させた。

四五日分たつてから、笹村は不意に訪ねて來た深山と一緒に、何處といふ的もなしに町をぶらついてゐた。町にはどんよりした薄日がさして、そよりともしない空氣に、羅宇屋の汽笛などが懶げに聞え、人の顏が一様に黄ばんで見えた。

「どこへ行かうかな。」

「三崎町へ行つて一幕見でもしようか。」

二人はそんなことを呟きながら、富坂の傍にある原ツぱのなかへ出て來た。空には蜻蛉などが飛んで、足下の叢に蟲の聲が聞えた。二人は小高い丘のうへに上つて、靜かに空へ擴がつて行く砲兵工廠の煙突の煙などを暫く眺めてゐた。

笹村の苦しい頭には、何の拘束もなしに、をりをり愡うして二人一緒にそこら中を歩いた時の記憶が閃いてゐた。笹村は能く劇場や食物屋のやうな賑かな場所へ二人で入つて行つて、自分の寂しさを忘れようとした。今の苦しさも其時の寂しさと變りはなかつた。

[illegible]でお茶を[illegible]しながら、笹村は自分の始の性格の不備などを話出した。深山はそれを聞き、受流してゐた。

「多少の犠牲を拂ふことぐらゐは爲方がないとしておかなけアー……君の心持で細君を教養するより外ないだらう。[illegible]には、細君を同化して行く[illegible]がいくらもあるんだからね。」

笹村にそんな器用な眞似の出來ないことは、然う云ふ深山にも解つてゐた。

「あの當時も然う云ふことはF—なども言つてゐたさ。」深山は言足した。「君は迚もあの女を制御し得まいつてことをね……」

F—と云ふのは、その頃二人の間を往來してゐた文學志望の一青年であつた。笹村はその當時の傍觀者の一部の風評が、それで想像できるやうな氣がした。

一幕ばかり芝居の立見をして、家へ歸つた時には、笹村の頭は前よりも一層攪亂されたやうな狀態にあつた。

「おい〳〵。」

笹村は薄暗い部屋のなかへ入つて行くと、いきなり奥へ聲かけた。奥からは子供がひよこひよこと出て來たが、父親のむづかしげな顏色を氣取ると直に顏を顰めて出て行つた。

笹村はお銀を呼びつけて、また陰氣さうな[illegible]

[illegible]默を繼續した。

五十九

お銀はそんな時、傍へ行つて可いか惡いか解らなかつた。半日外へ出てゐた間に、深山と何處で何を話して來たか、それも不安であつた。

深山の口から、何か自分を苛めるやうな材料でも揚げて來たかのやうに、歸ると直殺氣立つたやうな調子で呼びつけられたのが厭でならなかつた。あの當時、變方妙な工合で仲たがひをした深山の腑に、自分がどう云ふ風に思はれてゐるかと云ふことは、お銀にも解つてゐた。自分と笹村との偶然の緣も、元はといへば深山の義理の伯父から繋がれたのだと云ふことも、何かにつけて考へ出さずには居られなかつた。

この夏はじめて、深山と笹村とが二年振でまた往來することになつた時、古い傷にでも觸られるやうに、お銀が餘り好い顏をしなかつたと云ふことは、笹村をして、其頃の事情について、更に新しい疑惑を喚起させる種であつた。

「けど僕と深山とは、十年來の關係たんだからね。」

笹村は自分の心持をその時お銀に話した。

「あの時、[illegible]に女一人[illegible]深山を[illegible]

うに思はれてゐるのも聞だし、不相變の深山の家の様子を見れば、何だか氣の毒のやうな氣もするし……。

　お銀や子供の事以來、色々の苦勞に漉されて來た笹村は、さうは口へ出さなかつたが、衷心から友を理解したやうな心持もしてゐた。

　深山はその頃、そつちこつち引越した果、ずつと奥まつた或人の別莊の地内にある貸家の一軒に住つてゐた。笹村は時々深い木立のなかにある其家の窓先に坐込んで、深山が剝いて出す柿などを食べながら、昔を憶出すやうな話に耽つた。庭先には山茶花などが咲いて、晴れた秋の空に鵙の啼聲が聞えた。深山はそこで人間離れしたやうな生活を續けてゐたが、心は始終世間の方へ向いてゐた。

　笹村は偶には子供を連出して行くこともあつた。深山の妹達にそやされながら、子供は縮緬の袖なしなどを著て、廣い庭を心持よささうに跳廻つてゐた。

　深山も然うして遊んでゐる子供には、深い興味を持つらしかつた。

「おい〳〵此方へ抱いておいで……危い。」などと、家のなかから妹達に聲かけた。

　この子供が、笹村に似てゐると云ふことは、深山には一つの奇蹟を見せられるやうであつた……と、笹村は初めて來たとき、玄關へ出て來た子供を見たをりの深山の顔から、そんな意味も讀めば讀めぬことはないやうな氣がしてゐた。

「深山は正一を、磯谷の子だと思つてでもゐたんだらう。」

　笹村はその時も、お銀に話したが、お銀にはその意味が、適切に通じないらしかつた。

　お銀が蒼い顔をして、笹村の部屋の外へ來て、心寂しさうに衿を搔合せながら坐つたのは、大分經つてからであつた。

「……貴方にもお氣の毒ですから、方法さへつけば、私だつて如何しても置いて頂かなければならないと云ふ譯でもないのでございます。だけどさアといつて、今が今出ると云ふことにもならないものですから……。」

　お銀はいつもの揶揄面と全然違つたやうな調子で、時々應答をするのであつたが、今の場合雙方にその方法のつけ方のないことは、よく解つてゐた。

「左に右僕はお前を解放しようと思ふ。今迄に然うならなければならなかつたのだ。」

「ですから、貴方も深山さんと能く御相談なすつたら可いでせう。」

　お銀はさうも言つた。

六十

　笹村の興奮した神經は、何處まで狂つて行くか解らなかつた。如何することも出來ないほど血の荒立つて行く自分を、別にまた靜かに見詰めてゐる「自分」が、頭の底にあつたが、それは唯見詰めて恐れ戰いてゐるばかりであつた。口からは毒々しい語が連に放たれ、弛みを見せまいとしてゐる女の凜とした冷語にも、體中の肉が跳びあがるほど慄へるのが、自分ながら恐ろしくも淺猿しくもあつた。そんな荒い血が、自分にも流れてゐるのが、不思議なくらゐであつた。

「とても貴方には敵ひません。」

　さう云つて淋しく笑ふ女も、傷を負つた獸のやうに蒼白い顔をして、笹村の前に慄へてゐた。骨張つた男の手に打たれた女の頭髮は、根ががつくり崩れてゐた。萎れたやうな目にも涙が流れてゐた。女はそれでも逃げようとはしなかつた。

「ほんとに妙な氣象だ。私が言はなくたつて、人がみな然う言つてゐますもの。」

女はぶく／＼する頭髮を、痛さうに振動かしながら、手で抑へてゐた。

笹村が、ふいに手を女の頭へあけるやうなことは、是迄にもちよい／＼あつた。寢てゐる女の櫛をそつと拔いて、二つに折つたことなどもあつた。女は打たれるよりか、物を壞されるのが惜しかつた。笹村の氣色が嶮しくなつて來たと見ると、簞笥や鏡臺などを警戒して、始終體でそれを防ぐやうにした。

笹村は、弱い心臟をどき／＼させながら、母親の手に支へられて、漸と下に坐つた。下駄や帽子を隱された笹村は、外へ飛出すことすら出來ずにゐた。

二人は、時の力で、笹村の神經の萎えて行くのを待つより外なかつた。

こゝ三日外をぶらついてゐるうちに、今まで見せつけられてゐた他のお銀が、また目に映りはじめて來た。

「私今度といふ今度こそは逐出されるかと思つた。」

お銀は仔羊のやうに柔順しくなつて來た笹村の顏色を見ると、直にその懷へ飛込んで來るやうな狎々しさを見せて來た。

「けれど、お前も隨分ひどいからな。」笹村はにや／＼してゐた。

「だつて、餘り無理を言ふから、私も業腹れを言つてやつた。」

お銀は然う言つて、夜更に卵の半熟などを拵へながら火鉢の緣に頰杖をついて、にやりと笑つた。

「貴方の言ふことは、それは私にだつて解らないことはないの。だけど、其時は何だか頭がカアつとなつて、爲方がないんですの。矢張教育がない故ですね。」

二人はランプを明るくして、いつまでも話に耽つた。お銀が初めて笹村のところへ來た時の事などが、また二人の頭に浮んで來た。正一をおろすとか、餘所へくれるとか言つて、毎日心を苦しめてゐたことが言出されると、傍に寢てゐる子供の無心な顏を眺めてゐるお銀の目には、涙が浮んだ。

「然う思つて見るせゐか、此子は何だか哀れッぽい子ですね。」

笹村も佗しさうにその顏を見入つた。親子四人恁うして繫がつてゐる緣が、不思議でもあり、悲しくもあつた。

「この子は夭折するか知れませんよ。私何だかそんな氣がする。」

「さうかも知れん。」笹村は呟いた。

「一體あの時、お前と云ふものが、己のところへ飛込んで來なければ、こんな事にはならなかつたんだ。」

「……厭なもんですね。」

「けど今からでも遲くない。お互に、恁うしてゐちや苦しくて爲樣がない。」

二人はぢつと向合つてばかり居られなくなつた。

六十一

笹村の姿が、また古い長火鉢の傍へ現れた。

お銀は笹村が朝飯をすましてから、新聞や卷莨やなどを當がつておいて、長いあひだの埃の溜つた書齋の方へ箒を入れた。そして亂次なく取亂らかされたものを整理したり、手紙を選分けたりした。燻ぶれかけた襖に沁込むやうな朝日が窓から射込んで、毳毛にかゝる埃が目に見えるほど、冬の空氣が澄んでゐた。

笹村は落着いて新聞すら見てゐられなかつた。投出されてあつた仕事も氣にかゝつて來たし、打釋けると直に相談相手にされる生活の事も、頭に絡つてゐた。仕事にかゝる前に、何處かで一日氣輕に遊びたいやうな氣もしてゐた。

な心持を、何處へ持當けて可いか解らなかつた。丁度長火鉢のところから見える後庭の端際にある櫻の枝頭が朝見る毎に白みかゝつて來る時分で、落著のない自分の書齋を出ると、氣紛な笹村の足は何處といふ的もなしに色々の方へ嚮いて行つた。それでもまた躑躅のあたりが氣にかゝつて、出たかと思ふと、直に歸つて來るやうな事が多かつた。

「偶然すると、私達は此家を立退かなければならないかも知れませんよ。」

お銀は坐るまもなく、今日此家の買主らしい隱居をつれて、家主の番頭が來た事を話出した。

「へえ、然うかね。」と言つて、莨をぶかしてゐる笹村の頭には、まだ世帶持らしい何物も揃つてゐないが、何や彼や複雜になつて來た家を移すと云ふことの臆劫さが思はれた。引越すには纏つた金を拵へなければならなかつた。

「けど立退くにしても、いづれ今日明日といふことでもないでせうからね。」

お銀は笹村に安易を與へるやうな調子で言つた。

見すぼらしい道具を[illegible]の方に[illegible]た、可也手廣な家へ引[illegible]、それから間もないことであつた。それまでに、お銀も一度其處について、その家を見に行つた。そして空店を番してゐる老人に逢つて、色々の話を取決めた。

「あんたまだ若い。お子供衆が二人もあるとは思へませんぜ。」

家主は毛絲の衿卷を取つて、夫婦に茶を侑めなどした。

笹村は何よりも、茶の室の方と、書齋や客間の方の隔りのあるのが氣に入つた。茶の室の方には、茶室めいた造の小室さへ附いてゐた。庭には枝振の好い梅や棕櫚などがあつた。小さい燈籠も据ゑてあつた。

そこへ落著いて、廣い座敷に寢た笹村は旅にゐるやうな心持がした。

笹村が前の家から持つて來た萩の根などを土に埋けてゐると、お銀は外へ長火鉢などを見に出て行つた。古い方は引越すとき屑屋の手に渡つてしまつた。

「いくら何でも、此樣なものは極がわるくて持出せやしませんわ。」

お銀は溝のおちたその古火鉢を[illegible]ながら、[illegible]作意はない笹村に不足を言つた。それでも[illegible]家では、[illegible]好い氣持はしなかつた。其[illegible]つも嵌合のないその抽斗の底には、如何なるか解らなかつた母子の身の上を幾度となく占つた古い御籤などが、未だに收つてあつた。

笹村は座敷の方に坐つてゐるかと思ふと、また落著もなく勝手の方へ來て、少し高くなつた四疊半の小室の方へやつて來て、丸窓の下に寢轉んだり、飛石の多い庭へ下立つて見たりした。

日によつて庭には如何かすると、砲兵工廠から來る煙が漲り込んで、石炭滓が凄い風に吹寄せられて緣の板敷に舞つてゐた。そんな日にはきつと空が曇つて、棕櫚や竹の葉がざわ／＼と騷がしかつた。笹村の頭も重苦しかつた。

「これぢや爲樣がない。」

お銀は時々障子を開けて見ながら呟いた。

「それに此家の厠の位置が、私何だか氣に喰ひませんよ。」

人殺しをした或兇徒の姿が、此處にゐたことがあると云ふ話が、近所の人の口から、お銀の耳へ直に入つた。

「さうさ、お前には默して居たけれど・・・。」

笹村は其を聞いて笑出した。

六十三

人を二人まで絞殺して、死體を床下に埋めて

おいたと云ふ其兇徒は犯罪の迹を晦ますために直に其家を引拂つた。その時移つて來たのが、此家であつた。笹村が移つて來る以前に居た或飜譯家も、其當時警官や裁判官に入つて來られて、床下の土も掘返されなどした。——そんな事實が、お銀をして急に此家を陰氣くさく思はしめた。折合の惡い繼母を斬りつけたと云ふ自分の前の亭主のことが、それに繋がつて始終お銀の頭に亡靈のやうにこびり著いてゐた。新聞に出てゐた兇徒の獰猛な面相も、目先を離れなかつた。

お銀は蒼い顏をして、善く夜更に床のうへに起きあがつてゐた。そしてランプの心を挑立てて夜明の來るのを待遠しがつてゐた。

「ねえ、早く引越しませうよ。私壽命が縮むやうですから。」

お銀は朝になると、暗い顏をして笹村に強請んだ。笹村もそれを拒むことができなかつた。

笹村も、いつか通りがかりに些と立寄つたことのある、お銀の先に緣づいてゐた家のことが思出された。その家は、笹村がお銀の口から聽いて、想像してゐたほど綺麗な家ではなかつた。東京に若い妾などを圍つて、界隈に幅を利かしてゐるといふ其處の年老つた主、東京に藝者をしてゐたことがあるとか云つた其後添の淺さん、仲人の口に欺されて行つたお銀が、そこに居た四ケ月のあひだの色々の葛藤、ステーションまで提灯を持つて迎に出てゐた多勢の町の顏利に取捲かれて、お銀が乘込んで行つたと云ふ婚禮の一晩の騷ぎ、そこへのこ〳〵或日お銀に會ひに行つた磯谷の姿を見て、お銀が泣いたと云ふ芝居じみた一場の插話、そんなやうな事が妙に笹村の好奇心をそゝつた。然うした客商賣をしてゐる家にゐた頃のお銀は、厭はしいやうな、美しいやうな色々の幻を、始終笹村の目に描かしめてゐた。

汽車から降りて、その邊の郊外を散歩してゐた笹村の足は、自然に、その家の附近へ向いて行つた。そして其樣なやうな家を、あれか此かと其方此方覗いて行いた。

若いをりの古いお銀の匂を、少しでも嗅出さうとしてゐる笹村は、鋭い目をして、それからそれへとお銀の昔ゐた家を捜してあるいた。笹村の前には、淺青、朽葉、紺、白、色々の講中の旗の吊された休み茶屋、綺麗に掃除をした山がかりの庭の見えすく門のある料理屋などが幾軒となくあつた。

そんな通から離れると、更に東京の場末にあるやうな、可也小綺麗な通が、どこまでも續いてゐた。駄荷馬や荷車が、白い埃の立つ其町を通つて行つた。人力車も時々見かけた。町の文明の程度を思はしめるやうな、何かなしきらきらした床屋があつたり、店の暗い反物屋があつたりした。冬の薄い日光を浴びて、白い藏が見えたり、羽目板の[illegible]い學校の建物が見えたりした。

笹村の疲れた足は、引返さう〳〵と思ひながら、いつか其盡頭まで行つてしまつた。そこからはまだ寒さに顫へてゐる雜木林や森影の處々に見える田圃面が、灰色に擴つてゐた。

その白けたやうな街道では、東京ものらしいインバネスの男や、淡色のコートを著た白足袋の女などに時々出遭つた。

笹村は其道をどこまでも辿つて行つた。

六十四

時々白い砂の捲上る道の傍には、人の姿を見てお叩頭をしてゐる物貰などが見えはじめて、お詣をする人が外の道からもちらほら寄つて來た。それが段々笹村を靜かな町の入口へ導いて行つた。

この町にも前に通つて來た町と同じやうな休

み茶屋や料理屋などがあつたが、區域も狹く人氣も稀薄であつた。不斷でも可也な參詣人を呼んでゐるその寺は、丁度東京の下町から老人や女の散歩がてら出かけて行くのに適當したやうな場所であつた。四十から五十代の女が、日和下駄を穿いて手に袋をさげて、幾人となくその門を潛つて行つた。中には相場師のやうな男や、意氣な姿の女なども目に立つた。

勝手違なところへ戸惑をして來たやうな氣がして、笹村が直にその境内から脱けて出た頃には、風が一層寒く、腹もすいてゐた。少時すると笹村は疲れた體を、ある料理屋の奧まつた部屋の一つに構へてゐた。

笹村は近頃の增築らしいその部屋の壁にかゝつた、正宗やサイダの廣告や床の間の掛物や、瓶に插した彼岸櫻などを眺めてゐたが、するうちに吩咐けたものが、女中の手に運ばれた。笹村の寒さに凍んだ體には、少しばかり飮んだ酒が直にまはつた。そして刺身や椀のなかを突つきちらしたが、其も咽喉へ通らなかつた。笹村は不味い卵燒で飯をすますと間もなく其處を出て、また寒い田圃なかの道へ出て來た。そして何となく物足りないやうな心持で、賑かな前の町へ歸つて來た。町ではもう立寄屋の喇叭の音などが聞えてゐた。

笹村はそのまゝ其處を離れて了ふのが呆氣なかつた。そして少しでもお銀から聞いてゐた話に當はまるやうな家が見つかつたら、そこへ飛込まうと考へた。

暫くうろついた果に、到頭笹村の入つて行つた家は、其處らにある並の料理店と大した違はなかつた。それでも建物が比較的落著の好いのと木や石の可也に入つてゐる庭に寂のあるのが、前に入つた家よりか多少居心が好かつた。東京風の女中の樣子も、そんなにぞべ〳〵しては居なかつた。

「こゝの家では何ができるんだね。」と、笹村は餉臺の上におかれた板を取りあげながら、身裝の小瀟洒した二十四五の女中に訊ねた。世帶くづしらしい其女中は、何處かに苦勞人のやうな處のある女であつた。

「どうせ斯樣なところですから、美しいものは出來ませんけれど……さあ何が好いんでせうね。」と、相手の柄を見て、自分で取計はうとするやうな風を見せた。

「何彼といつても種がありませんものですからね。それよりか、鷄が好いぢやありませんか。お寒いから……。」

笹村は何も食べたくはなかつた。唯この女の口から此家のことを探りたいばかりであつた。

「ねえ、然うなさい。」

頭から爪先まで少しも厭味のない其女は、瘦せた淋しい顏をして、何彼とこま〳〵した話をしながら、鍋に脂肪を布いたり、杯洗でコップを手際よく滌いだりした。

「こゝの子息さんは如何したい。まだ入牢つてゐるのかい。」

笹村は行けもせぬビールを飮みながら、輕い調子で其樣なことを訊出した。

「え、まだ……。」

女は驚きもしなかつた。その頃の家の馴染と思つてゐるらしかつた。

「その時分に來てゐた嫁さんは如何したんだね。」

笹村はお銀のことを言出した。

六十五

けれど笹村は、その女から餘り立入つた話を聽くことが出來なかつた。お銀の裏面を何處までも掘じくり立てようとしてゐるやうな自分の態度にも氣がさして來たし、女も以前のことは詳しく知らなかつた。笹村は時々深入りし

ようとしては、他の話に紛らした。

「え、何だかそんな話ですけれどもね。」と云ふ風に、女も應答をしてゐた。

「あすこに戸を締めてゐるのが、二度目に來た嫁さんですよ。」

女はそこから、はすかひに見える二階座敷の板戸を繰つてゐる、一人の若い女を見あげて笹村に教へた。笹村は簷端の上へ伸びあがるやうにして其を見たが、格別如何と云ふ女でもないらしかつた。

「あの娘は家の親類から連れて來たんですけれど、辛抱するか如何だか解りませんよ。」女中は然うも言つた。

笹村は女にコップを差しなどした。

「君は一二度亭主を持つたことがあるだらう。」とか「どんな亭主が可い？」とか、そんな笑談口をきゝながら、肉を突ついてゐた。

部屋にはいつか灯が點されてゐた。土地の人らしい客が一組上つて來たりした。

「さうですね、矢張親切な人が可ござんすね、さうかと云つて、餘り鼻の下の長いのも厭ですわね。好いた人なら少しくらゐ打つたり叩かれたりしたつて介意やしない。人前は然う云ふ風を見せても、二人限の時親切にしてくれるやうな男が私好きなの。」

「へえ、それぢや自己と同じだね。」笹村は笑つた。

女もヒステリックな笑方をした。

笹村は何時までも、此部屋に浸つてゐたいやうな氣がした。事によると、此處はお銀が婚禮の晩に初めて此家で寢た部屋ではないかと云ふやうな感じもした。寢室の外の方には殆ど夜あかし出入の男達が飲食をして騒いでゐたと云ふことや、初めてお銀の見た新夫が、其晩ぐでに醉つてゐたと云ふ事などが、妙に笹村の頭をふら〳〵させた。そしてビールが思ひのほかに飲めるのであつた。

「こゝの子息と云ふのを、君は知つてゐるかい。」

笹村はまた訊出した。

「いゝえ、私の來たのは、つい此頃なんですから。何だか大變に酒癖の惡い人ださうですよ。男振も好くはないと云ふ話ですよ。」

いつかお銀の話に、「顔はのつぺりした綺麗な男なんですがね、何だかいけ好かない奴なんです。」と言つたのには、多少色氣がつけてあるやうに思へて來た。

そこを出た時、笹村は可也醉つてゐるのに氣がついた。出るとき、ち[illegible]〳〵した笹村の目に映つたのは、一度お銀の良人であつたらしい[illegible]な[illegible]んであつた。

汽車の窓に肱をかけて、暗い外を眺めてゐる笹村の頭腦には、そんな家を訪ねたことを悔ゆる念も動いてゐた。お銀に向つて、何時も[illegible]になつてゐた自分を笑ひたくもあつた。

汽車は可恐しい響を立てて走つた。

「お前の古巣を見て來た。」

笹村は家へ歸つてお銀の顔を見ると、さう言つてやりたいやうな氣もしたが、矢張何事もないやうな風をするより外なかつた。いつかは其が勃發するだらう、と其が氣遣はしくもあつた。

六十六

お銀はその時、茶の室で、針仕事をしてゐる母親と一緒に、何の事もなしに子供に乳を呑ませながら、良人を待つてゐた。

笹村は、直に書齋の方へ引込んで行つた。

一皮づつ剝して行くやうに妻のお銀を理解することは、笹村に取つて一種の慘酷な興味であると同時に、苦痛でもあつた。深山に情人と誤解された弟と一緒に、初めて笹村の家へ來た

の神經に觸れた。
　昨夜晩方に、近頃親子三人で家を持つてゐる父親が、田舍から出て來たお銀の從兄と連立つてやつて來た。その時午前に連れられて行つた正一も一緒に歸つて來たが、いつにない電車に疲れて、伯父に抱かれて眠つてゐた。その前から惡くなつてゐた正一の腸胃には、ビールと一緒に客の前に出てゐた葡萄のために烈しく害はれた。蒸暑いその一晩が明けるのも待切れずに、母親と一つ蚊帳に寢てゐた子供は外へ這出して、めそ〳〵した聲で母親を呼んでゐた。
「坊や厭になつちやつた。」
　子供の體の常でないことが、朝になつてから漸くお銀にも解つて來た。
「手がないし、弱つて了ふね。」
　お銀は溜息を吐きながら、庭の涼しい木蔭を歩いたり、部屋へあがつて瓶具を當がつたりしてゐたが、子供は悦ばなかつた。
「大變な熱ですよ。お醫者さまへ行つて來ませうね。」
　お銀は子供に話しかけながら、乳呑兒の方を女中に託けて出て行つた。
　一時に四十二度まで熱の上つた子供は、火のやうな體を小掻卷に裹まれながら、集つて來た人々の膝のうへで、半昏睡狀態に陷ちてゐた。
　そして斷間なく黑い青い便が、便器で取られた。其度にヒイ〳〵言つて泣くのが、笹村の耳に響いた。
「今度といふ今度は、少し失敗りましたねつて、然う言ふんですよ。若し助けようと思ふなら、入院させるより外ないんですつて。家では如何しても手當が行屆かないさうですから。」
　お銀は醫者から歸つた時、笹村に話した。
「孰にしても、熱を少し冷してからでないと不可いんださうですがね。高橋さんが後で來て、も一度見て下さるさうです、けれど……その時病院の方も、紹介してあげますからと云ふお話なんです。」
　午後になつて、暑熱が加はつて來ると、子供は一層弱つて來た。そして烈しい息遣をしながら、をり〳〵目を開いて渴を訴へた。目には人の顏を見判ける力もなかつた。
　いら〳〵する笹村の頭には、入院と云ふことが大きな仕事に打つかつたやうに考へられてゐたが、夏以來涸きさつてゐる世帶のなかから差當り相當の支度もしなければならぬことが、お銀に取つても一苦勞であつた。
　醫者が樣子を見に來た時には、熱が大分下つてゐた。子供は頻に「氷……氷……。」などと甲立つた弱々しい聲で呼んでゐた。
「だつて子供にもメリンスの蒲團くらゐは新しく拵へなければ……さう貴方のやうに今と云ふ譯にも行きませんわ。」
　お銀はいよ〳〵入院と決つた時に、急立つ笹村に言出した。長いあひだ叔母を看護したことのあるお銀は、病院の派手な世界であることを知つてゐた。
「何もかもちぐはぐの物ばかりで、さアと云ふと、まごつくんですもの。」
　笹村は長くそこに居られなかつた。そして紛擾する病室を出ると、いきなり帽子を取つて外へ出て行つた。

六十八

　その晩九時頃に、子供が病院に擔込まれる迄には、笹村も一度家へ歸つて病院へ交渉に行つたりなどした。
「九時少し過までなら可いさうだから、左に右く今夜のうちに擔込まう。」
　お銀はその時、母親と一緒に押入から子供の著替のやうなものを出したり、身の周の入用なものを取揃へたりしてゐた。茶の室の神棚や佛

壇には、母親のつけた燈明が赤々と照つて、そこに色々の人が集つてゐた。

「どうか戻されるやうな事がなければ可いがね。」

「多分大丈夫だらう。まだそんなに手遅れてゐる譯でもないんだから。」と言ひながら、笹村は一足先へ出た。

「よくなつて速く歸つてお出でよ。」

老人にさう言はれると、子供は腕車のうへで毛布に包まつてゐながら、

「おばアちやんお宅に待ちしておいで……。」と言つて出て行つた。

そろ／＼と挽かれる腕車が、待遠しがつて病院の外まで出て見てゐる笹村の目に映つた。

「坊や、解るかい。ほーらお父さん……。」などと、お銀は腕車のうへで、子供に話しかけながらやつて來た。町はもう大分ふけて、風がしつとりして居た。

病室と入口の違つた診察室は、大きな黒門の耳門を潜つてから、砂利を敷詰めた門内をずつと奥まつた處にあつた。中へ入つたのは笹村とお銀とだけであつた。

病室が決められる間、お銀は子供を抱いで薄暗い廊下に立つてゐた。子供は火がつくやうに又便通を訴へた。勝手のわからない人達は、其處らをまご／＼した。

病室は往來へ向いた可也手廣な疊敷であつた。薄暗い電燈の下に、白いベッドが侘しげに敷かれてあつた。

「坊や厭。」子供はそのベッドに寢かされるのを心細がつた。

「お家へ歸らう。」

「病氣がよくなつたらね。いゝ兒だから此處へ寢んねするんですよ。お醫師さまに叱られますよ。」

「いやだ……歸らう……。」子供は頑强に言張つた。そして癇の募つたやうな聲を出して泣叫んだ。終には腰の立たない體をベッドから跳出して、そこらをのた打ちまはつた。笹村はびしやりと其頰を打つたが、子供は一層怯怖れて悶踠いた。

女中は女の子を負ひながら、傍にうろ／＼してゐた。

「どうも何だか駄目のやうですね。」

お銀は疊の上へ轉がりだして、悶踠きつかれて忙しい息遣をしながら眠つてゐる子供の顏を眺めて、落膽したやうに言出した。

「これぢや助かる處も助からんかも知れませんよ。其位ならいつそ家で介抱してやつた方が可うござんすよ。可哀さうですもの。」

「さうだね。」笹村も溜息をついた。

後で解つて來たとほりに、此病院が溫かく家庭的に出來てゐるのが、その晩の醫員や女事務員のお世辭ッ氣のない態度では、反つてその反對に受取られた。それも何だか二人には厭であつた。

「とにかく院長が診るまで待たう。」

院長はその日は、千葉の分院へ出張の日であつた。

寢たまゝ便を取らせたり、痛い水銀灌腸を左に右聽きわけて我慢するほどに、子供が病室に馴されるまでには、それから大分日數がかゝつた。

「病勢はもつと／＼上る。その峠を巧く越せれば、先づ大して心配はないから。」

入院の翌日に、初めて診察に來た老院長の態度は頼もしいほど物馴れたものであつた。

六十九

病室の片隅に、小さい薄縁を敷いてある火鉢の傍で、こゝの賄所から來る膳や、毎日々々家から運んで來る重詰や、時々は近所の肴屋から

お銀が見繕つて來たものなどで、一人の小さい患者の目に觸れないやうにして飯を食ふ日が、三十幾日と續いた。患者が人の物を食つてゐるのを見て、柵のなかの猿のやうに、肉の落ちた頬をもが〱させて、泣面をかくほどに食慾が恢復して來たのは、院長から漸と二粒三粒米があつても差閊へないお粥や、ウェーファ、卵の黄味の半熟、水飴などを與へても可いと云ふ許が、順に一日か二日おいては出る頃であつたが、其以前でも飲食物其他何によらず、患者は可恐しく意地が爛つてゐた。

「坊や厭になつた。」

患者は院長の所謂苦しい峠を越して、熱がやゝ冷めかけてからは、ベッドの周に竝べられたり、絲で吊されたりしてある玩具にも疲れて來ると、時々さも飽々したやうにベッドに腰かけて、乾いた脣の皮を噛みながら、額をしかめて氣隨さうに呟いた。

「あゝ然うとも〱。」とお銀は傍から慰めた。

「もう少しの辛抱ですよ。辛抱してゐさへすれば、今に歩行もできるし、坊やの好きな西洋料理も食べられるし、衆で淺草へでも何處へでも行きませうね。」

便が少し好くなるかと思ふと、また氣になる粘液が出たり、折角さがつた熱が上つたりして、傍で思ふほど捗々しく行かなかつた。笹村は外から歸つて來でもすると、きつと體溫表を取りあけて見たり、驗溫器を患者の腋に插入したりして、失望したり、憔れつたがつたりしたが、外へ出ない時も、お銀にばかり委せておけなかつた。

微溫湯の灌腸が、再び水銀灌腸に後戻りでもすると、望みをもつて來た夫婦の心が、また急に曇つた。笹村は灌腸をやつたり、體溫や脈搏などを取りに來る看護婦に、時々色々なむづかしいことを訊いた。

「餘り訊くのはおよしなさいましよ。煩さがりますよ。」

お銀は後で笹村に言つた。

「もう貴方こゝまで漕ぎつけたんですもの、さう焦燥しないでゐた方が可ござんすよ。」

今夜がもう絶頂だといつて、院長が夜更に特別に診察にまはつて、心臟の手當らしい頓服をくれた前後の二三日は、笹村は何事をも打忘れて昏睡に陷つてゐる子供の枕頭に附ききつてゐたが、時々弛んだ心が、望みなささうに見える子供から、ふと離れるらしいお銀の疲れた氣無精な様子が目についた。それでなくとも笹村は、何かすると氣がいら〱していきなりお銀の頭へ手をあげるやうなことがあつたが、病兒を控へてゐる二人の心は、一緒に旅をして狹い船へでも乘つた時のやうに和ぎあつてゐた。小さい生命を取留めようとしてゐる優しい努力、それを外にしては殆ど何の背景もなしに、二人は毎日顏を向合つてゐた。

「坊が癒つたら溫泉へでも行くかね。」

笹村は明方子供の傍に、突伏してゐる妻の窶れた姿を見出すと言ひかけた。

「お前も疲れたらう。」

「いゝえ。」お銀は倦れた目を開けると、咎められでもしたやうに狼狽てて顏をあげて嫣然した。

窓の外が白々と明けかゝつて、すや〱した風が蚊帳の中まで滲みて來た。笹村は意地くれた愛憎の情の狂ひやすい自分の日常生活から、大分遠ざかつてゐるやうな氣がした。

七十

入院當時には滿員であつた病室が、退院する頃にはぽつ〱空ができて來た。まだ九月の半だといふのに強い雨が一度降つてからは、急に陽氣が涼しくなつて、夜分などは白いベッド

の脈膊りが冷いほどであつた。お銀は家からセルなどを取寄せたが、もう其様な頃かと思ふと、何だか心細かつた。
空が毎日曇つて、病院のなかはじめ〳〵してゐた。如何かすると森と静まることのある古い建物のなかに、バタンと戸を閉める音などが遠くの方でするかと思ふと、何處からか子供の泣聲が聞えたり、女の笑聲が洩れたりした。入院患者のなかには、子供を女中と看護婦に委しきりで、自分達は時々著飾つて一日外で遊んで來る若い下町風の夫婦があつたり、沼津へ避暑に來てゐて、それなり發病した子供を連れて來てゐる大阪辯の女がゐたりした。死際になつた子供に白いものを著せて抱いて出て行く若い細君、全治した子を膝にのせて、幾臺かの腕車を聯ねて威勢よく退院する人、それらは絶えず笹村の病室の窓から透し視られるのであつたが、その度に笹村はわが子の病氣を悲觀したり、日數のかゝるのを焦れつたがつたりした。
お銀は時々夜具を換へたり、菓子を運搬したりしてゐるうちに、懇意な看護婦も、一人二人あつた。
「あの人の家は、淺草の區役所の裏の方ださうですよ。退院したら、きつと遊びに來てくれなんてね、莫大小の工場なんかもつて可也大きくやつてゐるらしいんですよ。あんなお世辭氣のない人ですけれど、何處となく好いたやうな氣象の人ですの。私の顏さへみると色々なことを話しかけて、先方でも私のことを然う言ふんですよ。」
お銀はその病室から、その頃出たこの針金を縮ませて足を工夫した蜘蛛や蛸の玩具を持つて來て、それを床のうへに懸けわたされた絲に繫いだ。
退屈がつてゐる正一は、暫くのまもお銀を傍から放さなかつた。お銀は子供の寢息を窺つて、漸と手洗をつかひに出たり廁へ行つたりした。
「ちつと二階へでもあがつて見ませうね。さうしたら少しは氣がせい〳〵して好いかも知れない。二階からは坊やの大好きな電車が見えてよ。」
お銀はさう言つて、正一を負ひ出した。そして次の女の子を負つてゐる女中と一緒に、二階の廊下へ出て窓から外を眺めさせた。子供は少し見てゐると、もう直に厭いて來た。
病室に飽きて來た笹村は、時々家へ來て、明歸つたやうな座敷の眞中に、疲れた體を横へた。庭には松や石榴の葉が濃く繁つて、明るい小雨がしと〳〵と灑いでゐた。長いあひだ病室に閉籠つて、如何かするとヒステリーになりがちな女の子のことに氣を配つたり、自身に夜晝體を動かして來たことが振顧られた。笹村は、始終苦しい夢に魘されてゐるやうであつた。
綺麗に取片著けられた机のうへに、二三通來てゐる手紙のなかには、甥が報じてやつた未だ見ぬ孫の病氣を氣遣つて、長々と看護の心得など書いてよこした老母の手紙などがあつた、手紙の奧には老母の信心する日吉さまとかの御洗米が、一袋捲込まれてあつた。老母は夜の白々あけにそこへ毎日々々孫の平癒を祈りに行つた。
それを讀んでゐる笹村の目には、弱い子を持つた母親の苦勞の多かつた自分の幼いをりの事などが、長く展がつて浮んだ。同じ道を歩む子供の生涯も思遣られた。さうして何時かは行違に死訣れて行かなければならぬ、親とか子とか孫とかの肉親の愛著の強い力を考へずには居られなかつた。

七十一

刺身だとか、豆腐の煮付だとかいふものを食べさせる時には、衰弱しきつてゐた子供も少し

づつ力づいて來た。お銀が勝手の方でといで來た米を入れた行平を火鉢にかけて、粥を拵へてゐると、子供は柔かい座蒲團のうへに胡坐をかいて、健かな飯を感ずる鼻に旨い湯氣を嗅ぎながら待つてゐた。惡い盛りに、灌腸をする看護婦の手を押除けた頃の執拗と片意地とは、恢復期へ向いてからは、もう見られなかつた。

さも美さうに柔かい粥を食べる子供の口元を、夫婦は何事も忘れて傍から打守つてゐた。

「眞實によかつたねえ、こんな物が食べられるやうになつて。」

お銀は口の側などを拭いてやりながら、心から嬉しさうに言つた。

「そんなにやつて多くはないか。」

中途葛湯で一度失敗つたことのあるのに懲りてゐる笹村は、醫師の言ふ通りにばかりもしてゐられなかつた。

「大丈夫ですよ此くらゐは。餘り控目にばかりしてゐるのも善し惡しですよ。」

お銀は柔かさうな處を、また蓮華で掬つてやつた。

「どれ立つてごらん。」

笹村は箸をおいて、さも滿足したやうに默つてゐる子供に言ひかけた。

子供は窓際に手をかけて漸と起ちあがつたが、長く支へてゐられなかつた。

「まだ駄目だな。」

笹村は淋しさうに笑つた。

その窓際では、次の子が漸と掴り立をする頃であつた。長い病院生活のあひだ、碌々母親の乳房も銜ませられたことなしに、餘所から手傳に來てくれてゐる一人の女と女中の背にばかり縛られてゐた。看護疲のしたお銀の乳が細つてからは、その不足を牛乳で補つて來たが、それでも子供は可也肥つてゐた。女中はそれを負つて、廊下をぶら〳〵したり、院長の住居の方の庭へ出て遊んだりした。院長の夫人からは、時々菓子を貰つて來たりした。つい近所にあるニコライの會堂も、女中の遊び場所の一つになつてゐた。笹村は日曜の朝ごとに鳴る其處の鐘の音を、もう四度も聞いた。お銀も正一を負ひだして、一度そこへ見に行つた。

「何て綺麗なお寺なんでせう。あすこへ入つてゐると自然に頭が靜まるやうですよ。だけど坊やは厭なんですつて。」

「僕も子供の時分は寺が厭だつた。」

笹村は七八つの時分に、母親につれられて、まだ夜のあけぬうちから本願寺の別院の大きな門の扉の外に集つた群集のなかに交つて、寒い空の星影に戰いてゐたことが、今でも頭に殘つてゐた。「あの門跡さまのお說教を聞くものは、是迄の罪が消えて、地獄へ行くものも極樂へ行けると云ふやうな意味の母親の言を耳にしながら、暗い廣い殿堂のなかに坐つてゐた子供は、そこを罪を見現される地獄のやうに畏れてゐた。その時の心理ほど分明頭に殘つてゐるものはなかつた。

腹のふくれた小さい患者は、今までにない健かな呼吸遣をして、直に眠つてしまつた。

「さあ、私坊やの寢てゐるまに、ちよつとお湯へ行きたいんですがね。」

お銀はこゝへ來てから時を見計つては來てくれるお冬に、時々髮だけは結つてもらつてゐたが、一度もお湯に入る隙を見出すことができなかつた。

そこらを取片著けてから、お銀が出て行つたあとの病室に、笹村は孑然と壁にもたれて子供の寢顏を番してゐた。そして疲れた頭が渾濁して來ると、そこに色々始末をしなければならぬ退院後の仕事が思浮んで來た。「退院するとき餘り變な身裝もして出られませんしね。」と言つてお銀の氣にしてゐたことも考へられた。

お銀はつやつやと紅味をもつた頬を撫でながら、直に歸つて來た。

七十二

　退院後の家が、子供に珍らしかつたと同じに、古い庭に眼れたお銀や笹村の目にも新しく映つた。ふつくらした軟かい着物を著せられて、茶の室の眞中に据ゑられた子供は、外の世界の強い刺戟に痛みを覺えるやうな力のない目を庭へ見据ゑてゐた。顔もまだ曇つてゐた。

　もう退院してもよからうかと云つて尋ねた笹村に、「さう、もう少し。」と云つて、院長は子供の腹工合を撫でて見ながら、

「豫定より少し長くなつたが、今度はもう大丈夫——隨分苦しかつたな。」と笑ひながら引きあげた。

　それから二三日も經つた。後はしばらく通ふことにして兎に角夫婦は病院を引拂ふことにした。その日は朝から、二三日降續いてゐた天氣があがりかけて、細い雨が降つてゐるかと思ふと、濕つたまつた窓に黄色い日がさして來たりした。

「今日退院しよう。」

　笹村は晝飯を喰つてから間もなく言出した。

　もう見舞に來る人も少くなつた病室に、子供は圍はれたウエファを手に持つたまゝ、倦果てたやうな顔をして、ベッドに腰をかけてゐた。家から運んで來て庭向の窓の枠に載せておいた草花も、暫く忘れられて水に渇いて萎れてゐた。

「それぢや私は些つと家まで行つて來なくちや……。」お銀はその不意なのに驚いたやうであつた。

「家へ連れて歸つたら、却つてずんずん快くなるかも知れませんね。——さあ、それぢや私行つて來ませう。」

　さう言つてお銀は髪など撫でつけながら、病氣が恢復期へ向いた頃に笹村が買物の序に、淡路町の方で求めて來た下駄をおろして、急いで出て行つた。

　その間、笹村は子供を抱出して、廊下をぶらぶらしてゐた。重しい病人が運び込まれたり、死骸が運び出されたりした、一頃に比べると、その頃の病院の景氣は何となく、だらけたものであつた。死目になつて張詰めてゐた笹村の心にも、弛みと安易との淡い哀愁が漂つてゐた。廊下の突當りに、笹村の來る前から寢[illegible]つた十一二の女の子を看護してゐる婆さんだけが、今では笹村夫婦の一番古い馴染であつた。その病人は里流れになつた子であつた。偶にパナマの帽子を冠つた實の父親が訪ねて來ても子供は何の親しみも感じなかつた。

「可哀さうなもんですね。」

　お銀は時々その部屋を見て來て、目を潤ませながら笹村に話した。

「家の坊やも、貴方の言ふとほりに人にくれてゐたら、矢張あんなもんですよ。」お銀はさうも言つてゐた。

「母さんは……。」と云つて、時々待遠しさうに顔を紅らしてゐる正一を、笹村は上草履のまゝ外へ抱出した。

　町には薄暗い雲の影がさしてゐた。笹村はそこから電車通へ出て、橋袂の停車場を見せて歩いた。然うしてゐるうちに、お銀が風呂敷包などを抱へて、腕車で驅けつけて來た。

　家では幽暗に燈明が上げられたりした。神棚に飾つてある種々のお札のなかには、[illegible]お冬が、わざと成田まで行つて受けて來てくれたものなどもあつた。

　直に催して來た子供の便には、また膽液が交つてゐた。

「矢張つれて來て惡かつたでせうかね。」

お銀はお丸を跨んでゐる笹村に呟いた。

一時に疲れの出たお銀が、深い眠に沈んでゐる傍で、笹村は時々夜具をはねのける子供を番してゐた。蚊帳の外には、まだ蚊の唸聲がしてゐた。

七十三

「何は措いても、お義理だけは早くしておきたいと思ひますがね……。」と言ふお銀に促されて、床揚の配物をすると一緒に、お冬へ返禮に芝居をおごつたり、心配してくれた人達を家へ呼んだりする頃には、子供はまだ退院當時の状態を續けてゐたが、秋になつてからは肥立も速かであつた。そして其冬は、年が明けてから、ある日出先のお銀の弟の家で、急にヂフテリアに罹つて、危いところを注射で取留めたほかは何事もなかつた。

「此子は育てるのに骨が折れますよ。十一になるまで、摩利支天さまのお弟子にしておくと可いんださうですよ。」

お銀はお冬の知合の或る何ひやの爺さんから、そんな事を聞いて來たりした。

しかし放抛つておいても育つて行くやうに見えた、次の女の子が、いつもころ／＼獨で遊んでばかりゐない事が、少しづつ解つて來た。この子供には、不斷は何のこともない大人の弄物であつたが、如何かして意地をやかせると、襖にへばりついてゐて、一時間の餘も片意地らしい聲を立てて、心から泣きつづけることがあつた。

「いやな子だな。豚の嘴のやうな鼻をして……此奴は意地が惡くなるよ。」

笹村は小さい自我の發芽に觸るやうな氣がした。

「巳年だから、私に似て執念ぶかいかも知れませんね。」

さう言つて子供を抱締めてゐるお銀は、不思議に此子の顔の見直せるやうになつて來るのに、一層心を惹かれてゐた。

「貴方は坊だけが可愛いやうですね。私は孰が如何と云ふことはありませんよ。」

時々そんなことを口にする母親の情が段々大きい方の子供に冷めて行くのが笹村に能く解つた。

「さうさ、體質から氣質まで、正一のことは己には一番よく解る。」

そして其交感の鋭いのが、笹村に取つて脱れがたい苦痛の一つであつた。

その冬笹村のふと罹つた病氣は、長い氣管支に亙つた。熱がとれてからも、また咽喉にこびりついてゐるやうな咳が取れなかつた。時々惡寒もした。笹村は長いあひだ四疊半に閉籠つて寢てゐた。そして障子の隙間から來る風すら薄い皮膚に鋭く當つた。

「一寸頭こぢらして了つた。」笹村は窶れた手を擦めながら、焦れつたさうに呟いた。

「こんな物が來たんですよ。」

お銀はある日の晩方に、鏡臺の抽斗から一枚の葉書を出して、笹村に見せた。その葉書は磯谷から、いつかの大工の女房になつてゐるお針の女へ當てたものであつたが、書中にお銀の今の居所が尋ねてあつた。その意味では、お銀が到頭笹村のところに落著いたことを知らないらしかつた。

笹村は拙いその手蹟や、署名のある一枚の葉書に、血のもつ搾いやうな可懷しさを覺えた。

「へえ。おやまたお前に逢はうとでも思つてゐるんだね。」

「そんなことかも知れませんよ。あの男は、一旦別れた女を、一二年經つと又思出して來るのが癖なんです。今は何かあかないか解りませんけれど、一人決つた女と關係してゐると、

其んな女のことが、矢張氣になると見えるんです
ね。そして先方の忘れた時分に、ふつと逢ひに
行つて謝罪つたり何かするんです。妙な男です
よ。」
「面白いね。」
「やつぱり氣が弱いんでせうね。」
「今はどこに居るね。」
「どこに居るんですか。無論學校の方も失敗つ
て了つたんですから。」
「どこかで一度くらゐ逢つてゐるだらう。」
「逢へば逢つたと然う言ひますよ。」

七十四

笹村はどんな片端でもいゝ、むかし磯谷から
お銀に當てゝ寄越した手紙があつたらばと、そ
れを搜して見たこともあつた。讀んで胸をどき
つかすやうな或物を、その中から發見するのが、
何よりも興味がありさうに思へた。笹村は獨
ある時に、能く香水や白粉の匂のする鏡臺、
箪笥、針箱、袋の底などを搜してみるのが好き
であつた。それは子供のをり田舍の家の暗い押
入にある母親の黴くさい手箪笥や文庫のなかを
搜すと丁度同じやうな心持であつた。けれど
[illegible]と云つては、お銀の叔父が[illegible]りのときに、
友達に貸した金の證書の束、その時分の小遣
帳、幾冊かの帳簿、其他は笹村の名の記され
たものばかりであつた。證書の束のなかには
可也な金額の記されたものもあつた。お銀の覺
えてゐる人も、その中に一人二人はあるらしか
つた。
「尋ねて見ようか知ら。」
お銀が時々そんなことを言つてゐるのを、笹
村も聽いた。そして、其度に、「誰しも貸して取
れないのがあれば、一方には借りて返さないの
もあるのさ。」と笑つてゐた。
「それよりか磯谷の手紙くらゐ殘つてゐさうな
ものだね。それをお見せ。」笹村はさう云つて、
尋ねた。
「小石川の家にゐる時分、みんな燒いてしまひ
ましたわ。」
「へえ、惜しいことをしたねえ。」笹村は殘念が
つた。
また或時、學校出の友達の夫人から、ある女
學生が相愛してゐた男をふとしたことから母
親の目に觸れてから、一人娘であつた我子のた
めに父親はその男を養子に取決めることになつ
た、けれども男の心は、そんな事があつてから、
直に他の女に移つて行つた――そんな話を聞
いた笹村は、お銀にもそれを語つた。
「手紙を背負揚に入れておくなんて、そんなこ
とがあるのか。」
「え、さうでせう。私も然うでした。」お銀はそ
の時の娘らしい心持を追想するやうな目をし
て、呟くやうに言つた。その手紙を燒いた頃の
お銀は、まだ赤いものなどを體に着けてゐた。
「なぜ其を己に見せなかつた。」笹村はその時
もそれを可惜しがつた。
笹村の胸に、そんな事のないのか、お銀にと
つて心淋しかつたが、それでも其頃温泉場にゐ
た或女から來た手紙で、大阪で少い時分の笹村
が、淺いプラトニツクラブに陷ちてゐる女の手
紙は、そんな事を誇張したがるお銀のためには、
得難い材料であつた。
二人寄席に行つてゐるとき、向側の二階に友
達と一緒に來てゐる磯谷の顏を、お銀は直に見
つけた。そして前に坐つてゐる人の陰に體を竦
めながら、時々[illegible]越しに其方を見てゐた。
「あれ磯谷の友達だつた人ですよ。」
お銀はさう言つて笹村に注したが、その傍に
磯谷のゐたことは、笹村も歸つてから初めて聞
かされた。
「莫迦にしてゐるな。向は己を氣づいたらう。」

已こそ好い面の皮だ。」
　笹村はなぜその當時の氣を、一々記憶に留め
なかつたかを口惜しがつた。
「氣がつくもんですか。私のゐることすら知ら
なかつたでせう。それに私も、あの時分から見
るとずつと變つてゐますもの。口でも利けば知
らず途中でちよつと逢つたくらゐぢや、迚も解
りッこはありませんよ。」
「だけど、お前の目が始終先方を捜してゐると
同じに、先方の目だつてお前を見遁すもんか。」
「そんな事は眞實にありませんよ。」

七十五

　けれど笹村の口にする磯谷と云ふ名前が、妻
に對する輕侮と冷笑よりほか、何の意味をも響
をも與へない時の來たのは、そんなに長い將來
のことでもなかつた。お銀がそれを言出されて
も、何の痛みをも感じないと同じに、笹村の方
でも男が眞の意味に於て自分のマッチでないこ
とや、女が自分に價しないことの段々分明し
て來るのが、心淋しかつた。
「電車通のところで、阿母さんが餘所の人と話
してゐたよ。」
　ある時貴の療治に行くお銀に連れられて行つ
た正一は、ふと笹村の傍へ來てさう云つて言ひ
告げた。お銀は産をする度に、齒を毀されてゐ
た。目も時々疼むやうなことがあつた。二度目
の産をしてからは、一層齒が衰へてゐた。
「大變な齒ですね。よく今まで我慢してゐまし
たね。」と醫師に言はれて極がわるいくらゐであ
つた。
　お銀は痛みでもすると、その時々に弄つても
らつたりしてゐたが、續いて通ふこともできず
に居た。
「今の若さで、さう齒が惡くなると云ふのは如
何いふものだらう。」
　先の家にゐるとき、雨のなかを井戸へ水を汲
みに行つて、坂で子供を負つたまゝ轉んで、怪
我で前齒を二本かいたほかは、齒を患んだこと
のない老人に、然う言つて笑はれた。
「田舎の人と違ひますよ。」
　物を食べる頃になると、子供も同じやうに齲
齒に惱まされた。笹村はそこにも、自分の體を
年々侵してゐるらしい惡い血を見た。
「今度こそ、少し詰めて通つても可ござんす
か。」お銀はさう言つて、正一の手をひきなが
ら醫師へ通つた。四月頃の厭な陽氣で、お銀は
どうかすると、齒と一緒に堪へがたい頭の痛み
を訴へた。そして[illegible]顏を、また[illegible]いた
りなどして、[illegible]て冷してゐた。
「どうしたんでせう。頭はもう[illegible]つて了ふ
んでせうか。何ともいへない[illegible]な痛み方なんで
すがね。それに、[illegible]も何だか[illegible]がゝつたやう
になつて……」
　まだ／＼先へ行けば好いこともある、さう思
ひ思ひ苦しい世帶のなかを、意地を張つて來
たお銀も、體の衰へと共にもう三十に間もな
いことが、時々考へられた。
「己もいつまで働けるもんか。そのうちには
葬られる。」
　時々さう言つて淋しく笑つてゐる笹村の顏を
見ると、何だか情ないやうな氣のすることも
度々あつた。
「お前も先の知れた己などの家にゐて苦勞して
るよりか、今のうちに如何かしたら可いだらう。
工面の好い商人か、請負師とでも一緒になつて
姐とか何とか言はれて、陽氣に日を送つてゐた
方が、どのくらゐ氣が利いてるか知れやしない。
箱屋をしたつて、立派に色男の一人ぐらゐ養
つて行けるぜ。その代り、子供は己が、お前の
後日の力になるやうに仕立てておいてやる。そ
してお前の入用なとき何時でも渡してやる。子

供がお前の言ふことを聽くか、如何か、それは此にも解らんがね。」

笹村のさう云ふ度に、お銀は聽かない振をしてゐた。

子供が電車通で逢つたと云ふ男のことを、笹村は些と考へがつかなかつた。

「どんな人……。」と云つて、知つてゐる人の名を擧げてみたが、矢張解らなかつた。

「其人がね、お父さんのことを云つてゐたよ。」

子供は俯きながら言つた。

その男の磯谷であつたことが、直お銀の話で知れた。

「まるで木綿座のやうでしたよ。私ほんたうに惡かつた。是から如何と思つて何かのをりには力になるからなんて、然う言つて……。」と、お銀はその時の樣子を笑ひながら話した。

七十六

夏の初めに、何や彼やこだはりの多い家から逃れ、ある靜かな田舍の町の下宿屋の一室に閉籠つた時の笹村の心持は、以前友達から頼まれた仕事を持つて、そこへ來た時とは全然違つてゐた。

その町は、日光へも近く、鹽原へも少か五時間弱で行けるやうな場所であつたが、町それ自身には、旅客の足を留める何物もなかつた。家を飛出した時の笹村は、そこの退屈さを考へてゐる遑もないほど混亂しきつてゐた。それに適當な場所へ行くやうな用意も素よりなかつた。笹村は何かなし家と人から逃れて、そんなに東京からの旅客に慣らされてゐないやうな土地へ落著いて、靜かに何かを考へ纏めて見たかつた。

その前から、笹村はどうかすると家を飛出しさうにしては、お銀や老人に支へられてしまつた。春から夏へかけての笹村の感情は、これまでにも例のないほど荒んでゐた。自分の健康や世帶の苦勞と、持つてゐた家をまた疊まなければならなかつた弟や、そこへ行つてゐた母親についての心配とで、毎日溜息ばかり吐いてゐるやうなお銀の顏を見てゐるのも苦しかつたが、然うした波瀾の始終自分の頭に響いて來るのも厭であつた。何事も隱さうとしてゐるお銀の調子は、二人を一層打解けることの出來ないものにして了つた。

何と云ふことなしに、笹村がちよい〳〵通つてゐた女の家も、時々お銀の顏をいら〳〵させた。が、[illegible]いので、しばらく[illegible]方の下宿へ出てゐたその女とは、年にも大變な懸隔があつたし、集つて來る若い男も二三人はあつたが、土竜のやうな暗い生活をしてゐる女の墮落的氣分が、たゞ時々の興味を惹いてゐた。

笹村は、家が面倒しくなつて來ると、煙草錢を袂の底にちやらつかせながら、折にふれて行所のない足を其方へ向けた。そして其部屋の壁際に寢そべつて、女から色々の話を聞いた。

女の枕のうへには寫眞などがあつた。女はしを〳〵したやうな目をして、派手な牡丹の模樣のある浴衣のうへに、友禪の縮緬の帶と綿繻などを引つかけて、窶れた姿形をして、自分がそこへ落ちて行つた經路や、初戀などを話した。

笹村は、頭が疲れて來ると、座蒲團のうへに丸くなつて、毛布を被つて、うと〳〵と好い心持にまどろみかけてゐた。そして眠つたかと思ふと、そこへ茶を飲みに來てゐる宿の内儀さんと女との話聲が耳に入つた。

女のところへは、外にも然う云ふ女連が一人二人遊びに來た。そのなかには、男に仕送りをされて、學校へ通つてゐるやうな身のうへのものもあつた。

下宿には客が少かつた。そして障子を閉切つて、そこに寢たり起きたりして、女の歸つ

たり爲たりすることを見てゐると、暗いその部屋を起つのが億劫なほど、心も體も一種の慵い安易に浸されるのであつたが、矢張いら／＼した何物かに苦しめられてゐた。
「坊ちやんはお幾歳？」
女は思出したやうに、そんな事をも訊いた。
「五つ。」笹村は自分を笑ふやうに答へた。
笹村はそこで不美い西洋料理などを取つて食べた。
「この商賣はそんなに惡い商賣でせうか。」
女はそんな事を訊いた。
笹村はそこに居堪まらなくなると、鳥打帽子に顔を隱して、やがて外へ出た。

七十七

其方此方へ手紙を出すのを仕事にしてゐる女は、笹村の處へも如何かすると決り文句の手紙を男名で書いた。それがお銀の目にも觸れた。それでなくとも、外から歸つて來る笹村の顔から、その行先を嗅出すくらゐは、お銀に取つてそんなに難しいことでもなかつた。そんな時のお銀の調子は、自分を恥ぢてゐる笹村の心にとげ／＼しく觸つた。
「そんなものに關係なぞして、貴方は世間の好い笑ひものになつてゐることを知らないんですか。深山さんでも誰でも、皆然う言つてますよ。」
お銀はムキになつて、その女の事を口汚く罵つた。目の色も變つてゐた。
二日ばかり、外をぶらついて歸つて來た笹村は、お銀の神經をそんなに興奮させる何物もないのが可笑しかつたが、相手の心持に理解のないお銀の荒々しい物の言振や仕草には、笑つて濟されないやうな事があつた。
何事も投出して、ペンと紙だけポケットへ入れて、ある日の午後不意に笹村が家を出た時、お銀は何にも知らずにゐた。それ迄に二人は幾度となく仂なく言爭つた。巣をかへてから、笹村の足の遠のいてゐた女の事は、もはやお銀の頭に何の煩ひをも殘さなかつたが、そんな事で暫く紛らされてゐた笹村の頭は、前よりも一層落著を失つてゐた。そして年々煩はしさの增して行く生活につれて色々に分裂してゐる自分の心持を支へきれないやうな氣がしてゐた。
その日は雨がじめ／＼降つてゐたが、汽車から眺める野の青葉の影は、暫く家を離れたことのない笹村の目に、すが／＼しく映つた。汽車は次第に東京の近郊から離れて、廣い[illegible]な關東の野を走つた。笹村の頭には今まで渦のなかにゐるやうに思へた自分の家、家族の團欒、それらの影が段々薄くなつてゐた。そして今行かうとしてゐる町の[illegible]さと自由さが、[illegible]したやうな頭に少しづつ分明してゐた。何處へ隱れても、目は始終人や女の影を追うてゐた七八年前の心持が、今と比べて考へられた。西の方へ長い漂浪の旅をした時は、殊に然うであつた。家族と一緒に歩いてゐる旅客を、船や汽車で見た時は、一時その念が強かつた。その時の笹村の心には、何處へ行つても自然は氣をいら／＼させる退屈な田舍の松並木に過ぎなかつた。
爽かな初夏の雨は、汽車の窓にも輕く濺いで來た。窓の前には、雨を十分吸込んだ黒土の畑に、青い野菜の柔かい葉や莖を伸してゐるのが見えたり、色の鮮かな木立際に蹲んだ藁屋が見えたりした。汽車のなかには、日光へ行くらしい西洋人の日にやけた紅い顔なども見えた。汽車は次第に山の方へかゝつて行つた。深い雜木林が、絶えず煽を喰つて、しなやかな其小枝を搖がし、竹藪からすい／＼した若竹が、雨にぬれた枝を差交してゐた。古い油繪に見るやうな蓊鬱した杉の處々に叢立つてゐるのが、山

の氣を澤まで感ぜしめた。
鐵道が敷けてから、急に寂しくなつて來た其町は、耳がしんとするほど靜かであつた。可也大きな家のある廣い通にも、人の影が疎であつた。
宿の廣い土間から、裏二階の座敷へ案内された笹村は、落著もなく手摺際へ出て庭を眺めたり、額や掛物を見詰めたりして居たが、階下に飼つてある小禽の靜かな啼聲が、侘しげに聞えて來た。
日暮になつても、雨はしと／＼と降つてゐた。

七十八

容易に寢つかない、そこの廣い部屋の寂しさに慣れるまでには、可也間があつた。
笹村は朝九時頃に起きると、大抵風呂の湧く午後の三四時頃までは、ぢつと机の側に寄りきりであつた。他の部屋と隔離されたその座敷へは、何の音響も傳つてゐなかつた。時とすると賑い溢れた通で、子供を集めてゐるよか／＼飴の太鼓の音が、沈澱したやうな四邊の空氣を攪亂して行くほかは、傍の小禽の聲が耳につくだけであつた。總ての感覺を絶たれたやうな笹村の頭は、如何かすると眞空のやうに白け切つてゐた。
笹村は喫しつゞけの莨に舌がいら／＼して來ると、ふと机に向つて何か書かうとして紙を見詰めることもあつたが、頭はやつぱり疲れてゐた。
空の晴れた日には、男體山などの姿が窓から分明眺められた。社の杉、日光の町まで續いた杉並木なども、目前に竝んで見えた。大谷川の河原も、後の高窓から見られたが、笹村は何處を見ても沈默の壁に向つてゐるやうであつた。
家のことが、時々目前に浮んだ。向合つてゐる時には見られなかつたお銀の心持や運命も、恁うして遠く離れてゐると、分明解るやうに思へた。肉體と共に、若い心の捌りへらされて行くお銀の胸には、まだ時々戀愛の夢が振顧られた。充しがたい物質上の慾求も、絶えず心を動搖させてゐた。それを踏みつけようとしてゐる良人の狂暴な手は、年々反抗しがたいものとなつた。
「子供にも然う不自由をさせず、時々のものでも著て行ければ私は他に何にも望はない。」
お銀の然ういふ言葉には、色の剝げて行く生活の寂しい影がさしてゐた。
笹村は、ある日劇場の人込のなかで卒倒したお銀の哀な姿を思出さずにはゐられなかつた。夫婦はその日、新橋まで人を見送つた、そして歸りに橋袂で、お銀の好きな天麩羅を喰べた。
「あゝおいしい。」
お銀はさう言つて、笹村の顏を見ながら我ながら可笑しさうに笑つた。
「よく喰ふな。」笹村は苦笑してゐた。
二人は腹ごなしに銀座通を、ぶら／＼歩いた。
「私こんな處を歩くのは何年振だか、築地にゐた頃は毎晩のやうに來たこともありますがね。」
お銀はさう言ひながら、珍らしさうに其處らを眺めてゐた。
「歌舞伎を一幕のぞいて見ようか。」笹村は尾張町の角まで來たとき、ふと言出した。
一幕見は可也込合つてゐた。薄暗い舞臺の方を伸びあがつて見ると、そこには丁度地震加藤の幕が開いてゐた。お銀は人の肩越しに、足を爪立てて、花道から出て來る八百藏の加藤を、漸と頭の先だけ見ることができた。ぼつとしたやうな目には、廊下に竝んでゐる婦人達の美し

い姿が段々晴やかに決つてゐた。お銀は十年ほど前に、叔父と一緒に一世一代だと云ふ團十郎の熊谷を見てから、こゝへ入るやうなこともなかつた。

　やがて下りた淺黄色の幕が落ちて、宗十郎の小西がそこへ現れて來る頃に、お銀は眞蒼な顔をして、後の方へ退つて行つた。そして頭を抑へながら、苦しさうに呼吸をはずましてゐた。

「目がぐら〳〵して、わたし何だかそこらが眞暗……。」

　笹村の手に縋つて、廊下の方へ出たお銀は、「あなた私もう駄目よ。」と、泣聲を出して直にそこへ倒れてしまつた。

　しばらくお銀は運動場へ出て、風に吹かれてゐた。亜鉛の板敷に、べつたり坐つてゐるお銀は、少しづつ性がついて來た。笹村は直に外へ連出した。

　お銀はコートについた埃も拂はずに、蒼い顔をして、薬屋を捜した。目にも涙が入染んで、手足が冷えきつてゐた。

「どうして恁う弱くなつたんでせう。」

　呟きながら、川端を歩いてゐるお銀の姿を、笹村は時々振顧つてみた。

七十九

「お湯にお入んなすつて。」といつて毎日々々刻限になると、栗山から來てゐると云ふ、行儀の好い小娘が、部屋の入口へ來て婉然しながら聲かける頃には、笹村の頭は何を考へるともなしに萎え疲れてゐた。沈默の苦痛に氣が變になりさうな事もあつたが、矢張部屋を動くのが厭であつた。

　もう十日の餘もゐて、町の人の生活狀態も解つてゐたし、宿の人達の事も按摩などの口から時々に聽取つて、略明かになつてゐた。町の宿屋と云ふ宿屋は、日光山へ登る旅客が此處を通らなくなつてからは、大抵達磨宿のやうなものになつてしまつた。町の裏に繋つてゐた森も年々に伐盡されて、瘠土には米も熟らないのであつた。唯一の得意先であつた足尾の方へ荷物を運ぶ路も今は何程も立たなかつた。そのなかでその宿だけは格を崩さずにゐた。裏には縣官の來て泊る新築の一構などもあつた。魚河岸から集會に來てゐる一人の親方は、そこの廣間で毎日土地の藝妓や鼓笛の師匠などを集めて騒いでゐた。

　湯殿の上り場には、掘りぬきの水が不斷に流れてゐた。山から取つて來て其水に漬けてある淡色の夏雪草などを眺めながら、笹村は筋肉のふやけ切つたやうな體を湯に浸してゐた。湯氣で曇つた硝子窓には、庭の立木の影が淡く映つてゐた。

　日暮方になると、笹村は町へ出て見た。そこ此處の薄暗い二階からは、方々から入込んでゐる繭買の姿などが見られた。裏通へ入ると、黄色い柿の花の散つてゐる門構の家などが見えたり、ごみ〳〵した飲食店や、御神燈の出た藝者屋が立竝んでゐたりした。

　大水の秋の氾濫の迹の恐ろしい大谷川の縁へ笹村は時々出かけて行つた。宿のごろ〳〵した白い河原の上流には、咆哮するやうな荒い山の姿が、夕暮の空に重なりあつて見えた。凄じい水勢に潰された迹の堤の縁には後から〳〵と小屋を立てて住んでゐる者もあつた。笹村は石から石を傳つて、廣い河原をどこまでも溯つて見たり、岩に腰かけて恐ろしい靜寂の底に吸込まれて行きさうな心臟の響に、耳を澄ましたりした。

　やがて高い向河岸の森陰や、下流の砂洲に茂つた松原のなかに、火影がちら〳〵しはじめた。電が時々白い水のうへを走つた。笹村は長く

そこに留まつてゐられなかつた。
町をまた一巡して、宿へ歸つて來た篠村は、この十日ばかり何を見つめるともなしに其處に坐つてゐた自分の姿を、ふと目に浮べた。机の上には來た時の儘の紙や本が散らばつてゐて、濁んだやうな電氣の明に、時計が秒音を立ててゐた。
その晩篠村は下の帳場へ來て、酒をつけて貰つたりした。爐傍には、時々話相手にする町の大きな精米場の持主も來て坐つてゐた。
翌朝九時頃に、階下へ顏を洗ひに行つた時、篠村はふと料理場から顏を出す女の姿を見た。薄い髮を引詰めた其顏は、昨夜見た時よりも荒れて蒼白かつた。頸筋の處に貼つた膏藥も氣味が惡かつた。
「旦那、ほんとに日光へ連れて行つて下さいね。」
女の口には金齒が光つた。寢もしないで嗄れたやうであつた。女は昨夜の挨拶に其處へ來てゐるのであつた。
午後に篠村は、長く壁にかゝつてゐた洋服を着込んで、ふいとステーションへ獨で出向いて行つた。そして丁度西那須行の汽車に間に合つた。

「ダマスクスへ」を讀んで

私は優れた人の藝術的功績に接すると、自分が厭になる。ストリンドベルグは前にも少し讀んだが、この頃「ダマスクスへ」を讀んで自分の惨めさが厭になり、惜氣なしに過去の作品をすつかり燒いてしまひたくさへなる。それを惜しんでくれる人はないだらうが、やはり自分に未練がある。單に經濟上の問題ばかりでもなささうである。勿論後代に殘さうと云ふ了簡でもない。たゞ職業意識を離れて至純な藝術家になりたい氣持はする。書くと書かないとは藝術家に取つては大した問題ではない。書かない藝術家もあつてもいいし、書けない藝術家もあつても可い。ふらふら遊んでゐる藝術家もあつても可い。世には書いてゐる藝術家よりも、書かない、若しくは書けない藝術家もずゐぶん多いことだらうと思ふ。我々はそんな贅澤なことを言つてゐられないだけの話である。
勿論藝術には比較的孤獨性に滲透したものと、普遍的なものとがある。個人性の強いものと、社會性の多いものとがある。今は社會性の多いものが期待されてゐるやうだが、しかし個人性を除外しては、藝術は殆んど成立たないと言つていゝ。一面から言ふと、個人性の弱いものに社會性のありやうがなく、社會性の乏しいものに、個人性の強さがあり得ないとも考へられる。我々の心境小說も餘りに孤獨的なものかも分らないが、社會思想の色調の濃いものとなると、屡藝術家の個性が失はれる。それは空想的なものとなると、我々の作品が屡生活の軌道をはづれたものであつたりするのと同じである。これは東洋人の素質の問題である。西洋の作品には、如何に普遍的なものでも、獨創的な個人性が線を引いてゐる。如何に空想的なものでも、生活の地を離れてゐないと同じである。

爛

一

最初におかれた下谷の家から、お増が麹町の方へ移つて來たのはその年の秋の頃であつた。自由な體になつてから、初めて落著いた下谷の家では、お増は春の末から暑い夏の三月を過した。

そこは賑かな廣小路の通から、少し裏へ入つた或路次のなかの小さい平家で、つい其向前には男の知合の家があつた。

出て來たばかりのお増は、そんなに著るものも持つてゐなかつた。遊里の風がしみてゐたから、口の利方や、起居などにも落著がなかつた。廣い大きな建物のなかから、初めてそこへ移つて來たお増の目には、風鈴や何かと一緒に、上から隣の老爺の禿頭の能く見える黑板塀で仕切られた、じめ／＼した狹い庭、水口を開けると、直ぐ向の家の茶の室の話聲が、手に取るやうに聞える臺所などが、鼻が閊へるやうで、窮屈でたまらなかつた。

その當座晝間など、その家の茶の室の火鉢の前に坐つてゐると、お増は寂しくて爲樣がなかつた。がさ／＼した緣の板敷に雜巾がけをしたり、火鉢を磨いたりして、湯にでも入つて來ると、後はもう何にも爲ることがなかつた。長いあひだ居なじんだ陽氣な家の狀が、目に浮んで來た。男は折鞄などを提げて、晝間でも會社の歸りなどに、ちよい／＼還つて來た。日が暮れてから、家から出て來ることもあつた。男は女房持であつた。

お増は髮を丸髷などに結つて、臺所で酒の支度をした。二人で廣小路で買つて來た餉臺のうへには、男の好きな鱲や、鯛煎餅の炙つたのなどが竝べられた。近所から取つた、鰻の丼を二人で食べたりなどした。

いつも肩のあたりの色の褪めた背廣などを著込んで通つて來た頃から見ると、男は餘程金廻が好くなつてゐた。米琉の絣の對の袷に模樣のある角帶などをしめ、金縁眼鏡をかけてゐる男のきり／＼とした樣子には、その頃の書生らしい面影もなかつた。

酒の相手などの遠い男は、來ても[illegible]してゐるやうな事は滅多になかつた。會社の仕事や、金儲のことが、始終頭にあつた。そして床を離れると、直に時計を見ながらそこを出た。間切つた入口の板戸が急いで開けられた。

男が歸つてしまふと、お増の心はまた舊の寂しさに反つた。女房持の男の許へ來たことが、悔いられた。

「お神さんがないなんて、私を瞞しておいて、貴方もひどいぢやないの。」

來てから間もなく、向の家のお婆さんからその事を洩聞いたときに、お増はムキになつて男を責めた。

「誰がそんな事を言つた。」男は媚のある優しい目を瞻つたが、驚きもしなかつた。

「誰だよ。」

「みんな聞いてしまひましたよ。前に京都から女が訪ねて來た事も、どこかの後家さんと懇意であつたことも、丁と知つてますよ。」

「へゝ。」と、男は笑つた。

「その京都の女からは、今でも時々何か贈つて來ると云ふぢやありませんか。」

「下らない事いつてら。」

「私は巧く瞞されたんだよ。」
男は床の上に起上つて、褞袍を着てゐた。お増は側に立膝をしながら、巻莨をふかしてゐた。睫毛の長い、疲れたやうな目が、充血してゐた。露出の男の脛を抓つたり、莨の火をおつつけたりなどした。男は吃驚して跳ねあがつた。

二

しかし男も、悦けてばかりゐる譯には行かなかつた。三四年前に一緒になつた其細君が、自分より三つも年上であること、書生でをりそこに世話になつてゐた時分から、長いあひだ自分を助けてくれたことなどを話して聞かした。其頃その女は少し許りの金をもつて、母親と一緒に暮してゐた。
「それ御覧なさい。世間體があるから當分別にあるなんて、私を瞞しておいて。」
二人は長火鉢の側へ來て、茶を飲んでゐた。商賣にやつれたやうな俤影に、蒼い下唇を噛んで、[illegible]い目を見据ゑてゐる女の、鼻筋の正しい顔が蒼白く見られた。
「けど其細君は病身なんだ。それにあの女には、喘息といふ持病もあるし、迚も一緒に暮すてわけに行きやしない。」男は咽喉に痰を咳こみながら、呟いた。
「喘息ですつて。喘息つて何なの。」
「咽喉がぜい〳〵いふ病氣さ。」
「うゝん、そんなお客があつたよ。あれか。」お増は想出したやうに笑出した。
お酒飲んだり、不養生するとそれが起るんだつて、あれでせう。厭だね。貴方はそんなお神さんと一緒にゐるの。」お増は顔を顰めて、男の顔を見た。男はにや〳〵笑つてゐた。
「でも、そんなに世話になつた人を、さうは行きませんよ。そんな薄情な眞似が出來るもんですか。」
「なに、要するに金の問題さ。」
「いゝえ、金ぢや出て行きませんよ。それに、そんな人は他へ片附く譯に行かないでせう。」
お増は考へ深い目色をした。しかし深く男を追窮することも出來なかつた。
「貴方のお神さんを、私一度見たいわね。」お増は男の心でも引いて見るやうに言つた。
「つまらない。」男は鼻で笑つた。
「それに、こんなことが知れると、出すにしても都合がわるい。」
「矢張貴方はお神さんが可恐いんだよ。」
「可恐い可恐くないよりは煩い。」
「ぢや、貴方のお神さんは必然嫉妬家なんだよ。」
「お前はどうだい。」
「うゝん、私はやきやしない。恁うやつてゐるうちに、東京見物でもさしてもらつて、田舍へ歸つて行つたつて可いんだわ。」お増はさう言つて笑つてゐたが、商賣をしてゐた時分の傷のついたことを感ぜずにはゐられなかつた。
近所が寢靜まる頃になると、お増はそこに獨りゐることが頼りなかつた。床に入つてからも、容易に寢つかれないやうな晩が多かつた。夜の世界にばかり目覺めてゐたお増の頭には、多勢の朋輩やお婆さん達の顔や聲が、まだ底にこびりついて居るやうであつた。拘束すべき何物もない一人の臥床は、長いあひだの勤めよりも懈く苦しかつた。太鼓や三味の音も想出された。
男の傍にゐる神さんの顔や、部屋の様が目に見えたりした。

三

「お増さん、花をひくからお出でなさい。」
お増の[illegible]一日入浸つてゐる[illegible]では、お千代さんが淋しくなると、人目の方から、さ

らいつて嫁かけた。
　その家では、男の子供の時分の友達であつた長男が、遠國の鑛山に勤めてゐた。小金を持つてゐるお千代婆さんは、今一人の少い方の子息の教育を監督しながら女中一人をおいて、これと云ふ仕事もなしに、氣樂に暮してゐた。
　お増はこゝへ來てから、臺所や買物のことで何彼とお千代婆さんの世話になつてゐた。髪結の世話をして貰つたり、湯屋へつれていつてもらつたり、寄席へ引張られて行つたりなどした。
「何にも知らないものですから、ちと何かを教へてやつて下さい。」お増を連込んで來た時に、男はさう言つてお千代婆さんに頼んだ。
「淺井さん、貴方そんなことたすつて好いんですか。知れたら奈何するんです。私までが貴方の奥さんに怨まれますよ。」
　お千代婆さんは少し強いやうな調子で言つた。婆さんは早く良人に訣れてから、長いあひだ子供の世話をして、獨りで暮して來た。淺井などに對すると、妙に硬苦しい調子になるやうなことがあつた。女の話などをすると、いらいらしい色が目に現れることさへあつた。
　青瓢の婆さんは寂しさうな顔をして、長火鉢の側で何よりも好きな花札を弄つてゐた。
「一差で一年どうですね。」などと、お婆さんはお増の顔を見ると、筋肉の硬張つたやうな顔をして言つた。
「私それとなく女將さんのことについて、今少し旦那の脈を取つてやつたところなのよ。」お増は坐ると、いきなり言出した。
「それで淺井さんは奈何言つてゐなさるのです。」
「出すといふんですよ。」
「奈何かな、それは。書生時分から、あの人のために大變に苦勞した女ですよ。それに今ぢや兎に仲人も入つて、正當な妻ですからの。」
「でも喘息が嫌だから、出すんですつて。」
「そんな事せん方が可いがな。貴女もそれまでにして入込んだところで、寢覺がよくはないがな。」
「私はどうでも可いの。あの人がおきたいなら置くがよし、出したいなら出すが可いんだ。」
　お増は捨鉢のやうな言方をして、節の伸びた瘦せた手に、花の親見をした。
「あれ貴女が親だ。」お千代婆さんは、札を悉皆お増に渡した。
「落りつこですよ小母さん。」お増は器用な手様で札を撒いたり蒐けたりした。興奮したやうな目が、ちら／＼したり、頭腦がむしやくしやしたりして、氣乘がしなかつた。婆さんにまで馬鹿にされてゐるやうなのが、不快であつた。
「何だい、また遣つてゐるのかい。」音を聞きつけて、二階から中學出の子息が降りて來た。そして母親の横へ坐つて、加勢の目を見張つてゐた。
　お増は妙と氣が利いた。
「駄目だい阿母さん、そんな茫然した引方してゐちや。」
　お増は默つて附合つてゐたが、直に切揚げて歸つた。そして家へ歸ると、誰もなく獨りで泣いてゐた。

四

　とろ／＼と微睡むかと思ふと、お増はふと姦しい隣の婆さんの聲に脅かされて目がさめた。お増は疲れた頭腦に、始終何か取留のない夢ばかり見てゐた。その夢のなかには、片々の色々のものが、泥交に織込まれてあつた。如何したのか、二三日顔を見せない淺井の、自分のところへ通つて來た頃の洋服姿が見えたり、外の女と一緒に居竝んでゐる店頭の薄暗いなかを、

女の亭主は、舊可也名の聞えた新俳優であつた。ずつと以前に政治運動をした事などもあつた。お増は、口元の苦味走つた、目の切の長いその男を善く知つてゐた。

「また青柳がやつて來たよ。」

お雪と喧嘩などをして、切れたかと思ふと、それからそれへと渡り歩いてゐた旅から歸つて來て、情婦の部屋へ坐込んでゐるその男の噂が、お増の部屋へ、一番早く傳つた。

旅稼ぎから歸つて來た青柳は、放浪者の様に窶れて、すつてんてんになつてお雪のところへ轉げこんで來るのであつたが、お雪は切れた切れたと言ひながら、矢張男の歸つて來るのを待つてゐた。其家でも、一番よく賣れたお雪は、娘を喰ものにしてゐる一人の母親のお蔭で、その頃大分自棄氣味になつてゐた。大きなもので酒を呷つたり、氣の向かない時には、小ぴどく客を振飛ばしなどした。二人とも、今少し年が若かつたら、情死も爲かねないほど心が爛れてゐた。傍で見てゐるお増などの目に凄い様な事が時々あつた。

そこを出るとき、お雪の身に著くものと云つては、何にもなかつた。箪笥がまるで空になつてゐた。以前ついてゐた種の好い客が、一人も寄りつかなくなつてゐた。お雪は著のみ著のまゝで、男のところへ走つたのであつた。

淺草の或劇場の裏手の方の、その家を初めて尋ねて行つた時、青柳の何をして暮してゐるかが、お増には些と解らなかつた。

「良人は此の頃妙なことをしてゐるんだよ。」

お雪はお増を長火鉢の向へ坐らせると、いきなり話しだした。見違へるほど血色に曇みが出て來て、髪なども櫛巻のまゝであつた。丈の高い體には、襟のかゝつた唐棧柄の双子の袷を著てゐた。お雪はもう三十に手の屆く中年増であつた。

「へえ、何してゐるの。」などとお増は、そこへ土産物の最中の袋を出しながら、訊ねた。そこからは、芝居の木の音や、鳴物の音が能く聞えた。

「何だか當ててごらんなさい。」

「相場？」

「そんな氣の利いたものぢやないんだよ。」お雪は莨を吸ひつけて、お増に渡した。

「會社？」

「あの男に、堅氣の勤務などが出來るものですか。」

お雪はさう云ひながら、煤ぼけた押入の中から何やら、細長い箱に入つたものや、黄色い切に包んだ、汚らしい香爐のやうなものを取出して來た。

「お前さんの旦那は工面がいゝんだから、この軸を買つてもらつておくんなさいよ。何だか古いもので、好いんだとさ。」

煤ぐれた幅には、岩塊に竹などが描かれてあつた。

六

日中の暑い盛りに、お増はまたそこへ訪ねて行つた。

お増は昨夜の睡眠不足で、體に堪へがたい氣懈さを覺えたが、頭腦は昨夜と同じ興奮状態が續いてゐた。薄暗い路次の中から明い通へ出ると、充血した目に、強い日光が痛いほど泌込んで、眩暈がしさうであつた。お増は途中で傭つた腕車の幌のなかで、矢張男の心持などを考へ續けてゐた。

お雪の家では、夫婦とも晝寝をしてゐた。青柳は縁の爛れたやうな目に、色眼鏡をかけて、筒袖の浴衣に絞の兵兒帯などを締め、長い脛を立てて、仰向になつてゐた。少し離れて、お雪も朱塗の枕をして、團扇を額に當てながらぐつ

たり死んだやうになつてゐた。部屋のなかには涼しい風が通つて近所は森としてゐた。鐵板を叩く響や、裏町らしい子供の泣聲などが時々どこからか聞えて來た。

「よく寢てゐること。隨分氣樂だね。」お增は上へあがつたが、坐りもせずに醜い二人の寢姿を暫く眺めてゐた。

「いくら男が好いたつて、私ならこんな人と一緒になぞなりやしない。先へ寄つて奈何する心算だらう。」お增はそんなことを考へながら、火鉢の側へ寄つて、莨を喫してゐた。

「おや、お增さん來たの。」お雪はさう言つて、漸に目をさました。

「大變なところを見られてしまつた。何時來たの。」お雪は帶を搔合せたり、髮を撫であげたりしながら、火鉢の前へ來て坐つた。

お增はへゝと笑つてゐた。

「この暑いのに、能く出て來たわね。」

「何だか詰らなくて爲樣がないから、遊びに來たのよ。」

「へえ、お前さんでも其樣な事があるの。」

お雪は火鉢の火を搔起しながら、「貴方や貴方や」と青柳を呼起した。青柳はちよつと身動きをしたが、寢返りをうつと、また其まゝ寢入つてしまつた。

お雪が近所へ誂へた氷を食べながら、二人で無駄口を利いてゐると、直に三時過になつた。かん／＼日の當つてゐた後の家の亞鉛屋根に、蔭が出來て、今まで晝寢をしてゐた近所が、徐に目覺める氣勢がした。

お增は淺井の身のうへなどを話しだしたが、お雪は身にしみて聞いてもゐなかつた。

「へえ、あの人にそんなことがあるの。でもいゝわね。そんな人の方が、優情があるんだよ。」

「いくら優情があつても、浮氣の多い人は嫌だね、車挽でもいゝから、矢張獨りの人がいゝと熟々さう思つたわ。」

青柳が不意に目をさました。

「よく寢る人だこと。」お雪はその方を見ながら、惘れたやうに笑つた。青柳は太いしなやかな手で、胸や腋のあたりを撫廻しながら、起上つた。そして不思議さうに、じろ／＼とお增の顏を眺めた。

「どうも暫く。」お增は更まつた挨拶をした。

青柳は極の惡さうな顏をして、お叩頭をした。

「ごらんの通りの廢屋で、……私も意氣地無く落れてしまひましたよ。」

「でも結構なお商賣ですよ。」

「は、此の方はね、好きで遣つたものですから、まあぼつ／＼遣つてゐるんですよ。そのうち又此奴の體を責るやうなことになりやしないかと思つてゐますがね。」

「もう駄目ですよ。」お雪は笑つた。

間もなく青柳は手拭をさげて湯に行つた。

七

「あの人隨分變つたわね。頭髮の地が透けて見えるやうになつたわ。」お增は笑ひながら、青柳の噂をした。

「あゝ全然相が變つてしまつたよ。更けて困ると云つちや、自分でも氣にしてゐるの。加之私もつと、あの社會で幅が利くんだと思つてゐたら、からきし駄目なのよ。以前世話したものが、皆寄附かなくなつちやつた位だもの。」

「でも何でも出來るから、いゝぢやないの。」

「いゝえ、どれも此も中途だから駄目なのよ。でも、こんな商賣をしてゐれば、色々な家へ出入が出來るから、そこで仕事に有附かうとでも云ふんでせう。それもどうせ好いことはしやしないのさ。」

お雪は苦笑してゐた。

「それから見れば、お増さんなぞは僥倖だよ。精々辛抱おしなさいよ。」

お雪は、今外交官をしてゐる某の、まだ書生でゐる時分に、初めて妾に行つたときの事などを話しだした。そして當然その夫人に直される運命を持つてゐたお雪は、田舎でも可也な家柄の人の娘であつた。二人の間には、愛らしい女の子まで出來てゐたのであつた。

「どうして其處へ行かないの。」

「もう駄目さ。寄せつけもしやしない。その時分ですら、話がつかなかつた位だもの。」

お雪はその頃のことを憶出すやうに、目を輝かした。その時分お雪はまだ二十歳を少し出たばかりであつた。色の眞白い脊のすらりとした貴婦人風の、品格の高い自分の姿が、可懐しく目に浮んで來た。

「それが斯うなのさ。黒田……その男は黒田と云ふのよ。狆のくさめをしたやうな顔してゐるけれど、それが豪いんだとさ。今ぢや公使をしてゐて、東京にはゐないのよ。そこへ其時分、始終遊びに來て、碁をうつたりお酒を飲んだりしてゐた男があつたの。好い男なのよ。それが黒田の留守に、私をつかまへちや、始終厭らしいことばかり言ふの。つまり私が其男を怒らしてしまつたもんだから——然う云ふ奴だから、逆様に私のことを、黒田に惡口したのさ。やれ國であの女を買つたと云ふものがあるとか、やれ男があつたとか、貞操が疑はしいとか、何とか言つてさ。黒田はそれでも私に惚れてゐたから、正妻に直す氣は十分あつたんだけれど、何分にも阿父さんが承知しないでせう。そこへ持つて來て、私の母があの酒飲の道樂ものでせう。私を喰物にしよう〳〵としてゐるんだから、堪りやしない。黒田だつて厭氣がさしたでせうよ。」

「貴女子供に逢ひたくはないの。」

「逢ひたくたつて、今ぢや迚も逢はせやしませんよ。それでも其當座、向ひにあつた氷屋の神さんに、二度ばかりあの樓へつれて來てもらつたことがあつたよ。私も一度行きましたよ。勿論母親だなんてことは、噯にも出しやしなかつたの。」

「つまらないぢやありませんか。」

「爲方がない。私にそれだけの運がないんだから。」

「ちつとお金の無心でもしたら可いぢやないの。」

「どうして、奥さんが[illegible]たとき。」

八

「隨分諦めがいゝわねえ。」

お増は、自分にも其と同じやうな記憶が、新たに胸に喚起された。まだ東京へ出ない前に、少時居たことのある田舎の町の茶屋の若旦那と自分との間の關係などが思浮べられた。その時分のお増はまだ若かつた。容貌などに殘つてゐる、その頃のお増の張のある目や、むつちり肉を有つた頬や口元には、美しい血が漲つてゐた。

コートなどを著込んで、襟巻で鼻のあたりまで裹んだ、きりゝとした顔や、小柄な體には、何處でも遣通すと云ふ意氣と負けじ魂があつた。お増の田舎では、標致の好い女は、殆ど誰でもすることになつてゐる茶屋奉公に、お増も遣られた。百姓家に育つたお増は、それまで子守兒などをして、苦勞の多い日を暮して來た。漸と中學を出たばかりの、そのお茶屋の若旦那は、時々餘所の貸座敷などから、私と口をかけた。浪の音などの聞える場末の町の遊廓には、入口の薄暗い土間に水淺黄色の暖簾のかゝつた、古びた大きい妓樓が、幾十軒となく立駢ん

でゐた。上方風の小意氣な鮨屋があつたり、柘榴口のある綺麗な湯屋があつたりした。廓の眞中に植つた柳に芽が吹出す雪解の時分から、黝い板廂に霙などのびしよ／＼降る十一月の頃までを、お増はその家で過した。町に風評が立つて、そこにゐられなくなつたお増は、東京へ移つてからも、男のことを忘れずにゐた。そこのお神に据わる時のある自分をも、長いあひだ心に描いてゐた。男からも、時々手紙が來た。

「この人が死んぢやつたんぢや爲樣がない。」三年程前に、男の亡つたことが、お増の耳へ傳つた時、それが俄に空頼めとなつたのに、力を落した。お増はまた、通つて來る客のなかから、男を擇ばなければならなかつたが、其男は容易に見つからなかつた。長いあひだには、色々の男がそこへ通つて來た。此方で好いと思ふ男は、先で思つてゐなかつたり、親切にされる男は、此方で蟲が好かなかつたりなどした。年が合はなかつたり、商賣が氣に入らなかつたりした。雙方いゝのは親係りであつた。主人持であつた。

するうちに、お増は段々年を取つて來た。出る間際のお増の心には、堅い一人の若いお店ものと淺井と、この二人が殘つた限であつた。

男のために、始終裸になつてゐたお雪と自分とを、お増は心のなかで比べてゐた。

「亂次がないぢやないの。いつまで面白いことが續くもんぢやないよ。」お増は一緒にゐる時分から、時々お雪に然う言つてやつたことがあつた。けれどお雪自身は、それを奈何することも出來なかつた。一つは、一時新造に住込んでまで、喰著いてゐた母親が、お雪に自分の事ばかりを考へさせておかなかつたのではあつたが、黑田の世話になつてゐた時分からの、お雪自身の體にも、然うした血が流れてゐたのであつた。

しみ／″＼した話が、日の暮まで絶えなかつた。

「あの人の、どこがそんなに好いのさ。」お増はお雪に揶揄つた。

「然うなつちや、好いも惡いもありやしないよ。爲方なしさ。」お増をそこまで送りに出たお雪は、さう言つて笑つた。

町には灯影が涼しく動いて、濡れた地面からは、土の匂が鼻に通つて來た。

九

日が暮れてからは、風が一戰ぎもしなかつた。

お増は腕車から降りて、蒸暑い路次のなかへ入ると、急に淺井が留守の間に來てゐはせぬかと云ふ期待に、胸が波うつた。暫く居なじんだ路次は、いつに變らず靜かで安易であつた。先の望や氣苦勞もなささうな、お雪などの取留のない話に、攪亂されてゐた頭腦が日頃の自分に復つたやうな落著と悦びとを感じない譯に行かなかつた。淺井一人に、自分の生活の總てが繋つてゐるやうに思はれた。男の賴もしさが、何時もよりも強い力でお増の心に盛返されて來た。

「たゞ今。」お増は鍵をあづけて出たお千代婆さんの家の格子戸を開けると、然ういつて聲かけた。

茶の室のランプが薄暗くしてあつた。水口の外に、女中が行水を使つてゐるらしい氣勢がしたが、上間には果して淺井の下駄もあつた。

「おや二階でまた始つてゐるんだよ。」お増は淺井に濟まないやうな、拗ねて見せたい樣な可笑しい落著のない心持で、急いで梯子段をあがつた。

風通の好い二階では、障子をしめた窓の片蔭に、淺井や婆さんや、能くこゝへ遊びに來る近所の醫者などが一塊になつて、目を光らせ

ながら花に觸つてゐた。顏を見るたんびに、醫者を診てやる／＼と云つてはお增に揶揄などとするその醫者は、派手な柄の浴衣かけで胸までまくりで立膝をしてゐた。線の太いやうな其顏が、何となし青柳の親分に似通つてゐるやうで、氣持が惡かつた。

「お歸んなさい。」醫者が聲かけた。「どこへ何しに行つてゐたんです。お增さんがついてゐないもんだから、淺井さんが散々の體ですよ。」

淺井がハヽハと内輪な笑聲を洩した。

お增は火入に吸殼などの燻つてゐる莨盆を引寄せて、澄して莨を喫してゐた。そして此二三日男が何をしてゐたかを探るやうに、時々淺井の顏を見たが、いつもより少し日燒がしてゐるだけであつた。

「神さんに感づかれやしないの。」お增は二年ばかり附合つてから、淺井と前後して直に家へ歸ると、蒸し／＼する其處らを開放しながら言出した。向の女中が火種を持つて來てくれなどした。

淺井はにや／＼してゐた。

「それでも此處は東京の方が行けるやうになつたかい。」

「うゝん、何だかつまらなかつたから、淺草のお雪さんの家を訪ねて見たの。」お增は脊筋のところの汗になつた襦袢や白縮緬の腰卷などを取つて緣側の方へ擴げながら言つた。

「こら、こんなに汗になつてしまつた。」お增は裸のまゝで、暫くそこに涼んでゐた。

「何か食べるの。」

「さうだね、何か食べに出ようか。」

「うゝん、つまらないからお止しなさいよ。」

お增は臺所で體を拭く／＼と、浴衣のうへに、細い博多の仕扱を締めつけて、角の氷屋から氷や水菓子杯を取つて來た。そして入口の板戸を直り締めて内へ入つて來た。

お增はこの二三日の淋しさを、一時に取返しをつけるやうな心持で、淺井の搔纏などを疊んだり、持物を仕舞込みなどして、ちび／＼酒を飲む男の側で、團扇を使つたり、燗をつけたりした。そして時々時間を氣にしてゐる淺井の態度が飽足りなかつた。

十

その晩そこに泊つた淺井が、明朝目を醒したのは大分遲くであつた。その日もじり／＼暑かつた。昨夜更けてから、寢床のなかで何處かの草間や、石の下などで啼いてゐる蟲の音を聞いた時には、もう涼しい秋が來たやうで、身に沁る有明の灯影や、枕頭におかれたコップの水差、疊の手觸までが、冷かであつたが、眠の足りない疲れた體には、晝間の殘暑は、一層じめ／＼と鬱陶しく感ぜられた。

淺井を送出してから、お增はまた夜の匂のじめついてゐるやうな蒲團のなかへ入つて、うとうと夢心地に、何事をか思占めながら氣懈い體を橫へてゐた。その懈さが骨の髓まで沁擴つて行きさうであつた。障子からさす日の光や、近所の物音――お千代婆さんの話聲などの目や耳に入るのが、可恐しいやうであつた。

「こんな事をしてゐちや、二人の身のうへに迚も好いことはないね。」昨夜淺井が床のなかで言つたことなどが思出された。

「眞實だわ。罪だわ。」お增も、枕の上へ胸からうへを出して、莨を喫ひながら呟いた。お增の目には、通町の家に留守をしてゐる細君の寂しい姿が、あり／＼見えるやうであつた。苦しい心持も、身につまされるやうであつた。

「何時かは必然見つかりますよ。見つかつたらそれこそ大變ですよ。」お增の顏には、惡い夢からでもさめかゝつた人のやうな、苦惱と不安色が漂つてゐた。

「ふゝん。」浅井は鼻で笑つてゐた。

「こんな事が、貴方いつまで続くと思つて？私だつて、夜もおち〳〵眠られやしないくらゐなのよ。第一暮しも悪いし、つく〴〵厭だと思ふわ。貴方だつて、経済が二つに分れるから、つまらないぢやないの。」

「けれど、あの女も好くないよ。彼奴さへ世帯持がよくて、気立の面白い女なら、己だつて然う不実な真似はしたくないのさ。實際あれぢや困る。」

「でも貴方のためには、随分尽したと云ふ方だわ。」

「尽したと云つたところで、賃屋の使でもさしたくらゐのもので、然う世話をかけてゐる訳ぢやないもの。己も今迄は相当な待遇をして来た心算だ。」

留守のまに、細君が姉の家で、よく花を引いて歩いたり、酒を飲んだり、贅沢をしたりすることなどを、浅井はお増にこぼした。それに病気を起すと、夜中でも起きて介抱してやらなければならなかつた。それだつて、浅井の妻を嫌ふ理由は、十分であつた。同様にこの細君の母親も、浅井のためには、親切な老人ではなかつた。部屋のなかが、始終取散らかつてゐたり、食物などの注意が、少しも行届かなかつたりした。

お増には、浅井も気の毒であつたが、細君も可哀さうであつた。細君と別れさすのが薄情なやうな気がしたり、意気地がないやうに思へたりした。

お増は長く床のなかにも居られなかつた。そして一時うつら〳〵と睡に陥ちかゝつたかと思ふと、直に目がさめた。

その日から、浅井は三四日こゝに寝泊してゐた。ちよい〳〵用を達しに外へ出て行つては、帰つて来た。浅井はその頃色々の事に手を擴げはじめてゐた。

十一

「今日はちよつと家へ行つて見て来ようかな。」

浅井は或朝寝床から離れると、少し開けてあつた障子の隙から、空を眺めながら呟いた。空は青く澄み切つて、白い浮雲の片が生物のやうに動いてゐた。浅井の耽り疲れた頭には、主のない荒れた家のさまや、夜もおち〳〵眠れない細君の[illegible]の顔が浮んで来た。つい此頃他所から連込んで来て、細君に育てさしてある、今年四つになる女の子のことも、気にかゝりだした。

髪なども擱散かしたまゝで知合や友人の家を、そつち此方探しまはつてゐるに決つてゐる細君の様子も、目に見えるやうであつた。

「一寸安心してゐると、こゝへも遣つて来ますよ。」

お増も床の上に起上りながら言つた。

やがて、浅井が楊枝を銜へて、近所の洗湯に行つたあとで、お増はそこらを片着けて、急いで埃を掃出した。そして鏡台を持出して顔を撫でつけ、頸や前髪を立てて、顔を拵つた。充血したやうな目や、興奮したやうな頬の色が、我ながら美しく鏡の面に眺められたが、頬骨の出たことや、鼻の尖つて来たことが、ふと心に寂しい影を投げた。色が褪せてから見棄てられるものゝ悲しさが、胸に湧起つて来た。

「商売をしたものは、奈何したつてそれは駄目さ。」浅井の然う言つたことが、思出された。

「私も早くどうかしなければ……。」頼の弱い自分の計をしなければならぬと云ふことが、いつになく深くお増の心に考へられた。其処からそれへと移つて行くらしい、男の浮気たといふことも、思はない訳に行かなかつた。いつ棄てられても、困らないことにさへしておけば、[illegible]に繋がる男心の弱味といつでも摑んでゐられさうに思へた。お増は自分の心の底に隠れてゐる

冷い或ものを、感ぜずにはゐられなかつた。

「あの人の神さんなぞは、私に言はせれば莫迦さ。」お増はさうも思つた。勝利者のやうな誇すら感ぜられるのであつた。

晴々した顔をして湯から歸つて來た淺井は、昨宵の食物の殘りなどで、朝飯をすますと、直に支度をして出て行つた。お増は男を送出すとき何時でも經驗する厭な心持を紛らさうとして、お千代婆さんの家を訪ねた。

「へえ、それでも能く倦きも爲ずに、三日も四日も、寢てばかりゐられたものだね。」さう言つてゐさうなお千代婆さんの目の色が、險しかつた。

お増は、昨日淺井と一緒に出て買つて來た銘仙の反物を、そこへ出して見せた。

「これを私の給羽織に仕立てたいんですがね。」

婆さんは反物を手に取りあげて見てゐた。そして絲を切つて、尺を出して一緒に丈を量りなどした。

「どうでせう柄は。」お増は婆さんの機嫌を取るやうに訊ねた。

「ぢみでないかえ、ちつと。」

「私ぢみなものが好いんですよ。もうお婆さんですもの。」お増は自分の世帯持のいゝことに、自信あるらしく言つた。

十二

淺井の細君が、ふと其處へ訪ねて來た。

「御免下さい。」どこか硬いところのある聲で、然ういひながら格子戸を開けた其女の束髪姿を見ると、お増は立ろに夫と感ついた。細君は軟かい單衣もののうへに、帶などもぐしや〳〵な締方をして、取繕はない風であつた。丈の高いのと、面長な顔の道具の大きいのとで、押出が立派であつたが、色澤がわるく、淋しかつた。

細君は格子戸を開けると、見通になつてゐる茶の室に坐つた二人の顔を見比べたが、傘を持つたまゝ悵惘してゐた。

お増は横向に俛いてゐた。

「おや誰方かと思つたら、淺井さんの奥さんですかい。」お千代婆さんはそこを離れて來た。

「さあ萬望。」

「有難うございます。」細君は手帕で汗ばんだ額などを拭いてゐたが、間もなく上へあがつて挨拶をした。そして時々じろ〳〵とお増の方を眺めた。

「この方は近所の方ですがね。」お千代婆さんは、お増を[illegible]に庇ふやうにしながら言つた。

「さいでございますか。」細君は[illegible]なしの硬張つた[illegible]、適當の顔も見つからずに、淋しい笑顔を此方へ向けたきりであつたが、其日は細君の方へ[illegible]いてゐた。そして細君が何を言出すかを注意してゐた。

「淺井さんも、此頃ぢや大分[illegible]が好いやうで、何よりですわな。」お千代婆さんはお愛想を言ひながら、お茶を淹れなどした。

「何ですかね。」細君は氣のない笑方をした。

「外ぢや奈何だか知りませんけれど、内は些とも好いことはないんですよ。加之[illegible]してゐますか、この頃は子供があるものですから、世話がやけて爲ようがないんでございますよ。」

細君は斷々に言つた。

「然うですつてね。お貰ひなすつたつてね。」

「何ですか。料理屋とか、待合とかの女中と、情夫との間に出來た子ださうですよ。子供がないから、貰つて來たつていふんですけれど、何だか解りやしませんよ。此方へはちよい〳〵伺ひますの。」

「偶あに見えますがね。」

お増は莨をふかしながら、熟と二人の話に聽入つてゐたが、平氣で然うしたなかに置かれ

た自分を聽きてゐる自分の心持が、可笑しいやうであつた。

「私後に來ますわ。」お増は反物を隅の方へ片づけると、さう言つてそこを出た。そして細目に開けてあつた水口の方から窃と家へ入つた。

三十分ばかり、不安な待遠しい時が移つた。細君は直に歸つて行つた。

「方々尋ねてあるいてゐる様子だぜ。」お千代婆さんは、客を送出すと、急いで下駄を突かけてやつて來た。

「お増さんも、あんなに長く引留めておくと云ふのが惡いわな、」

「私を何だと思つてゐたでせう。」お増は眉根を顰めた。

「それは解るもんぢやない。私も何とも言出しやしないだから。」

十三

[illegible]町の方へ引移つてから、お増はどうかすると買ものなどに出歩いてゐる淺井の細君の姿を、餘所ながら見ることがあつた。

その頃には、一夏過したお増の様子が滅切り變つてゐた。世のなかへ出た當時の、[illegible]な目の利方や、調子はづれの擧動が大分除れて來た。櫛だの半襟だの下駄などの好みに、下町の堅氣の家の神さんに見るやうな澁味が加はつて來た。どこか稜ばつたところのあつた顏の輪郭すら、見違へるほど和げられて來た。

「ほんとにお前さんは、憎いやうな身裝をするよ。」新調の着物などを着て訪ねて行くお増の帶や、繻絆の袖を引張つて見ながら、お千代が可羨しさうに言つた。

「今のうち、もつと派手なものを著た方がいゝぢやないの。」

「うゝん、派手なものは私に似合やしないの。それに其様なものは先へ寄つて困るもの。」

淺井はその頃、根岸の方の別宅へ引込んでゐる元日本橋の可也大きい羅紗問屋の家などへ出入してゐた。店を潰してしまつたその商人は、才の利く淺井に財産の整理を委すことにしてゐた。淺井は外にも、色々の仕事に手を染めはじめてゐた。會社の下拵などをして、香木家に權利を讓渡すことなどに、慣れた手際を見せてゐた。

お増を落ちつかせる家を、淺井は往復の便を計つて、すぐ自分の家の四五町先に見つけた。そこへ新しい箪笥が持込まれたり、洒落た茶箪笥が据ゑられたりした。

「燈臺下暗しといふから、此方が反つていゝかも知れんよ。」淺井は初めてそこへ落著いたお増に、酒の酌をさせながら笑つた。もうセルの上に袷羽織でも引掛けようといふ時節であつた。新しい門の柱には、お増の苗字などが記されて、路次小路にゐた時分、餘所から貰つた犬が一匹飼はれてあつた。ふか／＼した絹布の座蒲團が、入替へたばかりの藺の匂のする青疊に敷かれてあつた。淺井の金廻のいゝことが、些とした手廻の新しい道具のうへにも、氣持よく現はれてゐた。

ワイシャツ一つになつて、金縁眼鏡をかけて、向前に坐つてゐる淺井の生々した顏には、活動の勇氣が、溢れてゐるやうに見えた。お増の目には、その時ほど、頼しい男の力づよく映つたことは曾てなかつた。

淺井の調子は、それでも色の褪せた洋服を著てゐた頃と大した變化は認められなかつた。人柄な優い優しい話振の調子と、ぼけ／＼しいことの嫌ひなその身裝などが、長いあひだ女で遊場所などで磨かれて來た彼の心持と調和したものであつた。

こゝへ移つてからも、お増の目には、お千代婆さんの家で、穴のあくほど見詰めておいた細君

彼の顔を後に、始終絡りついてゐた。

「あなたのお神さんを、私つくづく見ましたよ。」お増はその當時よく淺井に話した。

「へえ。家内の方ぢや何とも言やしなかつたよ。少しは變に思つたらしいがね。」

「そこが素人なんですよ。」お増は氣の毒さうに言つた。

「私あの人と二人のときの貴方の様子まで目につきますよ。」お増は興奮した目色をして、顳顬などのしつかりした、目元の優しい男の顔を見詰めた。

十四

迷宮へでも入つたやうに、出口や入口の容易に見つからない其一區劃は、通の物音なども全然聞えなかつたので、宵になると窟にでもゐるやうに闃寂して居た。時々近所の門鈴の音が揺れたり、石炭殻の敷かれた道を歩く跫音が、聞えたりする限であつた。

二人きり差向の部屋のなかに倦きると、淺井は女を連出して、可也距離のある大通の明みへ樂しい冒險を試みたり、電車に乘つて、日比谷や銀座あたりまで押出したりした。

小綺麗な門や、二階屋の立竝んだ靜かな町を、其時お増は淺井につれられて歩いてゐた。二人は一緒に入るやうな風呂桶を買ひに出た歸路を歩いてゐるのであつた。桶を買ふまでに、お増は小人數な家で風呂を焚くことの不經濟を言立てたが、淺井は色々の場所におかれた女を眺めたかつた。

灯影の疎なその町へ來ると、急に話を途めて、女から少し離れて溝際をあるいてゐた淺井の足が、ふと一軒の出窓の前で止つた。格子戸の上に出た丸い電燈の灯影が、細い格子のはまつた其窓の障子や、上口の土間にある下駄箱などを照してゐた。お増は直にそれと感づけた。

「およしなさいよ。」お増は此方から手眞似をして見せたが、男は出窓の下を暫く離れなかつた。家は闃寂してゐた。

「へえ、あれが本宅？」お増は餘程行つてから、後を振顧りながら言出した。淺井は「ふん。」と笑つた限であつた。

「隨分いゝ家ね。」お増は獨語のやうに言つた。「でも前を通れば、矢張好い心持はしないでせう。可哀さうだとか何とか思ふでせう。」

「へゝ。」と淺井は笑聲を洩した。

歸つてからも、お増は色々の事を淺井に訊ねた。

「それは毅然した女だ。大した腕前も好いし、私がゐないでも、丁と仕事の運びのつくやうに、用を辨ずるだけの伎倆はある。それは認めてゐる。その點は、私の細君として不足はないけれど——。」淺井は言出した。

「おや、何故大事にして上げないんです。」

「どうも行かんよ。女はそればかりでも不可い。寧ろそんな伎倆のない方が、私にはいゝんだ。」然う言つて淺井は笑つてゐた。

晝間お増は、その家の前を通つて見たりなどした。ふと八百屋の店先などに立つてゐる細君の姿を見たこともあつた。細君は額の丸い、目元や口元の愛くるしい子供を、手かけで負ひなどしてゐた。お増は急いで、その前を通過ぎた。

冬になると、淺井の足が一層家の方へ遠ざかつた。偶に細君や子供の様子を見に歸つても、一晩とそこに落著いてゐられなかつた。ヒステリーの嵩じかゝつて來た細君は、淺井の顔を見ると、いきなり其胸倉に飛びついたり、瀬戸物を疊に叩きつけたりした。淺井は蒼い顔をして、貴重な書類などを入れた鞄をさけて、お増の方へ逃げて來た。

「こら、如何だ。」淺井は胸紐の乳を引斷られ

た袢纏を、そこへ脱棄てて、ぶつかけしたやうに火鉢の前に坐つた。

十五

一週間の餘も、放抛つておいた本宅の方へ、浅井は或日の午後、ふと顔を出してみた。そこへ來てゐる簡の手紙も見たかつたし、絶望的な細君に對する不安や憐愍の情も、少しづつ忿怒の消失せた彼の胸に沁みひろがつて來た。長いあひだ貧しい自分を支へてくれた細君の好意や伎倆も考へない譯に行かなかつた。

「離縁するほどの惡いことを、私に對して爲てゐないんだから困る。」浅井は時々思出したやうに、當惑の眉を顰めた。その度にお増は顔に暗い影がさした。

「貴方は一體氣が多いんですよ。」お増は男の心が疑はれて來た。

「どつちへも好い子にならうたつて、それは駄目よ。」お増はさう言つてやりたかつたが、別れさしてから、後の祟の恐しさがいつも心を縮らせた。

浅井の歸つて行つたとき、細君は奥で子供と一緒に寝てゐたが、女中に何か聞いてゐる良人の聲がすると、急いで起きあがつて、[illegible]つうへにある鏡臺の前へ立つた。そして束髪の鬢を直したり、急いで顔に白粉を塗つたりして出て來た。

「お帰んなさいまし。」細君は燥いだ唇に、ヒステリックな淋しい笑を浮べた。筋の通つた鼻などの上に、斑になつた白粉の痕が、浅井の目に物悲しく映つた。

「この前、愛子といふ女が、京都から訪ねて來たときも、恁うだつた。」浅井は直其時のことを想出した。その時は浅井の心は、まだそんなに細君から離れてゐなかつた。細君の影もまだこんなに薄くはなかつた。長味のある顔や、すんなりした手足なども、今のやうに筋張つて淋しくはなかつた。

曾て、京都に、法律書生をしてゐた時分に昵んだ其女は、旦那取などをして、可也な貯金を持つてゐた。そして浅井が家を持つたといふことを傳へ聞くと、それを持つて、東京に親類を持つてゐる母親と一緒に上京したのであつた。浅井はそれをお千代婆さんのところに託けておいて、それ以來の細君と自分との關係などを說いて聞せた。女は寧ろ浅井夫婦に同情を寄せた。そして一月ほど、そつちこつち男に東京見物などさしてもらふと、それで滿足して素直に歸つて行つた。標致のすぐれた、愛嬌のある其女の噂が、いつまでもお千代婆さんなどの話の種子に殘つてゐた。

「浅井さんが、能くまあ、あの女を還したものだと思ふ。」お千代婆さんは、口を極めて女を讃めた。

女が京へ歸つてからも、浅井は細君と相談して、よく色々なものを贈つた。女の方からも清水の煎茶茶碗を寄越したり、細君へ半襟を贈つてくれたりした。

「お愛ちやんは奈何したでせうねえ。」消息が絶えると、細君も時々その女のうへを案じた。

「もう嫁入したらう。」さう言つてゐる矢先へ、思ひがけなく女からまた小包がとゞいた。女は矢張自分の體を決めずにゐるらしかつた。宿屋かお茶屋の仲居でもしてゐるのではないかと思はれた。

浅井はその女の事を、時々思出してゐたが、道樂をしだしてから逢つた色々の女の印象と一緒に、それも次第に薄れて行つた。

十六

浅井は、妻か傍に自分の體を[illegible]めてゐること

を思ふだけでも氣窮であつたが、細君も手紙などを整理しながら、自分の話に身を入れてもくれない良人の傍に長く坐つてゐられなかつた。

「あの靜いちやんがね。」細君は、押入の手箪笥のなかから、何やら古い書類を引くら返してゐる良人を眺めながら、痩せた淋しげな襟を掻合し掻合し、可懐しげな聲で又側へ寄つて來た。

「靜いちやんがね、昨日から少し熱が出てゐるんですがね。」

淺井は押入の前に跪坐んで、手紙や書類を整理してゐたが、健かな荒い息が、口髭を短く刈込んだ鼻から通つてゐた。

「熱がある？」淺井の金縁眼鏡がきらりと此方を向いたが、子供のことは深くも考へてゐないらしく、落著のない目が、直にまた書類の方へ落ちて行つた。

「……急にそんなものを纏めて、どこへ持つていらつしやらうと云ふの。」細君は、そこへべつたり坐つて嘆願するやうに言つた。

「靜いちやんも、あゝやつて病氣して可哀さうですから、些とは落著いて、家にゐて下すつたつて可いぢやありませんか。」

淺井は一片著片著けると、吻としたやうな顏をして、火鉢の傍へ寄つて、莨をふかしはじめた。持主の知合に賴まれて、去年の冬から住むことになつた其家は、藏までついてゐて可也手廣であつた。薄日のさした庭の山茶花の梢に、小禽の動く影などが、障子の硝子越に見えた。

やがて奧へ入つて行つた淺井は、寢てゐる子供の額に觸つたり、手の脈を見たりしてゐたが、子供はぱつちり目を開いて、物珍しげに淺井の顏を眺めた。

「靜いちやん御父さんよ。」細君は傍から聲をかけた。

「なに、大したことはない。賣藥でも飮ましておけば、すぐ癒る。」淺井は呟いてゐた。

「でも私も心細ござんすから、お出でになるなら切めて出先だけでも言つておいて頂かないと、眞實に困りますわ。」

淺井は笑つてゐた。

「お前が素直にしてゐさいすれば、何のこともないんだ。それも臺所をがたつかせるやうなことをして置いて、女狂をしてゐるとでも云ふのなら、また格別だけれど。」

その晩長火鉢の傍に、二人差向ひになつてゐる時、淺井は少し眞劍になつて言出した。

三四杯飮んだ酒の醉が、細君の顏にも出てゐた。

「それに今迄は私を[illegible]てゐたけれど、此頃は少し家の[illegible]し方が下手だとか[illegible]、淺井は、不斷の低い優しい調子で[illegible]一人のことばかりぢやないで、[illegible]まに、お前は何をしてゐる。」

「それは貴方が、何か包みかくしてゐるから、私たつてつまらない時は、偶にお花くらゐ引きに行きますわ。」

「私はそれを惡いと言やしない。自分の著るものまで亡して耽るのがよくないと云ふのだ。」

淺井は此前から氣のついてゐた、つい此頃買つたばかりの細君の指環や、ちよい／＼著の綴織の小袖などの、箪笥に見えないことなどを言出したが、諄くも言立てなかつた。

「どつちも惡いことは五分／＼だ。」などと笑つてすました。

十七

ある晩淺井とお增とが、下町の方の年の市へ行つてゐる留守の間に、いきなり細君が押込んで來た。

お增の圍はれた家を突留めるまでに費した細君の苦心は、一通りでなかつた。淺井が家を出るたびに、細君は車夫に金を握らしたり、腕車

に乘りたいときは、若衆に頼んで、後から見えがくれに尾けさしたりしたが、用心深い淺井は、如何な場合にも、眞直にお増の方へ行くやうなことはなかつた。

「大丈夫でござんすよ奧さん……。」若衆はさう言つて、細君に報告した。

「爲樣がないね。きつとお前さんを撒いてしまつたんですよ。」終に細君は素直にばかりしてゐられなくなつた。大切な株劵が、在る筈のところになかつたり、債劵が見えなくなつたりした。それを發見する度に、細君は目の色をかへた。如何かすると、出來るだけ立派な身裝をして、自身淺井の知合の家を尋ねまはるかと思ふと、絶望的な蒼い顏をして、髮も結はずに、不斷着のまゝで子供をつれて近所を彷徨いたり、蒲團を引被いで二日も三日も家に寢てゐたりした、

　偶に手紙や何かを取りに來る淺井の顏を見ると、いきなり胸倉を取つて武者振りついたり、女中や雇人のやうに暴れまはつたりした。

「そんな[illegible]眞似をしなくとも話はわかる。」

淺井は靜かなことで細君を宥めて下に坐つた。

　細君は、髮を振亂したまゝ、そこに突伏して、子供のやうにおい〳〵と泣出した。

跣足で後から追かけて來る細君をふりはなして、逃出さうとした淺井は、二三町も先から家へ引返さなければならなかつた。

　宵のうちの靜かな町は、まだ其處此處の窓から、町を覗してゐたり、話聲が聞えたりした。

「どこまでも私は尾いて行く。」細君はせいせい息をはずませながら、淺井と一緒に竝んで歩いた。疲れた顏や、脣の色が全然死人のやうに蒼褪めてゐた。寒い風が、顏や頸にかゝつた髮を吹いてゐた。

　そんな事があつてから二三日のあひだ細君は病人のやうに、床につき限であつた。

「つく〴〵厭になつてしまつた。」淺井はお増の方へ歸ると、蒼い顏をして溜息を吐いてゐた。

「全然狂氣だ。」

「爲樣がないね、そんなぢや……。」お増も眉を顰めた。

「爲方がないから、當分放擲つておくんだ。」淺井は苦笑してゐた。

　お増の家のすぐ近くの通をうろついてゐる犬に、細君はふと心を惹かれた。その犬の狐色の尨毛や、鼻頭の斑點などが、細君の目にも見覺えがあつた。犬は淺井について時々自分の方へも姿を見せたことがあつた。

「奧さん、あの尨犬が電車通に居りましたよ。」買物などに出た女中が、いつかも然う言つて報したことも思出された。

　やがて犬の後をつけて、靜かなその地內へ入つて行つた細君は、其方此方へ、買物に來てゐたのであつた。

「ポチ、ポチ、ポチ。」新建の新しい家の裏口へ入つて行つた犬が、內から聞える女の聲に呼込まれて行つたのは、それから大分經つてからであつた。

「爲方がないぢやないか、こんなに足を汚して。」埃口などの幾個も出てゐる、細い路次口に佇んでゐる細君の耳に、そんな聲が聞えたりした。

　晩方に細君は、顏などを扮つて、きちんとした身裝をして、そこへ出向いて行つたのであつた。

十八

　淺井とお増とが、子供に贈る羽子板や玩具などをこて〳〵買つて、それを歸りがけに食べた天麩羅の折詰と一緒に提げながら歸つて來たとき、留守を預つてゐたお増の遠い緣續きにあたる若い女が、景氣よく入つて來るその跫音を聞

きつけて、急いで玄關口へ顏を出した。

「お今ちやん唯今。」

鼻を鳴して絡りつく犬を劬りながら、鐵瓶の湯氣などの暖かく籠つた茶の室へ、二人は冷い頰を撫でながら通つた。

「貴方がたが出ておいでなさると、直其後へ女の人が訪ねて來たんですよ。」お今はそこへ持出してゐた自分の針仕事を、急いで取片著けながら、細君の來た時の樣子を話出した。

「へえ。どんな女?」お增が新調のコートを脫ぎながら、氣忙しく訊いた。

「能くは判らなかつたけれども、何だか老けた顏してゐましたわ。脊の高い痩せた人ですよ。それで、私がお二人ともお留守だと然う言ひましたらば、名も何も言はずに、直に歸つて行きましたよ。」

「てつきりお柳さんですよ。」お增は坐りもしないで言つた。

「私もさう思ひました。」お今も愛らしい目を二人の方へ動かしながら言つた。その顏が美しく薔薇色に火照つてゐた。

「知れる譯はない筈だがね。」淺井は首を傾げながら呟いた。

「貴方がつけられたんですよ必然。」お增は思案ぶかい目色をした。

淺井は目元に笑つてゐた。

「何、知れるものなら、此方が何樣に用心したつて何時か知れる。向はお前、一生懸命だもの。」

「それにしても、あの人きつとまた來ますよ。事によると、何處かそこいらにまだ居るかも知れませんよ。」お增は不安さうに言つた。

「恁うしてゐるところへ踏込まれてごらんなさい、それこそ事ですよ。私はどんなことがあつたつて、あの人と顏など合されやしませんよ。」

自分達の巢を、また他へ移さなければならぬことが、差詰め考へられた。

「わたしお雪さんところへ、暫く行つてゐませうか。」お增は言出した。

「とにかく此處を出ようよ。見つかつちや何彼と面倒だ。」

後をお今に賴んで、二人はそこを脫出した。そして用心深く通まで出ると、急いで電車に乘つた。電車は空いてゐた。そして薄い夜更の町を全速力で走つた。二人は疲れた體を搖られながら、お柳の氣のつかないやうな家を、彼これと物色したが、蒼い顏したお柳が、何處までもへばりついて來さうに思へてならなかつた。

「綺麗に手を切つてしまはなくちや駄目ですよ。」お增は暗い目をしながら、言つた。

手土産などをさげて、木挽町の方の或女人の家の門を叩いたのは、もう十二時過であつた。その女人は、近頃お千代婆さんの處で知合になつた、ある雜誌の記者であつた。

「まあ大變おそく――。」婆さんの家で淺井の舊から知つてゐた其細君は、寢衣姿で出て來て門を開けた。そこにお增が笑ひながら立つてゐた。蔭にゐる淺井の顏には、寒さ凌ぎに途中で飲んだ酒の醉があつた。

十九

夜のものなどの一向手薄なそこの家に、落著のない一晚があけると、その午後淺井はつい近所に、當分お增を置くやうな下宿の空間を探しに出た。

「到頭見つかつたんですかね。可怖い〳〵。」などと友人の細君が三つばかりの子供に乳を含せながら、お增の身のうへを危んでもゐるやうな目色をしてゐた。

「ぢやまあ今度談がつくんでせう。」

「奈何なるか解りやしませんよ。」

その時二人はじめ〳〵した茶の室の火鉢の側で、話込んでゐた。

一時の避難所に擇んだ下宿の方へ移つて行つてからも、淺井が外へ出て行つた後の部屋が氣窮になつて來ると、お增はちよい〳〵氣のおけないそこの茶の室へ茶菓子などを持込んで遊びに來た。そこで髮などを結ふことにした。

「私も子供が一人產んでみたいやうな氣がするね。」お增は無造作に自分の膝へ抱取つた子供の柔かい顏に、頰擦などしながら言つた。

「貰つて下さいよ一人。私のところでは、どしどし出來るさうですから。」

「うゝん、くれるものか。大事に育てなけア不可いよ。」

二三日たつと、何もなかつた下宿の部屋へ、色々の手廻のものが持込まれた。お增は何事か起つてゐるやうな自分の家の樣子が氣にかゝつて來ると、私とそこへ訪ねて行つた。家には毎日裁縫や料理の學校へ通ふお今の外に、氣丈夫さうな知合の婆さんが一人、留守に賴んであつた。

「あ、よし〳〵、お前ばかりだよ。そんなにしてくれるのは。」お增はくん〳〵鼻を鳴しながら、なつかしい主の膝や胸へ取りついて來る愛猫の頭を撫でながら、買つて來た干菓子などを壞して口へ入れてやつた。

「あれから誰も來ない？」お增は家中を見廻りながら、明るい窓のところで、田舍へ出す手紙を書きなどしてゐるお今の後から訊ねたが、矢張お柳の來たやうな樣子はなかつた。

「如何したといふんだらうね。」

何事もなければ無いで、お增は矢張それが不安であつた。そこに自分のために、不運な何物かが待設けてゐるやうに思へた。

「こんな事してゐたつて、姉さんつまらないぢやないの。」お今は簞笥から著替を取出してゐるお增の側から言出した。

「著物なぞいくらあつたつて日蔭者ぢや爲樣がないぢやないの。」

堅氣の田舍の家庭から巣立して來たばかりのお今の生な目には、お增の不思議な生活が、煩はしくも慘らしくも見えるのであつた。

「それはお前さん方は然うさ。」お增は笑つてゐた。

外湯に入りつけないお增は、自身湯殿へおりて、風呂の湯を焚きつけたり、しばらく手にかけない長火鉢に拭巾をかけたりして働いてゐた。

日の暮方にお增は獨りで、透徹るやうな湯のなかに體を涵して、見知らぬ溫泉場にでも隱れてゐるやうな安易さを感じながら、うつとりして居た。

二十

赤坂の方で新たに借りた二階建の家へ、漸とお增の落著いたのは、その年もぐつと押詰つてからであつた。それまでにお增は幾度となく、下宿と先の家との間を往來したが、通りがかりに見る暮の氣の忙しい町のさまが、さうして宙に垂下つてゐるやうな不安定な心持に、一層あわたゞしく映つた。

「これぢやお正月が來たつて、爲樣がありやしない。全然旅にゐるやうなものだわ。」

お增はさう言ひながら、何時引拂つて行くか知れない家の茶の室で、不自由な下宿では食べることの出來ない、自分の好きな煮物などで、お今と一緒に飯を食べながら言つた。

そこへ淺井も、一日會社や自分の用を達しに步いてゐた其足で、寄つて來た。

「今日ちよつと家へ行つて見たよ。」淺井は落著のない目色をしながら、火鉢の側へ寄つて來た。

「あの、奧樣か旦那がお歸りになりましたらば、些とでもいゝから、おいで下さいましつて。」さ

う言つて昨日の朝、お柳の方から使が來た。そ
れを聞いて、淺井は、そこへ廻つて見たのであ
つた。
「どんな樣子でしたね。」お増は訊いた。別れ
話が巧く纏るか如何かが、あの事件以來、二人
の頭に離い刺戟を與へてゐたが。細君から悉皆
離れて了つた淺井の心には、まだ時々微な反
省と苦痛とが刺のやうに殘つてゐた。
「むゝ別に變りはない。」淺井は、自分から見棄
てられてしまつた、寂しい荒れた家のさまや、
絶望の手を擴げてまだ自分に縋りつかうとして
ゐるやうなお柳の遣瀨ない顏を、今見て來たま
まに思浮べながら、淋しく笑つた。
「話を持出して見たのですか。」
「それも口を切つて見たけれど、あゝなると女
は解らなくなるものと見えて、薩張要領を得な
い。」
「それは然うですよ。それでどう言つてゐるん
です。」
「要するにお前を突出してくれと言ふに過ぎな
い。」
淺井はお柳がお増のことや色々聞きたがつた
ことなどを思出してゐた。
「どうせ當人同士ぢや話の纏りつこはありま
せんよ。誰か人をお入れなさいよ。」
「それにしても、目と鼻の間ぢや仕事がしにく
い。早く家を見つけなくちや。」
新しい家の方へ、間もなく荷物が私と運込
まれた。綺麗な二階が二室もあるやうなその家
は、前の家からみると周圍なども綺麗で住心地
がよささうであつた。暫くのまに減切殖えた道
具を、お増は側から一日かゝつて、それ〴〵片着
けた。そして久振で寛いだやうな心持になつ
て、そこらを掃いたり拭いたりしてゐた。
洒落た花形の電氣の笠などの下つた二階の縁
側へ出て見ると、すぐ目の前に三聯隊の黒い煉
瓦の兵營の建物などが見えて、飾竹や門松の
悉皆立てられた日の下の屋並には、もう春が來
てゐるやうであつた。賑かな通の方から、樂
隊の囃などが、聞えて來た。
「ちよいと、こゝならば長くゐられさうね。」詰
物などを飾つてゐる淺井を振顧つてお増は悦し
さうに浮々した調子で言ひかけた。

二十一

心のわさ〳〵するやうな日が、年暮から春へ
かけて幾日となく續いた。お増は暮の町を珍し
がるお今をつれて、ちよい〳〵した物を買ひに、
臆面もなく、[illegible]出て行つたが、臺所で
電話など掛けるのに忙しかつたが、初めて一家
の主婦として、色々の事に氣を配つてゐる自分
の女房振が、自分にも珍しかつた。
羅紗問屋の隠居が、引越祝に贈つてくれた銀
地に山水を描いた屛風なども、飾られた二階の一
室で、淺井の友達の、小林といふ剽輕な辯護士
と、醫者あがりのその妻と一緒に、お増夫婦は、
好きな花を引いて、樂しい大晦日の一夜を賑か
に更かした。
お歳暮に來る人達の出入するたびに鳴つてゐ
た門の鈴の音も靜まつて、その度にお今に呼ばれ
て下へ降りて行つたお増は、漸と落着いて仲間
に加はることが出來た。[illegible]方での交際も、
今年は殘らず此方へ移されることになつたので
あつた。水引のかゝつたお歳暮が階下の茶の室
に堆く積まれてあつた。
お増はお今などの前にも矜しく思つた。
「へえ、またビールなの。そんなものを擔込む
人の氣がしれないね。」
お増は宵のうちに、もう手廻しに結つて貰つ
た丸髷の頭を据ゑながら、長火鉢の傍から顔を
顰めてゐた。
「奥さん〳〵、今年は貴女有卦に入つてゐます

よ」酒ずきな辯護士は、ぐで〳〵に醉つても、未だにちや〳〵する猪口を手から離さなかつた。

「お柳さんの方は大丈夫、私が談をつけてあげます。その代り私が頼まれます。少し殺生だが、そのくらゐのことは奧さんのために、私が心配しますよ。」辯護士は、太い青筋の立つた手で、猪口をお増に差しつけた。

「いゝえ。如何いたしまして。私はどうだつて可いんです。」お増は横を向いて、莨をふかしてゐた。

除夜の鐘が、ひつそり靜つた夜の濕つぽい空氣に傳つて來た。やがて友達の引揚げて行つた座敷に、夫婦はしばらく茶を淹れなどして、しめやかに話しながら差向ひでゐた。綺麗に均された桐胴の火鉢の白い灰が、底冷のきびしい明方ちかくの夜氣に蒼白めて、酒のさめかけた二人の顏には、深い疲勞と、興奮の色が見えてゐた。表にはまだ〳〵人足が絶えてゐなかつた。夜明にはまだ大分間があつた。

明方は靜かな、好い天氣であつた。空には紙鳶のうなりなどが聞かれた。昨夜のまゝに散らかつた座敷のなかに、ふか〳〵した蒲團を被いて寢てゐる二人の姿が、淡いお春の目に、明るしく婚禮した夫婦か何ぞのやうに、物珍しく映つた。部屋には薄赤い電氣の灯影が、夢のやうに漂つてゐた。

「何だか貴方と私と、御婚禮してゐるやうね。」

著替をしたお増は屠蘇の銚子などの飾られた下の座敷で、淺井と差向ひでゐるとき、獨りでさう思つた。そこへお今も、はれ〴〵した笑顏で出て來て、「おめでたう。」と可羞しさうにお辭儀をした。健かな血が、化粧した肌理のいゝ頰に、美しく上つてゐた。

綱引の腕車で出て行く、フロック姿の淺井を、玄關に送出したお増は、屠蘇の醉にほんのり顏をあからめて、恭しくそこに坐つてゐた。

家のなかが、急にひつそりして來た。羽子の音などが、もうそこにも此處にも聞えた。自分は自分だけで年始に行くときの晴著の襦袢の襟などをつけてゐるうちに、もう晝になつて、元日の氣分がどことなくだらけて來た。

二十二

長火鉢の側の柱にかゝつた日暦の頁に遊び事や來客などの多い正月一月が、幻のやうに剝がれて行つた。

お増は春になつてから一度、二人打揃うて訪ねてくれた根岸の隱居の家へ淺井と一緒に出かけて行つたり、その連中と芝居を見に行つたりした。何時か淺井の骨折で、それを抵當に一萬圓ばかりの金を借りたりなどした別莊に、隱居はお芳と云ふ妾と一緒に住んでゐた。そして方々に散らかつてゐる問屋時代の貸などを取立てて月々の暮しを立ててゐたが、贅澤を爲慣れて來た老人は、矢張それだけでは足りなかつた。時々古い軸が持出されたり、骨董品が賣拂はれたりした。色白の肉づきのぽちや〳〵した、目元などに愛嬌のあるお芳は、上がもう中學へ通つてゐる此の子供達と一緒に、激しいヒステリーで氣が變になつて東京在の田舍の實家へ引込んでゐる隱居の連合が、家政を切廻してゐる時分には、まだ相模の南の方から來て間もないほどの召使であつた。

五十三四になつた胃病持の隱居は、お増の訪ねて行つたときも、何時ものとほり、朝から酒に醉つてゐた。痛飮の強いらしいその目が、どんよりした色に濁つて、調子が相變らず突拍子であつた。

庭木や、泉水の金魚などに綺麗に手入のされた、廣い平庭の芝生に、暖かい日が當つて、隱居の居室は、何不足もなく暮してゐる人の住居

のやうに、安靜であつた。

「お揃でおいでになつたんだ。一つ何處かへ美いものでも食べに行からぢやごわせんか。」隱居は少しふらつくやうな、細長い首を振立てて、妙な手容をした。

どこが可からうかと云ふ評議が始つた。

「そのらへ酒を召食つて、皆さんに迷惑かけるよりか、今日はどこぞお芝居がいゝぢやございませんか。」お芳が傍から言出した。

「芝居もいゝが、どこか顏を知られねえところへ行から。知つたところは金がかゝつて爲樣がねえ。」隱居は捲舌で言つた。

「私はな、いくら零落れても、盛場所などへ出かけて行つて、吝々するのは大嫌だ。淺井さん、私は大概然う云つた性分だ。」

今に行詰つて來ずにはおかぬ隱居の身のうへが、淺井にもお增にも見透されるやうであつた。

「お芳さんは、あゝやつてゐて終に如何するんでせうね。」外へ出ると、お增は不安さうに訊いた。

「あの人、自分でお金をよけておくと云ふ風でもないのね。著物や何か、いくら拵へたつて知れたものですわ。」

「それでも、まだ二年や三年はね。」淺井は薄笑をしてゐた。

二組の夫婦は、時々誘ひあはして、淺草を歩いたり、相撲見物に出かけたりした。そしていつも醉拂つて、隣の客に喰つてかゝりなどする隱居のそばに、淺井もお增もはら〱してゐたが、お芳は手帕を口にあてて、顏を顰めながら、後でくす〱笑つてゐた。

「何が可笑しいんだい。」隱居は額に筋を立て、お芳を呶鳴りつけた。それがまた可笑しいといつて、お芳は淺井夫婦と顏を見合せて腹を抱へた。

二十三

「私暫くのあひだお宅に御厄介になつてゐてもよくて?」

月が代つてから、痔に悩んでゐた淺井が、伊豆の方へ湯治に行つた留守に、お雪が不斷著のままで、ふと或日お增のところへやつて來た。

お雪は前の家にゐる時にも、青柳と喧嘩したとかいつて、一度泊りがけで遣つて來たことがあつたが、その時は直に青柳が來て連れて行つた。

黑い眼鏡などをかけた青柳は、そのをり淺井にも些と逢つて挨拶をして行つた。餘り人柄のよくない、そんな男の出入することは、淺井には快くはなかつたが、お增は淺井に内密で、時々お雪に小遣などを貸してゐた。

「何だか自分の作つた唄の本を出すんだとさ。」

お雪は芝居の方が全然駄目になつた青柳が、流行節のやうな自作の讀賣を出版するその費用の融通を、お增に頼みに來たりした。

「あの人駄目よ。あんた一生苦勞しますよ。それよりかあの人と手を切つて、今のうち黑田に泣きついて、何とかしてもらつたら如何。その話なら宅の旦那に相談したら、先方へ交渉つてもらへないこともなからうと思ふがね。」

お增は、お雪が先に見込もない藝人などに引摺られてゐるのを、齒痒く思つたが、長いあひだ慣れあつた二人のなかは、手のつけやうもないほど廢頽し切つてゐるのであつた。前垂がけに、半襟の附いた著物を著て、ずるりと火鉢の傍へ寄つて來たお雪は、地の荒れた顏にだらけた笑を浮べてゐた。一時此女にあつた藥鉢な氣分さへ見られなかつた。

「へえ。また喧嘩したの。」お增は氣なしに訊いた。

「いゝえ、然うぢやないの。」お雪は莨をふか

しながら、にや〳〵してゐた。
「青柳が少し仕事をするんだとさ。」
「仕事つて何さ。」
「大變な仕事さ。」お雪は矢張笑つてゐた。
「後家さんでも瞞すのかい。」
「まあ然う云つたやうなもんさ。その相手が餘所のお孃さんなの。」
「へえ、罪なことをするね。」お増はさう思ひながら、友達の顔を眺めてゐた。
お雪は少し顔を顰めながら、「それには私が家にゐては都合が惡いのだとさ。」
「家へ引張り込むの。」
「多分さうでせうよ。」お雪は極惡さうに俛いてゐた。
「わたし、あの男あんなに惡い奴ぢやないと思つてゐたら……どうして。」お雪は呟いた。
「藝ぢや駄目だから、色で金儲をするなんて、あの男も墮落したものさ。あんな男に引かゝるお孃さんがあるのかと思ふと、氣の毒のやうな氣がするわ。それアお前さん、先は名譽のある人だもの、そんなことが新聞にでも出てごらんなさい、堪つたもんぢやありやしないわ。そこが青柳の附目なのさ。」
「その孃さん見たの。」
「いゝえ。」

二十四

「だけど私もう一度あんな氣になつて見たいと思ふよ。若い時分には、大なり小なり皆そんなやうな事があつたぢやないの。」
お雪は青柳が受取つたと云ふ手紙の、心をこめた美しい文句やら、指環だの髪の道具だの、青柳の手に渡つた持物などから顔も樣子も略想像のできるやうな、その令孃の淡々しい心持を思出してゐた。令孃は些とした實業家の娘であつたが、まだ年の若い派手ずきなその繼母が堅氣の女でないことだけは解つてゐた。
「ほら、二人で樂屋へ入つて行つたことがあるぢやないかね。」
お雪は田舍の町で、お増などと一緒に通つてゐた、常磐津の師匠の處へ遊びに來る、土地の役者の舞臺姿などに胸を唆られて、その役者から貰つた簪を挿して、嬉しがつてゐたことや、手を引合ひながら、暗い舞臺裏を通つて、可怕々々その部屋へ遊びに行つたことなどを、能く覺えてゐた。朝顔日記の川場の深雪などをしてゐた役者の面影が、中でも一番印象が深かつた。
「……何でも二人で行つた時だつたよ。何が悲しかつたのか、三人とも舞臺も見ないで、おいおい泣いてゐたぢやないの。泣かなくちや惡いとでも思つたものだらうよ。」
お雪はお増の手を打つて、目に涙の入染むほど笑つた。
「莫迦だね。」お増も苦笑した。「あの時分はまだ眞の子供だもの。漸と十四か五だよ。」
「でも色氣はあつたんだわねえ。」
紫の袴をはいたお今が、「たゞ今。」と云つて歸つて來たとき、お増は臺所で瓦斯の火で、晩の食物を煮てゐたが、その傍に、お雪も何かの皮を剝きながら、無駄話に耽つてゐた。
「段々好くなるよ、あの娘は――。」お雪は自分の部屋へ入つて行くお今の後姿を見送りながら、呟いた。
「あんな娘を傍におくと、險難だよ。」
「うゝん、まさか。」
「初めて見た時から見ると、全然變つたよ。――あんな時分が一番いゝわね。何の氣苦勞もなささうで。私なんか、長いあひだ何をして來たんだらうと、然う思ふよ。――恁うしてこんな事して終に死んぢまふんだわね。」
さう言ふお雪の横顔が、お増の目に慘に見えた。張合のなささうな、暗い其の生活が坐に

隔てられもした。
「私まだ彼處にゐた時の方が、いくらか氣に引立があつたよ。出てしまつて、反つてつまらなくなつて了ひましたよ。」
「でも青柳さんが、そんな事してゐれば、矢張好い氣持はしないでせうね――」
「何でもありやしませんよ。」
お雪は剝くものを剝いて了ふと、それを[illegible]に入れて、水口にゐる女中の方へ渡した。そして柱に背を凭せて、そこに蹲坐んでゐた。
「ちよいと、貴女とこのこれは如何して？」お雪は小指を出して見せて、「もう片著いて？」
「うん、未だ駄目なの。」お增は眉を顰めた。
「旦那が代つたら、お柳の兄さんが田舍からその談に出て來ることになつてはゐるんですけれどもね。」
「家の青柳も、堅氣になつて、何かこんなやうな事でも出來ないものか知ら。」お雪は獨語のやうに言つてゐた。

二十五

「お增さん、今日は私ちよつと家へ行つて見て來ますわ。」
お增と差向ひの無駄話や花などに、うか／＼した四日や五日は直に過ぎてしまつた或日の晩方、お雪はふと憶出したやうに、長火鉢の傍に放下してあつた煙管を袋に收めて出て行つた。
「貴女はほんとに仕合だよ。」お雪は簞笥から出してみせる、お增の新調の著物などを眺めながら、さう云つて可羨しがつてゐたが、こゝに居昵むにつれて、近頃滅切お增の生活の豐になつたことが、適切に解つて來た。
その日は午後にまはつて來た髮結に、二人一緒に、髮を結はしなどしたが、お雪は鏡に向つて見る自分の、以前はお增などより髮の多かつた頭髮の地が滅切すけて來たことが、心細かつた。鏡臺を据ゑた縁側の障子からは、薄い日影がさして、濁つた顏の色が、黄色く鏡に映つてゐた。
「こら、こんなに禿が大きくなつたよ。」お雪は下梳が、癖直しをしてゐるとき、眞中のすけた地を、指頭で撫でまはしながら、面白さうに笑つた。「もう十年も經つたら、此邊は全然毛がなくなつて了ふよ。」
お增は結立の頭を据ゑて、側に莨をふかしながら見てゐた。十六七時分から、妾にやられたり、商賣をさせられたりして來た、友達のこの十五六年間の暗い生活が、振顧られた。
「鼠の子を黑燒にして飲むと好いなんて、能くそんなことを言つたものだけれど、當になりやしない。」お增はそんな事を思出してゐた。
「矢張身體が弱つてゐるんだよ。」
「迚も遣切れないと思ふこともあるわね。」
二人はさう言つて、大話をしながら、髮結と一緒に笑つた。
家へ歸つて行つたお雪が、二三日してまた訪ねる頃には、もう淺井の湯治場から歸つて來た家のなかが、何となくごたついてゐた。
來客のある二階から降りて來たお增の顏は、どこかいつもより引締つて、物思はしげであつたが、食物の支度に取散らかされた長火鉢の傍に坐つて、銅壺に浸つた酒の罎などを見ながら、待つてゐるお雪の顏を見ると、意味ありげな目色をして、にやりと笑つた。お雪は直にそれと呑込めた。
「お柳さんの兄さんと云ふ人が、田舍から出て來たもんだから、急に話をつけることになつたの。」
「へえ、その兄さんが來たの。」
「いゝえ、間へ入る人――辯護士よ。」
「うまく行きさう。」

「うゝん、如何だか。」
お増は煙管を取りあげて、莨をふかしながら、考へ深い目色をしてゐた。
「これは、迚も承知しませんよ。」お増は小指を出してみせた。「だけど、兄さんと云ふ人が、田舎で役人をしてゐて、慾張なんですつて。それがお父様で、如何でもなりさうなんだと。」お増は不安さうに呟いた。
「それに、宅ぢや随分綺麗な話をしてゐるんだもの。先の身の立つやうに。」お増は落着いて、そこに坐つてゐなかつた。
「あのお嬢さん如何したの。」立ちがけにお増が聞いた。
「駄目よ、物になりさうもないものにならずじまひだと。」お雪は苦笑した。
「醜い、あんなお嬢さんに引つかゝるもんか。それに、来てみて、家の汚いのに呆れたでせうよ。」

二十六

その後で菓子を持つて、二階へ上つて行つたお増は、色々の打合をしてゐる浅井と小林看護士との側に、お茶などをしながら、二三十分も坐つて話を聴いてゐると、直にまた下へ降りて来た。
お柳の兄が来たと云ふ電報を受取つて、浅井が東京へ帰つて来るまで、小林はもう二度もお柳の家で兄に会見してゐるのだと云ふことであつた。
「どんな人です。」小林の口から話される、談判の進行模様などを聞きながら、お増が訊きたがるのであつた。
小林の談によつて想像される彼以来のお柳は、持病のヒステリーが一層昂じてゐるらしかつた。秋になつてからは、浅井の一度も姿の見せぬ、物寂れた家のなかに、絶望的な其日々々を送つてゐたが、時々子供などをつれて、浅井の様子を探りかたがた、小林の細君の方へ、私と遊びに来た。是迄に、浅井と一緒に苦労して来たことが、その度に其口から繰返されるのであつた。
「少し懐が温まつて来ると、もうあんな女などに引つかゝつて。女が悪いんですよ。浅井だつて今に目がさめますよ。」
お柳はさう言ひながら、如何かすると、居所さへ明してくれぬ小林に突かゝるやうな様子を見せたが、其都度小林の細君に慰められて帰つて行つた。
小林が迚も自分の味方でないことが、直にお柳に解つて来た。
「小林さんだつて、酷いぢやありませんか。」
お柳は、田舎から出て来た兄と談判を進めようとしてゐる小林の傍へ来て、口を聞きないまでに、いきり立つて罵みかけた。夜もおちおち眠らないらしい其顔が、げつそり肉が落ちてゐた。
「私にくれるお金を、その人にくれて手を切らして下さい。」お柳はさう言つて肯かなかつた。
「そんなら其人を、自宅へつれて来ておけば可いぢやありませんか。」お柳はそこまでも終に気が折れて来たのであつた。
お柳のさうした苦悶を、お増は自分の胸にも響けて来るやうに感じた。お千代婆さんの家や、途中などで、二度も三度も見かけたことのある、お柳の蒼白い顔や、淋しい寝をすな後姿などが、彷彿目に浮んで来た。
「矢張貴方が悪いんですよ。」お増は浅井の顔を眺めながら、さう思つた。どんなことにも動かないやうな険しい浅井の目は、怜悧さうにてらてら光つてゐた。
「兄貴ですか。さうさね。」小林はお増の顔を眺めて、
「彼此五十からの年輩でせう、――四十七八だ

ね。收税吏も余り好いところぢやないらしいよ。一度御馳走でもして、金の顔を見せさへすれば、それは請合つて綺麗に纏まる。金のほしいと云ふことは、歴々見えすいてゐるんだ。」

「お金はみんなその人の懐へ入つてしまふんでせう。」お増は訊いた。

「どうせ然うさ。」浅井が淋しく笑つた。

「可いぢやないか、金がお柳さんの身につかうと附くまいと。」

階下へおりると、お雪が飛んだところへ来合せたと云ふやうな顔をして、淋しさうに火鉢の側へ膝を崩してゐた。その前へ来て坐るお増の顔には、胸に溢れる歓喜の情が蔽ひきれなかつた。

二十七

飲出すと、何時も後を引く癖のある小林が、浅井と二三番も碁を闘はしてから、帰つて行つたのは、大分遅くであつた。

「また始まつたよ。」二階に碁石の音の冴えだした時に、丁度お雪からその令嬢の話など聞かされてゐたお増は、傍に針仕事をしてゐるお今と、顔を見合せながら呟いてゐた。お雪の口からは、お今が熱る顔に袖をあてて、横へ突伏してしまふほど、極の悪いやうな事を、話出された。

「今度私にも加勢しろと、青柳が然う言ふんだけれど、いくら何でもそんな罪なこと私に出来やしませんわ。つまり、私が現場へ誘り込むか奈何かするんでせう。」

「へえ、そんな人の悪いことするの、まるでお芝居のやうだね。」お増は目を丸くした。

「ほんとに私も厭になつてしまつたのよ。」お雪は可恥しさうに俛いた。

「そんな事して、法律の罪にならないの。」

「如何だか解りやしないわ。」お雪は苦笑してゐた。

そこへ、ふら〳〵と降りて来た小林が、茶の室へ入つて、女達に揶揄ひながら帰つて行つた。

「奥さん今夜から貴女は安心して寝られますよ。」小林は酒くさい息を吹きながら、「その代り、今度は貴女の番ですよ。私が明言しておく。」

小林はさう言ひながら、衆に送出されて出て行つた。

「厭なこと言ふ人だよ。」お雪やお今が寝静つてから、お増は蒲団のなかに横はつてゐる浅井の枕頭へ来て、[illegible]にしたなら、それを種にしてゐた、[illegible]しまぎれに、小林に喰つてかゝるお柳の貧相な顔や、長いあひだ住みなれた東京の家を離れて、兄と一緒に汽車に乗込んで田舎へ帰つて行く姿などが、目に見えるやうであつた。

「あれだけは、己の失策だつたよ。」浅井が[illegible]したやうな顔を[illegible]て話出した。

「己は他に人から非難を受けるやうな点はないんだ。あれに懲りて女には今後断然手を出さんと云ふことにしよう。」

「然うは行きませんよ。」お増はまじ〳〵其顔を眺めてゐた。

「いや、あんな女もちよつと希しいよ。恁うなるのが、彼奴の当然の運命だよ。己は決して可哀さうとは思はん。」長いあひだ、お柳に苦しめられて来たことが、浅井の胸に[illegible]られた。

「でも、私は一生あの人に祟られますよ。」

「莫迦言つてら。」浅井は笑つた。

「後悔するのが当然だ。今でこそ話すが、あの女が二日も三日も家をあけて、花を引いてあるく裏面には、何をしてゐたか解るものか。あの女の貞操を疑へば疑へるのだ。」

「何かそんな事でもあつたんですか。」

「まあさ……然う云ふことはないにしてもさ。左に右これで瀟洒したよ。己はこれ迄に、幾度あの女のために、刃物を振廻されたか知れやしない。それに、あの持病と来てゐる。まづ辛抱できるだけして来た心算だ。」

「お鳥目がなくなつたら、また何とかいつて来ますよ、必然。」

「そんなことに応じるものか。」浅井は鼻で笑つた。

二十八

お柳の手許に育てられて来た女の子が、お増の方へ引渡されたのは、お柳母子が愈東京を引揚げて行かうとする少し前であつた。小林の家から、浅井が途中で買つた玩具などを持たせて、その子をつれて戻つた時、お増は物珍しさうに、話をしかけたり、膝に抱上げたりした。

「これが坊やの阿母さんだよ。今日から温順しくして言ふことを聞くんだよ。」

浅井に然う言はれて、子供はにや／＼笑つてゐたが、誰にも人見知をしないらしいのが、お増にも心淋しかつた。

晝からつれて来た子供は、晩方にはもう玩具を持つて、獨りでそこらにころ／＼遊んでゐた。

「氣樂なもんだね。」お増はお今と、傍からその様子を眺めながら言つた。

「ちよいと、何處か旦那に似てゐやしなくて。」

お増はその横顔などを眺めながら、呟いたが、それはただ自分の氣の所爲だとしか思はれなかつた。浅井の言つたとほりに、日本橋の方の、或料理屋に女中をしてゐた知合の女と、その情夫の或學生との間に出来た子だと言ふのが、事實らしく思へた。女が情夫と別れて、獨立の生活を營むにつけて、足手纏になる子供を浅井にくれて、東京附近の温泉場とかへ稼ぎに行つてゐるのだと云ふことも、眞實らしかつた。

「孰にしたつていゝぢやないか。お前だつて、今に子供の欲しいと思ふ時機があるんだから、これを自分の子だと思つてゐれば、それで可い譯だ。」浅井はさう言つて、淡白に笑つてゐた。

年の割に子供のませたことが、日がたつに從つて、お増の目に映つて来た。子供はいつかお増の顔色などを見ることを知つてゐた。自分だけでは、子供と何の交渉を持ち得ないことが、段々お増に解つて来た。憎むときは打つたり撲つたりして、可愛がるときは頬つぺたに舐めつけたり、息のつまるほど抱きしめたりしたヒステリカルなお柳に、長いあひだ子供は弄られてゐたらしかつた。

「……可愛くも、憎くもありませんよ。」子供を傍に据ゑて、自分の箸から物を食べさせなどしながら、晩酌の膳に向つてゐる浅井に、子供のことを訊かれると、お増は、いつも然う言つて答へるより外なかつた。

着飾らせた子供の手を引いて、日比谷公園などを歩いてゐる夫婦を、浅井もお増も、如何かすると振顧つて見たりなどしたことが、二人連立つて出歩いてゐる時の、お増の心に寂しく浮びなどした。

「もう一人で歩くのは可笑しい。」浅井はかう言つては、子供の悦びさうな動物園や浅草へ、遊びに行つた。子供も一緒に見る、不思議な動物や活人形などがお増の目にも物珍しく眺められたが、電車の乗降などに、子供を抱いたり扶へたりする浅井の父親らしい様子を見てゐるのが、何とはなしに寂しかつた。

「靜いちやんや靜いちやんや……。」お増は時々うつかり物に見入つてゐる子供の名を呼んで、柔かい小さい手を引張りなどしたが、矢張氣乗がしなかつた。

「母ちやん——。」子供は父親のゐない家のな

かが寂しくなつて來ると、思出したやうに、抱いてでもらひたさうにお増の側へ寄つて來るのであつたが、女らしい優しさや嬌羞らしい甘い言葉の出ないのが、お増自身にも物足りなかつた。

お増は茶簞笥の罐のなかから、干菓子を取出して、子供にくれた。

二十九

靜子と同じ年頃の男の子が、時々門の外へ來て、「靜子ちやん遊びまちよう。」などと聲かけた。「はーい。」と奥から返事をして、靜子は護謨鞠などを持つて駈出して行くのであつたが、男の子は時々呼込まれて家のなかへも入つて來た。色の蒼い、體の尫弱さうなその子は、色々な玩具を取出して暫く靜子と遊んでゐるかと思ふと、直に飽きて了ふらしかつた。

「坊ちやんの御父さんは何をなさるの。」

二人で仲善く遊んでゐる子供のいたいけな樣子に釣込まれながら、お増はいつか自分の荒く育つた幼年時代の事などを憶出してゐた。町外れにあつたお増の家では、父親が少し許りあつた田畑へ出て、精悍〳〵しく能く働いてゐた。夏が來ると、柿の枝などの年々可懷しい蔭を作る廂のなかで、機臺に上つて、靜かにかち〳〵機を運んでゐる、陰氣らしい母親の傍に、搖籃に入れられた小さい弟がおしやぶりを舐つて、姉の自分に搖られてゐた。夏になるとその子を負つて、野畑の緣にある茱萸の實などを摘んで食べてゐたりした自分の姿も憶出せるのであつた。

男の子は、直に迎ひに來る女中につれられて歸つて行つた。

「僕の父さん博士でツ。」子供はお増の問に答へた。

その博士が、或大學の有名な教授であることが、をり〳〵門口などで口を利合ふほどに心易くなつた女中の口から、お増に話された。

「旦那さまは、それでも一年に四五回も入らつしやるでせうかね。」

さう言ふ女中は、小石川の方にある博士の邸のことについては何も知らなかつた。しかし子供の母親が、逗子にある博士の別莊に召使として住込んでゐる時分に、ふと博士の胤を娠んだのだと云ふことや、或權門から嫁いで來た夫人の怒を怖れてその事が博士以外の誰にも、絶對に祕密にされてあることだけは知られてあつた。

門へ出て、時々子供を見てゐる、醜いその母親の束髮姿が、それ以來お増の注意を惹いた。年の比五十ばかりの博士は、不斷着のまゝ、辻俥などに乘つて、偶にそこへやつて來るのであつたが、それは單に三月とか四月とかの纏つた生活費と養育費とを渡しに來るだけに止まつてゐた。女は長いあひだ頑な獨身生活を續けて來た。そして三千四千と、自分の貯金額の、年々增加して行くと同時に、子供の育つて行くのを樂しみに、氣の張りつめた日々を送つてゐた。女と子供との關係は、母子といふよりは、僕婢と幼兒との間柄に近かつた。一生夫をもたずに、子供を仕立てて行かうと誓つた女の志は、益々堅かつた。

「おそろしい嚴しい躾をしますよ。」その母親とも親しくなつたお増は、可笑しいほど子供に對する言葉遣などを上品ぶる、女の樣子を見て來て淺井に話した。

「それごらん、そんなお手本が、ちやんと近所にあるぢやないか。」淺井が言出した。

「それも矢張慾にかゝつてゐるからですわ。」

「それもあるが、子供に對する感情もある。」

「それは腹を痛めた子ですもの、如何したつて違ひますわ。」

外へ出るとき、お増はいつも靜子をつれて行つた。子供は日増に肉親と親しくなつて來た。
田舍へ歸つてからのお柳の病氣が面白くないことが、夫婦の耳へもをり／＼傳つて來た。
「死んだらお前にとつつくだらう。」淺井は時々お増を揶揄つた。

三十

盆前に會社から休暇を貰つた良人と一緒に、靜子をつれて、一月たらずも、そつちこつち旅をして歸つて來たお増は、顔や手首が日に焦けて、肉も緊つて來たやうだつたが、健康は優れた方ではなかつた。一日青々した山や田圃を見て暮したり、ぢち／＼する宿に、持つて來た葡萄酒を飲んだり、嶺のすが／＼するやうな溪川の音にあやされて、温泉場の旅館に、十年來覺えなかつた安らかな夢を結んだりした時には、疲れきつた體が蘇つたやうな氣がしたのであつたが、濁つた東京の空氣に晒された肺、生活の煩勞が、また直ぐ頭に壓被さつて來た。
汽車がなつかしい王子あたりの、緑蔭に黝んだ夏木立の下までも、水の音がまだ耳に着いたり、山の肌が目に消えなかつたりした。長いあひだ見た重苦しい自然の姿が、未だに胸をむか／＼させるやうであつた。
「靜いちやん、もう東京よ。」お増は胸をどきつかせながら、心が張詰めて來るのを感じた。
日暮里へ來ると、灯影が人家にちら／＼見えだした。昨日まで、瀧などの滴垂りおちる巖角に佇んだり、緑の影の顫に涼しく揺れる白樺や澤や桃などの、木立の下を散歩したりしてゐたお増の頭には、長いあひだ無聊のなかに過された自分の生活が、淺ましく振顧られたり、兄や嫂達と一緒に、田舍に暮してゐるお柳の身のうへが、羨まれたりした。
「こんな風に……生活したら、どんなに好いでせう。」お増は涙含んだやうな目色をして、良人に囁いた。
子供の時分、二三度遊びに行つたことのある、叔父の住つてゐる靜かな山寺のさまが、可懐しく目に浮んだりした。
「貴方に棄てられたら、私あすこへ行つて、一生暮しますよ。」氣を紛らすもののない山の生活が、孤獨な頼なさと、生活の果敢なさとに、お増の心を引入れて行つた。
「何といつたつて、自分の家が一番いゝのね。」
お増は、お今などに留守をしてもらつた[illegible]から上ると、ばさ／＼した浴衣のまゝで、緣側の岐阜提灯の灯影に、團扇づかひをしながらせい／＼したやうな顔をしてゐた。
簾を捲きあげた軒端から見える空には、淡い雲の影が遠く動いてゐた。星の光も水々してゐた。
濡れた髮に綺麗に櫛を入れて、淺井の前へ坐つてゐるお増のうへには、お今が拵へた料理が二三品並んでゐた。淺井は、この留守の間で、大分料理の品目の多くなつたらしいお今の手際を、物珍しさうに眺めながら、もうちび／＼酒を嘗めてゐた。
お今が一夏のうちに、滅切頬や目などに色澤や潤ひの出て來たことがお増の目に際立つて見えた。
「お前さん、餘程肉がついたよ。」
「滅切女振があがつた。」淺井も氣持好げに其顔を眺めた。
「若いものは矢張遊びますよ。私なぞ、いくら旅行したつて駄目。」
「あら、あんな……田舍のものばかり見ていらしつたせゐでせう。私そんなに肥つて、如何しようかと思ひますわ。」
お今は淺井の出した猪口にお酌をした。

三十一

冬になつてから、お増は再び淺井に送つてもらつて、伊豆の溫泉へ入浴に出かけて行つたが、その時も長くそこに留まつてゐられなかつた。

冷えがちな細い腰に、毛絲や撚などの腰卷を、幾重にも重ねてゐたお増は、それまでにも時々醫者に診てもらひなどしてゐたが、ちよつとやそつとの療治では快くなりさうもなかつた。

「思ひきつて、根本療治をしてもらはなくちや駄目だよ。」淺井は、下ものなどのした時、蒼い顏をして鬱込んでゐるお増に言つたが、お増は矢張その氣になれずにゐた。

「前には平氣で診てもらへたんですけれど、此節は、あの臺のうへに上るのが、厭で／＼堪りませんよ。」お増はさう言つて、少しの間每日通ふことになつてゐる、病院の方さへ無精になりがちであつた。

伊豆へ立つときも、此頃何かのことに目をさまして來たらしいお今のことが、氣になつて爲方がなかつた。淺井の傍に、飯の給仕などをしてゐる、處女らしい其束髮姿や、彈みのある若々しい聲などが、お増の氣を多少やきもきさせた。

お今に自分が淺井の背を流さしておいた湯殿の戸の側へ、お増は竊と身を寄せて行つたり、ふいに戸を明けて見たりした。

「いゝ氣持でせう。」などと、お増は淺井の氣をひいて見た。

淺井は「ふゝ。」と笑つてゐた。

お今は何の氣もつかぬらしい顏をして力一杯背を擦つてゐた。

お増と二人で行きつけの三越などで、お今に似合ふやうな柄を擇つて、淺井は時のものを著せることを忘れなかつた。

「お今ちやん、旦那がこれをお前さんのに買つて下すつたんですよ。仕立てて著ると好いわ。」

お増は品物をそこへ出して、お今にお辭儀をさせたが、自分にもそれが嬉しく思へたり、妬ましく思へたりした。お今の年頃に經て來た、苦勞の多い自分の身のうへを、考へない譯に行かなかつた。

伊豆の溫泉場では、淺井は二日ばかり遊んでゐた。海岸の山には、木々の梢が美しく彩られて、空が每日澄みきつてゐた。小高いところにある青い蜜柑林には、そつちこつちに黃金色した蜜柑が、小春の日光に美しく輝いてゐた。

湯からあがつて、谿川の音の聞える、靜かな部屋のなかに、差向に坐つてゐる二人のなかには、初めて一緒になつた時のやうな心の自由と放佚とが見出されなかつた。そして何か話合つたり、思出したりしてゐると思ふと、それが過去のことであつたり、前途のことであつたりした。

「前やい――。」淺井は海や人家などの幽かに見える山の麓に突立つてゐたとき、大きな聲を張上げて叫んだ。そして獨りで佗しげに笑つた。聲は何ほどの反響をも起さないで、淋しく山の空氣に掻消えた。

「おつと危い／＼。」淺井は足元の崩れだした山腹の小徑に踏留まつて、お増の手に摑つた。

「いやね。」とお増はその手を引張つたが、心は寂しい或ものに涵されてゐた。蜜柑の匂などのする四下には、草のなかに蟲がそこにも此處にも、ちゝちゝと啼いてゐた。

にや／＼してゐる男の顏を、お増は時々ぢつと瞶めてゐた。惡戲な企みが、そこに浮いてみえるやうであつた。

三十二

淺井の行つてしまつた寂しい部屋のなかに、

お増は毎日湯疲れのしたやうな軀を臥たり起きたりして暮したが、如何かすると草履ばきで、外へ散歩に出かけることもあつた。

部屋の硝子障子から見える川向の山手の方に、がつたん／＼と懈い音を立てて水車が一日廻つてゐたが、小雨などの降る日には、そこいらの杉木立の隙に藁家から立昇る煙が、淡若く濕氣のある空氣に融込んで、子供の泣聲や鶏の聲などが其處此處に聞えた。春雨のやうな細い雨が、明るい軒端に透しみられた。

艮の部屋へ來てゐる、氣樂な田舍の隱居らしい夫婦ものの老人の部屋から碁石の音や、唐金の火鉢の縁にあたる煙管の音が、始終洩れて來たが、つい隣の隅の方の陰氣くさい部屋にごろごろしてゐる一人の青年の、力ない咳の聲が、時々うつとりと東京のことなどを考へてゐるお増の心を脅かした。

「毎日雨降りでいけませんな。」廊下へ出て、縁に蘇鐵や芭蕉の植つた泉水の緋鯉などを眺めてゐると、褞袍姿のその男が、莨をふかしながら、側へ寄つて來て話しかけた。男はまだ三十にもならぬらしく、色の小白い、人ずきの好ささうな顔をしてゐた。時々高貴織の羽織などを引つかけて川縁などを歩いてゐる[illegible]を、お増は見かけてゐた。

「然やうでございますね。」お増は愛想らしく答へたが、よく男に出た口な話の應答などの出來た以前の自分に比べると、恁うした見知らぬ男などと口を利くのが不思議なほど億劫であつた。

どの部屋もひつそりと寢靜つた夜更にお増の目は時々雨續きで水嵩の増した川の瀬音に驚かされた。電氣の光のあか／＼と照渡つた東京の家の二階の寢室の樣などが、目に映つて來た。そこに友禪模樣の肩當をした夜著の襟から口元などのきりゝとした淺井が寢顔を出してゐた。階下に寢てゐるお今のつや／＼した髪や、むつちりした白い手なども、幻のやうに浮んで來た。疲れた頭の皮一重が、時々うと／＼と眠に沈むかと思ふと、川の瀬音が苦しい耳元へ、また煩く寄せて來たり、隣室の男の骨張つた姿が、有明の灯影に可恐しく見えたりした。

そこへ夜番の拍子木の音が、近づいて來た。

夜のあけるに間もない頃に、お増は湯殿の方へ獨り出て行つた。まだ人影の見えない浴槽のなかには、刻々に滿ちて來る湯の滴垂ばかりが耳について、温かい煙が、燈籠の影にもや／＼してゐた。

婦人病らしい神さん風の女や、目さとい婆さんなどが、やがて續いて入つて來た。

お増が湯からあがる頃には、外はもうしらしらと明けて來た。

「翌朝こそ歸りませう。」

昨夜一晩思續けてゐたお増は、朝になると、いくらか氣が晴れて、頭腦のなかのもや／＼した妄想が、拭ふやうに消えて行つた。

雨の霽つた空には、山の姿が希しく分明して見えた。部屋から見える川筋にも、柔かい光が流れてゐた。

朝飯の膳のうへに、病氣の容體を氣にしてゐるお今の葉書が載つてゐた。家には何の事もないらしかつた。

三十三

三週間と云ふのを、漸と二週間そこ／＼で切揚げて來たお増は、嶮しい海岸の斷崖をがたがた走る輕便鐵道や、出水の跡の心淋しい水田、松原などを通る電車汽車の鈍いのにじれ／＼しながら、手繰りつけるやうに家へ著いたのであつた。何時も、じーんと耳の底が鳴るくらゐ淋しい湯宿の部屋に[illegible]つけた頭腦は、入つて來た日[illegible]方の町の[illegible]雑音に、ぐら／＼する[illegible]

であつた。
　お増はがつかりしたやうな顔をして、ぺつたり長火鉢の前に坐つて、そこらを見廻してゐた。
「まあ早かつたこと。」お今が荷物を持込みなどした。浅井はまだ歸つてゐなかつた。
「この頃は、それはお歸りが遅いのよ。だから淋しくて〳〵爲樣がなかつたの。ねえ姉いちやん。」
　お今は今迄臺所にゐた、白いエプロンをかけたまゝ、散らかつた雜誌などを片著けてゐた。靜子は含羞んだやうな顔をして、お増が鞄から出す、土産ものの寄木細工の小さい鏡臺などを弄つてゐた。
「へえ、好いもの貰つたわね。」お今もそこへ顔を寄せて行つたが、冬になつてから、皮膚が一層白くなつてゐた。
　お増は物足りなさゝうな顔をして、火鉢の傍を離れると、簞笥などの据つた奥の室へ入つて見たり二階へあがつて、人氣のない座敷の電氣を捻つて見たりした。押入をあけるとそこに友禪縮緬の夜具の肩當や蒲團を裹んだ眞白の敷布の色などが目についた。
「何も變つたことはなかつたの。」
　お増は階下で著更をすると、埃つぽい顔を洗つたり、袋から出した懐中鏡で、氣持のいい頭髪に櫛を入れたりしてゐた。
「ええ、別に……姉さんがゐないと、家はそれは閑寂したものよ。それに如何したつて兄さんがお留守がちでせう。」
「浮氣してゐるのよ必然。鬼のゐない間にと思つて。」お増は淋しく笑つた。そして脫棄や著替を疊みつけて、奥へ仕舞込まうとするお今に、「それは然うやつておいて頂戴。一遍干すから。」と聲をかけた。
　湯の熱の體にさめないやうなお増は、茶漬で晩飯をすますと、まだ汽車に搖られてゐるやうな體を、少し座蒲團のうへに横になつて、そこにあつた留守中の小使帳や、書附などを眺めてゐた。
「誰も來なかつたの。」
「えゝ誰方も。」とお今は箸を休めて、考へるやうな目色をして、「さう〳〵、根岸のあの神さんが二度ばかり來てよ。何だかあすこに事件が持上つたやうなんですよ。」
「へえ、さう。」と、お増は頭をあげたがお今は赤い顔をして、笑つてばかりゐて、後を話さなかつた。
「可笑しな子だよ、お前さんは。」お増はじれつたさうに呟いた。
「姉さん、男つて皆そんなものでせうか。」お今は眞面目な顔を此方へ向けたが、直に横を向いて紅くして了つた。
「何がさ。」
「だつて可笑しいんですもの。」お今は、また顔に袖を當てて笑ひだした。
「いやなれ。この子は、色氣がついたんだよ。」
お増は眉をしかめた。
「譃よ。」
「旦那に、何か揶揄はれたんだらう。」
　お増は責めて見たいやうな氣がしたが、お今のけろりとしてゐるのが、張合がなかつた。

三十四

　一時頃に、浅井が腕車で歸つて來るまで、お増は臥床に横になつたり、起きて坐つたりして待つてゐた。時々下の座敷へも降りて見た。つい先刻程まで、此頃靜子と一緒に寢ることになつてゐるお今が、枕頭に明をつけて、何やら讀んでゐたのであつたが、それもその頃にはもう深い眠に陷ちてゐた。
　宵にお今が話しかけたことを、お増は二度も

訊いて見たが、ふいと子供らしい無邪気とかから、大人のやうな取澄した態度に変る癖のあるお今は、「つまらないことなの。」と言つたきりで、何にも話さなかつた。お今は一通り家政科に通じてから、帰つて行くことになつてゐる、自分の田舎で生活したものか、それとも好きな東京で暮したものかと、時々それをお増などに相談するのであつたが、結婚とか独立生活とか云ふことについても、自分自身の心持が可也混乱してゐるらしかつた。

「旦那に相談して、好いお婿さんを世話してもらつたら可いぢやないの。」お増はその度に、無造作に然う言つた。

「伎倆のある商人か、会社員がいゝよ。男振などはどうでも可いのよ。」お増はさうも言つたが、最初寄つて来た時から見ると、お今の心が大分自分から離れてゐることなどが、お増にもちら／＼感ぜられた。自分の家のやうな心易さで、お互に往来のできさうなお今の家庭が、自分の思ひどほりに作られさうもないことが寂しくもあり不安でもあつた。

「段々生意気になりますよ。」お増は夫婦でお今の噂をしてゐる折々などに、浅井に話したが、笑つて聞いてゐる浅井はそれを受入れさうにも見えなかつた。

「貴方がちやほやするから、尚更なんですよ。」

「まさか。世間が然うなんだよ。」

「貴方は矢張若い女がいゝものだから。」

浅井はにや／＼してゐた。

「だから、好い加減に田舎へ還す方がいゝんですよ。折角世話して、喧嘩でもしちや詰らないから、きつと然うなりますよ。終には……。」

「それも可からう。」浅井は争ひもしなかつたが、お今を排斥することは、お増にも心寂しかつた。後から／＼と、機嫌を取つて行く、お今の罪のない様子が、可愛くも思はれた。

「そんな深い考へを持つてやしないよ。」お増が少し悔いたやうな時に浅井の言出す言葉が、男だけに大様だとも感心されるのであつた。

玄関へあがつて来た浅井は、どこか落著がなかつた。酒の気のある顔の疲れが、お増の一瞥にも解つた。

「ちと早いぢやないか。」浅井は火の気のまだ残つてゐる火鉢の前に坐ると、言出した。此頃ちよいちよい逢つてゐる女の家で、今日もそれ等の人達に取巻かれて花などを引いて夜を更したのであつたが、この三四日の遊びに渉つてゐた神経が、興奮と倦怠とに疲れてゐた。お今の若々しい束髪姿が、そんな時の浅井の心に、悪醇い色にたゞれた目に映る、若いものか何ぞのやうに描かれてゐた。

「己は少い女は嫌ひだよ。」何か言出すお増に始終さう言つてゐた浅井の頭脳に、お今のことが、時々考へられた。

三十五

猫板のうへで、お増が途中から買込んで来た、苦い羊羹などを切つて、二人は茶を飲みながら、ぼそ／＼話してゐたが、直にそこらを片著けて二階へ上つて行つた。

「あんなものに手を出すなんて、あの爺さんも余程焼がまはつてゐるんですよ。」

召使の小女が姙娠したと云ふ、根岸の隠居の噂が、生欠まじりに浅井の口から話された時、お増は然う言つて眉を顰めた。夜更けて馴染の女から俥に送られて帰つて来た良人と、暫振でさうして話してゐるお増の心には、以前自分のところへ通つて来る浅井を待受けた時などの、焦燥しさがあつた。

東京近在から来てゐる根岸の召使を、お増も一二度見かけたことがあつた。女の身元保証人になつてゐる、女の伯父だと云ふ男から持ち

込まれた難題に、お爺さんも妾のお芳も青くなつてゐた。それを淺井が間へ入つて、綺麗に話をつけて遣つたのであつた。女には、別に男のあるらしいことが、直に淺井の目に感づかれた。淺井は商業に失敗して、深川の方に逼塞してゐる其伯父と一度會見すると、此方から逆捻を喰はして、少許の金で、事件の片がぴたりついて了つた。

「でも隱居は、矢張自分の子だと思つてゐるらしい。私の遣方が、少してきぱきし過ぎると云つた顔をしてゐるから可笑しい。」

淺井は重い目蓋をとぢながら、懈さうに笑つた。

「貴方だつて、女には隨分惚れる方ですよ。」お増はまだ離さずにゐた莨を、淺井の口に押しつけなどした。

「ふゝ。」と、淺井は今まで一緒にゐた女の匂が、まだ嗅ぎゝめられるやうな顔をして、溜息を洩した。淺井のその女と、可也深い關係を作つてゐることは、前からお増にも感づかれてゐたが、そんな時には、淺井の活動振も、一層目ざましかつた。收入も多かつたし、自分の我まゝも利いた。お増はその隙に、家をつめて物を拵へたり、金で除けたりすることを怠らなかつた。

一條りやかましく言つちや駄目ですよ。遊ぶやうな時でなくちや、お金儲は出來やしないの。」

小林の妾などと、女同士寄つて、良人の風評など爲あふとき、お増はいつも然う言つてゐた。

「浮氣されると思や、腹も立つけれど、きり〱稼がしておくんだと思へば、何でもないぢやないの。私はこの頃さう思つてゐますの。」お増はさうも言つた。

翌朝目のさめた頃には、緣側の板戸がもう開けられてあつた。欄干には、昨夜のお増の著物などがかけられて、薄い冬の日影が、大分たけてゐた。聞きなれた鈴子の唱歌の聲も階下から洩れて來た。

三十六

直に、思ひがけない緣談の事で、お今が一旦田舍へ呼戻されることになつた。

お今が、如何しても厭な田舍へ、些とでも行つて來なければならぬことに決るまでに、二度も三度も、兄から手紙が來た。兄は郡役所などへ勤めて、田舍でも野原へなど出る必要もない身分であつたが、可也な製絲場などを持つて、土地の物持の數に入つてゐる或家の嫁に、お今をくれることに、肝を煎つてくれる人のあるのを幸ひ、淺井に一切を依託してあつた妹を急に自分の手に取戻さうとするのであつた。

婿にあたる男は、以前東京にも暫く出てゐたことがあつた。妙に紛糾つた親類關係を辿つてみると、其家とお今の家とは、遠緣續きになつてゐることや、其製絲工場の有望なことや、男が評判の堅人だといふことなどが、兄の心を根柢から動かしたらしかつた。

東京の生活の面白みに、漸と目ざめて來たお今の柔かい胸に、兄の持込んで來た緣談が、押石のやうに重くかゝつて來た。日々に接してゐるお増夫婦の肆な生活すらが、美しい濛靄か何ぞのやうな雰圍氣のなかに、お今の心を涵しはじめるのであつた。

「兄さん、私どうしたら可いんでせう。」

お今に長いその手紙を出して見せられた時、兄の言條の理解のないことが、淺井に腹立しく思へた。

お今が、田舍へ呼戻されることに、同意してゐるらしいお増が、丁度子供をつれて、行きつけの小林の妾宅へ遊びに行つてゐた。

「如何といつても、私が嘴を出す限りでもないが……。」淺井もお今のために、安全な道を選ば

ない譯に行かなかつた。
「しかしお今ちやんは如何思ふね。」淺井は手紙を卷收めながら、お今の顏を眺めてゐた。
「わたし？」お今は甘えるやうな目色をして、「私東京がいゝんですの。東京で獨立ができさへすれば、私田舍へなぞ行くのは、氣が進まないんです。私獨立ができるでせうか。
「然うなれば、また其談にしなければならんがね。それは後の問題として、田舍へ引込むのが如何しても厭なら、一應私の方から、兄さんの方へ言つて上げても可い。私にしたところで、兄さんの爲方は少し勝手だと思ふ。」
しかし淺井の言つてやつた事は、田舍でも受取られさうもなかつた。在に住む本人を一度寄越して下さい――然う言つて兄の方から折返し淺井に迫つて來た。その手紙は、お増の前にも展げられた。夫婦は丁度お今をつれて、暮の買物をしに、銀座の方へ出かけて行かうとしてゐるところであつた。新しい足袋を穿いて、入替へたばかりの青い疊のうへをそつち此方わさわさ歩いてゐるお今の衣摺の音が忙しさうに聞えたり、下駄を出すお今の樣子が、浮々して見えたりした。淺井は外出のそは〳〵した氣分を攪亂されて、火鉢の傍に坐つて、手紙を繰返し眺めてゐた。
「矢張返してくれとぶふんでせう。」お増も、半襟を搔合せなどしながら、傍へ寄つて來た。
「返した方が可ございますよ。」お増は顏を顰めながら言足した。
「田舍の人は、これだから困る。」淺井は手紙を火鉢の抽斗へ私と入れて、起ちあがつた。
「それなら其で、立たす支度しなけあならん。」

三十七

明日は愈お今が立つて行くといふ日の來た時などは、淺井は外へ出ても直に歸つて來た。そこにお増が病院へ行つてゐる留守を、お今は獨りで、階下の座敷で新しい自分の著物を縫つてゐた。靜子もお増に一枚々々縫つてもらつた人形の蒲團や著物や、大きい小さい色々の人形の入つた箱を出して、傍に遊んでゐた。箱のなかにはいつも爲るやうに、屛風などを立て、人形の家族が寢かされてあつた。
「女の子つて、こんな時分から厭味なことをして遊ぶのね。」お増は時々不思議さうにそれを眺めて笑つてゐた。
「姉さんが歸つてしまつたら、お前も人形の著物など縫つてもらへやあしないぜ。」淺井は外から入つて來た淺井は、そこに突立つて、手袋を取りながら言つた。
「嘘ですね。姉さんは直歸つて來るんですよ。」お今は淋しげに自分を眺める靜子に言ひかけて、縫屑を拂ひながら起ちあがると、淺井の著替をそこへ持出して來た。翌朝著て行く裙袢が、そこに出來かけてゐた。お今の胸には、悉皆東京風に作つて、田舍の町へ入つて行くときの得意さや、兄や母に逢つて、自分の動かがたい希望を告げて、自由な體になつて、再び東京へ出て來る時の樂しさや不安などが、ぼんやりと浮んでゐた。
「歸つてしまへば、どうせ其れ限になつちまひますよ。」お増はお今の前でも然う言つてゐたが、お今の頭腦には、自分の踏んで行く道が分明してゐなかつた。
「私どうしても、歸つて來ますわ。お正月までには、必然來てよ。」お今はその度に言張つた。
淺井は火鉢の傍で、買つて來た汽車の時間表などを、熱心に繰つて見てゐた。
「これが可い。朝の急行が……。」などと淺井はそこの處を指して、茶をいれてゐるお今に示せた。

お今はそこへ手をついて、額を突合せるやうにして、疊のうへにある時間表を眺めてゐた。強い力で、體を抱きすくめられるやうな壓苦しさが感ぜられて來た。田舍へ立つことになつてから、今に挾つてゐた何ものかが、急に二人の心に取除かれたのであつた。

「私今度出て來たら、また此方へ來てもいゝでせうか。」お今はふと想出したやうに額を擡げた。

「いゝとも。」淺井は頷いて見せたが、女を別のところに置いてみたいやうな祕密の願が、新しく心に湧いてゐた。

「しかし十分お今ちやんの力にならうといふには、此處では都合がわるいかも知れない。」

淺井は女を煽動するやうな、危險な自分の好奇心を感じながら言つた。

靜子の後向になつて、人形に著物を著せたり脱したりしてゐる姿が、しんとした部屋の襖の蔭から見られた。その目が、時々此方を振顧つた。

野菜ものを買ひに出て來た婆やと、病院から歸つたお増とが、丁度一緒であつた。

翌朝お今のたつ時、淺井は二階の寢室でまだ寢てゐた。階下のごた／＼する樣子が、うとうとしてゐる耳へ、傳つて來た。

やがてお今があがつて來て、枕頭へ膝立の姿を現した。

「それでは些と歸つてまゐります。」そこへ手をついてお今が更まつた挨拶をした。

三十八

お今を還してしまつてからの淺井は、この日頃張詰めてゐた胸の惱しさから、急に放たれたやうな安易な寂しさが、心に漲つて來た。靜子をつれて、停車場まで見送つて行つたお増が、二時間ばかり經つてから歸つて來るまで、淺井はうと／＼と寢所のなかに、取留のない物思に耽つてゐたが、展開せずに、幕のおりて了つたやうな舞臺の光景が物足りなくも思へた。やがて新しい幕が、自分の操り方一つでそこに擴がつて來さうであつた。

「唯今。どうも色々有難うございました。」お増は歸りに靜子の手をひいてぶら／＼歩いた序に銀座から買つて來たセルロイドの小さい人形や、動物などを、淺井の枕頭へ幾個も／＼轉しながら、面白さうに笑つた。

「ちよいと御覽なさいよ。」

「ふゝ。」淺井も笑ひながら、尻に錘のついた動物どもを、手に取りあげて眺めてゐた。

「外へ出てみると、年の若い女が目につきますね。」お増は枕頭を起たがけに思出したやうに呟いた。

「奈何したつて、女は十六七から二十二三までですね。色澤が全然ちがひますわ。男はさほどでもないけれど、女は年とると眞實に駄目ね。」

淺井は矢張ふゝと笑つてゐた。

淺井が床を離れて、朝飯をすまし、新調の洋服に身を固めて、家を出たときには、活動の時氣と愉快さが、また體中の隱かな血管に波うつてゐた。込合ふ電車のなかで、新聞を擴げてゐる彼の頭腦には、今朝立つたお今の印象さへ、もう忘られかけてゐたが、歸つてからの女の身のうへの奈何なつて行くかが、何となし興味を惹いた。

殺人や自殺などの、血腥い三面雜報の刺戟づよい活字に、神經の落ちて行つた淺井の心に、田舍へ歸つてから、氣が狂つたといふお柳のことが、ふと浮んで來た。淺井は目を瞑つて、別れた其女の悲慘な成行を考へて見た。一緒にゐる頃、心に絡りついてゐた女の眼はしい性癖や淫蕩な肉體、亂次のない生活、浪費、猜疑、ヒステリカルな嫉妬——それらが、今も

へ出される度に、劇しい憎惡の念に心を戰かせるのであつた。

「お今なども、年とつたら矢張あんなになるかも知れない。」淺井はさうも考へた。

金に目の晦んだ兄に引摺られて、絶望の淵へ沈められて行つた、お柳に對する憐愍の情が、やがて胸に沁擴がつて來た。

お柳の狂氣になつたことは、小林へあてゝの、お柳の兄からの手紙によつて知れた。持つて行つた手切の金などの、直に亡なつてしまつたことなどが、その手紙の文句から推測された。東京にゐる時分に、もう大分兄の手で費消されたやうな樣子も、小林の話でわかつてゐた。田舍へ歸つたときには、お柳のものといつては、もう何ほども殘つてゐないらしかつた。兄は不時に手にした大金に、急に大膽な山氣が動いて、その金を懷にして相場に手を出したらしかつた。

お柳がふと或晩、東京へ行くといつて、騷出したのは、この冬の初めのことであつた。子供などを多勢かゝへた嫂から厄介ものあつかひにされるのを憤つて、お柳はそれまでにも、二度も三度も、兄と大喧嘩を始めたのであつた。

「今となつては、君よりも、君の細君よりも、自分の兄を呪つてゐるらしいのだ。」淺井は小林からそんな事も聞かされたのであつた。

三十九

會社の事務室へ入つて行つた淺井は、いつもかけつけの、帳簿などのぎつしり竝んだデスクの前に腰かけたが、心が落著かなかつた。建築物の受負や地所賣買の仲介などを營業としてゐる其會社で、淺井は漸頭可也な地位を占めて來たが、そこ迄漕ぎつけるまでには、一身上に色々の變遷があつた。會社内の誰にもそんなに頭を下げずに通されるやうになつた淺井は、時々過去を振顧つたり、立つてゐる自分の脚元を眺めずにはゐられなかつた。關係した樣々の女が、頭腦に閃いた。經濟や自分の機嫌を取ることの上手なお增と一緒になつてから、めき〳〵自分の手足が伸びて來た。

「お柳さんのやうな人と一緒にゐては、迚も有達があがりませんよ。」いつか其樣なことをお增にいはれたが、それは然うかも知れないと、淺井も心に領けた。

「それに、己も丁度働きざかりだ。これで女にさへ關係しなければ、己も一廉の財産ができる。」淺井は呟いたが、それだけでは矢張其日の滿足が得られさうもなかつた。

「ちつと女からも取つておいでなさいよ。」お增は笑談らしく言ふのであつた。

「それぢや矢張駄目だ。金を費ふからこそ面白いんだ。」

客に接したり、手紙の返事を書いたりしてゐると、直に晝になつた。紛糾つた事務に沒頭した彼の忙しい心に、時々お今のことが浮んだ。隔つてからの少女から、どんな手紙が書かれるかが、待遠しいやうであつたが、假に女を自分のものにしてしまつてからの、内外の事件の煩はしさが、今から想像できるやうであつた。

四時頃に、會社を出て行つた淺井と、一人の友達の姿が、直にそこから程近い、とある新道のなかへ入つて行つた。隘いその横町には、こまごました食物屋が、兩側に軒を竝べてゐた。やがて二人は、淺井が行きつけの小じんまりした一軒の料理屋の上口に靴をぬぐと、堅い身裝をした女に案内されて、しやれた二階の小室へ通つた。

箸と猪口の載つた會席膳が、直に二人の前におかれて、氣づまりな程行儀のいゝ女が、酒のお酌をした。程のいゝ輕い洒落などを口にしながら、二人はちび〳〵飲みはじめたが、會社の

重役や、理事の風評なども話題に上つた。女遊びの話も、酒の興を添へてゐた。そこを出た頃には、もう灯影が町にちらついてゐた。

退ける少し前に、會社へ電話のかゝつて來た赤坂の女の方へ、淺井は心を惹かれてゐた。淺井はその女と、暫く逢はずにゐたのであつた。

「奈何なすつて。何時かけても貴方は在らつしやらないのね。」女は笑ひながら、淺井の安否をたづねた。

「私貴方のことで、少し餘所から聞いたことがあるのよ。」

「何だ〳〵。」と、淺井は少しまごついたやうな返事をしたが、多分知合の小林の妾からでも聞いた内輪のことだらうと思つた。

幾年振かで、淺井はその晩、お増がもとゐた家を私と訪ねて見た。

その頃の女の、もう殆ど一人もゐなくなつた其家の、廣い段梯子をあがつて行く淺井の心にはそこを唯一の遊場所にした以前の自分の姿が、目に浮んで來た。

「おや、黴の生えたお客様が入らしたよ。よく道を忘れませんでしたね。」

淺井は廊下で見つかつて古い馴みの婆さんに、呆れた顔をしてそこに突立たれた。

四十

歸つて行つた當座、二三度手紙が來たきり、ふつつり消息の絶えてゐたお今が、不意に上京して來たのは、翌年の一月も十日を過ぎてからであつた。

親や兄の意志一つで、悉皆取決められてしまつた縁談が、お今の思ひどほりに、壊されさうもない事情が、最初の手紙でわかつてゐたが、談の長引くうちに、先方の親達の氣の變つて來さうな様子が、後の音信でほゞ推測された。お今の家よりも、身代などの聢りした嫁の候補者が、他から持込まれて來た。前にしかけた談で、可也親達の氣に入つた口も一つ二つはあつた。

「……標致ばかりやかましく言ふ人ださうですから、これ迄にも幾度となく、世話人を困らせたのださうです。私はその人と見合もしましたが、どんな人でしたか能くも見ませんでした。見合は媒介人の家でしたのでしたが、私は目をつぶつて、その人と結婚することに決心しましした……。」

そんな事が、初めのうち手紙に書かれてあつた。

「……媒介人の無責任から、話に少し行違が出來たのださうでございます。そんな財産家のうちへ、私を世話しようとしたのが、頭から間違つてゐたのです……。」

暮に來た手紙には、そんな事が書かれてあつた。

「財産家々々々つて、一體いくらあるんだ。」淺井は手紙を讀んで聞かせながら、お増に訊いたが、お今の萎れてゐる様子が、可憐しいやうであつた。

「出來たと言つても、一代身上ですからね、大したことはないんでせう。」

上京したお今の頭には、そんな事件の前後に紛擾された動搖がまだ全く靜まりきらずにゐた。お増の古い仕立直しのコートなどを着て、一旦送返された荷物を、また持込んで來た時、淺井夫婦は、晩飯の餉臺の側で、滋子を揶揄ひながら、賑かな笑聲を立ててゐたが、氣の引けるお今は長く居泥んだ、そこへ顔を出すさへ極り惡さうであつた。

「ほら姉さんが來ましたよ。貴方の好きな姉さんですよ。」

お増は自分の膝に凭れかゝつて、含羞んだやうにお今の顔ばかり瞶めてゐる、滋子に言ひか

けたが、顏には何の表情もなかつた。
「ふむ〳〵。」と、淺井は莨を喫しながら、少しづつ釋れて來るお今の話に、氣輕な應答をしてゐたが、直に目蓋の重さうな顏をして、二階へ引揚げに行つた。
「今年ほど詰らないお正月はございませんでしたよ。」お今は次へさがつて、行李から取出して來た土産物を、そこへ出すと、漸と落著いたやうな顏をして言出した。
「それに、行つて見て、熟々田舍の厭なことが解りましたわ。奈何なことをしても、私東京で暮さうと思ひましたわ。」
「それぢや、矢張此方で片附くのさ。」お増は無造作に言つた。
「お婿さんは奈何な人。もう緣談がきまつたの。」
お今のことがまだ思斷れずにゐる、其男の緣談のまた紛擾いてゐる風評などが、お今の耳へも傳つてゐた。

四十一

婿に定められようとした其男の、兩親達などとの間が、拗れ〳〵になつた感情が、[illegible]して、お今の上京後一人で東京へ逃出して來たと云ふ事實が、直にお今にあてて寄越した、その男の手紙で知れた。
室鎭雄と署名された其手紙の文句は、至極簡短であつたが、お今を慕ふ熱情が、行の間にも溢れてゐた。室は漸と二十四になつた許りであつた。……一度貴女に直接お目にかゝつて、胸にあることだけを、十分聞いて頂きたいと思ひます。僕はそれで滿足を得られます――そんな卑下した言が聯ねられてあつた。
「莫迦な男ね。」お増は淺井の低聲で讀みあげるその手紙を笑出したが、お今は何の感情も動かぬらしかつた。
「でもこんなに迷はせて、可哀さうぢやないか。何とかしてやつたら可いぢやないの。」お増はお今を振顧つた。
「こんな手紙を貰つて、どんな氣がするの。」
「惡い氣持はしないさな。」淺井は笑ひながら手紙をそこに置いた。
「本人同士で、話ができてしまつたら、親達は奈何するでせう。」お増はさうも言つて淺井に訊ねた。
歸郷前よりも一層潤ひをもつて來たお今の目などの、淺井に對する物思はしげな表情を、お増は見遁すことができなかつた。
夜一つに寢てゐるときに、お増は淺井のゐないのに氣がついたやうに考へて、ふと目のさめることがあつた。活動寫眞でいつか見たやうな一場の光景が、今見た夢のなかへ現はれてゐたことが疲れた頭に思出された。風に搖られる蒼々した木立の繁みの間に、白々した路が一筋何處までも續いてゐた。そこに男の女を追ひかけてゐる姿が微かに見透された。それが淺井とお今とであるらしかつた。ふと白いベツドのなかに、雛種のやうな目をしたお今の大きな顏と、淺井の形のいゝ頭顱とがぽつかり見えだしたりしてゐた。今迄ゐたかつたやうな淺井の寢顏が、薄赤い電燈の光のなかに、黄色く濁つたやうに眺められるのが、覺めたお増の目に、氣味が惡いやうであつた。
まじ〳〵天井を見詰めてゐるお増の目に、いつか氣の狂つて死んだと云ふお柳の姿が、まざまざと浮出して來た。
時々兄や母の監[illegible]つける[illegible]から脫れて、東京へ行くといつては、悶隨落[illegible]んだり、家中[illegible]れまはつたりしたと云ふお柳の死んだ[illegible]、見[illegible]からの報知が、淺井のところへ來た[illegible]、つい此頃のことであつた。
お柳は夜中に、何處か[illegible]して、[illegible]

しい町を、[illegible]つまつて、すた／＼交番へ駈着けたりなどした。

「ちよいと恐入りますがね、今私を殺すといつて、家へ男が押込んで來ましてね……。」

お柳はさう言ひながら、蒼い死人のやうな顔をして、落窪んだ目ばかり光らせてゐた。

そこへ兄が、跡を追つてやつて來た。兄とお柳との激しい格鬪が、道傍に始まつた。可恐しい力が、痩細つたお柳の腕にあつた。引摺られて行つたお柳は、兵兒帶で縛られて、寝所に臥されたが、もう悶掻く力もなかつた。

兄の留守のまに、お柳は時々荒出して、年老つた母親を手古擦らせた。近所から寄つて來た人々と力を協せて、母親はやつと娘を柱に縛りつけた。

狂氣の起りさうな時に、井戸端へつれて行つて、人々はお柳の頭顱へどう／＼と水をかけた。

お柳の體は看々衰へて行つた。

四十二

お柳の訃が來たときに、お増からも別に幾許かの香奠を贈つたのであつたが、兄はその頃、床についた妹を、碌々好い醫者にかけることも出來ないほど、手元が行詰つてゐるらしかつた。死ぬまでに、小柳を通して、幾度となく金の無心が淺井のところへ來た。淺井は三度に一度は、その要求に應じてゐた。

「そのお金が、お柳さんの身につけば可ござんすがね。」

「どうせそれは兄貴の肥料になるのさ。狂人が何を知るものか。」淺井が苦笑してゐた。

悲慘なお柳の死狀が、さまざまに想像された。可恐しい苦惱に陷つてしまつた發狂者は、不斷は兄や嫂などと滅多に口を利くこともなかつた。別室に閉籠められた病人を看護してゐる母親に、おど／＼した低聲で時々話をする限であつた。兄を怕れたり、嫂に氣をかねたりする樣子が、あり／＼其動作に現はれてゐた。些とした室外の物音や、話聲にも、不安な目を睜るほど、鋭い神經が疑深くなつてゐた。

大分たつてから、一度上京した序に訪ねて來た母親から、そんな事が小林によつて傳つてから、お増は時々お柳の夢を見ることがあつた。

「お前の神經も少し異しいよ。ふとしたらお柳が祟つてゐないとも限らない。」淺井はさう言つて揶揄つた。

お今から、[illegible]も二度と[illegible]ることのできなかつた室が、大分たつてから、一度淺井の方へ出向いて來た。室は[illegible]となく、[illegible]してから[illegible]入つて來た。丈の高い痩ぎすな[illegible]が、何氣なしにそこへ顔を出したお増の目に映つたとき、一寸見覺の手紙の主だといふことが知れたが、淺井の留守に、上げていゝか悪いかか判斷がつかなかつた。しかし、お増は家のことなども、能く知つてゐる此青年を、そこま[illegible]にもなれなかつた。

良久あつて、二階へ通された室は、途中で買つて來た手土産などをおいて、これから六ケ[illegible]も[illegible]に、直に歸つて行つたが、當分東京にゐて、また學校へ入ることになるか、それも解らなければ、何處かへ體を賣つて、自活の道を講ずる心算だといふ、自分自身の決心だけは確固のうちに微見して行つた。

「お今ちやん、お前さんお茶でも持つて出たら可いぢやないか。」

お増は階下へ降りると、直へ引込んでゐるお今に私語いたのであつたが、お今は應じなかつた。

「いづれ御主人にもお目に懸つて、何彼と御意見も伺ひたいと思つてをります。」室は然う言

つて、いくらか滿足したやうな顔をして出て行つた。
「そんなに厭な男でもないぢやないか。彼ならば上等だよ。」お増は、後で座敷を片著けてゐるお今に話した。
「だつて、先方から破談にしたのぢやありませんか。」
「けど、輕率なことは出來やしないよ。その人のためにも好くない。」
晩方に歸つて來た淺井は、お今の話を聞きながら、さう言つてゐたが、自分の出方一つで、二人の運が奈何でもなりさうに思へた。

四十三

淺井はそれからも、ちよい〳〵訪ねて來る室を、一度などはお増も一緒に下町の方へ飯を食べに連出したりなどしたほど、好意と好奇心とを以て迎へた。
酒の二三杯も飲むと、直に眞赤になつてしまふやうな室は、心のさばけた淺井に、釣出されて、思つてゐることを淺け出して、饒舌るのであつたが、偏執の多い、神經質な青年の暗い心持が、淺井には氣詰りであつた。
「若い時分には、誰しもそんな經驗がありますよ。世間の他の女が少しも目に入らないと云ふやうな時代があるものです。」淺井は輕く應けてゐたが、同情のない男のやうに思はれるのも厭であつた。
「一年に今少し待つて、時機を見て、今一度問合の方へ話をして見たら奈何ですか。」淺井はお今の保護者らしい、穩健な意見を述べたが、何時までも女の心を自分の方へ惹きつけておきたいやうな興味が、一層動いてゐた。假にお今が、この男と結婚するやうな時が來る――その場合が、色々に想像された。
「失禮ですが、貴方のお考へで、御本人の意志はどうなんでせうか。この場合の私に取つてそれが先決問題なんですが……。」室はさう言つて訊ねた。
「別にこれと云つて、分明した考へもありやうもないのです。何分年が若いのですから。」
淺井は答へたが、お増も傍から口を出した。
「今のうちなら、あの娘は奈何でもなりさうですよ」
そこを出てから、途中で室に別れた淺井夫婦は、この頃、根岸の別莊を賣拂つて、神田の通へ洋酒や罐詰、莨などの店を開けた、隱居の方へ一寸と立寄つてから、家へ歸つた。
「あゝして一人の女を思詰めて、思が叶つたら、どんなに氣持がするでせうね。」お増は電車のなかで、今別れた室の姿を目に浮べながら、言出した。「あの男なら、一生お今一人を守るでせうよ。」
淺井はふゝと口元に笑つてゐた。
「だけど、そんなでも面白かありませんね。」
神田の隱居の家では、初め思つたよりも、店の景氣のいゝ事が、お芳の口から話された。隱居は飲過ぎで腹を傷めて、丁度奥の室に寢てゐた。若い男達が二三人、お芳の坐つてゐる帳場の前で、新聞を見たり、店の客を迎へたりしてゐたが、こゝへ移つてからお芳の氣に引立の出たことが、浮々したその顔や樣子でも知れた。
そんな商賣に經驗のある、淸吉といふ二十四五の男が、一切を取仕切つてゐるらしかつたが、それらの若い店のものを對手に、賣揚をつけたり、商をしたりすることが、長いあひだ氣むづかしい隱居のお守に、氣を腐らしてゐたお芳には物珍しかつた。
「お蔭さまでね、まあどうか恁うか物になりさうなんでございますよ。」お芳は珍しい食物などを猟つて歩く二人に話しかけた。
物腰のやさしい淸吉が、そこへ來て、色々の

品物を出して見せたりなどした。

「旦那は貴方、それこそ何にも解りやしないんでござんすよ。」お芳は莨をつけて、お增に渡しながら言つた。

「この人でもゐてくれなかつたら、全然商賣は出來やしません。」

お芳は傍に夫婦の買物を包んでゐる、淸吉の方を見ながら言つた。切長な大きいその目が、みづ〳〵した潤ひをもつてゐた。

「お芳さんも、まだ三十にならないんですからね。」お增はそこを出たとき、淺井に話しかけた。

四十四

ふとした感冒から、可也手重い肺炎を惹起した靜子が、同じ區内の或小兒科の病院へ入れられてから、お增は殆ど毎日そこに詰切つてゐなければならなかつた。

會社へ出てゐても、靜子の病氣の始終心にかゝつてゐる淺井は、碌々仕事も手につかぬほど氣に落著がなかつた。少し緩んで來た寒氣が、また後戾をして春らしい軟かみと生氣とを齎して來た櫻の枝が、とげ〳〵しい餘寒の風に戰くやうな日が、幾日も續いた。病室のなかには、壁に掛けておく吸入器から出される蒸汽、白い天井や曇つた硝子窓に棚引いて、古布一面が、いつもじめ〳〵してゐた。

途中で翫具などを買つて來ることを怠らない淺井は、半日の餘も高い熱のために、うと〳〵と昏睡狀態に陷つてゐる病人の番をしながら、病室に寢たり起きたりしてゐるやうな事が多かつたが、靜子はせい〳〵苦しい呼吸遣をしながら、額や髮に、細い水滴の垂れて來るのを煩がる力もないほど、體が弱つてゐた。

濛々した濃い水蒸氣のなかに、淋しげな電燈のつきはじめる頃に、今つけて行つた體温表などを眺めてゐた淺井は、靜子に別を告げて私と室を出て行つた。

「翌日父さんがまた好いものを買つて來てあげるからね、煩くとも、濕布は丁としなくちや不可ませんよ。」淺井は帽子を冠つてから、また子供の顏を覗きながら言つた。

「矢張自分の子なのかしら。」いつも思出す隙もなしに暮して來た疑問が、こんな時のお增の胸に、また考へられて來た。血をわけない子供に、恁うした自然の愛情の湧くものか奈何かの判斷が、子を産んだ經驗のない自分には、つきかねるやうに思へた。

「この子の母親が見たければ、何時でも何か新作する。」淺井は一度、東京近在の田舍にゐる、その女の事を話出したが、そんな人が出て來て、靜子に里心の出るのが、お增自身にも好ましいことゝは思へなかつた。

「お今ちやんを、直此方へよこして下さいよ。」お增は出て行く淺井に、ドアの外まで顏を出しながら言ひかけた。二人は病床の傍で、看護婦のゐない折々に、先刻からお今のことで、一つ二つ云爭ひをしたほど、心持が紛糾つてゐるのであつた。

「己が結婚前の娘を手元において、奈何しようと云ふのだ。お今には、室といふ者もある。」淺井は鼻頭で笑つてゐたが、病院へ來てから、奈何かすると二人きりの淺井とお今とを、家に遺しておくやうな場合の出來るのが、お增には不安であつた。

「父さんと姉さんと、此處で何のお話してゐたの。」病人の側につけておいたお今が、交替に出て行つた後などで、お增は怜悧さうな事ふだ目をして、自分の顏を眺める靜子に、然ういつて訊ねたりなどしたが、子供からは、何も聽取ることが出來なかつた。

來やうの遲いお今を待ちかねて、お增は病人

を看護婦にあづけて、朝から籠つてゐた息だはしい病室を出て來た。

外はもう大分更けてゐた。空にはみづ／＼しい星影が見えて、春の宵らしい空氣が、しつとり顏に當つた。

腕車から降りて、からりと格子戸を開けると、しんみりした靜かな奧の方から、お今が急いで出て來たが、淺井は火鉢の傍に何事もなささうに寢そべつてゐた。晩飯の餉臺がまだそこに出てゐた。

四十五

入院してから三週間目に、ある暖かい日を選んで、靜子が家へつれられて來るまでに、室も一二度氣のおけない病院を見舞つた。

室は日本橋にある出張所の方から、時々取つて來る金などで奈何か恁うか不足のない月々の生活を支へてゐた。母親からそこへ宛てて內密に送つてよこす著物や手紙の中などに封じ込められた不時の小遣も、少い額ではなかつた。

「事によつたら、僕は東京で一軒家を借りようかとも思つてゐます。」

室は、病人の枕頭へ來て、自分と家との關係が、初め心配したほど險惡の狀態に陷つてもゐないと云ふ內輪談などするほど、お增に昵んで來た。

「でも田舍の方では、迚もお今を貰つてはくれないでせう。」お增は時々訊ねてみた。

「いや、然うでもないですよ。淺井さんと云ふ後援者のあることも知れて來ましたからね。」

「田舍の方の談がつきさへすれば、良人だつて放擲つておくやうな人ぢやありませんよ。勿論大した事は出來やしませんけれど、相當なことはする心算でゐるんでせうよ。」

お增は、ふと東京で懇意になつた遠緣續きの男に、自分の身のうへや、生計向のことまで打明けるほど、可懷味を覺えて來た。

家出した兄を氣遣つてゐる妹から來た手紙などを、お增は室から見せられた。その文句は、いきなりに育つて來たお增などには、傷々しく思はれるくらゐ、幼々しさと優しさとを保つてゐた。

自分がまだ商賣をしてゐる時分に、脚氣衝心で死んだ兄のことなどが思出された。幼い時分に別れたその兄は、長いあひだ神戸の商館に身を投じてゐた。田舍にゐる母親の時々の消息を通して、漸と生死がわかるくらゐ、二人のなかは疎々しかつた。

「無駄なお鳥目なぞつかつて、皆さんに心配かけちや不可ませんよ。」お增は歸つて行く室を、病室の戸口に送りながら、然う言つて別れた。

しんみりしたやうな話が、暫く續いてゐたのであつた。

退院させた靜子が、階下の座敷に延べられた蒲團のうへに、まだ全く肥立つて來ない蒼い顏をして、坐らせられてゐた。バスケットで運んで來た人形や世帶道具、繪本などの玩具が、一杯そこに擴げられてあつた。

外には春風が白い埃をあげて、土の乾いた庭の手洗鉢の側に、斑入の椿の花が咲いてゐた。

「いや御苦勞々々々。」淺井は碌々髮なども結ふ隙のないほど、體の忙しかつた女達に聲かけながら、漸と自分のものにした病人を眺めてゐた。子供は碧みのある、うつとりした目を大きく瞠つて、物珍しくそこらを眺めてゐた。

「今ちやんにお禮として、何かやらなけれあならんね。」淺井は言ひかけた。「指環をほしがつてゐるから、指環を買つてやらうか。」

お今は日に干すために、藥の香の沁込んだ毛布やメリンスの蒲團を二階へ運んでゐた。

四十六

床揚の配りものなどが濟んでから、淺井がふと通りがかりに、銀座の方から買つて來たと云ふ眞珠入の指環が、ある晩お増の前で、折鞄のなかから出された。

「へえ、些と拜見。」などと、お増はサックのまま手に取上げて眺めた。

「洒落てますわね、十八金かしら。」お増は自分の細い指に嵌めて、明に透しなどして見てゐた。

「安ものだけれど、些と踏める。お今におやり。」

些としたルビー入のと、ハート型のと二つしか持たぬお今が、外出などの時に、如何かするとお増の手と比べて、滿らながつてゐるのを、淺井は長いあひだ知つてゐた。

お今の不足がましい顏を見せるのは、指環ばかりではなかつた。月々に物の殖えてばかり行くお増の簞笥や鏡臺のなかなどが、最初そんなものに侮蔑の目を欹ててゐたお今の心を、次第に惹著けるやうになつた。いつか田舍へ行く前に仕立直して著せられたセルのコートなどが、今のお今には些とした外出にも、酷く見窄らしいもののやうに思へて來た。

「こんなコートなど、もう著てゐる人はありゃしませんよ。」お今は、それがお増の所爲ででもあるやうに、苛立てるのであつた。お今の我儘の募つて來たことが、お増には腹立しくも、情なくもあつた。

「それで澤山よ。今からそんなに好いものばかり慾しがつて奈何するのさ。お今ちゃん此と來た時のことを考へると可いんだよ。」

お増はこゝへ來たての頃の、まだ東京なれないお今の樣子や、これ迄に世話して來た、淺井や自分の好意を言出さずには居られなかつた。

淺井と一緒に餘所へ出たりたどするお増に、お今は時々厭な顏を見せたりした。

「眞珠のがないから、これは私のにしておきますわ。」お増はさう言つて、指環をサックに收つた。

「そんなら其をお前のにしておいて、何か高彫のを一つ代りにやるかね。」淺井は笑ひたがら言つた。

「不可ませんよ。貴方が餘りちやほやするから、増長して爲樣がないんです。この頃大變變つて來ましたよ。貴方が惡いんです。」

「けど、それは爲方がないよ。見込んで託けられて見れば、此方だつて相當の事はしなければならん。これから先の方の爲が困るものとすれば尚更のこと、放抛つてはおけない。」

いつも能く出るお今のことが原因で、それからそれへと、時々の言爭が募つて行つた。時々花などに託けて耽つてゐる、浮氣の女の事なども、お増の口から言出された。

「私がいくら骨を折つて稼いだつて、迚も駄目ですよ。内は内でお今ちゃんなぞが我儘を言ふし、外は外で絞られるところがあるんだもの、私一人で焦燥したつて爲樣がありやしない。」お増の調子が較高くはずんで來た。

「莫迦いへ。誰のお蔭で、お前は著物なぞ滿足に著られるとおもふ。外で事はうが何しようが、お前に不足いはれるやうな、無責任なことはしてゐないぞ。」氣優しい淺井にしては、珍しいやうな言が口から出た。

お今はことりとも音のしない、臺所でそれを聞いてゐた。

四十七

翌朝になると、お増は毎朝お今のすることに決つてゐる淺井のお膳拵などを、自分の手に一つに引取つて、さも自信のありさうな様子で、

こま〳〵と立働くのであつた。漬物の切方や、盛方などにも、自分の方が、長いあひだ氣心を知つてゐる淺井の氣分に、しつくり適ふところがあるやうに思へた。

「お早うございます。」お増はお今の前を、わざと生眞面目な顏をして、固まつたやうな挨拶を、良人にして見せた。淺井が丁度二階から下りて來たのであつた。病院以來、滅切氣分のだらけて來たお今は、まだ目蓋などの腫れぼつたい、眠いやうな顏をして、茶の室の薄暗い處にある鏡の前へ立つては髮を氣にしたり、白粉を塗つたりしてゐた。

いつも氣のさわ〳〵してゐるお今は、今朝は筋肉などの硬張つた顏に、活々した表情の影さへ見られず、お増などに對する口も重かつた。昨夜お増夫婦の言爭が募つて、淺井が二階へあがつてからも、自分に機嫌の悪かつたお増が、とげ〳〵した調子で二階へあがつて行くまで、猫板のところに投出されてあつた、自分の買ひにくくなつて備退した指環の、どこか姿を隠してしまつたことや、夫婦の爭の鎮つた閑寂りした夜更の二階のさまなどが、眠られない頭腦を掻挘るやうに苛立たせて、腹立しさと悲しさとに、びつしより枕紙を濡してゐたくらゐであつた。

しつとりとした雨のふる或晩に、病院か、さもなければ何時もの馴染の何子とか云ふ藝者のところだとばかり思つてゐた淺井の、表の戸をさしてしまつた夜中過に、酒に醉つて歸つて來たときの事などが、お今の目に、まざ〳〵と浮んで來た。周章てて火を起したり湯を沸したりする自分の傍にゐる淺井と、何時とはなしに話に耽つて、二階へあがつて臥床を延べたのは、もう二時過であつた。不安と恐怖とに、幻のやうな短い半夜があけた。

秘密の機會が、淺井によつて二度も三度も作られた。

病人の枕頭などで、可恐しいお増の顏と顏と、向合つてゐる時ですら、お今は遣瀬ない思に、胸を焚かれるのであつた。甘えるやうな驕慢と、放縦な情慾とが、次第に無恥な自分を、お増の前にも突きつけるやうになつた。

お増は四十度の熱を、自身淺井にあてがつてから、臺所から微温湯を汲んだ金盥や、石鹸箱などを、硝子戸の外の縁側へ持つて行つた。庭には椿も大半錆色に腐つて、初夏らしい日影が、楓などの若葉にそゝいでゐた。どこからか緩い餘所の時計の音が聞えて來た。

朝飯のときも、お増は直り淺井の傍に坐つて、給仕をしてゐた。そして淺井が何か言ひかけると、「ハア、ハア。」と、行儀よく應答をしてゐた。毛に癖のない頭髮が綺麗に撫でつけられて、水色の手絡が淺黑いその顏を、際立つて意氣に見せてゐた。

「二階の方は私がしますよ。」お増は蔭にばかり隠れてゐるお今の、二階へあがつて行く姿を見ながら言ひかけた。二階はまだ床なども、其まゝになつてゐた。

「來ちや不可ませんよ、靜いちやん――。」お増は段梯子の中途へ顏を出した靜子に、上から邪慳さうな聲をかけた。

四十八

淺井のゐない家のなかに、お増はお今と顏ばかり突合してもゐられなくなると、靜子をつれだして、向の博士の落胤だと云ふ母子の家へ遊びに行つたり、神田の隠居の許へ出かけて行つたりした。そんな時に、氣のおけない身の上ばなしの出來るお増が、高橋と一緒に暫く東北の方へ旅稼に出てゐて、東京にゐないことが、お増には心寂しかつた。

「今度は私も巡業をするんですとさ。」

お雪は旅へ出る少し前に、お増のところへ暇乞に來て、何時ものとほり、二日ばかり遊んでゐながら、然う言つて、變つて行く自分の身のうへを嗤つてゐた。青柳は東京ではもう、どこも上るやうな舞臺がなかつた。

それは丁度收穫などのすんで、田舍に收入のある秋の頃であつた。どこかとそんな契約が成立つたと見えて、お雪は身裝なども比較的綺麗であつた。新調のコートや傘なども、お増の目を惹いた。お増は、「この人はいつまでこんな氣樂をいつてゐるのだらう。」と、何時もお雪について考へるやうなことを、その時も熟々考へさせられたのであつたが、氣心に少しの變化もみえないお雪には、それを得意がつてゐるやうな樣子もあつた。

「それで、私の出しものが阿古屋なんですと。」

お増は阿古屋が何であるか、よくも知らなかつた。

「へえ、そんなものが出來るの。」

「どうせ眞似事さ。事によつたら、それを持つて北海道の方へ廻るかも知れないのよ。然うすれば、お金がどつさり儲かるから、その時は借りたお金を、貴女にもお返しするでせうよ。」

さう言つて出て行つた限、お雪からは何の消息もないのであつた。何時迄たつても、頭の上りさうもない藝人などに喰ついて、浮々と年の老けて行くお雪の慘さが、情なくも思へるのであつたが、氣のくさくさするやうな時には、寸時もお雪のやうな心持ではゐられない苦勞性の自分が、窮屈でもあつた。

「あの人終に、野倒死でもしやあしないか知ら。」お増は時々淺井と、お雪の噂をしてゐたが、色々の女に心の移つて行く男一人に縋つてゐる自分の成行も、思つて見ない譯に行かなかつた。

「まだ、そんな事を思つてゐるのかい。」

然うたる時の自分の行末のために、金や品物などを用意することを怠らぬらしい、お増の簞笥の著物や、用簞笥の貯金の通帳などの目に入る度に、淺井は然ういつて、不斷は苦笑してゐたが、嫉妬喧嘩の時などには、忌々しげに其が言立てられた。

しかし仲のいゝ時に、そんな金がまた何時か、其時々の都合で淺井の方へ融通されてゐた。

「また旦那に取られてしまつた。」お増は後でハッと思ふやうた事があつたが、その場合には、矢張隱立をすることが出來なかつた。

靜子をつれて、一日外を遊歩いてゐると、家を出るとき感じてゐたやうな、お今に對する嫉しみの念が、いつか少しづつ淋しいお増の胸に融けて行かないではおかなかつた。

神田の店は段々繁昌してゐた。

お芳の若やいで來た顏の色澤が、お増には可羨しいやうであつた。茶の室へ坐込んで、厭な内輪ばなしなどに時を移してゐたお増は、行つた時とは、全然別の人のやうな心持で、電車に乘つた。

四十九

お増は、淺井がもう歸つてゐる時分だと思ふと、電車のなかでも氣が急くのであつたが、隱居にいはれたことなどが、繰返し考へ出された。

「今のうちにお今さんを、何處かへ出しておしまひなさい。事によつたら、當分のうち何處ぞ私の親類へお預りしても可うがすよ。」

隱居は相變らず、酒氣を帶びた顏を振立てて言つてくれたのであつた。

そんな事には何の意見も挾まないお芳は、時時顏を顰めて、お増の話に應答をしてゐた。

「お今さんも可哀さうですな。お婿さんが欲しいでせうに、その金滿家の子息さんと、一緒にしてあげたら如何です。」

お増は退けてしまつてからの、若い女の體の成行も考へてやらない譯に行かなかつた。自分の良人のしたことを、田舍のお今の兄などに、知られるのも厭であつた。單純に、二人の所業を憎んでばかりもゐられないと思つた。

灯影のちら／＼する町や、柳の青い影が、暗い思を抱いてゐるお増の目の前を、電車の進行と一緒に、夢のやうに動いて行つた。窓からは、夏の夕らしい涼しい風が吹込んで、焦えたやうな皮膚がしつとり潤ふやうであつた。

「さう先の先まで考へたつて、如何なるものか。」お増は直に何時もの自分に返つた。何時までも、こんな厭な思をしてばかりゐられないと思つた。

いつか側に引著けて、油を搾つたときのお今の様子などが、思返された。お増はそれと前後して、淺井からも辯明めいた懺悔を聞いたのであつたが、二人のなかは・矢張それきりでは濟まなかつた。

「奈何したの。私に殘らず話してごらんなさいよ。」お増は落著いた調子で、お今を詰つたが、お今は默つて、俯いてゐる限であつた。目が涙に曇んでゐた。

「……それぢやお今ちやん、餘りひどいぢやないの。」お増は、到頭そんな事をされるやうになつた自分が可憐しいやうであつた。嫉しさに、掻挘つてもやりたいやうなお今に、しやぶりついて泣きたいやうな氣もしたのであつたが、矢張自分を取亂すことが出來なかつた。

後悔と憐憫とに冷めてゐた二人の心が、また落著けられて行つた。家でも寢るときの淺井の姿の、側にゐないことが、時々夜更に目のさめるお増の神經を、一時に苛立せるのであつた。淋しい有明の電燈の影に、お増は慘酷な甘い幻想に苦しい、心を戰かせながら、時のたつのを、おつと平氣らしく待つてゐなければならないのであつた。

「はやくお今を引離さう。」お増はじれ／＼と、そんな事を思窮めるのであつたが、その手段が矢張考へつかなかつた、

「あの子に傷をつける日になれば、それはどんな事だつて出來ますよ。」お増は淺井に愚痴をこぼした。

「さうすれば、お前のためにも、どうせ好いことはないよ。」淺井は笑つてゐた。

五十

暑中の時分に、學資などの補助を仰いでゐた叔父の病氣を見舞ひに、淺井が暫く田舍へ行つてゐる留守の間を見て、お増が小林などと相談して、到頭お今の姿を隱さしてしまつたのは、その年ももう涼氣の立ちはじめる頃であつた。

それまでにも、お増とお今との間には時々の紛紜が絶えなかつた。お今は如何かすると、小蔭で自分の荷物などを取纏めて、腹立まぎれに私と家を出て行かうとしたり、死ぬ決心でもするかと、お増が氣味を惡がるくらゐ、二日三日も暗い顏をして、臺所の隣の陰氣らしい四疊半に閉籠つたりしてゐた。小林がお今のために持込んで來てくれた緣談なども、お今の反抗的な心を一層混亂せしめた。

「姉さんに御心配かけて濟みません。私の體などは如何なつても可うございますから、どうぞ皆さんの宜しいやうに……。」

お今はそんな捨鉢のやうな口を利きながら、目に涙を入染ませてゐた。

「なに、本人の希望どほり、獨立さしてやるやうな事にしてやつたら可いぢやないか。引受けた以上は、己にも責任がある。」

淺井のさういふ反對意見に、そんな話も矢張成立たずにしまつた。

浅井が田舎へ立つてから、お増は思ひついて室をも一緒につれて、三人で浅草邊をぶらついたり、飯を食べたりして、お今を男に睨ませようと試みた。

「今でも矢張貴方は、あの人のことを思つてゐて。」お増は、お今のゐないをりに、私と室に訊いてみたが、この男に祕密を打明けないでゐることが、空可恐しいやうであつた。

「何故です。」室はさう言ひたげに、にやりと笑つてゐた。

「あの人にも困つたもんですよ。」お増は口まで出さうにする其祕密を、矢張引込めておかない譯に行かなかつた。

「一度貴方から、能く訊いてみて頂戴よ。」

そこへ小川に行つたお今が、入つて來た。三人はある小綺麗な鳥料理の奥まつた小室でビールやサイダなどを取りながら話してゐた。廊下の手欄に垂れた簾の外には、綺麗に造られた庭の泉水に、涼しげな水が噴出してゐたり、大きな緋鯉が泳いでゐたりした。碧い水の面には、もう日影が薄らいでゐた。湯に入つて汗を流して來た三人の額には、青い庭木の影が映つてゐた。お今は肥つた膝のうへに手巾を擴げて、時々サイダに咽喉を潤してゐたが、室と口を利くやうな事は滅多になかつた。

室はどうかすると、鬱陶さうに默込んでしまつた。

「貴方はほんとに眞面目だわ。」お増はビールを注いでやつたりなどしたが、室は苦しさうに時々飲んでゐるだけであつた。

「今度三人で、どこかへ行つたら如何？」お増は調子づいたやうに言ひかけたが、矢張自分でしくじつた。

夕方に三人はそこを出て、直に電車で家へ歸つた。

「駄目々々。」お増は家へ入ると、着物もぬがずに、べつたり坐つて溜息をついた。

「人の氣もしらないで、この人は如何したと云ふんだろ。」

五十一

お増がある物堅さうな家を一軒、小林の近所に見つけて、そこへお今を引移らせてから大分たつて、浅井が丁度田舎から歸つて來たのであつた。

そこは小林の妾の身續きにあたる、或勤人の年老つた夫婦ものであつた。お増から身のまはりの物などを一通り分けて貰つて、その家の二階に住ふことになつた、お今は、初めて一構でも持つときのやうな不安と興味とを感じながら、ある晩方に、浅井の家を出て行つたのであつた。

お増がそこいらから見附けだして、お今のために取纏めようとした品物は、大抵お今には不滿足であつた。お今はお増の鏡臺や、簞笥だの襟留だの、紙入などのこま〲した持物に心が殘つた。

「私が新しく買つたら、それをあなたにあげますがね、當分それで間に合してお置きなさいよ。鏡立があれば澤山ですよ。」

お増はさう言つて、長火鉢の傍で煙草を吹してゐたが、お今の執念が絡著いてゐるやうで厭であつた。

いつまでも自分の部屋で、何かごそ〲してゐたお今は、漸て人顔の見えなくなつた頃に、悄々と家を出た。

「靜いちやん、さよなら。」お今は荷物などを作る自分の傍に、始終著絡つて離れたがつた靜子に聲かけながら、門を離れて行つた。

その翌日朝早く、お今は何やら忘れものをしたとか言つて入つて來ると、自分の居馴れた部屋の押入などを、其方こつち掻廻してゐたが、

お増は默つて見てゐた。
「今のうちなら、幾度來たつて介意やしないけれど、旦那が歸つてからは不可ませんよ。」お増は駄目を押すやうに言つて聽かせた。
「えゝ、大丈夫來やしませんとも。」
お今は昨宵一晩自分の身のうへなどを考へて、おち／＼眠られもしなかつた體の疲が、白粉を塗つた、荒れた顏の地肌にも現はれてゐた。目のうちも曇んでゐた。朝の夙い階下の夫婦が寢靜つてからも、お今は時々消した電氣をまた捻つて、机の前に坐つたり、蒸暑い部屋の板戸を私とあけて、熱つた顏を夜風にあてたりした。部屋にはまだ西日の餘熱が籠つてゐた。病人のやうないら／＼しい一夜が、寢苦しくて爲方がなかつた。怨めしいやうな腹立しいやうな、遣瀨ない思に疲れた神經の興奮が、しつとりした曉方の涼氣に、漸とすや／＼萎されたのであつた。
お今は冊子などを對手に、暫く遊んでゐたが、直に歸つて行つた。
「室さんが必然お前さんのことを訊ねますよ。どう言つておかうか知ら。」お増はお今の氣を引くやうに、一度も二度も室の噂を持出したが、お今はいつも澄してゐた。
「從姉さんも隨分勝手ね。」お今はさうも言ひたげであつた。
お増の方からも、二三度靜子をつれて途中で茶菓子などを買つてそこの二階を訪ねて行つた。格子のはまつた二階の窓からは、下の水道栓に集つて來る近所の人や、其人達の家の裏門などがあけ透けに見えた。水道端には殘暑の熱い夕日が、じり／＼と照つてゐた。
退屈な日が、幾日も／＼續いた。ぢつと部屋に坐つてゐると、お今は時々澱んだ頭腦が狂ひさうに感ぜられた。

五十二

「貴方に相談しようかとも思ひましたけれど、それでは話が面倒ですから、私お留守のまにお今ちやんを出してしまひましたよ。」
旅から歸つて來たばかりで、何事も氣づかずにゐる淺井に、お増は更まつた調子で言出した。
淺井は癒るとも癒らぬとも片着かぬ叔父の田舍から貰つて來た土産などを、漸と鞄から取出してゐる處であつた。むかし若い時分に、その妻が、自分の實の妹と良人とのなかを知つて、腹立しさと耻かしさとに喉を切つて死んだなぞと云ふ慘劇のあつた、叔父の家のことをお増もいつか淺井から聞かされて知つてゐた。
「それは然らなりますよ。」姉から、何を言はれても、義兄と切ることの出來なかつた妹や、倉へ入つて、白小袖を著て、懷刀で自殺したと云ふ姉のことを、淺井から聞いたとき、お増はそれを淨瑠璃か何ぞにあるやうな、遠い田舍の昔風な物語とのみ聞流してゐたのであつた。
「お前が其姉だつたらどうする。」淺井は笑談を言つてゐた。
「私なら死んだりなぞ爲やしませんわ。逐出して了ひますよ。」お増はさういつて笑つてゐた。
長いあひだ憶出しもせずにゐた其出來事が、生々しくお増の心に浮んで來た。村で葡萄を栽培したり、葡萄酒の釀造に腐心したりしてゐたと云ふ、その叔父の樣子なども見えるやうであつた。自殺した連合は、どんな女だつたらうと想像されたり、叔父と甥との體に、同じ血が流れてゐるらしく思はれたりした。
お今の姿の匿されたことに心著いた淺井は、その當座暫く問窮めもしなかつたが、お今の身のうへを、お増に向つて詳しく聞かれたことが不

安であつた。

「出したのなら出したでも可い。どこへ遣つたか、それを聞かうぢやないか。」淺井は酒氣のある時などに、憶出したやうにお増を詰つた。

「私に隱して、仕事をしようと云ふのなら、私も爾後一切お今のことについては、相談を受けんと云ふことにしよう。」淺井は眞面目になつてさうも言つた。

「いくらお前が隱したつて、搜さうと思へば譯はないよ。罷間違へば、警察の手を假りることも出來るし、田舍を騷がして、突つきだすと云ふ方法もある。」さうも言つて脅した。

「そんなら然うして搜したらいゝでせう。」お増は言張つたが、矢張隱通すことが出來なかつた。室の方の話を纏めるにしても、淺井の力を借りない譯に行かなかつた。

居所を知らさないで、お今が淺井のところへ出入するやうになつたのは、それから間もなくであつた。

五十三

「姉さんのとこへ來ると、ほんとに氣がせいせいしてよ。」

氣づまりな宿の二階に飽きて、お増の方へ遊びに來たお今は、道具などに金のかゝつた綺麗な部屋のなかや、掃除の行屆いた庭などを眺めながら言つた。袖垣のところにある、枝振のいい臘梅の葉が今年ももう黄色く蝕んで來た。ここに居るうちに、能く水をくれてやつた鉢植の石榴や欅の姿づくつた樹にも、秋風がそよいでゐた。近頃物に感傷しやすいお今の心は、そんなものにも遣瀬ない哀愁を入染ませてゐた。

淺井の家では、若い女中が一人殖えたり、田舍から託けられた、淺井の姉の子だと云ふ少年が來てゐたりして、偶に傍から來てゐるお今が、輕い反感を覺えるほど賑かであつた。衆は、宵のうちに下の座敷に集つて、この頃取寄せた蓄音器などに、笑ひ興じてゐた。最近の一夏で、滅切おしやまさんになつた靜子の樣子も、變つて來た自分の身のうへの心持を、お今の目に際立たせて見せた。

「お今ちやんも、愈室さんと御婚禮かな。」まだ晩酌の盃臺を離れずにゐる淺井は、避けてばかりゐるやうなお今が、ふとそこへ來て坐ると、然ういつて聲かけた。お今は絡みついて來る靜子と、敷物などのしつとりした緣側にゐた。

「室さんは、時々來るかね。」淺井は訊ねた。

「いゝえ。」お今は今日もお増につれられて宿へ訪ねて來た室のことを訊かれるのが、避けたいやうであつた。

「少し都合があつて、餘所へ出してあるんですがね。」お増は唯然ういつて、お今の居所を室に明すことも出來ずにゐたのであつたが、自分に縋りついて來るやうな、男の心持が、見てゐても苦しさうであつた。差向ひにゐても餘り口數をきかぬお今の樣子が、室の心を一層いらいらさせた。別居さしてある理由などに、疑を抱いてゐるらしい懊惱しさが、默つてゐる室の目に現はれてゐた。宿を出た三人は、途中その問題に觸れることなしに、別れたのであつた。

「お今も可哀さうですよ。」お今が歩遲れてゐるときに、お増は誰でもかけるやうに呟いたが、室はそれを問返さうともしないのであつた。

座敷では、色々の譜が差替へられた。お増の顏色を見て、淺井の側を離れて行つたお今は、衆と一緒にそれに聽入つてゐたが、甲高な謳の聲や三味線の音に、寂しい心が一層搔亂される丈であつた。

「運動がてらみんなで其處まで送らう。」歸りかけようとするお今に、淺井は言ひかけた。浴衣のうへに、羽織を引つかけて、パナマを冠

つた淺井に續いて、お增も素足に草履をつゝかけて外へ出た。

暗い町續きを三人はぶら〳〵と歩いてゐた。空には天の川が低く流れて、夜がしつとりと更けてゐた。

「一人歸すのは可哀さうだ、別莊まで送らう。」淺井は笑ひながら、何處までもとついて來た。三人はお今の宿のすぐ二三町手前まで來てゐた。

「不可ませんよ。入淺りになつちや困りますよ。」お增は笑ひながら、とある四辻の角に立停つた。水のやうな風が、三人の袂や裾を吹いてゐた。

五十四

室がちよい〳〵訪ねて行くお今の二階へ、淺井もお增と一緒に行つたり、靜子を連れたりして、偶には顏を出した。

室の身内にあたるとかいふ田舍の出張店をあづかつてゐる若い男が、お今のことでちよい〳〵淺井を訪ねてから、淺井も自らその話に肩を入れない譯には行かなかつた。

「室さんの方だつて、何もこちらの家柄や經歷に不可いと云ふんぢやないんでござんすからね。」前垂などをかけて、堅氣の商人らしい風をしたその男は、さう言つて話を進めた。

「もう一つ外の緣談を纏めてくれた方に對して、今更義理が惡いと云ふだけのことなのです。」

そんな話を一々素直に受入れた淺井は自分からお今にも說き勸めた。さういふ時の淺井の頭には、何等の矛盾もないらしく見えた。時がたちさへすれば、罅の入つたお今の心が、それなりに綺麗に縫合されたり熨されたりして行くとしか思へなかつた。

淺井の見立で、お今に著せて見たいと思ふ裾模樣をおかせた紋附などが、お增と三人で三越へ行つたとき註文されたのは、それから間もない十月の末であつた。お今が同意とも不同意とも、分明言切らないうちに話が、自然に固められて行つた。

お今はどうかすると、燥いだやうな調子で、支度などについての自分の意見を、淺井一人の前に言出した。お增の立てた見積が、反對的に出たお今の氣分には、一つ〳〵不滿足であつた。

淺井のところで、偶何かすると室と落合ふ時などは、髮や着物を氣にする、お今のそは〳〵した樣子が、お增の目にも憎らしく見えて來た。お今は室が歸つて行くあとから、お增に見せつけ氣味らしく直に出て行つたりなどした。

「あゝなると、此方が厭になつてしまひますね。もう貴方のことなどは何とも思つてゐやしませんよ。」お增は腹立しさうに、後で淺井に話した。

「出來るだけ、支度でも餘計に拵へてもらはうと云ふ、慾だけなんですよ。」

年のうちに內祝言だけを、東京ですますことに話が決るまでに、例の店員が、幾度となく淺井のところへ遣つて來たが、お今の兄からも手紙が來たり、支度の入費が送られたりした。話は何の蟠もなく進んで行つた。

新しい著物が仕立てあがる度に、淺井はお今を呼びにやつて、座敷でそれを著せて眺めなどした。下座敷の明るい電氣の下などで、お今はふつくらした肌理のいゝ體に、ほと〳〵するやうな友禪縮緬の長襦袢などを著て、うれしさうに[illegible]立つてゐた。汚れた足袋をぬきすてた足の爪はつれたが、[illegible]見えた。

「いゝ〳〵。」淺井は此方から[illegible]姿を眺めながら、[illegible]かけた。

「いゝわ、お今さやんは。」お增も傍から、うつ

とりした目をして、眺めてゐた。
「私なぞ一度もそんな事はなかつたよ。」
「己もないな。」淺井も傍から、溜息をついた。
「貴方はあつたぢやありませんか。先のお神さんの時に。」
「うゝん。」淺井は苦笑をしてゐた。
「見惚れてゐちや不可ませんよ。」
興奮したやうな淺井の目に、お増は氣づきでもしたやうに、急いでそれを隠した。

五十五

「どうも有難うございました。」脱いだ著物をきちんと疊んで、元の通り紙をかけて仕舞つてから、お今の歸つて行つたあとで、夫婦は、何か物足りないやうに甘いら〳〵しさを心に感じた。そこには萌黄の布の被つた簞笥のうへに新しい鏡臺などが置かれてあつた。
「お前もちよつと著てごらん。」淺井はお今の長襦袢を疊むとき、お増に言ひかけた。
「私？ 私にこんな派手な物は似合やしませんよ。」體の瘦ぎすな、澁い好みのお増は、著物の上へちよつと袖を片方通しただけで直に止めてしまつた。
「若い時分から私は然うでしたよ。」
寫眞に遺つてゐる、お増のその年頃の生々しい姿が、淺井の目にも浮んで來た。勝氣らしい口元のきりゝと締つた、下脹の顔は、今よりもずつと色が白さうで、睫毛の長い冴えた目にも熱情があつた。寫眞のお増は、たつぷりした髪を銀杏返に結つて、その頃流行つた白い帛を頸まで卷きつけて、コートを著てゐた。田舎の町で勤めてゐた家の子息の學生と、思斷つた戀をしたといふお増は、漸と十八か九であつた。
古い話が二人の間に、また掘返されはじめた。初めて商賣に出て、その男を知つた時のことなどが、情味に餓ゑてゐるやうな淺井の耳に、また新しく響いた。
「ねえ、貴方。」お増はしみ〴〵したやうな調子で言出した。
「あの人の婚禮がすんだら、私達も誰かを媒介に頼んで、お杯をしませうか。餘り年を取らないうちに、そんな寫眞も取つておきたいぢやないの。」お増はさう言つて、淋しげに笑つた。
「心細いやうね。」淺井も女を憫むやうに空虚な笑聲を立てた。
「まだ我々はそんな年でもないよ。」横になつてゐた淺井は、二筋三筋白髪のちか〳〵する鬢のところを撫でながら言つた。さうして冬になつてから、いくらか肉がついて來たが、目許などにはまだ窶みのとれない顔の線を眺めた。
「さうするには先づお前の體から整理しておかなければならない。入院して、思ひ切つて手當をしてみたら奈何だ。一月か半月ですむだ[illegible]お増は頭を振つた。一月の入院のあひだに、家がどうなるか知れないといふ不安が、これまでにも始終お増の決心を鈍らせた。
「今年も來年も年廻がわるいから、明後年にでもなつたら、療治をしませうよ。」しみ〴〵した話に、時が移つて行つた。
この頃色稼業を止めて、溜めた金で、芝の方に化粧品屋を出した女のところからの歸りがけなどに、ふと獨りでお今の二階へ寄つて、疲れた體を休めに行くことなどがあつた。お今は押入から搔卷などを出して來て、横になつてゐる淺井に私と被せかけなどした。
花で夜更しをして、今朝また飲んだ朝酒の醉のさめかゝつて來た淺井は、戰くやうな薄寒さに、目がさめた。綺麗にお化粧をして、羽織などを著替へたお今が、そこに枕頭の火鉢の前に子然と坐つてゐた。
お今のいれてくれた茶に、熱つた咽喉や胃の腑を潤しながら、淺井は何事もなささうな顔を

して、日の迫つて來たお今の婚禮の話などをしてゐた。

五十六

埃つぽい窓の障子に、三時頃の冬の日影が力なげに薄らいで來た頃に、淺井は漸とそこを脱出したが、遊びに耽り疲れた神經に、明るい外の光や騒がしい空風が可怖しいやうであつた。先刻まで被てゐた搔卷などの、そのまゝそこに束ねられた部屋の空氣も、厭はしく思へて來た。

「私もそこまで出ませうかしら。」お今も、今まで二人で籠つてゐた部屋に、一人殘されるのが不安であつた。

「ねえ、いけないこと。」お今は甘えるやうに然ういつて、鏡の前で髮などを直してゐた。弄ばれた自分の感情に對する腹立しさと恥しさとを押包んででもゐるやうな、可憐しい其横顏を、淺井は慘酷らしい目でぢつと眺めてゐた。

「お別に一度どこかへ行かうかね。」淺井は先刻さういつて、その時の興味でお今を唆つたのであつたが、お今は萎縮してゐるらしく、紅い顏をして、俛いてゐたのであつた。

「どこへ行くね。」淺井は調子づいたやうな女に、興のさめた顏をして訊いたが、淡い物足りなさが、心に沁出してゐた。

「どこでも可いわ、私まだ見ないところが、澤山あるから。」

「婚禮がすんだら、方々室さんに連れて行つてもらふと可い。」

「それは然うだけれど、その前に……。」

室の名を聞くと、お今は間近に迫つて來てゐる晴がましい婚禮が、頭腦に分明閃いたが、その考へは矢張確實ではなかつた。何時とも知らず、乘せられて來たその縁談が、支度などに氣のそは／＼する、其日々々の氣分に紛らされて來たことが、一層心苦しくなつた。その間にも、お今は自分の手で切盛をする世帶の樂しさや、人妻としての自分の矜などを、時々心に描いてゐた。財産家だと云ふ室の家を相續する日を考へるだけでも、お今の不安な心が躍るやうであつた。

「ほんとにお前さんは幸だよ。辛抱さへすれば、十萬圓と云ふ財産家の家を、切廻して行けるんだもの。」

室を嫌つてゐるとしか考へぬお増の然ういつて聞かす言の意味が、お今には可笑しく思へたり、自分から勧めた縁談に、氣のいら／＼するやうなお増が、蔑視まれたりした。

電燈のちら／＼する頃に、二人は銀座通をぶらぶら歩いてゐた。

日の暮れたばかりの街に、人がぞろ／＼出歩いてゐた。燥いだ鋪石のうへに、下駄や靴の音が騒々しく聞えて、寒い風が陽氣な店の軒先に白い砂を吹立ててゐた。

「こんな處、いつ來たつて同じね。」お今は蓮葉なやうな歩方をして、不足さうに言つた。近頃出來たばかりの、新しい半コートや、襟卷に引立つその姿が、をり／＼人を振顧らせてゐた。

「何處かもつと面白いところへ連れていつて頂戴よ。」お今は體を淺井に絡みつくやうにして低聲で言つた。

五十七

翌朝お今が訪ねて行つた時、淺井もお増もまだ二階に寢てゐた。

淺井の勝の學校へ行つたあとの茶の室は、しんとしてゐた。そこに鍋子が、千代紙などを切刻みながら、寂しげに坐つてゐた。昨夜すぐこの近所で別れた淺井が歸つてからの家の様子を嗅出さうとでもするやうに、お今はいら／＼しげに、そつちこつち部屋のなかを歩いてゐた。

若い方の女中は、緣側の硝子障子に、せつせと雜巾がけをしてゐた。
　時計が九時を打つてから、漸と二階から降りて來たお増は、明るい階下の光に、目眩しさうな目をして、火鉢の前に坐ると、口も利かずに、ぼんやりと莨をふかしてゐた。
　近頃淺井の入浸つてゐる情婦の店の近所を、お増は一昨日の晩も、長いあひだ往來してゐた。その情婦のところへ、淺井はお柳のゐた頃の自分にしたやうに、株劵や貴重な書類の入つた手提金庫などを運んでゐることが知れてから、二人の情交の段々深みへ入つてゐることが、お増に解つて來た。情婦の母親が、菓子折や子供への翫具などをもつて、ある日淺井の留守に、奥さんにお昵近になりたいといつて、挨拶に來たことが、一層お増の心を、深い疑惑の淵に沈めた。
「今度こそ眞ものだ。」お増は小林などの讖言が、到頭自分の身のうへに當つて來たやうに信ぜられてならなかつた。
　お今の緣談が決つてから、淺井の心は一層情婦の方へ惹かれて行つた。
「ほんとに憎らしい婆さんだよ。あゝやつて機嫌を取つて、私を掌中に丸めこまうとするんだよ。」
　お増は普通の女のやうに、野暮な仕向もしたくなかつた。そして當らず觸らずに、その場は愛想よく遇つて還したのであつたが、肉づきなどのぼちや／＼した、腰の低いその婆さんの、にこ／＼した狡さうな顔が、頭腦に喰込んでゐて取れなかつた。
「旦那には色々とお世話さまになつてをりますので、一度御挨拶に出なくちやならないと始終然う申してゐたんでございますがね、何分店があるものですから……。」
　婆さんは茶の室へ上込んで、お増や子供に、親しい言をかけたのであつた。
　淺井が留守になると、お増はその婆さん母子にちやほやされてゐる狀が、直に目に浮んで來た。まだ逢つたことのない女の顔なども、想像できるやうであつた。
「これを御縁に、手前どもへもどうぞ是非お遊びに入らして下さいましよ。そして仲よく致しませうよ。」婆さんの然ういつて歸つて行つた語にお増ははげしい侮辱を感じた。
「どうして、喰へない婆さんですよ。母子してお鳥目取にかゝつてゐるんでさ。」お増は可悔しさうに後で淺井に突かゝつたが、淺井は、にやにや笑つてゐた。
　時々におそい淺井を待つてゐるお増の耳に、賑しい情婦の笑聲が聞えたり、[illegible]な目[illegible]白い顔が浮んだりした。
　お増は寒い風にふかれながら、[illegible]られた、その店の暗闇を、何時までもうろ／＼として居た。そして時々向側にまはつて、遠くからその方を透して見たが、硝子障子をはめた店のなかは、分明見えなかつた。旋てそこらの店がしまつて、ひつそりした暗い町の夜が、痛しいほど更けて來た。お増はやつぱりそこを離れることができなかつた。

五十八

　その翌日、お増は半日外で遊び暮すつもりで、靜子をつれて、お芳の店などを訪ねて見たが、色々引懸のある氣が滅入つて、話が何時ものやうにはずまなかつた。
「今度といふ今度は、どんなことしたつて駄目なの。」お増はいつもの茶の室で、お芳夫婦に話した。
「私が理窟を言へば、お前に理窟を言はれるやうな、亂次のないことはしておかないつて言ふし、それぢや田舍へ歸りますと然ういへば、お

ながら淺井に言ひかけたが、淺井も仕方がないと云ふやうに、默つてゐた。

臺所の隅などに突立つて、深い思に沈んでゐるお今の姿が、時々お増の目についた。

「お今ちやん、お嫁に行くのが厭になつたんだよ。」お増は氣遣しげに訊ねた。何か、思ひがけない破綻が來はしないかと云ふ懸念が、時々お増の心を曇らせた。

「進まないものを、私だつて無理にやらうといふんぢやないのよ。壞すなら、今のうちですよ。」お増は用事の手を休めて、そこへお今を引据ゑながら氣を揉んだ。

「分明したことを言つて頂戴よ。妄なことをして、後で取返のつかないやうなことになつても困るぢやないの。」

結婚を破つてからの、自分とお増との不愉快な感情や、お増一家に一層澱んで來る暗い空氣、自分の不安な生活などを、お今は思はない譯に行かなかつた。

お今は脣を噛んで、目に涙を入染ませてゐた。

「厭になつちまふね、お今ちやんより、私の方が泣きたいくらゐなものよ。」

お増はまた起つて、奥の方へ行つた。淺井は[illegible]結納を持つて行くことになつてゐる、その世話焼の男と、前祝に酒を飲んでゐた。結婚の[illegible]度の運んだ、明るい部屋のなかには、色つぽい空氣が漂つてゐた。淺井はその男の滑稽などを聞きながら、ぐい／＼酒を飲んでゐた。

「可笑しな人、お今ちやんが泣いてゐるのよ。」

お増はその男の歸つたあとの、白けた座敷の火鉢の前に坐つて、莨をすひながら言出した。膳や銚子などが、そこに散らかつたまゝであつた。

「貴方から、あの人の氣をよく聽いて頂戴よ、私には何にも言ひませんよ。」

淺井は座蒲團のうへに、ぐつたり横になつて、目を瞑つてゐた。電氣の火影が、醉のひいたやうなその額を、しら／＼と照してゐた。

「まあいゝ。羽織をおだし。」などと、淺井はむつくり起上ると、帶のあひだから時計を出して見た。

「お前から、ようく然う言つてお置き。私が今口を出すとこぢやない。」淺井はさう言ひながら、茶を飲んでゐた。

「もう奈何でもいゝ。」

素直らしく淺井を送出してから、お増はむしやくしやしたやうに、座敷へ來て坐つた。

六十

内輪だけの式を擧げると云ふその當日には媒介役のその世話人夫婦と一緒に、お増夫婦もついて行つた。

花嫁の腕車が、淺井の家を出たのは、午後[illegible]時頃であつた。島田に結つて、白襟に三枚襲を著飾つたお今の、濃い化粧をした、ぼつちやりした顏が、黄昏時の薄闇のなかに、幌の隙間から、微白く見られた。その後から淺井夫婦が續いた。

會社の用事で、今朝から方々駈けまはつてゐた淺井が、ぼんやりした顏をして歸つて來た時には、お増やお今はもう湯から上つて、下座敷にすゑた鏡臺の前で、髪結の手傳で、お化粧をすましたところであつた。道具の持出されてしまつた部屋には、三人の禮服の襲に、長襦袢や仕扱などの附屬が取揃へられ、人々は高い聲も立てずに、支度に取りかゝつた。嚴かな靜さが部屋の空氣を占めてゐた。

丸髷に、薄色の櫛や笄をさしたお増は、手捷く著物を著てしまふと、帶のあひだへ仕舞込んだ莨入を取出して、默つて莨をすひながら、お今の扮装の出來るのを待つてゐた。

「こんな騒をして行つたつて、一年もたてば世帶持になつて、汚れてしまふんだよ。」

お増は髪結が後から、背負揚を宛つてゐる、お今の姿を見あげたから呟いた。

「眞實でございますね。」物馴れた髪結は、帶の形を退つて眺めてゐた。

「でも一生に一度の事でございますからね。私みたいに、亭主運がわるくて、二度もあつちや大變でございますけれど。」

髪結はお愛想笑をした。お増も淺井も空洞な笑聲を立てた。お今はきついやうな、不安らしい含羞んだ顏をして、默つてゐた。室との結婚の正體か、分明頭腦に考へられないやうであつた。

來るとか來ないとかいつて、長いあひだ決しなかつた父親や母親の、家の都合で到頭來ないことになつた、その日の式は、至極質素であつた。

皆すんだ後で、お今は、黒紋附を着た室と竝んで、結納や目錄などの飾られた床の前の方に坐つてゐた。松に鶴をかいた繪の幅がそこに懸けられてあつた。田舍から代りに出て來た室の親類の人達や、出入の商人なども、それに加つて居竝んだ。淺井夫婦、紹介で、一同の挨拶がすむと、親類の固めの杯が順々にまはされた。互に顏を見合つてゐるやうな重苦しい時が、靜かに移つて行つた。

室の叔父分にあたるといふ、田舍の堅い製絲業者らしい、フロックの男が、持つて來た猪口を、淺井夫婦の前に差出した頃、一座の氣分が、漸くほぐれはじめて來た。

「今回は不思議な御縁で……。」と、その男は兩手を疊について、更めて慇懃な挨拶をした。

淺井も丁寧に猪口を返した。製絲業などの話が、直に二人のあひだに始まつてゐた。

お増夫婦のそこを出たのは、席がばた／＼になつてからであつた。疲れたやうなお今の姿も、其席にはもう見えなかつた。

「これからです。徹夜飲みませうよ。」

叔父は起上る淺井の手を取つて、引留めた。

歸つたのは大分おそかつた。夫婦は、障子などの寢靜まつた茶の室で、そのまゝの姿で、茶を飲みながら、何時までも向合つてゐた。

「私達も、あゝ人を頼んで、一度お杯をしてみたいわねえ。」

お増は晴々した顏をして、奧へ著替に起つて行つた。

宇治

二人はまた水邊へおりて行つた。そして渡場のあるところまで下つて、そこから舟に乘つた。興勝寺を見たり、對岸を歩いたりしたかつた。

どんよりした雨雲が空に垂れさがつてはゐたが、そして其影が時々、青々した草のうへや、水の流れに落ちたりしたが、日はかんかん照りつけてゐた。綺麗な水草の生えた砂のきら／＼した小さい洲のやうなものに堰かれて、水がその邊では、底の小石の見えすくやうな美しさで、ちよろ／＼漣を立てて流れてゐた。舟がその邊を徐ろに離れて行つた。

舟には俳諧師じみた風流人の一行が乘合せてゐて、懷からノートなどを取出して、何やら苦吟してゐた。

するうちに江戸川を聯想させるやうな、青々した深い流れの中流へ、舟は出て來た。そこからは遠く重なり合つてゐる山の間から出て來る川上の水脈が、遙かに見渡された。流れは遲くて、しかも江戸川ほどの寂しさを感じさせなかつた。明るい親しい感じであつた。

あらくれ

一

お島が養親の口から、近いうちに自分に入婿の来るよしをほのめかされた時に、彼女の頭脳には、まだ何等の分明した考へも起つて来なかつた。

十八になつたお島は、その頃その界隈で男嫌ひといふ評判を立てられてゐた。そんなことをしずとも、町屋の娘と同じに、裁縫やお琴の稽古でもしてゐれば、立派に年頃の綺麗な娘で通して行かれる養家の家柄ではあつたが、手頭などの器用に産れついてゐない彼女は、ぢつと部屋のなかに坐つてゐるやうなことは余り好まなかつたので、稚いをりから善く外へ出て田畑の土を弄つたり、若い男達と一緒に、田植に出たり、稲刈に働いたりした。而してそんな荒仕事が何うかすると寧ろ彼女に適してゐるやうにすら思はれた。養蠶の季節などにも彼女は家中の誰よりも善く働いてみせた。さうして養父や養母の気に入られるのが、何よりの楽しみであつた。界隈の若いものや、傭男などから、彼女は時々揶揄はれたり、猥らな真似をされたりする機会が多かつた。お島はさうした男達と一緒に働いたり、ふざけたりして燥ぐことが好きであつたが、誰もまた彼女の頬や手に触れたといふ者はなかつた。さういふ場合には、お島はいつも荒れ馬のやうに暴れて、小ッぴどく男に手顔を引かくか、さもなければ人前でそれを素破ぬいて辱をかゝせるかして、自ら悦ばなければ止まなかつた。

お島は今でもその頃のことを善く覚えてゐるが、彼女がこゝへ貰はれて来たのは、七つの年であつた。お島は昔気質の律儀な父親に手をひかれて、或日の晩方、自分に深い憎しみを持つてゐる母親の荒い怒と惨酷な折檻から脱れるために、野原をそつち此方彷徨いてゐた。時は秋の末であつたらしく、近在の貧しい町の休み茶屋や、飲食店などには渋い柿が貫ざし、枝ごと吊されてあつたりした。父親はそれらの休み茶屋へ入つて、子供の疲れた足を劬り休めさせ、自分も[illegible]したり、[illegible]したりしてゐたが、無口な[illegible]に、[illegible]などを[illegible]して、[illegible]しい日でそこを見まはしてゐた。今まで[illegible]してゐた[illegible]かけつて、野面からは[illegible]い[illegible]がき、[illegible]の木立て、木立や[illegible]の人家、黄色い[illegible]、[illegible]いやうなどが、一様に夕靄に裹まれて、一日苦使はれて疲れた躰を[illegible]けに、[illegible]を[illegible]つてゆく[illegible]の姿などが、物悲しげにみえた。お島は大きな重い車をつけられて、轅に引張られてゆく動物のしよぼ／＼した目などを見ると、何となし涙ぐまれるやうであつた。[illegible]の荒い[illegible]からのがれて、[illegible]の道場に彷つてゐる自分の父親も可哀さうであつた。

お島は何時、ひろ／＼した水のほとりへ出て来たやうに覚えてゐる。其は尾久の渡しあたりでもあつたらうか。のんどりした暗碧なその水の面にはまだ真珠色の空の光がほのかに萌してゐて、静かに漕いでゆく淋しい舟の影が一つ二つみえた。岸には波がだぶ／＼と浸つて、[illegible]のやうな暗い木影が、そこに揺めいてゐた。お島の幼い心も、この静かな景色を眺めてゐるうちに、頭のうへから爪先まで、一種の畏怖と安易とにうたれて、黙つてぢつと父親の痩せた

手に縋つてゐるのであつた。

二

その時お島の父親は、どういふ心算で水のほとりへなぞ彼女をつれて行つたのか、今考へてみても其心持は素より解らない。或は渡を向へ渡つて、そこで知合の家を尋ねてお島の體の始末をする目算であつたであらうが、お島はその場合、水を見てゐる父親の暗い顔の底に、或可恐しい殘忍な思着が潜んでゐるのではないかと、ふと幼心に感づいて、怯えた。父親の顔には悔恨と憤懣の色が現はれてゐた。

赤兒のをりから里にやられてゐたお島は、家へ引取られてからも、氣強い母親に疎まれがちであつた。始終めそ〳〵してゐたお島は、どうかすると母親から、小さい手に燒火箸を押つけられたりした。お島は涙の目で、その火箸を見詰めてゐながら、剛情にも其手を引込めようとはしなかつた。それが一層母親の憎しみを募らせずにはおかなかつた。

「この業つく張め。」彼女はじり〳〵して、さう言つて罵つた。

昔は庄屋であつたお島の家は、その頃も界隈の人達から尊敬されてゐた。祖父が將軍家の出遊のをりの休憩所として、廣々した庭を献納したことなどが、家の由緒に立派な光を添へてゐた。その地面は今でも市民の遊園地として遺つてゐる。庭作りとして、高貴の家へ出入してゐたお島の父親は、彼が一生の瑕としたお島たちの母親である彼が二度目の妻を、賤しいところから迎へた。それは彼が、時々酒を飲みに行く、近在の或安料理屋にゐる女の一人であつた。彼女は家にゐては能く働いたが其の身状を誰も好く言ふものはなかつた。

お島が今の養家へ貰はれて來たのは、渡場でその時行逢つた父親の知合の男の口入であつた。紙漉場などをもつて、細々と暮してゐた養家では、その頃不思議な利得があつて、遽に身代が太り、地所などをどし〳〵買入れた。お島は養父母の口から、時々その折の不思議を洩れ聞いた。それは全然作物語にでもありさうな事件であつた。或冬の夕暮に、放浪の旅に疲れた一人の六部が、そこへ一夜の宿を乞求めた。夜があけてから、思ひがけない或幸か、この一家を見舞ふであらう由を言告げて立去つた。其旅客の迹に、貴い多くの小判が、外に積んだ楮のなかから、二三日たつて發見せられた。養父母は大分たつてから、一つはその旅客の迹を追ふべく、一つは諸方の神佛に、自分の幸を感謝すべく、同じ巡禮の旅に上つたが、終にそれらしい人の姿にも出逢はなかつた。左に右、養家はそれから好い事ばかりが續いた。ちよい〳〵町の人達へ金を貸しつけたりして、夫婦は財産の殖えるのを樂しんだ。

「その六部が何者であつたかなあ。」養父は稀に門邊へ來る六部などへ、厚く報謝をするをりなどに、その頃のことを想出して、お島に語聞せたが、お島はそんな事には格別の興味もなかつた。

養家へ來てからのお島は、生の親や兄弟たちと顔を合す機會は、滅多になかつた。

三

然し時がたつに從つて、その時の事實の眞相が少しづつお島の心に沁込むやうになつて來た。養家の舊を聞知つてゐる學校友達などから、ちよい〳〵聞くともなし聞齧つたところによると、六部はその晩急病のために其處で落命したのであつた。そして死んだ彼の懐に、小判の入つた重い財布があつた。それをそつくり養父母は自分の有にして了つたと云ふのであつた。お島は其の噂の方に、より多く眞實らしい

ところがあると考へたが、矢張好い氣持がしなかつた。

「言ひたがるものには、何とでも言はしておくさ。お金ができると何とか彼とか言ひたがるものなのだよ。」

お島がその事を、私と養母に糺したとき、彼女はさう言つて苦笑してゐたが、養父母に對する彼女の是迄の心持は、段々裏切られて來た。自分の幸福にさへ黑い汚點が出來たやうに思はれた。そして其からと云ふもの、出來るだけ養父母の祕密と、心の傷を劬りかばふやうにと力めたが、何うかすると親たちから疎まれ憚られてゐるやうな氣がしてならなかつた。

六部の泊つたと云ふ、佛壇のある寂しい部屋を、お島は夜厠への往來に必ず通らなければならなかつた。そこは疊の凸凹した、晝でも日の光の通はないやうな薄暗い八疊であつた。夫婦はそこから一段高い次の部屋に寢てゐたが、お島は大きくなつてからは大抵勝手に近い六疊の納戸に寢かされてゐた。お島はその八疊を通る度に、そこに財布を懷にしたまゝ死んでゐる六部の蒼白い顏や姿が、まざ〳〵見えるやうな氣がして、身うちが慄然とするやうな事があつた。夜はいつでも宵の口から臥床に入ること

にしてゐる父親の寢言などが、ふと寢覺の耳へ入つたりすると、それが不幸な旅客の亡靈か何ぞに魘されてゐる苦悶の聲ではないかと疑はれる。

陽氣のぽか〳〵する春先などでも家のなかは始終濕つぽく、陰慘な空氣が籠つてゐるやうに思へた。そして終日庭むきの部屋で針をもつてゐると、頭腦がのう〳〵して、壽命がちゞまるやうな鬱陶しさを感じた。お島は絲屑を拂ひおとして、裏の方にある紙漉場の方へ急いで出ていつた。

藪疊を控へた廣い平地にある紙漉場の葭簀に、溫かい日がさして、楮を浸すために盈々と湛へられた水が生暖かくぬるんでゐた。そこらには櫻がもう咲きかけてゐた。板に張られた紙が澤山日に干されてあつた。この商賣も、この三四年近邊に製紙工場が出來などしてからは、早晩罷めてしまふつもりで、養父は餘り身を入れぬやうになつた。今は職人の數も少かつた。そして幾分不用になつた空地は庭に作られて、洒落た枝折門などが營はれ、石や庭木が多く植ゑ込まれた。住居の方もあちこち手入をされた。養父は二三年そんな事にかゝつてゐたが、今は單にそればかりでなく、抵當流れになつたやうな家屋敷も抵に二三度[illegible]はあるらしかつた。けれど養父母はお島に詳しいことを話さなかつた。

「貧乏くさい商賣だね。」お島は自分の稚い時分から居ずわりになつてゐる男に聲をかけた。その男は楮を煮る、釜の下の火を見ながら、蹲踞んで莨を喫つてゐた。顴骨の伸びた蒼白い顏は、明るい春先になると、一層貧相らしくみえた。

「お前さんの紙漉も久しいもんだね。」

「駄目だよ。旦那が氣がないから。」作と云ふその男は俛いたまゝ答へた。「もう楮のなかから小判の出て來る氣遣もないからね。」

「眞實だ。」お島は鼻頭で笑つた。

四

お島は幼い時分この作といふ男に、よく學校の送迎などをして貰つたものだが、養父の姻に當る彼は、長いあひだ製紙の職工として、多くの女工と共に働かされたのみならず、野良仕事や養蠶にも始終苦使はれて來た。而して氣の強い主婦からはがみ〳〵言はれ、お島からは家か何ぞのやうに忌嫌はれた。絶え間のない勞働に堪へかねて、彼は何うかすると氣分がわるい

といつて、少し遲くまで寢てゐるやうなことがあると、主婦のおとらは直に氣荒く罵つた。

「おい〳〵、この忙しいのに寢てゐる奴があるかよ。時を考へてみろ。」

おとらは作の隱れて寢てゐる物置のやうな汚い其部屋を覗込みながら毎時のお定例を言つて呶鳴つた。甲走つたその聲が、彼の腦天までぴんと響いた。作は主人の兄にあたるやくざ者と、どこのものともしれぬ旅藝人の女との間にできた子供であつた。彼の父親は賭博や女に身上を入揚げて、その頃から弟の厄介ものであつたが、或時身寄を賴つて、上州の方へ稼ぎに行つてゐたをりに其女に引かゝつて、それから乞食のやうに零落れて、間もなくまた二人でこの町へ復つて來た。其時身重であつたその女が、作を産みおとしてから程なく、子供を弟の家に置去に、どこともなく旅へ出て行つた。男が病氣で死んだと云ふ報知が、木更津の方から來たのは、それから二三年も經つてからであつた。

お島はおとらが、その頃のことを何かのをりには作に言聞かせてゐるのを善く聞いた。おとらは其夫婦が、汽車にも得乘らず、夏の暑い日に、野良の荒い風に燒けやつれた黝い顏をして、疲れきつた足を引きずりながら這込んで來た光景を、口癖のやうに作に語つて聞かせた。少しでも怠けたり、ずるけたりすると其を持出した。

「あの衆と一緒だつたら、お前だつて今頃は乞食でもしてゐたらうよ。それでも生みの親が戀しいと思ふなら、いつだつて行くがいゝ。」

作は親のことを言出されると、時々ぼろ〳〵涙を流してゐたものだが、終にはえへへと笑つて聞いてゐた。

作はそんなに醜い男ではなかつたが、いぢけて育つたのと、發育盛を劇しい勞働に苦使はれて榮養が不十分であつたので、皮膚の色澤が惡く、青春期に達しても、ばさ〳〵したやうな目に潤ひがなかつた。主人に吩咐かつて、雨降りに學校へ迎に行つたり、宵に遊びほうけて、何時までも近所に姿のみえないをりなどは、遠くまで搜しにいつたりして、負つたり抱いたりして來たお島の、手足や髮の見ちがへるほど美しく肉づき伸びて行くのが物希しくふと彼の目に映つた。たつぷりした其髮を島田に結つて、なまめかしい八つ口から、むつちりした肱を見せながら、襷がけで働いてゐるお島の姿が、長いあひだ彼の心を苦しめて來た、彼女に對する淡い嫉妬をさへ、吸取るやうに拭つてしまつた。それまで彼は歴々とした生みの親のある、家の後取娘として、何彼につけておとらから衒かす樣に、隔てをおかれるお島を、詛はしくも思つてゐた。

五

お島が作を一層嫌つて、侮蔑するやうになつたのも其頃からであつた。

蒸暑い夏の或眞夜中に、お島はそこらを開放して、蚊帳のなかで寢苦しい體を持餘してゐたことがあつた。酸つぱいやうな蚊の唸聲が夢現のやうな彼女のいら〳〵しい心を責苛むやうに耳についた。その時ふとお島の目を脅かしたのは、蚊帳のそとから覗いてゐる作の蒼白い顏であつた。

「莫迦、阿母さんに言告けてやるから。」

お島は高い調子に叫んだ。それで作はのそのそと出ていつたが、それまで何の氣もなしに見てゐた其と同じやうな作の擧動が、その時お島の心に一々意味をもつて來た。お島は劇しい侮蔑を感じた。或時は野良仕事をしてゐる時につけ廻されたり、或時は湯殿にゐる自分の體に見入つてゐる彼の姿を見つけたりした。

間から紙入を取出すと、多分のお賽錢をお島の小さい蟇口に入れてくれた。そこは大師から一里も手前にある、ある町の料理屋であつた。二人は其の奥の、母屋から橋がかりになつてゐる新築の座敷の方へ落着いてから、お島を出してやつた。

それは丁度初夏頃の陽氣で、肥つたお島は長い野道を歩いて、脊筋が汗ばんでゐた。額にも汗がにじんで、白粉の剝げかゝつたのを、懐中から鏡を取出して、直したりした。山がかりになつてゐる料理屋の庭には、躑躅が咲亂れて、泉水に大きな緋鯉が繪に描いたやうに浮いてゐた。始終働きづめでゐるお島は、こんなところへ來て、偶に遊ぶのはそんなに惡い氣持もしなかつたが、落着のない靑柳や養母の目色を候ふと、何となく氣がつまつて居辛かつた。そして小さいをりから母親に媚びることを學ばされて、そんな事にのみ敏い心から、自然に故ら二人に甘えてみせたり、燥いでみせたりした。

「えゝ、可ござんすとも。」

お島は大きく頷いて、威勢よくそこを出ると、急いで大師の方へと歩出した。

町には[illegible]料理屋や、[illegible]、茶屋が[illegible]外にも四五軒、目に着いた[illegible]、人家を離れると直に田圃道へ出た。野や森は一面に靑々として、空が美しく澄んでゐた。白い往來には、大師詣りの人達の姿が、ちらほら見えて、或雜木林の片陰などには、汚い天刑病者が、そこにも此處にも頭を土に摺りつけてゐた。それらの或者は、お島の迹から絡り着いて來さうな調子で惠みを強請つた。お島は何うかすると、蟇口を開けて、錢を投げつゝ急いで通過ぎた。

七

曲りくねつた野道を、人の影について辿つて行くと、旋て大師道へ出て來た。お島はぞろぞろ往來してゐる人や俥の群に交つて歩いていつたが、本所や淺草邊の場末から出て來たらしい男女のなかには、美しく裝つた令孃や、意氣な内儀さんも偶には目についた。金緣眼鏡をかけて、細卷を用意した男もあつた。獨法師のお島は、草履や下駄にはねあがる砂埃のなかを、人なつかしいやうな可憐しい氣持で、ぱつぱと蓮葉に足を運んでゐた。ほてる脛に絡る長襦袢の、ぽつとりとした肩觸が、氣持が好かつた。今別れて來た養母や靑柳のことは直に忘れてゐた。

[illegible]畑には、色々の[illegible]を[illegible]てゐた。[illegible]子の虎や起あがり法師を賣つてゐたり、おこしやぶつ切り飴を鬻いでゐたりした。榮螺や蛤なども目についた。山門の上には馬鹿囃の音が聞えて、境内にも雜多の露店が居並んでゐた。お島は久しく見たこともないやうな、かりん糖や太白飴の店などを眺めながら本堂の方へあがつて行つたが、何處も彼處も在鄕くさいものばかりなのを、心寂しく思つた。お島は母に媚びるためにお守札や災難除のお札などを、こてこて受けることを怠らなかつた。

そこを出てから、お島は野廣い境内を、其方こつち歩いてみたが、處々に海獄の見せものや、田舍廻りの手品師などがゐるばかりで、一緒に來た美しい人達の姿もみえなかつた。お島は隙を潰すために、若い櫻の植ゑつけられた荒れた貧しい遊園地から、築山まではつて見た。田舍爺の加持のお水を頂いて飲んでゐるところだの、蠟燭のあがつた多くの大師の像のある處の前に佇んでみたりした。木立のなかには、海軍服を着た瘦猿の綱渡などが、多くの人を集めてゐた。お島はそこにも暫く立たうとしたが、焦立つやうな氣分が、長く足を止めさせなかつた。

休み茶屋で、[illegible]に[illegible]い[illegible]る[illegible]を

惑しつゝ、歸路についたのは、日がもう大分かげりかけてからであつた。田圃に薄寒い風が吹いて、野末のこゝ彼處に、千住あたりの工場の煙が重く棚引いてゐた。疲れたお島の心は、取留めのない物足りなさに掻亂されてゐた。

舊のお茶屋へ還つて往くと、酒に醉つた青柳は、取りちらかつた座敷の眞中に、座蒲團を枕にして寝てゐたが、おとらも赤い顔をして、小楊枝を使つてゐた。

「まあ可かつたね。お前お腹がすいて歩けなかつたらう。」おとらはお愛想を言つた。

「お前、お水を頂いて來たかい。」

「えゝ、どつさり頂いて來ました。」

お島はさうした嘘を吐くことに何の悲しみも感じなかつた。

おとらはお島に御飯を食べさせると、脱いで傍に疊んであつた羽織を自分に着たり、青柳に着せたりして、やがて其處を引揚げたが、町へ歸り着く頃には、もう悉皆日がくれて蛙の聲が静かな野中に聞え、人家には灯が點されてゐた。

「みんな御苦勞々々。」おとらは暗い入口から聲かけながら入つて行つたが、養父は裏で連に何か取込んでゐた。

八

お島は養父がいつまでも内へ入つて來ようともせず、入つて來ても、飯がすむと直帳簿調に取りかゝつたりして、無口であるのを自分のことのやうに氣味惡くも思つた。お島はいつもするやうに、「肩をもみませうか。」と云つて、養父の手のすいた時に、後へ廻つて、養母に代つて機嫌を取るやうにした。お島は九つ十の時分から、養父の肩を揉ませられるのが習慣になつてゐた。

おとらは一休みしてから、晴着の始末などをすると、そつち此方戸締をしたり、一日取りちらかつた其處らを癇性らしく取片着けたりしてゐたが、そのうちに夫婦の間にぽつ〳〵話がはじまつて、今日行つたお茶屋の噂なども出た。そのお茶屋を養父も昔から知つてゐた。

此處から三四里もある或町の農家で同じ製紙業者の娘であつたおとらは、其父親が若いなりに東京で懇意になつた或女に産れた子供であつたので、東京にも知合が多く、都會のことは能く知つてゐるが、今の良人が取引上のことで、ちよく〳〵其處へ出入してゐるうちに、いつか親しい間になつたのだと云ふことは、お島もおとらから聞かされて知つてゐた。[illegible]帯を張つてゐた養父は、それまで祖父の許に育てられて、不仕合せがちであつたおとらと一緒になつてから、二人で心を合せて、出精に稼いだ。その苦勞をおとらは能くお島に言聞せたが、身上ができてからの此二三年のおとらの心持には、いくらか弛みができて來てゐた。世間の快樂については、何もしらない養父から、少しづつ心が離れて、長いあひだの壓迫の反動が、彼女を動もすると放肆な生活に誘出さうとしてゐた。

お島は長いあひだ養父母の肩を採んでから、漸と寝床につくことが出來たが、お茶屋の奥の室での、刺戟の強い今日の男女の光景を思浮べつゝ、直に健かな眠に陥ちて了つた。蛙の聲がうと〳〵と疲れた耳に聞えて、發育盛の手足が懈く熱つてゐた。

翌朝も養父母は、何のこともなげな様子で働いてゐた。

お花を連出すときも、男女の遊び場所は矢張同じお茶屋であつたが、お島はお花と一緒に、淺草へ遊びにやつて貰つたりした。お島はお花と俥で上野の方から淺草へ出て往つた。そして觀音さまへお詣りをしたり、花屋敷へ入つ

たりして、時を消した。二人は手を引合つて人込のなかを歩いてゐたが、矢張心が落着かなかつた。

おとらは時とすると、若い青柳の細君をつれだして、東京へ遊びに行くこともあつたが、内氣らしい細君は、誘はるゝまゝに素直について往つた。おとらは往返りには青柳の家へ寄つて、姉か何ぞのやうに舉動つてゐたが、細君は心の侮蔑を面にも現はさず、物節かに待遇つてゐた。

九

何時の頃であつたか、多分その翌年頃の夏であつたらう、その年重にお島の手に委されてあつた、僅二枚ばかりの蠶が、出來揚るに間のない或日、養父とごた／＼した物言の舉句、養母は着物などを着替へて、ぶらりと何處かへ出ていつて了つた。

養母はその時、青柳にその時々に貸した金のことについて、養父から不足を言はれたのが、氣に障つたと云つて、大聲をたてて良人に喰つてかゝつた。話の調子の低いのが天性である養父は、嵩にかゝつて言募つて來るおとらの爲に塗込められて、終には宥めるやうに辭を和げたか、矢張いつまでもぐづ／＼言つてゐた。

「ちつと昔を考へて見るが可いんだ。お前さんだつて好いことばかりもしてゐないだらう。舊を洗つてみた日には、餘り大きな顏をして表を歩けた義理でもないぢやないか。」

養蠶室にあてた例の薄暗い八疊で、給桑に働いてゐたお島は、甲高な其聲を洩聞くと、胸がどきりとするやうであつた。お島は直に六部のことを思出さずにゐられなかつた。ぶす／＼言つてゐる萎れた養父の聲も途斷れ／＼に聞えた。

青柳に貸した金の額は、お島にはよくは判らなかつたが、家の普請に幾分用立てた金を初めとして、ちよい／＼持つていつた金は少い額ではないらしかつた。此一二年青柳の生活が、いくらか華美になつて來たのが、お島にも目についた。養父の知らないやうな少額の金や品物が、始終養母の手から私と供給されてゐた。

おとらは其年の冬の頃、一度青柳と一緒に落合つた養母のお伴をしたことがあつたが、十七になるお島を連出すことはおとらにも漸く憚られて來た。場所も以前のお茶屋ではなかつた。

その日も養父は、使道の分明しないやうな金のことについて、此頃からおとらとの間に紛紜を惹起してゐた。長いあひだ不問に附して來た、青柳への貸のことが、ふと其時彼の口から言出された。そして日頃肚に保つてゐた色々の場合のおとらの舉動が、ねち／＼した調子で詰られるのであつた。

結句おとらは、綺麗に財産を半分わけにして、別れようと言出した。そして良人の傍を離れると、奥の室へ入つて、暫く用簞笥の抽斗の音などをさせてゐたが、それきり出ていつた。

「まあ阿母さん、そんなに御立腹なさらないで、後生ですから家にゐて下さい。阿母さんが出ていつておしまひなすつたら、私なんざ何うするんでせう。」

お島はその傍へいつて、目に涙をためて哀願したが、おとらは振顧きもしなかつた。

夜になつてから、お島は養父に吩咐かつて、近所をそつち此方尋ねてあるいた。青柳の家へもいつて見たが、見つからなかつた。

おとらの未だ歸つて來ない、或日の午後、蠶に忙しいお島の目に、ふと庭向の離房の座敷で、おとらを生家へ出してやつた留守に、何時か爲たやうに、夥しい紙幣を干してゐる養父の姿を見た。八疊ばかりの風通のいゝ其部屋には、紙幣の幾束が日當りへ取出されてあつた。

十

お島は養父が、二三軒の知合の家へ葉書を出したことを知つてゐたが、おとらが歸つてから、漸と届いたおとらの生家の外は、其返事はどこからも來なかつた。

養父は何うかすると、蠶室にゐるお島の傍へ來て、もうひきるばかりになつてゐる蠶を眺めなどしてゐた。蠶の或物はその蒼白い透徹るやうな軀を硬張せて、細い絲を吐きかけてゐた。

「お前阿母から口止されてることがあるだらうが。」

養父は此時に限らず、おとらのゐない處で、何うかするとお島に訊ねた。

「何うしてです。いゝえ。」お島は顔を赧めた。

しかし養父はそれ以上深入しようとはしなかつた。お島にはおとらに對する養父の弱點が見えすいてゐるやうであつた。

もう遊びあいて、家が氣にかゝりだしたと云ふ風で、おとらの歸つて來たのは、その日の暮近くであつた。養父はまだ帳場の方を離れずにゐたが、おとらは亭主にも詞もかけず、「はい只今。」と、お島に聲かけて、茶の室へ來て足を投出すと、せい／＼するやうな目色をして、庭先を眺めてゐた。濃い緑の草や木の色が、まだ油繪具のやうに生々してみえた。

お島は脱ぎすてた晴衣や、汗ばんだ襦袢などを、風通しのいゝ座敷の方で、衣紋竹にかけたり、茶をいれたりした。

「こんな時に顔を出しておきませうと思つて、方々歩きまはつて來たよ。」おとらは行水をつかひながら、背を流してゐるお島に話しかけた。その行つた先には、稼遊なかのおとらの妹の片附先や、子供のをりの田舎の友達の嫁づいてゐる家などがあつた。それらは皆東京のごちやごちやした下町の方であつた。そして誰も好い暮しをしてゐる者はないらしかつた。そして一日二日もゐると、直に厭氣がさして來た。おとら夫婦は、金ができるにつれて、其等の人達との間に段々隔てができて、往來も絶えがちになつてゐた。生家とも矢張さうであつた。

湯から上つて來ると、おとらは東京からこてこて持つて來た海苔や鹽煎餅のやうなものを、明の下で亭主に見せなどしてゐたが、飯がすむと蚊のうるさい茶の室を離れて、直に蚊帳のなかへ入つてしまつた。

毎夜々々寢苦しいお島は、白い地面の熱氣の夜露に吸取られる頃まで、外へ持出した縁臺に涼んでゐたが、[illegible]、時々そこに落合つた。町の若い男女の噂が出たり、町の山車で女を怒らせたりした。

仕事場からかへつた作次が、浴衣を引かけて出て來ると、うろ／＼傍へ寄つて來た。

「この莫迦また出て來た。」お島は嶮しく[illegible]げについと其處を離れた。

十一

おとらと青柳との間に成立つてゐたお島と青柳の弟との縁談が、養父の不同意によつて、立消えになつた頃には、おとらも段々青柳から遠ざかつてゐた。一つはお島などの口から、自分と青柳との關係が、うす／＼良人の耳に入つたことが、其樣子で感づかれたのに厭氣がさしたからであつたが、一つは青柳夫婦がぐるになつて、慾一方でかゝつてゐることが餘りに見えすいて來たからであつた。

お島が十七の暮から春へかけて、作の相續問題が、また養父母のあひだに持ちあがつて來た。お島はそのことで、養父母の機嫌をそこねてから、一度生みの親達の傍へ歸つてゐた。お島は其頃、誰が自分の婿であるかを明白知らずにゐた。そして婚禮支度の自分の衣裳などを縫ひな

から、時々青柳の弟のことなどを、ぼんやり考へてゐた。東京の學校で、機械の方をやつてゐた其弟と、お島はついこれまで口を利いたこともなかつたし、自分を何う思つてゐるかをも知らなかつたが、深川の方に勤め口が見つかつてから、毎朝はやく、詰襟の洋服を着て、鳥打をかぶつて出て行く姿をちよい／＼見かけた。途中で逢ふをりなどには、雙方でお辭儀ぐらゐはしたが、お島自身は彼について深く考へて見たこともなかつた。そして青柳とおとらとの間に、その話の出るとき毎時避けるやうにしてゐた。

ある時そんな事については、から薄ぼんやりなお花の手を通して、綺麗な横封に入つた手紙を受取つたが、洋紙にペンで書いた細い文字が、何を書いてあるのかお花にはよくも解らなかつたが、雙方の家庭に對する不滿らしいことの意味が、お島にもぼんやり頭腦に入つた。お島のそんな家庭に縛られてゐる不幸に同情してゐるやうな心持も、微に受取れたが、お島は何だか厭味なやうな、擽つたいやうな氣がして、後で揉くしやにして棄ててしまつた。その事を、多少は誇りたい心で、おとらに話すと、おとらも笑つてゐた。

「あれも妙な男さ。養子なんかに行くのに厭だといつて置きながら、そんな物をくれるなんて。」

お島は養父母が、悉皆作に取決めてゐることを感づいてから、仕事も手につかないほど不快を感じて來た。おとらは不機嫌なお島の顏をみると、お島が七つのとき初めて、人につれられて貰はれて來た時の慘なさまを掘返して聞かせた。

「あの時お前のお父さんは、お前の遣場に困つて、阿母さんへの面あてに川へでも棄ててしまはうと思つたくらゐだつたと云ふ話だよ。あの阿母さんの手にかゝつてゐたら、お前は產れもつかぬ不具になつてゐたかも知れないよ。」おとらはさう言つて、生みの親の無情なことを話り聞かせた。

十二

近所でも知らないやうな、作とお島との婚禮談が、遠方の取引先などで、意ひがけなくお島の耳へ入つたりしてから、お島は一層分明自分の慘な今の身のうへを見せつけられるやうな氣がして、腹立しかつた。そして其事を吹聽してあるくらしい、作の顏が一層間ぬけてみえ、厭らしく思へた。

「まだ歸らねえかい。」さう言つて、小さい時分から學校へ迎ひに來た作は、昔も今も同じやうな顏をしてゐた。

「外に待つておいで。」お島はよく叱りつけるやうに言つて、入口の外に待たしておいたものだが、今でも矢張、下駄に手をふれられても身ぶるひがするほど厭であつた。

婚禮談が出るやうになつてから、作は懲りずまに着くお島の傍へ寄つて來た。餘所行の化粧をしてゐるときも、彼は横へ來てにこ／＼しながら、横顏を眺めてゐた。

「あつちへ行つておいで。」お島はのしかゝるやうな癇癪聲を出して逐退けた。

「そんなに嫌はんでも可いよ。」作はのそ／＼出ていつた。

作の來るのを防ぐために、お島は夜自分の部屋の襖に心張棒を突支へておいたりしなければならなかつた。

「厭だ／＼、私死んでも作なんぞと一緒になるのは厭です。」お島は作のゐる前ですら、始終母親にさう言つて、剛情を張通して來た。

「作さんが到頭お島さんのお婿さんに決つたさうぢやないか。」

お島は仕切を取りに行く先々で、揶揄ひ面で訊かれた。足まめで、口のてきぱきしたお島は、十五六のをりから、さうした得意先まはりをさせられてゐた。お島のきび〳〵した調子と、蓮葉な取引とが、到るところで評判がよかつた。お島の顏は一層廣くなつて行つた。

それが小心な養父には、氣に入らなかつた。時々お島は養父から小言を言はれた。

「可いぢやありませんか阿父さん、家の身上をへらすやうな氣遣はありませんよ。」

「阿父さんのやうに吝々してゐたんぢや、手廣い商賣は出來やしませんよ。」

ぱつ〳〵とするお島の遣口に、不安を懷きながらも、氣無精な養父は、お島の働きぶりを調法がらずにはゐられなかつた。

「譃ですよ。」

お島は作と自分との結婚を否認した。

「それでも作さんが然う言つてゐましたぜ。」取引先の或人は、さう云つて面白さうにお島の顏を瞶めた。

「あの莫迦の言ふことが、信用できるもんですか。」お島は鼻で笑つてゐた。

王子の方にある生家へ逃げて歸るまでに、お島の周圍には、その噂が到るところに擴がつてゐた。

「それぢやお前は、どんな男が望みなのだえ。」おとらは終にお島に訊ねた。

「然うですね。」お島はいつもの調子で答へた。「私はあんな愚圖々々した人は大嫌ひです。些とは何か大きい仕事でもしさうな人で、綺麗に暮していけるやうな人でなければ、つまりません。一生紙をすいたり、金の利息の勘定して暮すのは私厭です。」

十三

盆か正月でなければ、滅多に泊つたことのない生みの親達の家へ來て二三日たつと、直に養母が迎ひに來た。

お島が盆暮に生家を訪れる時には、砂糖袋か鮭を携へて作が乾度お伴をするのであつたが、この二三年商賣の方を助けなどするために、時には金の仕舞つてある押入や用箪笥の鍵を委されるやうになつてからは、不斷は仲のわるい姉や、母親の感化から、これも動もすると自分に一種の輕侮を持つてゐる妹に、半衿や下駄や、色々の物を買つて行つて、お辭儀をされるのを矜りとした。姉や妹に限らず、養家へ出入する人にも、お島はぱつぱと金や品物をくれてやるのが、氣持が好かつた。貧しい作男や、職人に、堅く財布の口を締めてゐる養父も、傍へお島に來られて喙を容れられると、因業を言張つて許りもゐられなかつた。遊女屋から馬をひいて來る馬丁などに、お島は自分の傍へ呼んで時々小錢を出してくれた。それらの人は、途でお島に逢ふと、心から丁寧にお辭儀をした。

大方の屋敷まはりを兄に委せかけてあつた實家の父親は、兄が遊蕩を始めてから、また自分で稼業に出ることにしてゐたので、お島はさうして時々歸つて來てゐても滅多に父親と顏を合さなかつた。毎日々々箸の上下しに出る母親の呟々しい當こすりが、お島の頭腦をくさ〳〵させた。

「さう毎日々々働いてくれても、お前のものと云つては何にもありやしないよ。」

母親は、外へ出て廣い庭の草を取つたり、父親が古くから持つてゐて手放すのを惜しんでゐる植木に水をくれたりして、まめに働いてゐるお島の姿をみると、家のなかから言聞かせた。

廣い門のうちから、垣根に圍はれた山がかりの庭には、松や梅の古木の植わつた大きな鉢が、幾個となく置駢べられてあつた。庭の外には、幾十株松を育ててある土地があつたり、雜多の

庭木の植木溜があつたりした。この界隈に散らばつてゐる其等の地面が、近頃兄弟達の財産として、それ〳〵分割されたと云ふことはお島も聞いてゐた。

いつか父親が、自分の隱居所にするつもりで、安く手に入れた材木を使つて建てさせた屋敷も、其等の土地の一つのうちにあつた。

「えゝ。此とばかりの地面や木なんぞ貰つたつて、何になるもんですか。水島の物にだつて目をくれてやしませんよ。」お島は跣足で、井戸から如露に水を汲込みながら言つた。

「好い氣前だ。その根性骨だから人樣に憎がられるのだよ。」

「憎むのは阿母さんばかりです。私は是まで人に憎がられた覺えなんかありやしませんよ。」

「さうかい、然う思つてゐれば間違はない。他人のなかに揉まれて、些とは直つたかと思つてゐれば、段々不可くなるばかりだ。」

「餘計なお世話です。自分が育てもしない癖に」お島は如露を提げてさつさと奥の方へ入つて行つた。

十四

お島はもう大概水をくれて了つたのであつたが、家へ入つてからの母親との紛紜が氣嶮さに、矢張大きな如露をさげて、其方こつちの植木の根にそゝいだり、可也の距離から來る煤煙に汚れた常磐木の枝葉を拂ひなどしてゐたが、目が時々入染んで來る涙に曇つた。

「お島さん、どうも濟みませんね。などと、仕事から歸つて來た若いものが聲をかけたりした。

「私はぢつとしてゐられない性分だからね。」

とお島はくつきりと白い頰のあたりへ垂れかゝつて來る髪を掻きあげながら、繁みの間から晴やかな笑聲を洩してゐたが、預けられてあつた里から歸つて來て、今の養家へもらはれて行くまでの短い月日のあひだに、母親から受けた折檻の苦しみが、憶起された。四つか五つの時分に、燒火箸を捺しつけられた痕は、今でも丸々した手の甲の肉のうへに痣のやうに殘つてゐる。父親に告口をしたのが憎らしいと云つて、口を抓られたり、妹を苛めたといつては、二三尺も積つてゐる背戸の雪のなかへ小突出されて、息の窒るほどぎう〳〵壓しつけられた。兄弟達に食物を頒けるとき、お島だけは傍に突立つたまゝ、物欲しさうに、默つてみてゐる樣子が太々しいといつて、何もくれなかつたりした。土藏や、木鋏や、鋤鍬の仕舞はれてある物置にお島はいつまでも、めそ〳〵泣いてゐて、日の暮にそのまゝ錠をおろされて、地團ふんで泣立てたこともあつた。

父親は、その度に母親をなだめて、お島を救してくれた。

「多勢子供も有つてみたが、こんな意地張は一人もありやしない。」母親はお島を捻りもつぶしたいやうな調子で、父親と爭つた。

お島は我子ばかりを劬つて、人の子を取つて喰つたといふ鬼子母神が、自分の母親のやうな人であつたらうと思つた。母親はお島一人を除いては、何の子供にも同じやうな愛執を持つてゐた。

日が暮れる頃に、お島は物置の始末をして、漸と夕飯に入つて來たが、父親は難しい顔をして、いつか長火鉢の傍で膳に向つて、お仕着せの晩酌をはじめてゐるところであつた。外はもう夜の色が遠擴がつて、近所の牧場では牛の聲などがしてゐた。往來の方で探偵ごつこをしてゐた子供達も、姿をかくして、空には柔かい星の影が春めいてみえた。

「まあ一月でも二月でも家においてやるがいい。奉公に出したつて、もう一人前の女だ。」父親はそんなことを言つて、何かぶつくさ言つて

ゐる母親を和めてゐるらしかつたが、お島は臺所で、それを聞くともなしに、耳を立てながら、自分の食器などを取出してゐた。

「今に見ろ、目の飛出るやうなことをしてやるから。」お島はむら／＼した母への反抗心を抑へながら、平氣らしい顏をしてそこへ出て行つた。切めて自分を養家へ口入した、西田と云ふ爺さんの行つてゐるやうな仕事に活動してみたいとも思つた。その爺さんは、近頃陸軍へ馬糧などを納めて、めき／＼家を大きくしてゐた。實直に働いて來た若いものにくれてやつた姉などを、さも幸福らしく言つてゐる母親を、お島は苦々しく思つてゐたが、それにつけても、一生作などと婚禮するためには、養家の閾は跨ぐまいと考へてゐた。食事をしてゐる間も、昂奮した頭腦が、時々ぐら／＼するやうであつた。

十五

或日の午後におとらが迎ひに來たとき、父親も丁度家に居合せて、こゝから二三町先にある持地で、三四人の若い者を指圖して、可也大きな赤松を一株、或得意先へ持運ぶべく根拵へをしてゐた。

お島はおとらを客座敷の方へ案内すると、直に席をはづして了つたが、實母の吩咐で父親を呼びに行つた。お島はかうして邪慳な實母の傍へ來てゐると、小さい時分から自分を可愛がつて育ててくれた養母の方に、多くの可懷しみのあることが分明感ぜられて來た。養家や長い馴染の其周圍も戀しかつた。

「島ちやん、お前さん然う幾日も／＼こちらの御厄介になつてゐても濟まないぢやないか。今日は私がつれに來ましたよ。」おとらにいきなり然う言つて上り込んで來られた時、お島は反抗する張合がぬけたやうな氣がして、何だか涙ぐましくなつて來た。

「手前の躾がわりいから、あんな我儘を言ふんだ。此先もあることだから放抛つておけと、宅ではさう言つて怒つてゐるんですけれど、私もかゝり子にしようと思へばこそ、今日まで面倒を見てきたあの子ですからね。」

おとらの然う言つてゐる挨拶を茶の室で茶をいれながら、お島は聞いてゐたが、お島のことと云ふと、誰に向つてもひり出すやうに言ひたい實母も、たゞ簡短に應答をしてゐるだけであつた。

こんな出入に口無調法な父親は、さも困つたやうな顏をしてゐたが、旋て井戸の方へまはつて手足を洗ふと、內へ入つて來た。お島は母親のゐないところで、つい此の二三日前にも、父親が事によつたら、母親に內密で自分に分けてもいゝと言つた地面の坪數や價格などについて、父親に色々聞されたこともあつた。その坪は一千弱で、安く見積つてもざつと一萬圓が一圓でも切れると云ふことはなからうと云ふのであつた。お島は心强いやうな氣がしたが、母親の目の黑いうちは、滅多にその分前に有附けさうにも思へなかつた。「家の地面は、全部で何のくらゐあるの。」お島は何時も父親に訊いてみた。

「さうさな。」と、父親は笑つてゐたが、それが大見・萬近いものであることは、お島にも考へられた。中には野菜畠や田地も含まれてゐた。子供が多いのと、この二三年兄の浪費が多かつたのとで、借金の方へ入つてゐる場所も少くなかつた。去年の秋から、家を離れて、田舍へ嫁ぎにいつてゐる兄の傍には、暫く係合つてゐた商賣人あがりの女が未だに附絡つてゐたり、嫂が三つになる子供と一緒に、東京にある其實家へ引取られてゐたりした。父親の助けになる男片と云つては、十六になるお島の弟が一人家にゐるきりであつた。

家が段々ばた／＼になりかゝつてゐると云ふことが、さうして五日も六日も見てゐるお島の心に感ぜられて來た。母親のやきもきしてゐる樣子も、見えすいてゐた。

十六

お島は父親が内へ入つてからも、暫く裏の植木畑のあたりを逍遙いてゐた。何うせ此にゐても、母親と毎日々々啀みあつてゐなければならない。啀み合へば合ふほど、自分の反抗心と、憎惡の念とが募つて行くばかりである。長いあひだ忘れてゐた自分の子供の時分に受けた母親の仕打が、心に熟み爛れてゆくばかりである。一萬と萬と弟や妹の分前はあつても、自分には一握の土さへないことを思ふと頼りなかつた。それかと言つて、養家へ歸れば、寄つて集つて乾度作と結婚しろと責められるに極つてゐた。多勢の取引先や出入の人達には、もう其が單なる噂ではなくて、事實となつて刻まれてゐる。お島は作の顏を見るのも厭だと思つた。あの先けあがつたやうな貧相らしい頭から、いつも耳までかゝつてゐる尨犬のやうな髮毛や赤い目、鈍くさい口の利方や、卑しげな奴隷根性などが、一緒に育つて來た男であるだけに、一層醜くも蔑視ましくも思へた。あんな男と一緒に一生暮せようとは、何うしても考へられなかつた。實母がそれを生意氣だといつて罵るのはまだしも、實父にまで、時々それを壓しつけようとする口吻を洩されるのは、堪へられないほど情なかつた。

大分たつてから皆の前へ呼ばれていつた時、お島は漸と目に入染んでゐる涙を拭いた。

「私もこの四五日忙しいんで、聞いてみる隙もなかつたが、全體お前の了簡は何ういふんだな。」

お島が太てたやうな顏をして、そこへ坐つたとき、父親が硬い手に煙管を取りあげながら訊ねた。お島は曇んだ目色をして、默つてゐた。

「今日までの阿母さんの恩を考へたら、お前が作さんを嫌ふの何のと、我儘を言へた義理ぢやなからうぢやねえか。ようく物を考へてみろよ。」

「私は厭です。」お島は顏の筋肉を戰かせながら言つた。

「他の事なら、何でも爲て御恩返しをしますけれど、此だけは私厭です。」

父親は默つて煙管を銜へたまゝ俛いてしまつたが、母親は憎さげにお島の顏を瞶めてゐた。

「島、お前よく考へてごらんよ。衆さんの前でそんな御挨拶をして、それで濟むと思つてゐるのかい。義理としても、さうは言はせておかないよ。眞實に惘れたもんだね。」

「どうしてまた然う作太郎を嫌つたものだらうねえ。」おとらは前屈みになつて、華車な銀煙管に煙草をつめながら一服喫すと、「だからね、其はそれとして、左に右私と一緒に一度還つておくれ。そんなに厭なものを、私だつて無理にとは言ひませんよ。出入の人達の口も煩いから、今日はまあ歸りませう。ねえ。話は後でもできるから。」と宥めるやうに言つて、そろ／＼煙管を仕舞ひはじめた。

お島を頷かせるまでには、大分手間がとれたが、歸るとなると、お島は自分の關係が分明わかつて來たやうなこの家を出るのに、何の未練氣もなかつた。

「どうも濟みません。色々御心配をかけました。」お島はさう言つて挨拶をしたから、おとらについて出た。

そして何時にかはらぬ睦じい調子で、氣爽におとらと話を交へた。

「男前が好くないからつたつて、さう嫌つたもんでもないんだがね。」

おとらは追々お島に話しかけたが、互に作太郎の事は是きり一切口にしないといふ約束が取極められた。

十七

おとらは途で知合の人に行逢ふと、きっとお島か、生家の母親の消息を見舞ひにいった事に吹聴してゐたが、お島にも其心算でゐるやうにと言含めた。

「作太郎にも餘りつんけんしない方がいゝよ。あれだってお前、為ることは鈍間でも、人間は好いもんだよ。それにあの若さで、女買ひ一つするぢやなし、お前をお嫁にすることとばかり思って、あゝやって働いてゐるんだから。彼に働かしておいて、島ちゃんが商賣をやるやうにすれば、鬼に鐵棒といふものぢやないか。お前は今にきっと然う思ふやうになりますよ。」おとらはさうも言って聞かせた。

お島は何だか變だと思ったが、欺したり何かしたら承知しないと、獨りで決心してゐた。

家へ歸ると、氣をきかして何處かへ用達しにやったとみえて、作の姿は何處にも見えなかったが、紙漉場の方にゐた養父は、おとらの聲を聞きつけると、直に裏口から上って來た。お島はおとらに追々言はれたやうに、「御父さんどうも濟みません。」と、聲を殺して其だけ言ってお叩頭をしたきりであったが、おとらが、さも自分が後悔してでもゐるかのやうな取做をするのを聞くと、急に[illegible]氣がさして、かっと目が晦むやうであった。お島は此家が急に居心がわるくなって來たやうに思へた。取返しのつかぬ破滅に陷ちて來たやうにも考へられた。

「あの時王子の御父さんは、家へ歸って來ると、お島は隅田川へ流してしまったと云って、御母さんに話したと云ふことは、お前も忘れちゃゐない筈だ。」養父はねちねちした調子で、そんな事まで言出した。

お島はつんと顔を外向けたが、涙がぽろぽろと頰へ流れた。

「恩を忘れるくらゐな人間なら、駄目のこった。」

お島がいらいらして、そこを立ちかけようとすると、養父はまた言足した。

「それで王子の方では、皆さんどんな考だったか。よもやお前に理があるとは言ふまいよ。」

お島は俛いたまゝ默ってゐたが、氣がじりじりして來て、ぢっとして居られなかった。

おとらが汐を見て、用事を吩咐けて、そこを出したしてくれたので、お島は[illegible]遁れることが出來た。そして八疊の納戸で[illegible]けたり、散らかったそこいらを取片附けたりして、[illegible]出したいやうに、[illegible]ゐたやうな氣がして來た。

夕方裏の畑へ出て、[illegible]のお汁の實にする菜葉をつみこんで入って來ると、今し方歸ったばかりの作が、臺所の次の室で、[illegible]に向はうとしてゐた。作は少し醉ったやうな顔で、お島の姿を見ても、聲をかけようともしなかったが、大分たってから[illegible]をしてゐるお島の側へ、汚れた茶碗や小皿を持出して來た時には、矢張いつものとほり、にやにやしてゐた。

「汚い、其方へやっとおき。」お島はそんな物に手も觸れなかった。

十八

お島が作との婚禮の盃がすむかすまぬに、二度目にそこを飛出したのは、その年の秋の末であった。

殘暑の頃から惱んでゐた病氣の[illegible]を上州の方の温泉場で養生してゐた養父が、急にその事が氣にかゝり出したといって、豫定よりもずっと早く、持っていった金も半分[illegible]して、

歸つて來てから、此春の時に用意したお島の婚禮着の紋附や帶がまた簞笥から取出されたり、足りない物が買足されたりした。

お島は此頃は、いつまた其時が來ても、毎年毎年仕馴れた仕事が、不思議に興味がなかつた。そして病床に寢てゐる養父が、時々じれ〳〵するほど、總てのことに以前のやうな注意と熱心とを缺いて來た。家にあつて藥や食物の世話をしたり、汚れものを洗濯したりするよりも、市中や田舍の方の仕切先を廻つて、うか〳〵時間を消すことが、多かつた。七つのをりからの、色々の思出を辿つてみると、養父や養母に媚びるために、物の一時間もじつとしてゐる時がないほど、[illegible]ではあつたが、きり〳〵働いて來たことが、今になつてみると、自分に取つて身にも皮にもなつてゐないやうな氣がした。或時は前途の出來るのが嬉しかつたり、或時は財産を讓渡されると云ふ、遠い先のことに賭けた矜を[illegible]してゐた。そして妹達に比べて、自分の方が、一層親愛の薄い人の手に育てられて[illegible]。[illegible]一人娘の[illegible]を[illegible]へてゐた。「お島さん〳〵」と云つて、周圍の人が、寄つて自分を崇めてゐるやうにも見えた。[illegible]用[illegible]の西田の[illegible]不[illegible]こゝに[illegible]になつてゐる、小作人に至るまで、お島には隨分助かつてゐる連中も、お島が一切を取仕切る時の來るのを待設けてゐるらしくも思はれた。

「よく〳〵しないことさ。今にみんな好くしてあげようよ。こゝの身代一つ潰さうと思へば、何でもありやしない。」

お島は借金の言譯に、へこ〳〵してゐる男を見ると、然ういつて大束を極込んだ。

病氣の間もさうであつたが、養父が湯治に行つてからは、青柳がまたちよく〳〵入込んでゐた。それでなくとも、十年來住みなれて來ながら、一生こゝで暮さうとは思へなくなつた家に、誠切親しみがなくなつて來たお島は、よく懇意の得意先へあがつていつて、半日も話込んでゐた。主人に代つて、店頭に坐つてお客にお世辭を振撒いたり、氣の合つた内儀さんの背後へまはつて髮を取りあげてやつたりした。

「私二三年東京で働いてみようかしら。」お島は何か働き甲斐のある仕事に働いてみたい望みが萌いてゐた。

「[illegible]さう。」内儀さんは笑つてゐた。

「いゝえ眞實。私この頃つく〴〵あの家が厭になつてしまつたんですよ。」

「でも貴方に逃げられちや、お家で困るでせう。」

「何うですかね。安心して私に委せておけないやうな人達ですからね。何を仕出來すかと思つて、可怕いでせう。」お島は可笑しさうに笑つた。

目こする間に、とつさと器用に取揚げられた内儀さんの頭髮は、地が處々引釣るやうで締くて爲方がなかつた。

十九

お島は或時は、それとなく自分に適當した職業を搜さうと思つて、人にも聞いてみたり、自分にも市中を彷徨いてみたりしたが、自分の知識が許しさうな仕事で、一生懸命になり得るやうな職業はどこにも見當らなかつた。然うかつて事務を取るやうなことは、碌々小學校すら卒業してゐない彼女の學力が不足であつた。

お島は時とすると、口入屋の[illegible]を[illegible]、さうかと思つて、その前を往つて來たりしたが、そこに田舍の[illegible]出らしい女が、[illegible]をした[illegible]や、みすぼらしい[illegible]の[illegible]ついた下[illegible]などが目につくと、もう厭になつて、其[illegible]間に成下つてまでゆかうと云ふ勇氣は出なかつた。

お島は日がくれても家へ歸らうともしず、上野の山などに獨りでぼんやり時間を消すやうなことが多かつた。山の下の多くの飲食店や商家には灯が青黄色い柳の色と一つに流れて、そこを動いてゐる電車や群衆の影が、夢のやうに動いてゐた。お島はそんな時、恩人の子息で、今アメリカの方へ行つてゐるといふ男のことなどを憶出してゐた。そして旅費さへ偸み出すことができれば、何時でも其男を頼つて、外國へ渡つて行けさうな氣さへするのであつた。

「こゝまで漕ぎつけて、今一息と云ふところで、あの財産を放擲つて出るなんて、そんな奴があるものか。」

お島がその希望をほのめかすと、西田の老人は頭からそれを排斥した。この老人の話によると、養家の財産は、お島などの不斷考へてゐるよりは、遙に大きいものであつた。動産不動産を合せて、十萬より凹むことはなからうと云ふのであつた。床下の弗函に收つてあると云ふ有金だけでも、少い額ではなからうと云ふのであつた。其中には幾分例の小判もあらうと云ふ推測も、強ち譃ではなからうと思はれた。

小い子供を多勢持つてゐる此のお爺さんも、舊は矢張お島の養父から、資金の融通を仰いだ仲間の一人であつた。今でも未償金のまゝになつてゐる額が、少くなかつた。老人は、何をおいても先づ、慾を知らなければ一生の損だといふことをお島にくど〳〵言聽かした。

お島はそれで其時はまた自分の家の閾を跨ぐ氣になるのであつたが、此老人や青柳などの口利で、壻が作以外の人に決めらるゝまでは、動きやすい心が、動もすると家を離れて行かうとした。

二十

婚禮沙汰が始まつてから、毎日のやうに來ては養父母と內密で談をしてゐた青柳は、その當日も手隙を見てはやつて來て、床の間に古風な島臺を飾りつけたり、何處からか持つて來た箱のなかから鶴龜の二幅對を取出して、懸けて眺めたりしてゐた。

「今度と云ふ今度は島ちやんも遁出す氣遣はあるまい。己の弟は男が好いからね。」青柳はさう言ひながら、この二三日得意先まはりもしないでゐるお島の顔を眺めた。青柳は頭顱の地がやゝ薄く透けてみえ、明みで見ると小鬢に白髮も幾筋かちか〳〵してゐたが、顔はてら〳〵して、張のある美しい目をしてゐた。弟はそれを[illegible]てゐた[illegible]、擲つた[illegible]前に、[illegible]明におちたと聞されたことも、お島は何となく[illegible]ましいやうな[illegible]でもなかつた。[illegible]はその頃[illegible]ひつゝある工場の近くに下宿してゐて、兄の家にはゐなかつた。お島はこの正月以來その姿を見たこともなかつた。一度自分に附文などをしてから、妙に疎々しくなつてゐたあの男が、婚禮の席にはどんな顔をして來るかと思ふと、それが待遠しいやうでもあり、不安のやうでもあつた。

その日は朝からお島は、氣がそは〳〵してゐるやうなた。そしてまだ夜露のじと〳〵してゐるやうな畠へ出て、根芋を掘つたきりで、何事にも外の働きはしなかつた。畑にはもう刈殘された玉蜀黍や黍に、ざわ〳〵した秋風が渡つて、囀りかはしてゆく渡鳥の群が、晴きつた空を遠く飛んで行つた。

午頃に頭髮が出來ると、自分が今婚禮の式を擧げようとしてゐることが、一層分明して來る樣であつたが、其相手が、十三四の頃から呢んで、よく揶揄はれたり何かして來た氣象の剽輕な青柳の弟に當る男だと思ふと、更まつたやうな氣分にもなれなかつた。おとらと三人でゐる時でも、青柳はよくぬき〳〵俥に成つてゆく

お島の姿形を眺めて、おとらに油斷ができないと思はせるやうな猥な詞を浴せかけた。

作太郎はといふと、彼も今日は一日一切の仕事を休ませられて、朝から床屋へいつたり、湯に入つたりして冶してゐた。そしてお島の顏さへみるとにこ／＼して、座敷へ入つて、ごた／＼積重ねられてある諸方からの祝の奉書包や目錄を物珍しさうに眺めてゐた。

頼んであつた料理屋の板前が、車に今日の料理を積ませて乘込んで來た頃には、羽織袴の世話焼が、そつち行き此方いきして、家中が急に色めき立つて來た。その中には、始終氣遣しげな顏をして、ひそ／＼話をしてゐる西田の老人もあつた。

「今夜逃出すやうぢや、お島さんも一生まごつきだぞ。何でも可いから、己に委して我慢をしておいでよ。」

簞笥に倚りかゝつて、ぼんやりしてゐるお島の姿を見つけると、老人は傍へよつて來て力をつけて言聞かせた。

二十一

お島が、これも當夜の世話をしに昔から來てゐた髪結に、黑の紋附を着せてもらつた頃には、王子の父親も古めかしい羽織袴をつけ、扇子などを帶にはさんで、もうやつて來てゐた。餘り人中へ出たことのない母親は、初めから來ないことになつて居た。

川へ棄てようかとまで思餘したお島が、こゝの家を相續することに成りさへすれば、聟が誰であらうと、そんな事には頓着のない父親は、お島の姿を見ても見ぬ振をして、茶の室で養父と、地所や家屋に關して世間話に耽つてゐた。日頃内輪同樣にしてゐる二三の人の顏もそこに見えた。不斷養父等の居間にしてゐる六疊の部屋に敷かれた座蒲團も、大概塞がつてゐた。中には濁聲で高話をしてゐる男もあつた。

外が暗くなる時分に、白粉をこて／＼塗つて繰込んで來た若い女連と無駄口を利いたりして、お島は時の來るのを待つてゐた。女連は大方は一度か二度以上口を利合つた人達であつたが、それが孰も、式のあとの披露の席に、酌や給仕をするために傭はれて來たのであつた其中には着物の着こなしなどの、きりゝとした東京ものも居た。

女達が、島臺などの取出された臺所へ出て行く時分に、漸と青柳の細君や髪結につれられて、お島は盃の席へ直された。

「まあ今日のヹールだね。」などと、青柳が心持わなゝいてゐるお島の綿帽子を眺めながら氣輕さうに言つた。そんな物を着ることをお島が拒んだので、着せる着せないで談がその日も縺れてゐたが、到頭被せられることになつてしまつた。

盃がすむと、お島は逃るやうにして、自分の部屋へ歸つて來た。それまでお島は綿帽子をぬぐことを許されなかつた。

着替をして、再び座敷の入口まで來たときには、人の顏がそこに一杯見えてゐたが、手をひかれて自分の席へ落着くまでは、今日の盃の相手が、作であつたことには少しも氣がつかなかつた。折目の正しい羽織袴をつけて、彼はそこに窮屈さうに坐つてゐた。そして物に怯えたやうな目で、お島をじろりと見た。

お島は頭腦が一時に赫として來た。女達の姿の動いてゐる明るいそこいらに、陰翳がおこつたやうな氣がした。そしてむつと沈んでゐると、體がぞく／＼して來て爲方がなかつた。

「何うだい島ちやん、かうして並んでみると滿更でもないだらう。」青柳が一二杯猪口をあけた時分に、前屈みになつて諷めるやうな調子で、私とお島の方へ囁かけた。

吸物椀にぎごちない箸をつけてゐた作は、「えへゝ。」と笑つてゐた。

お島は年取つた人達のすることや言ふことが、可恐しいやうな氣がしたが、作の物を貪り食つてゐる樣子が神經に觸れて來ると、胸がむか／＼して、體中が顫へるやうであつた。旋てふら／＼と其處を起つたお島の顏は眞蒼であつた。

二三人の人が、ばら／＼と後を追つて來たとき、お島は自分の部屋で、夢中で着物をぬいでゐた。

二十二

追ひかけて來た人達は、色々にいつてお島をなだめたが、お島は箪笥をはめ込んである押入の前に直り喰着いたなりで、身動きもしなかつた。

「これあ爲樣がない。」幾度手を引張つても出て來ぬお島の剛情に惘れて、青柳が出ていつたあとに、西田の老人と王子の父親とが、そこへお島を引据ゑて、低聲で脅したり賺したりした。

「あれほど己が言つておいたに、今こゝでそんなことを言出すやうぢや、まるで打壞しぢやないか。」お爺さんは可悔しさうに言つた。

「一ですから行きますよ。少し氣分が快くなつたら吃度行きます。」お島は涙を拭きながら、漸と笑顏を見せた。

「厭なものは厭でいゝてこと。それは其として何處までも頑張つてゐなければ損だよ。なに財産と婚禮するのだと思へば肚はたゝねえ。」お爺さんは、さう言ひながら、漸と安心して出て行つた。

しんとして白けてゐた座敷の方が、また色めき立つて來た。ちよい／＼立つてはお島を覗きに來た人達も、やつと席に落着いて、銚子を運ぶ女の姿が、一時忙しく往來してゐた。

「おい島ちやん、そんなに拗ねんでもいゝぢやないか。」作が部屋の前を通りかゝつたとき、薄暗のなかにお島の姿を見つけて、言寄つて來た。お島は帶をときかけたまゝの姿で、押入に倚かゝつて、組んだ手のうへに面を伏せてゐた。癇癪まぎれに頭顱を振りたくつたとみえて、綺麗に結つた島田髷の根が、がつくりとなつてゐた。お島は酒くさい熱い息がほつと、自分の顏へ通つて來るのを感じたが、同時に作の手が、脇明のところへ觸れて來た。

「何をするんだよ。」お島はいきなり振顧ると、平手でぴしやりとその額を打つた。

「おゝ痛え、これあ見損だな。」作は頰つぺたを抑へながら、怨めしさうにお島の顏を眺めてゐた。

髮結が來て、顏を直してくれてから、お島が再び座敷へ出て行つた頃には、席はもう亂れ放題に亂れてゐた。お島はぐで／＼に醉つてゐる青柳に引張られて、作の側へ引きすゑられたが、父親や養父の姿はもう其處には見えなかつた。作は四五人の若いものに取圍まれて、頻に酒を強ひられてゐたが、その目は見据つて、あんぐりした口やぐたりとした軀が、他愛がなかつた。

二十三

その夜の黎明に、お島が醉潰れた作太郎の寢息を候つて、そこを飛出した頃には、お終まで殘つてつい今し方まで座敷で騷いで、ぐで／＼に疲れた若い人達も、もう寢靜つてしまつてゐた。

お島は庭の井戸の水で、白粉のはげかゝつた顏を洗ひなどしてから、裏の田圃道まで出て來たが、濛靄の深い木立際の農家の土間から、釜の下を焚きつける火の影が、ちよろ／＼見えたり、田圃へ出て行く人の寒さうな影が動いてゐたりした。じつとりした往來には、荷車の軋

みが静かなあたりに響いてゐた。徹宵眠られなかつたお島は、熱病患者のやうに熱つた頬を快い朝の風に吹かれながら、野良道を急いだ。澁くさい作の顏や、ごつ／＼した手足が、まだ頬や髪に絡りついてゐるやうで、氣味がわるかつた。

王子の町近く來た時分には、もう日が高く昇つてゐた。そこにも此處にも烟が立つて、目覺めた町の物音が、ごや／＼と聞えてゐた。

「今時分はみんな起きて騷いでるだらうよ。」

お島はさう思ひながら、町外にある姉の家の裏口の方へ近寄つていつた。

山茶花などの枝葉の生茂つた井戸端で、子供を負ひながら襁褓をすゝいでゐる姉の姿が、垣根のうちに見られた。花畠の方で、手桶から柄杓で水を汲んでは植木に水をくれてゐるのは、以前生家の方にゐた姉の婿であつた。水入らずで、二人で恁うして働いてゐる姉夫婦の貧しい生活が、今朝のお島の混亂した頭腦には可羨しく思はれぬでもなかつた。姉は自分から好きこのんで、貧しいこの植木職人と一緒になつたのであつた。畠には春になつてから町へ持出さるべき梅や、松などがどつさり植ゑつけられてあつた。旭が一面にきら／＼と射してゐた。はね釣瓶が、ぎーいと軋い音を立てて動いてゐた。

「長くはゐませんよ、ほんの一日か二日でいゝから。」お島はさう言つて、姉に頼んだ。そして、いきなり洗ひものに手を出して、水を汲みそゝいだり、絞つたりした。

「そんな事をして好いのかい。どうせお詫を入れて、此方から歸つて行くことになるんだからね。」姉は手ばしこく働くお島の様子を眺めながら、子供を搖り／＼突立つてゐた。

「なに、そんな事があるもんですか。何といつたつて、私今度と云ふ今度は歸つてなんかやりませんよ。」

お島は絞つたものを、片端から日當のいゝところへ持つていつて棹にかけたりした。日光が腫れたゞれたやうな目に沁込んで、頭痛がし出して來た。

「またお島ちやんが逃げて來たんですよ。」姉は良人に聲かけた。

良人は柄杓を持つたまゝ「へゝ。」と笑つて、お島の顔を眺めてゐた。お島も眩しい目をふいて笑つてゐた。

二十四

晩方近くに、様子を探りかた／″＼、こゝから幾許もない生家を見舞つた姉は、養家の方から、お島を尋ねに出向いて來た人達が、その時丁度奥で父親とその話をしてゐるところを見て歸つて來た。それらの人を犒ふために、臺所で酒の下物の支度などをしてゐた母親と、姉は暫く水口のところで立話をしてから、お島のところへ戻つて來たのであつた。

「島ちやん、お前さん今のうちにちよつと顔をだしといた方がいゝよ。」

一日痛い頭腦をかゝへて奥で寢轉んでゐたお島の傍へ來て、姉は說勸めた。

お島は何だか胸がむしやくしやしてゐた。今夜にも旅費を拵へて、田舎の方にゐる兄のところへ遠つ走りをしようかとも考へてゐた。どこか船で渡るやうな遠い外國へ往つて、勞働者の群へでも身を投じようかなどと、棄鉢な空想に耽つたりした。夜明方まで作と鬪つた體の節々が、處々痛みをおぼえるほどであつた。

姉婿も同じやうなことを言つて、お島に意見を加へた。お島はくど／＼しい其等の忠告が、耳にも入らなかつたが、何時まで頑張つてもゐられなかつた。

「ふん、御父さんや御母さんに、私のことなんか解るものですか。彼奴等は寄つてたかつて私を

好いやうにしようと思つてゐるんだ。」お島はぷり〳〵して呟きながら出ていつた。

外はもうとつぷり暮れて、立昇つた深い水蒸氣のなかに、山の手線の電燈や、人家の灯影が水々して見えた。茶畑などの續いてゐる生家の住居の周圍の垣根のあたりは、一層靜かであつた。

お島が入つていつた時分には、もう家は弓張提灯などをともして、一同引揚げていつたあとであつた。お島は兩親の前へ出ると、急に胸苦しくなつて、昨夜から張詰めてゐた心が一時に弛ぶやうであつた。

「御心配をかけて、どうも濟みません。」お島はさう言つてお叩頭をしようとしたが、筋肉が硬張つたやうで首も下らなかつた。

「何て莫迦なまねをしてくれたんだ。」父親はお島に口も開かせず、いきなり熱り立つて來たが、養家の財產のために、何事にも目をつぶらうとして來たらしい父親の心が、やつとお島にも見えすいて來た。

二十五

お島が數度の交渉の後、到頭また養家へ歸ることになつて、青柳につれられて家を出たのは、或日の晩方であつた。

お島はそれまでに、幾度となく父親や母親に逆つて、彼等を怒らせたり悲しませたり、絶望させたりした。滅多に手荒なことをしたことのなかつた父親をして、終にお島の頭髮を攫んで、彼女をそこに捻伏せて打ちのめすやうな憤怒を激發せしめた。お島を懲しておかなければならぬやうな報告が、この數日のあひだに養家から交渉に來た二三の顏利の口から、父親の耳へも入つてゐた。それらの人の話によると、安心して世帶を讓りかねるやうな暴動が、お島には少くなかつた。金遣ひの荒いことや、氣前の好過ぎることなども其一つであつた。おとらと青柳との祕密を、養父に言告けて、內輪揉めをさせるといふのも其一つであつたが、總てを引括めて、養家に辛抱しようと云ふ堅い決心がないと云ふのが、養父等のお島に對する不滿であるらしかつた。

「だから言はんこつちやない。稚い時分から私が黑い目でちやんと睨んでおいたんだ。此方から出なくたつて、先ぢや疾の昔に愛想をつかしてゐるのだよ。」母親はまた意地つ張なお島の幼い時分のことを言出して、まだ娘に愛着を持たうとしてゐる未練げな父親を呪つた。

「こんなやくざものに、何萬十萬と云ふ身上を渡すやうな莫迦が、どこの世界にあるものか。」

太てゝゐて、何處にも出て來ようとしないお島を、妹や弟の前で口汚く罵るのが、此の場合母親に取つて、自分に屈して長いあひだお島を庇護だてして來た父親に對する何よりの復讐であるらしく見えた。

お島も負けてゐなかつた。母親が、角張つて度強い顏に、青い筋を立てゝ、わな〳〵顫へるまでに、毒々しい言葉を浴せかけて、幼いをりの自分に對する無慈悲を數へたてた。目からはほろ〳〵涙が流れて、抑へきれない悲しみが、遣瀨なく涌きたつて來た。

「手前」とか、「くたばつてしまへ」とか、「親不孝」とか、「鬼婆」とか、「子殺し」とか云ふやうな有りたけの暴言が、激しきつた二人の無思慮な口から、連に迸り出た。

そんな爭ひの後に、お島は言葉巧な青柳につれられて、また悄々と家を出て行つたのであつた。

二十六

その晚は月は何處の森の端にも見えなかつた。深く澄みわたつた大氣の底に、銀梨地のや

うた星影がちら／＼して、水藻のやうな蒼い濛霧が、一面に地上から這ひのぼつてゐた。思ひがけない足下に、濃い霧を立てゝ流れる水の音が、ちよろ／＼と聞えたりした。お島はこの二三日、氣が狂つたやうな心持で、有らん限りの力を振絞つて母親と闘つて來た自分が、不思議なやうに考へられた。時々顔を上げて、彼女は太息を洩した。道が人氣の絶えた薄暗い木立際へ入つたり、線路ぞひの高い土堤の上へ出たりした。底にはレールがきら／＼と光つて、蟲が芝生に途斷れ／＼に啼立つてゐた。青柳がゐなければ、お島はそこに疲れた體を投出して、獨りで何時までも心の限り泣いてゐたいとも考へた。

けれどお島は、長くは青柳と一緒に歩いてもゐなかつた。松の下に、墓石や石地藏などのちらほら立つた丘のあたりへ來たとき、先刻からお島が微かな疑惑に怯えてゐた青柳の氣紛れな思付が、到頭彼女の目の前に、實となつて現はれた。

「およッ……厭ですよ。」

道傍に立竦んだお島は、悪戯な男の手を振拂つて、笑ひながら、さつさと歩きだした。

甘い言葉をかけながら、青柳はしばらく一緒に歩いた。

「御母さんに叱られますよ。」お島は輕くあしらひながら歩いた。

「現にその御母さんが何うだと思ふ。だから、あの家のことは、一切己の掌のうちにあるんだ。こゝで島ちやんの籍を拔いて了はうと、無事に収めようと、すべて己の自由になるんだよ。」

威嚇の辭と誘惑の手から脱れて、絶望と憤怒に男をいら立たせながら、舊の道へ駈出すまでに、お島は可也悶踠き爭つた。

直にお島は、息せき家へ駈けつけて來た。そしていきなり父親の寢室へ入つて行つた。

「それが眞實とすれあ、己にだつて言分があるぞ。」いつか眠についてゐた父親は、床のうへに起きあがつて、煙草を喫しながら考へてゐた。

「彼奴はあんな奴ですよ。畜生、人を見損つてゐやがるんだ。」お島は亂れた髪を掻きあげながら、腹立しさうに言つた。そして興んだ調子で、現場の模様を誇張して話した。父の信用を恢復せさうなのと、母親に鼻を明かさせるのが、氣色が好かつた。

二十七

お島が不斷から目をかけてやつてゐる源さんと云ふ年老つた車夫が、誰の指圖とも知れず、俥を持つて迎ひに來たのは、お島たちが漸と床に就かうとしてゐる頃であつた。

「何だ今時分……。」玄關わきの部屋に寢てゐたお島は、その聲を聞きつけると、寢衣に着替へたまゝ、門の潜を開けに出たが、盆暮にお島が子供に着物や下駄を買つてくれたり、餅をついてやつたりしてゐた源さんは、どうでも今夜中に歸つてくれないと、家の首尾がわるいと言つて、門の外に立つたまゝ動かなかつた。

「きつと青柳と御母さんと相談づくで、寄越したんだよ。」お島は一應その事を父親に告げながら笑つた。

父親は、お島から養家の色々の事情を聞いて、七分通り諦めてゐるやうであつたが、矢張このまゝ引張つて了ふ氣にはなつてゐなかつた。作太郎と表向夫婦にさへなつてくれれば、少しくらゐの氣儘や道樂はしても、大目に見てゐようと云つたと云ふ養母の意味なども、父親には初耳であつた。

「聟を貰はうと情人を拵へようとお前の隨ですることなら、些とも介意やしないなんて、そこは自分にも覺えがあるもんだから、お察しがいゝと見えて、よく然う言ひましたよ。どうし

て、あの御母さんは、若い時分はもつと惡いことをしたでせうよ。」お島は頑固な父親をおひやらかすやうに、さうも言つた。

そんな連中のなかにお島をおくことの危險なことが、今夜の事實と照合せて、一層明白して來るやうに思へた父親は、愈お島を引取ることに、決心したのであつたが、迎ひが來たことが知れると、矢張心が動かずにはゐなかつた。

「作さんを嫌つて、お島さんが逃げたつて云ふんで、近所ぢや大評判さ。」とにかく今夜は歸ることにして、銀さんは、漸うお島を俥に載せると、梶棒につかまりながら話しはじめた。

「だが今あすこを出ちや損だよ。あの身代を人に取られちや詰らないよ。」

「作の馬鹿はどんな顔してゐる。」お島は俥のうへから笑つた。

家へ入つても、いつものやうに父親の前へ出て謝罪つたり、お叩頭をしたりする氣になれなかつたお島は、自分の部屋へ入ると、急いで寝支度に取りかゝつた。

「歸つたら歸つたと、なぜ己んとこへ來て挨拶をしねえんだ。」養母にさへられながら、癇癪聲を立ててゐる養父の聲が、お島の方へ手に取るやうに聞えた。

「お前がまたわるいよ。」おとらは、寝衣のまゝ呼びつけられて枕頭に坐つてゐるお島を窘めた。

「それに自分の着物を疊みもせずに、脱ぎつはなしで寝てしまふなんて、それだから御父さんも、此の身上は讓られないと言ふんぢやないか。」

剛情なお島は、到頭麺棒で擲られたり足蹴にされたりするまでに、養父の怒を募らせてしまつた。

二十八

植源といふ父の仲間うちの隱居の世話で、父や母にやいやい言はれて、翌年の春、神田の方の或鑵詰屋へ縁着かせられることになつたお島は、長いあひだの掛合で、やつと幾分かを養家から受取ることのできた着物や頭髪のものを持つて、心淋しい婚禮をすまして了つた。

植源の隱居の生れ故郷から出て來て、長いあひだ店でも實直に働き、得意先まはりにも經驗を積み、北海道の製造場にも二年弱もゐて、職人と一緒に起臥して來たりした主人は、お島より十近くも年上であつたが、家附の娘であつた病身がちのその妻と死別れたのは、つい去年の秋の頃だと云ふのであつた。

鶴さんといふ其の主人と、お島の話もよく纏つて來た、神田の方のある棟梁の家から來てゐる植源の嫁も、その主人のことを始終鶴さん鶴さんといつて、噂してゐた。植源の嫁は、生家の近所にあつたその鑵詰屋のことを、何でもよく知つてゐたが、色白で目鼻立のやさしい鶴さんをも、まだ婿に直らぬずつと前から知つてゐた。その頃鶴さんは、鳥打帽をかぶつて、自轉車で方々の洋食店のコック場や、普通の家の臺所へ、自家製の鑵詰ものや、西洋食料品の註文を持ちまはつてゐた。

先の上さんが、肺病で亡つたことを、お島はいよいよ片附くといふ間際まで、誰からも聞されずにゐたが、媒人の口からふとそれが洩れたときには、何だか厭なやうな氣もした。

「先の上さんのやうな、しなしなした女は懲々だ。何でも丈夫で働く女がいゝと言ふのださうだから、島ちやんなら持つて來いだよ。」姉は肥りきつたお島の顔を眺めながら揶揄つたが、男のいゝ鶴さんを旦那に持つことになつたお島の果報に嫉妬を持つてゐることが、お島に感づかれた。死んだ上さんの衣裳が、そつくり其まま二階の箪笥に二棹もあると云ふことも、姉に

は可羨しかつた。

結納の取換せがすんで、目錄が座敷の床の間に恭しく飾られるまでは、お島は天性の反抗心から、傍で頭ひつけようとしてゐるやうなこの縁談について、結婚を目の前に控へてゐる多くの女のやうに、素直な滿足と喜悦に和ぎ浸ることができずに、暗い日蔭へ入つていくやうな不安を感じてゐた。養家にゐた今までの周圍の人達に對する矜を傷けられるやうなのも、肩身が狹かつた。作太郎に嫁が來たと云ふ噂が、年のうちに此方へも傳つてゐた。お島はそのことを、植秋問屋の爺さんからも聞いたし、其土地の知合の人からも話された。その嫁はお島も知つてゐる、男に似合ひの近在の百姓家の娘であつた。

「あの馬鹿が、どんな顏してるか一度見にいつてやりませうよ。」お島は面白さうに笑つたが、何彼につけ、それを引合ひに自分をわるく言ふ母親などから、そんな女と一つに見られるのが腹立しかつた。

二十九

結婚の翌日、新郎の鶴さんは朝早くから起出して、店で小僧と一緒に働いてゐた。昨夜媒妁と親しい少數の人たちを呼んで、二人が手輕な祝言をすました手狹な二階の部屋には、まだ新郎の禮服がしまはれずにあつたり、新婦の紋附や長襦袢が、屏風の蔭に疊みかけたまゝ重ねられてあつたりした。蓬萊を飾つた床の間には、色々の祝物が秩序もなくおかれてあつた。

皆がみなお開きになつてからも、それだけは新調したらしい黒羽二重の紋附を脱ぐ間がなく、新郎の鶴さんは二度も店へ出て、戸締や何かを見まはつたりしてゐたが、いつの間にか誰かが延べたともしれぬ寢床の側に坐つてゐるお島の側へ戻つて來ると、いきなり自分の商賣上のことや、財産の話を爲て聞かせたりした。そして病院へ入れたり、海邊へやつたりして手を盡して來た、前の女房の病氣の療治に骨の折れたことや、金のかゝつた事をも話した。先代の時から續いてやつてゐる、確な人に委せて、監督させてある北海道の方へも、東京での販路擴張の手際には、年に一度くらゐは行つてみなければならぬことも話して聞かせた。さういふ時には、お島は店を預かつて、しつかり遣つてくれなければならぬと云ふので、多少そんなことに經驗と伎倆のあるやうに聞いてゐるお島に、望みを措いてゐるらしかつた

部屋などの取片付をしてゐるうちに、翌日一日は直に經つてしまつた。お島は時々細い格子のはまつた二階の窓から、往來を眺めたり、向の化粧品屋や下駄屋や莫大小屋の店を見たりしてゐたが、籠のやうな窮屈な二階に竦んでばかりもゐられなかつた。それで階下へおりてみると、下は立込んだ廂の庇交したあひだから、やつと微かな日影が茶の室の方へ洩れてゐるばかりで、そこにも荷物が澤山入れてあつた。店には厚司を着た若いものなどが、帳場の前の方に腰かけてゐた。鶴さんがそこに坐つて帳簿を見たり、新聞を讀んだりしてゐた。お島はそこへ姿を現はして、暫く坐つてみたがやつぱり落着がなかつた。

二日三日と日がたつて行つた。お島は頭髮を丸髷に結つて、少しは帳場格子のなかに坐ることにも慣れて來たが、鶴さんはどうかすると自轉車で乘出して、半日の余も外廻りをしてゐることがあつた。そして夜は疲れて早くから二階の寢床へ入つたが、お島は段々日の暮れるのを待つやうになつて來た、自分の心が不思議に思へた。鶴や植源の爺が騒いでゐるやうに、鶴さんがそんなに好い男なのかと、時々帳場格子のなかに坐つてゐる良人の顏を眺めながら、獨り

居るときに、そんな思を胸に育み温めてゐたりして、自分の心が次第に良人の方へ牽きつけられてゆくのを、感じないではゐられなかつた。

三十

麗かな春らしい天氣の續いた或日、鶴さんは一日潰してお島と一緒に、嫉妬の権源などへ禮まはりをした。それからお島の生家の方へも往つてみようかと言出した。同じ罐詰屋を出してゐる、前の上さんの義理の弟――先代の妾とも姉とも知れないやうな或女に出來た子供――のゐる四谷の方へもお島は顔出しをしなければならないやうに言はれてゐたが、それはもう商賣上の用事で、二度も尋ねに來たりして、大概その様子がわかつてゐたが、鶴さんはそのお袋が氣に喰はぬといつて、後廻しにすることにした。

お島はこの頃漸く落着いて來た丸髷に、赤いのは、道具の大きい較强味のある顔に移りが惡いといふので、オレンヂがかつた色の手絡をかけて、こつてりと濃い白粉にいくらか荒性の皮膚を塗りつぶして、首だけ出來あがつたところで、何を着て行かうかと思惑つてゐた。

鶴さんは傍で、髷の型の大きすぎたり、化粧の野暮くさいのに、當惑さうな顔をしてゐたが、着物の柄も、鶴さんの氣に入るやうな落着いたのは見當らなかつた。

「かねのを少し出してごらん。お前に似合ふのがあるかも知れない。」

鶴さんはさう言つて、押入の用箪笥のなかから、ぢやら〳〵鍵を取出して、そこへ投出した。

「でも初めていくのに、そんな物を着てなぞ行かれるものですか。」

「それも然うだな。」と、鶴さんは淋しさうな顔をして笑つてゐた。

「それにおかねさんの思に取着かれでもしちや大變だ。」お島はさう言つては、自分の箪笥のなかを引くら返してゐた。

「でも如何な意氣なものがあるんだか拜見しませうか。」

「何のかのと言つちや、四谷のお袋が大分持つていつたからね。」鶴さんは心からそのお袋を好かぬらしく言つた。

「あの慾張婆め、これも廢れた柄だ、あれも老人じみてるといつちや、かねの生きてるうちから、ぼつ〳〵運んでゐたものさ。」鶴さんはさも惜しいことをしたやうに、舌打ばかりしてゐた。

お島は[illegible]をはこして、掛[illegible]を二三[illegible]見いて、[illegible]そつちこつち持ちあげて覗いてゐたが、お島の目には、またそれがおかしすぎて、着てみたいと思ふやうなものは少かつた。

「そんなに思をかけてる人であるなら、みんなくれてお仕舞ひなさいよ。その方がせい〳〵して、如何に好いか知れやしない。」お島は蓮葉に言つて笑つた。

「戯談ぢやない。くれるくらゐなら古着屋へ賣つちまふ。」

左に右二人は初めて揃つて、外へ出てみた。鶴さんは先へ立つて、近所隣をさつさと小半町も歩いてから振顧つたが、お島はクリーム色のパラソルに面を隱して、長襦袢の裾をひら〳〵させながら、足早に追ついて來た。外は漸くぼか〳〵する風に、輕く砂がたつて、いつの間にか芽ぐんで來た柳條が、たをやかに靱つてゐた。お島は何となく胸を唆られるやうで、今までとは全然ちがつた明るい世間へ出て來たやうな歡喜を感じてゐたが、良人の心持がまだ底の底から汲取れぬやうな不安と哀愁とが、時々心を曇らせた。今まで人に惡んだり、助力を與へたりしたことは、養父母の非難を買つたほど

であつたが、矜と滿足はあつても、心から愛しようと思はうとしたやうな人は、一人もなかつた。眞實に愛せられることも曾てなかつた。愛しようと思ふ鶴さんの心の奧には、まだおかねの亡靈が潛み蟠まつてゐるやうであつた。鶴さんは、それは其として大事に祕めておいて、自分の生活の單なる手助として、自分を迎へたのでしかないやうに思へた。驕んで電車に乘つてからも、お島はそんなことを思つてゐた。

三十一

奉公人などに酷だといふので、植源いからうか茨背負おか、といふ語と共に、界隈では古くから名前の響いたその植源は、お島の生家などとは違つて、可也派手な暮しをしてゐたが、今は有名な喧し家の女隱居も年老つて、家風はいくらか弛んでゐた。お島は一二度こゝへ來たことはあつたが、奧へ入つてみるのは、今日が初めてであつた。

大政の娘である嫁のおゆふが、鶴さんの口にはゆふちやんと呼ばれて、小僧時代からの昵みであることが、お島には何となし不快な感を與へたが、それもしみ〴〵顏を見るのは、初めてであつた。

おゆふは、浮氣ものだといふことを、お島は姉から聞いてゐたが、逢つてみると、藝事の稽古などをした故か、淑かな落着いた女で、生際の富士形になつた額が狹く、切の長い目が細くて、口もやゝ大きい方であつたが、薄皮出の細やかな膚の、くつきりした色白で、小作な體の樣子がいかにも好いと思つた。いつも通るところとみえて、鶴さんは仕立物などを散らかした其部屋へいきなり入つていかうとしたが、おゆふは今日は更まつたお客さまだから失禮だといつて、座敷の床の前の方へ、お島のと並べてわざとらしく座蒲團をしいてくれた。

「さう急に他人行儀にしなくても可いぢやありませんか。」鶴さんは座蒲團を少しずらかして坐つた。

「いゝぢやありませんか。もう極のわりいお年でもないでせう。」おゆふは顏を赧めながら言つて、二人を見比べた。

「貴女ちつとは落着きなさいましてすか。」おゆふはお島の方へも言をかけた。

「何ですか、私はかういふがさつものですから、叱られてばかりをりますの。」お島は體よく遇つてゐた。

「でもあの邊は可うございますのね、周圍がお賑かで。」おゆふはじろ〳〵お島の髷の形などを見ながら自分の髮へも手をやつてゐた。

性急の鶴さんは、蒲團の上にぢつとしてはをらず、緣側へ出てみたり、隱居の方へいつたりしてゐたが、おゆふも落着なくそは〳〵して、時々鶴さんの傍へいつて、燥いだ笑聲をたててゐたりした。廣い庭の方には、薔薇の大きな鉢が、溫室の手前の方に幾十となく並んでゐた。植木棚のうへには、紅や紫の花をつけてゐる西洋草花が取出されてあつた。四阿屋の方には、遊覽の人の姿などが、働いてゐる若い者に交つてちらほら見えてゐた。

「如何しよう、これからお前の家へまはつてゐると遲くなるが……。」鶴さんは時計を見ながらお島に言つた。「何なら一人でいつちや何うだ。」

「不可ませんよ、そんなことは……。」おゆふはいれ替へて來たお茶を注ぎながら言つた。

それで鶴さんはまた一緒にそこを出ることになつたが、お島は何だか間合がぬけてゐた。

三十二

日がそろ〳〵かけり氣味であつたので、此のうへ二三十町もある道を歩くことが、二人には

何となし氣懈い仕事のやうに思へた。鶴さんは植源へ来るのが今日の目的で、お島の生家へ行つてみようと云ふ興味は、もう悉皆殺げてしまつたもののやうに、途中で幾度となく引返しさうな樣子を見せたが、お島も自分が全く嫌はれてゐないまでも、鶴さんの氣持が自分と二人限の時よりも、おゆふの前に居る時の方が、寧ろ調子がはずむやうなので、古馴染のなかを見せつけにでも連れて来られたやうに思はれて、腹立しかつた。二人は初めほど睦み合つては歩けなくなつた。

「でも此處まで来て寄らないといつちや、義理が悪いからね。」

今度はお島が立寄るまいと言出したのを、鶴さんは何處か商人風の堅いところを見せて、悉皆氣が變つたやうに言つた。

「それ程にして戴かなくつても可いんですよ。あの人達は、親だか子だか、私なぞ何とも思つてゐませんよ。生家は生家でも、縁も由縁もない家ですからね。」お島はさう言ひながら、従いて行つた。

生家では母親がゐる限であつた。母親はお島の前では、初めて来た婿にも、愛想らしい辭をかけることもできぬ程、お互に神経が硬張つたやうであつたが、鶴さんと二人限になると、そんなでもなかつた。お島は母親の口から、自分の悪口を言はれるやうな氣がして、ちよい／＼樣子を見に来たが、鶴さんは植源にゐた時とは全然樣子がかはつて、自分が先代に取立てられるまでになつて来た氣苦勞や、病身な妻を控へて商賣に勵んで来た長いあひだの身の上話などを、例の急々した調子で話してゐた。

「此んとこで、一つ氣をそろへて、みつちり稼がんことにや、先代へ[illegible]がつきません。」

鶴さんは傍へ寄つて来るお島に氣もつかぬらしい樣子であつたが、お島には、それが悉皆母親の氣に入つて了つたらしく見えた。

「どうか店の方へも、時々お遊びにおいで下すつて……。」

鶴さんは語のはずみで、さう言つてゐたが、お島は、何を言つてゐるかと云ふやうな氣がして、終に莫迦々々しかつた。それでけろりとした顔をして、外を見てゐながら、時々歸りを促した。

「から云ふ落着のない子ですから、お骨も折れませうが、嚴しく仰しやつて、どうか驅使つてやつて下さい。」母親はじろりとお島を見ながら言つた。

鶴さんは感激したやうな調子で、[illegible]ゐたが、そこを[illegible]ると、煙管を筒に收めて[illegible]た。

「何を言つてゐたんです。」お島は外へ出ると、いら／＼しさうに言つた。「あの[illegible]に、人間は[illegible]商賣のことなんか[illegible]のやうに驅使はれさへすれば可いものだと思つてゐる人間だもの。」

三十三

夏の暑い盛りになつてから、鶴さんは或日急に思立つたやうに北海道の方へ旅立つことになつた。氣の早い鶴さんは、晩にそれを言出すと、もう翌朝夜のあけるのも待ちかねる風で、着替を入れた袋と、手提鞄と膝懸と細捲とを持つて、停車場まで見送の小僧を一人つれて、ふらりと出ていつて了つた。二三ケ月のあひだに、商賣上のことは大概頭へ入つて来たお島は、悉皆後を引受けて良人を送出したが、意氣な白地の單衣物に、絞の兵兒帯をだらりと締めて、深いパナマを冠つた彼の後姿を見送つたときには、曾て覺えたことのない物寂しさを感じた。

それにお島は今月へ入つてからも、毎時の月

時分になつても、まだ先月から自分一人の胸に疑問になつてゐる月のものが見なかつた。而して漸とそれを言出すことのできたのは、鶴さんが氣忙しさうに旅行の支度を調へてからの昨夜であつた。

「私何だか體の樣子が可笑しいんですよ。きつと然うだらうと思ふの。」一度床へついたお島は、厠へいつて歸つて來ると、漸と、うと〱と眠りかけようとしてゐる良人の枕頭に坐りながら言つた。蒸暑い夏の夜は、まだ十時を打つたばかりの宵の口で、表はまだぞろ〱往來の人の跫音がしてゐた。朝の早い鶴さんは、いつも夜が早かつた。

「そいつあ些と早いな。怪しいもんだぜ。」などと、鶴さんは節の嵬々した白い手をのばして、煙草盆を引寄せながら、お島の顏を見あげた。鶴さんは其頃、お島の籍を入れるために、彼女の戸籍を見る機會を得たのであつたが、戸籍のうへでは、お島は一度作太郎と結婚してゐる體であつた。それを知つたときには鶴さんは欺かれたものゝやうに思込んで、お島を突返さうと決心した。しかし鶴さんはその當座誰にもそれを言出す勇氣を缺いてゐた。そしてお島だけには、ちよい〱當擦や厭味を言つたりして漸と鬱憤をもらして居たが、どうかすると、得意まはりをして歸る彼の顏に、酒氣が殘つてゐたりした。お島が帳場へ坐つてゐる時々に、優しい女の聲で、鶴さんへ電話がかゝつて來たりしたのも、其頃であつた。そんな時は、お島は店の若いもののやうな假聲をつかつて、先の處と名を突留めようと骨を折つたが、その效がなかつた。お島はその頃から、鶴さんが外へ出て何をして歩いてゐるか、解らないと云ふ不安と猜疑に惱まされはじめた。植源の嫁のおゆふ、それから自分の姉……そんな人達の身のうへにまで思ひ及ばないではゐられなかつた。日頃口に鶴さんを讃めてゐる女が、片端から戀の仇か何ぞであるかのやうに思へ出して來た。姉は、お島が片づいてからも、ちよい〱訊ねて來ては、半日も遊んでゐることがあつた。

「それなら、何故私をもらつてくれなかつたんです。」姉は鶴さんに揶揄はれながら自分の樣子をほめられたときに、半分は眞顏らしく、半分は戲談らしく、妹のそこにあることを意にかけぬらしく、ぽつと上氣したやうな顏をして言つたくらゐであつた。

お島はそれが癪にさはつたといつて、後で鶴さんと大喧嘩をしたほどであつた。

三十四

鶴さんは、その當座外で酒など飮んで來た晩などには、時々お島が自分のところへ來るまでの、長い歲月の間のことを、根掘葉掘して聽くことに興味を感じた。結婚届まですましてあつたお島と作太郎との關係についての鶴さんの疑ひは、お島が說明して聽す作太郎の樣子などで、其時はそれで釋けるのであつたが、其疑ひは復謀叛のやうに、時が經つとまた舊に復つた。

「譃だと思ふなら、まあ一度私の養家へ往つてごらんなさい。へえ、あんな奴がと思ふくらゐですよ。然うね、何といつて可いでせう……。」

お島は身顫が出るやうな樣子をして、其男のことを話した。

「嫌ふ嫌はないは別問題さ。左に右結婚したといふのは事實だらう。」

「だから、それが養家の勝手で然うしたんですよ。そんな屆がしてあらうとは、私は夢にも知らなかつたんです。」

「しかもお前達夫婦の籍は、お前の養家ぢやなくて、亭主の家の方にあるんだから可怪しいよ。」

最初は心にもかけなかつた其籍のことを、二

度も三度も鶴さんの口から聴されてから、お島は養家の人達の、作太郎を自分に押しつけようとしてゐた眞意が、漸と朧げに見えすいて來たやうに思へた。

「さうして見ると、あの人達は、そつくり私に跡を讓る氣はなかつたもんでせうかね。」お島は長いあひだ自分一人で極込んでゐた、養家や其周圍に於ける自分の信用が、今になつて根柢からぐらついて來たやうな失望を感じた。

お島は、最近の養家の人達の、自分に對する其時々の素振や言に、それと思ひ當ることばかり、憶出して來た。

「畜生、今度往つたら、一悶着してやらなくちや承知しない。」お島はそれを考へると、不人情な養父達の機嫌を取り／＼して來た、自分の愚しさが腹立しかつたが、それよりも鶴さんの目にみえて狎々しくなつた樣子に、嫌氣のさして來てゐることが口惜しかつた。

一年の餘も床についてゐた前の上さんの生きてゐるうちから、ちよい／＼逢つてゐた下谷の方の女と、鶴さんが時々媾曳してゐることが、店のものの口吻から、お島にも漸く感づけて來た。お島はそれらの店の者に、時々思ひきつた小遣をくれたり、食物を奢つたりした。彼等は何うかすると、鼻ッ張の强い女主人から頭ごなしに叱りつけられて、おろ／＼するやうな事があつても、思ひがけない氣前を見せられることも、希しくなかつた。

鶴さんの出ていつた後から、自身で得意先を一順巡つて見て來たりするお島は、時には鶴さんと二人で、夜おそく土産などを提げて、好い機嫌で歸つて來た。

三十五

荒い夏の風にやけて、鶴さんが北海道の旅から歸つて來たのは、それから二月半も經つてからであつた。暑い盛りの八月も過ぎて、東京の空には、朝晩にもう秋めかした風が吹きはじめてゐた。

鶴さんの話によると、歸りの遲くなつたのは、東北の方にある其生れ故郷へ立寄つて、年老つた父親に逢つたり、旅でそこねた健康を囘復するために、近くの温泉場へ湯治に行つてゐたりした爲だといふのであつたが、それから程なく、鶴さんの留守の間に北海道から入つて來た數通の手紙の一つが、旅で馴染になつた女からであることが、その手紙の表記でお島にも容易く感づけた。

歸つてからも、そつちこつちを飛歩いてゐて、碌々旅の話一つしんみり聞かうともしなかつた鶴さんが、ある日帳簿を調べたところによると、お島はお島だけで、留守中に可也遠路を踏めてゐることが解つて來たが、それは何れ金拂ひのわるいやうな家ばかりであつた。其までに鶴さんが手をつけた質の悪い家も二三軒は交つたが、中にはまたお島が古くから知つてゐる堅い屋敷などもあつた。お島は少しでも手繋のあるやうな其等の家から、食料品の註文を取ることが、留守中の毎日々々の仕事であつたが、品物ばかり出て勘定の滯つてゐるのが、其方にも此方にも發見せられた。

惡阻などのために、夏中寢もするとお島は店へも顏を出さず、二階に床を敷いて、一日寢て暮すやうな日が多かつたが、氣分の好い時でも、その日／＼の賣揚の勘定をしたり、店のものと一緒に、掛取に頭腦を使つたりするのが煩はしくなると、着飾つて生家や植源へ遊びに出かけるか、馴染みの多い昔の養家の周圍や其得意先へ上つて話しこむかして、時間を銷さなければならなかつた。養家では、作太郎が近所の長屋を一軒もらつて、嫁と一緒に相變らず眞黒になつて働いてゐたが、お島は其の方へも寄りかけ

た。
「今度田舎の土産でもさげて、お島さんの婿さんの顔を見にいくだかな。」作は帰りがけのお島に言ってにや〳〵笑ってゐた。
「まあ然うやって、後生大事に働いてゐるが可いや。私も些と騙されるとこだったよ。養母さんたちも人がわるいからね。」お島も素白でそこを出た。

三十六

暫くぶりで、一日遊びに来た姉が、その日も朝から店をあけてゐる鶴さんや、知りたくもない植源の嫁の噂などをして、一人で饒舌りちらして帰って行った。
お島は気骨の折れる子持の客の帰ったあとで、気憊れのした躰を帳場格子にもたれて、ぼんやりしてゐた。お島の躰は、単衣ものの此頃では、夕方の涼みに表へ出るのも極りのわるいほど、身体が重ってゐた。
旅から帰って来た鶴さんは、落着いて店で帳合をするやうな日とては、殆ど一日もなかった。偶に家にゐても、朝から二階へあがって、枕を持出して、横になってゐるやうな事が多かった。夜は遅い、時には、是まで目にしたこともなかった、猥らな端唄の文句などを紙幣で習って、一人で燥いでゐた。
「おゝ厭だ、誰にそんなものを教はって来ました。」
お島はぼつ〳〵支度にかゝってゐた赤児の着物の片などを弄りながら、傍で擽ったいやうな笑方をした。
「面白くもない。北海道の女のお自慢なんぞ。」
「何うしてそんなんぢやない」と云ひさうな顔をして、鶴さんは物珍しげに、形のできた小さい襦袢などを眺めてゐた。
「ちよいと、貴方はどんな子が産れると思ひます。」お島は始終気にかゝってゐる事を、鶴さんにも訊いてみた。
「どうせ私には肖てゐまい。さう思ってゐれあ確だ。」鶴さんは鼻で笑ひながら、後向になった。
「どうせ然うでせうよ、これは私のお土産ですもの。」お島は不快な気持に顔を赧めた。
「でも戯談にも然ういはれると、厭なものね。子供が可哀さうのやうで。」
「此方の身も可哀さうだ。」
「それは色女に逢へないからでせう。」
二人の間に緊が段々迫って来た。そしてお島に泣いて突かゝられると、鶴さんはいきなり起きて、家では滅多にあけたことのない折鞄をかかへて、外へ飛出してしまった。その折鞄のなかには、女の写真や手紙が一杯入ってゐるのであった。
今もお島は、何の気なしに閑潰してゐた姉の話が、一々深い意味をもって、気遣しく思浮べられて来た。姉の話では、鶴さんの始終抱へて歩いてゐる鞄のなかの文が、時々植源の嫁の前などで、繰拡げられると云ふのであった。
「それは可笑しいの。」姉は一つはお島を煽るために、一つは鶴さんと仲のいゝ植源の嫁への嫉妬のために、調子に乗って話した。
「その女といふのが、芸者の本場の越後から流れて来たとやらで、島ちやんの旦那は鑵詰工場へ顔出しもしないで、そこへばかり入浸ってゐたんだって。それで、其手紙にこんな事まで書いてあるんだってさ、これも東京の人で、彼方へ往く度に札びら切って、大尽風をふかしてゐるお爺さんが、鉱山が売れたら、その女を落籍して東京へつれていくといってるから、其を踏台にして、東京へ出ませうかって。ねえ、お安くないぢやないの。」
姉は植源の嫁から聞いたと云ふ其女の噂を、こま〳〵と話して聞かした。

「それに鶴さんは、着物や半襟や、香水なんか、ちよい〳〵北海道へ送るんださうだよ。島ちやん確りしないと駄目よ。」姉はさうも言つた。

「何に。」と思つて、お島は聞いてゐたのであつたが、女にどんな手があるか解らないやうな、恐怖と疑惧とを感じて來た。

三十七

植源の嫁のおゆふの部屋で、鶴さんと大喧嘩をした時のお島は、これまで遂ぞ見たこともないやうなお盛裝をしてゐた。

お島が鶴さんに無斷で、其の取りつけの呉服屋から、成金の令孃か新造の着る樣な金目のものを取寄せて、思ひきつたけば〳〵しい身裝をして、劈頭に姉を訪ねたとき、彼女は一調子かはつたお島が、何を仕出來すかと恐れの目を睜つた。看ればハイカラに仕立てたお島の頭髮は、ぴか〳〵する安寶石で輝き、指にも見なれぬ指環が光つて、體に咽ぶやうな香水の匂がしてゐた。

旅から歸つてからの鶴さんに、始終こつてり作の顔容を見せることを怠らずにゐたお島の鏡臺には、何の考慮もなしに自棄に費さるゝ化粧品、瓶が、不斷に取出されてあつた。夜臥床に就くときも、色々のもので塗りあげられた彼女の顔が、電氣の灯影に凄いやうな厭な美しさを見せてゐた。

「大した身裝ぢやないか。商人の内儀さんが、そんな事をしても可いの。」惜氣もなくぬいてくれる、お島が持古しの指環や、櫛や手絡のやうなものを、この頃に二度も三度ももらつてゐた姉は、媚びるやうに、お島の顔を眺めてゐた。

「どうせ長持ちのしない身上だもの。今のうち好きなことをしておいた方が、此方の得さ。あの人だつて、私に隱して勝手な眞似をしてゐるんぢやないか。」

お島はその日も、外へ出ていつた鶴さんの行先を、てつきり植源のおゆふの許と目星をつけて、やつて來たのであつた。そして氣味を惡がつて姉の止めるのも肯かずに、出ていつた。

おど〳〵して入つていつた植源の家の、丁度お八つ時分の茶の室では、隱居や子息と一緒に、鶴さんもお茶を飲みながら話込んでゐたが、お島が手土産の菓子の折を、裏の方に濯ぎものをしてゐるおゆふに見せて、そこで暫く立話をしてゐる間に、鶴さんも例の折鞄を持つて、そこを立たうとしておゆふに聲をかけに來た。

「まあ可いぢやありませんか。お島さんの顔をみて直立たなくたつて。御一緒にお歸んなさいよ。」おゆふは愛想よく取做した。

「自分に弱味があるからでせう。」お島は涙ぐんだ面を下向けた。

夫婦はそこで、二言三言言爭つた。

「私も、島のゐる前で、一つ皆さんに訊いてもらひたいです。」鶴さんは蒼くなつて言つた。

そしておゆふがお島をつれて、自分の部屋へ入つたとき、鶴さんもぶつ〳〵言ひながら、側へやつて來た。

「孰も孰だけれど、鶴さんだつて隨分可哀さうよお島さん。」終におゆふはお島に言ひかけたとき、お島は口惜しさうにぽろ〳〵涙を流してゐた。

夫婦はそこで、摑つたり、武者振りついたりした。

大分たつてから、呼びにやつた姉につれられて、お島はそこから姉の家へ還されていつた。

三十八

姉の家へ引取られてからも、お島の口にはまだ鶴さんの惡口が絶えなかつた。おゆふに庇護はれてゐる男の心が、歯痒かつたり、妬ましく思はれたりした。男を我有にしてゐるやうな

おゆふの手から、男を取返さなければ、氣がすまぬやうな不安を感じた。

お島は仕事から歸つた姉の亭主が晩酌の膳に向つてゐる傍で、姉と一緒に晩飯の箸を取つてゐたが、心は鶴さんとおゆふの側にあつた。

「さう〳〵、こんな事しちやゐられないのだつけ。店のものが皆私を待つてゐるでせう。」お島は蚊帳のなかで子供を寢かしつけてゐる、姉の枕頭で想出したやうに言出した。

「良人はあんなだし、私でもゐなかつた日には、一日だつて店が立行きませんよ。」

「今度あばれちや駄目よ。」姉は出てゆくお島を送出しながら言つた。

「どうもお騷がせして相濟みません。」お島は何のこともなかつたやうな顏をして、外へ出たが、鶴さんがまだ植源にゐるやうな氣がして、素直に家へ歸る氣にはなれなかつた。

外は累皆暮れてしまつて、茶の木畑や山茶花などの木立の多い、その界隈は閑寂してゐた。お島の足は惹寄せられるやうに、植源の方へ歩いていつた。「鶴さんも可哀さうよ。」さう言つてお島を窘めたおゆふの目色が、まだ目についてゐた。北海道の女よりも、稚馴染のおゆふの方に、喘い多くの疑ひがかゝつてゐた。

大きな石の門のうへに、植源と出てゐる軒燈の下に突立つて、やがてお島は家の方の氣勢に神經を澄したが、石を敷きつめた門のうちの雨側に、枝を差交した木蔭から見える玄關には、灯影一つ洩れてゐなかつた。お島は樅と欅の木とで、二重になつてゐる外圍の周を、其方こつち廻つてみたが、何のこともなかつた。俥で家へ歸つたのは、大分おそかつた。

「お歸んなさい。」

店のもの二三人に聲をかけられながら、俥から降りると、奧の方の帳場に坐つてゐる鶴さんの顏が、ちらと見えたので、お島は漸く胸一杯に安心と歡喜との溢れて來るのを感じたが、矢張聲をかける氣になれなかつた。

上つてみると、二階は出る時、取散らしていつたまゝであつた。脫棄が投出してあつたり、蔽もとられたまゝの鏡筒の上の鏡に、疲れた自分の顏が映つたりした。お島はその前に立つて、物足りぬ思に暫くぼんやりしてゐた。

三十九

お島は二三度階下へおりてみたけれど、鶴さんは、いつまで經つても、帳場から離れて來る樣子もなかつた。そのうちに表が段々靜かになつて、夜が更けて來ると、店を片着けにかゝつてゐる物音が聞えたりして、鶴さんはやがて茶の室へ入つて來た。お島は氣持わるく壞れた髮を、束髮に結直して、長火鉢の傍へ來て坐つてみたりしてゐたが、頭腦がぴん〳〵痛みだして來たので、鶴さんが二階へ上つて來る時分には、彼女もいつか蒲團を引被いで寢てゐた。

「お先へ失禮しました。何だか氣分がわるいので。」お島はさう言ひながら、呻吟聲を立ててゐた。

鶴さんは床についてからも、白い細長い手を出して、今朝から見るひまもなかつた新聞を、かさこそ音を立てて、彼方かへし此方返しして讀んでゐるらしかつたが、するうちに、それを投りだして、枕につくかと思つてゐると、ぱちんと云ふ音がして、折鞄を開けて、何か取出したらしかつた。後は閑寂して、下の茶の室の簷端につるしてある鈴蟲の聲が時々耳につくだけであつた。

お島は後向になつたまゝ、何をするかと神經を研ぎすましてゐたが、今まで嚙くて爲方のなかつた目までが、ぼつかり開いて來た。そして、ふと紙のうへを軋る萬年筆の音が、耳にふれて來ると、渾身の全神經がそれに集つて來て、向き

返つてその方を見ない時にいかなかつた。

「何をしてるんです、今時分……」

お島はいきなり聲を立てゝ、鶴さんを吃驚させた。鞄のなかには、女の手紙が二三通はみ出してゐるのが見えた。

鶴さんは、ちらと此方を見たが、默つてまたペンを動かしはじめた。お島はいら〳〵しい目をすゑて、ぢつと見つめてゐたが、忽ち床から乘出して、その手紙を攫奪らうとした。

「おい、戯談ぢやないぜ。」

鶴さんはそれでも落着いたもので、そつと書きかけの手紙を床の下へ押込まうとしたが、同時に、お島の手は傍にあつた折鞄を浚つていくために臂まで遣出して來た。

「おい、ちよつと話がある。」大分たつてから、鶴さんは床のうへに起上つて、疲れて枕に突伏になつてゐるお島に聲かけた。暴出すお島を押へたために、可也興奮させられて來た鶴さんは、爪痕のばら櫻になつてゐる腕をさすりながら、莨を喫してゐた。

お島はまだ肩で息をしながら、やつぱり突伏してゐた。

「……お前のやうなものに、勝手な眞似をされたんぢや、商人は迚も立つて行きつこはありやしないんだからね。」鶴さんは、自分がこの家に對する責任や、家つき娘の前の内儀さんに對する立場などを說立てゝから言出した。

「そんな事は、おゆふさんにでも聞いてお貰ひなさい。」お島は憎さげに、言を返したまゝ、またくるりと後向になつた。

四十

返したとも歸つたとも決らずに、お島が時々生家や植源の方へ往つたり來たりしてゐた頃には、鶴さんの家も大分はた〳〵になりかけてゐた。

北海道の女の方の其はそれとして、以前から關係のあつた下谷の女の方へ、一層熱中して來た鶴さんは、店のものゝ一人が處々の仕切先をごまかして、可也な穴を開けたことにすら氣のつかぬほど、店を外にしてゐた。

「子供だけは私が家において立派に育ててやるつもりです。」

鶴さんは、植源の隱居や嫁の前へ來ると、いつもお島の離縁話を持出しては、口癖のやうに言つてゐたが、お島に向つてもそれを明言した。

植源の隱居に委してある、自分の身のうへに深い不安を懷きながら、毎日々々母親に窄りづめにされてゐたお島は、ある晩、[illegible]番しながら、覺[illegible]てゐたとき、言を返したのお[illegible]にすゝめられたといつて、付[illegible]のために、そこへ來[illegible]、[illegible]前で[illegible]を打つたのが因で、到頭不幸な胎兒が流れてしまつた。

その時お島は、[illegible]支度をさまして、衆と一緒に、朝飯の膳に向つて、箸を取りかけてゐた。もう十月の半で、七輪のうへに掛ゑた鍋のお汁の味噌の匂や、飯櫃から立つ白い湯氣にも、秋らしい朝の氣分が可懷しまれた。

女を追つて、田舍へ行つたきり、もう大分になる總領の姿のみえぬ家のなかは、急に衰へてみえて來た父親の姿とともに、此頃際立つて寂しさが感ぜられて來た。食べかけた朝飯の箸を持つたまゝ、急に目のくら〳〵して來たお島は、聲を立てるまもなく、そこへ仆れてしまつたのであつたが、七月になるかならぬの胎兒が出てしまつたことに氣の附いたのは、時を經てからであつた。

一日もみないで、父親や鶴さんの手で、產兒の寺へ送られていつたのは、其晩方であつたが、思ひがけなく體の輕くなつたお島の床についてゐたのは、幾日でもなかつた。

健康が回復して來ると同時に、母親と植源の

隠居との何うした談合でか、當分植源にいつてゐることに決められたお島は、そこで臺所に働いたり、冬物の針仕事に坐つたりしてゐた。ぐれ出した鶴さんは、口喧しい隠居の頑張つてゐる此の家から遠くなつてゐた。お島はおゆふの口から、下谷の女を家へ入れる入れないで、苦勞してゐる彼の噂ををり〳〵聞かされたりした。

「あの人もあゝなつてしまつちや、駄目よ。」おゆふは鶴さんに愛想がつきたやうに言つた。

四十一

一つは人に媚びるため、働かずにはゐられないやうに躾けられて來たお島は、一年弱の鶴さんとの夫婦暮しに倦あきさせられた、甘いとも苦いとも解らないやうな苦しい生活の紛糾から遁れて、何處まで彈むか知れないやうな體を、こゝでまた荒い仕事に働かせることのできるのが、寧ろ其日〳〵の幸福であるらしく見えた。

植源の庭には、大きな水甕が三つもあつた。お島は暇々手に懸りないをり〳〵にはその一つ一つに、水を盈々汲込まなければならなかつた。そして其を沢山の花圃や植木に灌がなければならなかつた。其頃かゝつてゐた病身な田舎出の婦人が、連れてゐた二人の子供の面倒も、朝晩に爲なければならなかつた。田舎で鐵道の方に勤めてゐた官吏の許へ片づいてゐた其姉は、以前この家に間借をしてゐたことのある其良人が、田舎へ轉任してから、七年目の今年の夏、遂に病死してしまつた。

育ち盛りの其子供は、おゆふには二人とも嫌はれたが、お島には能く懐いた。お島は暇さへあると、髪を結つたり、リボンをかけてやつたり、寝起や入浴や食事の世話に骨惜みをしなかつた。

嫁にやられるとき、拵へて行つたものなどを不殘亡くして、旅費や當分の小遣にも足りぬくらゐの金を、少し許りの家財を賣拂つて持つて來た姉は、まだ乳離れのせぬ小さい方の男の子を膝にのせて、其を緣側の日南に坐りながら、ぼんやりお島の働きぶりを眺めてゐた。

「能くそんなに體が動いたもんだわね。」

姉は感心したやうに聲をかけた。お島は襷がけに素跣足で、手洗鉢の水を取りかへながら、鉢前の小石を一つ〳〵綺麗に洗つてゐた。夏中椽先に張出されてあつた葭簀の日覆を取れて、まだ暑苦しいやうな日の射込む時が、二三日も續いた。

「えゝ、子供の時分から慣れつこになつてゐますから。」とお島は笑ひながら應へた。

「子供を產んだ人とは思はれないくらゐですよ。」

「だつて漸う七月ですもの。私顔も見ませんでしたよ。淡泊したもんです。」

「それにしたつて、其時のことは忘れられないでせう。」

「然うですね。がさ〳〵してる癖に、餘り好い氣持はしませんね。」

「矢張惚れてゐたんだわね。」

「然うかも知れませんよ。」お島は頰を紅めて、「私も呆れて打壊したやうなもんですもの。あの人はまた何うして、あんなに氣が多いんでせう。些と何かいはれると、もう好い氣になつて一人で騒いでゐるんですもの。其癖始終ぴい〳〵なんですがね。」

「でも能く思切つて了つたわね。」

「藝者や女郎ぢやあるまいし、いつ迄くよ〳〵してゐたつて爲方がないですもの。私はあんなへな〳〵した男は大嫌です。」

「それも然うね。——私も思切つて、何處か働きに行きませうかしら。」

「御戯談でせう。そんな可愛い坊ちやんをおいて、何處へ行けるもんですか。」

四十二

夜になると、お島は隱居の足腰をさすつて、寢かしつけてやるのが、毎日の日課であつたが、時とすると子息夫婦に對する、病的な嫉妬から起るこの老婦の兇暴な擧動をも宥めてやらなければならなかつた。

四十代時分には、時々若い遊人などを近づけたと云ふ噂のある隱居は、おゆふが嫁に來るまでは、幼い時から甘やかして育てて來た子息の房吉を、猫可愛がりに愛した。一度腦を患つたりなどしてから、氣に引立がなくなつて、温順しい一方なのが、彼女には不憫でならなかつた。

房吉は植木屋の仕事としては、此と云ふこともさせられずに日を送つて來たが、始終家にばかり引込んで、母親の傍に牽きつけられてゐたので、友達といふものもなかつた。繪の好きであつた彼は、十六七の時分には、繪師にならうとの希望をいだきはじめたが、それも母親に遮られて、修業らしい修業もしずにしまつた。

寢るにも起きるにも、自分ばかりを凝視めて暮してゐるやうな、年老つた母親の苛辣な目が、房吉には段々厭はしくなつて來た。そして何時の頃からか時々顏を合す機會のあつた、おゆふの懷しい顏姿に心が惹きつけられた。どんなことがあつても、おゆふちやんを嫁に貰つてくれなければならない、房吉のさう言つた願が、母親の口から大政やおゆふの耳へも入れられた。

結婚してからも、どうかすると、おゆふから離されて、房吉が氣鬱な母親の側に寢かされたり、おゆふが夜おそくまで、母親の傍に坐つて、足腰を揉ませられたりした。夜更に目敏い母親の聲音が、夫婦の寢室の外の縁側に聞えたり、夜の未明に板戸を引きあけてゐる、いら／＼しい聲が聞えたりした。

お島が來てからも、おゆふが物蔭で泣いてゐるやうなことが、時々あつた。

家にゐても、大抵きちんとした身裝をして、庭の方は職人まかせにして、自身は花を活けたり、書畫を弄つたりして暮してゐる内氣な房吉は、何うかすると母親から、聽いてゐられないやうな毒々しい辭を浴せられた。

「あれを手前の子と思つてるのが、大間拔だ。」

母親はさうも言つた。

裏へのみえる目などの滅切水々して來たおゆふは、爾時五月の腹を抱へてゐた。日に／＼氣懈さうにみえて來るおゆふの媚いた姿や、良人に甘えるやうな素振が、母親には見てゐられないほど腹立しかつた。

四十三

お島の姉が、暑い日盛りに帽子も被せない子供を、手かけに負つて、庭の方からはいつて、おゆふを呼出しに來たとき、門の外に張物をしてゐたお島と、自分の部屋の縁側で、髮を洗つてゐたおゆふを除いたほか、大抵の人は風通しの好ささうな場所を撰んで、晝寢をしてゐた。

房吉は時々出かけてゆく、近所の釣堀へ遊びに行つてゐたし、房吉の姉のお鈴は、小さい方の子供に、乳房を銜ませながら、茶の室の方で、手枕をしながら、他愛なく眠つてゐた。家のなかは、どこも彼處も長い日の暑熱に倦み疲れたやうな懈さに浸つてゐた。

大輪の向日葵の、萎れきつて項だれた花壇尻の垣根ぎはに、ひら／＼する黑い蝶の影などが見えて、四下は汚點のあるやうな日影が、強く漲つてゐた。

姉はおゆふと、五六分ばかり縁側で話をしてゐたが、やがて子供をそこへ卸して、袂で汗をふいてゐた。おゆふはまだ水氣の取りきれぬ髮の端に、紙片を卷きつけて、それを垂らしたまま、あたふた家を出ていつた。

「きつと鶴さんが來てゐるんだ。」
お島はさう思ふと、急に張物が手に着かなくなつて、胸がいら〳〵して來た。
「姉さんも隨分な人だよ。」
お島はいきなり姉の側へ寄つていつた。
「何うしてさ。」姉は這つてゐる子供に、乳房を出して見せながら、汗ばんだ顏を赧めた。
「解つてますよ。」
「可笑しな人だね。解つてゐたら可いぢやないの。」
「そんな事をしても可いんですか。」
「いゝも惡いもないぢやないか。感違ひをしちや困りますよ。」
二三度口留をしてから、姉の話すところによると、金の工面に行詰つた鶴さんが、隆居や房吉に内密で、おゆふから少し許り融通をしてもらふために、私と姉の家へやつて來たのだと云ふのであつた。鶴さんが、そんなに困つてゐるとは、お島には信ぜられないくらゐであつたが、姉の口吻で、それは事實であるらしく思へた。
「ふむ。」お島は首を傾げて、「おやもう、あの店も駄目だね。」
「然うなんでせう。事によつたら、田舍へ行くつて言つてゐるわ。」
「藝者を引張込むやうぢや、長續きはしないね。散々好きなことをして、店を仕舞ふがいゝや。」
お島は自棄に言ひすてて、仕事の方へ歸つて來たが、目が涙に曇つてゐた。せか〳〵出て行つた今のおゆふの姿や、おゆふを待受けてゐる鶴さんの、此頃の生活に荒みきつた神經質な顏などが、目について來た。
暫く經つて、歸つて來たおゆふの顏には、鶴さんのためなら、何でも爲かねないやうな浮いた大膽さと不安が見えてゐた。
おゆふの部屋を出て行く姉の手に、小袖を四五枚入れたほどの、ぼつとりした包が提げられた。

四十四

堅い口留をして、ふと其等の事をお鈴に洩したお島は、それを又お鈴から聞いて、宛然姦通の手證でも押へたやうに騷ぎたてる、隆居の病的な苛責からおゆふを庇護ふことに骨が折れた。
宵の口に、お島にすかし宥められて、一度眠りについた隆居は、家がこれから寢床につかうとしてゐる時分に、目がさめて來ると、廣々した蚊帳のなかに起坐つて、とも退屈な夜の長さに倦み果てたやうに、四下を見迴してゐた。
宵に母親に窘め責められた房吉は、隆居がじりじりして業を煮せば煮すほど、その事には冷淡であつた。遊人などを近づけてゐた母親の過去を見せられて來た房吉の目には、彼女の苦しみが、滑稽にも莫迦々々しくも見えた。
「誰のためでもない、みんなお前が可愛いからだ。」
脆弱かつた幼い頃の房吉の養育に、氣苦勞の多かつたことなどを言立てる隆居の言を、好い加減に房吉は聞流してゐた。
「不義した女を出すことが出來ないやうな腑ぬけと、一生暮さうとは思はない。私の方から出ていくから然う思ふがいゝ。」
思つてゐることの半分も言へない房吉は、それでも二言三言言葉を返した。
「そんな事があつたか何か知らないけれど、私の家内なら阿母さんは默つてみてゐたらいゝでせう。」
隆居の肩を揉んでゐたお島は、それを聽きながら胸から火が出るやうに思つたが、矢張房吉を歯痒く思つた。
無成算な、其日々々の無駄な働きに、一夏を過して來たお島は、習慣でさうして來た隆居の幾

勝敗や、親子の間の爭闘の敗北にも疲れてゐた、寢苦しい晩などには、お島は自分自身の肉體の苦しみか、まだ何もしめずに、いつまでもほそぼそ話聲のもれてゐる若夫婦の寢室の方へも見廻つてみる、隠居と一つに神經を働かせた。

「まあ、そんな事はいゝでせう。」お島は外方を向きながら鼻で笑つた。

「お前がそんな二本棒だから、おゆふが好きな眞似をするんだ。お前が承知しても、この私が承知できない。さあ今夜といふ今夜は、立派におゆふの處分をしてみせろ。それが出來ないやうな意氣地なしなら、首でも縊つて一思ひに死んでしまへ。」

それよりも、部屋で泣伏してゐるおゆふの可憐しい姿に、心の惹かるゝ房吉は、やがて其傍へ寄つて、優しい辭をかけてやりたかつた。姙娠だと云ふことが、一層男の愛憐を唆つた。

お島にさへ堪へられないほどの力を出して、隠居が剃刀を揮りまはして、二人のなかへ割つて入つたとき、おゆふは寢衣のまゝ、跣足で縁から外へ飛出していつた。

四十五

二時過まで、植源の人達は騒いでゐた。

お島と二人で漸と宥めて、房吉を引離して、蚊帳のなかへ納められた隠居が默つてからも、お島はぢつとしても居られなかつた。

「何うしませうね。大丈夫でせうか。」お島は庭の方を捜してから、此も矢張そこいらを捜しあぐねて、蚊帳の外に茫然坐つてゐる房吉の傍へ歸つて來て言つた。

房吉は蒼白めた顔をして、涙含んでゐた。

「大丈夫とは思ふけれど、偶然するとおゆふは歸つて來ないかも知れないね。不斷から善く死ぬ死ぬと言つてゐたから。」

「然うですか。」お島は悄然らしい顫聲で言つた。

「それぢや私少し捜して來ませう。」

お島が近所の知つた家を二三軒訊いてあるいたり、姉の家へ行つてみたり、途中で鶴さんや大政へ電話をかけたりしてから、漸う歸つて來たのは、もう大分夜が更けてからであつた

「安心していらつしやい。」お島は房吉の部屋へ入ると、せい\/息をはずませながら言つた。

「おゆふさんは大丈夫大政さんにゐますよ。」

お島が、大政へ電話をかけたとき、出て來て應答をしたのは、おゆふには繼母にあたる大政の若い内儀さんであつた。

おゆふが[illegible]で飛込んでいつた時、[illegible]ら隣家に入つてゐたが、おゆふはいきなり[illegible]、[illegible]

「[illegible]きつめた氣分で家を出た[illegible]さんに着物を[illegible]したり何かしたと云ふことが、[illegible]聞かない前からの浮氣つぽいおゆふを知つてゐる父親には、[illegible]ことのできぬ悪事とし思へなかつた。

おゆふが歸つて來たとき、お島は自分の寢床へ歸つて、表の樣子に氣を配りながらまんじりともせず疲れた體を横へてゐた。

歸つて來たおゆふが、一つは姑や父親への面當に、一つは房吉に拗ねるために、いきなり剃刀で咽を切つて、庭の井戸へ身を投げようとしたのは、その晩の夜中過であつた。おゆふは、うと\/床のなかに坐つてゐる房吉には聲もかけず、いきなり鏡臺の前に立つて、隠居の手から取離されたまゝ、そこに置かれた剃刀を見つけると、いきなり振釋いた髪を、[illegible]根元からぶつつり切つてしまつた。

「可慚しい\/。」跣足で飛來して來たお島に遮へられながら、おゆふは暴れ悶踠いて叫んだ。

漸とのことで、房吉と一緒におゆふを座敷へ

たりした。
　其の町へ着くまでに、汽車は寂しい停車場に、三度も四度も駐つた。東京の居周に見なれてゐる町よりも美しい町が、自然の威壓に慴お披れて、口も利けないやうなお島の目に異様に映つた。
「へえ、こんな處にもこんな人がゐるのかね。」
お島は不思議さうに、そこに見えてゐる人達の姿を凝視めた。
　Sーと云ふ其の町へ入つた時にも、小雨がしとしとと降りそゝいでゐた。停車場を出て橋を一つ渡ると、直そこに町端らしい休み茶屋や、運送屋の軒に續いて煤りきつた旅籠屋が、二三軒目についた。石楠花や岩松などの植木を出してゐる店屋もあつた。壯太郎とお島とは、そとを俥で通つて行つた。
　町はどこも彼處も、閑寂してゐた。
　俥は直に大通の眞中へ出ていつた。そこに石造の門口を閉した旅館があつたり、大きな用水桶をひかへた銀行や、半鐘をつけた警察署があつたりした。
　壯太郎の家は、閑靜なその裏通にあつた。町屋風の格子戸や、土塀に圍はれた門構の家などが、幾軒か立續いたはづれに、低い垣根に仕切られた廣々した庭が、先づお島の目を惹いた。木組などの纎細いその家は、まだ木香のとれないくらゐの新建であつた。
　留守を頼んで行つた大工の若衆と、そこの子供とが、廣い家のなかを、我もの顔にごろごろしてゐた。
「へえ、こんな處でも商賣が利くんですかね。」
　部屋に落着いたお島は、緣端へ出て、庭を眺めながら呟いた。
「この町は先づこれだけのものだけれど、居周には、また夫々大きな家があるからね。」壯太郎は、茶盆や湯沸をそこへ持出して來ると、羽織をぬいで胡坐を搔きながら呟いた。
　秋雨のやうな雨がまだじとじと降つてゐた。水分の多い冷い風が、遠く山國に來てゐることを思はせた。ごとんごとんと云ふ慵い水車の音が、どこからか、物悲しげに聞えてゐた。

四十八

　そこにお島を落着かせてから、壯太郎が荷物運搬の采配に、雨のなかを再び停車場へ出かけていつてから、お島は晩の食事の支度に臺所へ出たが、女がをりをり來ると見えて、暫く女中のゐない男世帶としては、戸棚や流元が綺麗に取片着いてゐた。
　壯太郎は、夜までかゝつて、車で二度に運込まれた荷物を、勝手元の方へ始末をしてから、お島にはどこへ往くとも告げずに、またふいと羽織や帽子を被て出て往つたが、お島はその晩裏から入つて來た壯太郎が、何時頃歸つたかを知らないくらゐ疲れて熟睡した。
　明朝目のさめたとき、水車の音が先づお島の耳に着いた。お島はその音を聞きながら、寢床のなかにうとうとしてゐたが、今日から全く知らない土地で暮すのだと思ふと、今迄憎み怨んでゐた東京の人達さへ、懷しく思はれた。
　こゝから二停車場ほど先にある、或大きな市へ流れて來て、そこで商賣をしてゐた兄の女が、その頃三里の山奥にある或鑛山の方に係つてゐる男に落籍されて、市とSー町との間にある鑛山つゞきの小さい町に、圍はれてゐたことは、お島も東京を立つ前から聽されてゐた。女がまだ商賣をしてゐる頃から、兄はその市へ來て、何も爲ることなしに、宿屋にごろついてゐたり、居周の温泉場に遊んでゐたりしてゐるうちに、土地の遊人仲間にも顏を知られて、をりをり勝負事などに手を出してゐた。女が今

の男に落籍されてから、彼は少し許りの資本をもらつて、所縁のあつた此のS—町へ來て、植木に身を入れることになつたのであつた。

　晝頃に雨があがつてから、お島は壯太郎に連れられて、つい二三町ほど隔つてゐる大家の家へ遊びに往つた。そこは此町の唯一の精米所でもあり、金持でもあつた。大きな門を入ると、水車仕掛の大きな精米所が、直にお島の目についた。話聲が聽取れないほど、轟々いふ音がそこから起つてゐた。

「この米が皆鑛山へ入るんだぜ。」

　壯太郎は、お島をその入口まで連れていつて、言つて聽せた。白くなつて働いてゐる男達と、壯太郎は暫く無駄話をしてゐた。

　主人は硝子戸のはまつた、明るい事務室で、椅子に腰かけて、青い巾の張られた大きな卓子に倚かゝつて、眼鏡をかけて、その日の新聞の相場づけに眼を通してゐたが、壯太郎の方へ笑顏を向けると、お島にも丁寧にお辭儀をした。柱の狀插には、主に東京から入つて來る手紙や電報が、夥しく插まれてあつた。米屋町の旦那のやうな風をした其の主人を、お島は不思議さうに眺めてゐた。

「こゝの庭さ、己が手を入れたといふのは…。」壯太郎は飛石傳ひに、築山がかりの庭へ出てゆくと、お島に話しかけたが、そこから上へ登つてゆくと、小さい公園ほどの廣々した土地が、目の前に展けた。

「へえ、こんな暮しをしてゐる人があるんですかね。」

　お島はそこから、築山のかゝりや、家建の工合を見下しながら呟いた。

「こゝへみつしり木を入れて、この町の公園にしようてえのが、あの人の企畫なんだがね。金のかゝる仕事だから、少し景氣が直つてからでなくちや…。」

　兄はさう言つて、子供のためのグラウンドのやうな場所の周にある、木蔭のベンチに腰をおろして、莨をふかしはじめた。

四十九

　直にお島は、こゝの主人や上さんや、子供達とも懇意になつたが、來た時から目についた、通の方の濱屋と云ふ旅館の人達とも親しくなつた。

　旅館の方には、お島より二つ年下の娘の外に、里から來てゐる女中が三人ほどゐたが、始終帳場に坐つてゐる色の小白い面長な優男が、そこの主人であつた。物堅さうな其の主人は、大きい聲では物も言はないやうな、温順しい男であつた。

　山國のこの寂れた町に涼氣が立つて來るにつれて、西北に聳えてゐる山の姿が、薄墨色の雲に封されてゐるやうな日が續きがちであつた。鬱々するやうな降雨の日には、お島はよく濱屋へ湯をもらひに行つて、圍爐裏縁へ上り込んで、娘に東京の話をして聞かせたり、立込んで來る客の前へ出たりした。

　一家の締をしてゐる、四十六七になつたぶよぶよ肥りの上さんと、一日小まめに體を動かしづめでゐる老爺さんとが、薄暗いその圍爐裏の側に、酒の燗番をしたり女中の指圖をしたりしてゐた。町の旅籠や料理屋へ肴を仕送つてゐる魚河岸の問屋の旦那が、仕切を取りに、東京からやつて來て、二日も三日も、新建の奧座敷に飲みつゞけてゐた。

　精米所の主人が建ててくれたといふ、その新座敷へ、お島も時々入つて見た。總檜の柾の柱や、欄間の彫刻や、極彩色の模樣畫のある大きな杉戸や、黑柿の床框などの出來ばえを、上さんは自慢さうに、お島に話して聞かせた。

　河岸の旦那の氣づくしをやつてゐる其の部屋

を、お島も物珍しさうに覗いてみた。それでも安お召などを引張つた藝者や、古着か何かの友仙縮緬の衣裳を着て、斑に白粉をぬつた半玉などが、引斷なしに、部屋を出たり入つたりした。鼓や太鼓の音がのべつ陽氣に聞えた。笛の巧いといふ、盲の男の師匠が、藝者に手をひかれて、廊下づたひに連れられて行つた。

そこへ精米所の主人がやつて來て、爐緣に胡坐をかくと、そこにごろりと寝轉んでゐたお爺さんは直に奥へ引込んで行つた。精米所の主人の前には、直に銚子がつけられて、上さんがお酌をしはじめた。

「あれを知らねえのかい。お前も餘程間ぬけだな。」

兄はその主人と上さんとの間を、お島に言つて聞かせた。

「あの家も、精米所のお蔭で持つてゐるのさ。だから爺さんも目をつぶつて、見てゐるんだ。」

兄はさうも言つた。

五十

旦那を鑛山へ還してから、女が一里半程の道を俥に乘つて、壯太郎のところへ遣つて來るのは、大抵月曜日の午前であつた。

家が近所にあつたところから、幼いをりの馴染であつた、おかなと云ふ其の女が、まだ東京で商賣に出てゐる時分、兄は女の名前を腕に鏤りつけなどして、嬉しがつてゐた。そして女の跡をおうて、此處へ來た頃には、上さんまで實家へ返して、父親からは準禁治産の形で悉皆見限をつけられてゐた。

日本橋邊にゐたことのあるおかなは、瘦ぎすな軀の小さい女であつたが、東京では立行かなくなつてT—町へ來てからは、暮も糴も一層荒んでゐた。土地ではいきの多い人達のなかでは、勝手が違つて勤めにくかつたが、鑛山から來る連中には可也に持囃された。

おかなは朝來ると、晩方には大抵歸つて行つたが、旦那が東京へ用達などに出るをりには、二晩も三晩も歸らないことがあつた。二里ほど奥にある山間の温泉場へ、呼出をかけられて、壯太郎が出向いて行くこともあつた。

おかなは素人くさい風をして、山焦けした顔に白粉も塗らず、ぼく／＼した下駄をはいて遣つて來たが、お島には土地の名物だといつて固い羊羹などを持つて來た。

女のゐる間、お島は家を出て、精米所へ行つたり、濱屋で遊んでゐたりした。

[illegible]では、[illegible]に出[illegible]をりで、濱屋の[illegible]子と、自分に[illegible]れた二人[illegible]子供の[illegible]てゐた。

「濱屋のをばさんの處へいきましやう。」

お島は近所の子供たちと、例の公園に遊んでゐる其男の子の、綺麗な顔を眺めながら言つてみた。

「あゝ。」と、子供は頷いた。

「阿母さんとをばさんと、[illegible]」お島は言つてみたが、子供には何の感じもないらしかつた。

お島はベンチに腰かけて、[illegible]い時のたつのを待つてゐた。庭の運動場の周に植つた櫻の葉が、もう大半黄み枯れて、秋らしい雲が遠くの空に動いてゐた。お島は時々[illegible]で斜向ひになることのある、濱屋の若い主人のことなどを思つてゐた。T—市から來てゐた、其の主人の嫁が、脚病のために長いあひだ生家へ歸されてゐた。

五十一

お島が樂しみにして世話をしてゐた精米所[illegible]花圃の床に、霜が段々滋くなつて、吹曝しの[illegible]家の軒や狩目板に、或時は寒い山颪が、[illegible]

木枯が吹きつける冬が町を見舞ふ頃になると、商賣の方が悉皆閑になつて來た壯太郎は、また市の方へ出て行つて、達人仲間の群へ入つて、勝負事に頭を浸してゐる日が多かつた。持つて行つた植木の或物は、土に適はないところから、お島が如何に丹精しても、買手のつかぬうちに、立枯になるやうなものゝ多かつたが、草花の方も見事に見込がはづれて、種子が思つたほど捌けないばかりでなく、花圃に蒔かれたものも發芽や發育が十分でなかつた。壯太郎はそれに氣を腐らして、この一冬を何うしてお島と二人で、この町に立籠らうかと思ひわづらうた。

山にはもう雪が來てゐた。鑛山の方へ運ばれてゆく、味噌や醤油などの荷造した荷馬が、町に幾頭となく立竝んで、時雨のふる中を、鼻から白い息を吐いてゐるやうな朝が幾日となく續いた。かういふ日などには、お島がよく出て見た松並木の往還にある木挽小舍の男達の姿も、いつか見えなくなつて、そこから小川を一つ隔てた田圃なかにある遊廓の白い塀へこ[illegible]建物を取卷いてゐた林の木葉も、悉皆落ちてしまつた。

それでも酒屋や料理屋だけには、裏町にある藝者屋から、時々褄をかゝげて出てゆく箱屋や藝者の姿が見られて、どこからともなく飲みに來る客が絶えなかつた。お島は町を通るごとに目についてゐた、通の飲食店や、町がさびれてから、どこも達磨をおくやうになつたと云ふ噂の茶屋などに、働きに入らうかとさへ思つてみることもあつたが、それらのお客が皆近在の百姓や、商賈などの小商人であることを思つてみるだけでも、身顫が出るほど厭であつた。

螻になつて市から歸つて來ると、兄はよくお島のものを持出して、顔を知つてゐる質屋の門などを潜つたが、それも種子が盡きて來ると、矢張女のところへ強請りに行くより外なかつた。

その使に、お島も時々遣られた。峠の幾個もある寂しい山道を、お島は獨りでてく／＼歩いて行つた。どこへ行つても人家があつた。休み茶屋や居酒屋もあつた。女の圍はれてゐる町では、馬具や農具を拵へてゐる鍛冶屋が殊に多かつた。

「おかなさんが、こんな處によくゐられたもんだ。」お島は不思議に思つたが、それでも女のゐるところは、小瀟洒した格子造の家であつた。家のなかには、東京風な箪笥や長火鉢もきちんとしてゐた。

五十二

けれど、然うしてちよい／＼往つてみる、お島の目に映つたところでは、おかなは見る思つてゐるほど氣樂な身分でもなかつた。おかなの話によると、鑛業課とやらの方に勤めて、鑛夫達と一緒に穴へ入るのが職業である其旦那から、月々貰はれる生活費と小遣とには、幾許でもなかつた。もと居た市の方では、誰も知らないもののない壯太郎との情交が、鑛山の人達の口から、漸々旦那の耳へも傳つてから、金の受渡しが一層やかましくなつて、おかなは其事で何うかすると旦那と烈しい喧嘩を始めることもあつた。夏の頃から、山間の湯に行つてみたり、市の方の醫者へ通つてゐたりしてゐたおかなの體は、涼風が立つに從つて、いくらか肉づいて來たやうであつたが、やつぱり色澤が出て來なかつた。それに何方を向いても、山ばかりなこの寂しい町で、雪の深い土地に一冬を越すことは、今迄賑かな市にゐたおかなに取つては、穴へ入るほど心細い仕事であつた。「もつと暖かい方へ出て、もとの商賣をしよう。」おかなは時々そんな相談を、壯太郎にも持ちかけてみるのであつた。旦那から少し許り手切をもらつて、おかな

が知合をたよつて、着のみ着のまゝで千葉の方へ落ちて行くことになつた頃には、卅太郎も悉皆落れはててゐた。月はもう十二月であつた。山はどこを見ても眞白で、町には毎日々々じめ〳〵した霙が降つたり、雪が積つたりしてゐた。

東京の自宅の方へ、時々無心の手紙などを書いてゐた卅太郎が、何の手應もないのに氣を腐らして、女から送つて來た金を旅費にして、これもこの町を立つて行つたのは、十二月の月ももう半過であつた。旅客の姿の幾ど全く絶えてしまつた停車場へ、獨り遺されることになつたお島は、兄を送つていつた。精米所の主人や、濱屋の内儀さんなどに、家賃や、時々の小遣などの借のたまつてゐた卅太郎のために、雙方の談合で、その質に、お島の體があづけられる事になつたのであつた。

寒い冬空を、防寒具の用意すらなかつた兄の卅太郎は、古い蝙蝠傘を一本もつて、宛然兒狀持か何ぞのやうな身すぼらしい風をして、そこから汽車に乗つていつた。鳥打の廂から、落窪んだ目ばかりがぎろりと薄氣味わるく光つてゐた。

その日は、夕方から雪がぼそ〳〵降出して來た。綿の入つたものの支度すらできなかつたお島は、袷の襟にしみる寒さに顫へながら、汽車の出てしまつた寂しい停車場を、濱屋の番傘をさして、獨りですご〳〵出て來た。

「兄さんに悉皆かつがれてしまつたんだ！」

お島は初めて氣がついたやうに、自分の陷ちて來た立場を考へた。

達磨などの多い、飲食店の店のなかからは、煮物の煙などが、薄白く寒い風に靡いてゐた。

五十三

繭買や行商人などの姿が、安旅籠の二階などに見られる、五六月の交になるまで、旅客の迹の悉皆絶えてしまふこの町にも、縣の官吏の定宿になつてゐる濱屋だけには、時々洋服姿で入つて來る泊り客があつた。その中には、鐵道の方の役員や、保險會社の勸誘員といふやうな人達もあつたが、それも月が一月へ入ると、ぱつたり足が絶えてしまつた、濱屋の人達は、爐端に額を鳩めて、徐々する時間を消しかねるやうな退屈な日が多かつた。

「さあ、こんな事をしちやゐられない。」

朝の拭掃除がすんで了ふと、その仲間に加はつて、時のたつのを知らずに話に耽つてゐたお島は、新建の奥座敷で、前夜も遅くまで客に夜を更してゐた主婦の、起きて出て來る姿をみると、急いで暖かい寢床を離れた。そして家中女の手一つへ任された臺所の忙しい働きの隙々に見るやうに、主婦から宛がはれてゐる仕事に坐つた。仕事は大概、これから客に着せる夜着や褞袍や枕などの縫綴であつた。前二階の廣い客座敷で、それらの仕事に向つてゐるお島は、氣がつまつて來ると、獨りで鼻唄を謡ひながら、機械的に針を動かしてゐたが、遣瀨のない寂しさが、時々頭腦に襲ひかゝつて來た。

窓をあけると、鳶色に煤つた空の果に、山々の峰續きが仄白く見られて、その奧の方にあると聞いてゐる、鑛山の人達の生活が物悲しげに思遣られた。奧座敷の縁側に出してある、大きな籠に啼いてゐる小鳥の聲が、時々聞えてゐた。

市から引かれてある電燈の火が、薄明るく家のなかを照す頃になると、町はもう何處も彼處も戸が閉されて、裏へ出てみると、一面に雪の降積つた田畠や林や人家のあひだから、ごとんごとんと響く、水車の音が單調に聞えて、涙含まるゝやうな物悲しさが、快活に働いたり、笑つたりして見せてゐるお島の心の底に、しみじみ湧きあがつて來た。

その頃になると、いつも爐端に姿をみせる精米所の主人が、もうやつて來て大きな盥を湯に浸つてゐた。そしてお島たちが湯に入る時分には、晩酌の好い機嫌で、懸離れた奧座敷に延べられた臥床につくのであつたが、花がはじまると、ぴちん／＼と云ふ札の響が、家の寢靜つた靜かな屋内に、いつまでも聞えてゐた。二三人の町の人が、そこに集つてゐた。

酒ものまず、花にも興味をもたない若主人と、お島は時々二人きりで爐端に坐つてゐた。病氣が癒るとも癒らぬともきまらずに、長いあひだ生家へ歸つてゐる若い妻の身のうへを、獨りで案じわづらうてゐる此の主人の寢起の世話を、お島はこの頃自分ですることにしてゐた。

五十四

新座敷の方の庭から、丁字形に入込んでゐる中庭に臨んだ主人の寢室を、お島はある朝、毎朝するやうに掃除してゐた。障子襖の煤ぼれたその部屋には、持主のゐない眞新しい箪笥が二棹も駢んでゐて、嫁の着物がそつくり中に仕舞はれたきり、錠がおろされてあつた。お島は苦しい夢を見てゐるやうな心持で、そこを掃出してゐたが、不安と悔恨とが、また新しく胸に沁出してゐた。

お島は人に口を利くのも、顔を見られるのも厭になつたやうな自分の心の怯えを紛らせるために、一層精悍しい樣子をして立働いてゐた。そして客の膳立などをする場所に當ててある薄暗い部屋で、妹達と一緒に朝飯をすますと、自分獨りの思に耽るために、急いで湯殿へ入つていつた。窓に色硝子などをはめた湯殿には、板壁にかゝつた姿見が、うつすり昨夜の湯氣に曇つてゐた。お島はその前に立つて、いびつなりに映る自分の顔に眺入つてゐた。親達や兄や多くの知つた人達と離れて、こんな處に働いてゐる自分の姿が可憐しく思へてならなかつた。

お島は湯をぬくために、冷い三和土へおりて行つた。目が涙に曇つて、そこに溢れて流れてゐる噴井の水もみえなかつた。他人のなかに育つて來たお蔭で、誰にも痒いところへ手の達くやうに氣を使ふことに慣れてゐる自分が、若主人の背を、昨夜も流してやつたことが憶出された。然うした不用意の誘惑から來た男の誘惑を、彈返すだけの意地が、自分になかつたことが悲しまれた。

「鶴さんで懲々してゐる！」

お島はその時も、溺れてゆく自分の成行が不安であつた。

お島は力ない手を、浴槽の縁につかまつたまま、流れ減つて行く湯を、うつとり眺めてゐた。ごぼ／＼と云ふ音を立てて、湯は流れおちていつた。

橋をわたつて、裏の庫の方へゆく、主人の筒袖を着た物腰の細りした姿が、硝子戸ごしにちらと見られた。お島は今朝から、まだ一度も此の主人の顔を見なかつた。親しみのないやうな皮膚の蒼白い、手足などの纎細なその體がお島の感覺には、觸るのが氣味わるくも思へてゐたのであつたが、今朝は一種の魅力が、自分を惹着けてゆくやうにさへ思はれた。

「郵便が來てゐるよ。」

不意にその主人が、湯殿のなかへ顔を出して、懐から一封の手紙を出した。

それは王子の父親のところから來たのであつた。

「へえ、何でせう。」

お島は手を拭きながら、それを受取つた。そして封を披いて見た。

五十五

山に雪が融けて、紫だつたその姿が、くつ

きり碧い空に見られるやうになる頃までに、お島は三度も四度も父親の手紙を受取つた。
冬中閉されてあつた煤けた部屋の隅々まで、東風が吹流れて、町に陽炎の立つやうな日が幾日となく續いた。淡雪が意ひがけなく、また降つて來たりしたが、春の日光に照されて、直にびしよ／＼消えて行つた。樋の破目から滴れおちる雨滴の水沫に、光線が美しい虹を棚引かせて、凧の唸聲などが空に聞え、乾燥した濱屋の前の往來には、よか／＼飴の太鼓が子供を呼んでゐた。
「お暖かになりやした。」
濱屋の爐端へ來る人の口から、そんな挨拶が聞かれた。
ちらほら梅の咲きさうな裏庭へ出て、冷い頸元にそゞえる輕い風に吹かれてゐると、お島は荐に都の空が戀しく想出された。
「御父さんから、また手紙が來ましたよ。」
人のゐないところで、帶の間から手紙を出してお島は男に見せた。
正月頃までは、ちよい／＼嫁の病氣を見にいつてゐた男は、此頃では悉皆市の方へも足を遠退いてゐた。湯殿口や前二階で、ひそ／＼話をしてゐる二人の姿が、妹達の目にも立つやうになつて來た。
そんな處に何時までぐづ／＼してゐないで、早く立つて來い。父親の手紙は、いつも同じやうであつたが、お島の身のうへについて、立つてゐるらしい碌でもない噂が、昔氣質の老人を怒らせてゐる事は、その文言でも受取れた。
「どうしませう。」
お島はその度に、目に涙をためて溜息を吐いたが、還るとも還らぬとも決らずに、話がぐづぐづになる事が多かつた。
「御父さんは、私が酌婦にでもなつてゐるものと思つてゐるのでせう。」
お島はさうも言つて笑つた。
一緒に東京へ出る相談などが、二人のあひだに持上つたが、何もする事のない男は、そこまで盲目には成りきれなかつた。市へお島を私と住はしておかうと云ふ相談も出たが、精米所の補助を受けて、かつ／＼遣つてゐる濱屋の生計向では、それも出來ない相談であつた。
一里半ほど東に當つてゐる谿川で、水力電氣を起すための、測量師や工夫の幾組かが東京からやつて來たり、山から降りて來たりする頃には、二人のなかを、誰も異しまなかつた。月はもう五月に入りかけてゐた。

五十六

嫂の生家の近所への聞えを憚るところから、主婦の取計ひで、お島がそれとなく、濱屋といくらか緣續きになつてゐる山の或温泉宿へやられたのは、その月の末頃であつた。
S——町の堺を流れてゐる川を溯つて、重なり合つた幾個かの山裾を迂つて行くと、直にその温泉場の白壁や屋の棟が目についた。勾配の急な町には狹い小川の流れなどが音を立てて、石高な狹い道の兩側に、幾十かの人家が窮屈さうに軒を並べ合つてゐた。
お島の行つたところは、そこに十四五軒もある温泉宿のなかでも、古い方の家であつたが、崖造の新しい二階などが、蠶の揚り時などに遊びに來る、居周の人達を迎へるために、地下室の形を備へてゐる味噌藏の上に建出されてあつたりした。庭にはもう浮環が葉を繁らせ、夏雪草が日に熔けさうな淡紅色の花をつけてゐた。
雪の深い冬の間、閉てきつてあつたやうな、その新建の二階の板戸を開けると、直目の前にみえる山の傾斜面に拓いた畑には、麥が青々と伸びて、藏の瓦屋根のうへに、小禽が怡しげな

聲をたてて啼いてゐた。山國の深さを思はせるやうな暗雲が見あげる山の松の梢ごしに奇しく眺められた。

閑時にはまた少し間のあるこの温泉場には、近郷の百姓や附近の町の人の姿が偶に見られるきりであつた。お島はその間を、こゝでも針仕事などに坐らせられたが、何うかすると若い美術學生などの、函をさげて飛込んで來るのに出逢つた。

「こんな山奥へ入らして、何をなさいますの。」

お島は絶えて聞くことの出來なかつた、東京辯の懷しさに惹着けられて、つい話に時を移したりした。

山越えに、××國の方へ渉らうとしてゐるその學生は、紫だつた朝雲が、まだ山の端に消えうせぬ間を、輕々しい打扮をして、拵へてもらつた皮包の辨當をポケットへ入れて、ふらりと立つていつた。

「何て氣樂な書生さんでせう。男はいゝね。」

お島は可羨しさうにその後姿を見送りながら、主婦に言つた。

三十代の夫婦の外に、七つになる女の貰ひ子があるきり、老人氣のない此の家では、お島は比較的氣がのんびりしてゐた。始終蒼い顏ばかりしてゐる病身な主婦は、暖かさうな日には、明るい裏二階の部屋へ來て、稀には針仕事などを取出してゐることもあつたが、大抵は薄暗い自分の部屋に閉籠つてゐた。

夏らしい暑い日の光が、山間の貧しい町のうへにも照つて來た。庭の樹の幹に青蛙の啼聲がきこえて、銀のやうな大粒の雨が遽に青々した若葉に降りそゝいだりした。午後三時頃の懶い眠に襲はれて、日影の薄い部屋に、うつら〳〵してゐた頭腦が急にせい〳〵して來て、お島は手摺ぎはへ出て、美しい雨脚を眺めてゐた。壓しつけられてゐたやうな心が、跳ねあがるやうに目ざめて來た。

五十七

濱屋の主人が、二度ばかり逢ひに來てくれた。

主人は來れば乾度湯に入つて、一晩泊つて行くことにしてゐたが、お終に別れてから、物の二日とたゝぬうちに、また遣つて來た。東京から突如に出て來たお島の父親をつれて來たのであつた。

お島はその時、貰ひ子の小娘を手かけに負つて、裏の山畑をぶら〳〵しながら、道端の花を摘んでやつたりしてゐた。この町でも場末の汚い小家が、二三軒飛離れたところにあつた。朝晩は東京の四月頃の陽氣であつたが、晝になる、と、急に眞夏のやうな強い太陽の光熱が目や皮膚に沁通つて、仄かな草いきれが、鼻に通ふのであつた。一雨ごとに櫟の若葉の緑が濃くなつて行つた。

「東京から御父さんが見えたから、こゝへ連れて來たよ。」

主人は或百姓家の庭の、藤棚の蔭にある溝池の縁にしやがんで、子供に緋鯉を見せてゐるお島の姿を見つけると、傍へ寄つて來て私語いた。

「へえ……來ましたか。」

お島は息のつまるやうな聲を出して叫んだなり、男の顏をしげ〳〵眺めてゐた。

「いつ來ました？」

「十一時頃だつたらう。着くと直、連れて歸ると言ふから、お島さんが此方へ來てゐる話をすると、それぢや私が一人で行つて連れて來るといつて、急立つもんだからな。」

「ふむ、ふむ。」とお島は鼻頭の汗もふかずに聞いてゐたが、「氣のはやい御父さんですからね。」と溜息をついた。

「それで何うしました。」
「今あすこで一服すつて待つてゐるだが、顔さへ見れば直に引立てて連れて行かうといふ見脈だで……。」
「ふむ。」と、お島は蒼くなつて、ぶる／＼するやうな聲を出した。
「御父さんにこゝで逢ふのは厭だな。」お島は手を堅く組んで首を傾げてゐた。「どうかして逢はないで還す工夫はないでせうか。」
「でも、こゝに居ることを打明けてしまつたからね。」
「ふむ……拙かつたね。」
「とにかく些と逢つた方がいゝぜ。その上で、また善く相談してみたら何うだ。」
「ふむ――。」と、お島はやつぱり凄い顔をして、考へこんでゐた。「東京を出るとき、私は一生親の厄介にはなりませんと、立派に言斷つて來ましたからね。今逢ふのは實に辛い！」
お島の目には、ほろ／＼涙が流れだして來た。
「爲方がない、思斷つて逢ひませう。」暫くしてからお島は言出した。「逢つたら何うにかなるでせう。」
二人は藤棚の蔭を離れて、畔道へ出て來た。

五十八

父親は奥へも通らず、大きい柱時計や體量器の据ゑつけてある上口のところに、行儀よく居住つて、お島の小さい時分から覺えてゐる持古しの火の用心で莨をふかしてゐたが、お島や濱屋にしつこく言はれて、漸と勝手元に近い下座敷の一つへ通つた。
「よく入らつしやいましたね。」お島は父親の顔を見た時から、胸が一杯になつて來たが、空々しいやうな辭をかけて、茶をいれたり菓子を持つて來たりして、何か言出しさうにしてゐる父親の傍に、ぢつと坐つてなぞゐなかつた。
「私のことなら、そんな心配なんかして、わざわざ來て下さらなくとも可かつたのに。でも折角來た序ですからお湯にでも入つて、ゆつくり遊んで行つたら可いでせう。」
「なに然うもしてゐられねえ。日歸りで歸るつもりでやつて來たんだから。」父親も落着のない顔をして、腰にさした莨入をまた取出した。
「お前の體が、たとひ何ういふことになつてゐようとも、恁うやつて己が來た以上は、引張つて行かなくちやならない。」
「何ういふ風にもなつてやしませんよ。」と、お島は笑つてゐたが、父親の口吻によると、彼はお島の最初の手紙によつて、てつきり兄のために體を賣られて、こゝに沈んでゐるものと思つてゐた。そして東京では母親も姉もそれを信じてゐるらしかつた。
それで父親は今日のうちにも話をつけて、拂ふべき借金は綺麗に拂つて、連れて歸らうと主張するのであつた。
お島はその問題には、可成觸れないやうにして、父親の酒の酌をしたり、夕飯の給仕をしたりすると、奥の部屋に寢轉んでゐる濱屋の主人のところへ來て、自分の身のうへについて、密談に時を移してゐたが、お島を返すとも返さぬとも決しかねて、夜になつてしまつた。
「一人の妾なぞ私死んだつて出來やしない。そんな事を聽かしたら、あの堅氣な人が何と言つて怒るかしれやしない。」
濱屋が自分で、直に父親に話をして、當分のうちどこかに匿つておかうと言出したときに、お島はそれを拒んで言つた。然うすれば、精米所の主人に、内密で金を出してもらつて、T―市の方で、何かお島にできるやうな商賣をさせようと云ふのが、濱屋の考へつめた果の言條であつた。春の頃から、東京から取寄せた藥が

利きだしたといつて、此頃いくらか好い方へ向いて來たところから、近いうちに戻つて來ることになつてゐる嫁のことをも、彼は考へない譯には行かなかつた。そして其が一層男の方へお島の心を粘りつかせていつた。

　奥まつた小さい部屋から、二人の話聲が、夜更までぼそ〱聞えてゐた。

　その夜なかから降出した雨が、曉になるとからりと霽れあがつた。そしてお島が起出した頃には、父親はもうきちんと着物を着て、今にも立ちさうな顔をして、莨をふかしてゐた。

五十九

　お島が腫ればつたいやうな目をして、父親の朝飯の給仕に坐つたのは、大分たつてからであつた。明放した部屋には、朝間の涼い風が吹通つて、田圃の方から、ころ〱ころ〱と啼く蛙の聲が聞えてゐた。

「今日は雨ですよ。迚も歸れやしませんよ。」お島は椽の端へ出て、水分の多い曇空を眺めながら呟いた。

「さあ、何ういふ風になつてゐるんですかね、私には薩張わからないんですよ。多分お金なんか可いんでせう。」

こゝに五十兩もつて來てゐるから、それで大概借金の方は片着く意だからといつて、父親が胴卷から金を出したとき、お島は空恍けた顔をして言つた。

「それぢや御父さん恁うしませう。私も長いあひだ世話になつた家ですから、是から忙しくならうと云ふところを見込んで、歸つて行くのも義理が惡いから、六月一杯だけゐて、遲くともお盆には歸りませう。」

　お島はさうも言つて、父親を宥め歸さうと努めたが、こんな處に長くゐては、どうせ碌なことにはならないからと言張つて、やつぱり肯かなかつた。田舍へ流れていつてゐる娘について、近所で立つてゐる色々の風聞が、父親の耳へも傳つてゐた。

「立つにしたつて、濱屋へもちよつと寄らなくちやならないし、精米所だつて顔を出さないで行くわけにいきやしませんよ。私だつて髪の一つも結はなくちや……。」お島は腹立しさうに終にそこを立つていつたが、父親も到頭職人らしい若い時分の氣象を出して、娘の體を牽摺けておく、風の惡い田舍の奴等が無法だといつて怒り出した。

「お前と己とぢや話の片がつかねえ。誰でもいゝから、話のわかるものを此處へ呼んできねえ。」

　父親は高い聲をして言出した。

　廊下をうろ〱してゐたお島の姿が、やがて浴場の方に現はれた。

　お島は目に一杯涙をためて、鏡の前に立つてゐたが、硝子戸をすかしてみると、今起きて出たばかりの男の白い顔が、湯氣のもや〱した廣い浴槽のなかに見られた。

「弱つちまふね、御父さんの頑固にも……。」お島はそこへ顔を出して、溜息を吐いた。

「何んといつたつて駄目だもの。」

　何うしようと云ふ話もきまらずに、そこに二人は暫く立話をしてゐたが、するうち時が段々移つていつた。

　濱屋が湯からあがつた時分には、お島の姿はもう家のどの部屋にも見られなかつた。

　町を離れて、山の方へお島は一人でふら〱登つて行つた。山はどこも彼處も、噎せかへるやうな若葉が鬱蒼としてゐた。痩せた菜花の咲いてゐるところがあつたり、赭土の多い禿山の蔭に、瀬戸物を燒いてゐる竈の煙が、ほの〲と立昇つてゐたりした。お島は靜かな其の山のなかへ、ぐん〱入つていつた。誰の目にも觸

れたくはなかつた。どこか人跡のたえたところで、思ふさま泣いてみたいと思つた。

六十

山の方へ入つて行くお島の姿を見たといふ人のあるのを頼りに、方々捜しあるいた末に、或松山へ登つて行つた濱屋と父親との目に、獵師に追詰められた兎か何ぞのやうに、山裾の谿川の岸の草原に跪坐んでゐる、彼女の姿の發見されたのは、それから大分たつてからであつた。

赤い山躑躅などの咲いた、その崖の下には、迅い水の瀬が、ごろ／＼轉つてゐる石や岩に碎けて、水沫を散らしながら流れてゐた。危い丸木橋が雨側の巖草に架渡されてあつた。お島はどこか自分の死を想像させるやうな場所を覗いてみたいやうな、惡戯な誘惑に唆られて、そこへ降りて行つたのであつたが、流れの音や、四下の靜けさが、次第に掻しいやうな彼女の心をなだめて行つた。

人の聲がしたので、跳ねあがるやうに身を起したお島の目に、松の枝葉を分けながら、山を降りて來る二人の姿がふと映つた。お島は可恥しさに體が慄然と立竦むやうであつた。

お島は二人の間に挾まれて、やがて細い崖道を降りて行つたが、目が時々涙に曇つて、足下が見えなくなつた。

父親に引立てられて、お島が俥に乗つて、山間のこの温泉場を離れたのは、もう十時頃であつた。石高な道に車輪の音が高く響いて、長いあひだ耳についてゐた町の流れが、高原の平地へ出て來るにつれて、次第に遠ざかつて行つた。

夏時に氾濫する水の迹の凄いやうな河原を渉ると、しばらく忘れてゐたS―町のさまが、直にお島の目に入つて來た。見覺えのある場末の鍛冶屋や桶屋が、二三月前の自分の生活を懷しく想出させた。軒の低い家のなかには、そつちこつちに白い繭の盛られてあるのが目についた。諸方から入込んでゐる繭買の姿が、滅切夏めいて來た町に、景氣をつけてゐた。

お島は濱屋で父親に晝飯の給仕をすると、碌碌男と口を利くひまもなく、直に停車場の方へ向つたが、主人も裏通の方から見送りに來た。

「歸つてみて、もし行くところがなくて困るやうな時には、いつでも遣つて來るさ。」濱屋は切符をわたす時、お島に私語いた。

停車場では、鞄や風呂敷包をさげた繭商人の姿が多く目に立つた。汽車に乗つてからも、それらの人の繭や生絲の話で、持切りであつた。窓から頭を出してゐるお島の曇つた目に、鳥打をかぶつて畔傍に、町の裏通へ入つて行く濱屋の姿が、いつまでも見えた。汽車の進行につれて、S―町や、山の温泉場の姿が、段々彼女の頭腦に遠のいて行つた。深い杉木立や、暗い森林が目の前に擴がつて來た。ゆさ／＼と風にゆられる若葉が、蒼い影をお島の顏に投げた。

自分を容める好い材料を得たかのやうに、歸りを待ちまうけてゐる母親の顏が、想出されて來た。お島はそれを避けるやうな、自分の落つき場所を考へて見たりした。

六十一

汽車が武藏の平野へ降りてくるにつれて、しつとりした空氣や、廣々と爽かな田畠や矮林が、水から離れてゐた魚族の水に返されたやうな安易を感じさせたが、東京が近づくにつれて、汽車の駐まる驛々に、お島は自分の生命を縮められるやうな苦しさを感じた。

「このまゝ自分の生家へも、姉の家へも寄りついて行きたくはない。」お島は獨りでそれを考へてゐた。

「何等かの運を自分の手で切拓くまでは、植源や鶴さんや、以前の都ての知合にも顔を合したくない」と、お島はさうも思ひつめた。

王子の停車場へついたのは、もう晩方であつたが、お島は引摺られて行くやうな暗い心持で、やつぱり父親の迹へついて行つた。靜かな町にはもう明がついて、山國に居なれた彼女の目には、何を見ても潤ひと懐しみとがあるやうに感ぜられた。

父親が、温泉場で目つけて根ぐるみ新聞に包んで持つて來た石楠花や、土地名物の羊羹などを提げて、家へ入つて行つたとき、姉も自分の歸りを待ちうけてでもゐたやうに、母親と一緒に茶の室にゐた。もう三つになつたその子供が歩き出してゐるのが、お島の目についた。

「へえ、暫く見ないまにもうこんなになつたの。」お島は無造作に挨拶をすますと、自分の傷ついた心の寄りつき場をでも見つけたやうに、いきなりその子供を膝に抱取つた。

「寅坊、このをばちやんを覺えてゐるかい。お前を可愛がつたをばちやんだよ。」

羊羹の折を持たされた子供は、直にお島に懐いた。

「何て色が黒くなつたんだらう。」姉はお島の山やけのした顔を眺めながら、可笑しさうに言つた。お島の様子の田舍じみて來たことが、鈍い姉にも住んでゐた町のさまを想像させずにはおかなかつた。

「一口に田舍々々と非すけれど、それあ好いところだよ。」お島はわざと元氣らしい調子で言出した。

「だつて山のなかで、爲方のないところだといふぢやないか。」

「私もさう思つて行つたんだけれど、住んでみると大違ひさ。温泉もあるし、町は綺麗だし、人間は親切だし、王子あたりぢや迚も見られないやうな料理屋もあれば、藝者屋もありますよ。それこそ一度姉さんたちをつれていつて見せたいやうだよ。」

「島ちやんは、あつちで、何かできたつていふぢやないか。だから其土地が好くなつたのさ。」

「譃ですよ。」お島は鼻で笑つて、「こつちぢや私のことを何とこそ言つてるか知れたもんぢやありやしない。困つて酌婦でもしてゐると思つてたでせう、これでも町ぢや私も信用があつたからね、土地に居つくつもりなら、商賣の金主をしてくれる人もあつたのさ。」

「へえ、そんな人がついたの。」

六十二

山の夢に浸つてゐるやうなお島は、直に邪慳な母親のために刺戟されずにはゐなかつた。以前から善く聴かされてゐる「業突張」とか「穀潰し」とかいふやうな言葉が、彼女のたゞれた心の創のうへに、また新しい痛みを與へた。

お島が下谷の方に獨身で暮してゐる、父親の從姉にあたる伯母のところに、暫く體をあづけることになつたのは、その夏も、もう盆過であつた。素は或由緒のある劍客の思ひものであつた其の伯母は、時代がかはつてから、さる宮家の御者などに取立てられてゐた良人が、悪い酒癖のために職を罷められて間もなく死んでしまつた後は、一人の娘とともに、少し許り習ひこんであつた三味線を、近所の娘達に教へなどして暮してゐたが、今は商賣をしてゐる娘の時々の仕送りと、人の賃仕事などで、漸う生きてる身の上であつた。

昔を憶ひだすごとに、時々口にすることのある酒が、萎えつかれた頭腦にまはつてくると、爪彈で端唄の口吟みなどする三味線が、火鉢の側の壁にまだ懸つてゐた。良人であつた其の劍客の肖像も、煤けたまゝ、壁のうへに揭つてゐる

た。

　お島は養家を出てから、一二度こゝへも顏出しをしたことがあつたが、年を老つても身だしなみを忘れぬ伯母の容態などが、荒く育つてきた彼女には厭味に思はれた。色の白さうな、口髭や眉や額の生際のくつきりと美しい其の良人の禮服姿で撮つた肖像が、その家には不似合らしくも思へた。

「伯母さんの旦那は、こんなお上品な人だつたんですかね。」

　お島は不思議さうに其前へ立つて笑つた。其良人が、若いをりには、或大名のお抱へであつたりした因緣から、櫻田の不意の出來事當時の模樣を、この伯母さんは、お島に話して聞かせたりした。子供をつれて淺草へ遊びに行つたとき、子供が荷物に突當つたところから、天秤棒を振りあげて向つて來る甘酒屋を、群衆の前に取つて投げて、へたばらしたといふ話なども、お島には芝居の舞臺か何ぞのやうに、其の時のさまを想像させるに過ぎなかつた。

「この伯母さんも、旦那のことが忘れられないでゐるんだ。」

　伯母と一緒に暮すことになつてから、お島は段々彼女の心持に、同感できるやうな氣がして來た。

「やつぱり男で苦勞した若い時代が忘られないでゐるんだ。」

　お島はさうも思つた。

　そんなに好いものも縫へなかつた伯母の身のまはりには、それでも仕事が絶えなかつた。中には藝者屋のものらしい派手なものもあつた。

　その手助に坐つてゐるお島は、仕事がいけぞんざいだと云つて、何うかすると物差で伯母に手を打たれたりした。

　重に氣のはらない、急ぎの仕事にお島は重寶がられた。

六十三

　客から註文のセルやネルの單衣物の仕立などを、ちよい／＼頼みに來て、伯母と親しくしてゐたところから、時にはお島の坐つてゐる裁物板の側へも來て、寢そべつて戲談を言合つたりしてゐた小野田と云ふ若い裁縫師と一緒に、お島が初めて自分自身の心と力を打籠めて働けるやうな仕事に取着かうと思ひ立つたのは、その頃始まつた外國との戰爭が、忙しい其等の人々の手に、色々の仕事を供給してゐる最中であつた。

　自分の仕事に思ふさま働いてみたい……奴隷のやうな是迄の境界に、盲動と屈從とを强ひられて來た彼女の心に、然うした欲望の目覺めて來たのは、一度山から出て來て、お島をたづねてくれた濱屋の主人と別れた頃からであつた。

　東京へ歸つてからのお島から、時々葉書などを受取つてゐた濱屋の主人は、菊の花の咲く時分に、ふいと出て來てお島のところを尋ねあてて來たのであつたが、二日三日逗留してゐる間に、お島は淺草や芝居や寄席へ一緒に遊びに行つたり、上野近くに取つてゐた其の宿へ寄つて見たりした。

　濱屋は近頃、以前のやうに帳場に坐つてばかりも居られなかつた。そして鑛山の賣買などに手を出してゐたところから、近まはりを其方こつち旅をしたりして暮してゐたが、東京へ來たのも、そんな仕事の用事であつた。

「氣を長く待つてゐておくれ。そのうち一つ當れば、お島さんだつて其まゝにしておきやしない。」

　彼は今でもお島をT―市の方へつれていつて、そこで何等かの水商賣をさせて、圍つておく氣でゐるらしかつた。

「今更あの山のなかへなぞ行つて暮せるもんですか。お妾さんなんか厭なこつた。」お島はさう言つて笑つて別れたのであつた。

男は少しばかりの小遣をくれて、停車場まで送つてくれた女に、冬にはまた出て來る機會のあることを約束して、立つていつた。

東京で思ひがけなく男に逢へたお島は、二三日の放肆な遊びに疲れた頭腦に、濱屋のことと、若い裁縫師のことを、一緒に考へながら、ぼんやり停車場を出て來た。

六十四

「何うです、こんな仕事を少し助けてくれられないでせうか。」と、小野田がさう言つて、持つて來てくれた仕事は、是から寒さに向つて來る戰地の軍隊に着せるやうな物ばかりであつた。

それ迄仕立物ばかり拵へてゐる或工場に働いてゐた小野田は、そんな仕事が仲間の手に溢れるやうになつてから、それを請負ふことになつた工場の註文を自分にも仕上げ、方々人にも頼んであるいた。

「仕事はいくらでも出ます。引受けきれないほどあります。」

小野田はお島がやつてみることになつた、毛布の方の仕事を背負ひこんで來ると、さう言つて其の遣方を彼女に教へて行つた。

毛布といふのは兵士が頭から着る褐色の防寒外套であつた。女の手に出來るやうな其の纏めに最初働いてゐたお島は、縫ひあがつた毛布にホックや釦をつけたり、穴かゞりをしたりすることに敏捷な指頭を慣した。「これのまとめが一つで十三錢づつです。」小野田がさう云つて配がつていつた仕事を、お島は普通の女の四倍も五倍もの十四五枚を一日に仕上げた。

手ばしこく針を動かしてゐるお島の傍へ來て、忙しいなかを出來上りの納めものを取りに來た小野田は、こくり〳〵と居睡をしてゐた。

平氣で日に二圓ばかりの働きをするお島の帶のあひだの財布のなかには、いつも自分の指頭から産出した金がざく〳〵してゐた。

「こんな女を情婦にもつてゐれば、小遣に不自由するやうなことはありませんな。」

小野田は眠からさめると、せつせと穴かゞりをやつてゐる手の働きを眺めながら、さう言つてお島の働きぶりに舌を捲いてゐた。

「何うです、私を情婦にもつてみちや。」お島は笑ひながら言つた。

「結構ですな。」

小野田はさう言ひながら、品物を受取つて、自轉車で歸つていつた。

ホックづけや穴かゞりが、お島には慣れてくると段々間弛つこくて爲方がなくなつて來た。年の暮には、お島はそれらの仕事を請負つてゐる小野田の傭はれ先の工場で、ミシン臺に坐ることを覺えてゐた。むづかしい將校服などにも、綺麗にミシンをかけることが出來てきた。

「譯ないや、こんなもの。男は意氣地がないね。」

お島はのろ〳〵してゐる、仲間を笑つた。

車につんで、溜池の方にある被服廠の下請をしてゐる役所へ搬びこまれて行く、それらの納めものが、氣むづかしい役員等のために非をつけられて、素直に納まらないやうなことがざらにあつた。

「こんなものが納まらなくちや爲方がないぢやありませんか。」

男達に代つて、それらの納めものを持つて行くことになつたとき、お島はさう言つて、ミシンが利いてゐないとか、服地が粗惡だとか、何だ彼だといつて、品物を突返さうとする役員をよく丸め込んだ。

お島のおしやべりで、品物が何の苦もなく通過した。

六十五

お島が自分だけで、何うかして此の商賣に取着いて行きたいと云ふ望みを抱きはじめたのは、彼女が一日工場でミシンや裁板の前などに坐つて、一圓か二圓の仕事に働くよりも、註文取や得意まはりに、頭腦を働かす方に、より以上の興味を感じだしてからであつた。

「被服も隨分扱つたが、女の洋服屋つてのは、ついぞ見たことがないね。」

ちよい／＼納品を持つて行くうちに、直に昵近になつた被服廠の役員たちが、さう云つて、てきぱきした彼女の商ひぶりを讃めてくれた辭が、自分に然うした才能のある事をお島に考へさせた。

「洋服屋なら女の私にだつてやれさうだね。」

仕事の途絶えたをり／＼に、家の方にゐるお島のところへ遊びに來る小野田に、お島がその事を言出したのは、今迄その働きぶりに目を注いでゐた小野田に取つては、自分の手で彼女を物にしてみようと云ふ彼の企てが、巧く壺にはまつて來たやうなものであつた。

「遣つてやれんこともないね。」感じが鈍いのか、腰が太いのか解らないやうな小野田は、にやにやしながら呟いた。名古屋の方で、二十歳頃まで年季を入れてゐた此男は、もう三十に近い年輩であつた。上向になつた大きな鼻頭と、出張つた顴骨とが、彼の顔に滑稽の相を與へてゐたが、脊が高いのと髪の毛が美しいのとで、洋服を着たときの彼ののつしりした厳い姿が、何うかするとお島に頼しいやうな心を抱かしめた。

「私のこれまで出逢つた何の男よりも、お前さんは男振が惡いよ。」お島はのつそりした無口の彼を前において、時々遠慮のない口を利いた。

「むゝ。」小野田はたゞ笑つてゐる限であつた。

「だけどお前さんは洋服屋さんのやうぢやない。よくそんな風をしたお役人があるぢやないか。」

しなくなした前垂がけの鶴さんや、蠟細工のやうに、唯美しいだけの濱屋の若主人に物足りなかつたお島の心が、小野田のさうした風采に段々惹着けられて行つた。

「工場から引つこぬいて、これを自分の手で男にしてみよう。」

小野田も何ぞつてやうな[illegible]、いつ話はずむと云ふこともない小野田に親しくなるにつれて、不思議な意地と愛着とがお島に起つて來た。

「洋服屋も好い商賣だが、やつぱり資本がなくちや駄目だよ。金の要る商賣だからね。」小野田はお島に話した。

「資本があつてする商賣なら、何だつて出來るさ。だけれど、些とした店で、どのくらゐかゝるだらう。」

「店によりけりさ。表通へでも出ようと云ふには、生やさしい金ぢや迚も駄目だ。」

六十六

芝の方で、適當な或小さい家が見つかつて、そこで小野田と二人で、お島が此こそと見込んだ商賣に取着きはじめたのは、十二月も餘程押迫つて來てからであつた。

然うなるまでに、お島は幾度生家の方へ資金の融通を頼みに行つたか知れなかつた。小さいところから仕上げて大きくなつて行つた、大店の成功談などに刺戟されると、彼女は何うでも斯うでもそれに取着かなくてはならないやうに心が焦だつて來た。町を通るごとに、何れも此

も相當に行き立つてゐるらしい大きい小さいそれらの店が、お島の胸をむづ／＼させた。見たところ派手でハイカラで儲つてゐるらしいその商賣が、一番自分の氣分に適つてゐるやうに思へた。

「田舎の方に、こんな家があるんですがね。東京附には持つてこいの家だがね。」

お島はもと郵便局であつた、間口二間に、奥行三間ほどの貸家を目つけてくると、早速小野田に逢つて其の話をした。金をかけて少しばかり手入をすれば、物に成りさうに思へた。持主が、隣の酒屋だと云ふその家が、小野田にも望みがありさうに思へた。

「あすこなら、物の百圓とかけないで、手頃な店が出來さうだね。それに家賃は安いし、大屋の電話は借りられるし。」

二三度足を運んでも、母親が頑張つて金を出してくれない生家から、鶴さんと別れたとき搬びこんで來たまゝになつてゐる自分の簞笥や鏡臺や着物などを、漸とのことで持出して來たとき、お島は小野田や自分の手で、着物の目星いものをそつち此方賣つてあるいた。

もと大政の兄弟分であつた大工が愛宕下の方にゐることを思ひだして、それに店の手入を頼んでから、郵便局に使はれてゐた古い其家の店が、急に土間に床が拵へられたり、天井に紙が張られたり、棚が作られたりした。一脚五十錢ばかりの安椅子が、どこかの古道具屋から持運ばれたりした。

雨降がつゞいて、木片や鉋屑の散らかつた土間のじめ／＼してゐるやうなその店へ、二人は移りこんで行つた。

陳列棚などに思はぬ金がかゝつて、店が全く洋服屋の體裁を具へるやうになるまでに、晝間お島の帶のあひだに仕舞はれてある財布が、二度も三度も空になつた。大工が道具箱を隅の方に寄せて、歸つて行つてから、お島はまたあわたゞしく簞笥の抽斗から取出した着物の包をかかへて、裏から私と出て行つた。

外はもう年の暮の景色であつた。赤い旗や紅提灯に景氣をつけはじめた忙しい町のなかを、お島は込合ふ電車に乗つて、伯母の近所の質屋の方へと急いだ。

六十七

ミシンや裁臺などの据ゑつけに、それでも何足りない分を、お島の顔で漸と工面ができたところで、二人の渡り職人と小僧とを傭ひ入れると、直に小野田が或懇意な下請からもらつて來た仕事に働きはじめた。

「大晦日にはどんな事があつてもお返しするんですがね。仕事は山ほどあつて、面白いほど儲かるんですから。」

お島はさう言つてそのミシンや裁板を買入れるために、小野田の差金で伯母の關係から知合ひになつた或衣裳持の女から、品物で借りて漸と調へることのできた際どい金を、彼女は途中で目についた柱時計や、掛額などがほしくなると、ふと手を着けたりした。

「みんな店のためです。商賣の資本になるんです。」

お島は小野田に文句を言はれると、悧巧ぶつて應へた。

まだ自分の店に坐つた經驗のない小野田の目にも、さうして出來あがつた店のさまが物珍しく眺められた。

「うんと働いておくれ。今にお金ができると、お前さんたちだつて、私が放抛つておきやしないから。」お島はさう言つて、のろ／＼してゐる職人に聲をかけたが、夜おそくまで廻つてゐるミシンの響や、アイロンの音が、自分の腕一つで動いてゐると思ふと、お島は限ない歡喜と

矜とを感じずにはゐられなかつた。
　劇しい仕事のなかに、朝から薄ら眠いやうな顔をしてゐる亂次のない小野田の姿が、時々お島の目についた。
「ちッ、厭になつちまふね。」
　お島は針の手を休めて、裁板の前にうと／＼と居睡をはじめてゐる、彼の顔を眺めて呟いた。
「どうしてでせう。こんな病氣があるんだらうか。」
　職人がくす／＼笑出した。
「そんなこつて善く年季が勤まつたと思ふね。」
「莫迦いへ。」小野田は性がついて來ると、また手を働かしはじめた。
　色々なものの支拂のたまつてゐる、大晦日が直に來た。品物でかりた知合の借金に店賃、ミシンの月賦や賃の利子もあつた。拂ひのこしてあつた大工の賃銀のことも考へなければならなかつた。
「こんなことぢや迚も追着きこはありやしない。」お島は暮に受取るべき賃銀を、胸算用で見積つてみたとき、さう言つて火鉢の前に腕をくんで考へこんだ。
「もつと／＼稼がなくちや。」お島はさうも言つて氣をあせつた。

六十八

　大晦日が來るまでに、二時になつても三時になつても、皆が疲れた手を休めないやうな日が、三日も四日も續いた。
　夜が更けるにつれて、表通の賣出しの樂隊の囃が、途絶えてはまた氣懈さうに聞えて來た。門飾の笹竹が、がさ／＼と憊れた神經に刺るやうな音を立て、風の向で時々耳に立つ遠くの町の群衆の跫音が、潮でも寄せて來るやうに思ひ做された。
　職人達の口に、嗄れ疲れた話聲が途絶えると、寢不足のついて廻つてゐるやうなお島の重い頭腦が、時々ふら／＼して來たりした。がたんと言ふアイロンの粗雜な響が、絶えず裁板のうへに落ちた。ミシンがまた齒の浮くやうな騷々しさで運轉しはじめた。
「この人到頭寢てしまつたよ。」
　寒さ凌ぎに今までちび／＼飲んでゐた小野田が、いつの間にかそこに體を縮めて、ごろ寢をしはじめてゐた。
「今日は幾日だと思つてるのだい。」
「上さんは感心に目の堅い方ですね。」職人がそれに續いてまた口を利いた。
「私は二日や三日寢ないだつて平氣なもんさ。」
　お島は元氣らしく應へた。
　晦日の夜おそく、仕上げただけの物を、小僧にも背負はせ、自分にも背負つて、勘定を受取つに來たところで、漸と大家や外の小口を三四軒片着けたり、職人の手間賃を内金に半分ほども渡したりすると、殘りは何程もなかつた。
「宅ぢやかういふ騷ぎなんです。」
　品物を借りてある女が、樣子を見に來たとき、お島は振顧きもしないで言つた。
　店には仕事が散らかり放題に散らかつてゐた。熨斗餅が隅の方におかれたり、牛蒡締や輪飾が束ねられてあつたりした。
「貴女の方は大口だから、今夜は勘辨してもらひませうよ。」
　お島はわざと嵩にかゝるやうな調子で言つた。
　小野田に嫁の世話を頼まれて、伯母がこれを心がけてゐた其の女は、言ひにくさうにして、職人の働きぶりに目を注いでゐた。女は居辛かつた田舍の嫁入先を逃げて來て、東京で間借をして暮してゐた。着替や頭髮の物など一緒に持つてゐた幾許かの金も、二三月の東

京見物や月々の生活費に使つてしまつてから、手が利くところから仕立物などをして、小遣を稼いでゐた。二三度逢ふうち直にお島はこの女を古い友達のやうにして了つた。

「まあ宅へ來て年越でもなさいよ。」お島は女に言つた。

女は悄れたやうな顏をして、火鉢の傍で小野田と差向ひに坐つてゐたが、間もなく默つて歸つて行つた。

「いくらお辭儀が嫌ひだつて、あんなこと言つちや可けねえ。」後で小野田がはら／＼したやうに言出した。

「あゝでも言つて逐攘はなくちや、遣切れやしないぢやないか。」お島は顫へるやうな聲で言つた。「不人情で言ふんぢやないんだよ。今に思返しをする時もあるだらうと思ふからさ。」

六十九

同じやうな仕事の續いて出てゐた三月ばかりは、それでもまだ何うか恁うかやつて行けたが、月が四月に入つて、ミシンの音が途絶えがちになつてしまつてからは、お島が取りかゝつた自分の仕事の興味が、段々裏切られて來た。職人の手間を差引くと、幾許も殘らないやうな苦しい三十日が、二月も三月も續いた。屋賃が滯つたり、順繰に時々で借りた小さい借金が殖えて行つたりした。

「これぢや全然私達が、職人のために働いてやつてゐるやうなものです。」お島は遣切のつかなくなつて來た生活の壓迫を感じて來ると、さう言つて小野田を責めた。冬中忙しかつた裁板の上が、綺麗に掃除をされて、職人の手を減した店のなかが、何うかすると吹拂つたやうに寂しかつた。

近頃電話を借りに行くこともなくなつた大屋の店には、酒の空瓶にもう八重櫻が生かつてゐるやうな時候であつた。そこの帳場に坐つてゐる主人から、お島たちは、二度も三度も立退の請求を受けた。

「洋服屋つて、皆こんなものなの。私は大變な見込ちがひをして了つた。」

終に工賃の滯つてゐるために、身動きもできなくなつて來た職人と、店頭へ將棋盤などを持出してゐた小野田の、それにも氣乘がしなくなつて來ると、ぽかんとして女の話などをしてゐる呑氣さうな顏が、間がぬけたやうに見えたりして、一人で考へ込んでゐたお島はその傍へ行つて、やきもきする自分を強ひて抑へるやうにして笑ひかけた。

「何に、然うでもないよ。」

小野田は顏を顰めながら、仕事道具の饅頭を枕に寢そべつて、氣の長さうな應答をしてゐた。

お島はのろくさい其の居眠姿が癪にさはつて來ると、そこにあつた大きな型定規のやうな木片を取つて、縮毛のいぢ／＼した小野田の頭顱へ投げつけないではゐられなかつた。

「このろま野郎！」

お島は血走つたやうな目一杯に、涙をためて、肉厚な自分の頰桁を、厚い平手で打返さないではおかない小野田に噛つてかゝつた。猛烈な立ちまはりが、二人のあひだに始まつた。

殺しても飽足りないやうな、暴惡な憎惡の念が、家を飛出して行く彼女の頭に湧返つてゐた。

暫くすると、例の女が間借をしてゐる二階へ、お島は眞蒼になつて上つて行つた。

「あの男と一緒になつたのが、私の間違ひです。私の見損ひです。」お島は泣きながら話した。

「どうかして一人前の人間にしてやらうと思つて、方々駈けずりまはつて、金をこしらへて店

を持つたり何かしたのか、私の見込ちがひだつたのです。」

お島は口惜しさうにぼろぼろ涙を流しながら言つた。

「どうしても私は別れます。あの男と一緒にゐたのでは、私の女が立ちません。」

荒い獸欲が、いつまで經つても澄まなかつた。

七十

「何うなすつたね。」

脇目もふらずに、一日仕事にばかり坐つてゐる沈みがちな其女は、惘れたやうな顔をして、お島が少し落着きかけて來たとき、言出した。

「貴女はよく稼ぐといふぢやないかね。何うしてさう困るね。」

「私がいくら稼いだつて駄目です。私はこれまで怠けるなどと云はれたことのない女です。」

お島は涙を拭きながら言つた。

「洋服屋といふものは、大變儲かる商賣だといふことだけれど……二人で稼いだら樂にやつて行けさうなものぢやないかね。」女はやつぱり仕事から全く心を離さずに笑つてゐた。

「それが駄目なんです。あの男に惡い病氣があるんです。私は行らうと思つたら、どんな事をあつても遣通さうつて云ふ氣象ですから、のろのろしてゐる名古屋ものなぞと、氣のあふ筈がないんです。」

「そんな人と何うして一緒になつたね。」女はねちねちした調子で言つた

お島は「ふむ。」と笑つて、泣顔を背向けたが、この女には、自分の氣分がわかりさうにも思へなかつた。

「でも東京といふところは、氣樂な處ぢやないかね。私等姑さんと氣が合はなんだで、悠うして別れて東京へ出て來たけれど、隨分辛い辛抱もして來ましたよ。今ぢや獨身の方が氣樂で大變好いわね。御亭主なんぞ一生持つまいと思つてゐるわね。」

「何を言つてゐるんだ。」と云ふやうな顔をして、お島は碌々それには耳も假さなかつた。そしてやつぱり自分一人のことに思耽つてゐた。時々胸からせぐりあげて來る涙を、强ひて壓しつけようとしたが、どん底から衝動げて來るやうな悲痛な念が、留どもなく波だつて來て爲方がなかつた。どこへ廻つても、誤り虐げられて來たやうな自分が、可憐しくて情なかつた。

小野田がのそりと入つて來たときも、靜かに針を動かしてゐる女の傍に、お島は坐つてゐた。どんよりした目には、これも泣いたやうな涙がまだたまつてゐた。

「何だ、そんな顔をして。だから己が言ふぢやないか、どんな商賣だつて、一年や二年で物になる氣遣はないんだから、家のことはかまはないで、お前はお前で働けばいいと。」

小野田はそこへ胡坐をくむと、袂から莨を出してふかしはじめた。

「被服の下請なんか、割があはないからもう斷然止めだ。そして明朝から註文取におあるきなさい。」

お島は「ふむ。」と鼻であしらつてゐたが、女の註文取といふ小野田の思ひつきに、心が動かずにはゐなかつた。

「そしてお前には外で活動してもらつて、己は内をやる。さうしたら或は成立つて行くかも知れない。」

「こんな身裝で、外へなんか出られるもんか。」

お島ははねつけてゐたが、誰もしたことのない其仕事が、何よりも先づ自分には愉快さうに思へた。

歸るときには、お島のいらいらした感情が、悉皆和められてゐた。そして明日から又初めて

の仕事に働くと云ふことが、何かなし彼女の矜を唆つた。

「かうしては居られない。」

彼女の心にはまた新しい彈力が與へられた。

七十一

晩春から夏へかけて、それでもお島が二着三着と受けて來た仕事に、多少の景氣を添へてゐた其店も、七、八、九の三月にわたつては、金にもならない直しものが偶に出るくらゐで、ミシンの廻轉も幾どばつたり止つてしまつた。

最初お島が仲間うちの店から借りて來たサムプルを持つて、註文を引出しに行つたのは、生家の居周にある昔からの知合の家などであつたが、そこに來る仕事は、大抵詰襟の勞働服か、自轉車乗の半窄袴ぐらゐのものであつた。それでもお島の飽きれない調子が、そんな仕事に満足してゐることを許すに十分であつた。

サムプルをさげて出歩いてゐると、男のなかに交つて、地を撰んだり、値段の掛引をしたり、尺を取つたりするあひだ、自分の浸つてゐる此頃の苦しい生活を忘れて浮々した調子で、喋ますお世辭も何の苦もなく言へるのが、儲けたい彼女の興味をそゝつた。

煙突の多い王子のある會社などでは、應接室へ多勢集つて來て、面白さうに彼女の周圍を取捲いたりした。

「もし好かつたら、どし／＼註文を出さう。」

その中の一人はさう言つて、彼女を引立てるやうな意志をさへ漏した。

「さう一時に出ましても、手前どもではまだ資本がございませんから。」

お島はその會社のものを、自分の口一つで一手に引受けることが何の造作もなささうに思へたが、引受けただけの仕事の材料の仕込にすら差閊へてゐることを考へずにはゐられなかつた。

註文が出るに從つて、材料の仕込に醋工面をしても追つかないやうな手づまりが、時々好い顧客を逃したりした。

「えゝ、可ろしうございますとも、外さまではございませんから。」

品物を納めに行つたとき、客から金の猶豫を言出されると、お島は惡い顏もできずに、調子よく引受けたが、それを歸つて、後の仕入の金を待設けてゐる小野田に、報告するのが切なかつた。

それでまた外の顧客先へ廻つて、纏い不安な時間を紛らせてゐなければならなかつた。

「堅い人だがね、何うしてくれなかつたらう。」

お島は小野田の失望したやうな顏を見るのが辛さに、小野田がいつか手本を示したやうに、私と直しものの客の二重廻しなどを風呂敷に裹みはじめた。

「どうせ冬まで寝かしておくものだ。」お島は心の奥底に淀んでゐるやうな不安と悲痛を壓しつけるやうにして言つた。そして此頃昵みになつた家へ、それを抱へこんで行つた。

一日外をあるいてゐるお島は、夜になるとぐつすり寝込んだ。晝間居眠をして居る男の鼾が、時々夢現のやうな彼女の疲れた心に、重苦しい壓迫を感ぜしめた。

七十二

それから其へと、段々展けて行つた遠い顧客先まはりをして、何うかすると、夜遅くまで歸つて來ないお島には堪らないやうな、苦しい遣繰が持切れなくなつて來たとき、小野田の計畫で、到頭そこを引拂つて、月島の方へ移つて行つたのは、其冬の初めであつた。

造作を賣つた三百圓弱の金が、その時小野田の手にあつた。細々した道具の買ひがかりに

支拂をした殘りで、彼はまた新しく仕事に取着く方針を案出して、そこに安い家を見つけて、移つて行つたのであつたが、意のほか金が散らかつたり、品物が掛になつたりして、資本の運轉が止つたところで、去年よりも一層不安な年の暮が、直にまた二人を見舞つて來た。

荒いコートに派手な頸卷をして、毎日のやうに朝夙くから出歩いてゐるお島が、掛先から空手でぼんやりして歸つて來るやうな日が、幾日も續いた。

仕事の途絶えがちな――偶に有つても賃銀のきちん〱と貰へないやうな仕事に働くことに倦んで來た若い職人は、好い口を搜すために、一日店をあけてゐた。

病氣のために、中途戰爭から歸つて來たその職人は、軍隊では上官に可愛がられて上等兵に取立てられてゐたが、久振で內地へ歸つてくると、職人氣質の初めのやうな眞面目さがなくなつて、持つて來た幾許かの金で、茶屋酒を飲んだり、女に耽つたりして、金に詰つて來たために、もと居た店の物をこかしたり、友達の着物を持逃したりして居所がなくなつたところから、小野田の店へ流れて來たのであつたが、其時には悉皆さめてしまつて、舊の小心な臆病ものの自分になり切つてゐた。

來た當座、針を動かしてゐる彼は時々巡査の影を見て怕れをのゝいてゐた。そしてどんな事があつても、一切日の面へ出ることなしに、家にばかり閉籠つてゐた。彼は救はれたお島のために、家のなかではどんな用事にも働いたが、晝間外へ出ることとなると、釦一つ買ひにすら行けなかつた。點呼にも彼は居所を晦ましてゐて出て行く機會を失つた。それが一層彼の心を萎縮させた。

今朝も彼は朝飯のとき、奧での夫婦の爭ひを、蒲團のなかで聽いてゐながら、臆病な神經を戰かせてゐた。最初その爭ひは多分夫婦間獨自の衝突であつたらしく思へたが、此頃の行詰つた生活問題にも繫つてゐた。

「私はかうみえても動物ぢやないんだよ。さうさう外も內も勤めきれんからね。」

お島はこの頃よく口にするお株を、また始めてゐた。

誰があの職人を今迄引留めておいたかと言ふことが、二人の爭ひとなつた。

「お前さんさへ働けば、家なんざ小僧だけで澤山なんだ。」飽きつぽいやうなお島が言出してゐた。どんな事があつても、三人でこの店を守立てゝみせると力んでゐた彼女が、どんな不人情な心を持つてゐるかとさへ疑はれた。

七十三

二日ばかり搜しあるいた日が、どこにも見つからなかつたのに落膽した彼が、日の暮方に疲れて渡場の方から歸つて來たとき、家のなかは其處らぢう水だらけになつてゐた。

以前友達の物を持逃したりなどしたために、警察へ突出さうと迄憤つてゐる男もあつて、急にぐれてしまつた自分の惡い噂が、そつちにも此方にも擴がつてゐることを感づいたほか、何の獲物もなかつた彼は、當分またお島のところに置いてもらふつもりで、寒い渡を渡つて、町へ入つて來たのであつたが、お島の影はどこにも見えずに、主人の小野田が雜巾を持つて、水浸しになつた茶の室の疊をせつせと拭いてゐた。

氣の小さい割には、軀の嚴丈づくりで、厚手に出來た脣や、鼻の大きい銅色の皮膚をした彼は、悄れたやうな顏をして、障子も襖もびしよびしよした茶の室の入口に突立つてゐた。

「何うしたんです、私の留守のまに小火でも出たんですか。」

「何に、彼奴の惡戯だ。爲様のない化物だ。」小野田はさう言つて笑つてゐた。

昨日の晩から頭顱が痛いといつてお島はその日一日充血したやうな目をして寝てゐた。髪が總毛立つたやうになつて、荒い顔の皮膚が巌骨のやうに硬張つてゐた。そして時々うん／＼唸り聲をたてた。

米や醤油を時買しなければならぬやうな日が、三日も四日も二人に續いてゐた。お島は朝から碌々物も食べずに、不思議に今迄助かつてゐた鶴さん以來の蒲團を被つて臥つてゐた。

自身に臺所をしたり、買ひものに出たりしてゐた小野田には、女手のない家か何ぞのやうな勝手元や家のなかの荒れ方が、腹立しく目についたが、それは其として、時々苦しげな呻吟の聞える月經時の女の體が、やつぱり不安であつた。

「腰の骨が碎けて行きさうなの。」

お島は傍へ寄つて來る小野田の手に、絡みつくやうにして、赭く淀み曇んだ目を見据ゑてゐた。

小野田は優しい辭をかけて、腰のあたりを擦つてやつたりした。

「私はどこか體を惡くしてゐるね。今までこんな事はなかつたんだもの。私の體が人と異つてゐるのか知ら、誰でも恁うかしら。」お島は小野田に體を觸らせながら、この頃になつて萌しはじめて來た、自分か小野田かに生理的の缺陷があるのではないかとの疑ひを、その時も小野田に訴へた。

お島は小野田に濟まないやうな氣のすることもあつたが、この結婚がこんな苦しみを自分の肉體に齎さうとは想ひもかけなかつた。

お島は今着てゐるものの聯想から鶴さんの肉體のことを言出しなどして、小野田を氣拙がらせてゐた。男の體に反抗する女の手が、小野田の火照つた頬に落ちた。

兇暴なお島は、夢中で水道の護謨栓を向けて、男の復讐を防がうとした。

七十四

小野田の怯んだところを見て、外へ飛出したお島は、何處へ往くといふ目當もなしに、幾個もの町を突切つて、不思議に勢ひづいた機械のやうな足で、ぶら／＼海岸の方へと歩いて行つた。

町幅のだゝつ廣い、單調で粗雑な長い大通は、どこを見向いても陰鬱に闃寂してゐたが、その薄寒い冬の夕昏のあわたゞしい物音が、荒れた町の底に淀んでゐた。燻みきつた男女の顔が、そこここの薄暗い店屋に見られた。活氣のない顔をして職工がぞろ／＼通つたり、自轉車のベルが、海邊の濕つぽい空氣を透して、氣疎く耳に響いたりした。目に見えないやうな大道の白い砂が、お島の涙にぬれた目や頬に、何うかすると痛いほど吹きつけた。

お島は死場所でも捜しあるいてゐる宿なし女のやうに、橋の袂をぶら／＼してゐたが、時々欄干にもたれて、昏闇に憊れた體に氣息をいれながら、ぼんやり佇んでゐた。寒い汐風が、蒼い皮膚を刺すやうに沁透つた。

やがて仄暗い夜の色が、縹渺とした水のうへに這ひひろがつて來た。そしてそこを離れる頃には、氣分の落着いて來たお島は、腰の方にまた劇しい疼痛を感じた。

暗くなつた町を通つて、家へ入つて行つた時、店の入口で見慣れぬ老爺の姿が、お島の目についた。

お島は一言二言口を利いてゐるうちに、それがつい二三日前に、ふつと引込まれて行くやうな射倖心が動いて、つい買つて見る氣になつた或賭ものの中つた報知であることが解つた。

寄りかけにお島は、自分のさうした身のうへまで話した。

七十七

そんなやうな仕事が、少しばかり續くあひだ、儲の金で身装のできたお島は、暮のせはしいなかを、晝間は顧客まはりをして、夜になると能く小野田と一緒に浮々した氣分で、年の市などに景氣づいた町を出歩いたり、友達のやうになつた顧客先の細君連と、芝居へ入つたり淺草邊をぶらついたりして調子づいてゐたが、それもまたばつたり火の消えたやうに閑になつて、肆に浪費した金の行方も目にみえずに、物足りないやうな寂しい日が毎日々々續いた。

定りだけの仕事をすると、職人は夫婦の外を出歩いてゐるあひだ、この頃ふとした事から思ひついた玩具の工夫に頭腦を浸して、飯を食ふのも忘れてゐるやうな事が多かつた。

仕事の斷間になると、彼は晝間でも一心になつてそれに耽つてゐた。時とすると夜、夫婦が寢しづまつてからも、彼はこつ〳〵何かやつてゐた。

「この人は何をしてゐるの。」

隅の方へ入つて、ボール紙を切刻んだり、穴を開けたり、繪具をさしたりして、夢中になつてゐる彼の傍へ來て、お島は可笑しさうに訊ねた。

「かう云ふ惡戯をしてゐるんです。」

彼は細く切つたその紙片を、賽の目なりに筋をひいて紙のうへに駢べてゐながら、振顧きもしないで應へた。

「何だねその切符のやうなものは……。」

「これですか。」木村はやつぱり其方に氣を奪られてゐた。

「これは軍艦ですよ。」

「軍艦をどうするの。」

「これでもつて海軍將棋を拵へようといふんです。」

「海軍將棋だつて？ へえ。そしてそれを何にするの。」

「高尙な玩具を拵へて、一儲しようつてんですがね……この小さいのが水雷艇です。」

「へえ、妙なことを考へたんだね。戰爭あて込みなんだね。」

「まあ然うですね。これが當ると、お上さんにもうんと資本を借しますよ。どうせ私は金の要らない男ですからね。」

「はゝゝ。」と、お島は笑ひだした。

「可かつたね。」

「此ばかりぢやないんです。」職人はこの頃夜もろく〳〵眠らずに凝り考へた、色々の計畫が頭腦のなかに渦のやうに描かれてゐた。新しい仕事の興味が、彼の小さい心臟をわく〳〵させてゐた。

「私や子供の時分から、こんな事が好きだつたんですから、この外にまだ幾個も考へてるんですが、その中には一つや二つ成功するのが屹度ありますよ。」

「ぢや木村さんは發明家にならうといふんだわね。發明家つて、どんな豪い人かと思つてゐたら、木村さんのやうな人でもやれるやうな事なら、有難くもないね。」

「戯談言つちや可けませんよ。」

「まあ發明もいゝけれど、仕事の方もやつて下さいね、どし〳〵仕事を出しますからね。」

七十八

お島たちが、寄りつく處もなくなつて、一人は職人として、一人は註文取として、夫婦で築地の方の或洋服店へ住込むことになつたのは、二人が半歳ばかり滯在してゐた小野田の故郷に近いN—と云ふ可也繁華な都會から歸つてから

であつた。

一月から三月頃へかけて、店が全く支へ切れなくなつたところで、最初同じ商賣に取りついてゐる知人を頼つて、上海へ渡つて行くつもりで、二人は小野田の故郷の方へ出向いて行つたのであつたが、路用や何かの都合で、そこに暫く足を停めてゐるうちに、つい〳〵引つかゝつて了つたのであつた。

二人で月島の店を引拂つた頃には、二月ほどかゝつて案出した木村の新案ものも、古くから出てゐるものに類似品があつたり、特許出願の入費がなかつたりしたために、孰もこれも持腐れになつてしまつたのに落膽して、木村は、又渡り職人の仲間へ陷ちて行つてゐた。

南の方の海に程近いN—市では二人は少しばかり持つてゐる着替などの入つた貧しい行李を、小野田の妹の家で解くことになつたが、町には小野田の以前の知合も少くなかつた。

主人が勤人であつた妹の家の二階に二三日寝泊りしてゐた二人は、そこから二里許り隔つた村落にゐる小野田の父親に逢つて、そこから出發するはずであつたが、以前住んでゐた家や田畑も人の手に渡つて、貧しい百姓家に暮しをしてゐる父親の樣子を、一度行つて見に來た小野田は、見すぼらしげな父親をお島に逢はせるのが心に憚られた。東京に住みつけた彼の目には、久しく見なかつた慘な父親の生活が、自分にすら厭はしく思へた。

逢ひさへすれば、路費の出來さうに言つてゐた父親の家への同行を、お島は二度も三度も迫つてみたが、小野田は不快な顔をして、いつもそれを拒んだ。

八九年前に、效性ものの妻に死訣れてから、酒飲みの父親は日に〳〵生活が荒んで行つた。妻の働いてゐるうちは、何うか恁うか持堪へてゐた家も、古くから積り〳〵して來てゐる負債の形に取られて、彼は細かな小屋のなかに、辛うじて生きてゐた。

到頭お島がつれられて行つたときに、彼は麥や空豆の作られた山畑の中に、熱い日に照されて土弄りをしてゐたが、無智な顔をして畑から出て來る汚いその姿を見たときには、お島は慄然とするほど厭であつた。一緒に行つた小野田に對する輕蔑の念が、一時に彼女の心を凍らしてしまつた。

七十九

それでお島は、小野田が自分をつれて來なかつた理由が解つたやうな氣がして、父親が本意ながるのも肯かずに、その日のうちにN—市へ引返して來たのであつた。自分の是迄が悉皆男に瞞されてゐたやうに思はれて、腹立しかつたが、小野田が自分達のことをどんな風に父親に話してゐるかと思ふと、擽つたいやうな滑稽を感じた。

空濶な平野には、麥や桑が青々と伸びて、泥田をかへしてゐる農夫や馬の姿が、處々に見えた。砂埃の立つ白い路を、二人は鈍い俥に乘つて歸つて來たが、父親が侑めてくれた濁酒に醉つて、俥の上でごくり〳〵と眠つてゐる小野田の坊主頭をした大きい頭顱が、お島の目には慘らしくみえた。

この貧しげな在所から入つて來ると、着いた當時は鈍くさくて爲方のなかつた寂しい町の狀が、可也賑かで、豐かなもののやうに見えて來た。大きい洋風の建物が目についたり、東京にもみられないやうな奧行の深さうな美しい店屋や、洒落た構の料理屋なども、物珍しく眺められた。[illegible]妹の住つてゐる[illegible]な町には、どんな人が生活してゐるかと思ふやうな、門構の大きな家や庭が、そこにも此處にもあつた。

小野田の[illegible]によると、父親の財産として、少

かつた。上京行を心配したやうな人の方へは、どこへも[illegible]見せて、[illegible]かつた。

八十一

不安な一夜を、芝口の或安旅籠に過して、翌日二人は川西へ身を寄せることになるまで、お島たちは口を捜すのに、暑い東京の町を一日彷徨いてゐた。

最後に本郷の方を一二軒猟つて、そこでも全く失望した二人が、疲れた足を休めるために、湯島天神の境内へ憩ひ寄つて來たのは、もうその日の暮方であつた。

漸う日のかげりかけた境内の薄闇には、白い人の姿が、ベンチや柵のほとりに多く集つてゐた。葉の黄ばみかゝつた櫻や銀杏の梢ごしに見える、蒼い空を秋らしい雲の影が動いて、目の下には薄闇い町々の建物が、長い一夏の暑熱に倦み疲れたやうに横はつてゐた。二人は仄暗い木蔭のベンチを見つけて、そこに暫く腰かけてゐた。涼しい風が、日に焦け疲れた二人の額に心持よく戰いだ。

水のやうな蒼い夜の色が、段々木立際に這ひ擴がつて行つた。口も利かずに默つて腰かけてゐるお島は、ふと女坂の[illegible]、石段の上の平地へ醜い姿を現はす一人の大病人らしい[illegible]の乞食が目についたりした。

石段を登り切つたところで、哀れな乞食は、陸の上へあがつた泥龜のやうに、臆病らしく四下を見廻してゐたが、するうちまた這ひ歩きはじめた。そして今夜の宿泊所を求めるために、人影の全く絶えた、石段ぎはの小さい祠の暗闇の方へゐざり寄つて行つた。

「ちよつと御覽なさいよ。」お島は小野田に聲かけて振顧いた。

今まで莨を喫つてゐた小野田は、ベンチの肱かけに凭れかゝつていつか眠つてゐた。

「この人は、爲樣がないぢやないの。」お島は跳ねあがるやうな聲を出した。

「行きませう〳〵。こんな處にぐづ〳〵してゐられやしない。」お島は慄へあがるやうにして小野田を急立てた。

二人は痛い足を引摺つて、またそこを動きだした。

「何でもいゝから芝へ行きませう。然うなれば見えも外聞もありやしない。」お島はさう言つて倦み憊れた男を引立てた。

食物といつては、晝から殆ど何をも取らない二人は、口も利けないほど[illegible]疲れてゐた。川西の店へ辿つたのは、その晩の九時頃であつた。

八十二

長い漂浪の旅から歸つて來たお島たちを、思ひのほか潔く受納れてくれた川西は、被服廠の仕事が出なくなつたところから、その頃職人や店員の手を減して、店が滅切寂しくなつてゐた。

そこへ入つて行つた島は、久しい前から、世帶崩しの年増女を勝手元に働かせて獨身で暮してゐる川西のために、時々上さんの爲るやうな家事向の用事に、器用ではないが、しかし活潑な働き振を見せてゐた。

前にゐた職人か、女氣のなかつたこの家へ、どこからともなく連れて來て間もなく主人との關係の怪しまれてゐたその年増は、澁皮の剝けた、色の淺黑い無[illegible]な顏をした小柄の女であつたが、お島が住込むことになつてから、一層綺麗にお化粧をして上さん氣取で長火鉢の傍に坐つてゐた。

始終忙しさうに、くる〳〵働いてゐる川西は、夜は宵の口から二階へあがつて、寢床に就いた

が、朝は女がまだ深い眠にあるうちから床を離れて、人の好い口喧しい主人として、口のわるい職人や小僧たちから、蔭口を吐かれてゐた。

お島は女が二階から降りて來ぬ間に、手捷くそこらを掃除したり、朝飯の支度に氣を配つたりしたが、寢呆けた樣な締りのない笑顔をして、女が起出して來る頃には、職人たちはみんな食膳を離れて、奥の工場で彼女の噂などをしながら、仕事に就いてゐた。

彼等が食事をするあひだ、裏でお島の洗ひ濯ぎをしたものが、もう二階の物干で幾枚となく、高く昇つた日に干されてあつた。

「どうも濟みませんね。」

い、ばけつをがら／＼いはせて、働いてゐるお島の姿を見ると、それでも女は、懈さうな聲をかけて、日のじり／＼照りはじめて來た窓の外を眺めてゐた。毛並のいゝ頭髮を銀杏返に結つて、中形のくしや／＼になつた寢衣に、紅い仕扱を締めた姿が、ほつそりしてゐた。白粉の斑にこびりついたやうな額のあたりが、屋根から照返して來る日光に汚らしく見えた。

「何ういたしまして。」

お島は無造作に懸けつらねた干物の間を潛りぬけながら、袂で汗ばんだ顔を拭いてゐた。

「私は働かないではゐられない性分ですからね。だから、どんなに働いたつて何ともありませんよ。」

「さう。」

女はまだうつとりした夢にでも浸つてゐるやうな、どこか暗い目色をしながら呟いた。

「私の寢るのは、大抵十二時か一時ですよ。」

「さうですかね。」お島は白々しいやうな返辭をして「でも可いぢやありませんか。お秀さんは好い身分だつて、皆がさう言つてゐますよ。」

女は紅くなつて、厭な顔をした。

「さう／＼、お秀さんといつちや惡かつたつけね。御免なさいよ。」

八十三

「何うです、今日は素敵に好いお顧客を世話してもらひましたよ。」

半日でも一日でも、外へ出て來ないと氣のすまないやうなお島は、職人たちの手がしばらく空きかゝつたところで、その日も幾日振かで晝からサムプルをさげて出て行つたが、晩方に歸つて來ると、お秀と一緒に店の方にゐる川西に然う言つて聲かけた。

「為樣がないね、私がなまけると直これだもの。」お島は出て行く時も、これと云ふ目星い仕事もない工場の樣子を見ながら言つてゐたが、出れば必ず何かしら註文を受けて來るのであつた。中には自分の懇意にしてゐる人のを、安く受けて來たのだと云つて、小野田との相談で、店のものにはせず、自分たちだけの儲仕事にするものも時にはあつた。そんなものを、小野田は店の仕事の手隙に縫ふことにしてゐたが、川西はそれを餘り悦ばないのであつた。

「ほんとに好い腕だが、惜しいもんだね。」

川西は、獨り店頭にゐた小僧を、京橋の方へ自轉車で用達に出してから、註文先の話をしてお島に言つた。彼はもう四十四五の年頃で、仕入ものや請負もので、店を大きくして來たのであつたが、お島たちが入つて來てから、上物の註文がぽつ／＼入るやうになつてゐた。

川西は晩酌をやつた後で、酒臭い息をふいてゐた。工場では皆夕方から遊びに出て行つて、誰もゐなかつた。

「そんな腕を持つてゐながら、名古屋くんだりまで苦勞をしに行くなんて、餘程可笑しいよ。」

川西は、傍に附絡つてゐるお秀をも、湯へ出してやつてから、時々口にすることをその時も

お島に言出した。

「ですから私は別々になつて了つたんです。あの時疾に別れる筈だつたんです。でもやつぱり然うも行かないもんですからね。」

「小野田さんと二人で、こゝでついた得意でも持つて出て、單獨立になるつもりで居るんだらうけれど、あの腕ぢやまア難しいね。」

「さうですとも、これ迄散々失敗して來たんですもの。」

「どうだね、それよりか小野田さんと別れて、一つ私と一緒に稼ぐ氣はないかね。」

川西はにやくしながら言つた。

「御戯談でせう。」お島は眞紅になつて、「貴方にはお秀さんといふ人がゐるぢやありませんか。」

「あんなものを……。」川西はげたく笑出した。「どこの馬の骨だか解りもしねえものを、誰が上さんなぞにする奴があるもんか。」

「でも好い人ぢやありませんか、可愛がつておあげなさいまし。私みたやうな我儘ものは迚も駄目です。」

お島はさう言つて、茶の室を通つて工場の方へ入つて行くと、汗ばんだ着物の着替に取りかかつた。蒸暑い工場のなかは綺麗に片着いて、電氣がかつかと照つてゐた。

八十四

九時頃に小野田が外から歸つて來たとき、駭かされたお島の心は、まだ全く鎭らずにゐた。人品や心の卑しげな川西に、いつも誰にも動く女のやうに見られたのが可恥しく腹立しかつた。

「へえ、私がそんな女に見えたんですかね。そんな事をしたら、あの物堅い父に私は何といはれるでせう。」

お島は迹から附絡つて來る川西の兇暴な力に反抗しつゝ、工場の隅に、慄然とするやうな體を縮めながら然う言つて拒んだ。

鬢の延びた長い顎の、目の落窪んだ川西の顏が、お島には狂氣じみて見えた。

「可けませんく、私は大事の體です。これから出世しなくちやなりません。信用を墜しちや大變です。」お島は片意地らしく矜しつけるやうに言つて、筋張つた彼の手をきびしく拂退けた。

劇しい爭鬪がしばらく續いた。

婉曲としをらしさとを缺いた女の態度に、男の顏を潰されたと云つて、川西がぷりくして二階へあがつて行つてから、お島は腕節の痛みをおさへながら、勝誇つたものゝ荒い不安を感じた。

暫くすると、白粉をこてく塗つて、湯から歸つて來たお秀が、腕を組んでぼんやり店頭に佇んでゐるお島に笑顏を見せて、奥へ通つて行つた。

「ぼんつくだな。」お島はさう思ひながら、女の顏を見返しもせずに默つてゐた。何のことをも感づくことができずに、全く滿足し切つてゐるやうに鈍い、その癖どこかおどくしてゐる女の様子に、妄に氣がいらくして、顏の筋肉一つすら素直に働かないのであつた。

「小野田が歸つたら、今の始末を殘らず吩咐けよう。そして今からでも二人でこゝを出てやらう。」

お島はさう思ひながら、そこに立つたまゝ彼の歸りを待つてゐた。外は秋らしい冷かな風が吹いて、往來を通る人の姿や、店屋々々の明が、厭に滅入つて寂しく見えた。濱屋や鶴さんのことが、物悲しげに想出されたりした。

その晩、小野田は二階でしばらく川西と何やら言合つてゐたが、やがて落着のない顏をして降りて來ると、店にゐるお島の傍へ寄つて來

いと言つて、新しく取替へたばかりの代物であつた。然うすれば試用の間、一時また支拂が猶豫される譯であつた。

「こんな際どいことでもしなかつた日には、私たちは迚もやつて行けやしません。成功するには、何うしたつてヤマを張る必要があります。」

お島はその時もさう言つて、自分の氣働きを矜つたが、何の氣もなささうに、それに腰かけてゐる小野田の樣子が、間拔らしく見えた。

がた／＼と動いてゐたミシンの音が止ると、彼は裁板の前に坐つて、縫目を熨すためにアイロンを使ひはじめた。

「ふむ、莫迦だね。」

お島は無性に腹立しいやうな氣がして、腕を組みながら溜息を吐いた。

「一生職人で終る人間だね。それでも田を踏んで暮す親よりかいくらか優だらう。」

「生意氣を言ふな。手前の親がどれだけ立派なものだ。やつぱり土弄りをして暮してゐるぢやないか。」

「ふむ、誰がその親のところへ、籍を入れてくれろと賴みに行つたんだ。私の親父は、あゝ見えても産れが好いんです。昔はお庄屋さまで威張つてゐたんだから。それだつて、私は親のことなんか口へ出したことはありやしない。」

「お前がまた親不孝だから、親が寄せつけないんだ。さう威張つてばかりゐても得は取れない。ちつとはお辭儀をして、金を引出す算段でもするが可い。」

小野田はいつもお島に勸めてゐるやうなことを、また言出した。

「意氣地のないことを言つておくれでないよ。私は通へ店を持つまでは、親の家へなんか死んでも寄りつかない意だからね。」

「だから、お前は商賣氣がなくて駄目だといふのだ。」

仕事が一片着け片着く時分に、二人はまたこんな相談に耽りはじめた。

八十八

上海へ行くつもりで、N―市へ立つ前に、一度顏出したことのある自分の生家の方へ、小野田がお島を勸めて、贈物などを持つて、更めて一緒に訪ねて行つてから、續いて一人でちよいちよい兩親の機嫌を取りに行つたりしてゐた。

「これだけの地面は私の分にすると、御父さんが言ふんですけれどね。」

最初二人で行つたとき、お島は植木などつさり植つてゐる母屋の方の庭から、附近に散らかつてゐる二三個所の持地を、小野田と一緒に見廻りながら、五百坪ばかりの細長い地所へ小野田を連れて行つて言つた。

雜木の生茂つてゐる其の地所には、庭へ持出せるやうな木も可也にあつた。暗い竹叢や荒れた畑地もあつた。周圍には新しい家が二三軒建つてゐた。

「ふむ。」小野田は驚異の目を睜つて、その木立のなかへ入つて行つた。夏草の生茂つた木立の奧は、地面がじめ／＼してゐて、日の光のとどかぬやうな處もあつた。

「この邊の地所は坪どのくらゐのものだらう。」

小野田はそこを出てお島の傍へ來ると、打算的の目を耀かして訊ねた。

「どの位だかね。今ぢや十圓もするでせうよ。」

お島は悅けたやうな顏で應へたが、この地面が自分の有にならうとは思へなかつた。

生家では二三年のあひだ家を離れて、其方こつち放浪して歩いてゐた兄が、情婦に死訣れて、最近にゐた千葉の方から歸つて來てゐた。

一時生家へ還つてゐた嫁も、その子供をつれて、久振で良人と一緒に暮してゐた。兄は一時悪い病に罹つてから、滅切健康が衰へ、お島と山で世帯を持つてゐた頃の元気もなくなつてゐた。お島はあの頃の山の生活と、二三度そこで交際つた兄の情婦の身のうへなどを想出させられた。悪い病気にかゝつたといふ其の情婦は、どこへ行つても兄に附絡はれてゐて、好いこともなくて旅で死んでしまつた。その時は、何の気もなしに傍観してゐた二人の情交や心持が、お島にはいくらか解るやうに思へて来たが、どこが好くて、あの女がそんなに男のために苦労したかが訝られた。

「あの時は、兄さんはほんとに私をひどい目に逢はしたね。」

お島は長いあひだの経過を措へて、何の温かみも感ずることのできない恣な兄との接触に、失望したやうに言出した。

兄はその頃のことは想出しもしないやうな顔をしてゐた。お島たちの寄りついて来ることを、餘り喜んでもゐないらしかつた。

「あれはあゝいふ男です。人が悪いつていふんでもないけれど、人情はないんですね。」

「早くあの地面を自分のものに書きかへておくやうにしなくちや駄目だよ。」

小野田は、お島の投遣りなのを指しさうに言つた。

「あの地面も、今はどうなつてゐるんだか。あの御母さんの生きてゐるうちは、まあ私の手にはわたらないね。」

「それもお前が下手だからだよ。」

小野田はさう言ひながら、望みありげに家へ入つて来た。

八十九

小野田がこの家に信用を得るために、母親の傍へ坐つて、話込んでゐるあひだ、お島は擽つたいやうな、いら〳〵しい気持を紛らせようとして、そこを離れて、子供を揶揄つたり、嫂と高声で話したりしてゐた。

「家ちや島が一番親に世話をやかせるんでございますよ。これ迄に、幾度家を出たり入つたりしたか知れやしません。」

母親はお島が傍についてゐるときも、そんな事を小野田に言つて聴かせてゐたが、彼女の目には、これまでお島が関係した男のなかで、小野田が一番頼もしい男のやうに見えた。取澄してさへゐれば、口髭などに威のある彼のがつしりした相貌は、誰の目にも立派な紳士に見えるのであつた。小野田は切りたての背広などを着込んで、のつしりした態度を示してゐた。

お島は自分の生得から、N―市へ立つ前に、この男のことをその田舎では一廉の財産家の子息ででもあるかのやうに、父や母の前に吹聴しずにはゐられなかつた。それで小野田もその意で、母親に口を利いてゐた。

「この人の家は、それは大したもんです。」

お島は母親を威圧するやうに、今日も皆が揃つてゐる前で言つたが、小野田はそれを裏切らないやうに、口占を合せることを忘れなかつた。

「いや私の家も、さう大した財産もありませんよ。しかしさう長く苦しむ必要もなからうと思ひます。夫婦で信用さへ得れば、そのうちには何うにかなるつもりでゐますので。」

母親の安心と歓心を買ふやうに、小野田は言つた。

お島はその傍に、長くぢつとしてゐられなかつた。自分を信用させようと骨を折つてゐる、男の狡黠い態度も蔑視まれたが、この男ばかりを信じてゐるらしい、母親の水臭い心持も腹立しかつた。

姉は、この四五年の良人の放蕩で、所有の土地もそつちこつち抵當に入つてゐることなどを、蔭でお島に話して聴かせた。

「御父さんが、あすこの地面を私にくれるなんて言つてゐましたつけが、あれは何うする氣でせうね。」

お島は嫂の口占を引いてでも見るやうに、さう言つてみた。

「へえ、そんな事があるんですか。私はちつとも知りませんよ。」

「男だけには、それ〳〵所有を決めてあるといふ話ですけれどね。」

お島は此場合それだけのものがあれば、一廉の店が持てることを考へると、いつにない慾心の動くのを感じずにはゐられなかつたが、家を出て山へ行つてから、父親の心が、年々自分に疎くなつてゐることは争はれなかつた。

「行きませうよ。」

お島はまた母親の傍にゐる男を急きたてて、やつと外へ出た。

九十

狭い三疊での、窮屈で不自由な夫婦生活から、男か女かの孰かにあるらしい或生理的の異常から來る男の不滿とが、時とするとお島には堪へがたい壓迫を感ぜしめた。

「へえ、そんなもんですかね。」

若い亭主を持つてゐる印判屋の上さんから、男女間の性慾について、時々聞かされることのあるお島は、それを不思議なことのやうに疑ひ異しまずにはゐられなかつた。

「おや、私が不具なんでせうかね。」

お島は何うかすると、男の或不自然な思ひつきの要求を滿すための、自分の肉體の苦痛を想出したから、上さんに訊いた。

「でも是まで私は一度も、そんな事はなかつたんですからね。」

お島はどんな事でも打明けるほどに親しくなつた上さんにも、これまでに外に良人を持つた經驗のあることを話すのに、この上ない羞恥を感ずるのであつた。

「眞實は、私はあの人が初めてじやないんですよ。」

「それぢや旦那が惡いんでせうよ。」

「でも、あの人はまた私が不可いんだと言ふんですの。だから私もさうとばかり思つてゐたんですけれど……眞實に氣の毒だと思つてゐたんです。」

「そんな[illegible]なことつて[illegible]有りませんよ、お醫者に[illegible]い」

上さんは、[illegible]い、[illegible]な引證でも[illegible]に、色々な人の場合などを話して聞かせた。

「まあ……嫌やわいやでありませんか。」

お島は耳朶まで紅くなつた。若い男などを有つてゐる[illegible]な年老つた[illegible]すら、羨まずにはゐられなかつたが、やがてはそれも何か氣にかゝつた。人並でない自分達夫婦が、一生不幸でもあるやうに思へたりした。

晩になつても、體中が[illegible]がつてゐるやうな痛みを感じて、お島は[illegible]眠りながら、夜中を眠れずにゐるやうな事が多かつた。そして朝になるまでいら〳〵しい神經の興奮しきつてゐる男を、心から憎く淺猿しく思つた。

「こんな事をしちやゐられない。」

お島は註文を聞きに廻るべき顧客先のあることに氣づくと、寢床を跳ねおきて、身じまひに取りかゝらうとしたが、男は憑間に疲れたものか何ぞのやうに、其枕の前に薄ぼんやりした顔をして、夢現のやうな目を目眩しい日光に瞑つてゐた。

「それぢや私が旦那に一人、好いのをお世話し

一戲談でせう。そんな事をしたら、それこそ大變でせう。」

上さんはお島の言ふことが、總て虚構であるとしか思へなかつた。

九十二

そこへ引越して行つたのは、その頃開かれてあつた博覽會の賑ひで、土地が大した盛場になつてゐた爲であつた。

その家は、不斷は眠つてゐるやうな靜かな根津の通であつたが、今は毎日會場からの樂隊の響が聞えたり、地方から來る色々な團體見物の宿泊所が出來たりして、近い會場の浮立つた動搖が、こゝへも遽しい賑かしさを漂はしてゐた。

陽氣がやゝぽかついて來たところで、小野田が出した懇な手紙に誘はれて、田舍で毎日野良仕事に憊れてゐる彼の父親が、見物にやつて來たり、お島から書送つた同じ誘引狀に接して、彼女が出で懇意になつた人々が、どや〳〵入込んで來たりした。世のなかが景氣づいて來たにつれて、お島たちは自分の浮揚るのは、何の造作もなささうに思へてゐた。

この店を張るについての、二人の苦しい遣繰を少しも知らない父親は、來るとすぐ伜夫婦につれられて、會場を見せられて感激したが、これまで何一つ面白いものを見たこともない哀れな老人を、さうした盛場に連出して悅ばせることが、お島に取つては、自分の感激に媚びるやうな滿足であつた。

上野は青葉が日に〳〵濃い色を見せて來てゐた。蟻のやうに四方から集つて來る群衆のうへに、梅雨らしい蒸暑い日が照りわたり、雨雲が陰鬱な影を投げるやうな日が、毎日々々續いた。

お島は新調の夏のコートなどを着て、パナマを冠つた小野田と一緒に、浮いたやうな氣持で、毎日のやうに父親をつれて歩いたが、親に甘過ぎる男の無反省な態度が、時々彼女の犧牲的な心持を、裏切らないではゐなかつた。無知な老人の彳んで見るところでは、莫迦孝行な小野田は、女にのろい男か何ぞのやうに、いつまでも氣長に傍についてゐて、離れなかつた。驚きの目を瞠つて、父親の立寄つて行くところへは、どんな滿らないものでも、小野田も嬉しさうに從いて行つて見せたり、說明したりした。

「それどころぢやないですよ。私たちはさう毎日々々親の機嫌を取つてゐるほど、氣樂な身分ぢやないんですからね。」

晩方になると、きつとお仕着せを飲ませることに極つてゐる父親への、酒の支度を疎かにしたといつて、小野田がその時も大病人のやうに二階に寢てゐたお島に小言を言つた。彼女は筋張つた顳顬のところを押へながら、小野田を遣返した。

お島はいつもそれが起ると、生死の境にでもあるやうな苦しみをする月經時の憊さと痛さとに悶えてゐた。

「それに私はこの體です。とてもお父さんの面倒はみられません。」

九十三

「そんな事を言つてもいゝのか。」

さう云つて極めつけさうな目をして、小野田は癇癪が募つて來るとき、いつもするやうに口髭の毛根を引張つてゐたが、調子づいて父親を歡待してゐた彼女に寢込まれたことが、自分にも物足りなかつた。

お島は煩さうに顏を顰めてゐたが、小野田が悄々降りていつたあとでも、取つき身上の苦しさと、自分の心持については、何も知つてくれないやうな父親の舉動が腹立しかつた。自分に

どんな醜い氣前とがあるかを見せようとでもするやうに、紛らされてゐた利己的な思念が、心の底からむくれ出して來るやうに感じて、悲慘な涙が湧立つて來た。

お島がむつと寢てもゐられないやうな氣がして、下へ降りて行つたとき、父親はもう酒をはじめてゐた。小野田も興がなささうに傍に坐つてゐた。

「何うもすみません。」

お島は何もない飾棚の前に坐つてゐる父親の傍へ來て、やつぱり涙を溜めてゐた。

「私はこの商賣が駄目となると、もう何うすることも出來ないんです。それに家も、これから夏は閑ですから、お歡待をしようと思つても、さうさうは爲きれないんです。」

「然うとも〳〵。それどこぢやない。私は一時のお客に來たものぢやないから。」

父親はいつまでも倅夫婦の傍で暮さうとしてゐる自分の心持を、その時も口から洩したが、お島が積つて附ける酒に滿足してゐられないやうな、強い渇望がその本來の飲慾を煽つて來ると、父親はふら〳〵と外へ出て、この頃馴染になつた近所の居酒屋へ入つていくのが、習慣になつた。そして家でおとなしく飲んでゐられないやうな野生的な彼の卑しい飲癖が、一層お島を顰蹙させた。

九十四

山で知合になつた人達が、四五人誘ひあはせて出て來てから、父親は一層お島たちのために邪魔もの扱ひにされた。

連中のうちには、その頃呼吸器の疾患のため、逗留、旁、博士連の診察を受けに來た濱屋の主人もあつた。山の温泉宿や、精米所の主人もゐた。精米所の主人は、月に一度くらゐは北蠣殼町の方へ出て來るのであつたが、その時は上さんと子供をつれて來てゐた。

その通知の葉書を受取つたお島は、大きな菓子折などを小僧に持たせて、紋附の夏羽織を着込んで、丸髷姿で挨拶のために、ある晩方その宿屋を訪ねたが、込合つてゐたので、連中はこの部屋にかたまつて、ちやうど晩酌の膳に向ひながら、陽氣に高談をしてゐた。

「えらい仕掛けたさうだね。そのせゐか女振もあがつたぢやねえか。好い奧様になつたといふことよ。」

精米所の主人は、浴衣がけで一座の眞中に坐つてゐながら言つた。

「御戲談でせう。」

お島は初らしく顏の赤くなるのを覺えた。

「お蔭でどうか恁うかね。でもまだ〳〵成功といふところへは參りません。何しろ資本のいる仕事ですからね。どうか少しお使しなすつて下さいまし。あなた方はみんな好い旦那方ぢやありませんか。」

お島はさう言つて、自分の來たために一層浮立つたやうな連中を笑はせた。

夜景を見に出るといふ人達の先に立つて、お島も混雜してゐるその宿を出たが、別れるときに家の方角を能く敎へておいて、廣小路まで連中を送つた。

「病氣つて、どこが惡いんです。」

お島はまさかの時には、多少の資本くらゐは引出せさうに思へてゐた濱屋に、二人並んであるいてゐる時訊ねた。濱屋がその後、ちよくちよく手を出してゐた山林の賣買がいくらか當つて、融通が利くと云ふ噂などを、お島はその土地の新聞から聞傳へてゐる兄に聞いて知つてゐた。

「どこが惡いといふでもないが、胸がちつと弱いから用心しろと言はれたから、東京で二三專門の博士を訪ねたが、事によつたら當分

逗留して、遊び旁、注射でもしてみようかと思ふ。」

「それぢや奥さんのが移つたのでせう。私は一緒にならないで可かつたね。」

お島は可怕さうに言つたが、やつぱりこの男を肺病患者扱ひにする氣にはなれなかつた。

「あんたが肺病になれば、私が看病しますよ。」

「肺病なんか可怕くて、何うするもんですか。」

「今ぢや然うも行かない。これでも山ぢや死なうとしたことさへあつたつけがね。」

「おゝ可厭だ。」お島は思出してもぞつとするやうな聲を出した。「そんな古いことは言ひつこなし。あなたは餘程人が悪くなつたよ。」

九十五

一日の雑沓と暑熱に疲れきつたやうな池の畔では、建聯つた商店がどこも彼處も店を仕舞ひかけてゐるところであつたが、それでもまだ人足は絶えなかつた。水に臨んだ飲食店では、人が蓄音器に集つてゐたり、係のものらしい男が、怪好な調子で女達を相手に酒を飲んでゐたりした。暗闇の世界に、秘密の歡樂を捜しあるいてゐるやうな、猥な女と男の姿や笑聲が聞えたりした。

お島はその間を、ふら〱と寂しい夢でも見てゐるやうな心持で歩いてゐた。會場のイルミネーションは悉皆消えてしまつて、無氣味な廣告塔から、蒼い火が暗に流れてゐた。

濱屋の主人が肺病になつたと云ふことが、ふと彼女の心に暗い影を投げてゐるのに氣がついた。自分の世界が急に寂しくなつたやうにも感じた。しかし離れてゐるときに考へてゐたほど、自分がまだあの男のことを考へてゐるとは思へなかつた。今のあの男とは全く懸けはなれた其頃の山の思出が、微に懐しく思出せるだけであつた。あの時分の若い癡呆な戀が、いつの間にか、水に溶されて行く紅の色か何ぞのやうに薄く入染んでゐるきりであつた。

自分の若い職人が一人、順吉といふお島の可愛がつて目をかけてゐる小僧と一緒に、熱い仕事場の瓦斯の傍を離れて、涼しい夜風を吸ひに出てゐるのに、ふと觀月橋の袂のところで出會した。

「何うしたえ、田舎のお爺さんは。」お島は順吉に訊ねた。

二人はにや〱笑つてゐた。

「今夜も醉つぱらつてゐるんだらう。」

「えゝ何だかやつぱり外で飲んで來たやうでしたよ。」

お島はこの順吉から、父親が自分の嫁振を蔭で非して、不平を言つてゐることなどを、ちよいちよい耳にしてゐたが、それはその時で聽流してゐるのであつた。

「私のこつたもの、どうせ好くは言はれない。あの田舎ものに此の上さんの氣前なんかわかるものかね。」

お島はさう云つて笑つてゐたが、新しく入つて來たものから、世間普通の嫁と一つに見られてゐるのが、侮辱のやうに感ぜられて腹立しかつた。

「お上さん今夜は好いことがあるんだから、何かおごらうか。」お島は二人に言つた。

「おごつて下さい。」

「ぢや、みんなおいで〱。」

お島は先に立つて、何か食べさせるやうな家を捜してあるいた。

「……上さんを離縁しろなんて言つてゐましたよ。」

風の吹通しな水邊の一品料理屋でアイスクリームや水菓子を食べながら、順吉は話した。

「へえ、そんなことを言つてゐたかい。」お島は

それでも極まるさうに紅くなつた。

「へん、お氣の毒さまだが、舅に暇を出されるやうな、そんな意氣地なしのお上さんと上さんが異ふんだ。」

九十六

お島が毎日のやうに呼出されて、市内の芝居や寄席、鎌倉や江の島までも見物して一緒に浮浮しい日を送つてゐた山の連中は、田舍へ歸るまでに、一度お島夫婦のところへも遊びにやつて來たが、それらの人々が宿を引揚げて行つてからも、濱屋の主人だけは、お島の世話で部屋借をしてゐた家から、一月の餘も病院へ通つてゐた。

田舍では大した金持でもあるやうに、お島が小野田に吹聽しておいた山の客が、どやどややつて來たとき――濱屋だけは加はつてゐなかつたが――お島は水菓子にビールなどをぬいて、暑い二階で彼等を歡待したが、小野田も彼等から、商賣の資本でも引出し得るかのやうに言つてゐるお島の言を信じて、そこへ出て丁寧な取扱方をしてゐた。

お島はその一人から夏のインバネス、他の一人からは冬の外套と云ふ風に、孰れも上等品の註文を取ることに抜目がなかつたが、いつでも見本を持つて行きさへすれば、山の町でも好い顧客を澤山世話するやうな話をも、精米所の主人が爲てゐた。

「私が此旦那方に、どのくらゐお世話になつたか知れないんです。」

お島はさう言つて小野田にも話したが、そこにお島の身のうへについて、何か色つぽい插話がありさうに、感の鈍い小野田にも想像されるほど、彼等はお島と狎々しい口の利方をしてゐた。

肉づいた手に、指環などを光らせてゐる精米所の主人のことを、小野田は山にゐた時のお島の旦那か何ぞであつたやうに猜つて、彼等が歸つたあとでそれをお島の前に言出した。

「ばかなことをお言ひでないよ。」

お島は散らかつたそこらを取片着けながら、紅い顔をして言つた。たつぷりした癖のない髪を、この頃一番自分に似合ふ丸髷に結つて、山の客が來てからは、彼女は一層化粧を好くしてゐた。指環なども、顔の廣い彼女は、何處かの寶玉屋から取つて來て、見なれない品を不斷にはめてゐた。それが小野田の目に、お島を美しく好ましく見せてゐた。

「その證據には、お前は私のおやぢがこの席へ顔を出すのを、大變厭がつたぢやないか。」

私が出て挨拶をするといつて、聽かなかつた父親に顔を顰めて、奥へ引込めておくやうにしたお島の仕打を、小野田は氣にかけて言出した。

「だつて可恥しいぢやないか。お前さんの前だけれど、あのお父さんに出られて堪るもんですか。お前さんの顔にだつてかゝります。」

「昔の旦那だとおもつて、餘り見えをするなよ

「人聞のわるいことを言つて下さるなよ。」お島は押被せるやうに笑つた。

「あの人達に笑はれますよ。それが譃なら聽いてみるがいゝんです。」

「さうでもないさ、あんな者が來たつてそんなに大騷ぎをする譯がない。」

「煩いよ。」お島は終に呶鳴出した。

九十七

暑い東京にも居堪らなくなつて、濱屋がその宿を引揚げて山へ歸るまでに、お島は幾度となくそこへ訪ねて行つたが、彼女がそれを小野田、全く祕密にはしておけなかつた。ちよつと

手許の苦しい時なぞに、お島は濱屋から時借をして來た金を、小野田の前へ出した。その男がどんな場合にも、自分の言ふことを聽いてくれるやうな關係にあることを、微見かさずにゐられなかつた。

濱屋はその通つてゐる病院で、もう十本ばかり、やつてもらつた注射にも飽きて、また出るにしても、盆前には何うしても一度歸らなければならぬ家の用事を控へてゐる體であつたが、お島たち夫婦の内幕が、初め聽いたほど巧く行つてゐないことが、幾度も逢つてゐるうちに、自然に彼女の口から洩聞かされるので、その事も氣にかゝつてゐるらしかつたが、やつぱり自分の手でそれを何うしようと云ふ氣にもなれないらしかつた。

「そんな事を言はずにまあ辛抱するさ。」

お島はその時の調子で、どうかすると心にもない自分の身の上話がはずんで、男に凭れかゝるやうな姿態を見せたが、聽くだけはそれでも熱心に聽いてゐる濱屋が、何時でもさういつた風の應答ばかりして笑つてゐるのが物足りなかつた。

「あの時分とは、まるで人が變つたね。」お島は男の顔を眺めながら言つた。

「變つたのは私ばかりぢやないよ。」お島は男にさう云つて、自分の丸髷姿をでも見返してゐるやうな羞恥を感じて來た。

「月日がたつと誰でもこんなもんでせうか。」

お島は二階の六疊で、疲れた體を膝掛のうへに横へてゐる男の傍に坐つて、他人行儀のやうな口を利いてゐたが、興奮の去つたあとの彼女は、長く男の傍にもゐられなかつた。

部屋には薄明るい電氣がついてゐた。お島は何うしても直り合ふことの出來なくなつたやうな、その時の厭な心持を想出しながら、涼氣の立つて來た忙しい夕暮の町を歸つて來たが、氣重いやうな心持がして、店へ入つて行くのが憚られた。

「己も一度その人に逢つておかう。」

小野田はお島から金を受取ると、さう云つて感謝の意を表した。

「可けない〳〵」お島はそれを拒んで、「あの人は莫迦に内氣な人なんです。田舍にもあんな人があるかと思ふくらゐ、溫順しいんですから、人に逢ふのを、大變に厭がるんです。」

小野田はそれを氣にもかけなかつたが、やつぱり其男のことを聽きたがつた。

「それは東京にも滅多にないやうな好い男よ。」

お島は[illegible]たが、自分にも[illegible]なるとは信じ得なかつた。

九十八

避暑客などの雜沓してゐる上野の停車場で、お島が濱屋に別れたのは、盆少し前の或日の午後であつたが、そんな人達が多く引揚げて行つてから、お島たちはまた自分の家のぱた〳〵になつてゐることに氣がついた。

濱屋はお島に買はせた色々の東京土産なとを提げこんで、ハナマを[illegible]に飾り、お島が買つてくれた草履をはいて、輕い打扮で汽車に乘つたのであつたが、お島も絽縮緬の羽織なとを着込んで、結立の丸髷頭で來てゐた。

足音の騷々しい構内を、二人は控室を出たり入つたりして、發車時間を待つてゐたが、このステーションの氣分に浸つてゐると、自然に以前の自分の山の生活が想出せて來て、涙含ましいやうな氣持になるのであつた。

「どうでせう。西洋人は活潑でいゝね。」

日光へでも行くらしい、男女の外國人の綺麗な姿が、彼等の前を横ぎつて行つたとき、お島は男に別れる自分の寂しさを蹴散らすやうに、さう云つて、哄笑の聲を放つた。

「何うだね、一緒に行かないか。」

濱屋は瀬戸物のやうな美しい皮膚に、この頃はいくらか日焦がして、目の色も鋭くなつてゐたが、お島が暫くでも夫婦ものの旅行と見られるのが嬉しいやうな、目眩しいやうな氣持のするほど、それは様子が好かつた。

客車に乗つてからも、お島は窓の前に立つて、元氣よく話を交へてゐたが、そのうちに汽車がする〳〵出て行つた。

「そのうち景氣が直つたら、一度温泉へでも來るさ。」

濱屋は窓から顔を出して、どうかすると睫毛をぬらしてゐるお島に、そんな事を言つてゐた。

お島はとぼ〳〵と構内を出て來たが、やつぱり後髪を引かるゝやうな未練が殘つてゐた。

盆が來ると、お島は顧客先への配りものやら、方々への支拂やらで氣忙しい其日々々を送つてゐた。そして落着いてから葉書をよこした濱屋のことも忘れがちでゐたが、自分たちの不幸な夫婦であつたことが、一層判つて來たやうな氣がした。お島は時々その事に思耽つてゐるのであつたが、それを小野田に感づかれるのが、不安であつた。お島は可笑しい自分の祕密な經驗を押隠すことを怠らなかつた。

暑い盛に博覧會が閉されてから、お島たちの居周の町々には、急に潮がひいたやうに寂しさが襲つて來たと同時に、二人の店にもこれまで紛らされてゐたやうな、頽廢の色が、まざ〳〵と目に見えて來た。

多くの建物の、日に〳〵壊されて行く上野を、店を支へるための金策の奔走などで、毎日のやうにお島は通つた。やがてまた持切れさうもない今の家を一思ひに放擲して了ひたいやうな氣分になつてゐた。

「こゝは縁起がわるいから、私たちはまたどこかで新規蒔直しです。」

こゝへ引移つて來てから、貸越の大分たまつて來てゐる羅紗の仲買などに、お島は投出したやうな捨鉢な調子で言つてゐた。

九十九

本郷の通の方で、第四番目にお島たちが取着いて行つた家を、悉皆手を入れて、洋風の可也な店つきにすると同時に、棚に羅紗などを積むことができたのは、それから二三年もたつて、店の名が相應に人に知られてからであつたが、最初二人がそこへ引移つていつた時には、店へ飾るものといつては何一つなかつた。

愛宕時代に借つたのとは、また別の方面から、お島が大工などを頼んで來たとき、二人の懐には、店を板敷にしたり、棚を張つたりするために必要な板一枚買ふだけの金すらなかつたのであつたが、新しいものを築き創めるのには多分の興味と刺戟とを感ずる彼女は、際どいところで、思ひもかけない生活の彈力性を喚起されたりした。

「面倒ですから、材料も私の方から運びませうか。」

父親の縁故から知つてゐる或叩き大工のあることを想出して、そこへ駈けつけていつた彼女は、仕事を擴張する意味で普請を囑んだところで、彼は呑込顔にさう言つて引受けた。

「然うしてもらひませうよ。私達は材料を詮議してる隙なんかないんだから。」

材木がやがて彼等の手によつて、車で運びこまれた。

「何うです、[illegible]あないぢやありませんか。」

大工が仕事を始めたところで、釘をすら買ふべき小錢に事かいてゐたお島は、また近所の金物屋から、それを取寄せる智慧を缺かなかつた。

「これから出來あがつたら、何時でもまたちよい／＼貰ひに來るのに、一々お金を出すのも面倒ですから、お勘定にしておいて下さいまし。少しばかりの手つけをおいて行きませう」

お島は夜を待つまもなく、小僧の順吉に背負ひださせた蒲團に替へた、少し許りの金のうちから、いくらかを取出してそれを渡した。その蒲團は、彼女が鶴さん時代から持古してゐる銘仙ものの代物であつた。

「乗るか反るか、お上さんはこゝで最後の運を試すんだよ。」

萌黄の風呂敷に包んだその蒲團を背負ひださせるとき、お島は氣高な調子で、その時までついて來た順吉を勵ました。

「お前もその意でやつておくれ。この恩はお上さん一生忘れないよ。」

涙含んだやうな顔をして、それを背負つて行く順吉のいぢらしい後姿を見送つてゐるお島の目には、涙が入染んで來た。

「どうでせう。職人は小さい時分から手なづけなくちや駄目だね。順吉だけは、どうか渡職人の風に染ましたくないもんだ。それだけでも私たちは茫然しちやゐられない。」

お島は大工の仕事を見てゐる、小野田の傍へ來て呟いた。

表では大工が、二人ばかりの下を使つて、せつせと木拵へに働いてゐた。

百

あらかた出來あがつたところで、大工の手を離れた店の飾窓や、入口の戸に嵌るべき硝子を、お島が小野田に言はれて、根津に家を持つたときから顔を知られてゐる或硝子屋へ懸あひに行つたのは、それから間もなくであつた。

お島はその日も、新しい店を持つた吹聽かたがた、朝から顧客まはりをして、三時頃にやつと歸つて來たが、夏場はどこでも註文がなくて、代りに一つ二つの直しものを受取つたきりであつた。

外は黄熟した八月の暑熱が、じり／＼大地に滲透るやうであつた。蟬の聲などもまだ木蔭に涼しく聞かれる頃に、家を出ていつた彼女は、行く先々で、取るべき金の當がはづれたり、主が旅行中であつたりした。古くからの昵みの家では、彼女は病氣をしてゐる子供のために、氷を取替へたり、團扇で煽いだりして、三時間も人々に代つて看護をしてゐたりして、目がくら／＼するほど空腹を感じて來た頃に、家へ歸つて來たのであつた。

奥では大工がみんな晝寝をしてゐた。小野田もミシンの蓋をすると奥の六疊の涼しい窓の下で、横はつてゐた。

お島はそこらをがたぴし言はせて、着替などをしてゐた。根津の家を引拂ふ前に、田舎へ還してしまつた父親の、毎日々々飲みつゞけた酒代の、したゝか滯つてゐる酒屋の註文聞の一人に、途中で出逢つて、自分の方からその男に聲をかけて來なければならなかつたことなどが、小野田がその父親を呼寄せさへしなければ、あの家も何うか恁うか持續けて行けたやうに考へられた。あの飲んだくれのために、何のくらゐ自分の頭腦が掻廻され、働きが鈍らされたか知れないと思つた。

「撲ちのめしても飽足りない奴だ。」

お島は、醉つたまぎれに自分を離縁しろといつて、小野田を手古擦らせてゐたと云ふ父親の言分から、内輪が大揉めにもめて、到頭田舎へ歸つて行くことになつた父親に對する憎惡が、また胸に燃えたつて來るのを覺えた。小野田の寢顔までが腹立しく見返られた。

「せつせと仕事をして下さいよ。莫迦みたいな

顔して寝てゐちや困るぢやないか。」

小野田は目をあいて、ぢろりと彼女の顔を見たとき、お島はいら／＼した聲で言つた。

お島が茶の間で飯を食べてゐる時分に、やつと小野田はのそ／＼起出して來た。

「仕事々々つて、さうがみ／＼言つたつて仕事ができるもんぢやないよ。」

小野田は火鉢の傍へ來て、莨をふかしはじめながら、また眠足りないやうな赤い目をお島の方へ向けた。

「それよりか硝子の工面もしなければならず、店だつて商なしにはおかれやしない。」

「知らないよ、私は自分でもずつと心配するがいゝんだ。」お島は言返した。

百一

小野田はそこへ脱ぎつぱなしにしたお島の汗ばんだ襦袢や襟が目に入つたり、不斷着を取出すために引掻まはした押入のごたくさした様子などを見ると、迚も世帯は持てない女だといつて、自分のために縁談を纏めた父親の顔が思出された。

「働きがあるか何だか知らないが、まあ大變なもんだ。迚も女とは思へんね。」

さうも言つて、荒いお島の調子に驚いてゐた父親の善良さうな顔も思出された。

「朝から出て、あれは一日どこを何をして歩いてるだい。」

父親はさうも言つて、不思議がつたが、お島自身に言はせると、朝は誰かが臺所働きをしてくれて、氣持よく家を出なければ、とても調子よく外で働くことはできないといふのであつた。歸つて來た時にも、自分を迎へてくれる者の好い顔をでも見なければ埋らないと言ふのであつた。それで小野田は順吉と一緒に、何うかすると七輪に火をおこしたり、漬物桶へ手を入れたりすることを行つてゐるのであつたが、お島が一人で面白がつてやつてゐる顧客まはりも、集金の段になつてくると、やつぱり小野田自身が出て行くより外ないやうなことが多かつた。

夕方にお島は機嫌を直して、硝子屋の方へ出て行つた。

「この暮に、出來あがれば、少し資本を拵へて、更に來年は己が新商向の廣告をまいて、有らゆる中學の制服を取らうと思つてゐる。」

小野田はさう言つて、この頃から考へてゐた自分の平易で實行し易いやうな企畫をお島に話した。

「それには洋服を着て、お前が諸學校へ入込んで行かなければならんのだ。」

「駄目です／＼。洋服なんかやつたつて、どれだけ儲かるもんですか。」

そんな際物仕事が、自分の腕にでもかゝるか何ぞのやうに考へてゐるお島は、さう言つて反抗したが、好い客を惹附けるやうな立派な場所と店と資本とをもたない自分達に取つては、然うでもして數でこなすより外ないことを小野田は主張した。

學生相手の樂なことはお島も知つてゐた。洋服姿で、若い學生たちの集りのなかへ入つて行く自分の姿を想像するだけでも、彼女は不思議な興味を唆られた。

「さうすると、お前の腕は直に學生仲間に廣まつてしまふよ。」

小野田はその妻や娘を賣物にすることを能く知つてゐる、思附のある興行師か何ぞのやうな自分の企畫で、成功に渇いてゐる彼女を使嗾する術を得たかのやうに、自信のある目を輝かしてゐた。

「ふむ。」お島は自分がいつからかぼんやり望んでゐたことを、小野田が探り當ててくれたや

うた興味を感じた。男が頼しい俐巧もののやうに思へて來た。
「それは確にあたるね。」お島はさういつて贊成した。

百二

横濱に店を出してゐる知合の女唐服屋で、お島が工面した金で自分の身裝を悉皆拵へて來たのは、それから大分たつてからであつた。
新築の家は悉皆出來あがつて、硝子もはまつた飾窓に、小野田が柳原から見つけて買つて來た古い大禮服の金モオルなどが光つてゐた。
一度姿見を買つたことのある硝子屋では、主人はその申込を最初は斷つたが、お島のことを知つてゐる子息が、自分で引受けて要るだけの硝子を入れてくれた。
「老爺はあゝいひますけれど、お上さんの氣前を買つて、私がお貸し申しませう。だから入れられるだけ入れてみて下さい。倒されゝばそれ迄です。」
そしてその翌朝、彼は小僧と一緒に硝子を運びこんで、それを飾窓や入口のドアなどに切りはめてくれた。
「お前さんは若いにしては感心だよ。さう云ふ風に出られると、誰だつて贔屓にしないぢやゐられないからね。また好いお得意をどつさり世話してあげますよ。」
お島はさう言つて、その硝子屋を還した。
看板を書くために、ペンキ屋が來たり、小野田が自轉車で飛廻して、方々當つてみてあるいた羅紗のサムプルが持込まれたり、スタイルの畫見本の額が、店に飾られたりした。
白い夏の女唐服に、水色のリボンの卷かれた深い麥稈帽子を冠つて、お島はやがて得意まはりをはじめるやうになつたのは、それから大分たつてからであつた。
「どうです、似合ひますか。」などと、お島は姿見の前を離れて、その頃また來ることになつた木村といふ職人や小野田の前に立つた。コルセットで締めつけられた太い胴が、息がつまるほど苦しかつた。皮膚の汚點や何かを隱すために、こつてり塗りたてられた顏が、凄艶なやうな蒼味を帶びてみえた。
「莫迦に若くみえるね。少くとも布哇あたりから歸つて來た手品師くらゐには踏めますぜ。」
木村は笑つた。
お島はその身裝で、親しくしてゐるお顧客をまはつて行つた。その中には若い齒科醫や辯護士などもあつた。
「どこの西洋美人がやつて來たかと思つたら、君か。」
途中で行逢つた若い學生たちは、さういつて不思議な彼女の姿に目を瞠つた。
「その身裝で、ぜひ僕んとこへもやつて來てくれたまへ。」
彼等の或者は、肉づきの柔かい彼女の手に接吻をして、別れて行つたりした。
「洋服はばかに評判がいゝんですよ。」
お島は日の暮に歸つて來ると、急いで窮屈なコルセットをはづしてもらふのであつたが、薄桃色肉のぼちや/\した體が、はじめて自分のものらしい氣がした。
小野田は色々の學校へ新に入學した學生たちの間に撒くべき、廣告札の意匠などに一日腐心してゐた。

百三

時間割表などの刷込まれた、二つ折小形のその廣告札を、羅紗の袋に入れて、お島は朝早く新入生などの多く出入する學校の門の入口に立つた。
「どうぞどつさりお持ちくださいまし。そして

近いうちに家が建つことになつてゐる其の原には、櫟の木やアカシヤなどが、晝でも涼しい蔭を作つてゐた。夏草が青々と生繁つて、崖のうへには新しい家が立並んでゐた。

そこらが全く夜の帷に包まれる頃まで、草原を乗りまはしてゐる、彼女の白い姿が、往來の人たちの目を惹いた。

木の蔭に乗物を立てかけておいて、お島は疲れた體を、草のうへに休めるために跪坐んだ。裳裾や下足袋にはしと／＼水分が濕つて、草間から蟲が啼いてゐた。

お島はじつとり汗ばんだ體に風を入れながら、鬱陶しい衣ものを取つて、軽い疲勞と、健かな血行の快い音に醉つてゐた。腿と臀部との肉に懈い痛みを覺えた。小野田は彼女の肉體に、生理的傷害の來ることを虞れて、時々それを氣にしてゐたが、自轉車で町を疾走するときの自分の姿に憧れてゐるやうなお島は、それを考へる餘裕すらなかつた。

「少しくらゐ體を傷めたつて、介意ふもんですか。私たちは何か異つたことをしなければ、とても女で世に出せやしませんよ。」

お島はさう言つて、またハンドルに掴つた。

朝はやく、彼女は獨りでそこへ乗出して行くほど、手があがつて來た。そして露滴の髪にかかるやうな木蔭を、そつちこつち乗りまはした。新らしい風が裾に孕んで、草の實が淡青く白い地についた。崖のうへの垣根から、書生や女たちの、不思議さうに覗いてゐる顔が見えたりした。土堤の小徑から、子供たちの投げる小石が、草のなかに落ちたりした。

「おそろしい疲れるもんですね。」

一月ほどの練習をつんでから、初めて銀座の方へ材料の仕入に出かけて行つて、歸つて來たお島は、自轉車を店頭へ引入れると、がつかりしたやうな顔をして、そこに立つてゐた。

「須田町から先は、自分ながら可怕くて爲樣がなかつたの。だけど譯はない。二三度乗りまはせば屹度平氣になれます。」お島は自信ありさうに言つた。

百五

忙しいその一冬を自轉車に乗りづめで、閑な二月が來たとき、お島は時々疑問にしてゐながら、診てもらふのを厭がつてゐた、自分の體をふとした機會から、病院で醫者に診せた。

「……毛が悉皆擦切れてしまつたところを見ると、餘程劇なもんですね。」

お島はさう言つて、そこを小野田に見せたりなどしてゐたが、それはそれで質の外面の傷害に過ぎないらしかつた。

その病院では、お島の親しい齒科醫の細君が、腹部の切開で入院してゐた。そこへお島は時々見舞に行つた。

そんなところへも自分の商賣を廣告するつもりで、看護婦や下足番などへの心づけに、切放れの好いお島は、直に彼等とも友達になつたが、一二度體を診てもらふうちに、親しい口を利きあふ若い醫師が、一人も二人もできた。

段々肥立つて來た、黄色あがりの細君の傍で、お島は持つて行つた花を花瓶に插したり、薄くなつた頭髪に櫛を入れて、束ねてやつたりして、半日も話相手になつてゐた。

「どう云ふんでせう、私の體は……」

お島は看護婦などのゐる傍で、いつかも印判屋の上さんに訊ねたと同じことを言出した。

「夫婦の交りなんてものは、私にはたゞ苦しいばかりです。何の意味もありません。」

「それは貴女がどうかしてるのよ。」

患者は日ましに血色のよくなつて來た顔に、血の氣のさしたやうな美しい笑顔を向けて、お島の顔を眺めた。

「でも可笑しいんですの。こんなことを言ふのは、自分の恥を曝すやうなもんですけれど、實際あの人が變なんです。」

お島は紅い顏をして言つた。

「えゝ、そんな人も千人に一人はありますね。」

お島が診てもらつた醫者に、それを言出すほど氣がおけなくなつたとき、彼はさう言つて笑つてゐた。

位置が少し變つてゐるといはれた自分の體を、お島はそれまでに、もう幾度も療治をしてもらひに通つたのであつた。

「當分自轉車をおやめなさい。壓迫するといけない。」

お島は苦しい療治にかゝつた最初の日から、さう言はれて毎日和服で外出をしてゐた。

長いお島の病院がよひの間、小野田が、多く外まはりに自轉車で乘出した。

顧客先で、小野田が知合になつた生花の先生が出入りしたり、蓄音器を買込んだりするほど、その頃景氣づいて來てゐた店の經營が、暗いお島などの頭腦では、ちよつと考へられないほど、一時の繁[illegible]になつてゐたが、それはそれとして、[illegible]た彼女は、その日[illegible]い氣持で、生活の新しい幸福を豫期しながら、病院の門を潜つた。

百六

小野田は時々外廻りに歩いて、あとは大抵店で裁をやつてゐたが、隙がありさへすれば蓄音器を弄つてゐた。樂遊や奈良丸の浪華節に聽惚れてゐるかと思ふと、いつかうと〳〵眠つてゐるやうなことが多かつた。

しげ〳〵足を運んで來る生花の先生は、小野田が段々好いお顧客へ出入りするやうになつたお島に習はせるつもりで、頼んだのであつたが、一度も花活の前に坐つたことのない彼女の代りに、自分二階で時々無器用な手容をして、づんどのなかへ花を挿してゐるのを、お島は見かけた。

もと人の妾などをしてゐたと云ふ不幸なその女は、何うかすると二時間も三時間も遊んで歸ることがあつた。上方に近い優しい口の利方などをして、名古屋育ちの小野田とはうまが合つてゐた。

「私だつて偶には遊樣にお花も活けてみたうございますよ。」

外から歸つて、ふと二階の梯子をあがつて行くお島は、耳に、その日も午から來て話込んでゐたその年増の媚かしい笑聲が洩れ聞えた。嫉妬と挑發とが、彼女の心に發作的におこつて來た。

女が歸つて行くとき、お島はいきなり帳場の方から顏を出して言つた。

「お氣の毒さまですがね、宅はお花なんか習つてゐる隙はないんですから、今日きり私からお斷りいたします。」

お島は硬ばつた神經を、强ひておさへるやうにして、さう言ひながら謝禮金の包を前においた。

もう三十七八ともみえる女は、その時も綺麗に小皺の寄つた荒んだ顏に薄化粧などをして、古いお召の被布姿で來てゐたが、お島の權幕に怯ぢおそれたやうに、悄々出ていつた。

「この莫迦！」

二階へ駈けあがつて行つたお島は、いきなり小野田に浴せかけた。毎日髮や前髮を大きくふつくらと取つた丸髷姿で出てゐた彼女は、大きな紋のついた羽織もぬがずに、外眦をきり〳〵させて、そこに突立つてゐた。

「髭なんかはやして、あんなものにでれ〳〵してゐるなんて、お前さんも餘程な薄野呂だね。」

お島はさう言ひながら、そこにあつた花屑を

取りあげて、げつそりとしてゐる小野田の顏へ叩きつけた。吊りあがつたやうな充血した目に、涙がにじみ出てゐた。

「何をする。」

小野田も怒出して、そこにあつた水差を取つてお島に投げつけた。彼女の御召の小袖から、水がだら／＼と垂れた。

負けぬ氣になつて、お島も床の間に活かつたばかりの花を顚覆して、へし折り／＼して小野田に投りつけた。

劇しい格鬪が、直に二人のあひだに始まつた。小野田が力づよい手を弛めたときには、彼女の髷がばら／＼に紊れてゐた。さうして二人は暫く甘い疲勞に浸りながら、默つて壁の隅つこに向きあつて坐つてゐた。

百七

二人が階下へおりて行つたのは、もう電燈の來る時分であつた。病院通ひをするやうになつてから、可恐しいものに觸れるやうな氣がして、絶えて良人の側へ寄らなかつた彼女は、その時も二人の肉體に同じやうな失望を感じながら、そこを離れたのであつた。

「あなたは別に女をもつて下さい。」

お島はさう言つて、根津にゐた頃近所の上さんに勸められて、小野田が時々逢つたことのある女をでも、小野田に取戻さうかとさへ考へてゐた。

「然うでもしなければ、とてもこの商賣はやつて行けない。」お島はさうも考へた。

産が好いとかいはれてゐたその女は、こゝへ引越してからも、一二度店頭へ訪ねて來たことがあつたが、お島はそれの始末をつけるために、砲兵工廠の方へ通つてゐる或男を見つけて、二人を夫婦にしてやつたのであつた。

小野田がどうかすると、その女のことを思出して、裏店住ひをしてゐる、戸崎町の方へ訪ねて行くことを、お島もうす／＼感づいてゐた。

「あの女は何うしました。」

お島は思出したやうに、それを小野田に訊ねたが、その頃は食物屋などに奉公してゐた當座で、いくらか身綺麗にしてゐた女は、亭主持になつてから悉皆身裝などを崩してゐるのであつた。

「いくら向に未練があつたつて、あの頃とは違ひますよ。亭主のあるものに手を出して、呶鳴込まれたら何うするんです。」

小野田がまだ全く忘れることのできない其女のことを口にすると、お島はさう言つて宥めたが、別れてから、小野田に執着を持つてゐる女を不思議に思つた。

「あいつの亭主は、そんな事を怒るやうな男ぢやない、おれがあいつの世話をしてゐたことも、ちやんと知つてゐて、今でもさういふことには無神經でゐるんだ。」

小野田はさう言つて笑つてゐた。

二三日前から、また時々自轉車で乘出すことにしてゐたお島が、ある晩九時頃に家へ歸つて來ると、女から、呼出をかけられて、小野田は家にゐなかつた。

「どこへ行つたえ。」

お島は何のことにも能く氣のつく順吉に、私とたづねた。

「白山から來たと云つて、若い衆が手紙を持つて、迎ひに來ましたよ。私が取次いたんだから、間違ひはありません。」

順吉はさう云つて、まだ洋服もぬがずにゐるお島の血相のかはつた顏を眺めてゐた。

「ぢやまた何處かで媾曳してるんだらうよ。上さん今夜こそは一つ突止めてやらなくちや……。」

お島は急いでコルセットなどを取りはづす

と、和服に着替へて、外へ飛出していつた。時々小野田の飲みに行く家を彼女は思出さずにはゐられなかつた。

百八

秘密な會合をお島に見出されたその女は、その時から頭腦に變調を來して、幾夜かのあひだお島たちの店頭へ立つて、喚つたり泣いたりした。

女はお島に踏込まれたとき、眞蒼になつて裏の廊下へ飛出したのであつたが、その時段梯子の上まで追かけて來たお島の形相の凄さに、取殘されでもするやうな恐怖にわなゝきながら、一散に外へ駈出した。

「この義理しらずの畜生！」

お島は部屋へ入つて來ると、いきなり呶鳴りつけた。野獸のやうな彼女の體に觸つたことが出來ない狂暴の血が焦けたゞれたやうに渦をまいてゐた。

締切つたその二階の小室には、かつかと燃え照つてゐる強い瓦斯の下に、酒の匂などが漂つて、耳に傳はる甘い獸肉の香が、燃えつくやうな彼女の頭腦を、嚴しく掻亂した。白い女のゴムのやうな、彼女の血走つた目に異常な衝動を與へた。

手に傷などを負つて、一人がそこを出たときには、春雨のやうな雨が、ぼつ／＼顏にかゝつて來た。

まだ人通りのぼつ／＼ある、靜かな春の宵に、女は店頭へ來て、飾窓の硝子に小石を撒きちらしたり、ヒステリックな蒼白い笑顏を、ふいにドアのなかへ現はしたりした。

「お上さんはゐるの。」

女は臆病らしく奧口を覗いたりした。

「旦那をちよつと此處へ呼んで下さいな。」

女はさう言つて、しつこく小僧に賴んだ。

小僧は面白さうに、にや／＼笑つてゐた。

「旦那は今ゐないんだがね、お前さんも亭主があるんだから、早く歸つて休んだら可いだらう。」

お島は側へ來て、やさしく聲かけた。そして幾許かの金を、小さい彼女の掌に載せてやつた。

女はにや／＼と笑つて、金を瞶めてゐたが、投げつけるやうにしてそれを押戻した。

「わたしお金なんか貰ひに來たのぢやなくてよ。私を旦那に逢はしてください。」

女はそこを逐攘はれると、外へ出ていつまでもぶつ／＼言つてゐた。そして男の歸つて來るのを待つてゐるか何ぞのやうに其處らをうろうろしてゐた。

「そつちに言分があれば、此方にだつて言分がありますよ。」

亭主から賴まれたと云つて、四十左右の、遊人風の男が、押込んで來たとき、お島はさう言つて應對した。そして話が込入つて來たときに、彼女の口から洩れた、伯父の名が、その男を全くその談から手を引かしめてしまつた。順利であつた伯父の名が、世話になつたことのあるその男を反對に彼女の味方にして了ふことができた。

百九

相變らずの小野田が、田舍ではまだ物珍しがられる蓄音器などをさげて、親類の店が失敗したをりに逐返したきりになつてゐる、父親を悦ばせに行つた頃には、彼が留守になつても新聞へ出たけの、腕の上手な若い男などが來てゐた。

知つた職人が、この頃小野田の裁を物足らず思つてゐるお島に、その男を周旋したのは、問屋の註文などの盛んに出た四月の頃であつた

が、その職人は、來た時からお島の氣に入つてゐた。
　自分でも店を有つたりした經驗のある、その職人は、最近に一緒にゐた女と別れて、それまで持つてゐた世帶を疊んで、また職人の群へ陷ちて來たのであつたが、惡いものには滅多に剪刀を下さうとしない、彼の手に裁たれ、縫はるゝ服は、得意先でも評判がよかつた。おつつけ仕事を間に合はすことのできないその器用な遲い仕事振を、お島は時々傍から見てゐた。體つきのすんなりしたその樣子や、世間に明るいその男は、お島たちの見も聞きもしたことのないやうな世界を知つてゐたが、親しくなるにつれて小野田と酒などを飲んでゐるときに、ちよいちよい口にする自分自身の情話などが、一層彼女の心を惹いた。
「こんな仕事を私にさせちや損ですよ。」
　彼はさう云つて、どんな忙しいときでも下等な仕事には手をつけることを肯じなかつた。
「それだからお前さんは貧乏する譯さね。」
　お島も體の弱いその男を、そんな仕事に不斷に働かせるのを、痛々しく思つた。
「それにお前さんは人品がいゝから、身が持てないんだよ。」
　お島は話ぶりなどに愛嬌のあるその男の傍にすわつてゐると、自然に顏を赧くしたりした。黑子のやうな、青い小さい入墨が、それを入れたとき握合つた女とのなかについて、お島に異樣な憧憬をそゝつた。
「いくつの時分さ。」
　お島はその手の入墨を發見したとき、耳の附根まで紅くして、猥な目を睜つた。男はえへらえへらと、締りのない口元に笑つた。
「あつしが十六ぐらゐのときでしたらう。」
「その女はどしたの。」
「どうしたか。多分大阪あたりにゐるでせう。そんな古い口は、もう疾のむかしに忘れつちやつたんで……。」
　暮に彼の手によつて、濁つたところへ沈められた若い女のことが、まだ頭腦に殘つてゐた。
「そんな薄情な男は、私は嫌ひさ。」
　お島はさう言つて笑つたが、男がその時々に、さばさばしたやうな氣持で棄てて來た多くの女などに關する閱歷が、彼女の心を蕩かすやうな不思議な力をもつてゐた。
　蓄音器に、レコードを取りかへながら、薄ら眠い目をしてゐる小野田の傍をはなれて、お島はその男と、そんな話に耽つた。

百十

　小野田が田舍へ立つてから間もなく、急に濱屋に逢ふ必要を感じて來たお島が、その男に後を頼んで、上野から山へ旅立つたのは、初夏のある日の朝であつた。
　病院で躰の療治をしてからのお島は、先天的に缺陷のない自分の肉體に確信が出來たと同時に、今まで小野田から受けてゐた壓迫の償ひをどこかに求めたい願ひが、彼女の頭腦に色々の好奇な期待と欲望とを湧かさしめた。いつか朧げに抱いてゐた生理的精神的不滿が、若いその職工のエロチックな話などから、一層誘發されずにはゐなかつた。
　そしてそれを考へるときに、彼女はその對象として、濱屋を心に描いた。
「あの人に一度逢つて來よう。そして自分の疑ひを質さう。」
　お島はそれを思ひたつと、一日も早く其男の傍へ行つて見たかつた。
　一つはそれを避けるために田舍へ歸つた小野田がゐなくなつてからも、まだ時々店頭へ來て暴れたり呶鳴つたりする狂女が、巣鴨の病院へ送込まれてから、お島はやつと思出の多い

その山へ旅立つことができた。

全く色情狂に陷つたその女は、小野田が姿を見せなくなつてからは、一層心が狂つてゐた。そして近所の普請場から鉋屑や木屑を拾ひ集めて來て、お島の家の裏手から火をかけようとさへするところを、見つけられたりした。近所の人たちの願出によつて、警察へ引張られた彼女が、梁から逆さにつられて、目口へ水を浴びせられたりするところを、お島も一度は傍で見せつけられた。

「水をかけられても、目をつぶらないところを見ると、これは確かに狂氣です。」

、[illegible]などの懸けられてあるその室で、お島は係の警官から、笑ひながらそんな事を言はれた。

「私は二三日で歸つて來ますからね、留守をお願ひ申しますよ。」

お島は立つ前の晩にも、その職人に好きな酒を飲ませたり、小遣をくれたりして頼んだ。

「[illegible]ごとに歸つて來るやうなことはないだらうと思ふけれど、偶然して良人が歸つて來たら、旨い工合に話しておいて下さいよ。前に[illegible]ゐた人が、お詣りに行つたと然う言つてね。」

お島は顏を赧めながら言つた。

「可ござんすとも。ゆつくり行つておいでなさいまし。」

その男はさう言つて潔く引受けたが、胡散な目をして笑つてゐた。

「眞實はわたし恁ういふ人があるんです。」

お島は終にはそれを言出さずにはゐられなかつた。

「けどこれだけはあの人には秘密ですよ。」

百十一

博覽會時分に上京して來た、山の人たちに威張つて逢へるだけの身のまはりを拵へて、お島があわたゞしい思で上野から出發したのは、六月の初めであつた。

四五年前に、兄に唆かされて行つた頃の暗い悲しい心持などは、今度の旅行には見られなかつたが、秘密な歡樂の果をでも偸みに行くやうな不安が、汽車に乘つてからも、時々彼女の頭腦を曇らした。

汽車の通つて行く平野のどこを眺めても、昔の記憶は浮ばなかつた。大宮だとか高崎だとかいふやうな、大きなステーションへ入るごとに、彼女は窓から首を出して、四下を眺めてゐたが、しばらく東京を離れたことのない彼女には、どこも初めてのやうに印象が新しかつた。高崎では、そこから岐れて伊香保へでも行くらしい男女の樂しい旅の明るい姿の幾組かが、彼女の目についた。蓄音器をさげて父親を悦ばせに行つた小野田が思出された。不恰好な洋服を着たり、自轉車に乘つたりして、一年中働いてゐる自分が、都で見くびつてゐるつもりの男のために、好い工合に驅使されてゐるのだとさへしか思はれなかつた。

「わたしは莫迦だね。濱屋に逢ひに行くのにさへ、こんな氣兼をしなくてはならない。あの人はこれまでに、私に何をしてくれたらう。」

お島は口を利くものもない客車のなかで、静かに東京の埃のなかで活動してゐる自分の姿が考へられるやうな氣がした。慾得のためにのみ一緒になつてゐるとしか思へない小野田に對する我儘な反抗心が、彼女の頭腦をさうも偏倚せしめた。何のために血眼になつて働いて來たか解らないやうな、孤獨の寂しさが、心に沁擴がつて來た。

桐の花などの咲いてゐる、夏の繁みの濃い平野を横ぎつて、汽車はいつしか山へさしかゝつてゐた。高崎あたりで已に日光のみえてゐた梅雨

時の空が、山へ入るにつれて陰鬱に曇つてゐるのに氣がついた。窓のつい眼のさきにある山の姿が、淡墨で刷いたやうに、水霧に裹まれて、目近の雜木の小枝や、崖の草の葉などに漂うてゐる霧が、しぶきのやうな水滴を滴垂らしてゐたりした。白い岩のうへに、目のさめるやうな躑躅が、古風の屏風の繪にでもある樣な鮮かさで、吹いてゐたりした。水がその巖間から流れおちてゐた。

深い溪や、高い山を幾つとなく送つたり迎へたりするあひだに、汽車は幾度となく高原地の靜かなステーションに停つた。旅客たちは敬虔なやうな目を側だてて、山の姿を眺めた。

ステーションへつく度に、お島は待遠しいやうな氣がいら〳〵した。

山の町近くへ來たのは、午後の四時頃であつた。糠のやうな雨が、そのあたりでも窓硝子を曇らしてゐた。

百十二

目ざす町に近い或小驛で、お島は乘込んで來る三四人の新しい乘客が、自分の向側へ來て坐るのを見た。

それらの人は、どこか此の近邊の温泉場へでも遊びに行つて來たものらしく、汽車が動きだしてからも、手々にそんな話に耽つてゐた。山の町の人達の噂も、彼等の口に上つたが、濱屋濱屋と云ふ辭が、一層お島の耳についた。汽車の窓から、首をのばして彼等の見てゐる山の形が、ふと濱屋の記憶を彼等に喚起したのであつた。その山は、そこから二三里の先に、灰色の水霧のなかに幽かな姿を見せてゐた。

「あなた方はS－町の方のやうですが、濱屋さんが何うかしましたのですか。」

お島は、斷々に耳につくその話に、ふと不安を感じながら訊いた。

「私は東京から、あの人に少し用事があつて來たものですが、お話の樣子では、あの人があの山のなかで何か災難にでも逢つたと云ふのでせうか。」

遊女屋の主人か、藝者町の顏利かと云ふやうな、それらの人たちは、みんなお島の方へその目を注いだ。

金齒などをぎら〳〵させたその中の一人の話によると、濱屋は近頃自分の手に買取つた其山のある一部の森林を見廻つてゐるとき、雨あがりの棧道にかけてある橋の板を踏みすべらして、崖へ轉り陷ちて怪我をしてから、病院へ擔ぎこまれて、間もなく死んでしまつたと云ふのであつた。

お島はそれを聽いたとき、あの男が、そんな不幸な死方をしたとは、信じられなかつたが、その死の日や刻限までを聞知つてから、次第にその確實さが感じられて來た。

「すれば、あの人の靈が、私をこゝへ引寄せたのかもしれない。」

お島はさうも考へながら、次第に深い失望と哀愁のなかへ心が浸されて行くのを感じた。

濱屋へついたのは、日の暮方であつた。以前よく往來をしたステーションの廣場には、新しい家などが建つてゐるのが目についたが、俥のうへから見る大通は、どこもかしこも變りはなかつた。雨がはれあがつて、しめつぽい六月の空の下に、高原地の古い町が、濕んだやうな靜かさと寂しさとで、彼女の潤んだ目に映つた。

お島はその夜一夜は、むかし自分の拭掃除などをした濱屋の二階の一室に泊つて、翌日は、町のはづれにある菩提所へ墓まゐりに行つた。その寺は、松や杉などの深い木立のなかにある坂路のうへにあつた。

松風の音の寂しい山門を出てからも、お島は

また墓の下にあるものゝ執着の囁ぎが、耳につくやうな無氣味さを感じた。彼女は急いで道をあるいた。

翌日を濱屋で暮して、十二時頃お島はまた汽車に乘つた。

「どこか温泉で二三日遊んでいかう。」

失望の安易に弛んだ彼女は、汽車のなかでさう考へた。

百十三

途中汽車を乘替へたり、電車に乘つたりして、お島はその日の晝少し過に、遠い山のなかの或温泉場に着いた。

浴客はまだ何處にも輻湊してゐなかつたし、途々見える貸別莊の門なども大方は閉つてゐて、桜が六月の陽炎に蒼々と繁り、道ぞひの流れの向に裾をひいてゐる山には濃い青嵐が煙つて見えた。

お島の導かれたのは、ある古い家建の見晴しのいゝ二階の一室であつたが、女中に浴衣に着替へさせられたり、地獄のどん底にあるやうな浴場へ案内されたりする度に、一人客の寂しさが感ぜられた。

浴場の窓からは、草の根から水のちび〳〵しみ出してゐる赭土山が侘しげに見られ、檐端はづれに枝を差交してゐる、山國らしい丈のひよろ長い木の梢には、小禽の聲などが聞かれた。

「お一人でお寂しうございますでせう。」

浴後の輕い疲をおぼえて、うつとりしてゐる處へ、女がさう言ひながら膳部を運んで來た。

笑聲なども立てたことのない、この二日ばかりの旅が、物悲しげに思ひかへされた。どこの部屋からか蓄音器が高調子に聞えてゐた。

電話室へ入つて、東京の自宅の樣子を聞くことのできたのは、それから大分たつてからであつた。小野田はまだ歸つてゐなかつた。

「好いところだよ。旦那の留守に、お前さんも一日遊びに來たらいゝだらう。」

お島は四五日の逗留に、金を少し取寄せる必要を感じてゐたので、その事を、留守を頼んでおいた若い職人に頼んでから、さう言つて誘つた。

「それから順吉もつれて來て頂戴よ。あの子には散々苦勞をさせて來たから、一日ゆつくり遊ばしてやりませうよ。」

お島はさうも言つて頼んだ。

その晩は、水の音などが耳について、能くも眠られなかつた。

夜があけると、東京から人の來るのが待たれた。そして退屈な半日をいら〳〵して暮してゐるうちに、漸て晝を大分過ぎてから二人は女中に案内されて、お島の着替や、水菓子の入つた籠などをさげて、どや〳〵と入つて來た。部屋が急に賑かになつた。

「こんな時に、私も保養をしてやりませうと思つて。でも、一人ぢやつまらないからね。」お島は燥いだやうな氣持で、いつになく身綺麗にして來た若い職人や、お島の放縦な調子におづおづしてゐる順吉に話しかけた。

「醫者に勸められて湯治に來たといへば、それで濟むんだよ。事によつたら、上さんあの店を出て、この人に裁をやつてもらつて、獨立でやるかも知れないよ。」

お島は順吉にさうも言つて、この頃考へてゐる自分の企畫をほのめかした。

不安のなかに

一

十時はその時姉の家の茶の室にゐた。一昨日の夜の十二時に妻と子供に送られて東京を立つて、昨日の午前にこゝへ落着いたばかりであつた。兄の家にしようか、姉の家にしようかと、彼は仕事をするのに落着のいゝところをと思つて、暫くの豫定ではあつたけれど、居所を定めかねてゐたのであつたが、用事のために來たその用事が、姉の一家のうへに係ることなので、餘り落着の好い家ではなかつたけれど、とにかく一旦そこへ落着くことにしたのであつた。

立つ前に彼は幾日も／＼不愉快な、腹立しい自分の心を凝視めるのに飽きはててゐた。勿論妻に對する或る不滿から來たことであつたが、孰も頑な心の持主であつたので、さうして睨み合つてゐることを疎ましく思ひながら：：そして又今更それが何うなるものでもないので、好い加減に誤魔化して行くより外ないことだとは知りながら、やはりさう出來ないのであつた。

しかし十時が立つ前には、滯在のあひだ必要だと思はれるものを、彼女はいつものやうに、ちやんと鞄につめ、兄や姉達や姪達に贈るべき土産なども取揃へ、鍵をかけないばかりにしておいてくれたのであつた。そして來なくともいゝといふのに、停車場まで送つて來たのであつた。寢臺の下がなくなつてゐたので、十時は子供に上を取らせた。彼はしばらく腸をわるくして、歩行するのも頼りがなかつた。

「下がないのか知ら。何だか危うございますね、大丈夫ですか。」彼女はそこへ上つて行く十時を見上げながら言つた。

發車間際になつた。十時は開いた窓から首を出して、歩廊に立つてゐる三人を見下してゐた。

「何だかそこから墜ちさうでやつぱり上は可けませんね。」

言つてゐるうちに、汽車が出てしまつた。

「ぢや、行つていらつしやい。」子供が言つた。

十時はさうやつて出てみると、又何だか留守が氣にかゝりながら、いくらか氣分が安易になつて、何かあするとときどき出て來る彼女の厭な性癖や、それに拘りがちな自分に苦しみから解放されるのであつた。

十時が今度來た用事といふのは、姪の悦子の結婚についてであつた。去年十時が母の法要に來た時も、別れぎはに姉から一寸その話が出た。姉は良人の歿後、あいてゐる部屋へ學生を置いたりしてゐた。その時も郡部から出てゐる學生が二人、ずつと前からゐて、家族的に暮してゐるらしく、その親達とも親類同様に附合つてゐたのであつたが、その一人と悦子との間にいつとはなし、さうした愛が柔かい根をおろしはじめてゐた。

「今度はどうもさういふ風になるかと思ふ。先もその積りらしい。」

十時を送つて來た姉の千代子は、瀬戸物屋の陳列を見てゐる傍へ來て、その青年の聰明なこと、前途に期待の多いこと、子のやうに自分に昵んでゐることなぞを話した。

「若し、さういふ事にでもなつたら、おしらせなさい。しかし親達も親類もあるし、とかく破れがちなものだから、」十時はさう云つて、輕率なことのないやうに警告を與へて別れたので、

あつた。

今年になつて、氣輕な千代子が其の事で十時の歸國を促しに、七月末の或日にひよこ／＼と遣つて來て、事態の切迫してゐる事と、十時が行つてさへくれれば、先方は譯なく納まる筈だと言つて、挨拶をするかしないうちに、いきなり十時の承諾を求めたのであつた。十時もその時は直ぐに行くつもりであつたが、落着いて考へてみると、其も輕率のやうに思はれたので、其の話が破れた時のことをも豫想において、わざと悦子の父方の從兄にあたる人に、一應話をしに行くやうに計らはせたのであつた。しかし先方では一二の親類に不同意の人もあつたけれど、結局は、親達の意志に基いて、結婚が承認されることに成つたので、今はたゞ十時の來るのを待つばかりだといふのであつた。十時は健康がすぐれなかつたのだが、漸と忙しいなかを都合して、東京を立つたのであつた。

で、昨日の晝前に着いたばかりの十時は、その午後早速懐しい上の姉や兄の家を訪ねて、今日は東京では行く隙のなかつた床屋へなぞ行つて、歸りに公園をぶらり／＼して來たところであつた。彼はまたお粥を食べてゐた。そして歩いたために疲れが出たので、腹這ひになつて千代子や悦子と話してゐた。學生は二人ともまだ來てゐなかつた。二階の十二疊も、下の六疊も明きであつた。裏には孟宗の藪があつて、二階の白い粉を吹いたやうな竹と、其の枝葉が二階の十二疊と下の六疊とを薄暗くしてゐた。

「こゝは何うです。」千代子は十時と一緒に二階へあがつて、仕事をするやうな位置を考へたりしたが、十時には其の座敷よりも、上り口の明るい三疊の方が好かつた。そこには悦子の兄の小机に、本箱に收まつた謠曲本、尺八の譜などがあつて、その傍の尺八掛に尺八が立てかけてあつた。兄貴の宗一は、小學の五六年時代から、白髪など生えて、頭腦が惡かつた。十時の家へ來てゐた頃は、寫眞だの簿記だのやらせたこともあつたが、それで生活するほどの技術はなかつた。彼は自分の生活費にも足らない月給で、或る會社へ勤めてゐた。十時には眞實の一人の姉の子であるこの兄妹が一番心配であつた。彼等はその父の亡くなる前に、永く住みなれたその家を離れてゐた。

十時は去年來た時も、兄妹で尺八と琴の合奏をやつてゐる處へ來合せて、餘り好い感じがしなかつた。亡くなつた父親がさうしてゐたが、職を失つてから碌に收入もないのに、床に花を活けたり、謠や碁に耽つたり、苗や朝顏を作つたりする方であつた。彼は町の敗殘者の一つの型であつた。

しかし宗一ももう四十であつた。十時は小言を言つても追つかないと思つた。まだしも尺八でも吹いてゐられる彼の幸福を悦んでやりたかつた。

「好い尺八があるな。」十時は手に取りあげて、袋を拂つてみた。

「それ好いのですよ。なか／＼高い。不思議に尺八が好きでね、もう少し詰めてやると物になるさうだけれど。」

「それで御飯がたべて行けるやうだつたら、どうせ頭腦のいることは駄目な宗一のことだから。」

十時はそんな事を言ひながら、又下へおりて何か食べようかと思つて、横になつてゐた處へ、微動を感じたのであつた。

「地震だ。」敏感な十時はさう言つて、電燈を見上げた。千代子も悦子も、同じく見上げた。そして初めて氣がついた。

「あら金魚の水が……。」悦子は簾戸格子の所にある金魚鉢の水のだぶ／＼波立つてゐるのを見ながら言つた。

少し止んだかと思ふと、まだゆら〳〵と搖れてゐた。微動ではあつたけれど、その搖れ方が氣味がわるかつたので、十時は下駄を突かけて外へ出た。二人も後から續いた。往來の人は誰も氣づかならしかつた。隣の家では絞りの浴衣を着た上さんが外へ出てゐた。十時は暫くして入らうと思ふと、まだ搖れてゐるらしいので、大分長く道の眞中へ出て跪坐んでゐた。

内へ入つてから、十時は姉と濃尾の地震の話などをしてゐた。其は父の死んだ年であつた。十時はその前に、夜中に醫者を迎へに駈出した時、紺絣の單衣の藍の匂が、鼻にしみたことを覺えてゐる。十時は近頃のやうに地震を恐れもしなかつたので、机の前に坐つてゐた。大阪から來てゐた長兄が、地震嫌ひの母が何うしたらうかと思つて奥へ入つてみると、母の姿がみえなかつた。そして暫くすると、低い垣根の壞れたところを超えて、庭つゞきの餘所の竹藪からのこ〳〵彼女が出て來たのであつた。十時が母を東京へ迎へなかつたのは、地震の心配もあつたからであつた。

「どこだらう震源は……。」十時はぼんやり思つてみたきりであつた。が、何だか不安を感じた。

「東京に地震があつたかも知れん。」

「東京のはこゝまで來ん。」

二

その日七時頃配達された夕刊に、横濱に大地震があつて、町が盛んに燒けてゐると云ふことと、鈴川で汽車が顚覆したとか、東海道線が名古屋以東不通になつたとか云ふ極く簡短な大阪からの電話が載つてゐるのを見ただけでは、十時の頭腦には東京にも同じやうな地震のあつたことは、はつきりとは浮ばなかつたのであつたが、しかし不安は感じた。

「東京もきつとやられてゐる。」十時は呟いた。悦子達が傍からそれを打消すので、十時もその氣になりながら、矢張氣にかゝつた。彼は年取つてから、長いあひだ振顧ることをしなかつた、故郷が年々好くなつてゐた。そして歸る度に未知の自然や數ある温泉へ行つて見ようと思ひながら、いつも忙しいので果さなかつたので、今度は少しゆつくりして、子供のをり行つた記憶のある白山の裾にある美しい谿谷だの、二三の温泉場などを巡つて見ておかうと思つて、今朝もそれらの土地の地理や汽車の時間や、交通の便などを折角研究してゐた處であつたが、もうさうしてゐられないやうな氣がした。そして東京の事情が何か少しでもわかり次第何時でも出發できるやうに、目的の用件を片着けておかなければならないことを感じた。それにはその青年が歸省中である田舍の家へ出向いて、親達と親戚の人に逢はなければならないのであつた。その前に、瀬踏の役を勤めてくれた悦子の父方の叔父の松木にも逢つて、一應先方の意嚮を聞いておく必要もあるのであつた。何よりも自分の胃腸を早く癒さなければならなかつた。

「今夜松木へ行から。」十時は夕飯のとき、お粥を食べながら少し焦燥氣味で言つた。

「いゝですわ。貴方が行かなくとも。お出でることになつてゐるから。もう役所へ電話をかけた。」千代子が言つた。

その晩方に一人の方の學生が出て來て、竹藪に臨んだ下の六疊に荷物を持込んでゐた。十時は木村と云ふその青年に逢つて、悦子の愛人の濱野の家の周圍關係を聽取つたりした。七月に姉の千代子が來たとき、「おれが東京へ行つて叔父さんに話をする。」と言つて意氣ごんでゐたと云ふその青年が、木村なのであつたが、十時が逢つてみると、田舍の町の醫師の一人子息

で、親達の死んだ後は、老祖母と二人きりで暮してゐるといふ彼は、何處か坊ちやん／＼した、丸顔の口數の少い穏和な青年であつた。しかし木村の唯一の大切な胤であるところから、學問なぞにはさう激まない彼の、輪郭が大まかで、ふつくらしてゐる割に、頭腦の好いことは、その喚皆で花を引いたとき、十時に解つたのであつた。

夜になつてから、十時は氣分を紛らせるために、彼等と二階で花を遊んでゐた。こんな事をしてゐて可いのか、と彼は氣に咎めたが、仕方がなかつた。

そこへ松木が來てくれたので、十時は下へおりて逢つた。

「私も忙しいもつですから、漸と都合して行つたやうなことで…。」温良な松木は言ふのであつた。

「先方では、私が行くと、東京から來たかと言つて聞かれたくらゐで、貴方の來られるのを待つてゐるのです。私が逢つた姉さんのお婿さんだといふ人が、ちよつと首をふつてゐるらしいので、少しむづかしいことを言つてゐたのですが、今はその人も表面へは出ないことになつて、手紙で申上げたとほり梶谷と云ふ本校の人の從兄とかに當る人から、圓滿解決の旨を言つて來たのです。いや何うも、汽車をおりてから、隨分遠うござんしてね、轉風くだから、足袋も袴も草の露でべと／＼になつて……しかしK－驛まで乗つてお出でになれば、俥もあるさうで。」

松木は話がすむと、子供の話などして直に歸つて行つた。

「あんな素直な人見たことがないと云つて、松木の叔父さん先方へ大變受けがいゝさうでね。」姉は後で噂した。

「僕もあの人が適任だと思つたんだ。」十時も言つた。「僕はさうは行かないから、自分でも用心したんだ。」

十時はまた二階へあがつて、花の仲間に加はつた。

「さあ、こんな事をしてゐて、東京はどうかな。」十時は時々呟いてゐた。何か未曾有の物凄いことが起つてゐるやうにも思はれたが、横濱だけのやうにも思へた。

そこへ蒔繪をやつてゐる、一人の甥の信吉がやつて來た。骨董などに目が利くので、彼はその時も自分の作品と茶器を一點もつてゐたが、少し酒氣を帶びてゐた。彼は長いあひだ東京で蒔繪の權威について修行したので、叔父の十時に何かと心配もかけたし、一緒に下宿にゐたこともあるので、十時の故郷へ來るのを誰よりも懐しがつてゐたし、十時もまた何か食べに行く場合なぞ、信吉と一番話が合つてゐた。

「何だかもつてゐるやうだね。ちよつと見せないか。」十時は花札をつかんでゐながら、解らないながらに、さういふものにも興味をもつてゐたところから、さう言つてその包を見てゐた。

「いや、詰らんもんです。」信吉は笑つてゐた。

「信ちやんはやらないかね、花を……。」

「その方はちつとも遣りません。」

「花は花でも、お上品な方だね。お茶もやつぱり遣つてるの。」

「ほんの時々。」信吉はやつぱり笑つてゐた。

そこへ父田舍の方へ嫁ついてゐる十時の妹がやつて來た。彼女は町の方に家をかりて、そこから子供を中學に通はせてゐた。十時は花を引き／＼をり／＼信吉や妹と斷片的な話の遣取をしながら、氣を紛らせてゐたが、やはり胸に痞へでもするやうで氣分がはずまなかつた。もつて來た仕事を取上げる氣には尚更なれなかつた。

裏の竹藪に吹く微かな夜風の音がして、露蟲が高い植物性の聲で啼いてゐた。そして皆が歸つてしまふと、十時はがらんとしたその部屋に釣られた蚊帳に入つて、獨りで寢たが餘りのうのうした氣持ではなかつた。

三

明朝早く起きて新聞を見たけれど、東海道筋のことが出てゐるだけで、東京の様子は、はつきりわからなかつた。しかし大なり小なりの影響のあることは確かであつた。彼は粥を食べると、袴をはいて家を出た。悦子のために、も少し長くゐて、事によつたら、後から妻にも出て來させて、式を擧げさせようと思つてゐたのであつたが、今は先方へ顔を出すのが精々であつた。電車に乘つても、彼の心は鉛のやうに重かつた。ざわ〳〵した停車場の群衆のなかへ入つても、名狀しがたい氣懈さを感じた。それが單に盲目な本能的の不安であつただけに尙更不快なのであつた。

「もう何うかなつてしまつてゐる。」彼はぼんやりした想像をめぐらして見たが、其が何程の程度で何うかなつてゐるか、見當のつけやうもなかつた。進歩した科學の知識を以てしても、何程のことともわからない空間的にも時間的にも無邊際な自然界が、いつも感ずるとほりにあるものとは勿論思へなかつた。四時の風物などに本能的な敏感をもつてゐる十時の感じうる處だけで見ても、この二三年の自然の現象は、それ以前の季節々々の陽氣に比べて可也な變化を見せてゐた。科學者でない十時は、それを學問的に考察する餘裕をもたなかつたけれど、いつもあつたやうな初夏の爽かな氣分のかはりに、秋風のやうなあわたゞしい冷い風が、柔かに萩の若葉を裏返らせたり、長いあひだの經驗では、菊日和の好晴がつゞく筈であるのに、梅雨期のやうな霖雨が降りつゞいたりした。勿論それは一時的のものかも知れないし、太陽の熱が日にみえて弱くなつたとか、地熱が冷却したなぞと云ふ大きな變動でもなかつたけれど、現在の生命に限りのある自然界が、刻々死滅か新しい他の生命かに向つて、變化しつゝある途中の出來事であることは明かであつた。そしてこれは隨分原始的な人間の恐怖には違ひないけれど、十時はいつ何時何んな日に逢はされるかも知れないと云ふ氣がして、一日々々生きてゐる心が竦みがちであつた。人間が殘らず平均に富んで皆が平和なお人好しばかりである社會が、どんなにか無氣味な退屈なものであらうか、同時に、暴風雨や、逆浪や海嘯のない好晴續きの自然がいかに刺戟のない怖いものであるかは、想像するだけでも、不愉快になるのだが、親しみ易いだけそれだけ可怕い自然界のことだから、いつ何んな力を出して踏ん反り返らないとも限らないのである。十時には殊にも大地が不安であつた。彼は不斷から足の下がゆら〳〵してゐるやうな氣がしてならなかつた。一生のうちに一度は投り出されるやうな氣がしてゐた。自分の一生に來なければ、子供達の代に來るかも知れなかつた。そして其が今遣つて來たのではないかと思はれた。

「來たなら來たでもいゝ。」十時はさう思つたと同時に、今迄遭遇して來た「國民難」と云つたやうな色々の出來事を回想した。

停車場の氣分は不斷と變りはなかつた。十時は自分と同じ心配をもつてゐる人があるかと思つて、色々の人の顔を見た。東京から來る途中、場末の女優のやうな女が、變な洋服を着た茶目を二人つれて、町が近くなつた頃に、舞臺の衣裳のやうな安價な、しかし其がよく其の女の顔に映る着物を大きなバスケットから出して着込んだり、窓枠に鏡をかけて、熱心にお化粧を

したりしてゐた。茶目が海濱に吃るのを面白がつて、窓へ足をかけたり何かして、人をはらはらさせた。それは乘客に取つて、不時の退屈凌ぎであつたが、あの女なども、好い時に來合せたのだと、十時はその女が町のどこへ紛れこんでゐるかを想像したりした。

汽車は遲かつたが、結局豫定通りにＫ町へついた。十時はそこから俥を傭つた。彼は俥のうへで、今ステーションで買つた大阪の新聞を繰擴げた。俥は寂しい町を走つてゐた。海邊から來るやうなそよ〳〵した風が、まともに吹くので、新聞を擴げるのに骨がをれた。その新聞では東京のことは矢張漠然としてゐた。警視廳が燒けたとか、宮城に火が移つたとか、內閣員の親任式の最中首相が泡を喰つて逃出したとか、某の元老が壓死したとか、誰某の行方が不明だとか、丸ビルや三越で幾百の死傷があつたとか、其の他學校、病院、官衙、銀行、會社などの重立つた建造物の震害と火災などが、大仰ではあるが簡短に報告されてあるばかりで、十時の頭腦に映じた印象は總て混沌としてゐたけれど、一昨夜まで其の中に平氣で暮してゐたあの東京が、今は容易ならぬ大動亂の渦中にあることだけは、やゝ彼の感覺に輪郭づけられて來た。十時は詳しく讀むのも厭なやうな氣がしたので、其儘膝の上に新聞をたゝんでしまつた。

俥は長いあひだ走り續けた。荒廢した町端から廣い平野へ出ると、澄みわたつた大空の碧や、黃ばみかゝつた稻穗にそよぐ微風などが、幾分か心の痛みを拭き取るやうで、富裕らしくは見えながら、夢のやうな靜かさの湛へられた平凡な村邑の、森から森へと繫がつてゐるのが、如何にも平和な感じを與へた。十時は何はともあれ、地に俯して働いてゐる者の幸福さを感じたが、若しも東京が一朝にして滅茶々々になつて、總ての生活が虛無に歸してしまふとなると、懷しい故鄉其物すらが、今迄もつてゐた意義を失つて、彼が見棄てた時の住み辛い三十年前のそれよりも、頼りない寂しいものであるに過ぎなかつた。そこに生活の根をもたない十時は、甥の信吉や宗一や、其他の多くの町の人が、兎にも角にも持つてゐるやうな何物をも所有してゐないのであつた。

「若しも自分が生れたとき、父がくれてやる約束をした貧しい農夫につれられて、こんな土地に百姓の子として育つてゐたとしたら……。」

十時はそんな事を思つて苦笑した。

往々高野槇などの垣根の多い村へ入つて來た。道傍に穀物が干されてあつたり、鷄がくゝと俥を避つてゐたりした。俥は[illegible]道を通つたり、無花果の熟した枝葉と、十時の帽子が擦れ〳〵になつたりした。

濱野では十時の來るのを今日も待受けてゐたやうに、老婆が彼の姿を見ると、「おいでおす。」と言つて奧へ驅込んだ。十時は綺麗に拭込んだ板の渡されてある廣い土間から、爐が切つてある茶の室へあがつて挨拶したが、間もなく書院作りの奧へ通された。髮の毛をのばした、目の澄んだ小柄の青年が、帷子をきてゐて、「板谷へ行つて來ましたか。」と聞くから、「後で伺ふつもりで……。」と答へると、彼は從兄の板谷を呼びに行つたらしく、お茶など飲んでゐると、其の人がやつて來て、「お互に角目立つてゐる場合でないから、詰らない感情を棄てて本人達の幸福を圖つてやるやうに、御同感であるなら結婚させたい。」と云ふ意味を、親しみのある打釋けた調子で話し出した。

「さういふふうの御見解だと、私の方も非常に有難いんです。」十時も安心したやうに同感の旨を述べた。

水の迸りさうな紅い西瓜が、そこに盛られ

てあつた。

「さあ、お暑いですから何うぞ。何にもないところで、西瓜が名物でして。」

話がきまつたところで、一獻汲まうといつて、杯盤が持出され、年取つた父親や本人もそこへ連なつた。

「伜も一粒種ですので、さう學問の方を深入りさせる積りではなかつたのぢやが、幸か不幸か幼い時分から頭腦が好い方で、私も卒業まで生きられるか何うか、心細いとは思ひますが、まあ仕方がないと思つて、……伜もそれを心配して、醫大の方なら東京まで行かんでも濟むから、醫者にならうといふので、今度その方へ入學しましたが、まだ先が四年もあるさかえ、結婚は早いが、さうも言うてをれんで、式は卒業の時として、とにかく內祝言のやうなことにして、極めておきさへすれば、却つて落着いていゝかもしれんと、かう思うて……。」耳の少し遠い、實直と几帳面その物のやうな老人は、煙管に煙草をつめながら、微聲で話した。

「それで念には念を入れておきたいのは、町に育つた娘さんのことですもんだから、こんな田舍は不自由で居辛からうし、厭にもならうと思ひますので、私はそれが案じられる。」

「いや、本人はその點十分承知してゐるやうです。いつぞや私が東京へ連れて行つたことがありましたが、若い女には珍しい、東京が嫌ひで、何うしても居つかうとはしなかつた位ですから。」十時は答へたが、それは彼のお座なりではなかつた。それに濱野は志望が大きかつた。博士論文の下準備さへ、もう頭腦に描いてゐるくらゐで、開業などする意志もないらしかつた。行く〳〵は町で暮すか、それとも東京へ出るか、勿論洋行なども一度はしないではゐないだらうと思はれた。

飯の支度をするから、袴でもとつて寛いでくれと、勸められたけれど、十時はさうしても居られなかつた。

「また重ねて。何しろ東京の方が、生死のほども判りませんので。」

十時も暇がないし、文字通りに杯だけさせることにして――それも姉の家の二階で、ひつそり遣ることにして、その日取りを、十時は明日にもと思ひながら、つい明後日といふことに決めて歸つた。

數十分すると、彼はK町の停車場へ入つた。停車場には何となく、慌忙しい不安の氣が漂つてゐて、今そこへ地方新聞の號外賣が出て行つたり、一頁大のその號外を見てゐる軍人があつたりしたが、十時がそこへ寄つた時分には、軍人達は號外をもつて出て行つた。十時は胸がわく〳〵した。そして誰か號外をもつてゐる人はないかと思つて待合室を覗いたり、構外の廣場へ出て見たりした。寄り〳〵地震の噂をしてゐる者もあつた。十時は傍へ寄つて行つて耳を傾けた。

すると間もなく、入口の方で、多勢の人が、一枚の號外に集まつてゐるのが目についたので、十時は急いで寄つて行つた。ふいに、ポンペイ最後の日――東京は今や焦土に化しつゝあり」と云ふ大きな活字が、彼の微弱な心臟に強い衝動を與へた。そして「神田、本郷被害甚大」といふ文字が目についた時には、彼は目がくらくらして、體を支へるのがちよつと困難のやうであつた。彼は辛うじて自ら支へることができた。

四

それから來る報道も來る報道も、たゞ恐ろしいことばかりであつた。惡いことにしても好いことにしても、新聞の報告はとかく誇張になりがちなことは十時も知つてゐたが、彼は何時で

も「もつと酷いことがある」と云つたやうな氣持で、それを受取るほど、本質的に用心深く生れついてゐた。しかし實世間的には可なりルーズな生活氣分もあつて、それによつて、今まで彼は生きて來たのだと思はれた。今度のことなぞも、姉や悦子の氣休めでは安心することはできなかつたが、どこまで惡くなつて行くか知れないやうな、各方面の情報に接する毎に、彼は全く今迄踏込んで考へようとしたこともない禍が、自分達のうへに落ちて來たことを感じた。押詰め／＼して考へてゐた以上に、彼は次第に押詰められつゝあることを感じた。

さうして概括的な、或は部分的な各種の報道のなかで、火災の悲慘な事實を、最もよく描寫したものは、何といつても東京の街々を見てあるいた記者の報告で、そのなかには覿面に十時の目の前へ、妻や老人や多勢の子供達が火焔に追はれて、そこゝと逃げ惑ひ、幼いものは路上に棄てられて群衆に踏みにじられ、若いものは若いもので、足腰の不自由な老人や、不斷から病氣がちで、よく外で卒倒したりすることのある母や、幼い弟妹たちに引かされて、手足の自由を失つたり、火煙に蒸されたり、人波に抑隔てられたり、死骸に躓いたりして、散々離々になつて、辛い思ひで生死の境に呻吟き苦しんでゐるであらう活きた圖を、まざ／＼と見せてくれるやうなのもあつて、それによつて色々の場合や光景を想像すればするほど、彼は頭腦が磨ぎすましたやうに鋭くなるばかりであつた。彼はたゞ溜息を吐くより外なかつた。

「ひどい事になるもんだな。」十時は號外のうへに額を伏せながら、冷笑的に呻吟いてゐた。人と口を利くのも懶かつたし、手や足にも力がなかつたが、しかし又折角樂しんで來た故郷の溫泉の匂もかゞず、いつもお預けにして歸つたので、今度こそは仕事の隙々に行つてみようと思つてゐた町の料理屋へも行かずに、このまま歸つてしまふのが、殘り惜しいやうな、妙に低徊的な氣分が、滓のやうにどこかに、こびりついてゐるやうにも思はれて、彼は不思議な自分の心理を、底から見透かし得るやうな疎ましさを感じた。それに東京に殘して來たものは、故郷の土の匂のなかに、さうした肉親の人達に圍まれてゐる十時の感じでは、みんな他人だと云ふ氣さへするのであつた。子供ですらが、より多く母體の系統を引いてゐる、當然母方の肉親たちに屬すべき性質のもののやうに思へるのであつた。

午後から夜へかけて、十時が病人顔をして浴衣がけで坐りこんでゐる茶の室へ、上の姉や信吉や妹やが入替り立替りやつて來て、姉と悦子は送迎に忙しかつたが、大抵の人は東京か横濱か鎌倉かの孰れかに關係をもつてゐた。十時の一人の甥は横濱に店をもつてゐて、去年山手の方に邸宅を新築した。二人は東京にゐた。信吉の姉の長女は或る物產會社員に嫁づいて、柏木に住んでゐた。嫂の弟の子達は鎌倉の別莊にゐた。そして其の嫂が伺ひをたてた結果によると、何れもこれも安全なものはなかつたが、十時の家族だけは、家は少し傷んだけれど、打揃つて無事でゐると云ふのであつた。それには上の姉の見て來た卜者の言葉と符合するところがあつた。

「それで、急いでお立ちになるのは危險ださうで、一兩日のうちに屹度何かの知らせがくるから、それまで立つのをお見合せになるやうに。當にもなりますまいけれど、不思議によく中りますので。」嫂は言ふのであつた。

しかし十時は假の盃をするために、濱野の人達に約束した翌々日まで、同じ懊惱のうちに時を過すのが、堪へられない苦痛であつたので、遙かにそれを明日に繰りあげてもらふことに電

報を打たせておいて、その晩は少しでも體を安めておくために、十時頃に二階へ上つて寢ることにした。勿論歸るにしても、独り一人では駄目だと思つた。皆もそれを氣遣つた。兄の家では人夫を、姉達のうちでは信吉や宗一を附けてくれることになつてゐた。
　翌日は朝から雨が降つてゐた。窓から見ると、北國らしい空一面に漠々とした雨雲が瀰漫して、東南の方だけが微かに明いてゐた。悦子が濱野青年と盃をすることは、まだ兄の宗一やには話してなかつた。十時は初めからそれを不思議に思ひながら、早く打明けることを姉に勸めてゐた。「それなら叔父さんが話して下さい。」姉は言ふのであつた。
「それでもいゝが、さういふ事がいけないと思ふね。いくら無能でも、總領は總領だから。親類一同へも、秘し隱しに隱しておかないで、皆に話すがいゝ。己がいゝやうにする。」十時は言つてゐたが、しかし姉も悦子も、何故かそれを躊躇してゐた。勿論この零落れた一家だけが、孤立の形になつてゐることも事實であつた。
　十時はその朝新聞にさはるのも厭であつたが、しかし矢張氣になつた。大分色々のことが判つて來たらしかつたが、饑渇に苦しんでゐる市民は、更に又暴人の騷ぎなどで、まるで無政府狀態におかれてあることなどが、十時の心を新しく傷けた。昨夜彼は、疲れた神經が、不愉快な幻覺に苛まれて、それから寢られなくなつたところで夜なかに寂しい二階をおりて、茶の室で空の白むのを待つてゐた。末の女の子を振返り〳〵何處へともなく歩いて行く妻の姿が、硝子に映るやうに浮んだ。長男が力味返つて、拳を固めて何かを打破らうとしてゐる半身が見えて、その掛聲で十時は目がさめたのであつた。彼は靈魂の不滅などを信じなかつたが、死の前後、意力の惰性で、しばらく中空にふはふはしてゐるくらゐのことは有りさうに思へた。十時は夜の白む頃に、再び二階へ上つて蚊帳のなかへ入つたのであつたが、彼はその時ほど、心が死に近づいていつたことはなかつた。彼は呪はしい生活破壞を今迄幾度考へてみたか知れなかつたが、思ひがけない自然の暴力で、今その家庭が虚無に歸した時の、彼の姿を思ふと、寂しい行脚僧なぞよりも、死を擇んだ方が優だと思はれた。
　午後になつても雨は歇まなかつた。信吉が來て、上京するには身元の證明が必要だと告げてくれたので、彼はどしや降りのなかを、裾を捲げて市役所まで出向いて行つた。公園の下の通りを通ると、泥水が河のやうに流れて、電車の線路も流されたやうになつてゐたが、いつも時代に置いて行かれてゐる此の町も、今は無上の樂土だと思はれた。市役所では手續きが面倒だつたので彼は更に警察の方へ行つてみた。證明を取りに來てゐる人が、殺到してゐた。そして證明書には寫眞の貼附が必要だと言ふので、更にそこから十町ばかり先にある、早取の寫眞屋を教はつてそこへ行つた。
「翌日の午後一時ですな。」寫してから寫眞屋は言つた。
　暫くすると、十時は又人々の集まつた茶の室にゐた。そこへ山からおりて來た兄が俥でやつて來た。
「どうも今度は大變なことになつたものだね。」
兄はズボンをたくし上げるやうにして坐りながら、
「しかし心配することはないぞ。己は本郷は大丈夫だと思ふ。各區のことが出てゐるけれど、未だ本郷のことは一向出てをらんぢやないか。新聞で見てゐると、大變なことのやうに思ふけれど、色々綜合的に想像してみてもわかるが、

安全な處も其中にはあるに決まつてゐる、若し丸燒けたとしたところで、大きい子供もゐるし、人も來てくれてゐるだらう。」と言つて、極力慰めるのであつた。

「いや、なか／＼さうぢやないらしい。」十時は首をひねつた。

「かういふ日に逢つた子供は好くなるぞ。」

兄はそれから、どうせ途中だから立つなら寄るやうにと言つて、直ちに他の方面へまはつて行つた。

直に四時頃になつた。姉は今朝から今日の支度に奔走してゐたが、もう其の時分には雨のふるなかを、料理を入れた籠をかついだ男がやつて來て、姉は一つ／＼それを臺所の方へ運びなどしてゐた。やがて濱野青年と、その從兄の板谷とが雨に濡れながら這つて來て、挨拶がすむと、町で仕立てて來た襦袢や、羽織や鯣や結納の包などを、別の部屋で取り飾つて、十時と姉との前へ、容を更めながら差出した。その中には黒い水引をかけた、佛前の一包もあつた。十時はこつちがぬかつてゐたことに氣がついて、ちよつと狼狽したが、しかしそれは何うでもなることだと思ひながら、苦しい辯解をしたりした。

「いや、何にも知りませんもので、……まあ親達の申しつけ通りに。」と板谷も謙遜してゐた。

人の出入りがあるので、二人はやがて二階へ上つて行つた。

「なか／＼ちやんとしてゐるね。」十時は姉に私語いた。

「何と言つても、はずむ時ははずむ人達だから。」姉も氣が引けるやうに言つた。

十時はそれらの品と禮服とを、バスケットや風呂敷包にして、二人で背負つて來たことなどで、殊にも好い感じを與へられた。

日の暮れ方に、宗一が會社から歸つて來た。十時は今迄の經過と、今日のことを告げて、松木も二日の晩、社長が東京にゐるので、若い人達と一緒に上京して、他に列なる人もなかつたので、宗一だけは列席さしたいと姉が急かに氣を揉むので、氣輕に姉から話してみさせることにした。薄暗い奥の納戸で、姉は宗一の前に一切を打明けた。

十時は今まで無氣力な宗一が、何一つ自分の意志らしいものを表明したことを聞かなかつたし、人と人との交渉で、少しでも自己らしいものを出した例を曾て知らなかつた。佛のやうなお人好しであつた。勿論尺八など吹くほどだから、時代の空氣とも沒交渉で、遺傳的に少し許り手の器用さはもつてゐたけれど、強ひてそれを發揮しようともしないのであつた。障りにはならない代りに、頼りにもならなかつた。十時はまだ子供のやうに思つてゐたが、姉に聞くと彼ももう四十であつた。

「埒があかん。何うしても出ようと言はんもの。」姉は十時の傍へ來て言つた。

「何うして……。」十時は袴の紐を結びながら、「承認しないとでも言ふのかね。」

「まあさうや。」姉は溜息を吐いた。

「尤も今迄秘しておいたのは惡い。しかし宗一はそんな男かね。」

「あの人には困る。言出すと頑固で。」姉は途方に暮れたやうな顏をして、「實のところは、今迄打明けようと思うても、私も悦子も可怕うて言出せんのや。濱野さんも可怕かつてや。」

「亂暴でもするかね。」

「そんな事もないけれど。」姉は今更十時に見えをしても仕方がないと思つて、

「濱野さんを二階からおろして、謝罪らせろと言うて、肯かんのでね。」

十時は信じられなかつた。

「一體何ういふのだね。それには何か原因があ

りさうだが。」
「そや、原因と言ふほどのこともないけれど、會社の仲間で、妹をくれれば宗ちゃんにお嫁さんを世話するといふ人もあるし、あれは去年やつたか、宗ちゃんの知つてゐる憲兵隊の將校さんからも話があつて、宗ちゃんは悉皆乘氣になつてゐたけれど、そんな人、軍縮で駄目でせう。任地が朝鮮では何更厭だし、宗ちゃんは、その時大變に怒つて、己の言ふことを聞かないなら、家におかないから、何處かへ行つてしまへと言うてね。そんなことで長いこと紛紜して、悦子が夜なかに家を飛出したこともある。」
「まるでお話にならん。」十時は思つたが、今夜の處を穩かに濟ますには、悦子に手を突かせでもするより外はなかつた。
「わたし可怕い。」悦子は躊躇してゐたが、納戸へ入つて行つた。
暫くすると、悦子の泣聲が微かに洩れて來た。十時は仕方なし納戸へ入つて行つたが、その時は宗一はその先の藪蔭の六疊にゐて、椅子に腰かけて、木彫のやうな無表情な可怕い顏をしてゐた。十時はその傍へ寄つて、下から優しい言葉を以つて、硬張つた彼の氣持を釋しなだめようと努めたが、彼はぢつと目を据ゑたきりで、口を利かうともしないのであつた。十時は又悦子や母親の立場を説明して、誰に賴るところもない悦子の、それが當然擇ぶべき道であると同時に、それを成立たせるのが、宗一の責任だと云ふやうな意味を、繰返して説いてみたが、彼はびくともしないのであつた。獰猛な目が血走つたやうに光つてゐた。
「とにかく出ることにしよう。己もそんな處ぢやないんだ。出るだらう。」
宗一の唇が漸と動いた。
「どうも出られん。親類へ極りも惡いし、莫迦しくて。」宗一はにやりとして言つた。
十時はまた、其の事が、宗一の考へてゐるやうに、極りの惡い理由のない事と、親類へも公開する旨を話したが、其時心臟が苦しくなつて來たし、その場の光景が芝居じみてゐるのに興ざめがして、そこを出て、濡手拭で冷しながら、暫く横になつてゐた。そして氣分が快くなつたところで、二階へ上つて行つた。
大分たつてから、急かしに下へ降りてみた。
「宗ちゃんが亂暴して、お吸物の鍋を引くらかへしたもんやさかえ。これには困る。悦の着物だつて、みんなあの人が引裂いてしまふから家におかんやうにしてをる。」白足袋に紋附を着た姉はさう言つてお膳立に忙しかつた。

五

十時は翌日にも立たうと思つたけれど、證明が間に合はなかつた。それに大宮口などは、竹槍騷ぎで近寄れないから、今二三日見合すやうにと、皆に引止められた。
宗一は昨夜濱野たちが歸つたあと、皆が寢てから、鎖した戸をあけてから〳〵と下駄を鳴して出て行つたきり、歸らなかつた。
「あいつ何うしたらう。」十時が言ひ出すと、
「さあ、何處へ行つたのやら。」と、悦子も笑つてゐた。
「宗一はあゝいふ男かね。」
「まだ〳〵酷い。皆こはがつてや。」
で、姉や悦子の話によると、いつも皆から除外されてゐる孤獨な彼の生活も、可なり荒み氣味であることが想像された。俸給なぞも、大部分飲食ひに費ふらしかつた。
「けれども何うして、悦子の邪魔をするだろ。」
「嫉妬ぢやないか。」
「さうかね。」姉も首を傾げてゐたが、
「それやから早く嫁をもたさうと思ふけれど、それには餘程働きのある人でなければ……。昨

夜もあれから色々話してみたけれど、宗ちやんは、明日にも悦子を僞所へ出せと言うて肯かん。其ができなければ、自分で出るといふのやけれど、此の節だつて、直に謝罪つて來たさかえ。」

姉は笑つた。

「それは濱野さんも、謝罪つても可いと言うておいでのやけれど。」

十時はもうその問題に深入りしても、仕方がないと思つた。

十時は晝頃家を出て、大阪新聞の支局を訪問したり、支那の両曲通で京阪や東京にも交友の多い直友のH氏を訪ねたりして、四時頃に家へ歸つて來た、警察へもまはつて見たが、立つのは暫く見合せろと言つて、署長までが引止めたので、明日はと思つてゐた決心が鈍つて來た。

四時頃に信吉が來て、散歩に誘はれたので、十時はこの間に墓參でもしておかうと思つて、家を出た。途中信吉の姉の家へ寄つて見たりした。そこにも不安の氣が漂つてゐた。お産をして、つい近頃歸つたばかりの濱崎の娘夫婦よりも、何かの力になつてくれてゐる横濱の義弟の方が、餘計氣遣はれた。

十時はそこへ行つても落着いてゐる譯はなかつたが、歩いてゐても妻子の姿が、頭腦にこびりついてゐて、離れなかつた。

「お寺なら、こゝから抜けませう。」信吉はさう言つて、彼の叔母さんの家の格子戸を開けて、入つて行つた。

いつか見た時よりも、その家は一層綺麗になつてゐた。娘夫婦に子がないので、軍人の娘さんなどに、琴や花などを教へて、悠樂に暮してゐた。

「御心配でございませうね。」娘も老母も出て來て、お見舞を言つた。

十時はから云ふ世界もあるのかと、羨ましく思ひながら、長い土間を通りぬけて、庭の木戸をあけて貰つて、裏通へ出た。

静かな町であつた。とつてんかん〳〵と箔を打つ音などが、微かにしてゐた。貸席の電燈を出した洒落た家などが、目についた。

十町ばかり川添ひの町を行くと、そこにお寺があつた。近年昵みになつた住職はゐなかつたが、お經料をおいて、墓地へ入つて行つた。可也な廣さの十時の先祖の墓所に、幾基かの墓が立つてゐて、そこに父や母や長兄が眠つてゐた。目をつぶつてゐると、過去の幻影が浮き出して來た。

歸りに川に沿つた料理屋へあがつた。どの部屋もどの部屋もがらんとしてゐた。十時と信吉は、汗を流すために、瀟洒な露次庭の飛石をわたつて、湯殿へ入つて行つた。それから湯をあたりして、浸らうとしてゐる處へ、信吉の妹婿から電話がかゝつて來て、信吉が行つてみると、今日五時に、第一回の避難民が四百ばかり着くから、若し其のなかに十時の家族がゐるか何うか、見に行つては何うかと言ふのであつた。

信吉は湯殿へ復つて來て、

「いかゞです、行つてごらんになつては。」と勸めた。

勿論十時が宗一をつれて行くことになれば、皆を此處へ引揚げさせるやうにとの說もあつたし、昨日あたりもぼつ〳〵歸つて來るものもあつて、十時の氣分では、妻や子供が自分のところへ遣つて來るのが、さう不自然だとも思へなかつた。

「だが、萬に一つその中にゐるとして、誰と誰が生き殘つてゐるか。」十時はさう思つた。

二人は急いで着物を着て、ステーションへ向つた。ステーション前は、群衆で身動きができなかつた。そして三四十分もすると、避難民を

載せた列車が入つて來たが、勿論十時の子供達の居よう筈もなかつた。もつと近いところに妻の田舍があるのであつた。
　夜はまた姉の家の茶の室で、十時は色々な人に逢つたが、此等の人達が歸つてから、宗一もそこへ來てお茶を飲んでゐた。宗一は不斷と少しも變らない調子で、十時に話しかけた。まるで昨夜のことは忘れたやうであつた。そのうちに話がまた昨夜の問題に移つて行つた。
　今まで何遍私は悦子に警告したかわからん。その度に悦は鼻で笑つてをつたんだ。濱野だつて無禮だ。人の横間から人の妹を掠つておいて、私に一言の斷りもしないんだからね。今度のことは皆で共謀で、私を出しぬいてしまうたんだ。こんな莫迦々々しいことはありやしない。」宗一は言出した。
「それは惡かつた。だから己がお前に陳辯してゐるんだが、除外されても仕方のないことがお前にもあるんぢやないか。お前は今まで悦のために何をしてやつたんだ。」
「それと是とは別問題だ。」
「それで、何うしてもこの話を打壞すといふなら、打壞しても可い。お前は後始末をつけるかい。」
「後始末といふと……」
「先方へ行つて、話をつけるのさ。そして悦子の體の處置をするのさ。」
「そんなこと言つたつて……それあ弱いもの苛めといふもんで……。」宗一はしを〱した目を細くして笑つた。
　十時は怒れもしないと思つた。
　宗一はやがて二階へ上つて行つた。
「お話にならんとこと。」姉も悦子も笑つてゐた。
「誰に似てゐるのかな。」十時は宗一と自分の顏に、相似點のあることを知つてゐたが、氣質も共通してゐるやうに思へてならなかつた。
「あれはお父さんにも、あゝ云ふところがあつた。京都の叔父さんは、もつと酷い。」姉は言つた。
　二階では尺八を吹きはじめてゐた。十時はその音を餘り好かなかつたけれど、宗一の吹くのは彼のために好いと思つた。子供の時分から持つてゐる姉の三味線が二階の床脇のところにおいてあるのも思ひ合されて、近頃の彼女の氣分がわかるやうに思へた。この一家族がいつも氣遣はれてゐた十時もいくらか安易を感じた。

老境

老境には老境の惱みもあるが、むしろ樂しみ方が多い。それは段々に生活慾望が少くなると同時に、氣持で生活を樂しむやうになるからである。精神的になるとも言へるが、また一方からは反つて慾望が深まり、大きくなつて來るのだとも言へる。大規模の仕事は、大抵年取つてからで、それは必ずしも新しく産み出されるものではないにしても、少くとも蓄積されたものである。實際社會では殊にさうで、社會民人のために大きな仕事をするのは、年取つてからのことである。文藝の仕事が、果してさういふ風に行くか何うかは、興味のある問題である。私はどの社會でも、年取つた人の出しやばるのは餘り好かないが、さればといつて若い人ばかりの跋扈する時代も、決して健全な時代とはいへないであらう。
　老年の不幸は、友人がなくなることと、死の近づくことだが、しかし大自然のなかに生きてゐる寂しさを味ひつめたものには、それも大した悲しみではない。

去年の夏幾年ぶりかで、彼はその女の手紙を受取つた。あれ以來長いあひだ横濱や神戸へ行つてゐたが、この頃ちよつと東京へ出てゐる。餘り久しく逢はないし色々話したいこともある。四五日してから神戸へ歸るつもりだから此手紙を見次第濟まないけれど來ていたゞきたい。そんな意味で、その所も名前も傍に書いてあつた。彼はその女が何んな風に變つたか、何んな生活をして來て、何んな境遇にあるかに好奇心が動いたが、勿論それには彼の職業心理が鋭敏に働いてゐた。

その翌日の午後、融はどこかで飯でも食つて話を聞くつもりで、ぶらりと出かけて行つたが、郊外のその家を尋ね當てる迄には、可也手數がかゝつた。家は安普請の平家で入口に硝子戸がはまつてゐて、小杉と書いた紙の名札が出てゐた。それは彼女の苗字であつた。

女はすつかり變つてゐた。どこで逢つたところで、それは少し注意して見れば、すぐ思出せる程度の面影は殘つてゐたにしても、ちよつと顏を見合つた時の印象は、すつかり彼を失望させた。丸い脹みをもつた顏が細長くなつただけではなかつた。あの娘々した若さが跡形もなく消え失せたのに不思議はなかつたが、どこか臆病らしく彼を見る目が冷い卑しい感じを與へた。同じ荒んだ生活にしても、餘り惠まれた境遇でなかつたことが一目で感づけた。

「まあよく來て下さいました。」さう言つて出迎へた彼女は、襷や前掛をはづしながら、火鉢や茶箪笥のある奥の室へ誘つて、更まつてお行儀よく挨拶したが、融はむしろ來たことを後悔してゐた。

「手紙ごらん下しつて?」女は未だに訛がとれなかつた。

「多分來ては下さらないだらうと思つてゐましたけれど、其でも手紙の御返事くらゐはくださるだらうと思つて。」女はさう言つて、水を汲んで來て、暑がつてゐる融に手拭を絞つたり、羽織を衣紋竹にかけたりしてゐたが、大分たつてから傍へ坐つて、遽かに打釋けた風で、融がそんなに變つてもゐない事や、あの頃から見ると寧ろ健康さうになつたことなどを話しながら、お茶をいれてゐた。

「この家は何う言ふんだ。」融がきくと女はにやにやしながら、

「それも後で話しますけれど、私の身の上は隨分面白いのよ。」

「あれから何うしたんだ。」

「何年ほど前ですかね、私もあの時分は若かつたけれど、こんなお婆さんになつてしまつて、私もう三十一よ。」

入るとき顏を出したのが、五つか六つかのお品の惡くない女の子で、その子が始終傍に片足を横へ出して、不思議さうに融を見てゐた。

「この子は。」

「これがさ。」と女は顏を顰めて、それも後で話すと云ふ目をした。

女がするりと裏へ出たと思つたが、歸つてから間もなく麥酒や料理が持込まれた。何を話すといふこともなし、もう日の暮方になつてゐた。

「私麥酒が大好きさ。」女はそこにべつたり坐つて、美しさうに麥酒を飲んだ。

女の話によると、彼女はもう一年の餘もこゝに居たのであつた。京都にゐるうちに東京の或る技師と知つて、その男の世話になつてゐたことや、その男が財界の恐慌で、經營してゐた會社が潰れたので、月々の仕送りも絶えてしまつたから、近いうち神戸へ行くつもりで、そこには一つの緣談が、以前の友達によつて纏まりかけてゐるけれど、まだ全く決めた譯でもなかつた。女の子はそれ以前に同棲してゐた、稅關の役人の子だと言ふことも話してゐるうちに

受取れて來た。
「私貴方にお金の御迷惑なら、決して持込む積りはないんですのよ。」
融が歸りがけに、「少しお小遣をおいて行かう。」と言つたとき、女はさう言つて拒んだ。
融のそこを出たのは、夜の十時頃であつたが、多くの疑問と興味がそこに殘された。そしてやくざな彼女の生涯らしいものを、彼女の其時其場の追憶談によつて、とにかく繋ぎ合せることができるまでには、彼はその後二度もその家を訪ねなければならなかつた。

二

神戸へ片附いてから、二度ばかり受取つた手紙は、融に取つては、餘り快いものではなかつた。最後に逢つたとき、彼は彼女からちよつと其のヒントを與へられた。
「おい、本當かい。」融は神經を尖らせた。
「さういふ氣がするの。けれどさういふこともあるから。」女もさう氣にも留めてゐないらしかつた。
最初融がそれを言つて警戒したとき、女はむしろ彼を揶揄ふやうに、その結果を豫期するやうな口吻を洩してゐた。
「もう一人できてくれれば倚好いんだ。この子一人ぢや私も心細い。」女は言つてゐた。
融はそれを聞いて戰慄したのであつたが、それが現實化されようとは想像もしなかつた。十年目に、一二度逢つただけの彼女に、そんなにも早くさうした結果が將來されようとは思ひもかけなかつた。
「さうくよ／＼心配することはないぢやありませんか。若しかしてさうとしたところで、まさか貴方に迷惑かけやしまいし。」女は事もなげに言つてゐた。
しかし彼女の手紙によると、それが愈々事實であることが判明したばかりでなく、彼女の畫策が見事に破綻を來して、いかに厚顏でも、この上その家に止まることは出來ないと言ふのであつた。
そして彼女は再び東京へ舞戾つたのであつた。
融は皮肉と滑稽を感じたが、腹立しくも思つた。係蹄が幾分女によつて仕掛けられてあつたことは拒めなかつた。女が明白に意識してやつたことでないにしても、前後の關係や彼女の態度や口吻から推察しうるところでは、その結果は恐らく彼女に取つては偶然で――自然からいへば必然の結果であつたであらうが、多少それを希望してゐたと思はれる節もあつた。それに融は、それが自分の責任か何うかも判らなかつた。女の口吻を、彼女の特徴である娼婦型の性格に照し合せて、想像を辿らせて行くと、その事實の對象が外に隱されてあつたかも知れないのであつた。あるのが寧ろ自然だと思はれた。
しかし又、融を呼出したのは、その對象者と手が切れたからだとも思はれないことはなかつた。餘り氣が進んでもゐないのと、神戸の緣談が略纏まりかけてゐたところから推せば、尙更さう考へても可い理由があつた。
しかし木伊乃取りが木伊乃にされたやうな、惡戲な運命を憤つてみたところで仕方がなかつた。それを嚴肅な事實と見れば、嚴肅にも違ひないが、融はそれをさう重大視する氣にもなれなかつた。そして初めて手紙を見たときは醜いほど狼狽てもしたが、眠つたり覺めたりしてゐるうちに、その氣持も薄らいで、出來るだけその考へから脫れてゐたいと希つた。それはちやうど必然的な死に向つて、絕えざる恐怖を感じてゐると同じ愚かさで、いくら考へ詰めたところで何うにもならない事であつた。
しかしあの蒼白い顏をして、べつたり／＼し

た口の利き方で、廻りくどく因縁でもつけに、これから時々玄關を騒がせに來られることを考へると、融は全く遣切れなかつた。良人や親の威嚴が臺なしにされるのは可いとしても——妻や子供がそこまで無理解であらうとは思へなかつた——事實を妻の前に暴露されることは、色々の意味で堪へがたい苦痛であつた。

　或日彼は事情を見定めるために、到頭思ひ切つて彼女を訪ねた。融は今日は女が來はしないか明日は來るかも知れないと、人の出入りにびく／＼しながら、持前の臆病と無精とで、つい延ばし／＼して居たのであつた。

　その頃女は新宿の方にゐた。そこは前から仲の惡い叔母さんの家で、叔母の良人の身分なぞも、勤人だと云ふだけで、詳しいことは判つてゐなかつたけれど、カフェにゐる時分から、叔母に好感をもつてゐなかつた。融が尋ねあてて見ると、それは日當りの惡い裏通の古びた門構の家で、田舍の場末のやうにごみ／＼してゐた。上ると左が茶の室で、そこに子供の襁褓や褞袍や、玩弄のやうなものがだらしなく散らかつてゐた。其中に、肉のぶよ／＼した四十許りの女が、近所の神さんらしい女と話してゐた。色が白く、目も張りがあつて、髮や姿にかまはないながら寧ろ好い顏をしてゐた。

「お冬さん。」その叔母が呼んだ。

　奥からお冬が姿を現はして來た時、融はこの前初めて逢つたとき驚いたよりも、もつと驚いた。彼は文字通り自身の目を疑つた。そして惘れた顏をして突立つてゐた。お冬は全く變り果てた形相をしてゐた。色が蒼黑くなつて、皮膚にぼつ／＼したものが出てゐた。顏が妙に細つこくなつて、鼻が尖つてゐた。白い齒が殊にも目立つて、どこの田舍の嚊かと思ふくらゐ下卑てゐた。いつもの彼女と違つてにこ／＼してゐるのが、殊に厭らしい感じであつた。

　融はすぐ其處にある段梯子を昇つて、二階へ案内されたが、部屋には書生がゐるらしく窓際に卓子と椅子がおかれて、卓子の上にインキ壺や古いペン軸、それに經濟原論だとか、銀行論だとか、そんなやうな經濟學に關する書物、歴史や地理などもあつた。

「朝鮮人がゐるんだけれど、介意やしない。」女はさう言つて、薄い座蒲團を直してくれた。

「あれが君の叔母さんだね。」融は醜いお冬の腹を見ないやうにしてゐた。

「は。嫌ひだけれど、こんな時は仕方がないぢやありませんか。」お冬は顏を顰めてゐたが、お腹を氣にして男親と釣合せてゐた。

　お冬は言つて居た通り、氣をつけて見ると、實際今にも落ちるやうな腹をしてゐた。融はかうも不様な女を見たことがなかつたが、お冬が醜ければ醜いだけ、彼は救はれたやうな氣がするのであつた。其の腹にゐる小さい生命が、彼の氣持とはまるで沒交渉であるのも不思議であつた。抽象的には多少責任に似たやうなものを感じない譯に行かなかつたが、それは廣い意味での共存生活の惱みで、私有慾に伴つて來る愛着や苦痛は少しも實感されなかつた。曾かて自分が始末をつけた、或る親近者の子供に感じた愛着や憐愍、そんなものすら、彼の心のどこにも滲出してはゐなかつた。彼は全く父子の觀念から自由であつた。社會的に負はなければならない、通り一遍の責任だに果せば、その事が自然のなかに融け込んで行くに任しておいても少しも後髮を引かれるやうな哀しみを感じないであらうと思はれた。

「しかし其でいゝのか。」融はまだ何だか腹の底に引つかゝつてゐるものがあるのを感じた。それはそれで可いとしても、自分の行爲を是認する理由とはならなかつた。好は好として、何時までも彼に遺るであらうと思はれた。彼はそ

れを悔む氣にはなれなかつた。さッした動機や因緣がお人好しの自分のうちにあつたことを考へただけでも、其事が全く無駄であつたとは思へなかつた。今日はなくても、明日はあるのかも知れなかつた。

とにかく彼は彼女から早く遁れようと焦燥つたが、お冬の態度は例によつてゆつたりくしたものであつた。

「……お産婆さんが來て診て、これは五月——ひよつとすると六月だと言つたでせう。私それを巧くやるつもりで、辻褄を合はしてゐたんですけれど、いきなりそんな事を言はれてしまつて、はらくしてしまつたの。其れを生憎隣で聞いてゐたものなんです。外聞が惡くて仕方がないから、今日にも媒介者を呼んで、綺麗に話をつけると言つて、悉皆怒つてしまつたぢやありませんか。」お冬は平氣で面白さうに話した。

「私あんな困つたことはなかつた。私のやうなづうくしいものでも、顏から火が出ましたの。」

「その男は何をしてゐるんだ。」

「ブローカでしたの。暮しも樂さうでしたけれど、仕方がないぢやありませんか。媒介者にも悉皆怒られてしまひました。その人は京都にゐるとき、一緒にしてゐた人なの。今は船員の奥さんになつてゐますの。」

「何にしてもひどく窶れたものだね。相が變つてしまつた。」

「だから私、男だらうと思ふんです。皆さう云つてゐますよ。」

融は話を早く取決めようとした。一人あるうへに又一人あつては、體の振方をつけるにも困るだらうから、産み落したら手放してしまつた方がいゝ。さうするより外に思案がない。前後の入費は、多分のことは出來ないけれど、出來るだけのことはする。さう云ふ風に言つて聞かせた。

「一人ぢや心細いんですから、もう一人育ててみたいやうな氣もしますけれど……。」お冬は言つてゐたが、主張しようともしなかつた。

融は金の額や、渡す時間なども略きめて、差當り當座の小遣をいくらか置いて早々そこを出て來た。

途中廣い[illegible]があつた。融はその縁をせつせと歩いてゐた。若い人達が野球の練習をやつてゐた。それが彼に僅かな中學時代を思出させた。彼は暗い氣持になつた。何時になつたらこの問題から解放されることかと思ふと、あの理も非もわからない、粘着づよいやうな無恥な女が呪はしくなつた。

三

融が約束の或る定額を送つてから、多くの日數がたつた。彼はそれが氣にかゝつて仕事も手につかなかつた。快活にみえて實は苦勞性のお峰などに心を勞させまいと思つて、獨りで片をつけようとしてゐただけに、一層氣が揉めた。彼は子供達の顏すら平氣で見てゐることは出來なかつた。彼は子供達を瀆したやうに、自分から責めた。しかし彼等は何にも知らなかつた。お峰の心には、氣のせゐか、いくらか暗い翳しができてゐるやうに感じられた。

或時また女から手紙を受取つた。若し手紙を寄越すなら、文學青年から來たらしい宛名の書方が好いと言つておいたので、その通りにしてあつた。何にも知らない風でゐながら、何彼によく氣のつくお峰の目の前をも無事に通過したが、融は危つかしくて仕方がなかつた。家の財布の底を、彼女はいつでも知つてゐた。一度自分の手に渡された金なら、何んな事にでも惜しみはしなかつたけれど、兎角ぼんやりしてゐる

られない性質に產れついてゐた。それは寧ろ苛酷と思はれる程度で、融は憎くも思つた。

「もつとぼんやり育つてゐると好い。」融はさう思はずにはゐられなかつた。

でも何んな場合にも人を惜んだり、苦しめたりすることは、絕對に出來ないお峰であつた。

融はお冬に金は送つても、餘り行つてやらない方がいゝと思つてゐた。お冬と口を利くのが不愉快であつた。お冬は兎角亭主運の惡いことをこぼしてゐた。占者に見てもらつたところ、當分餘り好いことはないと言はれたと話してゐた。亭主運のわるいのは、體の或部分にある黑子のためだと、彼女は信じてゐるらしかつたが、誰にしても、無恥な彼女と一緒には暮せないだらうと思はれた。お冬は妙に官僚的な男が好きであつたところから、連れてゐる娘の父親も稅關の役人であつた。融は官服姿の男らしい風采をした其の男の寫眞も見たが、一度お冬が子供を見せに役所へ彼を訪ねたとき、彼は叱りつけて逐返してしまつた。

「又しても强請りに來たんだな。貴様は己に辱をかゝせようと言ふんだらう。」

融はその男に同情できるやうな氣がした。お冬は色々の世間を轉つて來た割には、捻けたところや、阿婆擦れたところはなかつた。何にしても三十の聲がかゝつてゐるので、狼狽ててもゐた。融もさうした女の成行を、冷かに見てはゐられないやうな氣がしたが、しかしお冬は矢張お冬であつた。世間を好い加減に見てもゐたし、男を甘くも見てゐた。明るみのところへは、迚も出て行けない不幸な女に產れついてゐた。お冬は何かに縋らうと盲目的に焦燥るだけであつた。よく荒い牡丹の型のある浴衣に、赤い伊達卷など締めて、娘々した銀杏返に結つてゐた頃のお冬の若さは、どこを搜しても見出せなかつた。

たど／＼しいお冬の手によつて書かれた手紙が、二度も融の心をおどつかせたが、最後に男の手蹟で書かれたらしい一通を受取つたとき、融は更に又新しい疑惑と困惑とに突當つた。

こつちの言つたとほりに、約束を履行してくれ。子供の將來を見ることは、迚も不可能だから、出來る範圍で最善の方法を盡すより外はない。出向いて行つたところで、同じ事だ。融は一度そんな返辭を出しておいたのであつたが、最後の手紙によると、問題が何うやらさう單純に行かないやうに見えた。

「……一つと思ひ、外へ出てゐたのを返して、それが一つでなかつたので是非一度お出で願つて、御相談申したい、」手紙はさう云ふ風に書かれてあつた。

融はうんざりしてしまつた。勿論その手紙は遠慮がちに書かれてあつたが、文字どほりに解釋すると、そこに思ひがけない奇異な現象が、皮肉に笑ひかけてゐるのであつた。融は氣持のうへで、それを眞直に受容れることを拒まずにはゐられなかつた。產れた生物が世間並に一つである場合ですら、融は自然を惡意に解釋して、一應抗議を申し立てて見なければ氣がすまないのであつた。しかし其は好意でも惡意でもなかつた。冷くも暖かくもなかつた。意志も目的もなかつた。大きな自然であつた。それがあるといふには、餘りにも大きな自然であつた。それは悲しむべき事でも、笑ふべき事でもなかつた。靜かに頭を垂れてゐるより外仕方がなかつた。但人事として考へる場合に、融は容易く諦めることが出來ないのであつた。

處でそれが二つであつたとすると！ 勿論それもさう不思議なことではなかつた。有り得ない事でも、有つてはならない事でもなかつた。しかし人の身の上では、そこに二重の手數が必

はにつこりともしないで言つたが、少し怒つてゐるやうに見えた。
「貴方といへば、何本手紙を出しても、ちつとも來て下さらないんですもの。隨分薄情だと思ひましたわ。」
融は女の態度が變つて來たことに心着いた。子供を產んでから、急に強味を感じてゐるのがよく判つた。
「けどそれは仕方がないよ。」
「一度くらゐ赤ん坊を見に來て下すつても可いぢやありませんか。いくら私の子だつて、そんなに冷淡にならなくたつて……。」
「見たところで仕方がないぢやないか、己は赤ん坊を見るのは大嫌ひだから。」
「隨分ひどいですわね。」お冬は仕方なし目元に微笑を浮べて、少し打釋けた調子で、「今赤ちやんを連れて來ますから、よく御覽なさい。」
「男か女か。」
「女ですけれど、近所では皆好い子だと言つてゐますよ。」
「とにかく早く片着けた方がいゝね。この前貰ひ手があるやうな話だつたね。」
「それあ無いこともないですけれど、顏を見ると矢張さうは行かないんですよ。」
「手紙には何だか變なことが書いてあつたが、一體何う云ふんだね。」融はふいと自分の疑惑に觸れて行つた。
「二人出たんです。」お冬も寂しい表情をして、「お腹があんなに大きかつたんですもの。私驚きましたわ。それにお乳が出ないもんですからずつと牛乳を呑ましてゐるんです。お負に片一方の方は胃腸を惡くして、まだ熱がありますの。お乳を呑ますと吐いてしまひます。今日もお醫者へつれて行つたんです。」
「消化不良だね。」
融は氣が急いだ。一氣に片着けようとした處で、迚も駄目だと思つたけれど、悠々としてはゐられなかつた。
「一人でさへうんざりしてゐるのに、二人も出られちや全く遣切れない。何も足手纏ひになつて何かに不自由だし、大きい子供はあれだけにしたんだから、あの子だけは育てることにして早く放してしまはないと、却つて子供の不幸だ。己にした處で、そこまで責任はもてないから。」
「責任つて、何もそんなに貴方の御厄介にならうと言つてやしないぢやありませんか。けど餘所に遣るにしたところで、着物の一枚も着せたり、お金だつて掛けなければならないんですからね。それも二人ですもの。」
「それはさうさ、己も何うかしよう。けど成るべくあれで間に合はせるやうにして貰ひたいんだ。何だ彼だといつて、相當掛けてゐるから。」
「あれは皆お產の費用に使つてしまつたんぢやありませんか。叔母にだつて借金があつたんですから、其も拂ひましたし、毎日の牛乳だつて此頃はずゐぶん掛るんです。」
お冬はねんばり／＼した口の利き方で產婆にいくら掛つたとか、着物をいくら／＼買つたとか、そんな事を說明してゐたが、融はよく判らなかつた。
「それにしても掛りすぎると思ふ。何もそんなにする必要はない。己は自分の子だつてそんなにした事はない。手ぼつけなしに遣られちや困るんだ。」
「それだつて御自分の子ぢやありませんか。」
「何うだか。」融は苦笑した。
「それが疑問なんだ。」
「だつて、あの時のことは、貴方が見てゐたぢやありませんか。」
「しかし何とも判らんね。若しさうとしたら、

己もよく〳〵運が惡いんだ。あの時のことは君も覺えてゐる筈だ。」

お冬は聞きつけぬ風をして、「今赤ちやんを連れて來ます。」とさう言つて、融がそれを拒むのを聞き棄てて下へおりて行つた。

お冬は一人だけ連れて來た。そして融の目の前に差しつけた。

「さあ見てちやうだい。少し抱いてごらんなさいよ。」

融は慄然とした。そして見て見ぬ振をしてゐた。

「御免だよ。」

赤ん坊は餘り好いものを着てゐなかつた。ちらと見たところ手足のすんなりした點は、お冬に似てゐたが、顏は何うやら自分に肖てゐるやうにも思へた。しかしさうと斷定も出來かねた。お冬が座蒲團の上においたところで、小さな生物は鼻の邊や額に小皺を寄せて泣面をかいてゐた。融の神經には何の應へも起らないのが不思議であつた。勿論彼は赤いうちは子供が嫌ひであつた。

大分たつてから、女はまた病氣の方の赤ん坊を抱いて來て、そこに置いた。似たやうで似ないやうな顏であつたが、骨格は瓜二つであつた。病兒はうつら〳〵眠つて、忙しく呼吸をしてゐた。

融は殘忍性に似た、利己的な或るものを自分に感じた。死ぬかも知れないと思つた。しかしそんな子に限つて、死なないだらうと感じた。さうしてそんな事を考へてゐるうちに、憐愍がどこからか沁出して來るのを感じた。長く凝視してゐるに堪へなかつた。

「おい〳〵、亂暴なことするなよ。早く下へつれておいでよ。」

女は親猫が仔猫を銜へて行くやうに、一人一人運びおろして行つた。そして暫くしてから、又上つて來た。

しかし話は捗なかつた。

「私大して御迷惑かけようと言ふんぢやないぢやありませんか。月々少しづつ戴いて、二人とも育てて行きたいんです。」

終に女はそんな事を言ひ出した。融は覆被せるやうにそれを否認した。そして近いうち又いくらか纏まつたものを送る約束をして、そこを出た。

四

融が行かなくなつてから大分日數がたつた。彼は悉皆交渉を打切つてしまひたかつたが、寢醒が惡かつた。お冬がいつか遣つてくるだらうと、それが氣になつた。しかし女の方からは何とも言つて來なかつた。

或日の晩方融が外から歸つてくると、お峰が怪訝な顏をして、こんなことを報告した。

「今日妙な人が來ましたよ。社會局のものだが、一寸先生にお目にかゝりたいつて。詰襟を着て、ちよつと立派な若い人です。」

融は薄氣味が惡かつた。

「社會局だつて。」

「え、また來るさうですけれど。」

融は疑惑のうちに、その男の來るのを待つてゐたが、それきり何の事もなかつた。

すると一月ほど經つてから、或日思出したやうに女の手紙が來て、お約束のものが來ないから、是非來て戴きたい。何日迄に來てもらへないなら、此方から出向くと言ふのであつた。融はあれ以上要求には應じられない、此方の言ふ通りにしないのだから、應じる理由もないと葉書を出した。

お冬は期日を過ぎて大分たつてから、到頭遣つて來た。

融はちやうど來客があつた。子供もそこに一

緒にゐた。妻が出て應對してゐたが、女はいつまでもぐづぐづ言つてゐた。
「そのお金は宅がお拜借したと仰しやるんですが、大分たつてから」お峰の言つてゐるのが此方の話の合間に聞えた。
お冬は例のべつたりべつたりした調子で、何か言つてゐた。
「只今留守ですから判りませんけれど、何うも可笑しいですね、宅が餘所樣にお金を拜借してゐるやうなことがないんですから。一體それは如何程なんですか。」
女はまた微聲で何か言つてゐたが、奧まで聲が通らなかつた。
大分長く玄關先で押問答した揚句、女は到頭歸つて行つた。
「何だか變な人が來ましたよ。」お峰は融の顏を見ないやうにして呟いてゐた。
「何だつて。」
「この間も來た人ですけれど、貴方どこかに借金があるんですか。」
「いゝえ。」
で、話はそれきりになつた。融は何もかも淺け出すより外はないやうに思つたが、しかしお峰はそれ以上突込まうともしないのであつた。
晩飯がすんで、夜になつてから女は歸つて行つたが、もう遲かつたので、お峰は深く訊き糺す暇もなかつた。
「變なことを言つてくる女ですね。一體何ですか、あれは。」
「さあ、己のものでも讀んで、モデル料でもくれと言ふんぢやないか。」
「そんな風ぢやないんですがね。今度來たならお逢ひになりますか。」
「いや、逢ふまい、面倒だから。もう來ることもないだらう。」
「いゝえ、證文でもあるんですかつて訊いたんです。さうしたら、貴方があの人の旦那と知つてゐて、少し遊びすぎたので、ちよつとと言ふので御用立してから、もう三年にもなる。利息をいれて三四百圓のものだとさう言ふんですよ。」
「冗談ぢやない。」
「貴方あの人を知つてゐるんですか。」
「知らないこともない。社にゐる時分ちよいちよい行つたカフェにゐた女だらうと思ふ。多分さうだらう。話が面白いんで、一度も材料につかつたことがある。」
「それならさうと言ひさうなもんですね。」
「繰りがわるいんだらう。一體あゝ女くらゐ謔の上手な女はないんだからな。必要もないのに、何かしら嘘を吐かないで居られないのが、あの女の病氣らしいんだ。困つてゐるんで、そんな事を言つて來たんだらう。」
「何だか變ですね。」
お峰は何處かしつくり來ないやうな樣子をしてゐたが、それ以上糺さうともしないのであつた。
融は、「早く何うかしなければならない。」と、いつもその事が氣にかゝりながら、女が子供を持餘す時のくるのを待つより外はないやうな氣がしてゐた。此方から足を運べば運ぶだけ、女に自信が出てくることも判つてゐたが、放抛つておけばおいたで、一度道がついたからは、せつせと向うから足を運んでくるに違ひないのであつた。
融に取つては、それは全く不可抗力であつた。
九月の或る暑い日の午後、お冬がまた遣つて來た。融はちやうど仕事に沒頭してゐた。お峰は鼻の療治に病院へ行つた留守で家は閑寂してゐた。中學へ出てゐる子供が、玄關へ出て行

つたが、吩咐どほりに留守をつかつた。融は息を殺して聽耳を立ててゐた。
「奧さんは。」女はきいてゐたやうであつたが、直に出て行つた。
「子供をつれた女の人です。赤ん坊を負つて。」子供は報告した。
融はちよつと好い機會だと思つたので、少し間をおいてから、外へ出て行つた。電車通の活動館の前で、直に女に追着いた。女は彼を見て、はつとしたやうに汗ばんだ額を拭きながら、何か言ひかけようとした。
「もつと先へ行かう。」融はさう言つて、さつさと急いだ。そして三四町も來たところで、せかせか遣つてくる彼女を待受けてゐた。
「私暑くて仕樣がないわ。此邊に料理屋か何かないでせうか。」
「あるものか。」融は突慳貪に答へて、木蔭の多い横町へ入つて行つた。そして一町ほど行くと長い亜鉛塀の外に石が積んであつた。融は又そこで彼女を待受けた。
「あゝ苦しい。貴方少し抱いて頂戴よ。赤ん坊をおろすから取つて下さい。」お冬は甘えるやうに言つた。
融は厭々子供を卸してやつたが、其儘お冬につきつけた。
「こんなのを連れてのこ／＼遣つてこられちや實に困るんだ。來ることだけはお斷りだよ。」
「だつて貴方が來て下さらないでせう。私叔母さんにも工合が悪いんですもの。」
「君の方でちつとも約束を履行しないぢやないか。君にその意志がなければ何度行つたつて駄目だ。」
お冬は石の上へ卸した赤ん坊を、今度は紐で負はうとして袂から細紐を出して、
「ちよつと手を貸して頂戴。」と言ひたさうにしてゐたが、融が恐い顔をしてゐるので、仕方なし獨りで負つて、紐をかけてゐた。
「貴方の奧さん隨分しわいものだわ。」
「そのうち人をやらう。今日は相手になつてゐられないから。」
「おやお小遣を少し頂戴よ。これから淺草へでも行つて歸るから。」
勿論融は蟇口を袂へ入れて出て來たので、默つて札を三四枚渡した。
「あら、もつと有るでせう。」
「ちよつ、それだから厭なんだ。下司だな。」
融は不快さうに言つて、さつさと其處を去つてしまつた。

五

遣切れなくなつて融が三度目の最後に其家を訪ねたのは、それから少し經つてからであつた。
その時も融はいつもの二階で、片方の赤ん坊を突きつけられた。お冬はその子が容色がいゝと言つて悦んでゐたけれど、融にはちつとも可愛いとは思へなかつた。この赤ん坊は今にもつと大きくなるとお冬の期待を裏切るやうな不器量になりはしないかと思つた。
融は今度もその子が自分のものか、人のものか、明瞭な判斷を下しかねたが、それを明瞭にしようとも思はなかつた。けれど自分のものだと證據立てるよりも、自分のものでないことを證據立てる方が、この赤ん坊の場合一層困難であつた。そして其點では女の言條を信じても好いと思つた。けれど融には妙な猜疑があつた。片一方の赤ん坊がお冬ので、今一つの方は下にゐる叔母の腹から出たのではないかと、彼はふとさう云ふ氣がしたのであつた。勿論それは理のない邪推であつた。たゞ叔母が同時に姙娠してゐたやうに思へるのが、唯一の根據であつた。今一つは、一人の方をどこか近所の人にくれてし

まつたのではないかと云ふ推測であつたが、しかし子供の前途に大した責任を感じないものの常として、お冬が惜しがつてゐるのも事實であつた。

「いつまでも了簡がきまらないやうでは困るぢやないか。子供の始末のできるだけのものは、上げてゐるのだから、早く何とかしたら何うかね。」融はこの前と同じやうなことを繰返した。

お冬も同じことを繰返してゐるに過ぎなかつた。若し細々食べて行けるやうな商賣の資本でも、こゝで出してもらへるなら、子供は二人とも育てようと思ふが、それよりも矢張月々出してもらつた方がいゝと主張するのであつた。

「さうすれば私みよ子は人にやつても可いと思ふ。」女はそんな事を言つた。

「それは可けない。あの子が可哀さうだ。もう六つにもなつて、何でも解るんだから。赤ん坊は今のうちなら何うにでもなる。」融は諭した。

「それあさうだけれど、今度の子の方が怜悧だらうと思ひますわ。」

「そんな事がわかるものか。」融は笑ひに紛らせた。女の氣持には多少同情も拂へたけれど、この女につけておいたとしては、何うせ不確な將來の持てよう筈はなかつた。そして大きくなるにつれて、子供は何かを知るやうになるであらう。きつと知らせるであらう。女はその子供の手をひいて、屹度づうづうしく彼の家庭を音づれるであらう。融が死んだあとでも融の子供たちが厭な思ひをさせられるであらう。彼はそれが歴々見えるやうに思へた。

「貴方はお宅のお子さんばかり可愛がつて、私の子供のことはちつとも考へてくれないぢやありませんか、私それが腹が立つわ。」お冬は險しい顔をした。

融にもそれが問題であつた。彼の感情は、孰もの子供に平等の慈愛をもつことを許さなかつた。人類としては平等でも、自分の子供としては嚴密な差別觀があつた。それは恐らく偏執であつたが超越することは許されなかつた。

「それなら寧ろ子供を引取らう。」融は眞劍に言つた。

「可けません、そんな事は……。」

「しかし子供を同じに扱ふには、それより外に方法がないぢやないか。それですら、己は不愉快なんだ。君の腹に出來た子供と……それも己のものか何うかも問題にしてゐない、そんな子供に責任も愛ももてやうがないぢやないか。言つて見れば君のやうな女に子供を産んでもらふことは、己の意志ぢやなかつたんだから。」融は少し激して言つた。

お冬も顔を赤くした。

「それなら、月々養育費をいたゞいて、私が育てた方がいゝぢやありませんか。」

「その期限は……。」

「貴方の出來るまで。出來なければ仕方がありませんね。無理に戴かなくても、私が何うにでも遣つて行くぢやありませんか。」お冬はいつもの甘やかしい調子でうまく引入れようとして、

「私だつてさう何時迄も貴方に心配かけませんよ。」

融はうつかり乘れないと思つた。極めが極めにならないお冬であつた。緣を繋いでおきさへすれば、何うにでもなる――それがお冬の腹であつた。それに姙娠當時から見ると、彼女の意志も大分しつかりして來てゐた。叔母夫婦が背後にゐるからだと、融は思つた。

「ではね、二人でいくら言つたつて、纏まりつこないんだから、叔母さんの旦那樣に逢はう。」

「ありませんわ。」

「ぢや叔母さんでも可い。こんなことは第三者が入らないと、兎角うまく折合はないんだ。叔母さんに最初からのことを聞いてもらはう。此處へ來てもらひたまへ。」融は主張した。その人達に逢ふのを、何となし底氣味惡く思つたが仕方がなかつた。

お冬は不承々々下へ下りて行つた。そして大分たつてから上つて來たが、やはり其の主張を枉げようとはしなかつた。

「ぢやね、こゝで君の方で綺麗さつぱりしてくれるなら、もう一度金を上げよう。それなら何うにかならんこともない。」

しかしお冬はそれに乘らなかつた。そして結局喧嘩腰で融はそこを立つた。

六

事實がお峰にすつかり知れてしまつた。

それはお冬がそれから三度も四度もやつて來たりを待つまでもなく、最初の一度で十分であつた。

或日融が外から歸つて來ると、お峰の態度が少し變つてゐた。しかし彼女は用心深かつた。

「今日は到頭何もかも饒舌つていきましたよ。べちやくちや善くしやべる女ね。私あんな調子の女大嫌ひ。」

「田舍ものだもの。僕だつて嫌ひだ。」融は胸をどきつかせながら苦笑してゐた。

「今日は赤ん坊を負つて來ましたよ。」お峰は少し目をうるませさうにして蒼くなつてゐた。

「何といつてゐた。」

「それがちつともてきぱきしないんです。何だか辻褄の合はないことばかり言つてゐますから、それからそれへと問ひ詰めてやつたんですが、詰りあの子は貴方の子でせう。」

「どうだか解るものか。そんな事を言つてゐるんだ。」

「だつて貴方も承認してゐることだと言ふぢやありませんか。」

「そんな事はない。曖昧なんだ。己もよくは見ないんだ。」

「私も變だ〳〵と思つてはゐたんです。貴方はあの人にお金を送つたでせう。書留の受取があるぢやありませんか。」

融は失敗つたと思つたが、ちよつと癪にさはつた。

「送つたつて可いぢやないか。己も無意味にやつたことぢやないんだ。何うせもう煩くて仕様がないから、話すつもりではゐたんだけれど、心配かけても濟まないと思つて……。しかし斯うなれば暴け出してしまはう。」

融はそこで大體を話した。いくらか體裁を作つて。

「實際厄介な女だからな。人が惡いんぢやないんだけれど、少しも信用の出來ない女なんだ。何しろ神戸へ片附くと言つて行つたくらゐだから、最初から引つかける積りでもなかつたんだらう。歸つてからも、産れないうちには、明瞭した考へもなかつたらしいんで、育てたいやうなことも言つてゐたけれど、まあ、手放すつもりでゐたんだ。それが段々氣が變つて來て、僕を甘く見たんだらうが、色んな註文を持出すことになつてしまつたんだ。一つは叔母達が背後にゐるからだけれど、あの女にも叔母達に見えがあるらしい。」

「ですけれど、そんな體でお嫁に行つたんですか。」

「さういふ女なんだ。そこがあの女の鼻元思案なんだ。」

「それにしても可笑しいですね。月は合つてるんですか。」

「僕もよく覺えないけれど、八月の半頃から九月へかけて、二度訪ねてゐるからね。僕だつて好きな女ぢやないんだし、用心はしてゐたんだけれど、話を聞出すのに何うもね。だらしなく寢轉んで話をしたがる癖があるもんだから。」

お峰は少し顏を赤くした。

「お女郎みたいね。さうでせう、あの人なら。」

お峰は出來るだけ事實を突留めたかつた。そして成るべく其の事を理解しようとしてゐたが、やつぱり腹が立つた。

「貴方だけはそんな事はないと、今迄は思つてゐました。そんなだと外で何をしてゐるか判らない。」お峰は抑へかねた腹立しさを口へ出した。

「しかし是は災難だよ。僕はこのために長いあひだ何のくらゐ苦しんでゐるか判らない。」

「それは解つてゐますけれど。」

「それに女が女ぢやないか。僕は實際手甲摺りぬいてゐるんだ。」

お峰は暫くすると、いつもの調子に返つた。

「それは今のうちにちやんと片をつけておかないと駄目ですよ。子供を持つてゐられたんぢや迚も敵ひませんね。歩くやうにでもなつて御覽なさい。二人の手を引いて來ては、玄關へ坐りこみますよ。」

「今のうちは遠慮してゐるがね。」

「餘りさうでもないでせう。貸しがあるなんて、ずゐぶん人を莫迦にしてゐるぢやありませんか。私はあれが腹に癒えない。」

「それは言つちや惡いと思つたからだらう。さういふ風に言つておいたら、お金を出すのに己の都合がいゝとでも思つたんだらう。」

「だつて人の家へ來て、餘り私を莫迦にしてゐるぢやありませんか。私今度來たら、少し遣りこめてやりますよ。」

「いや、そんな惡い女ぢやない。いつそ惡ければ始末がいゝ。」

「あれぢやね。」

夜の更けるのもしらずに、二人でひそ〳〵話してゐた。融はいくらか荷が輕くなつたが、お峰がどこか殺氣だつてゐるのを不安に感じた。

「もう止しませう。子供が何だと思ふでせうから。」

お峰はさう言つて、融の傍を離れた。

「あゝ、詰らない。私明日どこかへ行つてこよう。」お峰は立ち際に、子供のやうな調子で言つて空虛な笑方をした。

融は默つてゐた。

お峰はやがて頼りなさゝうに、そつちの方に延べた寢床へ入つた。別に寢室とてもなかつた。二つの床が、狹苦しいそこに並んでゐた。お峰は後姿を見せて枕に就いた。

融は吻とした氣持になつた。そして煙草をふかしながら、何時までも机に向つてゐた。

すると眠つたと思つたお峰が、ふいに身動きをした。そして兩手を重ねた上に額を突伏したまゝしばらくぢつとしてゐた。そして融がふいと氣づいて見ると、頭から肩のあたりがわなわな慄へてゐた。

融は驚いた。

「何うしたんだ。」

「何うもしませんけれど……。」お峰は答へたが、鼻が塞つたやうになつてゐた。

「鼻が惡いの。」

「いゝえ。」さう言つて彼女は彼方へ向き直つた。

少し時間がたつた。お峰はいきなり此方を向いた。

「何だか腹が立つて爲樣がない。貴方の顏を見るのも厭になつてしまつた。」お峰はさう言つ

て袂で涙を拭いてゐた。
「ぢや見なければ可いぢやないか。」融はすかすやうに言つた。
「私貴方だけはそんな事はないと思つてゐた。」お峰は濡れた顔に、寂しい嘲笑を浮べた。
「まだそんな事を言つてるのかい。爲様がないな。」融は舌打ちした。
「わたし何うしても我慢できない。」お峰は泣聲で言つた。そして起上つて枕をそこへ投げつけた。
融はそんなにまで荒びたお峰を見たことがなかつたが、そんな眞實に衝突かつたこともなかつた。
「あれ程言つてゐるのに、解つてくれないんだね。」
「貴方のお話はよく解つてゐます。困つていらつしやることも解つてゐます。でもさう思へないんです。何時も彼も歴々目に見えて仕方がないんです。
「少し靜かにしてくれ。」融はさう言つて、彼女を宥めにかゝつた。

七

お峰に極めつけられてから、お冬は來ることを控へるやうになつた。
お峰がどんな風に極めつけたかは、融には解らなかつた。しかしそれまで頻く遣つて來ては融に逢ふことを要求してゐたお冬の足が、とにかく遠退いた。
しかし矢張やつて來た。融が外から歸つて門を開けて入ると、格子戸のなかに子供を負つた女が立つてゐたりした。融はそのまゝ裏口へまはつて、長い時間のあひだ、庭に立つてゐた。
「ちよつと上らせて貰ひます。」女はさう言つて、上りさうにした。
お峰は出るのを厭がつて、誰かに出てもらふ事にしてゐた。
融もお峰も氣が氣でなかつた。時々方法を講じても見たが、好い智慧が出なかつた。
「私行つて話をつけて來ませう。」お峰は言つてゐた。
融は何うかすると、お峰が本當に行くだらうかと思つた。しかし矢張躊躇してゐた。
「子供をもたれてゐると、何うしても此方が負籤ですから、何うにかして此方へ取れるといゝんですけれど。子供さへ取つてしまへば、安心ですよ。」
或時はまたお峰はそれを思ひ詰めてゐるのであつた。
「けど甘く取りあげたにしても、後が面倒でね。家におく譯には行かないし、人にくれるにしてもなか／＼手がかゝる。何よりも見るのが厭なんだ。」
「でも可哀想だと思ふでせう。」
「それだと多少苦しんでも可いと思ふけれど、何の感じもないから困るんだ。」
「子供は似てゐるんですか。」
「それも能く見ない。似てゐるといへば、似てゐるやうな氣もするが……。」融は首を捻つてゐた。
あの前後の女の態度や口吻を惡意に解すれば、そこに何等かのトリックが彼を待受けてゐたやうに思へるのであつた。
「しかし第一回目の時……第二回に逢つてから、少し日數がたつてゐたと思ふが、多分九月へ入つてからだらう、その時月經がないなんてことを言つてゐた。僕もをかしいと思つたけれど、しかし女が他の男に關係があつて、その時姙娠を感づいてゐて、僕に押しつけようとして、さう言つたものとするのは、僕のものである場合と同樣、一月では少し早過ぎるからね。」

融は當事者でなくては迚も判りさうもない事實の細い說明を試みようとした。
「何とも解りませんよ。」お峰は腑におちない顏をしてゐた。
「よく解るぢやないか。」融はさう言つて、括かしさうに又同じことを繰返して說明した。お峰を待つまでもなく、實は彼自身それを否定するに足る何等かの證迹を探したくてならなかつた。子供に愛着がないと言つても、あの二人の子供が、お冬と運命を共にして、どこか其處いらを流轉して歩くであらう姿を想像すると、餘り好い氣持はしないのであつた。お冬がもつてゐれば未だしもだが、それも何うなることか判らなかつた。あんな子が、人買ひの手に渡されて、辛い綱渡をさせられたり、乞食に傭はれて大道の曝しものにされるのではないかと、彼はそんな詰らない事まで思つて見たりした。勿論それは其の子に限つたことでもなかつた。現在の自分の子供について、彼はもつと〳〵深刻な惱みを惱み通して來たのであつた。それにお峰の子が幸福か、お冬の子が幸福か誰がそれを決めることが出來よう。そんな事を考へた日には際限がなかつた。人間の感じ考へ得る範圍が何れほどのものでもないのであつた。
しかしさう何も彼も背負つては、融も生きることが出來なかつた。自我がさう分裂したのでは、實際遣切れないと思つた。
「あの子供たちは、あの子供たちで自分の運命をもつであらう。」融はさう思つて、耐へ忍ぶより外なかつた。
でも出來ることなら、その子供が自分の所因でない證據を握んでおけば、尚更助かるのであつた。お峰の前で、それを肯定しようとしてゐる彼の氣持が、それであつた。
「私が見ればきつと判ると思ひますよ。」お峰は自信ありさうに言つた。
勿論融にも解らないことはなかつた。たゞさう思ひたくないだけであつた。
「しかし貴方も飛んだところへ飛込んだものですね。」お峰の口から又愚癡が出た。
とにかく融は友人のS—氏にそれを持込んで行くことにした。そして或晩S—氏を訪問した。
この事がS—氏の手に一切を委されることになつてから、大分月日が經つた。
初め融が若いS—氏の前に、珍奇なこの事實を告白した時、S—氏は直法律的形式に當てはめて、取るべき手段を講じようとした。
「何か女から金を請求して來た手紙とか、金の受取とかさう言つたやうなものが、手許にありますか。」S—氏はいきなり證據品の有無について尋ねた。
「最近のものなら、幾通かある筈です。金の請取といつちやありませんが、郵便局の爲替の受取でしたら。」
「とにかく明日行つて逢つてみませう。子供を此方へよこせつて、取占めてみるか、何か反證を擧げて、子供を否認してしまふんです。貴方は別にその女を世話してゐた譯ぢやないんで、たゞ偶然逢つたといふだけで、しかもさういふ女なら、何をしてゐたか判らないんだから、承認しないといへば、それまでぢやないですか。」
融は成程と思つたが、それだけでは安心ができなかつた。
「さあ、しかし反證を擧げることができるか何うか……」
「いや、しかし警察の方で、その當時の女の行跡や、周圍の事情を調査すれば、何か出てくるですよ。それにはちやうど好いことがあるんです。A—君の知つてゐる、K—君が、今度あ

すこの分署へ轉任になりましたから、仕事は爲易いんです。」S―氏は樂觀的に言ふのであつた。

「何よりも女に遣つて來られるのが遣切れないんですが……。」

「そいつは脅迫ですから、次第によつては××署のT―君にでも話して、警察の手に引渡してしまふんです。今度來たら、私に委してあるからつて、取合はないことにしておくですね。」そしてS―氏は男女關係の色々の事件について、話したりした。東京にゐる外國人と或る有名な日本の歌劇女優との關係の事件なぞにも、S―氏は直接關係してゐた。

S―氏は翌日女に逢つてから、直××分署へその事件を持込んで行つた。その頃ちやうど女から來た、長い手紙が外の手紙と一緒に、S―氏の手から警察へ提出されたりした。長い其の手紙では、女はもう月々扶助を受けるものと自分決めに決めて、幾月かの滯りを請求して來たのであつた。

「やつぱり何かあつたさうですよ。」

或る日お峰は、S―氏のところから歸つてくると、融を極めつけるやうに言つた。

「警察で探つた結果、確かに外に男があつたことが判つたさうですよ。」

「さうか。」融も吻とした氣持になつた。

「それだと大變助かるな。」

「何うして貴方があんな女に引掛かつたんだらうつて、皆さう言つてるさうですよ。貴方はもう絶對にあすこへ足踏みしては可けないんですよ。行けばまた因縁がつくさうですから。」

「困るな。己にそんな興味があると思つてるのかな。その男といふのは何だらう。」融は確めた。

「何だか詰らない男ださうです。いづれ碌なものぢやないでせう。」

融はしかし、お峰の口吻で、其の子供を否定させようとして、皆に脅かされてゐるのを直感した。その男の存在が疑はしくなつて來ると同時に、否定説の根據がまた危くなつて來るのに不安を感じた。

「己はさう云ふ男と關係してゐたことが判れば、大助かりなんだ。しかしそれにしたところでその子供が己のものでないといふことは、斷言できないではないか。」融はその事が、もつとメスで切開したやうに、明瞭にならないのに苛立ちながら、詰るやうに言ふのであつた。

しかしお峰にはその氣持がよく解らなかつた。

「けど、あれを自分の子だと思つてゐるのは、貴方が人が好いからだと、S―さんも言つてゐますよ。」

「笑談ぢやない。まるで遊ぶ。」融は少しじれじれして來た。

「あの女にしたところで、僕に迷惑かけまいと思つて、神戸へ行つたくらゐなんだからね。己はその子供を自分のものとは思ひたくはない。しかしさうでないと云ふことを、誰が何うして決めてくれるんだ。」

「けれどさう云ふ男もあるのに、貴方のものと決めてしまふ必要もないぢやありませんか。」

「必要はないさ。しかし己の氣持ではもつと分明したことが知つておく必要があるんだ。お前なぞは、初めから女を惡いものと決めてかゝつて、そこから出發しようとしてゐるんだけれど、己にはさうは思へない。それはだらしのない女だとは言へるけれど、惡い女だとも言つてしまへない處もある。」

「けど譃は吐くでせう。」

「譃を吐くのは平氣さ。それだからと言つて、あの女に人間らしいところが、少しもないとは言へないんだ、あの女だつて人並に生きなければ

ばならんのだ。それは己があの女を好いてゐるとか、好いてゐないとか言ふこととは全然別問題だよ。」融は體までが引締つて來るのを感じながら、苛々して言つた。
お峰は解るやうで解らなかつた。融も強ひて解らせようともしなかつた。
「それで何うなんだらう。此間S―君に渡した金は、一體何うなるんだらう。」
「ですから、あれはあの女か、叔母さんの添合かを呼出して、示談が成立つたとき、警察から渡してくれる筈になつてゐるんださうですけれど、何うしても出てこないので、手のつけやうがなくて困つてるんださうです。」お峰は括しさうに言つた。
融はこの事件がS―氏に引渡されてから、もう可なり長い時日を、煮え切らない氣持で惱んでゐた。S―氏の時々の報告で、うまく行きさうにも思へたが、S―氏の樂觀してゐるやうに警察に賴つてばかりゐられないやうにも思へた。
するうち暮が近づいてきた。
或る寒い夜、S―氏が慌忙しくやつて來た。
「A―君と一緒に、これからちよつとK―君ところへ御同行しようと思ひます。貴方にもK―君に逢つて話をしてもらつておけば、此方の心證が好くなるからつて、A―君が今通に待つてゐますから。」
A―君はS―氏の友人で、辯護士であつた。
「警察ですか。」
「いゝや自宅です。」
融は急いでS―氏に同行した。通へ出ると、そこの自動車のなかに、いつも口數を利かないA―氏が坐つてゐた。
「お寒いところを何うも……。」融はその横に腰かけて、挨拶した。
濛靄の深い靜かな宵であつた。事件がから外延的になつて來ると、融自身の氣持も圏外から眺めてゐるやうな風になつてしまつたのを感じた。皆と一緒に、ビジネスとして其を取扱つてゐるに過ぎないやうに思へた。彼は神經衰弱にかゝつてゐた。この事件でいくらか酬はれたことは、お峰の愛が新しくされたといふ事くらゐであつた。彼女をほんたうに發見したことは、しかし融に取つては思ひがけない悅びであつた。今まで彼は彼女を侮蔑しすぎたのを感じた。お峰にいくらか狼狽の色のあつたことは爭へなかつたけれど、それを一概に利己的だと言つてしまへなかつた。お峰は融より外に賴るものゝないことを、年と共にしみ〴〵感じさせられてゐた。
K―氏の自宅を探しあてるまでに、三人は自動車を乘りすてゝから、大分その邊のごちやごちやした町をうろつかなければならなかつた。
「警視廳警視 嚴めしい標札が名札と共に、その明るい門燈に、はつきり讀まれた。
K―氏は風邪で臥せつてゐたのを、わざ〳〵起きて、三人を引見してくれた。
「一つ此方の心證を好くしておきたいと思ひまして、今夜同行した譯ですが……。」A―氏が口を切つた。
「いや、この間から當人の叔母の亭主といふのを召喚してゐるのですが、何うもやつて來ない。こちらとしては強要することは出來ないので、實はちよつと……。」K―氏は言つたが、融に向つて、
「あれは何をしてゐた女ですか。」
「以前カフェにゐたのです。その頃は普通の女で、善良といへませんが、まあ浮氣であつたといふくらゐでせう。その後ずゐぶん方々流轉してあるいたので、惡くなつたやうです。暗い生活がつゞいたやうです。またさう云ふ風な女なのです。浪費家で譃吐きなんですが……。」融

は女を惡く言つてゐる自分に氣づいて、恥しく思つた。

「女は貴方の子だと言つてるさうですが、それは何うなんですか。」

融は途中A―氏とS―氏から教へられてゐたことがあつた。それは子供のできる所因が自分にないことをK―氏の前に明言しておくことであつた。彼はそこまで告白するのがひどく感じが惡かつた。

「たゞ向合つて坐つてゐたのでは、どうも話が引出せないので……しかし其の豫防はしてゐたのです。」融は言つてしまつたが、餘り好い氣持がしなかつた。

「それぢや貴方は、こゝの所で女が切れてしまふと言へば、幾許か纏まつた金を出してやらうといふ心持はおありなので。」

「無論それはその積りで……何しろせつせと遣つてこられるので、絶えず脅かされるやうな氣持で實際遣切れませんのです。」

「何とか一つ穩かに說諭して見ませう、さう云ふ女を順良に導くのが尤も望ましいことで、犯罪を檢擧することのみが目的ぢやないんですから。」

そしてK―氏は、或る若い作家の名をあげて、知つてゐるか何うかを融に訊いたりした。

「あれは私も以前少し面倒を見たことがあるんで。」K―氏は言つて、

「酒好きで、なか〳〵面白い人間のやうですな。」

融はちよつと面喰つた。

「あれは何うして……しかしちよつと參つたな。」

「いや、大丈夫です。」K―氏も笑つた。

三人はそこを出てから、電車通で或るカフェを訪れた。融は咽喉が乾いて仕方がなかつた。

「どう云ふ工合でしたか。」

家へ歸るとお峰がきいた。

「何だか餘り樂觀もできないやうだ。男があるといふことも、別に言つてはゐない。」融は飽足りなさうに言つた。

「それに女が別に惡いことをしたといふんぢやないんだから、警察權でもつて、無暗に壓迫するて譯にも行かんだらう。」

「それやさうでせうね。」お峰も浮かない顏をしてゐた。

「しかし餘り考へないことにしようと思ふ。考へたつて同じことだ。」

融はいつになつたら、晴々した氣分になれるかと、捂かしく思つたが、一度出來たことが、たとひ其が時の力で、いつかは知らず、自然のなかへ熔けこんでしまふにしても、數學の答案のやうに、さう分明した解決が根本的につく筈もないことに心づいてゐた。時が彼の痍を少しづつ癒してくれるだけであつた。それで十分であつた。

或日またS―氏がやつて來た。

「到頭女が××分署へ出たさうですよ。」S―氏は興味ありげに言ふのであつた。

「あのべちや〳〵した調子でもつて、大いに辯じて行つたさうです。それなら其でいゝから、金なんか一文だつていらないつて、いくら言つても持つて行かんさうです。」

そして、

「まあ仕方がないでせう。今にへこたれて來るのを待つとしませう。しかし此方へ來るやうな事は、絶對にありません。若しそんな事があつたら、××分署へ、ちよつと電話をかければ、來てくれることになつてゐますから。」

「それさへなければね。」お峰も安心したやうに言つた。

「それに今頃はもう男を拵へてゐる時分ですよ。」

融はそれと、あの社會局だといつて來た、不思議な男とを結びつけて考へたりした。

「しかし子供は育てるさうですよ。」S—氏は附加へた。

融は全く敗亡してしまつた。事實の裏書をされてしまつたやうに感じた。

女はそれから足踏みもしなかつた。手紙も寄越さなかつた。

三年四年と月日がたつた。そして恐ろしい地震が見舞つて來た。融は一切の證文も焼けてしまつたらうと思つた。

花、その他

私の道樂は花くらゐのものだ。別に面白いとも思はないが、相手があれば時間潰しに引くのである。これは不健全だ。しかし花には不分明な領界があるので、私のやうな頭腦のわるいもので相當樂しむことができる。碁や將棋のやうに割り切れないところに多少の興味が繋つてゐる。若し花に不分明な領域がなかつたら、私は嫌ひになるだらう。人生も隅から隅までわかつたら、私のやうな悧巧でない人間は生きてゐられないかも知れない。何が人生だか薩張わからないと云ふ人がある。學問をもつてしても何をもつてしても知るところは知れたものだといふのである。勿論人の感覺の觸れうる範圍から少しばかり出てゐる位の程度かも知れないが、主觀問題だからそんなことを論ずるのは寧ろ莫迦げてゐる。自然科學は客觀的態度だけに一番確かのやうにおもへるが、その代り際限がない。知れば知るだけ知られない部分がふえ、たつて來るばかりである。知るといふことは益し知れない部分が多くなつて來るといふ意味に外ならない。恰も物を片端から破壊して行くと同じ結果である。そこで人間を一つの小宇宙と見ることが必要のやうであるが、又窓を作つておくことも便利な考へ方には違ひないのである。

もう一つ花でいふと、花の引き方に積極的な人と消極的な人とある。つまり周圍の形勢と自分の運命を否定的に手堅くやるのと、少々不確かでも、箱のなかを當に運命を掴むべく強氣に出るのとの二つである。尤も否定と共に肯定する行き方もある。餘り弱氣では兎角負け込んでくるのが人生であるが、聰明の伴はない強氣は又一方から言ふと無謀である。何だか詰らない處世哲學でも説いてゐるやうであるが、強氣とか弱氣とかいふことも、或る程度まで宿命的に出來てゐることも餘儀ないことである。たゞさう云つた現實と或る程度まで超越することは頭とか年齢とかの問題に屬するやうに思はれる。

つこつ歩いてゐた。そこは米屋とか洗濯屋とかパン屋とか雜貨店などのある町筋であつた。中には宏大な門構への屋敷も目についた。遙か上にある六甲つゞきの山の姿が、ぼんやり曇んだ空に透けてみえた

「こゝは山手ですか。」私は話題がないので、そんな事を訊いてみた。勿論私一個としては話題が有り餘るほど澤山あつた。二人の生活の交渉點へ觸れて行く日になれば、語りたいことや訊きたいことが澤山あつた。三十年以前に死んだ父の末子であつた私は、大阪にゐる長兄の愛撫で人となつたやうなものであつた。勿論年齡にも相當の距離があつたとほりに、感情も兄と言ふよりか父と言つた方が適切なほど、私はこの兄に取つて我儘な一個の驕慢兒であることを許されてゐた。そして母の生家を繼ぐのが適當と認められてゐた私は、何うかすると、兄の後を繼ぐべき運命をもつてゐるやうな暗示を、兄から與へられてゐた。勿論私自身はそれ等のことに深い考慮を費す必要を感じなかつた。私は私であればそれで可いと思つてゐた。私の子供たちは又彼等自身であれば可い譯であつた。そして少いときから兄夫婦に育てられてゐた義姉(兄の妻)の姪に桂三郎といふ養子を迎へたからと云ふ斷りがあつたときにも、私は別に何等の不滿を感じなかつた。義姉自身の意志が多くそれに働いてゐたことは、多少不快に思はれないことはないにしても、義姉自身の立場から言へば、それは當然すぎるほど當然のことであつた。たゞ私の父の血が絶えるといふことが私自身にはどうでもいゝことであるにしても、私たちの一家に取つて幾分寂しいやうな氣がするだけであつた。勿論その寂しい感じには、父や兄に對する私の濫ることのできない純眞な敬愛の情をも含めない譯にはいかなかつた。それは單純な利害の問題ではなかつた。私が父や兄に對する敬愛の思念が深ければ深いほど、自分の力を以つて、少しでも彼等を輝かすことができれば私は何をおいても權利といふよりは義務を感じずにはゐられない筈であつた。

しかし其の事はもう取決められてしまつた。桂三郎と妻の雪江との間には、次ぎ〳〵に二人の立派な男の子さへ產れてゐた。そして兄たち夫婦の撫育のもとに、五つと三つになつてゐた。兄たち夫婦は、その孫たちの愛と、若夫婦のために、くつ〳〵と働いてゐるやうなものであつた。

勿論老夫婦と若夫婦は、一つ家に暮してゐたが、桂三郎も雪江よりは以上にも、兄たちに可愛がられてゐた。兄には多少の不滿もあつたが、それは濃い愛情から出た深い思慮から出たものであつた。義姉はといふと、彼女は目を極めて桂三郎を賞めてゐた。で、また彼女の賞讚に値ひするだけの好い素質を彼がもつてゐることも事實であつた

とにかく彼等は幸福であつた。雪江が私の机の側へ來て、雜誌などを讀んでゐるときに、それとなく話しかける口吻によつてみると、彼女には幾分の悶えがないわけに行かなかつた。學校を出てから、東京へ出て、時代の新しい空氣に觸れることを希望してゐながら、固定的た義姉 彼女の養母で叔母 の愛に囚はれて、今のやうな家庭の主婦となつたことについては、彼女自身ははつきり意識してゐないにしても、私の感じ得たところから言へば、多少枉屈的な運命の悲哀がないことはなかつた。彼女は其の眞實の父母の家にあれば、もつと幸福な運命を掴みえたかも知れないのであつた。氣の弱い彼女は、すべて古めかしい叔母の意志どほりにならせられて來た。

一私の學校友だちは、みんな好いところへ片附

いてゐやはります。」彼女はそんなことを語つ[illegible]へ、ながらも、叔母が撰んでくれた自分の運命に、心から滿足しようとしてゐるらしかつた。

「こゝの經濟は、それでも此頃は桂さんの收入でやつて行けるのかね。」私はきいた。

「まあさうや。」雪江は口のうちで答へてゐた。「お父さんを樂させてあげんならんのけれど、な、そこ迄には行きませんのや。」彼女はまた寂しい表情をした。

「どのくらゐ收入があるのかね。」

「いくらもありやしませんけれどな、お金なぞたんと要らんと思ふ私はこれで幸福や。」とう言つて微笑してゐた。

もつと快活な女であつたやうに、私は想像してゐた。無論憂鬱ではなかつたけれど、若い女のもつてゐる自由な感情は、いくらか虐げられてゐるらしく見えた。[illegible]といふ生理的[illegible]かも知れなかつた。[illegible]な落着いた[illegible]があつたが、そ[illegible]意地の強いところもあるらしく見えたが、それも相互にまだ深い親しみのない[illegible]する一種の見えと[illegible]から來てゐるものらしく[illegible]た。彼は[illegible]美しい男だと[illegible]、私[illegible]にしてゐた。

雪江は深い愛着を彼にもつてゐた。

私はこの[illegible]の町についての桂三郎の説明を聞きつゝも、六甲おろしの寒い夜風を幾分氣にしながら歩いてゐた。

「いゝえ、こゝはまだ山手といふほどではありません。」桂三郎はのつしり〳〵した持前の口調で私の問に答へた。

「これから貴方、山手までは隨分距離がありますす。」

廣い寂しい道路へ私たちは出てゐた。松原を切拓いた立派な道路であつた。

「立派な道路ですな。」

「それあ貴方、道路はもう、町を形づくるに何よりも大切な問題ですがな。」彼はちよつと嵩にかゝるやうな調子で應へた。

「もつともこの[illegible]ぢや、作物は駄目だからね。」

「いゝえ、作物はよう出來ますぜ。これからあんた先へ行くと、畑地が澤山ありますがな。」

「この邊の土地はなか〳〵高いだらう。」

「[illegible]です。」

[illegible]へに、[illegible]んだ松で漆包んだやうな新築の家が[illegible]るところに、ちらほら見えた。[illegible]や門構は、[illegible]なものばかりであつた。

「こちらへ行つて見ませう。」桂三郎は暗い松原蔭の道へと入つて行つた。そして其處にも、まだ木香のするやうな借家などが、次ぎ〳〵にお茶屋か何かのやうな意氣造りな門に、電燈を掲げてゐた。

私たちは白い河原の[illegible]へ出て來た。そこからは青い松原をすかして、二三分ごとに出てゆく電車が、美しい電燈に飾られて、間斷なしに通つてゆくのが望まれた。

「こゝの村長は――今は替りましたけれど、先の人が色々この村のために計畫して、廣い道路を到るところに作つたり、堤防を築いたり、土地を賣つて村を富ましたりしたものです。で、計畫はなか〳〵大仕掛なのです。叔父さんも一つ夏子[illegible]さんをおつれになつて、こゝで過されたら何うです。それや體にはいゝですよ。」

「さうね、來て見ればそんな氣もするね、たゞ餘り廣すぎて、[illegible]ないぢやないか。」

「それは貴方、まだ家が[illegible]から然うですけれど……。」

一然し廣い土地が、まだ殘るところに澤山あるんですね。何分東京とちがつて、大阪は町がごつしりだからね。其の割にしては郊外の發展はまだ遲々としてゐるよ。
「それあ貴方、人口が少いですがな。」
「しかし少し癪にさはるね。さうは思はんかね。」などと私は笑つた。
一初めこゝへ來た頃は、私もさうでした。みんな廣大な土地をそれからそれへと買取つて、立派な家を建てますからな。けれど、此頃は何とも思ひません。さうやきもきしても爲方がありませんよつて。私たちは今基礎工事です。金をちび／＼ためるやうなぞとは思ひません。出來るのは一時です。」彼はいくらか興奮したやうな聲で言つた。
私たちは河原ぞひの道路をあるいてゐた。河原も道路も蒼白い月影を浴びて、眞白に濡いてゐた。對岸の黒い松原蔭に、灯影がちらほら見えた。道路の傍には松の生茂つた崖が際限もなく續いてゐた。そして其の裾に深い叢があつた。月見草がさいてゐた。
一これから夏になると、それあ月が好いですぜ。」椎三郎はさう言つて叢のなかへ入つて蹲んだ。

て、私も青草の中に寝込んで、[illegible]した。淡い月明りが、白々と二人の影を照してゐた。どこにも人影がみえなかつた。對岸の松原の家もしんとしてゐた。犬の聲さへ聞えなかつた。勿論濁れた川には流れの音のある筈もなかつた。
「わたしは此の草の中から、月を見てゐるのが好きですよ。」彼は彼自身のもつてゐる唯一の詩的興趣を披瀝するやうに言つた。
「もつと暑くなると、この草が長く伸びませう。その中に寝轉んで、草の間から月を見てゐると、それは好い氣持ですぜ。」
私は何かしら寂しい物足りなさを感じながら、何か詩歌の話でもしかけようかと思つたが、差控へてゐた。のみならず、實行上のことにおいても、彼は餘りに單純であるやうに思はれた。自分の仕へてゐる主人と現在の職業の外に、自分の境地を拓いてゆくべき慾求も苦悶もなさ過ぎるやうにさへ感ぜられた。兄の話では、今の仕事が大望のある青年としてはさら有望のものでは決してないといふことであつた。で、私がこの頃に十五六年ぶりで大阪で逢つた同窓で、或大きなロシヤ貿易の商會主であるY氏に、一度椎三郎を紹介してくれろと云ふのが、兄の希望であつた。私は大阪で[illegible]氏に會つて、[illegible]の人達に紹介されて、[illegible]たばかりであつた。彼等は皆この土地で、有數な地位を占めてゐる人たちであつた。中には三十何年ぶりで逢ふ同窓もあつた。
私はY氏に椎三郎を紹介することを、兄に約しておいたが、椎三郎自身の口から、その問題は一度も出なかつた。彼が私の力を借りることを好しとしてゐないのでないとすれば、さう大した學校を出てゐない自分を卑下してゐるか、さもなければ其の仕事に興味をもたないのであらうと考へられた。私には判斷がつきかねた。
「雪江は何うです。」私はそんな事を訊ねてみた。
「雪江ですか。」彼は微笑をたゝへたらしかつた。
一氣立のいゝ女のやうだが……。」
「それあ然うですが、しかしあれでも然う好いとこばかりでもありませんね。」
一何かいけないところがあるか？」
一いゝえ、別にいけないといふこともありませんが……。」と、彼はそれを何ういふ風に言現はして可いか解らないといふ調子であつた。

が、とにかく彼等は條件なしに幸福兒といふことは出來ないのかも知れなかつた。

私は輕い焦燥を感じたが、同時に雪江に對する憐愍を感じないわけにはいかなかつた。

「雪江さんも可哀さうだと思ふね。どうかまあ好くしてやつてもらはなければ。勿論財産もないので、これからは貴方も骨がをれるかも知れないけれど。」私は言つた。

「それあもう何です……。」彼は草の葉をむしつてゐた。

話題が少し切迫して來たので、二人は深い觸れ合ひを避けでもするやうに、ふと身を起した。

「海岸へ出てみませうか。」桂三郎は言つた。

「さうだね。」私は應へた。

ひろびろした道路が、そこにも開けてゐた。

「こゝは此間釣に來たところと、又違ふね。」私は濱邊へ來たとき、四邊を見まはしながら言つた。

沼地などの多い、土地の低い部分を埋めるために、その邊一帶の砂が處々刳り取られてあつた。砂の崖が到る處にできてゐた。釣に來たときよりは、浪がずつと荒かつた。

「この邊でも海の荒れることがあるのかね。」

「それあ有りますとも。年に決つて一回か二回はね。そして其の時に、刳り取られたこの砂地が均されるのです。」

海岸には、人の影が少しは見えた。

「叔父さんは海は嫌ひですか。」

「いや、さうでもない。以前は山の方がよかつたけれど、今は海の方が暢氣でいゝ。だが餘り荒い浪は嫌ひだね。」

「さうですか。私は海邊に育ちましたから浪を見るのが大好きですよ。海が荒れると、見に來るのが樂しみです。」

「あすこが大阪かね。」私は左手の縹渺とした水霧の果に、蟲のやうに簇つてみえる微かな明りを指しながら言つた。

「ちがひますがな。大阪はもつと／＼先に、微かに火のちら／＼してゐる彼ですが。」さう言つて彼はまた右手の方を指しながら、

「あれが和田岬です。」

「尼ケ崎から、あすこへ軍兵の押寄せてくるのが見えるかしら。」私は尼ケ崎の段を思出しながら言つた。

「あれが淡路ですぜ。よくは見えませんでせうがね。」

私は十八年も前に、この溫和な海を渡つて、九州の溫泉へ行つたときのことを想出した。私は何かにつけてケアレスな青年であつたから、その頃のことは主要な印象のほかは、總て煙のごとく忘れてしまつたけれど、その小さい航海のことは昨今のことのやうに思はれてゐた。その時分私は放縱な浪費ずきなやくざもののやうに、義姉に思はれてゐた。

私はどこへ行つても寂しかつた。そして病後の體を抱いて、この邊を無駄に放浪してゐた、その頃の痩せこけた寂しい姿が痛ましく目に浮んで來た。今の桂三郎のやうな溫良な氣分は、どこにも見出せなかつた。彼のやうな幸福な人間では、決してなかつた。

私はその溫泉場で長いあひだ世話になつてゐた人たちのことを想起した。

「おきぬさんも、今ならどんなにでもして、あげるよつてお母ちやんにさう言うてあげておくれやすと、そないに言うてやつた。一度行つて見てはどうや。」義姉はこの間もそんなことを言つた。

私はおきぬさんの家の庭の泉石を隔てたお亭のなかに暮してゐたのであつた。私は何だかその土地が懷しくなつて來た。

「そのうち須磨明石まで行つてみるかな。」私は

呟いた。
「は、叔父さんがお仕事がおすみでしたら……。」桂三郎は應へた。
私たちは月見草などの蓬々と濱風に吹かれてゐる砂丘から砂丘を越えて、歸路に就いた。六甲の山が、青く目の前に聳えてゐた。
雪江との約束を果すべく、私は一日は須磨明石の方へ遊びにいつた。勿論この邊の名所にはすべて厭な臭味がついてゐるやうで、それ以上見たいとは思はなかつたし、妻や子供たちの病後も氣にかゝつてゐたので、歸りが急がれてはゐたが……。
で、わたしは氣忙しい思ひで、朝早く停留所へ行つた。
その日も桂三郎は大阪の方へ出勤する筈であつたが、私は彼をも誘つた。
「二人一緒でなくちや困るぜ。桂さんも是非おいで。」私は言つた。
「ぢや私も行きます。」桂三郎も素直に應じた。
「だが會社の方へ惡いやうだつたら。」
「それは叔父さん、可いんです。」
私は支度を急がせた。
雪江は鏡臺に向つて顏を作つてゐたが、やがて派手な晴衣を引ひろげたまゝ、隣の家へ留守を頼みに行つたりした。ちやうど女中が見つかつたところだつたが、まだ來てゐなかつた。
「叔父さんのお蔭で、二人一緒に遊びに出られますのえ。今日が新婚旅行のやうなもんだつせ。」雪江はいそ〱しながら、帶をしめてゐた。顏にはほんのり白粉がはかれてあつた。
「ほら、綺麗になつたね。」私は揶揄つた。
「そんな着物は一向似合はん。」桂三郎はちよつと顏を紅くしながら呟いた。
「いくらおめかしをしても明かん體や。」彼はさうも言つた。
私たちは直に電車のなかにゐた。そして少し話に耽つてゐるうちに、神戸へ來てゐた。山と海と迫つたところに細長く展がつた神戸の町を、私は再び見た。二三日前に私はこゝに舊友をたづねて互に健康を祝しあひながら町を歩いたのであつた。
終點へ來たとき、私たちは別の電車を取るべく停留所へ入つた。
「神戸は汚い町や。」雪江は呟いてゐた。
「汚いことありやしませんが。」桂三郎は言つた。
「神戸も初めて？」私は雪江にきいた。
「さうですがな。」雪江は眩い目をした。
私は女は誰もさうだといふ氣がした。東京に子供たちを見てゐる妻も、やつぱり然うであつた。
「今度來るとき、をばさんを連れておいんなはれ。をばさんが來られんやうでしたら、秀夫さんをおよこしやす。どないにも私が面倒みて上げますよつて。」彼女はそんなことを言つてゐた。
「彼等は彼等で、大きくなつたら好きなところへ行くだらうよ。」
「それお然うや。私も東京へ一度行きます。」
私たちはちよつとのことで、氣分のまるで變つた電車のなかに竝んで腰かけた。播州人らしい乘客の顏を、私は眺めまはしてゐた。でも言葉は大阪と少しも變りはなかつた。山が段々なだらかになつて、退屈さうな野や町が、私たちの目に悄く映つた。と言つて何處に南國らしい森の鬱茂も平野の展開も見られなかつた。すべてがだらけ切つてゐるやうに見えた。私はこれらの自然から產出される人間や文化にさへ、疑ひを抱かずにはゐられないやうな氣がした。

温室に咲いた花のやうな美しさと脆さとをもつてゐるのは彼等ではないかと思はれた。
　私たちは間もなく須磨の濱邊へおり立つてゐた。
「この邊は私も實は餘り案内者の資格がないやうです。」桂三郎はそんな事を言ひながら、渚の方へ歩いて行つた。
　美しい砂濱には、珠のやうな礫が敷かれてあつた。水がぴちよ〳〵と、それらの小石や砂を洗つてゐた。青い羅衣をきたやうな淡路島が、間近に見えた。
「綺麗ですね。」などと桂三郎は讃美の聲をたてた。
「けど此處はまだそんなに綺麗ぢやないですよ。舞子が一番綺麗ださうです。」
　波に打上げられた海月魚が、硝子が熔けたやうに砂のうへに死んでゐた。その下等動物を、私は初めて見た。中には三四疋の小魚を食つてゐるのもあつた。
「そら叔父さん綸が……。」雪江は私に注意した。釣をする人たちによつて置かれた綸であつた。松原が濃い[illegible]に蒼く[illegible]つてみえた。昔の[illegible]歌にあるやうな[illegible]であつた。だが其はさう大した美しさでもなかつた。その上附近の防波堤へ上つて、砂ぶかい汽車や電車の軌道ぞひの往來へあがつてみると、高臺の方には、單調な松原のなかに、別莊や病院のあるのが目につくだけで、鐵拐ケ峰や一の谷も詰らなかつた。私は風光の生彩をおびた東海の濱を思出さずにはゐられなかつた。總てが頽廢の色を帶びてゐた。
　私たちは又電車で舞子の濱まで行つてみた。
　こゝの濱も美しいには美しかつたが、降りて見るほどのことはなかつた。
「せつかく來たのやよつて、淡路へ渡つて見ると可いのや。」雪江はパラソルに日をさへながら、飽かず煙波にかすんでみえる島影を眺めてゐた。
　時間や何かのことが、三人のあひだに評議された。
「とにかく肚がすいた。何か食べようよ。」私はこの邊で漁れる鯛の美さなどを想像しながら言つた。
　私たちは松の老木が枝を蔓らせてある遊園地を、そこゝ搜してあるいた。そして終に大きな家の一つの門をくゞつて入つて行つた。昔から古い格式を崩さないと云ふやうな誇をもつてゐるらしい[illegible]その家の二階の一室へ、私たちはやがて案内された。
「こゝは顯官の泊るところです。有名な家です。」桂三郎は縁側の手摺にもたれながら言つた。淡路がまるで盆石のやうに眞面に眺められた。裾の方にある人家の軒も仄かに眺められた。平靜な水のうへには、帆影が夢のやうに動いてゐた。モーターが引切なし明石の方へ漕いで行つた。
「あれが漁場々々へ寄つて、魚を集めて阪神へ送るのです。」桂三郎はそんな話をした。
　やがて女中が高盃に菓子を盛つて運んで來た。私たちは長閑な海を眺めながら、繪葉書などを書いた。
　するうち料理が運ばれた。
「へえ、こんなところで天麩羅を食ふんだね。」私はこて〳〵持出された食物を見ながら言つた。
「それあ貴方、あんたは天麩羅は東京ばかりだと思うておいでなさるから可けません。」桂三郎は嗤つた。
　雪江はおいしさうに、靜かに箸を動かしてゐた。
　紅い血のしたゝるやうな[illegible]、綺麗に運ばれた。私はそんな[illegible]たことがなかつた。

私たちはそこを出てから、更に明石の方へ向つたが、そこは前の二つに比べて、一番汚かつた。私
淡路へわたる船を捜したけれど、無かつた。私たちは明石の町をそつちこつち歩いた。
人丸山で三人はしばらく憩うた。
「あすこの御馳走が一番好うおましやろ。」雪江は言つてゐた。

私は海の色が夕氣づく頃に、停車場を捜しあてて汽車に乗つた。海岸の家へ歸りついたのは、もう夜であつた。
私はその晩、彼等の家を辭した。二人は乗場まで送つて來た。蒼白い月の下で、私は彼等夫婦に別れた。白い北の海岸の町を、私は恐らく再び見舞ふこともないであらう。

法被と洋服

むかし田口卯吉といふ人の書いたものに、洋服と日本の勞働服である腹掛法被とを比較して其の酷似點を圖説したものがあつて、私は少年の頃それを讀んだことがある。櫻癡居士の隨筆風のものにも、なか〳〵面白いものがあつて、權力關のかはりに、今に金力關ができると云ふことなぞを説いたものがあつて、これも少年の頃、新しいと思つて面白く讀んだことが思出されるが、あの頃あゝ云ふ人達は皆新人であつたのである。
日本の法被と洋服とは、寸分たがはない形のものである。しかし足の短い形の惡い日本人には、ズボンは何うしても足首のところを狹く詰めないと似合はない。だぶ〳〵したのは、見にくくて仕樣がない。西洋人の足は長く一本立だから、ズボンもをかしくはないが、日本人の足は短かいので[illegible]し、[illegible]てもゐるので、[illegible]いて見にくいし、[illegible]いて無恰好だから、それを[illegible]くしておくと、[illegible]、[illegible]に始末がわるいのである。それよりか股引風にきつちり足に喰着けに作つた方がいゝのである。日本人だつて、普通わるいわけではないが、どうも洋服姿は[illegible]から[illegible]に來た出稼人と云つた形で、日本人同志では一向好い氣にもなつてゐられるが、[illegible]西洋人の前へ出ると、わたしだけでも[illegible]合は身についた日本服を着てゐる方がどれくらゐ氣持がいゝか知れない。婦人の方はそれ程でもないけれど、男子の洋服は着てゐる人の着心はとにかく、形は確かにをかしい。經濟の點から言つても、便不便の點からいつても、實際の事情が洋服だけで通すことのできない現狀では、洋服がまだほんたうに日本人の服裝となり切つてゐるとは言へないのである。恐らく永久成り切れないであらうと思はれる。何か適當な日本人らしい新時代の服裝の案がないものかと、私は時々思ふ。

籠の小鳥

一

羊三は山を見るのが目的で、その山全體を預かつてゐる兄の淳二と一緒にこゝへ來たのだつたけれど、毎日の日課があつたり何かして、つい鼻の先の山の麓から濛々と立昇つてゐる煙を日毎に見てゐながら、つい其の傍まで行つて見るのが億劫であつた。

「山にはこちらから料理人が行つてをりますから、宅よりも御馳走がございますよ。」

嫂は家を出るとき、そんな事を言つてゐたが、その朝今は故人になつた土地の畫家のかいた「雨の牡丹」の幅をくれたりした。東京の二流どころの畫家のものと二つ掛けて、羊三の撰ぶに委せたのであつたが、その畫の氣品には格段の相異があつた。

「牡丹を頂きます。」羊三は一目見ると直ぐ答へた。

「これは立派なものです。」

「さうだ、その男のものは宮内省へも納まつてゐる」淳二は笑ひながら言つた。

羊三は母の法事をすませてからも、四五日兄の厄介になつてゐた。男三人のうち、長兄が昨年亡くなつてから、二人の氣持が何となく以前より融け合つて來た。

「私は實子も何にもないから、明日死んだつてかまはんが、君は長生きしてくれなくちや困る。」

さう言ふ氣持はあつても、口へ出して愛想を言つたことのない淳二も、そんな事を言ふやうになつた。その軸も羊三が近頃ぼろ家を自分のものにすることができたなどの悦びの積りだと思はれた。

淳二は停車場へ立つとき、煙草の好きな弟のために葉卷など用意して、自分で口を切つて火をつけてくれたりした。

淳二のために鑛山の持主——といつても當主筋に當るのだが——作つてくれた手輕い二室つゞきの靜かな部屋で、羊三は原稿紙を展げたのであつた。其處の窓から事務所の一帯が直ぐ右手に見られたが、前も左も山懷の斜面になつてゐて、その斜面にある道が、技師達の社宅への通路になつてゐるとみえて、夕方になると、若い洋服姿の男がその道を歸つて行くのであつた。淳二は朝早く起きると、部屋の外の廊下の端のところに、棚のある二つの箱のなかに飼つてある六七羽の鶉と、二羽の青鳥とに摺餌をやるのが、出勤前の仕事であつた。

それは十月の中頃から、かすみ網を張つて、昨夜泊つてゐた谷間を、朝早く出立して、長い旅を急がうとしてゐる様々の種類を呼ぶための囮なので、亡父から傳はつた淳二の一つの道樂であつた。閑散なこの國の士たちは、昔からいふことに深い興味をもつてゐたし、網や[illegible]品などを作るのに極めて堪能であつた。囮の選擇や飼養法にも特殊の目と優れた技能をもつてゐた。

羊三も幼年の頃から食べなれた其の鳥が、どこの國から買つたものよりも美味いことを知つてゐた。勿論それは其の食物に因るのであつた。

兄は羊三とちがつてでつぷりした立派な體の持主であつた。その上多少の[illegible]が日常法師に似てゐるといつて、[illegible]の[illegible]、今度の[illegible]

のときにも油をかけてゐた。その日蓮の籠にも深い大皺が寄つて、すく／＼した口髭は羊三よりも又一段白くなつてゐたけれど、健康は衰へてゐなかつた。そして鳥の世話などするのは、驚くほどまめであつた。

「大變ですな、これだけの鳥の世話をするのは。」羊三は傍へ來て、さう言つて不思議さうに見てゐた。兄がいくらか鳥構ひなどするのを、さういふことには全く興味をもたなかつた弟に氣をかねるやうにしてゐるのを感づきながら、お世辭のつもりで言ふのであつた。

「なあに、このために朝起きをするから。」淳一は辭少に答へながら、盛りわけた青いべつとりした餌を一つ／＼の籠に差入れてゐた。

鶫は二種類あつた。胸毛に斑點のある黒いのと、美しい鶸色のものとであつた。前者は勇壯で始終籠のなかを忙しく動いて、空や森に憧るゝやうに、明るい方へ顏をあげてゐたが、後者は人の影を見ると、奥へ引込んでおとなしくしてゐた。

「このしないの方が、品位がありますな。」

「さうだ。味もその方がいゝとも言ふな。」

「私も動物は犬も猫も嫌ひですが、小鳥は好きです。小鳥や草花がなかつたら、ずゐぶん寂しいと思ふ。」

「子供に小鳥を飼つたら何うだ。」

「それも考へたこともあつたが、今時の子供はなか／＼忙しいですから。私たちの時代とまるで違ふんで……。」

淳一は「ふん」と笑つてゐた。そしてその棚の隅においてあつた、小さい木片の束をほどいて、小刀で削りながら、中から蟲を出して鳥に與へてゐた。それは是から使用時期になるので、精力をつけるためであつた。羊三は餌の製法などもきいて見たが、兄には兄獨特の工夫があるらしかつた。そして其の鳥の飼ひ方や、それから推し及ぼした人間の攝生法などを聞いてゐると、兄は立派な科學者だといふ氣がした。

やがて朝の仕事を終ると、淳一は部屋へ戻つて來て羊三と一緒に朝飯の膳に向つた。

「どうしたい、あの連中は……。」淳一は給仕をしてゐる女に訊いた。

山はちやうど工夫たちの賃銀値上要求の運動があつたあとで、羊三は東京を立つ前から新聞の記事でそれを知つてゐたが、こつちへ來た頃には、それも大概片着いてゐた。最近の經濟界の恐慌で、銅の値の下つてゐるのは勿論だが、各方面の事業が破綻百出の形なので、この山の經營者の立場をひどく苦しくしてゐた。羊三は町へ出てから、色々な噂を耳にしたが、山には毎日のやうに詰めかけてゐたけれど、それも漸く人心が落着いたこの頃のことであつた。賃銀値上の運動にたづさはつた連中は、それを好い潮に馘首されたものも少い數ではなかつた。

女は「そう」と言つて笑つてゐたが、

「今夜また演説があるさうでございます。」

「さうか。それで引揚か。」淳一は苦笑してゐたが、羊三に、

「東京からA―が應援に來てゐるんだが、來たときは大變な景氣で歡迎されたもんだが、何しろ時機が惡いのでな。」

――そいつは一つ今夜の演説を聞かうかな。貴方はそのA―に逢つたことがありますか。」

――今度はまだ逢はん。いつも私が衝に當るんだが、今度は若い連中のお手並を拜見しようと思つて傍觀してゐたんだ。けれど孰れにしてもこつちの事情が要求に應じかねるんで、實は人減しをしようと思つてゐた際だから、重立つた連中だけ罷めさしてしまつたんだ。」

口の重い淳一のこととてそれ以上詳しい說明もしなかつたが、今迄幾度かの同じ爭議に出會して、その度ごとに色々の人にも逢つてゐる

五町も行くと、直に一つの坑區の傍へ出た。

その邊は一帶に赭禿の山が、左右に向ひ合ひ、前後に重なり合つてゐた。どこを見ても焦け爛れたやうに醜い山の地肌は露出されて、青いものの影は殆んど見られなかつた。

入口に七五三を張つた一つの坑口の前へ、淳一は羊三をつれて行つて見せた。カンテラが幾側となくその口に懸けてあつた。礦石を搬出するために人夫がレールの上を函をごろ〳〵引いて來ると、そのカンテラの一つを取つて、じめじめした坑内へ入つて行つた。そして暫くすると、礦石を滿載した函がまたごろ〳〵と引出された。

「こゝへ入るのは危險でせう。足を辷らせでもしたら。」

「滅多にそんなことはない。けれど支度をしなければ入る譯にや行かん。」淳一はさう言つて、しかしそれはちよつと羊三には困難だらうと云ふ表情をしてゐた。

そして彼は縱坑だとか横坑だとか、坑穴の種類や、坑内の設備、作業の有樣なぞを一通り說明して、

「偶には危險もあるが、まあ爆藥でも爆發した場合でなければね。それも爆藥をかけておいて爆發がおそいので、見に行つたり何かするからだ。」

「爆藥といふのは爆發のことですね。」

「さう。鑛山には鑛山特有の言葉があるんでね。人に乘せられたことを、彼奴はつぱにかけられたなんて言ふんだ。」

「あんたはもう穴へは入りませんか。」

「いや、さうでもないが、私も○○の山を開拓して、あすこの設備がほゞ緒についたとき、罷めさせてもらふつもりだつたのを、此方が少し出なくなつたので、また戻つて遣ることになつたとき、何にもせんでも可いからといふので……しかし今は銅が安いから、手もつけないが、去年この近くに買つた山もあるので、こゝ少くも百年ぐらゐは脈の絶えるやうなことはない。さう云ふ見込だけはついてゐるんで……。」

「ほゝ。」と羊三は驚いたやうに言つたが、かう云ふ山が或る一人の占有に歸してゐることが、不思議のやうに思へた。しかし人間に若し旺盛な私有慾が禁じられたら、誰が苦勞してこんな山を掘るだらうとも思つた。

羊三は淳一について、やがて採礦課の事務所へ入つて行つた。そしてそこにゐる若い技師達に紹介された。

何よりも先ず今度の[illegible]始まつた。今後取るべき[illegible]度について、課長の某氏の意見は、羊三にも尤もらしく思へた。

それから何號の坑が、もう何間でさきぬけるだらうとか、どこの坑區から何百貫の成績があがつたとか、毛繻のジャケツを着た若い元氣のいゝ技手が、頻りに說明してゐた。

その間に、運搬夫がたえず窓の外を函を引いて、往つたり來たりしてゐた。そして其の度に窓口で證明をもらつてゐた。

選礦作業場へは、その課長もついて來て、淳一と一緒に、羊三に說明してくれたが、機械の響に遮られて、羊三はどうかするとその話を聽取るのに苦しんだ。

それから次ぎ〳〵まはつて夫々の作業場を一々見てあるいて、終に銅を吹いては鑄型に入れてゐるところで、總ての仕事が完成されるのであつたが、そこの事務所へやつて來たのは、大分おそかつた。羊三はそれによつて、作業のざつとした概念を與へられたに過ぎなかつたけれど、勞働といふものが、その氣持になりさへすれば、思つたほど不愉快なものではなささうに感じた。そして又この鑛山の勞働者が、都會

で見かける電線や道路や高い建築などに働いてゐる多くの勞働者よりも、遙かに幸福な日を送つて居るらしく思へた。勿論どの作業場を見ても、彼等の顔は蒼くて險しくて、硬ばつてゐた。彼等がそれらの荒い仕事に、心から樂しんで從事してゐるとは決して思へなかつた。

　淳二は粗末な小倉服をつけた事務員の一人と、いつか鳥鐵の話に夢中になつてゐた。ハイカラな若い技師たちは、不思議な二人の話に、にや〳〵笑つてゐた。

　歸つて來たのは、もう五時頃であつた。二人はいつものとほり電氣風呂へ入つてから、やがて晩餐の膳に向つた。

「鑛山生活もさう悲慘なもんでもないやうですね。坑夫は何のくらゐ取るもんです。」羊三は食後梨子の皮をむきながら兄にきいた。

「さう、そいつは成績次第なので、まあ腕のいい奴で二圓位は取る。中には子供も女房も、それ〴〵稼いでゐるものもゐるんで、相當收入はある。」

　淳二はさう言つて羊三の問ひに答へるだけで、それ以外のことは餘り多くを話さなかつた。

「今日はみんな變な顔をしてゐた。あのなかには表面運動に賛成して、その實參加しないのもゐる。今下へ寄つてみると、こいつは直ぐそこにゐる奴だが、A—が東京からやつて來たとき、眞先に旗をもつて景氣をつけてゐたんだが、運動は失敗するし、首は馘られるといふんで、こゝを立つにも借金で、身動きがならないところから、若くなつて泣きを入れに來たんだ。無理もないことで、參加したければ、成功したとき肩身が狹いし、成功しなければ口が干あがるんだから、彼奴等としても實は向背に迷ふんだ。」

「弱いもんですね。」

　羊三が言ふと、淳二は違つた意味で、

「弱い。」と呟いてゐた。

　それから暫く、この山の最初の礦脈の發見された時から、發展の徑路などについて、羊三はぽつ〳〵話す兄と差向ひに寛いでゐた。

「私もこの山に、こんなに長くゐるつもりもなかつたんだ。O—鑛山を買ふことを提言した因縁から、あの山へ行くことになつて、あすこに前後六年もゐたりして、段々年を取つてくる。山をやらうと思へば、私ならいくらでも金を出してくれるものもあるし、希望者もあつたけれど、自分に子供があるんぢやなし、儲けたところで仕方がないと云ふ氣もしてゐたんで、後繼者のあるまでと思つて、つい今日までやつて來た。こんな事で、一生果てるのも殘念だが、今となつてはもう年を取りすぎてしまつた。」

　淳二はいつの間にか取出した、かすみ網を繕みながら、感慨ぶかさうに言つた。

　淳二は隙をみては、網まで自分で編んでゐた。もうそんな網を作るものも、今は絶えがちになつてゐた。あつても精巧なものは得られなかつた。

「今日逢つた採礦課長なんぞ何うです、後繼者として……。」羊三はきいた。

「あれなぞが有望な方だ。差づめさういふ順序かも知れない。F—なんかも、製錬ぢやあのくらゐの男は、他の鑛山にはゐない。あれも何うかと思つてゐるんだが、あの男も少し小贅で多勢の人間を使つて行けまいかと思ふ。」

　Fも羊三たちと、いくらか緣繫ぎになつてゐた。

「F—がそんなに豪いんですか。」

「どこへ行つたつて立派なもんだ。鑛業界で知らないものはない。」

　さう云ふ兄にしたところで、優れた頭腦と經驗の持主だといふことは、羊三も他から聞いて知つてゐた。最近死んだ弟——といつても[illegible]

より一つ少いだけであつたが――ＳＳにしてもやつぱりさうであつた。

「Ｓ―や何かも一つになつて、獨立でやるのも可かつたですな。」

「私は若しやれば、大阪の兄さんを呼ばうと思つてゐたんだが、到頭その機會もなかつた。」

羊三はそんなにしみ〴〵した述懷めいた言葉を、曾てこの兄の口から聞いたことがなかつた。彼等は山で人と成つたやうなものではあつたけれど、生涯をこゝで暮してしまつたのは、一つは古い主從關係の情誼からでもあつた。羊三にはそれが不思議でならなかつた。

やがて羊三は、若い事務員に誘はれて、今夜の演說を聞くべく事務所を出て行つたが、人が集まるにはまだ間があつた。今夜は多分中止だらうと云ふ噂も傳はつた。羊三はしばらく其の邊を徘徊した果に、いつか興味がそれてしまつた。歸つてみると、兄は廊下へ出て、囮に火をかけてゐた。籠の鳥は、目眩しい電燈に照らされてきよろ〳〵してゐた。兄が廣間へ入つて寢たのは、それから二時間もたつてからであつた。

演說會場にあてられた勞働者の倶樂部では、今演說が崩れたとみえて、熱狂的な萬歲の聲が、遠くに聞えてゐた。羊三は久しぶりで、頭腦が冴えてゐたので、次の室で、切迫して來る創作的興奮に驅られながら、せつせとペンを働かせてゐたが、どうかすると、先刻の兄の述懷が、頭に浮んで來た。そして兄の生涯について考へさせられたと同時に、長いあひだにいくらか貯へて來た自然に對する羨望の情も、どこかへ消し飛んでしまつた。

「クイ、クイ。」

火をかけられた黒鶫が、思出したやうに、成勢よく二聲三聲續けざまに啼いた。

翌朝起きてみると、兄の淳二は小鳥を物干場の柱の上高く括りつけた、長い棹に仕かけられた、長さ一間ばかりの籠掛に、籠の鳥を一つ〳〵かけて、吊しあげてゐた。籠掛には、籠の丈だけの距離をおいて、籠をかけるやうに折釘がうつてあつた。

空たかく揭げられた籠の鳥は、爽かな朝風を受けて、どれもこれも大空へでも放たれたやうに元氣よく籠のなかを駈けまはつてゐた。

羊三は、父が鳥を訓練するのに、やつぱりそんな事をしてゐたのを、屢見た。勿論それは、遠くの山や谷々から渡つてくる仲間の羣を見のがさないやうに、遠見の視力を養ふためであつた。

「なか〳〵手がかゝりますね。」

羊三はよくもそんなに兄がまめ〳〵しく續けるものだと、感嘆の目を睜りながら言つた。

「何に、何うせ閑なんだから。」

淳二はさう言つて第二の籠掛を吊すべく、竹竿を別の柱に縛りつけてゐた。

羊三は、庭の隅の大きな果樹の幹のうへに、父が囮を吊しあげる時分のことが思出された。それは朝のやゝ寒い、多分十月の末頃のことであつたであらう、荒れた庭に蟲が啼いて、樹木や石のうへに、露がしと〳〵してゐた。

「兄さんが體が弱いので、父が每年鳥構ひにつれて行つたものだ。私もお蔭で、さんざ鳥の世話をさせられた。」

羊三は三十年も四十年もたつた今日、兄がやつぱりそんな事をやつてゐるのだと思ふと、すくすく生えた頰鬚の白い兄の顏が、何うやら父の面影にそつくり似て來るやうに思へた。

羊三だけはそんなことには、何の興味も感じなかつた。

朝飯がすむと、羊三は昨夜おそく出來あがつた原稿を綴ぢたり、封筒に入れたりした。

「仕事はもう濟んだか。」淳二はその勞を劬り

でもするやうに訊いた。
「は、どうかかうか。」
「どのくらゐ儲けた。」
「三十枚ばかりですが、ちよつと儲かりました。」羊三は默つてゐた。
「どのくらゐになる。」
「いくらにもなりやしません。でも、近頃は好いんです。一頃のやうな貧乏はしなくともすみますから。しかしなか〳〵遣切れないんで。」
そして彼はその職業について、兄の問ひに答へた。
「ほゝ、好いもんだな。」
「しかし怠けてゐる時が多いんで。それに生活に追はれがちですから、本を讀む暇もないし、その日〳〵を誤魔化して行くに過ぎないのですから。」
羊三は少し得意になりながら言つた。
「さうだらう。」淳二は輕く受けてゐた。
羊三は女が來たとき、その郵便物を出すやうに頼んだが、兄は間もなく事務所へ出て行つた。
[illegible]、ぼつ〳〵別れを告げて、今朝あたりこゝを立つて行くと云ふ噂をその女は淳二にしてゐた。
淳二はたゞ寂しい顔をしてゐた。

羊三は仕事が出來あがつたなら、もう一度ゆつくり山の作業を見もし、技師たちにも逢つて親しく話を聞きたいと思つてゐたが、差迫つた一つの責任を果すと、遽かに解放されたやうな氣分になつて、この上山に止まつてゐるのが退屈に感ぜられた。遽かに町が戀しくなつて來た。三十年もこゝに縛られてゐた兄の生活が、しみ〴〵考へられた。
羊三は新聞など見ながら、そこに横になつてゐたが、するうち疲れが出て、頭が輕くなつて來た。うと〳〵と眠氣がさして來た。
戸の開く音がしたと思ふと、うつら〳〵してゐた羊三の傍に、兄があわたゞしげな表情をして、押入のなかでシャツか何かを探してゐた。
「どうだ、一緒に歸らんか。」淳二は羊三の起きあがるのを見て言つた。
「急に用事ができて、歸ることになつたから、これから立たう。」
「さうですか。僕も餘り長くなつてもと思つてゐたところですから。」
「それから是をあげとかう。何かの參考になるだらう。」淳二はさう言つて、山の歴史と言つたやうなものを渡した。わざ〳〵寫させたものであつた。

羊三が支度をして下へおりて行くと、兄は更めて事務所の重立つた人たちに、彼を紹介した。實はそれらの人達とも、早く挨拶を取交したかつたのだけれど、わざと控へてゐたのであつた。
間もなく電車に乘つた。電車は西に出た。特色はなかつたけれど、その邊の山は割合に姿が優しかつた。そして[illegible]の多いところなどでは、試掘の跡らしい穴が處々に見られた。電車のなかには、山を出された男らしい、若い人の姿も見られた。
羊三は兄の用事が何であるかを考へたりした。羊三が山に長く止まることを、周圍――特に鑛山主に對して憚るのではないかなどとも思つたりした。
しかし其の想像が全く間違つてゐることが、後で羊三にも解つた。羊三がちよつと耳にしたところでは、それは全く、今度の事件に骨を折つてくれた其の筋の人達の勞を犒ふためらしかつた。

插話

一

道太が甥の辰之助と、兄の留守宅を出たのは、ちやうどその日の午少し過ぎであつた。彼は兄の病臥してゐる山の事務所を引揚げて、その時K市のステーションへ着いたばかりであつたが、旅行先から急電によつて、兄の見舞ひに來たので、ほんの一二枚の着替しかもつてゐなかつたところから、病氣が長引くと看て、必要なものだけ一鞄東京の宅から送らせて、當分此の町に滯在するつもりであつたが、嫂も看護に行つてゐて、留守宅には女中が二人ゐるきりなので、どこぞ外に宿を取らうといふ算段であつた。兄の家では、大阪から見舞ひに來てゐた、××會社の重役である嫂の弟が、これも昨日山からおりて、今日歸る筈で立つ支度をしてゐた。

「こゝもなか〱暑いね。」道太は手廻りの小物のはひつてゐるバスケットを辰之助にもつてもらひ、自分は革の袋を提げて、扇子を使ひながら歩いてゐた。山では病室の次ぎの室に、彼は五日ばかりゐた。道太の姉や從姉妹や姪や、そんな人達が、次ぎ〱にK市から來て、山へ登つて來てゐたが、部屋が暑苦しいのと、事務所の人達に迷惑をかけるのを恐れて、彼はK市で少し吻としようと思つて降りて來た。

「何しろ七月は英迎に忙しい月で、すつかり頭腦を滅茶苦茶にしてしまつたんで、少し休養したいと思つて。」

「そんなら姉の家は何うですか。今は靜かです。」

「さあ。」道太は姪の家も廣くはあるし、水を隔てて青い山も見えるので、惡くはないと思つたけれど、未亡人の姪が、子供達と靜かに暮してゐるので厄介になるのも心苦しかつた。

「とにかく腹が減つたね。」

「え、何處か涼しいところで風呂に入つて御飯を食べませう。途中少し暑いですけれど、少しづつ片蔭になつて來ますから。」

それから古道具屋などの多い町を通つて、二人は川の縁へ出て來た。道太が小さい時分、泳ぎに來たり魚を釣つたりした川で、今も子供が水に入つてゐた。岸から釣を垂れてゐる男もあつた。道太は殊に無聊であつた自分を憶出した。崖の上には寅山の門があつたり、塀が續いたりして、好い屋敷の庭木がずつと頭の上へ枝を伸してゐた。昔から持續いた港の富豪の邸宅などがそこにあつた。

「あれは何うしたかね、彦田は。」

「あゝすつかり零落れてしまひました。今は京都でお茶の師匠をしてゐるさうですが……」

道太は辰之助からその家にあつた骨董品の話などを聞きながら、崖の下を歩いてゐた。飯を食ふ處は、その邊から見える山の裾にあつたが、ぶら〱歩くには適度の距離であつた。道太は到るところで少年時代の自分の慘めくさい姿に打つかるやうな氣がしたが、どこも昔ながらの靜かさで、近代的産業がないだけに、發展しつつある都會のやうな混亂と惡趣味がなかつた。歸る度に入りつけた料理屋へついて、だだつ廣い石疊の入口から、庭の飛石を傳つて行くと、そこに時代のついた庭に向いて、古びた部屋があつた。道太は路次の前に立つて、寂のついた庭を眺めてゐた。この町でも別に好いといふほ

どの庭ではなかつたけれど、乾いた頭脳には、ちぢむさいやうな木石の布置が、殊に懐しく映るのであつた。

「少し手入をすると好いんですけれど。」辰之助はさう言つて、爪先に埃のついた白足袋を脱いでゐたが、彼も東京で修行した或種類の藝術家なので、この町の多くの人がもつてゐるやうなお茶の趣味はもつてゐた。骨董品――殊に古陶器などには、優れた鑑賞眼もあつて、何を見せても時代と工人とをよく見分けることができたが、粗野に育つた道太も、年を取つてからさうした東洋趣味にいくらか目があいて來たやうで、若し金があつたら庭でも作つて見たいやうな氣持に偶にはなることもあつた。

料理を誂へておいて、辰之助が馴染の女でも呼ぶらしく自身電話をかけてゐる間に、道太は風呂場へ行つた。そして水をうめてゐるところへ彼もやつて來た。

「去年の九月を思出すね。」道太は湯に漬りながら言つた。

「さう／＼、あの時は何うも……。」

去年のあの頃、道太と親類はまるで戰場で打ちのめされたやうになつてゐたので、それを思[illegible]て、[illegible]今日まで[illegible]にないからと、[illegible]之助は彼をこの家へ引張つて來た。それは四日の日で、道太は途中少し廻り道をして、菓參をしてから、こゝへ遣つて來た。そして大きな爪楊枝で草色をした牛皮を食べてゐると、お湯の加減がいゝといふので、湯殿へ入つて行つた。すると親類の一人から電話がかゝつて、辰之助が出て行くと、今避難者が四百ばかり着くから、その中に道太の家族がゐるかも知れないといふのであつた。道太は覺束ないことだと思ひながら、何だか本當に來るやうな氣がして、あわててお湯を飛出した。誰々がこゝまで來る幸福をもつてゐるだらう。其でも生殘つた二人か三人を迎へることができるか知ら――彼はそんなことを思ひながら、ぼつ／＼落ちて來る雨をくゞつて、氣ばかり驛へ急いだものであつた。

道太は湯に浸りながら、驛で一人々々救護所へ入つて行つた當時の避難者の顔や姿まで思出すことができた。

「今日の容態はどうか知ら。」道太は座敷へ歸つてから、大きな[illegible]の[illegible]などに[illegible]をつけながら、兄が今頃どうしてゐるかを氣遣つた。

「さあ、電話できいて見ませう。」さう言つて[illegible]、[illegible]でゐた。

そこへ女が現はれた。おひろと言つて、道太も子供の時から知つてゐる女であつた。その家も少年の折、父につれられて行きつけてゐた。道太の祖父の代に、古い町家であつたその家へ、緣組があつた。何時頃そんな商賣をやり出したか知らなかつたが、今でも長者のやうな氣持でゐるおひろ達の母親は、口の嗜好などのおごつたお上品なお婆さんであつた。時代の空氣の流れない此の町のなかでも、こんな人にはまた珍しかつた。小柄なおひろはもう三十ぐらゐになつてゐる勘定であつた。

「お久しぶりですね。」おひろは痩せた膝をして、ぴつたりとそこに坐つた。

「相變らず痩せてゐるね。やつぱり出てゐるんだね。」道太は淺黑いその顔を見ながら話しかけた。

「えゝ、[illegible]性がないもんですから。いつお出でたんです？」おひろは銚子を取り上げながら辰之助に聞いたりした。

「伯父さんの病氣でね。」

「あゝ、松山さんでせう。あの體の大きい立派な[illegible]の……二三日前に聞きましたわ。もう少し生きてゐて[illegible]と[illegible]、[illegible]話していらしたわ。」

伊都喜といふのは、道太の兄のやつてゐる會社の社長の弟であつた。

それからその一家の經濟的窮狀や、死活問題の繫つてゐる鑛山の話などしながら、次ぎ次ぎに運ばれる料理を食べてゐた。

二

おひろの家へ行つてみると、久しく見なかつたおひろの姉のお絹が、上方風の長火鉢の傍にゐて、薄暗いなかにほの白いその顏が見えた。涼しい瀧縞の暖簾を捲きあげた北國特有の陰氣な中の室に、着物を着かへてゐるおひろの姿も見えた。

「おいでなさい。」お絹は二人を迎へたが、母親とは父違つて、もつと纖弱な體の持主で、感じも瀟洒だつたけれど、お客にお上手なんか言へない質であることは同じで、もう母親のやうに大様に構へてゐたのでは、滅亡するより外はないので、色々苦勞した果に細いことも考へるやうになつてはゐたが、氣質は昔踊り子であつた頃と少しも變らなかつた。

道太はこの子の踊りを見たことはなかつたけれど、七八つ時分から知つてゐた。秋祭の時、廓に毎年屋臺が出て、道太は父親につれられて、詰所(檢番)の二階で見たことがあつたが、お絹の母親は、新調の衣裳など出して父に見せてゐたことなどもあつた。今はもう四十五六にもなつて、暫くやつてゐた師匠も止めて、こゝの世話をやきに來てゐるのであつたが、地藏眉毛が以前より目立つて頰は殺けたけれど、涼しい目や髮には、お婆さんらしい處は少しもなかつた。丈はすらりとした方だが、さう大きくもなく、姿態が程よく整つてゐた。

道太たちが、長火鉢に倚らうとすると、彼女は中の室の先の庭に向いた部屋へ座蒲團を直して、

「そこは暑いぞに。此處へおいでたら。」と勸めた。

「この家も久しいもんだね。また取戻したんだね。」

「え、取戻したといふ譯ぢやないけれど、お母さんが長く遺つてゐた處ですから。」

庭も、庭の向うに見える繩簾のかゝつた厠も、その上に見える離房の二階も、昔のまゝであつた。十年も前に一旦人に取られたことは、道太も聞いてゐたが、おひろの父下の妹が、その頃別に一軒出してゐて、お絹は母親と一緒に、廓の外に化粧品の店を出す傍ら、廓の子供たちに踊りを教へてゐた。道太はそこへも誘はれたことがあつたが、廓を出てから、親子は何となし寂しげに見えた。

「この家も古いもんやな。」と辰之助は庭先の方に、道太と向合つて坐りながら言つたが、古びてゐたけれど、まだ内部は何うもなつてゐなかつた。以前柱なぞ傾いでゐたこともあつたけれど、いくらか手入もしたらしかつた。

「古びのついた處がいゝね。」

「もう駄目や。少しお金をかけると可いけれど、私の物でもないんですから。」

「おひろさんのかね。」

「えゝまあ。」

「僕はあすこに居て惡いかしら。」道太は離房の二階を見上げながら言つたが、格式ばかりに拘泥つてゐるこの廓も、年々寂れてゐて、この家なぞは殊にもぱつとしない方らしかつた。

「どこか靜かで氣樂なところをと思つてゐるんだけれどね、此處なら滅多にお客もあがらないし、いゝかも知れませんぜ。」辰之助も言つた。

「おいでたらい。離房でなうても、二階は廣いから、何處でも介意ひません。」

「さうお決めになつたら何うです。さうすれば

後で荷物を取りにやりますから。」
「さうしても好いが、温泉へ行くとしたら何處だらう。」
「極近いところで、深谷も此頃はなか／＼好いですよ。」
「石屋なら好い座敷がありますけれど、あすこも割に安くつかんぞな。」
「差當つてちよつと觸れたくない問題があるんでね。何うせ何とかしなくちやならないにしても、今は誰にも逢ひたくないんだ。」道太はあの時病軀をわざ／＼そのために運んで來て、その翌日あの大地震があつたのだが、纏めて行つた姪の縁談が、雙方の所思ちがひでごた／＼してゐて、その中へ入る日になると、物質的にも隨分重い責任を背負はされることになる譯であつた。それを解決した處で、今迄のやうにルーズな姉の生活と、無能な甥や、虚榮心の強い氣儘な姪の性質を、根本的に矯正しない以上、何を仕出來すか判らなかつた。道太は宿命的に不運な姉や其の子供達に、面と向つて小言を言ふのは忍びなかつた。それに弱者や低能者にはそれ相當の理窟と主張があつて、それに耳を傾けてゐれば際限がないのであつた。
辰之助もその經緯はよく知つてゐた。今年の六月二十日ばかり道太の家に遊んでゐた彼は、一つはその問題の解決に上京したのであつたが、道太は應じないことにしてゐた。今になつて見ると、道太自身も姉に擔がれたやうな結果になつてゐるので、人の善すぎる姉に惡意はないにしても、姪の結婚に山氣のあつたことは爭はれなかつた。
「何しろあの連中のすることは雲にでも乘るやうで、危くて仕樣がない。」
「ふみ江ちやんが琴やお花のお稽古で、澄してゐるものですから、先でも買被つてゐたに違ひないんです。東京へ言つてやりさへすれば金はいくらでも出るやうなことも言つてゐたやうです。此方には松山の伯父さんもゐられるし、是もうんと力瘤を入れてゐるやうに吹聽したでせう。」
「何うもさうらしいね。ふみ江のいけないのは無論だが、姉にもさういふ處はあるね。それに姉も先方の身上を買被つてゐたらしいんだ。そこは僕も姉を信じたのが惡かつたけれど、大變好いやうな話だつたからね。」
「ふみ江さんが片附きなすつたんですか。」お絹が訊いた。
「それでごた／＼してゐるんだがね。」
「あの方も好い標致でしたね。暫く見ませんけれど、山やに商賣に出てゐるお友達があつて、ちよい／＼おいでた。その縁談がうまく行かないんですの。そんなら逢うてお話してあげなすつたら好いでせうに。お婿さんはどんな方です。」
「醫大の生徒なんだ。孰が何うだかわからないけれど、惡く言へばふみ江が引つかけようとした形さ。本當に引つかけたのならそれも好いけれど。其處があやふやだから困る。尤もそれを見究めなかつたのは、己にもあやふやな處があるからだ。」道太はさう思ふと、この事件の全責任が道太に繫つてゐるやうに言ふ一部の人達の言草にも、嚴肅に言へば、相當の理由のあることを認めない譯に行かなかつた。
道太は温泉へ行かうか、こゝに御輿を据ゑようかと考へてゐたが、そのうちに辰之助がかけた若い女が來たりして、二階へ上つて、前にも二三度來たことのある奥座敷で、酒を呑んでゐた。常磐津のうまい若い子や、腕達者な年増藝者などが、そこに現はれた。表二階にも誰か一組客があつて、藝者たちの出入する姿が、簾戸ごしに見られた。お絹もそこへ來て、藝者の話がはずんでゐた。

道太もやゝ疲勞を感じた頃には、[illegible]かなこの際にも、太鼓の音などがしてゐた。

三

離房の二階の寝心地は安らかであつた。目がさめると裏の家で越後獅子のお浚ひをしてゐるのが、哀愁ふかく耳についた。

「おはやう、おはやう。」といふ人間に似て人間でない聲が、隣の方から庭ごしに聞えて來た。その隣の家で女達の賑かな話聲や笑聲が連りにしてゐた。

「おつるさん、おつるさん。」こはれた器械からでも出るやうな、不愉快なその聲が連りにやつてゐた。

道太は初め隣に氣狂でもゐるのかと思つたが、九官鳥らしかつた。枕もとを見ると、舞妓の姿をかいた極彩色の二枚折が隅に立ててあつて、小さい床に春芳か何かが懸つてゐた。次ぎの室にも違棚があつて、そこにも小さい軸がかゝつてゐた。青蚊帳に微風がそよいで、今日も暑さうであつたが、こゝは山の庵にでもゐるやうな氣分であつた。お絹はもう長いあひだ獨身で通して來て、大阪へ行つてゐる大きな子息に子供があるくらゐだし、すつかり色の褪せたおひろも、[illegible]の點では、[illegible]になつてゐた。[illegible]へは二人あつたけれど、[illegible]には[illegible]心らしかつたけれど、[illegible]皮のむけたやうな子はゐなかつた。道太はといふと、彼は口髭が殆んど眞白であつた。彼をこゝへ連れて來たこともある、その頃の父の時代をも、恐らく通り過ぎてゐた。お絹の年をきいて、彼は昨夜驚いたのであつた。道太の妻よりも二つも上であつた。しかし踊りやお茶の修養があるのと、氣質が傳統的に磨かれて來てゐるのと、樣子が好いのとで、どことなし落着いてゐた。辰之助の言ふとほり、現在別に世帶をもつてゐるおひろの妹と、他國へ出て師匠をしてゐるお絹の次ぎの妹と、都にで四人もの娘がありながら、家を人手に渡さねばならなかつたほど、彼女達の母子は、揃ひも揃つて商賣氣がなかつた。

「いゝわいね、お金ができれば持つていらはる。」いつも氣輕さうに長火鉢の前に坐つてゐた彼女達の母親は、いつでもさういふ風であつた。

「また好いこともある。惡いことばかりは無いもんや。」それも彼女の口癖であつた。

實際また彼女の若い時分、身分の好い士達が、祿を金にかへてもらつた時分には、黄金の[illegible]水がこ[illegible]にも流れこんで、[illegible]山[illegible]に、[illegible]しい[illegible]たり、[illegible]にお茶屋ができたりして、[illegible]絶えなかつた。道太は少年の頃、町へ[illegible]小屋に、二十軒もの茶屋が、兩側に並んで、桃色の暖簾に、造花の櫻の出しが軒に[illegible]られ、觀客の子女や、食物[illegible]、[illegible]してゐたのを、學校の往復りに見たものであつた。延若だの團十郎だの[illegible]だの、名優の名がその頃彼の耳についてゐた。金が夢のやうに費ひはたされて、彼等が零落の淵に沈む前に、さうした此の町相當の享樂時代があつた。道太の見たのは恐らく其の末期でしかなかつたが、彼女はその時代を知つてゐた。

下へおりて行くと、お絹が流しの方にゐた。白い襦袢に白い腰卷をして、冬大根のやうに滑らかな白い腿を半分ほど出してまめ／＼しく、しかしちんまりと靜かに働いてゐた。

「お早う。」道太は聲かけた。

「お早う。眠られたか何うやつたやら。」

「よく寝た。」さう言つて道太が高い流しの前へ行くと彼女は棚から銅の金盥を取りおろしてぎい／＼水をあげはじめた。そして爪楊枝や粉をそこへ出してくれた。道太は楊枝をつかひな

から山水のやうな味のする水で口を漱いだ。

「昨晩はお客は一組か。」

「え、一組。四時頃に歸つてしまひました。」

「それぢや商賣にならんね。」

「ならんわ。」お絹はさう言ひながら、かんかん炭をたいて飯をたいてゐた。幅一間ばかりの長い廊下で、黑い板がつる〳〵光つてゐた。戸棚や何かがそこにあつた。

廊下つゞきの入口の方を見ると、おひろがせつせと雜巾がけをしてゐた。道太は茶の室へ出て行つて、長火鉢の前に坐つて、煙草をふかしはじめた。

「みんな働くんだね。」

「働かんと姉さんが口煩いから。」おひろは微聲で答へたが、始末屋で綺麗好きのお絹とちがつて、面倒くさゝうにさつ〳〵と遣つてゐた。

簞笥で窮屈なほど竝んでゐる店の方では、昨夜お座敷の歸りが遲かつたとみえて、女が二人未だいぎたなく熟睡してゐて、一人の肥つちようの銀杏返が、根からぶつくり崩れたやうになつて、肉づいた兩手が捲れた寢卷を抱込むやうにしてゐた。

お絹は電話で、昨夜道太が行つた料亭へ朝飯を註文した。

「御飯も持つて來てね、一人前。」

それから又臺所の方に居たかと思ふと、道太が間もなく何か取りに普段襦袢を着に二階へあがつた頃には、お絹は床をあげて、彼の寢道具の始末をしてゐた。

「こゝもいゝけれど、晝間は少し暗い。」道太はさう言つてちよつと直しさへすれば、ぐつと引立つて來るだらうと、そんな話をしかけた。

「そんな事も考へるけれど、私のものでもないんですから。」

「誰のものなんだ。」

「一旦人手に渡つたのを、京ちやんの旦那が買つたんです。あの人はこゝへお金をかけるのは損だから、賣つてしまはうと言つてゐるんですけれど、何しろお母さんが長くやつてゐた所ですから。」

「おや絹ちやんが借りてやつてゐる譯だね。」

「此處のお神さんはおひろちやんですよ。私は世話燒に來てゐるだけなんです。いつまでこんな事もしてゐられないんです。儲けるうちに家へ行つて子供の守でもしてやらなければ。」

そして彼女は汚れた肌襦袢を取り上げて、

「これ洗濯に出してもいゝんでせう。」

「さうね、出してもらはうか。」道太は東京を立つ時から下痢をしてゐた胃腸のところへ、昨夜飲みすぎた酒で少し痛み出してゐたので、信州で有名な接骨醫からもらつて來たヨジームに似たやうな藥を塗りながら、

「お芳さんの旦那つて何んな人なの。」

「青物の問屋。なか〳〵堅いんですの。舊は夜店に果物なんか賣つてゐたんですけれど、今ぢや何うして問屋さんのぱり〳〵です。倶樂部へも入つて、骨董なんかもぽつ〳〵買つてゐますわ。それで芳ちやんが落籍される時なんか、御母さんはあゝいふ人ですから、いくらも貰はなかつたんですよ、いゝわいねと云つた何時もの調子で。だけれど、好い人なの。なか〳〵解つてゐるんです。」

「おやまあお芳ちやんは仕合せだね。」

「でも旦那は體が弱いから。」

道太は掃除の邪魔をしないやうに、軈て裏梯子をおりて、また茶の室の方へ出て來た。ちやうどおひろが高脚のお膳を出して、一人で御飯を食べてゐるところで、これで能く生命が續くと思ふほど、一嘗めほどのお菜に茄子の漬物などで、しよんぼり食べてゐた。店の女達も起き出して、掃除をしてゐた。

「獨りで食べて美いかね。」

「わたい三度の御飯は、何んな事があつても缺かさずきち／＼食べる方なの。御飯も三膳づつに極めてゐるの。」
おひろは痩せた小さい體の割には、聲がりんりんして深みがあつた。それに後で氣のついたことだが、四人の姉妹のうち一番頭腦の好いのも此の子であつた。
道太の食物が運ばれた時分には、おひろは店の室へ出て、獨り隅の方で、トランプの數合せに沒頭してゐた。
お絹は手炙りに煙草火をいけて、白檀を燻べながら、奧の室の庭向きのところへ座蒲團を直して、
「こゝへ來てお食んなさい。」と言ふので、道太は長火鉢の傍を離れて、そこへ行つて坐つた。
「今日は辰之助を呼んで鶴來へでも遊びに行かうぢやないか。」道太は言ひだした。
「鶴來なら鮎もおいしいし、岩魚や鯀料理もありますよ。」
「それからあの奧に吉野谷と云ふ仙境があるだらう。子供の時分遠足に行つたことがあるんで、一度行つてみようと思ひながら、いつも何處へも行かずに歸つてしまふんだ。まだ山代さへ知らないくらゐだ。」
それから遊び場所の選擇や、交通の便なぞについて話してゐるうちに時が移つて行つた。山畏のやうな風が俄かに出て來て、離房の二階の簾を時々捲きあげてゐたが、それも一時であつた。お絹達は京阪地方へも、大抵遊びに行つてゐて、名所や宿屋や劇場のことなども知つてゐた。最近では去年大阪にゐる子息のところへ暫く行つてゐたので、その嫁の姻戚で又主人筋になつてゐる人につれられて、方々連れて歩かれた。
「それぢや辰之助さんに電話をかけませうか。」
お絹自身は餘り悦びもしなかつたが、行きたくもない風で、さう言つて電話をかけたが、辰之助は少し忙しいので、餘り進まないらしかつた。道太も女連ればかりで行くのは、いくらか氣が差した。
いつの間にか電話をかけたとみえて、昨夜酒のあとで、辰之助が言出した夏の季節の鯨餅といふ菓子が取寄せられて、道太の前へ現はれた。寒晒の粉のつぶ／＼した、皮鯨に似た菓子である。夏來たことが滅多にないので、道太には珍しかつた。
「おいしいか何うだか、食べてごらんなさい。」
「これあ美い。色々な菓子があるんだね。」道太は一つ摘みながら言つた。
それから無駄話をしてゐるうちに、直に夕刻になつた。道太は辰之助が來てから何か食べに行かうと思つて待つてゐると、やがて彼は遣つて來た。そして三人そろつて外へ出た。おひろだけはお化粧中だつたので、少し遲れて來た。

四

道太はすつかり御輿をすゑてしまつた。離房の二階は陰氣だつたけれど、奧の方の四疊半の窓の下へ机をすゑれば、裏の家の羽目に鼻が閊へさうであつたけれど、結構仕事はできさうであつた。
お絹はいつでもお茶のはひるやうに、瀟洒な瀨戸の風呂に火をいけて、古風な鐵瓶に湯を沸らせておいた。
「こんな風呂どこにあつたやらう。」道太を見に來た母親は、二階へ上るとさう言つて、その風呂を眺めてゐた。
「茶入れやお茶碗なんか、家にはずゐぶんよいものもあつたけれど、下の戸袋のなかへ仕舞込んでおいたものは、いつの間にかお客がみんな持つて行つてしまうて……。」お絹はそんな話をしながら、

一軸ものも何やら知らんけれど、好いものださうだ。多分山水だつたと思ふ。それも辰之助が表裝をしてやると言つて、持つて行つたきり、しらん顔をしてゐるんですもの。」

「一葉村ぢやないかな。」

「何だか忘れたけれど。今度さう言つて持つて來てもらはうか知ら。」

それでも酒の器などには、ちよつと古びついたものが未だ殘つてゐて、ぎやまんの猪子に猪口が出たり、ちぐはぐな南京皿に茄子のしんこが盛られたりした。

お絹は口でさうは言つても、面と向ふと當擦りを言ふくらゐが精々であつた。少し強く出られると返す言葉がなくなつて、泣きさうな目をするほど、彼女は氣弱であつた。いつかの夜、道太は辰之助と、三四人女を呼んだあとで、下へおりて辰之助の立てたお茶なぞ飲んでゐると、そこへ毎日一囘くらゐは顔を出して行く、おひろの旦那の森さんがやつて來て、電話をかけて、芝居の場所を取つてくれた。

「一先生、おひろも何うぞ一つ。」森さんは道太に言つてゐた。

森さんは去年細君に逝かれて、果迄また十八になる長子と訣れたので、自身に町場なぞへ顔を出すのを憚つてゐた。森さんは又お茶人で、東京の富豪や、京都の宗匠なぞに交遊があつたけれど、高等學校も出てゐるので、宗匠らしい臭味は少しもなかつた。

雁治郎の一座と、幸四郎の組合せである其の芝居は、大分前から町の評判になつてゐた。廓では殊にもその噂が立つて、女たちは寄るとさはると、その話をしてゐた。長唄連中の顔ぶれでは、誰が來るとか來ないとかいふことも問題になつてゐた。觀劇料の高いことも評判であつた。

道太は格別の興味も惹かなかつたけれど、或る晩お絹と辰之助とで、殆んど毎晩の癖になつてゐる、夜ふけてからの涼みに出て、月光が蛇のやうに水面を這つてゐる川端をぶら〳〵あいてゐると、ふとその劇場の前へ出た。お絹はさういふときの癖で、踊りの型のやうに、兩手を袖口へ入れて組んでゐたが、足取りにも何處かさう言つた輕かさがあつた。

「ちよつと見て行かうかね。」道太は一度も入つたことのないその劇場が、何んな工合のものかと思つて、入口へ寄つて、場內の手入れや大道具の準備に忙しい中を覗いてみたが、その時はもう繪看板や場代なんかも出てゐて、四つの出しもののうち、大切の越後獅子をのぞいた外、三つとも揃つて大物であることが判つて、その盛り澤山なのにいくらか興味を感じたので、つい一桝おごることにしたのであつた。

森さんが電話をかけてくれた時分には、場所は大抵約束濟みになつてゐた。そして桝が四人詰であつたところから仲間を誰と誰とにしようかと、そんな評定をしてゐるうちにお絹が少し困つた立場に立つことになつて來た。女達が三人行くことになれば、辰之助には氣の毒なことになるし、辰之助を誘へば、誰かが一人ぬけなければならなかつた。

「京ちやんは自分で行けばいゝのに。」お絹は蔭で言つてはゐたが、やはりお義理があるらしいので面と向つてはきぱきした事は言へなかつた。

「辰之助が當然遠慮していゝんだ。東京で好いものを見て來たのだから。」道太は言つた。

「そや〳〵、どつちか一人ぬければいゝ譯だわ。姉さん京ちやんにさう言つたんですか。」おひろは言つた。

「私何だつてそんな事言ふもんですか。でも京ちやんは一緒に行くことに決めてゐるさか

え。」
―だから可いぢやないか。辰之助にさう言つておけば。」
「それも工合がわるい。あの人も一緒に行くつもりにしてゐるのやさかえ。」
お絹から言へば、道太に皆がつれて行つてもらふのに、辰之助を差措くことはその間に何か特別の色がつくやうで、氣に咎めた。辰之助を除外すれば、色氣はないにしても、慾氣か何かの意味があつて、道太を引着けておくやうに、道太の姉たちに思はれるのが厭であつた。それでなくとも辰之助の母である道太の第一の姉には、お絹たちは餘り好感をもたれてゐなかつたし、持つてもゐなかつた。それは辰之助が今は隣國で廓のお師匠さんをしてゐる、お絹の直ぐ次ぎの妹のお芳と關係してゐた時分からのことであつた。二人のあひだには子まであつた。お芳は一度は辰之助の家へ入つたけれど、母親との折合がつかなかつたので、やがて二度のお勤めをするやうになつた。
それに今一つの理由としては、辰之助の妹の婿の山根が、つい此頃までおひろと深い間であつたことで、戀女房であつた彼の結婚生活が幸福であつた一面に、山根はよくおひろをつれて温泉へ行つたり、おひろの家で流連したりして、實家の母を苛々させた。最近山根は酒をやめた。そしておひろとも手が切れたけれど、何うかすると餘所の座敷などで、おひろは山根と顔を合はすこともあつた。
それに辰之助も長いあひだ、殆んど地廻りのやうに此の巷に足を入れてゐて、お絹達とは殊に深い馴染なので、芝居見物のことなどで、彼の氣を惡くさせるのも、餘り好ましいことではなかつた。
道太にすれば、芝居は大した問題ではなかつた。誰が行かうが脱けようが、それも何うでも好かつた。しかし一人のお絹を連中から喰み出してはならなかつた。お絹なしには芝居見物は寧ろ無意味で退屈で、金の濫費であつた。お絹に働きかけて行く氣は、今の彼には無いといつた方が確かであつたけれど、お絹ほど好きな女は、どこにも見當らなかつた。若し事情が許せば、靜かなこの町で隱逸な餘生を樂しむ場合、陽氣でも陰氣でもなく、意氣でも野暮でもなく、倘また、若くもなく老けてもゐない、そして馬鹿でも高慢でもない代りに、さう悧巧でも愚圖でもないやうな彼女と同棲しうるときの、寂しい幸福を想像しないではゐられなかつた。

五

ある日の午後も、隣の狂氣鳥が、連りに出鱈目を囀つてゐた。三聲五聲か、抱への渾名なんかを呼んでゐたかと思ふと、段々譯がわからなくなつて、調子に乘つて、ぎやあ〳〵空虚な聲で饒舌りつゞけてゐた。
「また遣つてゐるな。」道太は下の座敷の縁先のところに胡坐を組んで、幾種類となくもつてゐるおひろの智慧の輪を、そつと押入から出して弄つてゐた。その中には見たこともない皮肉なものもあつた。鐵で作つた金平糖のやうな、いらの八方へ出た星を、いくらか歪みなりに出來た長味のある輪から拔取るのや、象牙でこしらへた小さい角棒の組合せから、絲で繋いだ、それよりも小さい碎片を滑らせるのや、色々なのがあつた。おひろはそんな物が好きであつた。トランプや花も好きであつたが、本を讀むことも彼女の日課の一つであつた。
道太は暇つぶしに、よく彼女や抱への女達と花を引いたが、尫弱さうに見えるおひろは、さう勝ちもしなかつたけれど、頭腦は鋭敏に働いた。勘定も早かつた。その聲に深みがあるやう

に頭腦にも深みがあつた。無口ではなかつたけれど、ぶつくさした愚癡や小言は口にしなかつた。常磐津の名取りで、許しの書附や何かを、みんなで藝者たちの腕の批評をしてゐたとき、お絹が道太や辰之助に見せたことがあつた。

「成程ね、二流三流どこは、こんな事をして明合で金を捲きあげてゐるんだね。」道太はその師匠が配つた抹茶茶碗を箱から取出して撫でまはしてゐた。勿論常磐津に限つたことではなかつた。藝と品位とで、この廓は昔から町の旦那衆の遊び場所になつてゐたが、近頃は反つて競爭相手ではなかつた西の方の廓の方でも、負を取らないくらゐに、師匠の選擇を注意してゐた。町の文化が東から西へ移つて行く自然の成行から、西の方のすばらしい發展を見せてゐるのも、是非がなかつた。

「こゝは格式ばつてゐるだけ損や。」お絹は言つてゐたが、強ち絶望もしてゐなかつた。

「こあ格式を崩したら、何いかんぢやないか知ら。東の特徴がまるで亡くなつてしまやしないかね。」辰之助は言つてゐた。

「けれど少し腕のあるものは、皆あちらへ行つてしまふさかえ。」

「さうや。此の頃では西の方に何いしてなかなか美しい子がゐる。」

お絹の説明によると、おひろは踊りも一しきり高潮に達した時期があつて、お絹自身が目を聳てたくらゐだつたが、やつぱり色々な苦勞があつて、藝事ばかりにも沒頭してゐられなかつた。

「今の人はほんとに、ちよろつかなもんや。私に限らず、家の人はみな内氣で駄目なんですわ。有るだけのものを、何うしても働かして行けない運命にできてゐるの。私達に比べると、世間の人はそれこそしやあ〳〵したもんや。私なんか傍ではら〳〵するやうなことでも平氣や。」おひろは珍しく氣を吐いた。

「いつ見ても、何となしぱつとしないやうだな。」

「ぱつとできるやうなら、今時分こんな苦勞してゐませんよ。それで好いもんや。さんざ男を瞞した人の行末を見てごらんなさい。ずゐぶん酷いもんや。」

そしてお絹がさういふ女の例を二つ三つ擧げると、最近客と京都へ行つてゐて、遙かに氣の狂つた近所の女の噂で、また一しきり持ち切つた。

道太は何をするともなしに、うか〳〵と日を送つてゐたが、お絹とおひろの性格の相違や、時代の懸隔や、今は一つ家にゐても、やがて各々分裂しなければならない運命にあることも、お絹が今やちやうど生涯の岐路に立つてゐるやうな事情も、ほゞ呑込めて來た。そして一番寂しい道に立つてゐるのは、何と言つてもお絹であつた。

道太は九官鳥が一生懸命にお饒舌をつゞけてゐるのを聞きながら、終に果しない寂しさに浸されて來た。お絹の話では、その九官鳥は、隣の主人によつて、滿洲か朝鮮から持つて來られたのであつた。

「あれでも歌の積りですよ。お稽古の眞似や。」

「己も段々長くなつてしまつたね。まだ誰もこゝにゐるとは思つてゐないやうだけれど。」

「ちつと何處ぞへ遊びにおいでたら。」

「さうすると又こゝへ訪ねて來るからね。この間も兄にきかれて困つた。娘は多分感づいてゐても知らん顔をしてゐるけれど、娘の兄さんが、莫迦に律儀な人でね、どこだ〳〵つて連りに聞くんだ。」

「そんな隱し[illegible]しをしなくとも好いぢやありませんか。別に惡いところにゐるといふのぢやな

いし、女を買ふ譯でもないんですもの。山中なんかへ行つてるよりか、餘程安心なもんや。」

「それにもうしばらく兄の容態も見たいと思つてゐるんだ。今日好いかと思ふと、明朝は又變ると言つた風だから、東京へ歸つて、又來るやうなことになつても困る。」

その頃病人は少し落着いたところで、多勢の人達によつて山から降ろされて、自分の家の茶室に臥てゐた。兄は暫くぶりで、汽車の窓から顏を出してゐる道太を見て、さも懷しさうな目を見張つた。

道太はその日も、しばらく傍についてゐたが、山にゐた時から見ると、意識は殆んど完全に恢復されてゐた。

「今どこに居るんだ。」兄は道太に尋ねたりした。

「え、一寸人を避けてゐるんで。」道太は笑ひながら答へた。

道太はこゝにゐてほしいやうな兄の氣持は解つたけれど、一つ家に寢起きしてゐれば、絕えず接近してゐなければならないし、人の出入りの多いのに、手數をかけるのも忍びないことであつた。それに山でもさうだつたやうに、看護や食べものの事について、出過ぎた世話をやいたりしても可けないので、少し離れてゐる方が好いと思つた。

その後も、花を生けに行く辰之助と連れ立つて、見舞ひに行つたが、病狀には目立つた變化もなかつた。何うかすると、兄は悶えながら起きあがつて、痩せた膝に兩手を突きながら、體をゆすり〳〵苦痛を怺へてゐた。

「人の知らない苦勞するよ。」

我慢づよい兄の口からさう言はれると、道太は自分の怠慢が心に責められて、さう遠いところでもないのに、なぜもつと精を出して毎日足を運ばないのかと、自ら慚ぢるのであつた。それにも拘らず少し勉強しすぎた道太は、この月こそ、旅で頭腦の保養をしようと思つてゐたので、毎日辰之助に電話をかけてもらひながら、つい出るのを億劫にしてゐた。

そんな話をしてゐる處へ、屆けて來た月並を、お絹は菓子器に盛つて、道太の前へ持つて來た。

「お茶をいれませうか。」

「さうね。何だかんだと言つて、毎日菓子ばかり食つてゐるね。」

「ほんの少ししか食らんぢやありませんか。此の頃はそれでも能く食るけれど。」

「辰之助もよう食べるね。」

「あの人は何でもや。來るたんびに何かないかつて、菓子を探すのや。お酒も好きですね。」お絹は[illegible]で、詰つたやうな鼻で冷笑ふやうに言つた。

「今でもやつぱり遊ぶのかね。」

「何うやら。家へ餘りいらしやらんさかえ。前かつて、さうお金を費つたといふ方ぢやないですもの。」

道太は嫂達が騷ぐのに對する「辯解だな」と思つた。

「たゞあの人はあゝ云ふ人ですから、何處でも知つてゐるんですわ。それに妓たちにもてる方や。今は男振もちよつと惡なつたけれど、若いとき綺麗な人は、年取ると變になるものや。でもなか〳〵隅つこにおけんのや。何しろ胡蝶さんが、あの人に附文をしたんですさかえ。」

「胡蝶は僕も一番藝者らしい女だと思ふ。」

「神田で産れたんですもの。なか〳〵氣前の好い妓や。延若を喚へ出して、溫泉宿から電報で家へお金を言つて來ようといふ人ですもの。あゝいふのが藝者でせうね。何うして腕つこきですよ。あの人が……それもこの家で、ちらと辰之助さんを見て、すぐ呼出しをかけた譯なん

です。」
「成程ね。それぢや家に燻ぼつちやゐられない譯だね。今でも續いてゐるの。」
「さあ何うやら。」お絹は擽つたい顏をしてゐた。
「あれは兄弟中で一番素直だ。僕の家でも評判が好い。」
「十圓もする香水なんか奧さんに貰つて來たんですて。」
「少し吹いてやしない。」道太は苦笑した。
「さう、少し喇叭の方かも知れん。」
「家の奴も人を悦ばせるのは嫌ひな方ぢやないけれど。」
「庄ちやん(お絹達の弟)が讃めてゐたから、好い人でせうね。けど奧さんもずゐぶん骨が折れますわ。幾歳だとか……。」
「絹ちやんより少し若い。巳年だ。」
「巳は男好きだと言ふけれど……。」お絹は聊か非をつけるやうに言つて、體を壁ぎはの方へ寄らして横になつた。
「それあ何だね。」道太は何だか一杯入つてゐる亂函の上にある、二捲反物に目をつけた。
「これ？　何だかこんなもの置いて行つたんですけれど。何といふお品や。」お絹は起きあがつて其の反物を持出しながら、「わたし一反だけ羽織にしようかと思つて。やがて大阪へ行かんならんさかえ。どつちも四十圓がらみのもんや。」
それは色のくすんだ、縞目もわからないやうな地味なものであつた。
「こんな地味なもの着るの。僕なんかに好いもんだ。」
「私は人のやうに派手なこと嫌ひや。それに澤山もないさかえ、こんなものなら一枚看板でも目立たんで、可いと思つて。」
道太は、反買つてやつても好いと思つたけれど、何か意味があるやうに思はれるのが厭なので、わざと言はないでゐた。
「僕も何かお禮をしなけあならんけれど、いづれ後にしよう。」
「何のお禮をいに。阿呆らしい。芝居で澤山や。多勢短册も書いてもらひましたし。」
「おれも金があると、資本ぐらゐ少し助けてもいゝんだが、金に縁のない方で。」
お絹は微笑してゐた。
「あんたももう二三年やろがいに。」
「さうかも知れない。」
「私も大阪へ行きさへすれば、こんなことしてゐないでも可いのですけれど、こゝも芳ちやんが旅から歸つてくると、一緒にやりたいやうな事も言ふし……。それも遣るとすれば、少しお金をかけて賣れる子を二人も抱へなければ……。」
お絹はしみ〴〵話し出した。
「大阪の方は餘程いゝのかね。」
「あの子は誰にでも可愛がられる質やさかえ。御主人にも信用がありますけれど、お祖母さんといふ人に、大變に氣に入られてゐるんです。嫁さんも御主人の親類筋の人で、四國で好い船持だといふことです。庄ちやんなんか行つて、私をむづかしい女のやうに言つてゐたんですけれど、逢つてみればそんなぢやないなんて、ずゐぶん好くしてくれるんです。それや何うして學校出のちやき〴〵ですから氣の利いたもんや。だけれど健ちやん此の頃少し遊びだしたやうで……今年の春も、えらいハイカラな風して來たのや。洋行でもするやうなお荷物でもつて。ちよつとも私なんかと話しちやゐないですわ。方々飮みあるいてばかりゐるんです。年も行かないのに大酒飮やさかえ、私も心配でこの間少し入ることがあつて、千圓ばかり送るやうに言つてやつたけれど、何とも返事がない。」
「こゝは借金かね。」

「借金と言つては別にある譯もないけれど……。」お絹は微笑した。
「とにかく此處を續けようと言ふんだね。」
「先のことはわからないけれど、お婆さんのゐるうちはね。」
「お婆さんは庄ちやんが見れば可いぢやないか。」
「何うして、あべこべにお婆さんが出す方や。庄ちやんが困つてゐると、それなら私のお金が少しあるさかえ、あれ使ふことや、と言つたやうなもんや。」
お絹の口吻によると、弟嫁がいつでも問題になるらしかつた。そして其を言ふのはお絹だつた。弟は妻のために、お絹姉さんを、少し文句の多すぎる小姑だと思つてゐた。
しかし、お絹は、此處でも餘りおひろと氣の合つた方ではなかつた。おひろには森さんがあつた。次ぎのお京には、青物問屋の旦那があつた。
「けれども、偶に行けばお互に懷しいが、大阪の家だつて、長くゐれば面白い日ばかりは續かないだらう。」
「だから私も自分の小遣ぐらゐもつて行かなければ。子供を連れだしたつて、一々嫁さんから小遣もらふのは厭だし、お寺詣りするにしても、餘りけちけちした眞似をしたくないと思ふから。」
「月々大阪からいくらか仕送つてもらつて、とつちで暮すわけに行かない。商賣するにしても、何か堅氣なものでなくちやあ。お絹ちやんなんかには、こんな商賣は迚も駄目だ。」
「けど女のする商賣といへば、外に何にもないでせう。」
「さあね。」
お絹はやがて、風呂の火を見に立つて行つた。
風呂は滅多に立たなかつた。綺麗好きなお絹は人にお湯を汚されるのをひどく嫌つた。その上心臟が弱いので、水を汲み込むのが大仕事であつた。その日は、辰之助が昨夜水を汲み込んで行つてくれた。お絹は炭火で、それを沸かした。
道太はやがて風呂場へ行つた。もう電燈がついてゐた。
「何んなです、沸いてゐませう。少し少いけれど。多いと沸が遲うて。」お絹はさう云つて、釜の下を覗いたり、バケツに水を汲んで來たりした。
湯から上ると、定連の辰之助や、道太の舊知の銀行員澤井が來てゐた。

六

觀劇は案じるよりも倦み易かつた。
節が秋に入つてゐたので、夜、散歩には、何うかするとセルに袷羽織を引つかけて出るほどで、道太はお客用の褞袍を借りて着たりしてゐたが、その日はやはり帷子でも汗をかくくらゐであつた。
その前々晩に、遠所に居るお芳から電話がかかつて來て、芝居の景氣をたづねて、場所の都合がどうかと云つて來た。お芳の居るのは土地の大きな妓樓で、金瓶樓といふ名を、道太はこゝへ來てから、度々耳にしてゐた。それはお絹も、家が沒落したとき、土地にゐるのが恥しくて、其處でしばらく師匠をしてゐたので、何かの話のをりにその家と樓主の噂が出るのであつた。
「商賣の出來るくらゐの金は、きつと持たして返すといふ話やつたけれど、あつちの人はすゝどいから結局旅のものが取られることになつてしまふ。私もあすこへ行つてから、これでも餘程人が惡くなつた。」お絹はそんなことを言

つてゐた。
　でもお芳の方はいくらか溜めてゐるらしかつた。
　その金瓶樓主が、きつと多勢引率して芝居にくるだらうと、お絹は思つてゐたので、電話がかゝつて來ると、飛んで行つて受話機を取つた。
「芳澤さんや。」お絹が掛け手の聲をきくと、さう云つて笑ひながら、いつにない浮立つた調子で話してゐた。お芳も出て來て、三通話にわたつた。
「芳澤さんつてお爺さんのことか。」
「うゝん、運轉士。どこも景氣が惡いと見えて、芳ちやんとお神さんと二人しか來んのや。」
「けど此の上二人も來ちや遣りきれないぢやないか。僕は明朝辰之助にも斷らうと思つてゐる。」
「あの人達はあの人達で、何うかなりますわ。」
「そんな氣樂なことを言つてゐちや困るぢやないか。」
　そこにおひろも居て、話がまだ紛糾を來した。
　道太は別に強く言つたつもりではなかつたけれど、心臓でも昂進したやうにお絹が少し目をうるませて、困惑してゐるのに氣がつくと、遽かにいぢらしくなつて、その日は道太は加はらないことにしてしまつた。兄の養嗣子の嫁の實家で、家族こぞつて行くといふことも、辰之助から聞いてゐたので、寧ろ遠慮した方が穏當のやうにも考へられた。
「私も行かれるやら何うやら。」お絹も言つてゐた。
　彼女はあいにく二三日鼻や咽喉を惡くして、呼吸が苦しさうであつた。腹工合もわるいと言つて、一日何にも食べずに中の室で寢てゐたが、昨夜按摩を取つたあとで、いくらか氣分が快くなつたので、茶の室へ出て來て、思出したやうに御飯を食べてゐた。
　その日になると、お絹は晝頃髪を結ひに行つて、歸つてくると、珍しくおひろの鏡臺に向つてゐたが、おひろもお湯に行つてくると、自分の意匠でハイカラに結ひあげるつもりで、抱への歌子に手傳はせながら、丹念に工夫を凝してゐたが、氣に入らなかつたらしく、暫くするとまた別の女優髷に結ひなほしてゐた。おひろはお絹に比べると十二三も年が少かつたけれど、髪が薄い方なので、お化粧をするのに時間が取れた。蠟燭を二挺も立てて一筋の毛も等閑にしないやうに、鏝に毛筋を入れてゐるのを、道太は屢見かけた。それと反對で手際の好いお絹の髪は二十時代と少しも變らなかつた。殊にも生際が綺麗で、曇りのない黒目がちの目が春の宵の星のやうに和らかに澄んでゐた。藝人風の髪が、やゝ長味のある顔によく似合つてゐた。
　お絹は着ものを着かへる前に、棚から辨當を取出して、昨夜から注文をしておいた、少し許りの御馳走やおすしを、お箸で詰めかへてゐた。山遊の辨當には酒を入れる吸筒もついてゐて、[illegible]の蒔繪がしてあつた。
「今でもこんなものを持つて行くのかい。」道太はその辨當を物珍しさうに眺めてゐた。
「極り好いものでもないけれど。」
「この辨當は。」道太は子供のやうに今一つの辨當を捻くつてゐた。
「それは演舞場へお稽古に行くときのお辨當や。」
「しかし芝居見物もこんな風にして行くと面白いね。」
「こちらかつて、幕のうちもあるし、饅でも何でもあります。でもこれも樂しみやさかえ。」お絹はさう言つて、それから此の間とこから貰つて來た大きな蒲鉾を、[illegible]に切つてもらつてゐた。老婆は錆びた庖丁を砥石にかけて、ごし

ごしやつてゐた。
「これおいしいですよ。私大事に取つておいたの。」お絹は言つてゐた。
「その庖丁ぢや覺束ないな。」道太はちよつと板前の心得のありさうな老母の手つきを、揶揄ひ半分に眺めてゐた。
「庖丁はさびてゐても、手が切れるさかえ。」老母はさう言つて、刃にさはつて見てゐた。
やがて辨當の支度を母親に任して、お絹は何か知ら黑つぽい地味な單衣に、ごりごりした古風な厚ぼつたい帶を締めはじめた。
「ばかに又地味づくりぢやないか。」道太がわざと言ふと、お絹は處女のやうに羞かんでゐた。
道太は今朝辰之助に電話をかけて、場所がないから、女達だけやることにした。後で二人でゆつくり行かうと言つて斷つておいたけれど、お絹が勸めるので、やつぱり行くことにして、二階で着物を着かへて、下へ來てゐた。お芳はまだ着かへなかつた。
しかし劇場へ行つてみると、もう滿員の札が掛つて、ぞろぞろ歸る人も見受けられたに拘はらず、約束しておいた棧敷のうしろの、不斷は場所のうちへは入らないやうな少し小高いところか、二三人分あいてゐた。お絹にきくと、場代さへ拂へば融通してくれる筈だといふのであつた。
「これあ好い。こんな處があるなら、二人くらゐ來たつて平氣だ。こゝを取つておいて、達ちやんを呼ばう。この位なら、何もさう案じることはなかつたぢやないか。」
「一人や二人何うにでもできますよ。」
「折角かういふ處があるんだから、辰之助に電話をかけよう。それとも俥をやるか。」
しかしお絹ははきはきしなかつた。お芳と其の連が來たときのことも考へてゐるらしかつたが、やがて座を立つて行つたが、幕があいた時分に漸とかへつて來た。
「こゝの電話ぢや急のことには埒があかないから、わたしお隣の緑軒でかけて來ましたわ。」お絹はさう言つて鼻頭ににじみでた汗をふいてゐた。
辰之助は序幕に間に合つた。
「河内山」がすんで、「盛綱陣屋」が開く時分に、先刻から場席を留守してゐたお絹が、漸と落着いた顏をして、やつて來た。
「お芳さんがあすこに立つてゐたから、行つて見に來ましたの。好い鹽梅に、平場の前の方を融通してくれたんですよ。」
「さう。お芳さんも久しく見ないが、どこにゐる。」
お絹は指ざしして教へてくれたけれど、疎い道太の目には入りかねた。[illegible]でも[illegible]たいほど蒸暑い日だつたので、舞臺の衣裳をつけた役者はみな弱りきつてゐた。
「勘彌なんか無理だわね、舞臺も狹いし、こゝぢや矢張腕達者な二三流どこの役者がいゝだらう。」
「さうかも知れません。」
「鴈治郎はよく掛聲か何かで飛びあがるね。」
「ほんたうに可笑しな人。私あの顏嫌ひや。」
「面白い役者ぢやないか。」
大切の越後獅子の中程へくると淺太郎や長三郎の踊りが、お絹の目にも目だるつこく見えた。
閉場て出ると、雨が一雫二雫顏に當つて、冷やかな風がふいてゐた。
家へ歸つてくると、道太は急いで着物をぬいで水で體をふいたが、お絹も襦袢一枚になつて、お辨當の殘りの卷卵のやうな腐りやすいものを、地下室へ仕舞ふために、蠟燭を點して、

揚板の下へおりて行つた。

「こんなもの忘れてゐた。」お絹は暫くすると、鰻の蒲燒をもつて、上つて來て、匂をかいで見ながら、「これで一杯おやりなさい。」

それは森宗匠がわざ／＼遠方から取り寄せてくれたものであつた。

「芝居は何うやつたいに。」老母は尋ねた。

「何しろ暑いんでね。」

「越後獅子は誰が踊るのや。」

「長三郎に鶴車が附合ふのやけど、すいた水仙のところなんか、何だか變なもんや。私鶯蔵時分だつたか、一本歯をはいて、こゝの板敷を毎日々々傘を翳してあるいてゐたもんや。」お絹はさう言つて、銚子にごぼ／＼酒を移してゐた。

廓はどこも森としてゐた。

そこへお芳も連れの棲主とお綱と一緒にやつて來た。

七

ある日も道太は下座敷へ來て、茶の室にゐるお絹や、中の室で帳づけをしてゐるおひろと話してゐた。

[illegible]はどこかへ行つて、お芳だけが殘つてゐたが、彼女はこま／＼とよく働いてゐた。

「おい、己のも一遍調べて見ておいておくれ。」道太は揶揄ふやうに言つた。

「畏まりました。」おひろは答へた。

「いくらあるもんですか。」お絹は言つたが、「お料理の方は辰之助さんがお持ちやさうですし、花代といつたところで、澤山もないさかえ。」

「さうは行かない。勘定は勘定だ。大分長くなつたから、もうそろ／＼御輿をあげるとしよう。」

「お仕事はもうお仕舞ひですか。何だかちよこちよことやつて、もうそれで好いの。」

「まあね。」

「まだ何か食べたいものはないんですか。」

「もう食べあきた。どこへ行つても同じものばかりで。女を買はうと思へば、少し好いのは皆[illegible]だらう。」

「さう言つたやうな工合だけれど、この節は強ちさうとも限らんのや。」

電話が二度も演舞場からかゝつて來て、何やらの踊りの鼓を受持つことになつてゐる歌子の來やうが遲いので、一度は後廻しにしたけれど、早く來てくれないと困るといふのであつた。

「一寸使を出しましたから、歸つて來るとすぐ上げます。お氣の毒ですね。」お絹は答へてゐた。

抱へといつても歌子は丸抱へではなかつた。二三日またぐれ出して、保險會社の男とかと、始終どこかへ入浸つてゐた。

おきぬはぶつ／＼言つてゐた。

「この家は、これで一體成立つて行くのかね。」道太はおせつかいに訊いた。

「まあ何うやら。見込ないでせう。私等だと言つたんだけれど、皆して遣らすやうにしたんです。」おひろはお絹に當てつけるやうに言ふのであつた。

お絹は默つてゐた。

おひろは[illegible]を亡くした森宗匠のところへ、[illegible]りたい腹でゐたが、宗匠も來るたんびにおひろを女房扱ひにしてゐるのであつた。おひろは今でも辰之助の妹婿の山根に心が殘つてゐたけれど、お絹に言はせると、金には切放れはよかつたし、遊びも面白い山根ではあつたけれど、別れぎはが少し潔くない點があつたので、そんな手前としても、おひろはあの／＼商賣なぞしてゐるのは厭だつた。お絹はおひろを、宗匠の家へ入れるには、相當條件をつけなくてはな

らないと考へてゐたが、それよりもさうなれば、自分獨りでこの家を背負つて行くか、離散するか、二つのうち一つを選ばなければならない破滅になつてゐた。

今朝も珍しく早くおきたおひろは、茶の室でお芳に散々不平を訴へてゐた。よく響くその聲が、道太のうと〳〵してゐる耳にも聞えた。お絹も寢床にゐて、寢たふりで聞いてゐた。

道太は裏の家に大散財があつたので、昨夜は夜中に寢床を下へもつて來て貰つて、姉妹たちの隣の部屋に蚊帳を釣つてゐた。冷々した風が流れてゐた。お絹はお芳に手傳はせて、仕舞つてあつた障子を持出したりした。

「しかし姉さんはお芳さんと組んでこゝを遣つて行きたいんだらう。姉さんの立場も考へなくちやね。」

「姉さんは大阪へ行けばいゝんです。それこそ氣樂なもんや。こんな貧乏世帶を張つてゐるよりか、何のくらゐ優だか。お芳姉さんは、商賣なんかする氣はないでせう。あの人にしたところで、辰之助さんの子が、今年兵隊檢査に歸つたくらゐですもの。」おひろはぐん〳〵言つた。

そして帳簿をつけてしまふと、ぱたんと掛硯の蓋をして、店の室へ行つて小說本を讀み出した。

その時入口の戸の開く音がして、道太が一兩日前まで避けてゐた、山田の姉らしい聲がした。

道太は來たのなら來たでいゝと思つて觀念してゐたが、昨日思ひがけなく兄のところで見た樣子によると、子供のころから姿振に無頓着すぎる質であつたとは言へ、近頃は餘り見いゝ風をしてゐないのが、姉妹たちの手前恥しかつた。

しかしお絹は愛想よく迎へて、うまく取繕つてゐるらしかつた。

「山田さんの奧さんがおいでた。」お絹は道太の部屋へ來て、取次いだ。

「仕方がない、逢はう。」

姉はしばらく躊躇した果に、漸と入つて來た。見るとふみ江も一緒であつた。

ふみ江は母とは反對に、相變らず派手な姿をして、子供をかゝへてゐた。道太は子供が脊髓病のために、多分片方の脚が利かないであらうことを聞き知つて、心を痛めてゐたので、今ふみ江の抱いてゐる子供のぽちや〳〵肥つた顏を見ると、一層暗い氣持になつて、しばらく口も利けなかつた。

「先日は失禮しました。ふみちやんは今どこにゐるの。」道太がきいた。

「松山の伯父さんの病院に[illegible]といつて、出て來たんですけれど。」ふみ江は嗄れたやうな聲でぐづつてゐる子供をすかしながら答へた。

ふみ江の良人の家は在方であつたが、學校へ通つてゐる良人の青木は、町に下宿してゐたけれど、ふみ江は青木の親達の方にゐることになつてゐた。

「子供は何うなんだ。脚が惡いさうぢやないか。」

「え、それで……。」

すると姉が直ぐ引取つて、興奮の色を帶びながら、その子供の病氣の今迄の經過について話りだした。手術をすれば、多分癒るであらうが、青木の親達は、手術は慘いから忍びないと言つて、成行に委すことにしたのであつた。

姉の口吻がひどく感傷的になつて來たので、道太は妙な感じがした。

「それに話がちがふとか支度がないとか言つて、この頃老人達が私に當つてばかりゐるんです。」

「婚事は僕がよく話しておいたんだが、そんな事を言へば、此方だつて當が違つたんぢやない

か。莫迦に好いやうな話だつたからね。」
「それは惡いことはない。」姉が言ふのであつた。
「ふみ江ちやんなんかの仕事は、兎角山かんだから困るよ。どうせ人の厄介にならないで遣らうといふのなら、もつと何とかいふのを見立てるがいゝ。あんな呑つたれな百姓なんか仕方がないぢやないか。だから財産はなくても、ちやんと獨立のできる男でなければ。青木も意氣地がないぢやないか。あれ程望む結婚なら、もつと何とか出來さうなものだ。あれでは丸でこつちの親類を背景にして、ふみ江さんをもらつたやうなもんだからな。」
「え、あの人兩親の前では、何にも言へないんです。」
「しかし、もうさうなつちや、孰も面白くなからう。動機がお互に不純だから、到底うまく行くまい。」
「さあ、さうでせうかね。」姉は太息をついてゐた。
「ふみ江さんも人の言ふことを肯かんから可けない。何でも皆に相談してやるやうにしなさい。お父さんがゐないんだから、その積りでもつと眞面目になつて、今迄のやうに、びらしやらして樂をしてゐないで、自分で自分の運命を切拓いて行くやうに、心を入れかへなくちや可かん。こゝの家なんか、こんな稼業をしてゐるけれど、各々自分の生活については、相當苦しんでもゐるんだからね。」
「それあさうや。」姉は頷いてゐた。
　それから別れる場合の、話のつけ方と、交渉にあたる人とを、道太は指名した。
「何うも僕ぢや少し工合がわるい。つい厭なことも言はなけあならないから。」
「さうや。向うも法律を知つてゐると言つて、力んでゐるさうやさかえ。」
「まあしかし、圓く行くものなら、このまゝ納めた方がいゝ。さうなれば、金の方は後で何うにか心配するけれど、今はちよつとね。」
「二度ばかり、松山の伯父さんとこへお尋ねしたさうですが、青木さんが叔父さんに逢つてお話したいさうですが、いづれ私たちの惡口でせうと思ひますけれど。」
　道太はそれは逢つてもいゝと思つた。幸ひに彼の話を受容れることができさへすれば、道太自身にももつと此の問題に深入りすることができるかも知れないと思つた。
　二人はいくらか氣が安まつたらしく、やがて引取つて行つた。
「どうもお世話さま。」道太は茶碗を片づけに來たお絹に言つた。
「奥さんもえらい年をお取りになつて。ふみ江さんも標致が少し下つた。」
「姉だけなら來てもらひたいつて、家でも言つてゐるんだけれど、何か自分でなまじつかに遣らうとするもんだから、反つて苦しむんだ。」
「誰でもさうや。なか〳〵思ふやうに行くもんぢやないんです。おひろだつて、森さんのところへ納まつたにしたところで、姑さんもあるし、あの體で、あの大屋臺の切りまはしは迚もできませんね。」
　日が暮れると、判で押したやうに、辰之助がやつて來た。道太は少し沮げてゐたが、お絹がこの間花に勝つただけおごると言ふので、やがて四人づれで、この頃披露の手拭をつけられた山の裾の新しい貸席へ飯を食べに行つた。それはお絹から見ると、また二時代も古い、藝者あがりの女が出したものであつた。
　道太はそんな物も、ちよつと見ておきたいやうな氣がした。が、それに拘らず、お絹も道太が時々氣をぬきに來るやうに、若し手頃な家を一軒かりてでもおくなら、留守番をしてゐても

いゝやうな話もあつたので、それも頭腦に描いてゐた。

八

お絹が大分前から苦にしてゐた大掃除の日が來た。賴んでおいた若い傭人が來て、道太の陣取つてゐる離房の方から手をつけはじめて、午後には下の部屋へ及んで來た。お絹たちは單衣の上つ張を着て手拭を姉さん冠りにして働いてゐた。「さあ京ちやんところへ行かう。」老母はさう言つて、孫と一緒に道太を促したてた。

お京の家はつい近くの屋敷町の方にあつた。その邊も道太が十三四の頃に住つたことのあるところで、川添の閑靜なところにあつた其の頃の家も、今は或る料亭の別宅になつてゐたけれど、築地の外まで枝を蔓らしてゐる一抱もあるやうな梅の老木は、昔と少しも變らなかつた。

お京はちやうど來客があつて、下座敷で話してゐた。いつでも脅しに男下駄を玄關に出しておくのが、お京の習慣で、その日も薩摩下駄が一足出てゐた。米杉を使つてはあつたけれど住心地好く出來てゐた。

不幸なお婆さんが、一人そこにゐた。お絹の家の本家で、お絹達の母の從姉にあたる女であつたが、外に身寄がないので、お京のところで何かの用を達してゐた。おばあさんは幾年振りかで見る道太を懷しがつて、同じ學校友達で、夭折した其の一粒種の子供の寫眞などを持つて來て、二階に寢ころんでゐる道太に見せたりして、道太の家と自分の家の古い姻戚關係などに遡つて、懷しい昔の追憶を繰返してゐた。

「和田さんの家は器量統で、その人も美しかつたといふ話や。お士から町家へお嫁づきなすつた。」

とかく道太と、そして道太と同じ腹から生れた姉妹とは、その系統はづれであつた。

「しかし何歲です。」

「もう七十四です。このお婆さんより二つ上です。少い時分私がこの人を始終負ぶしてね。」

道太はそんながり〳〵した老婆を嘗て見たことがなかつた。

「奥さんのお墓參りなさいましたか。」

「いづれ歸るまでには……。」道太は笑つてゐた。

「私も一遍おまゐりしたいと思うて。」

道太はお絹の母である方のお婆さんにも、度度それを言はれてゐた。

そのお婆さんは、自分で手拍子を取りながら、唄を謠つて、四つの孫に、作兩を踊らせてゐた。子供は扇子を持つて、くる〳〵踊つてゐたが、角々がきちんと極まつてゐた。

「お絹はあすこでお弟子にお稽古をつけてゐるのを、このちびさんが門前の小僧で覺えてしまうて……。」祖母は氣だるさうに笑つてゐた。

それがすむと、また二つばかり踊つて見せた。御褒美にバナナを貰つて、いつか下へおりて行つた。

「こゝでも書きものが出來ませうがね。」老母はさう言つて、目の先に木の生茂つてゐる山を見上げながら、

「山の青々したものは好いもんや。」

するうち二人とも横になつて、好い心持にうと〳〵して居た。

辰之助が來たのは、山の上に見えた日影が、もう大分うすれた頃であつた。

「大掃除は何うかね。」

「やがて片着くでせうが、今東京から電報が來まして、りいちやんが病氣ださうだ。」辰之助は緊張した表情でさう言つて、電報を道太に渡した。

道太は父かと思つて、胸が遽かに騷いだ。

電文は二言ばかりあつた。「リツコチウビヨウヒヨウツメイイミテイダイガクヘニウインシタアトフミ」さういふ文句であつた。

道太はひどく狼狽したが、辛うじて支へてゐた。

「こつちへ来ると、何かあるのも変だな。」道太は呟いたが、何か東京の方へ通信があつて、それで呼返すための電報ぢやないかと、ちよつとさう云ふ疑ひも起つた。こゝへ来てから、彼は東京へ一度しか音信をしてゐなかつた。しかしその疑ひは何の理由もないことは自分も承知してゐた。

「一體何時だらう。」

「四時です。」

断定的に帰宿を促した電文が、それから間もなく辰之助の家からお絹の家へ届いて、道太は遽かに出立を急ぐことになつた。

支度をしに二階へあがると、お絹もついて来て、荷造りをしてくれた。

「こんなものはバスケットがいゝんでせう。」お絹はそこにあつた空氣枕や膝掛や、さうした手廻りのものや、手ぎはよく詰めてゐた。

下へおりると、おひろがお知らせしたと見えて、森さんももうそこに来て、別製の蓮干菓なぞを夥しく届けさせて来た。

「先生、これはちよいと好いもんです。おひろ一本切つて来てごらん。」

道太は二三日前に、芝居のお禮か何か知らんが、辰之助と一緒に、ある閑寂な茶席で、宗匠の御馳走にならうとしてゐた。宗匠はそこで涼の會や蟲の會を開いて町の茶人たちと、趣向を競つた話や、京都で多勢の数寄者の中で手前を見せてゐた時のことなどを、座興的に話して、世間のお茶人たちと、やゝ毛色を異にしてゐることを、道太に頷かせた。

「こんな物でもお氣に入つたら。」おひろはさう言つて、例の智慧くらべを出してくれた。

荷物を森宗匠に頼んで、道太が辰之助とそこを出たのは、もう六時少し過ぎた頃であつた。

「わたしは皆さんがおいでると悪いさかえ、お見送りはしません。」お絹は幾折かの菓子を風呂敷に包みながら断つた。

「何だかまだ忘れものがあるやうな氣がしてならない。」道太は立ちかけに、わざと繰返した。

兄のところへ行くと、嫂が傍ひ迎へて、

「實はお出でを願はうかと思つてをりました。看護婦が一寸粗匆をしましたので、あれほど信用しておいでたのに、大層腹を立てて薬も一切飲まんと言つておいでるので……」

看護婦が傍に泣いて詫びてゐた。

道太はやがて、兄の枕頭に行つて見た。兄は少し苛立つてゐたが、少し話をすると、直に頷いてくれた。

「それから私もちよつと用事ができて、急に一旦かへることになりましたので。」道太は話し出した。

「どうも有難う。わしはまあ是れで心配はないから。」兄はさう言つて、道太が思つたよりさつぱりしてゐた。

道太は漸と安心して、病室を出ることができたが、しかし次ぎの部屋まで来ると、遽かに兄の歔欷が聞えたので、彼は思はず足が竦んでしまつた。

それから兄の傍を離れるのに、また少し時間がかゝつた。そして子供のない兄の病床の寂しさを見ながら、辰之助と連れ立つてそこを辞した。

ステーションへは多勢来てゐた。一人の嫂も、ふみ江も来てゐた。宗匠もおひろも見えたが、道太はそれでもお絹が来て居りはしないかと、

乘つてからも四下に目を配つてゐた。
　すると間もなくお絹が遙かにそこへ姿を現はした。皆は目をそばめた。お絹はちよつと躊躇してゐたが、やがて窓ぎはへ寄つて來て、
「はいお辨當。」と、立つとき言つてゐた辨當を、手を延ばして道太に渡した。
「それから是れシャボンと齒磨。」
「それあ、何うも……。」道太はそれを受取つて、ちよつとお辭儀をした。
　汽車が出てしまつた。いくら心配しても、それだけの時間は、飛躍を許さないので、道太は朝まではどうかして工合よく眠らうと思つて、寢る用意にかゝつたが、まだ宵の口なので、ボーイは容易に支度をしてくれさうになかつた。
　道太は少しづつ落着いて來ると同時に、氣持がくすぐつたくなつて來た。二十日ばかりのお絹との接觸點を振返ると、今でもやつぱり彼女は謎であつた。

雜草

私のやうに田舍で人となつたものには、野や山や、田畑や路傍や、その他あらゆる小徑や垣根などに生茂つてゐる名も知らぬ雜草に不思議な懷しみを覺えるものである。どこの田舍へ行つても樹木でも雜草でも大抵大同小異で今本莊へ來てゐる私は、水邊などに生ひてゐる夏の雜草を見ると、それがやはり幼時を過した故鄕でおなじみになつてゐる草であるのを見て、地といふものの懷しみを感ずると共に、野生的に育つて來た幼年時代といふものが、あはれに果敢なく憶出せてならないのである。私は相當傳統のある古い文化の田舍の市に育つたのではあるが、既に家祿を失つたあとの零落のなかに幼時を過したので、家もまた町の邊鄙な部分に移つたせゐか、周圍は餘り綺麗ではなかつた。庭に果樹の多かつたことも、懷しい思出の一つであるけれど、それよりもその頃ひどく廢頹的であつたその邊の到るところに、古い屋敷跡などの、雜草の蔓に任したやうな場所が多くて、自然私は草深いなかに、近所の兒童や姉妹などと嬉戯してゐる譯なのである。[illegible]美しい、たとへば南畫をでも見るやうに、山と水と木の布置のおもしろく出來た所でも、全部が盡く美しい山と水と木から成立つてゐる譯ではない。どんな美しい庭園や住居にも、裏にはきつと汚い部分があると同じに、どんな秀麗な明媚な山水でも、ちかよつてみればきつと小汚い雜木や雜草の生茂つた部分が、その下地となつて裾を引いてゐるのである。私も亦さういふ雜草の生茂つた地上に育つて來たので、總ての趣味が粗野であつたことは言ふまでもない。三十年[illegible]の都會生活で、私のやうに野生的であつた青年も、いつの間にか、雜草氣分から離れていくらか洗練を見た譯であるが、しかも草ぶかい土のうへに育つた幼時の野生的な素質は、今に至つても全く拔けきらないとみえて、鳥海山などの美しい山の姿にも打たれるけれど、その邊の水のほとりや、町はづれの路傍に、離々として深い雜草を見るごとに、一人の懷しみを感じないではゐられないのである。

或賣笑婦の話

この話を殘して行つた男は、今どこにゐるか行方もしれない。しる必要もない。彼は正直な職人であつたが、成績の好い上等兵として兵營生活から解放されて後、町の料理屋から、或は遊廓から時に附馬を引いて來たりした。これは早朝、そんな場合の金を少しばかり持つて行つた或日の晩、緣日の植木などをもつて來て、勝手の方で東京の職人らしい感傷的な氣分で話した一賣笑婦の身の上である。

その頃その女は、すつかり年季を勤めあげて、どこへ行かうと自由の體であつたが、田舍の家は母がちがふのに、父がもうゐなくなつてゐたし、多くの客の中でどこへ落着かうといふ當もなかつたので……勿論西の方の產れで、可也な締りやであつたから、倉敷を出して質屋へ預けてある衣類なども少くなかつたし、今少し稼ぎためようと云ふ氣もあつたので、樓主と特別の約束で、いつも二三枚目どころで相變らず氣に向いたやうな客を取つてゐた。

その客のなかに、或私立大學の學生が一人あつた。彼は揉みあげを短く刈つて、女の羨しがるほどの、癖のないたつぷりした長い髮を、いつも油で後へ撫であげ、いかに田舍の家がゆつたりした財產家で、また如何に母親が深い慈愛を彼にもつてゐるかと云ふことを語つてゐるやうな、贅澤でも華美でもないが、どこか奧ゆかしい風をしてゐた。勿論年は彼女より一つ二つ少いと云ふに過ぎなかつたが、各階級の數限りない男に接して來た彼女の目から見れば、それはいかにも乳くさい、坊ちやん／＼した幼い青年に過ぎなかつた。

初めて來たのは、花時分であつた。どこか花見の歸りにでも氣紛れに舞込んだものらしく、二人ばかりの友達と一緒に上つて來たのであつたが、三人とも淺草で飲んで來たとかいつて、いくらか酒の氣を帶びてゐた。彼等は彼女の朋輩の一人の部屋へ入れられて、そこで新造たちを相手に酒を飲んでゐたが、彼女自身はちよつと袿を着て姿を見せただけで……勿論どんな客だかといふことは長いあひだ場數を踏んで來た彼女にも、淡い不安な興味で、別にこて／＼白粉を塗るやうなことも必要がなかつたし、その時は少し病氣をしたあとで、我儘の利く古くからの馴染客のほかはしばらく客も取らなかつたし、初會の客に出るのはちよつと面倒くさいといふ氣もしてゐたので、氣心を呑込んでゐる新造にさう言はれて、氣のおけないやうなお客なら出てもいゝと思つて、袖口の切れたやうな長襦袢に古いお召の部屋着をきてゐたその上に、袿を無造作に引つかけて、その部屋へ顏を出しに行つたのであつたが、猫のやうな其の目はよくその坊のうへに働いた。

「ちよい／＼こんな處へ來るの。」

「いゝえ、僕は初めてだ。」

「お前さんなんかの、餘り來るところぢやありませんよ。」

彼女はその男が部屋へ退けてから、自分で勘定を拂はせられて、素直に紙入から錢を出してやるのを、新造に取次いだあとで、そんなことを言つて笑つてゐたが、男は女に觸れるのを

ひどく極り惡さうにしてゐた。
「今度來るなら一人で來るといゝわ。あんな取卷なんかつれて來ちや可けませんよ」彼女はまたそんな事を言つて、これも其の男に觸れるのを遠慮するやうにしてゐた。
「そりあ何うしたつて、こんな處にゐるものには、惡い病氣がありますからね。不見轉なんか買ふよりか安心は安心だけれど……。」彼女は幾分脅し氣味で、そんな事を話したが、男が彼女のこゝへ陷ちて來た徑路などを聞からとして、色々話しかけると、若い癖にそんなことは聞かなくともいゝと言つた風で、笑つてゐた。
しかし何のこともなかつた。朝歸るときに、いつも初めての客にするやうに肩をたゝくやうなことも、わざとらしく爲る氣がしなかつたので、たゞ「思出したら又おいでなさい。」と、笑談らしく言つたきりであつた。
それから其の男は正直に二三度獨りでやつて來た。そして馴染むにつれて、お互に身の上話などするやうになつた。女は別にその男の來るのに、特別の期待をもつた譯ではなかつたが、部屋のあいてゐる時などには、ふと思出すこともあつた。むかし娘時代に、田舍の町で裁縫のお師匠さんに通つてゐる頃、きつと通らなければならない、通りの時計屋の子息に心を惹附けられて、淡い戀の惱みをおぼえはじめ、その前を通るとき、又思ひがけなく往來で、行會つたりした時に、顏が紅くなつたり心が波うつたりして、夜枕に就いてからも角刈の其の丸い顏が目についたり、晝間針をもつてゐても、自然に顏が熱したりした。勿論言葉を交す機會もなかつたし、そんな機會を作らうとも思はなかつたから、單純に美しい幻として目に映つただけで、微かなその戀の芽も土の下で、其のまゝ枯れ凋んでしまつた。彼女の生家は、町でちよつと名の賣れた料理屋であつたが、その頃から遙かに異性といふものに目がさめはじめると同時に、同じやうな戀の對象がそれからそれへと心に映じて來たが、だらしのない父の放蕩の報いで、店を人手に渡したのは其から間もなくであつた。で、家名相當の縁組をすることもできなくて、今のやうな境涯に陷ちることになつたのであつたが、ちやうど其の時分の淡い追憶のやうなものが彼の大學生によつて、ぼんやり喚覺まされるやうな果敢ない懷しさを唆られた。
彼は飲むといふほどには酒も飲まないし、どこか女に臆するやうな様子で、町に明りのつく時分獨りで上つて來たが、忙しいときなどは、朝客を歸してから部屋へいれて、一緒に飯を食べることもあつた。晩春の頃で、獨活と牛ぺんの甘煮なども、新造は二人のために見つくろつて、酒を内證から少しばかり諸子に移して、銅壺でお燗をしたりした。木櫃だのお鉢だの、こまこました世帶道具が一切そこにあつた。女は立膝をしながら、割箸で飯を盛つてくれたり、海苔をやいてくれたりした。彼はこの世界の生活を不思議さうに眺めてゐた。女はとろりとした疲れた目をしてゐたが、やがて又窓を暗くして縮緬の夜具のなかへ入つて行つた。
「一體君たちは、こんなことをしてゐて、終に何うなるんだね。」彼は腹這ひになつて、莨をふかしながら、そんな事を訊ねた。
「ふゝ。」と、女は嗤つてゐたが、「まあ餘り好いことはありませんね。親元へ歸つて行く人もあるし、東京でお客と一緒になる人もあるしさ。」
「君なんか何うするんだね。」
「何うしようと思つて、今思案中なのよ。」女も起きあがつて莨をふかしながら、「今いところ二人ばかり當があるんだけれど…。」
「商人かね。」

「さうね、一人は日本橋の木綿問屋だし、一人は時々東京へ出てくる田舍のお金持だけれど、どつちもお爺さんよ。木綿問屋の方は、まあそれでもまだ四十七八だから、我慢のできないこともないのよ。その代り上さんも子供もあるから、行けばどうせ日蔭ものさ。子供のお守なんかもして、上さんの機嫌を取らなくちやならないから、なかなか大變よ。田舍の隱居の方は、それにかけては氣樂だけれど、お爺さんは世話がやけて爲方がないでせう。だから孰も駄目さ。」

「君のところへは、何うしてさう年寄ばかり來るんだ。」彼は痛ましいやうな表情をして訊いた。「君はまだ若くて美しいぢやないか。」

「ふゝ」と、女は袖口のまくれた白い腕をあげて、島田の髷をなで乍ら、うつとりした目をして天井を眺めてゐた。

「ほんたうに夢中になつて、君に通つてくるやうな若い男はないのか。」

「まあ無いわね。行つても長續きはしないのさ。」

「でも一度や二度は商賣氣を離れて、戀をしたといふ經驗はあるだらう。」

「それあ、そんな人は客にも偶にはあるわさ。それあ可笑しいのよ。七おき八おきして、終にその男のために年季を増すなんて逆上せ方をして、そのためにお客がすつかり落ちてしまつて、男にも棄てられてしまふつて言つた風なの。そんなのが江戸兒に多いのよ。第一若いお客といへば、まあお店者か獨身ものの勤人なんだから、深くでもなれば、お互の身の破滅ときまつてゐるんですからね。それかといつて、貴方のやうな御母さんの秘藏息子を瞞せば尚罪が深いでせう。先のある人を、學校でもしくじらせてごらんなさい、それこそ大變だわ。」

「だけど、先で熱情を以つてくれば爲方がないぢやないか。」

「熱情ですつて、それあ然ういふ人もあるわね。少し親切にすると、すぐ上さんにならないかなんて言ふ人があるわ。だけど其もこゝにゐるからこそ然うなんだよ。出てしまつちや、やつぱり駄目さ。」彼女は憐げな聲で言つて、空で指環を弄してゐた。

「それはかうした背景に情趣を感ずるとでも言ふんだらうけれど、そんなものは駄目さ。ほんたうにその人を愛してゐるんでなくちや。」

女はまた「ふゝ」と笑つた。

「愛すつて、一體どんな事だい。」

「まあ惚れさうに見せかけるのさ。」女は吭で笑ひながら、「だけれど私には何うしてもそれが出來ないの。たゞお客を大事にするだけなの。それに私なんか然う見えても温順しいんだから、鐵火な眞似なんか迚も柄にないの。ほんたうに温順しい花魁だつて、みんなが然う言ふわよ。」

「あゝ。」と、男は惱ましげに溜息をついたが、暫くすると、「僕は君のやうな人は、一日も早くこゝを出してあげたいと思ふね。」

「ふゝ。」と、女は又持前の笑聲を洩した。そして、「何うするの、お上さんにしてくれて?」

「いや、そんなことは何うでも可いんだ。たゞ金のためにこんな處に縛られて、貴重な青春をむざむざ色慾の餓鬼のために浪費されてしまふのが堪らないんだよ。戀もなしにそんな老人と一生寂しく暮すことにでもなれば、尚更悲しいぢやないか。君だつてそれは悲しいに違ひないんだからね。」男は熱情的に言つた。

「まつたくだわ。」女は感激したといふよりも、寧ろ驚いた風で、「さう言つてくれるのは貴方ばかりよ。」

そして彼女はまた腹這ひになつて、莨を吸ひつけて彼の口へ運んで行つた。

「わたし幾許も借金がないのよ。」
「幾許あるの。」
「さうね、御内所の方は勘定したら何のくらゐあるかしら。それに呉服屋の借金がね、これが一寸あるわ。出るとなれば、少しは派手にしたいから、それにも一寸かゝるのよ。」
そして彼女は胸算で、五百圓ばかりを計上した。勿論彼女としては、素人になれば買ひたいものも少くはなかつたが、單に足を洗ふにはそれだけの額は餘りに多過ぎた。
「僕母に言つてやれば、その位は出來ると思ふ。母は僕の言ふことなら、何でも聽いてくれるんだから。僕の母はほんたうに寛容な心をもつた人なんだ。」
「それでも女郎と一緒になるといへば、きつと吃驚するわ。」
新造が入つて來た。

・

一週間ほどたつと、男はそれだけの金を耳をそろへて持つて來たが、女は其のうち幾分を取つただけで、意見をして殆んど全部を返した。

夏になつてから、その學生は田舎へ歸省してしまつた。勿論その前にも一二度來たが、女は何だか惡いやうな氣がして、わざと遠ざかるやうに仕向けることを怠らなかつた。勿論彼女は、飲んだくれの父のために、不運な自分や弟たちが離れ〴〵になつて世のなかの辛苦をなめさせられたことを、身に染みてひどく悲しんでゐた。彼女の唯一の骨肉である弟も、人つかひの烈しい大阪の方で、か弱い體で自轉車などに乘つて苦使はれてゐた。彼女は時々彼に小遣などを送つてゐた。病氣をして、病院へ入つたと云ふ報知の來たときも、退院してしばらく田舎へ歸つたときにも、彼女は出來るだけ都合して金を送つてゐた。最近彼の運も少しは好くなつてゐたが、客として上つてくる若いお店者などを見ると、つい厭な氣がして、弟の境涯を思ひやつた。そんな事が妙に心に喰入つてゐたので、自分の境涯に醉ふと云ふやうなことは困難であつた。彼女は所在のない心寂しい折りなどには、針仕事を持出して、襦袢や何かを縫つたり又は引ときものなどをして單調な重苦しい時間を消すのであつたが、然うしてゐると牢獄のやうな檻のなかにゐる遣瀨なさを忘れて、むかし多勢の友達と裁盤に坐つてゐたときのやうなしをらしい自分に[illegible]、[illegible]しい懷しさを感ずるのであつた。[illegible]客にとつては、色白のきこ女で[illegible]、陽氣に飲んで騷いで一[illegible]行く[illegible]手もあつて、そんな時[illegible]は彼女も自然に心が[illegible]いで、萎えた氣分が生き〳〵して來た。しかし體が自由になる時が近づいて來ると、うか〳〵過した五六年の月日が今更に懷しいやうで、世のなかへ放たれて行かなければならぬのが、反つて不安でならなかつた。どこを見ても、頼もしい幸運が自分を待つてゐてくれさうには見えなかつた。
大學生と別れてから、彼から一度手紙をもらつたきりで、こつちからは遠慮して[illegible]相手になるのが大人氣ないやうな氣もして、また別に書くやうな用事もなかつたので、いくらか氣にかゝりながら返事を怠つてゐた。しかし其と同時に、餘り自分を卑下しすぎたり、彼の心の確實さを疑ひすぎるやうな氣がして、折角[illegible]いて來た幸運を、取逃してしまつたやうな寂しさを感じた。取止めのない男の氣持や言草が何だかふは〳〵してゐて、手頼のないやうにも思はれたが、眞實に自分を愛してくれてゐるのは、あの男より外にはないやうに思はれた。彼の好

意を退けたのが、生涯の失策だと云ふ氣がした。そして其の考へが段々彼女の頭腦に希望と力とを與へてくると同時に、彼の周圍や生活を分明見定めたいと云ふ望みが湧いて來た。慈愛の深い彼の老いた母親や、愛らしい彼の弟が世にも懐しいもののやうにさへ思はれた。

或日の午後、彼女は私と新造に其事を話して、兩國から汽車に乘つた。近頃彼女は、内所の上さんや新造と一緒に——時としては一人で、時々外出してゐて、東京の地理もほゞ知つてゐたし、千葉や成田がどの方面にあるかくらゐの知識はもつてゐた。彼の妹は今年十九だとかいふので、何か悦びさうなものをもつて行きたいと思ふと、ふらふらと遽かに思ひついたことなので、拵へてゐる隙もなかつたところから、客から貰つたきり簞笥のけんどんや抽斗の底に仕舞つておいた、中並でも持たさうな懷中化粧函だの半衿だのを、無造作に紙にくるんで持つて來た。それに淺草で買つた切山椒などがあつた。

避暑客の込合ふ季節なので、停車場は可也雜沓してゐたが、さうして獨りで旅をする氣持は可也心細かつた。十九から中間の六年間と云ふものを、不思議な世界の空氣に浸つて、何か特殊な忌はしい痕迹が額や擧動に染込んででもゐるやうに、自分では氣がさすのであつたが、周圍の人と自分とを嗅ぎわけ得るやうな人もなささうに見えた。實際また不斷からそれを心がけてもゐた。

海岸にちかい或町の停車場へおりたのは、暑い七月の日も既に沈んで、汐つぽい海風がそよそよと吹き流れてゐる時分であつた。町には電氣がついて避暑客の浴衣姿が涼しげに見えた。

男の家は、この海岸から一里ほど奥の里の方にあつた。彼女は三時間ばかりの汽車で疲れてもゐたし、町で宿を取つて、朝早く彼を訪ねようと思つたが、宿はどこも一杯で、それに一人旅だと聞いて素氣なく斷られたので、爲方なし、いきなり訪ねることにした。

俥はやがて町端を離れて、暗い田舍道へ差懸つた。黝い山の姿が月夜の空にそゝり立つて、海のやうな[illegible]つた青田から蛙が物凄く啼きしきつてゐた。太鼓や三味の音色ばかり聞きなれてゐた彼女の耳には、人間以外の聲がひどく恐しいもののやうに、神經を脅かした。高い垣根を結へた農家がしばらく續いた。行水や蚊遣の火をたいてゐるのが見えたり、牛の啼聲が不意に垣根のなかに起つたりした。

道が段々山里の方へ入つて行くと、四邊が一層闃寂して來て、石山な道を挽き惱んでゐる人間さへが何んな心をもつてるのか判らないやうに怕れられた。灯の影もみえない薄影や、夜風にそよいでゐる崖際の白百合の花などが殊に彼女の心を悸えさせた。でも彼の家を車夫までが知つてゐたのでいくらか心強かつた。

彼の屋敷は山寺のやうな大きな門構や黒い塀やに取圍まれて、白壁の土藏と竝んで、都會風に建てられた二階家であつたが、門の扉がぴつたり鎖されて、内は人氣もないやうに闃寂してゐた。それに石段の上にある門と住居との距離も可也遠かつたし、前には山川の流れが不斷の音をたゝへて、門内の松の梢にも、夜風が汐の遠鳴のやうに騷めいてゐた。しかし生活の豐かな此邊は人氣が好いと見えて、耳門を推すと直ぐ中へ入ることができた。女はちよいと氣が臆せて、其のまゝ其俥で引返さうかと思案したが、四里も五里もの山奥へ來たやうな氣がしてゐたので、引返す氣にもなれなかつた。で、玄關の土間へ立つて、思ひ切つて案内を乞つてみたが、誰も應じなかつた、遠い奥の方から明りがさして人聲が微かにしてゐるやうであつた。古びた

廣い家がしんとしてゐた。何處からか胸のわるい牛部屋の臭氣が通つて來た。

彼女は失望と不安とを強ひて壓へるやうにして、門の内を仕切つてある塀についてゐる小さい門の開いてゐたのを幸ひに、そつと其處から庭へ入つて見た。庭は木の繁みで微暗く、池の水や植木の鉢などが月明りに光つてゐた。開放した座敷は暗かつたが、籐椅子が取出されてあつたり、火の消えた盆燈籠が軒に下つてゐたりした。ふと池の向ひの木立の蔭に淡赤い電燈の影が、月暈のやうな圓を描いて、庭木や草の上に蒼白く反映してゐるのが目についたが、それは隱居所のやうな一棟の離房で、瓦葺の高い二階建であつた。そして其處に若い男が浴衣がけで、机に坐つて讀書に耽つてゐた。額は焦けてゐたが、それは疑ひもなく彼であつた。

ふと窓さきへ立つた彼女の白い姿を見たとき、彼はぎよつとしたやうに驚いた。

「私よ、私來たのよ。」彼女は嫣然して見せた。

「誰かと思つたら君だつたのか。僕はほんとに脅されてしまつた。」さう言つて彼は彼女を今一應凝視めた。

「わたし何だか急に來て見たくなつて、私と脫出して來たの。まさかこんなに遠い處とは思はないでせう、來てみて驚いてしまつたわ。」

「ほう、そんな好きな眞似ができるのか。」彼は蒼白くなつた顏を紅くして、急いで彼女を内へ入れた。

「上つても可いんですか。」彼女はちよつと氣がひけたやうに入口で躊躇してゐた。

家は上口と、奥の八疊との二室であつたが、八疊から二階へ梯子が懸けわたされて、倉を直したものらしく、木組や壁は嚴重に出來てゐたが、何となく重苦しい感じを與へた。で、上つて行つて蒲團などを佈められると、彼女は里離れのした態度で、更めて兩手をついて丁寧にお辭儀をした。彼は面喰つたやうな困惑を感じた。裏の畑にでもできたらしい紅色した新鮮な水蜜桃が盆の上に轉つてゐた。

「しかし能く來てくれたね。まさか君が今頃來ようとは思はないもんだから、ふつと顏を見たときには、君の幽靈か、僕の目のせゐで幻が映つたのかと思つて、慄然としたよ。」

「さう。私はまた自分の氣紛れで、飛んだところへ來たものだと思つて、何だか悲しくなつてしまつたの。夢でも見てゐるやうな氣がしてならなかつたんですの。でも貴方に會へて安心したわ。道がまた馬鹿に遠いんですもの、私厭になつちまつたわ。」

「夜だから然ういふ氣がしたんだよ。」

「貴方はこんな處にゐて、寂しかないの。」女はさう言つて四下を見まはした。

「こゝが一番涼しいから。」彼はさう言ひつゝも、どこかおど／＼した調子で、時々母屋の方へ目をやつた。

「私こゝにゐても可いでせうか。貴方の御母さんや御妹さんに御挨拶もしなければならないでせう。」女も不安さうに言つた。

「いゝ、いづれ明朝僕が紹介しよう。それに親父は浦賀の親類へ行つてゐるんだ、多分二三日は歸らないだらうと思ふ。當分ゐたつて可いんだらう。」

「さうね、御内所の方は幾日ゐたつて介意やしませんわ。私貴方の御手紙で、海へでも遊びに行かうと思つて來たんですけれど……それには色々話したいこともあるにはあるんですの。でも私こゝにゐても可いの。」

「それあ可いんだけれど、何なら、町の方で宿を取つてもいゝと思ふね。」彼は女に安心を與へるやうに言つたが、何處においていゝか惑つてゐる風であつた。

話が途切れたところで、彼女は持つて來た土産物を出して、「急に思ひついて來たんですから、何にももつて來なかつたのよ。」と、さう言つて、彼の前においた。

彼はたゞ大様に頷いたきりであつたが、やがて女の傍を離れて、母屋の方へ行つた。

彼の家は農家であつたが、千葉の方から養子に來た父は、元は商人出であつたから、ちよいちよい色々なことに手を出してゐた。東京へも用達に始終往復してゐて、さう云ふ時の足溜りに、これまで女を下町の方に圍つておいたこともあつた。

大分たつてから、一人の女中がお茶やお菓子を運んで來たが、間もなく彼も飛石づたひに此方へやつて來た。

「母に話したら、是非お目にかゝるから此方へおつれ申せと言つたんだけれど、僕は今夜はもう遅いから明朝にしたら可いだらうと言つておいたよ。」

「さう、貴方のお妹さんもいらつしやるの」

「妹は東京へ行つてゐて、今家にはゐないんだ。」彼は氣の毒さうに言つて、「母には友人の姉さんで、海水浴へ來たついでに、わざ〳〵訪ねてくれたんだと、さう言つて話したら、すつかり眞に受けられて極りが惡かつた。」

「さう。」と、女は寂しい微笑を浮べたが、やつぱり當にならないことを頼りにして來たのだと云ふ、淡い悔いを感じた。

その晩は葡萄酒などを飲んで、遅くまで話した。たゞ、それも取留めのない彼の感激から出る詞ばかりで、期待したやうな實のある話は少しもなかつた。

翌朝海岸の町の方へ出て行つたのは、お晝頃であつた。勿論母屋の方へつれて行かれて、二階の座敷も見せられたし、五十ばかりの母親にも紹介された。母は東京で世話になる人だといつて、彼が誇張して話したとみえて、素朴ではあるが、ひどく慇懃に待遇してくれるので、彼女は挨拶に困つて、可成口を利かないことにしてゐるより外なかつた。

裏の果樹園へつれ出されて彼女は初めて[illegible]とした。水蜜桃の實るところを、彼女は初めて見た。野菜なども町で育つた彼女には不思議なものばかりであつた。茄子や胡瓜に水をやつてゐる男が、彼女の姿を見て丁寧にお辭儀をした。ダリヤが一杯咲いてゐた。菜園には南瓜が蔓をはびこらせてゐた。暑氣が名殘なく吸取られて、太陽がかつ〳〵と照してゐたが、風は涼しかつた。一夏脚氣の出たとき朝早く外へ出て、跣足でしつとりした土を踏んだことなどあつたが、いくら體が丈夫になつてもこんな處には迚も一生暮せさうもなかつた。彼は東京で暮すのだと言つてゐたが、他の男の子がないところから見ると、つまりは此處に落着くのぢやないかと云ふ氣がした。

彼はそんな事については、少しも語らなかつた。

やがて支度をして、二人は家を出たが、山路とはいつても、海岸に近いので、何處を見ても昨夜あれほどにも心ををのゝかせたやうな深い山は、何處にも見えなかつた。蒼々した山松や、白百合の花の咲亂れた丘や、畑地ばかりであつた。そして思つたよりも早く、いつか町の堤へ出て來てゐるのに氣がついた。

海岸の松原蔭にある新しい宿の二階の一室に、やがて彼女は落着くことができた。そこからはそよ〳〵と風に漣をうつてゐる廣い青田が一目に見わたされ、松原や宿屋の上から、紺碧の色をたゝへた靜かな海が、地平線を淡青色の空との限界として盛りあがつたやうに眺め

られた。眞夏の日がきら〳〵と光り耀いてゐた。人間と人間との特殊な交渉より外には何物もない陰くて窮屈な小さい部屋のなかに住みなれて來た彼女に取つては、際限もない青空を仰ぐことすらが、限りない驚異でもあり喜悦でもあつたが、心ゆくまで瞳を開いて、其等の自然に親しむことは迚も出來なかつた。

海風に吹かれながら、晝飯を食べてから、二人はしばらく横になつて話してゐたが、するうちに疲れた頭腦も體も融けるやうな懈さをおぼえて、うと〳〵と快い眠に誘はれた。下の部屋で學生がやつてゐるハモニカの音などが、彼等の夢心地をあやした。

四時頃に、二人は一緒に海岸へ出て見た。日は大分傾いてゐたが、風が出たので、海には波が少し荒れてゐた。焦げつくやうな砂を踏んで彼女は汀に立つて、ぼんやり波の戯れを見てゐたが、長く立つてゐられなかつた。目がくらくらして波と一緒に引込まれて行きさうであつた。海水衣に海水帽をかぶつた、女學生らしい女の群が、波に輕く體を浮かせながら、愉快さうに毬投をやつてゐるのが彼女には不思議にも羨ましくも思はれた。印度人のやうな黑い裸體が、そこにもこゝにも彼女の目を驚かした。

二人はやがて着物の脱ぎ場へ入つて、足を休めながら海氣に吹かれてゐた。彼は彼女をかうした自由な自然の前へつれて來たことに、この上ない幸福を感じてゐるらしかつたが、彼女の眼は其の感じを受容れるには餘りに自分を小さくすぎてゐた。

すると其の時、ぼうと云ふ空洞な汽笛の音が響いて、いつの間にか汽船が一艘、黑い煙を吐きながら、近くの沖へ來て碇泊してゐるのに氣がついたが、間もなく漕ぎ寄つた一艘の端艇に、荷物や人を受取つて、陸の方へやつて來た。

端艇が濱へついたとき、懸けわたされた船板から四五人の男女が上陸して來たが、その中に舊式なパナマを冠つて小さい手提鞄と細卷とをもつた、肥滿した老人が一人こつちに遣つて來た。近づくに從つて、其の姿は段々はつきりして來て、白地の帷子や絣や、羽織の茶色地までがきら〳〵する光線に見分けられた。帶の金鎖がちか〳〵光つてゐた。

彼女はぢつと其の姿を凝視めてゐたが、それは何うやら能く自分のところへ通つてくる、千葉在だと云ふ爺らしく思はれて來た。

と、それと同時に彼の面にも暗い困惑の色が浮んで來て、やがて其處を立つて、そろ〳〵葭簾の外へ出て行つた。間もなく彼女もそこを離れた。

それが彼の父親だといふことは、後で彼が言つて聞かせたが、彼女は何にも知らなかつた。

其の晩も二人は町や海岸を散歩して、歸つてからも遲くまで月光の漾ひ流れてゐる野面を眺めながら話してゐた。彼は彼女の陰鬱な氣分を悲しく思つたが、女は自分を如何にして幸福にしようかと惱んでゐる彼を憐んだ。

三日目に、彼はちよつと家へ歸つてくると言つて立つて行つたが、その夕方、彼女は宿へも無斷でそこを立つてしまつた。

花が咲く

磯村は朝おきると、荒れた庭をぶら〳〵歩いて、すぐ机の前へ來て坐つた。

庭には白木蓮が一杯に咲いてゐた。空からの白さで明るく透けてゐるやうに思へた。花の咲く時分になつてから、陽氣が又後戻りして來て、咲きさうにしてゐた花を暫し躊躇させてゐたが、一兩日の生温い暖かさで、それが一時に咲きそろつた。そしてその下の方に茂つてゐる大株の山吹が、二分どほり透明な黄色い莟を綻ばせて、何となし晩春らしい氣分をさへ釀してゐた。何かしら例年の陽氣に見られない、寒さと暑さの混り合つたやうな重苦しい感じがそこに淀んでゐるやうな日であつた。それは全くいつもの春には見られないやうな、妙に拍子ぬけのした氣分であつた。

彼は何だか勝手がちがつたやうな氣がしてゐたが、それは彼の神經の弱々しさも一つの原因であつたが、餘り自然に興味をもちすぎる彼の習慣から來てゐるものだとも思はれた。其のうへ彼は又この二三日、ひどく煩はしいことが彼の頭に蔽被さつてゐることを不快に思つた。

それは磯村のやうに、家庭に多勢の子供をもつてゐると同時に、社會的にも少しは地位をもつてゐるものに取つては、可也皮肉な出來事であつたからで、氣の小さい、極り惡がり屋の彼は、何うかして甘くそれを切りぬけようと、頭腦を惱ましてゐた。

「あの女がまた來ましたよ。」

磯村が何か深い心配事があるやうな調子で、さう言つて、妻に脅かされたのは、三日ばかり前の夜のことであつた。

その夜彼は會があつて、歸りが思ひの外遲くなつた。おしやべりをしたり、酒を飲んだりしたので、彼はひどく疲れてゐたが、妻にさう云はれると、又かと思つて少しは胸がどきりとなつた。

勿論その女のことは、人に頼んで、間へ入つてもらつて、去年の冬とにかく一段落ついた形になつてゐたが、しかし相手が執念く出れば、彼はいつまでたつても安心する譯には行かないのであつた。

「また來たつて。」磯村は輕く問ひ返した。彼女の神經が尖つてゐるやうに思へて、それに觸るのが辛かつた。

今となつては、それは單に彼一人の苦勞ではないことは判つてゐた。寧ろ彼女の方が、餘計氣にしてゐるくらゐであつた。磯村に取つては、思ひがけない災難のやうなものであつた。十年ぶりで、その女から手紙を受取つたとき、彼はそれ以來その女が何うして暮してゐたかを知りたいだけの興味で、多分いく分か生活が明るみへ出てゐるだらうと想像したところから、どこかでちよつと飯でも一緒に食べて話を聞かうと思つたに過ぎなかつたが、それが不運な彼のために用意された陷穽であつた。彼女を一目見たときから、彼はまざ〳〵幻滅を感じた。嫌惡の情がむら〳〵起つたが、彼女の話はやつぱり聞きたかつた。そして彼は三度まで彼女を訪問した。彼女の話すところでは、最近まで或る工場持の保護を受けてゐたけれど、財界の恐慌でその關係は絕たなければならなかつた。で、すつかり行詰つてゐたところで、磯村に呼出しをかけることを思ひついた。

「ちよつと貴方のお名前を見たものですから、

一度お目にかゝりたいと思つて、手紙を差上げましたの。でも、多分來ては下さるまいと思つてゐましたのに。」彼女は若い時分とはまるで違つた、べちやつくやうな調子で言ふのであつた。

飲食事をしながら、磯村は出來るだけ、彼女から話を引出さうと焦慮つた結果、少しづつ小出しにそれを引出させることはできたけれど、それは眞の現在の身のうへくらゐのことであつた。

「私はどうしてから亭主運が惡いんでせう。この子の父親とも暫く一緒に暮したんですけれど……今憶ふと、それが私の一番幸福な時でした。」

彼女はその男の寫眞なぞ出して見せた。それは大書服を着飾つた軍人であつた。そしてその子供だと云ふ、五つになる愛らしい子が、餉臺の傍にすわつて鰻を突ついてゐた。

強ち彼女も不眞面目ではなささうに見えた。ビールに醉つてくると。彼女の生活から來た習慣で磯村の膝へもたれかゝるやうにしたりしたけれど、もう三十年を越した彼女としては、前途の不安を感じないではゐられなかつた。

「一小遣をおいて行かう。」磯村は言つた。

―いゝですよ、そんな積りぢやないんですわ。私まだお金はありますから。」彼女は言つた。

勿論さうでもないことが、その後磯村にわかつて來たとほり、彼女は田舎に縁談があるので、そこへ行くについて、少しばかり金のいることを、三度目に逢つたとき、その相談を受けてそれを贊成した磯村に打明けた。

田舎へ行つたときには、彼女はもう姙娠してゐた。磯村は彼女の大膽さ、といふよりも、恥知らずに呆れたけれど、何うしようと云ふ氣も起らなかつた。そして磯村の酬いか皮肉に彼に絡つて來たのであつた。

お産の前後、磯村は二三度、自身彼女に金を屆けたり、爲替を組んだりした。それは磯村に取つては可也骨の折れる仕事であつた。そして子供の顏を見た彼女の慾望が、段々大きくなつて行つた。磯村の要求がいつも裏切られた。勿論それは彼女だけの智慧ではなかつた。

磯村は彼女がまたのこ〳〵遣つて來たと聞いて、うんざりしてしまつた。やつぱり本當に解決がつかなかつたのだと思つた。

「子供をつれて來ましたよ。」と、妻はわざと突きつけるやうな調子で言つた。で、「何、子供か。」と思つて、磯村が問ひ返すと、それは大きい方の子だと言ふので、いくらか安心した。勿論小さい方の子にしたところで、それが自分の子であるか何うかは、その時の彼女の身のまはりを、一應取調べる必要もあるのであつたが、何だか似てゐるやうにも思へるので、それを自分に見るのは無論不愉快だつたが、連れてまで來られるのは、慄然とするほど厭であつた。勿論それは多分地震のために、人間の感情が、總て放散的に、密度を稀薄にされてゐるせゐもあつたが、一つは一年と云ふ時日が、彼の惱みを緩和してゐた。そんな事のために頭腦を苦しめることの馬鹿々々しいことは、彼にもはつきり判つてゐた。

「隨分づうづうしい女なんですよ。自家でもべちやくちやと、厭がらせを言つて行きましたが、吾妻さんのところでも、隨分色々なことを言つたさうですよ。まるで此の家が自分の家でもあるやうに、……私が好い着物を着てゐたとか、何かが殖えてゐるとか、私松をつけて、吾妻さんとこへ遣つた處ですから、その結果を聞きに、吾妻さんとこへ行つて、今歸つて來たところですよ。」

「金をやつてないのか。」

「え、あの時は默つて貰はないと言つたとかで、その儘になつてゐるやうですよ。今度はもつと大きく吹きかけてゐるらしいんです。」彼女は泣き出しさうな聲で口惜しさうに言つた。

「あんなに又金をほしがる奴はないからね。」

「なか〳〵片つきませんよ。確かに誰かついてゐるんです。」

「どんな身裝で來た。」

「え、それでも子供には縮緬なんか着せてね。」

「それだと厄介かも知れないね。困つてゐると違ひないか。」

その翌日から磯村は妻の險惡を感じた。磯村以上にもそれが彼女の苦になつてゐることは判つてゐるながら、彼女の態度を見ると、餘り感じが好くなかつた。彼は出來るだけ口を利かないことにしてゐた。

で、今朝も彼は用事を女中たちに足してもらふことにしてゐた。花が咲くのにまた不愉快な日がつゞくのかと思ふと、頭腦が憂鬱になつた。

「どこかへ行つてしまはう。」彼はさうも思つた。

勿論仕事の都合さへできれば今年は吉野の花を見に行からなぞと思つてゐた。それとも健康を恢復するためには、どこか靜かな山の温泉か好いかとも思つてゐた。彼は毎日々々こま〳〵した急ぎの仕事に追はれづめであつた。一日としてペンを手にしない日はなかつた。旅行をするためには、仕事の餘裕をつけることが必要であつたけれど、それも當分望めさうもなかつた。彼は體を虐げてゐることを考へるだけでも、恐ろしいやうな氣がしてゐた。

磯村は、展げられた原稿紙に向ひさうにしては、また煙草を手に取りあげてゐた。

「いや、それよりも芳太郎の試驗は何うなつたらう。」磯村はいつか又その方へ氣を取られはじめてゐた。

大概大丈夫らしかつた。出來ばえを調べて見たところでは、これならば先づ安心たと思はれた。しかし結果はまだ判らなかつた。

「若し今度駄目だとしたら。」

磯村は自分の失望よりも、子供の惱みを考へないではゐられなかつた。芳太郎は咽喉の病氣のために、二年間試驗を受けることができなかつた。一度は地方で、一度は東京で……。地方では、彼は當日にかゝつて、當日の朝から發熱したが、押して俥で出て行つた。その午後から熱が四十度に昇つた。そして試驗はそれきりであつた。去年は東京でK大學だけ受けることになつてゐたが、前日の夜おそくから、扁桃腺の腫れ出したのに氣づいて、手當をしたけれど、矢張駄目だつた。彼は母と友人に送られて、頭に氷嚢をつけて入場したのであつたが、第一の課目を終へて出て來たときには、顏は眞蒼になつてゐた。そして近所の醫者の手當を受けて自動車で歸つて來た。扁桃腺は化膿しはじめてゐた。日に〳〵それが咽喉一杯に腫れ塞がつて行つた。唾を出すのが困難であつた。呑んだ牛乳が鼻腔からだら〳〵流れ出した。入院して手術を受けたところで、漸とその苦しみから脱れることが出來た。

學校へ通ふことなしに、二年の月日をぶらぶらしてゐることは、文學や音樂に相當な目の開きかゝつた芳太郎に取つては、危險が伴はずにはゐられなかつた。神經のついた彼に取つては試驗勉強ほど氣分を腐敗にするものはなかつた。現代の試驗その物、教育その物に幾分、疑ひを抱かずにはゐられなかつた。そして其の間それを傍觀してゐる磯村の堪へねばならなかつた苦痛は、むしろそれ以上であつた。何事にも不檢束な彼にも、暗愁と寂寞の仕様ないこ

とが痛感された。彼は時々芳太郎の氣分を、數學や英語の方へ惹きつけようと力めた。その結果、彼は時々思ひのほか苛辣な言葉を口へ出さなければならなかつた。

磯村はそれらの雜念から脫れようとして、强ひて机に坐り返して、原稿紙のうへの埃を輕く吹きながら、漸とのことでペンを動かしはじめた。

すると暫くしてから、格子戸の開く音が彼の耳へ入つた。磯村は原稿の催促か、來客かと思つて、ちよつと安易を失つた氣持で、ペンを止めてゐた。そこへ緣側の方へ芳太郎の影がさした。彼は手に電報をもつてゐたが、入つてくるのを躊躇してゐた。

「どこから。」妻の聲がした。

「これあ秀ちやんだ。」芳太郎の聲がした。

秀ちやんの親である、磯村の姉夫婦が、四月になつたら上京する筈であつた。やつぱり東京にゐる秀ちやんの弟が、一週間ばかり前に、そんな話をして行つた。磯村はてつきり其だと思つたが、妻の感じたところも、同じであるらしく思へた。

「一時間がわかつたんでせう。」妻は言つてゐた。

「いや。」芳太郎は答へてゐたが、少しまごついたやうに、それを磯村に見せに來た。

「オイワイしたすつて何だい。お前に當てたんぢやないか。局はミタだぜ。」

芳太郎は泡をくつたやうに、ちよつとどぎまぎしながら茶の室へ行つてしまつた。

「何だ、もう判つてゐるぢやないか。それでも知らしてくれたのは感心だ。」

秀ちやんは閾が高くなつてゐて、もう二年も姿を見せなかつたのであつた。

「多分本當だらうと思ふが、行つて見て來たら何うだ。」

「まさか謔ぢやないでせう。この頃どこかあちらの方へ勤めてゐるさうですから、確かに見たんでせう。」妻もさう言つて襖をあけて、入つて來た。

「さうだらうとは思ふがね。無論さうだらう。」

「まあ可かつた。」

「これで己もいくらか吻とした。」磯村も言つた。

「今度駄目だつたら、もう御父さんには心配かけない、自分で何うかすると言つてゐましたけれど。」

「おれも學校なんか止めさせて、皆で何か商賣でもして、一緒に働かうかと思つた。」

暫くすると、磯村はまたペンを動かしはじめた。そしてそれを出させてしまふと、漸と解放されたやうな氣持で、庭へ飛び出した。そして輕い氣持で、昨日から運びこんだまゝになつてゐる植木を植ゑるために、鍬とシャベルを物置から引張りだして來た。木でも植ゑたら荒んだ庭が、少しは生氣づくだらうと思はれた。

それが濟んでから、輕い疲れを樂しみながら、緣側でパンを食べながら、牛乳を呑んでゐると、そこへ吾妻夫婦が訪ねて來た。

「また遣つて來たさうですが……。」磯村は不安さうに訊いた。

「いや、實は今日その、私んとこへ來ることになつてゐましてね。」吾妻はさう言つて、袂から半紙に何か書きつけたものを出して、突きつけながら、

「それでまあかう云ふことにしておきました。」

磯村はそれを受取つて目を通した。金の受取と、そして今後何事があつても何等の迷惑を持込まないことと、子供が磯村に關係ないことゝが、定法どほりに女の手によつて認められてあつた。

「そのくらゐにしておけば、たとひ何んな事があつても大丈夫です。」
「いや、どうも。」磯村はちよつとお辭儀をした。
「よく聞くと、あの大きい子供のお父さんの、海軍大佐のところへ、金を無心に行くらしいんです。その支度や旅費や何かでね。どうも方々惑をかけておくですからな。大佐も毎月養育料を取られてゐるうへに、時々大きく搾込まれるらしいんで、他所事ながら、お察ししますよ。」晉吉はさう言つて笑つた。
「だが、そんなに質のわるい女でもありませんね。家内が色々に言つて聞かしたら、すつかり其の氣になつたらしいんです。子供も手放すらしいです。」
「子供を實際もつてゐるんですか。」磯村はきいた。
「もつてゐますとも。連れて來たのがさうですもの。」晉吉は答へた。
磯村はそれはとうでしたか、と言つて悦けてゐたが、實を告げなかつた彼女の氣持は磯村にはわかつてゐた。
「それも奥さんの氣持が素直だからですよ。あの女をそこまで宥めていくのは、大抵ぢやありませんね。」磯村はさう言つて夫人に感謝した。
「全くですわ。どうせ貴女にしれたからは、私も公然に子供をつれて、是からちよく／＼伺ひますなんて、私も腹が立ちました。」
「えゝさうですわ。自分の子供を、お宅の坊ちやんや何かと同じやうにね。」夫人も言つた。
「餘らないんですよ。格別悪いといふんぢやないんだ。それだけ始末がわるい。」磯村も批判者の地位に立てたことを、愉快に感じた。
「お蔭で私も安心しましたわ。」
やがて四人は、卓の側へ集つて紅茶など飲んだ。そこに先刻の電報が、晉吉の目にもついた。長閑な天氣であつた。
「坊ちやん好かつたんですか。」
「え、お蔭さまで。」
「花が咲きますな。一つお花見にでも出かけようぢやありませんか。」晉吉が出し拔けに言つた。
「え、好いですね。」磯村の妻も早速賛成した。
けれどまだ何處かに安心し切れない何かが、彼女に殘つてゐた。磯村にはそれが何であるかがよく解つてゐた。それを彼女の利己心だとばかりも思へなかつた。彼はこの出來事を、思ひのほか重大視してゐる彼女の心を、今までにも嚴肅に經驗する機會をもつてゐた。それは寧ろ曾て見たこともなかつたやうな、彼女の可憐しさだとしか思へなかつた。

靜枝

藤間會で靜枝の舞踊を見た。「鷺娘」「思凡」は別の意味で其に興味が深かつた。音樂の内容が貧弱だからいけないけれど、「鷺娘」などは、アンナパブロヴァの「白鳥の死」に優ること數等だ。靜枝の身體の小さいのが、パブロヴァの脛が長くて丸太棒をおつぽり出したやうな武骨さで始末に行けないのに比べて、却つて小手廻しの表情が自由で、位複雑な線の美があるか知れない。もつと好い音樂を與へるならば、靜枝などの舞踊ももつと好い藝術になるだらう。

「ファイヤガン」

何署の幾つかの刑事部屋では、その時殆んど總ての刑事たちが、みんな善良さうな顏をそろへてゐた。不斷ならばちよつと好い氣持ちしない表情の持主でも、全市が大混亂のなかにあつて、大自然の暴威の前に一樣に慄へあがつてゐた時なので、人間の本能がもつてゐるどんな勝手な眞似でもが、共存的な好いところと一つになつて極度に擴大されてゐた時なので——勿論人間の悪い智慧や好い智慧や、深刻な心理がみんな閉塞してしまつて、最も手近な感情ばかりが働いてゐたから、普通の犯罪が犯罪らしくも見えなかつただらうし、たとひそれが犯罪であつたにしても、群衆心理に支配された種類のものであつたから、それがちよつと普通一般のことのやうに思はれた。犯罪を捜す目に映る總てのものが、また顯微鏡か何かで見るやうに異常に擴大されてゐたので、人道上許しておけない殘虐が、この際仕方のないことの樣に思へたり、貴重な人命が自分さへ其の災厄にかゝらなければ、何の價値もないもののやうに感ぜられたりした。感覺にふれる總てのものが、何一つ不斷の狀態におかれてはゐなかつた。地上の有らゆるものが、殘らず歪んでゐるやうに見えた。倒壞したもの、燒かれたものが、總て空に向つてけし飛ばされ、若しくは墜落しないで、地面にくつついてゐるのが、まだしも多少の安定を與へてゐるくらゐのものであつた。

刑事たちは、その時ひどく一般から恐怖されてゐる鮮人の行動や、錯誤から來た殘虐などについて各自の見聞きしたことを話し合つてゐた。頻繁に警察へ舞ひこんで來る報告も報告も、その元を捜索してみると、何の根據も事實もないことが確められるばかりであつた。彼等は各自にそんな事實を話しあつて賑やかに興じ合つてゐた。

すると其の時、ボーイが一人やつて來て、署長室へみんなに來てくれと云ふ命令を傳へた。部屋に集つてゐた八九人の刑事たちは、何事が起つたのかと思つて、何か手帳に書きつけてゐたものや、丼を食べてゐたものや、地震や火事の當時の騒ぎ[illegible]夢中になつてゐたもののなかから、重立つた四五人のものを[illegible]出て行つた。彼等の或るものは、襯衣[illegible]上衣に跨引をはいてゐたが、或るものは汚い[illegible]襤褸の裏服に巻ゲートルなぞを巻きつけ、或るものはまたちやんとした[illegible]の上衣に白[illegible]ズボンといつた、會社の勤人らしい[illegible]してゐた。

署長は四十許りの肉つきの好いハイカラ風の上品な男であつたが、この二三日の不規則な仕事と過度の勤勞とで疲勞の色が見えた。彼には[illegible]まつた不斷の仕事と違つて、色々な面倒な事件や困難な問題が突發的に來るので、暇の[illegible]な時間に、あわたゞしい氣分の浪費が多かつた。

ぞろ／＼と部屋へ入つて看ると、署長と差向ひに卓子に就いてゐる一人の老紳士があつた。五十を少し出たかと思はれる、色澤のいゝ、人の好ささうな人物で、質素な鼠色の古ぼけた無地の背廣に、ソフトカラを着けてゐたが、胡麻鹽の髮が、禿げない質とみえて、長く伸びてゐた。刑事達は何か重大事件の捜索だらうなどと、緊張した氣分で署長の顏色を伺つたのであつたが、その用件で署長と密談でもしてゐるらしいこの老紳士の誰であるかが、一層好奇心を唆つた。

「他のものは何うしたかね。みんな出てゐるか

れ。」署長は入つて來た刑事たちの顏を、困惑した目色でずらりと見わたしながら言つた。

「いや、大概ある筈です。」刑事の一人が答へた。

「それぢや御苦勞だが、成るべく多くの人に實物を見てもらつたうへで、出動して貰ひたいことがあるのでね。」署長は言つた。

後の方にゐた一人が、急いで刑事溜の別の部屋にゐた仲間を呼びに行つたが、やがて五六人の人達があわたゞしい表情で入つて來た。

「處で、こゝにゐられるのは理學博士の××さんだがね、今私があつちで事務をやつてゐるところへわざ〳〵面會に來て下すつたのは――實物について說明せんとわからんが、何しろこんな恐ろしいものが、〇〇大學の草原におちてゐたさうで……。」署長はさう言つて、卓子の眞中におかれた一つの不思議な物體に目を移した。

「ほう。」と、刑事たちの或るものは、不思議さうに近よつてその物體に見入つた。

不思議といつても、別にさう不思議な形をしてゐるのではなかつたが、たゞそれが包んであつたぼろ布のうへに、そつとおかれてあるうへに、何か巧妙な仕掛がしてあるらしいので、きつと重大な代物だらうといふ漠然とした懸念を與へるので、皆氣味わるさうに、それを覗くのであつた。

物體はビール瓶よりも一周り太いくらゐの長さ一尺二三寸ほどの筒形のものであつた。ちよつと見ると、硝子か何かで造つたもののやうに、つや〳〵した光澤をもつてゐて、黝黒色をもつてゐたが、それが鐵の一種類であることは明らかであつた。どちらが頭かわからないが、一方は洗面場の水口の螺旋の把手のやうな、そして其よりも大きなものがついてゐて、その下部の胴の方に、眞鍮製の小さい口がついてゐた。その螺旋と反對の、底よりか少し上の方に赤いレッテルが貼られてあつた。

「ほう、何だか不思議なものですな。」

「一體これは何に使用するものだらうな。」刑事たちは口々に呟いた。

すると署長は少し反りかへつて、

「誰かこんなものを、何處かで見たことはないかね。」と訊いた。

「さあ。」前の方にゐたアルパカの背廣をつけた一人が、首を傾けながら考へてゐたが、一同を振返つて、

「誰か知つてゐるかね。」と訊いてゐた。

何だか、何處かで一度くらゐ見たやうな氣もするがな。」誰かが言つた。

「いや、貴方がたがこれを知つてゐる氣遣ひはない筈ですがね。」××博士は近眼鏡をちよつと直しながら、「それこそ大變だ。」といつた風で、微笑を浮べてゐた。

「こんな物が、不斷にそこいらに轉がつてゐた日には、それこそ大事件だからね。」署長も笑ひながら、

「××さんが、今大學のなかを通つて來られる際に、誰かがこれを見つけて、騷いでゐたんださうだがね。これが有名な獨逸のテッペレンから盛んに投げた爆彈ださうだよ。ちよつと見ると、何でもないやうなものだが、實に恐るべきもんぢやないか。」

「ほう、これがね。」

「獨逸の飛行機から投げたと云ふ爆彈は、これですか。」刑事の一人はいくらか頼らなさうに博士に尋ねた。

「さうですとも、これがテッペリンから投下されると、忽ち爆發する仕掛になつてゐるので、このためにロンドンやパリイの市民は何のくらゐ脅かされたか知れない。何しろ百八十回も襲撃したのですからな。誰も今度の地震の比ぢやありませんよ。仕合せなことにはロンドン市

民は地下鐵道と云ふ安全な逃場をもつてゐましたから、まあその割には傷害はなかつたのですが、我々はさう云ふ時のことを今から十分考慮に入れておかなければならんのですよ。今度の地震にしたところでさうですよ。今少し科學者の言ふことに耳を傾けて、市民が地震の性質を十分理解してゐたら、あんなにまで周章てなくとも、もつと落着いて防火に努めることもできたらうし、また不斷から用意して、適當な設備もできた筈ですからね。」博士は興奮した口調で言ふのであつた。

「いや、我々も常にいつか一度は大きな地震が來はしないかと、そんな氣もしてゐたのですがな、こればかりは何うも完全な防備もできないので、みんなが平氣でゐれば、自分たちも其の氣になつて、うか／＼と暮してゐたやうな譯でしてね。」人の好い署長は辯解でもするやうに言つた。

「誰でもさうなんですよ。」東北辯の若い刑事が笑顏で答へて、「實際いつ來るか判りもしないものに、始終びく／＼ものでゐたのでは、人間は一日も生きて行かれませんからね。今日の進歩した科學の力で、何とかこれを豫知することができたら、大變に助かると思ひますね。あれがせめて朝のうちにでも知れたら、被害の程度も餘程少くて濟んだでせうがね。」

博士も苦笑をたゝへてゐた。

「僕は地震學の方は判りませんがね、從來の經驗で、ペリオデカリーに……例へば六十年に一度とか三十年目に一度とか來るものだと云ふ大凡のことだけは判つてゐるのだ。しかし其以上は今の科學の力では明確なことは判らんらしい。今度なぞも確に地球の變動期に際してゐるのだらうが、それが經過すれば、また幾十年のあひだ先づ大地震はないものとみて可い譯だね。」博士は親しみのある口調で言ふのであつた。

「それで何うです。この爆彈の御說明をどうかもう一度。」署長はまた、本題を取りあげて、「何しろこんなものが、そこいらにごろ／＼してゐるなどは、物騷千萬だ。」

「よろしい、僕がこの代物の大凡の知識だけお授けしませう」博士はさう言つて、そのつるつるした重い筒を兩手に取りあげながら、

「僕はこの爆彈については、相當研究したこともあるので……勿論元來が獨逸で作られたものですが、これはこゝにも書いてある通りアメリカ製でね、ウェルドン會社の製造に係るものです。こいつはファイヤガンと云ふんで……さあ何と譯したらいゝかね、火焰とでもいふかね、つまり火の鐵砲だ。」博士は輕い皮肉たやうな調子で、

「今もちよつと署長さんにお話したのですがね、この危險物の使ひ方がこゝに英語で簡短に示されてをりますが、それは、Keep this end up. Open valve fully. Aim at base of fire. といふのでつまり此のレッテルの方を上へ向けろ、瓣を十分開け、火の底を狙へといふことになるんですから、これをかういふ風に上へ向けて、こゝのところを十分に捻つて、火の基といふのは、ちよつと可笑しいが、目的物を狙つて投下せよといふ事と解してよからう。」

そして博士はその螺旋をひねりかけた手を、遽かに引込めて、

「とにかく危險物ですからね、間違つてこいつを捻つたら大變なことになりますよ。だぶ／＼してゐるのは猛烈な爆發性をもつた藥品ですからね。」

「ちよつと伺つておきたいのですが、そこを捻つたら何ういふことになりますか。」背廣服が訊いた。

「いやそれこそ大變なことになりますよ。何しろテッペレンの飛行船……御存じか知りません

が、獨逸のテッペレン氏の發明にかゝるものですが、その飛行船からこれを投下するのですけれど、この爆彈ではこいつを捻つて投下する事になつてゐるので、すると三千度の熱度でもつて、猛火を噴出さうといふ、世にも恐るべき代物ですからね。三千度といふ熱度に逢つちや敵ひません。御覧にもなつたでせうが、今度の猛火で、到るところ硝子が飴のやうに熔解してゐるでせう。あれは三千度といふ高熱であゝいふ風にだら／＼熔けて了ふので、三千度と言つたら全く非常な高熱です。それが三百メートル擴がるといふんですからな。いや實際擴がるんです。だから、これを少しでも強く捻れば、此邊は忽ち、一面の火の海となつて了ふ譯で。」博士は緊張した口調で熱心に言ふのであつた。

「ほう、三百メートル。そいつは大變だ。この際そんな危險物をもつて歩く奴がゐては、それこそ東京は文字通りの全滅だ。」署長は少し蒼くなりながら、不安さうにその危險物を眺めてゐた。

博士は何も説明してゐる自分自身が、てつきり胸におちてこないところのあるのに氣づいたといふ風で、繰返しその使用方法を讀んでゐたが、

「ところがですよ、こいつは貨物の獨逸製の爆彈とは、いくらか違ふ點もあるんで、こゝにある Aim at fire といふのは、火のある處を目ざして投下せよといふことに解釋した方が適當かも知れませんな。するとテッペレンで使つたものと、いくらか性質がちがふものと見ていゝ譯ですが、それにしても大變ですよ。」

「するとそれ自身は發火しませんのですかね。」背廣服の刑事がまた尋ねた。

「いや、何しろファイヤガンと銘打つてあるんですから、それ自身爆發することは確實ですよ。」博士は眼鏡の底から目縁の痙攣つたやうな目を光らせながら、その若い刑事の顏を見たが、またそのレッテルに目を移しながら、首をひねつてゐた。

「成程。」暫くすると、會心の笑を口髭の下に浮べながら、

「いや解りましたよ。何しろ文章がひどく簡單ですからな。解釋の仕樣によつて色々にかへられるが、發火させて擲へといふのが、間違ひのないところだ。さうだ。その方が一層適切だ。」

さうして博士はその下の數行の文句を、口早に讀み下した。

For gasoline, oil, electric and other incipient fires will not deteriorate freeze or harm any material.

「かういふ事も、書いてあるが、これはまあさして重要ではなささうだ。何しろ爆彈には違ひないのだ。」

「アメリカあたりで、さういふものを一體何うして賣るですかな。麗々しく會社の名まで記してからに。」署長は髭をひねりながら、不安の色を目に浮べてゐた。

「さあ、そこが我々日本人の頭腦では、ちよつと想像のつかない點ですがね。いづれ其は民間の會社で、秘密に賣つてゐるものと見んければならんが……勿論學術上研究の自由は、迚も我々の想像に及ばないところがあるので、使用法さへ知つてゐれば、危險のないこともわかつてゐる譯だが、多分不逞の鮮人が、秘密に買ひ取つたものでせうよ。いづれにしても今はそんな詮索をしてゐる場合ぢやない、一つ搾さんで嚴しく詮索していたゞいて……まさか是を使用してはゐまいが、事によると火の手が大きくなつたのも、これの效果かも知れませんから、何をおいてもこれだけは嚴重に取調べていたゞかんと困りますよ。とにかく是は危險物ですよ。取調べる價値は十分ありますよ。でなくて

是か何でせう。」
「いや、早速研究させますが、そんな猛烈な爆發性をもつてゐるものだとすると、それを何う處置していゝか、それもちよつと伺つておいた方がよささうです。」
「これを拋りさへしなければ、何のこともありませんがね、まあそこいらに置いておくのも危險ですから、このまゝ不忍池の眞中へでももつて行つて深く沈めて口を開けておくですよ。」
「そんな事でよければ……。」
「大丈夫ですよ。一週間もすれば氣がぬけてしまひますからな。間違つて爆發したところが、水のなかです。」
「ははあ。」署長はやつと安心したやうに笑つた。
「まあ、テッペレンの眞物ぢやなささうだから、あれほどに危險はないかも知れないけれど、とにかく危險は危險ですから、一刻も早く出來るだけ手をまはして、取除いた方が安心といふものです。」
「全くですよ。」
「たとひ彼等がそれを使用しないにしても、落して歩かれては大變ですからな。」
刑事たちは餘り好い氣持がしなかつた。たとひそれがテッペレンの爆彈でないにしても、この無氣味な代物がそれに類似した危險物であることは、この場合、博士の說明を煩はすまでもなかつた。
彼等は緊張した、しかし何處か雲をつかむやうな、淡い空虚を感じながら、とにかく持場々々へ出動しなければならなかつた。或るものは卷ゲートルを締直し、或るものは水筒に藥罐の湯をつぎはじめた。窓ぶかい窓硝子に午後の一時頃の熱い日が照つて、その外のいひばや何かの植込に、避難民の汚い洗濯ものが、哀れぶかくかかつてゐた。町はごたすた返してゐた。みんな元氣がなささうな、ぼんやり顏をしてゐた。
「何だかをかしいね。」背廣服の刑事が、カンカンの埃を拂ひながら言ひだした。
「爆彈にしては、少し堅すぎるやうに思ふが、爆發さすべき性質のものなら、あの眞鍮の口から三千度の火熱なぞ吹く筈はないんだがな。」
するとゴム足袋をはきかけてゐた一人がそれに應じた。
「さうさ、己も何だかをかしいと思ふんだがね、學者の言ふことだから、間違はなからう。」
「それにしても怪しいな。いくらアメリカだつて、そんな危險物に會社の名をかいたレッテルを貼つて輸出するのは變だな、實に博士の要領に止まるんぢやないかな、何しろこの國のことだからね。實はいくら貴國の冷靜な人間でも、かうなつてみると、ただの人間だからね。」
「ほんたうだね。」
「博士だつて、そこらの八百屋の親爺だつて、何しろ避難民は一緒に玄米の握飯を食つてゐるんだからね。博士の權威も何もあつたもんぢやない。僕たちにしたところで、皆な一つの人間だといふことを、今度くらゐ痛切に感じたことはないからね。」
「待てよ。さう言へば己はどこかであれを見たやうな氣がする。先刻からさう思つて見てゐたんだがやつと今思ひ出したぞ。」火事の傍で皮包のなかから食べさしておいた握飯を取出して食べてゐた、白い詰襟の若い刑事が茶を呑みながら言ひだした。
一同はその方へ視線を送つた。
「どこで。」
「たしか石崎さんとこで見たぞ。あすこの詰所巡査のとこに備へつけてあるのは、たしかにあれだ。何でも最新式の消火器だとかいふ話だつたがね、どうも似てゐるよ。」
「いよ〳〵怪しくなつて來たぞ。誰か行つてそ

つとそれを借りて來る譯にいかんかね。」

「よし行つてこよう。」白い詰襟はさう言つて立ちあがつた。そして出口にあつた自轉車を一つ曳出して、走りだした。

「どうもね、僕は英語は知らんけれど、何だか博士の說明ぶりが可笑しいと思ふよ。」

「さうさ、己も變だとは思つたが、見たことがないからな。」

「三千度の熱もあやしいぞ。」

「三百メートル四方火の海だなんて、眞物のテッペレンだつてまさかそんな爆彈は投げやしまい。」

「とにかく石崎のものを見れば分るさ。」

そんな話をしてゐるところへ、白い詰襟によつてその正のものが持來された。

「これだ／＼。」彼はさう言つて、新聞にくるんで來たのを出して見せた。

みんなは其の周圍を取りまいた。

「何だ、ひどく窄したもんだね。いくら博士でもこれは知らなかつたんだね。」

「何しろ條件があわててゐるね、詰襟の方だつてまるで成つてやしないぢやないか。火の罪をねらへと言つたろ、黒をねらふ筈だ、消火器だもの。」

或るものは苦笑した。或るものは笑ひだした。又或るものはそれを捻くりながら、頻りに感心してゐた。

とにかく署長の前へ持つてゆくことに、皆は一致した。

博士はちよつと帽子をもつて、椅子を立ちかけてゐるところであつたが、入つて來た二三人の胡散くさい顔を見ると、ちよつとたじろぐやうな風で、不安さうに彼等を見たが、詰襟が兩手にもつてゐるファイヤガンを見ると、遽かに驚異の目を光らした。署長も目を見張つた。

「これと同じものが、外にもあるんですがね。」

「ほう、どこに……。」署長が言つた。

「石崎さんのところにこれを備へつけておくですよ。多分何かの間違ですが、これなれば格別危險な品物ぢやありませんよ。」詰襟は笑ひながら、それを卓子のうへで並べて見せた。

「勿論もうお分りになつたでせうが……實際、我々もさうかと思ひましたよ。何しろこの際のことですから。」背廣は二人の顔を見比べた。

博士は直ちに頷いた。

「成程、それで判りましたよ。こんな消火器が來てゐるといふことは、大分前に耳にしましたよ。」

「消火器か。それぢやまるで……。」署長は笑ひもせず、少し慍つたやうな表情をした。

「たしかに消火器に違ひありません。何しろこの周りに集つて、鮮人が今こゝへこれを落して逃げたと言ふものがあつたものですから、そいつは大變だといふので、急いで御報告に及んだやうなことで……いやそれでこの文句がよく判る。說明者の僕自身が、どうも色眼鏡をかけてみてゐたから。」

「こんな時は、誰でも惡い方へ／＼と解釋したがるもんですからね。」背廣は氣の毒さうに言つた。

「何しろお互に助かつたといふもんですよ。でないと、私の威信にも係ることになりますからな。」署長は少し苦い微笑をたゝへてゐた。

「いや何うも飛んだ粗忽で……。」

博士はさう言つて、腰を屈めるやうにして、そこ／＼に出て行つた。

後で三人は感心したやうに笑つてゐた。

「それにしても博士は博士だ、牽強にしても說明ぶりが振つてゐるぢやありませんか。」

「さう／＼、我々ですら釣込まれてしまつたからね」署長は苦笑した。

風呂桶

津島はこの頃何を見ても、長くもない自分の生命を測る尺度のやうな氣がしてならないのであつた。好きな草花を見ても、來年の今頃にならないと、同じやうな花が咲かないのだと思ふと、それを待つ心持が寂しかつた。一年に一度しかない、旬のきまつてゐる筍だとか、松茸だとか、さう云ふものを食べても、同じ意味で何となく心細く思ふのであつた。不斷散歩しつけてゐる通りの路傍樹の幹の、めき／＼太つたのを見ると、移植された時からもう十年たらずの歳月のたつてゐることが、またそれだけ自分の生命を追詰めて來てゐるのだと思はれて、好い氣持はしないのであつた。しかし津島のやうな年になると、死に面してゐる肺病患者が、通例死の觀念と反對の側に結構脱れてゐられると同じやうに、比較的年の觀念から離れがちな日が過せるのであつた。閑寂に先を急ぐやうな若い時の焦燥が、古いバネのやうに弛んで、感じが稀薄になるからでもあるが、一つは生命の連續である子供達の生長を悦ぶ心と、哀れむ心が、自分の憂ひを容赦してくれてゐるのであつた。

その朝津島は一人の來客と無駄話をしてゐた。そんな時に彼は、それが特別な興味を惹くとか、親しみを感ずるとかいふ場合でない限り、氣分が苛々して來るのであつた。いつもさう感じもしない時間の尊いことを、特別に思ひだしでもしたやうに、取返しのつかない損をしてゐるやうに感じて、苛々するのであつたが、しかし其の人が遠慮して歸りさうにすると、思ひ切りわるく引止めたくもなるのであつた。津島は其の時ふと、妙なことが氣になつた。それは其の來客と何の係りもないことだが、それが氣になり出すと、もう落着いて應答してゐられないのであつた。彼は浮の空で話のばつだけを合してゐた。それは板塀一つ隔てた、津島の書齋から言へば、前の方にあたる一つの家の臺所で、ちやうど其の時やつて來た大工に何か指圖をしてゐる妻のさく子の聲が、妙に彼の神經を刺戟したのであつた。

津島はその頃、やつとその家を讓つてもらふことが出來て、いくらか助かつたやうな氣がしてゐた。彼は年々自分の住居の狹苦しいのを感じてゐた。勿論十人の家族に、疊數でいへばわづかに十五か二十四五疊の手狹な家なので、何うにも遣繰りのつかないことは、女達に言はれなくとも、今まで住居などには全く何の注意をも拂はなかつた、又拂ふ餘裕もなかつた津島自身が痛感してゐるのであつた。この二三年、子供達がめき／＼生長するにつれて、その問題は一層切迫して來た。

津島はその頃長らく住んでゐた自宅と、土地の都合でそれに附屬してゐる、今一つの家とを、思ひがけなく自分のものにすることができた。彼はさうする前に、自分の家が新しい家主に渡りかけたところで、明け渡しを迫られたが、借家の拂底なをりだつたので、家が容易に見つからなかつた。彼は多勢の子供をひかへて家を追立てられる悲哀と、借家を捜す困難とを、その時つく／＼感じた。そして友人の助力などで、とにかく其の古屋に永久落着くことになつて、一時吻としたのであつたが、それだけの室數では、何うにも遣繰りのつかないことが、その後一層彼の頭腦を惱ました。彼は家を增築するか、

別に一軒家を借りるか、するより外なかつた。入學試驗をひかへてゐる子供に、近所で部屋を借りてやつたりして、忙しい時は自分でも其へ出たり、下宿の部屋を借りて出たりしてゐたが、それよりも前の家主時代から、彼と同じ借家人である、前の家を明けてもらつた方が、何んなに便利だか知れなかつた。その家は二つに仕切られて、二組の家族が住んでゐた。津島はその一方だけでも立退いてもらふつもりで、交渉してみたけれど、普通の交渉では、迚も明渡してくれさうになかつた。そして數回の折衝を重ねた結果、到頭法廷にまで持出されることになつたのであつたが、法律家の手に移されてからは、問題は一層困難に陥るばかりであつた。ちやうど泥沼へでも足を踏込んだやうな形で、彼も借家人も、全く拔差しのならない破滅に引込まれた。

津島が板塀の節穴などから、間取の工合などを、時々覗いてみてゐた其の一方の家へ足を容れることのできたのは、二年の後であつた。わづか一夜で、他の辯護士が片着けてくれたのであつた。

その家は荒れ放題に荒れてゐた。子供達が机でもすゑるやうになる迄には、可なり手がかゝつた。でも津島たちは、いくらか寛ぐことができた。

「一時こゝを湯殿にしようか。」津島は或る日、臺所へ入つて見て、ふとそれを思ひついた。

彼は現在物置になつてゐる湯殿が破損してから、幾年もの長いあひだ、洗湯へ通つてゐた。多分第三回目の妻の姙娠のとき、津島は彼女のために中古の好い風呂桶を見つけて來て、それを湯殿へすゑることになつたのであつたが、それから二三年たつてから、知人が特別に作らせて、その後家の都合で不要になつた嚴丈な角風呂が、持込まれることになつたのであつたが、湯殿が破損してから間もなく、その桶にも隙ができてしまつた。

彼は洗湯のなかで、色々の人と顔を合したり、挨拶を交したりするのが、年々煩はしくなつてゐた。偶には子供も洗つてやらなければならなかつた。鬢の毛などが白くなるにつれて、それが何となし慘めくさく感ぜられた。何よりも湯殿の必要を、彼は先づ感じた。

「譯はありませんよ。」妻も同意した。

だから、今彼女が自分で頼んで來た大工に、この臺所を何う云ふ工合に直せるかを相談してゐるのに、不思議はなかつた。そして少しばかり、その聲の調子が高かつたからと言つて、さう氣にするほどのことでもなかつたが、ちやうど其の時、妻に對していくらか不機嫌になつてゐた折だつたので、そんなちよつとした手入れをするのに、朝つぱらから、今の一つの借家人や隣家へも筒ぬけに聞えるやうな調子で、何か話してゐるのが、いつもの彼女の安價な虚榮心でないにしても、職人などに對して、何かひどく氣の利いた風を示さうとでもするやうな淺果敢な悧巧さだと思はれて、わざとらしい其の調子が何うにも堪らない氣がしたのであつた。勿論それは津島のみが感じ得ることかも知れなかつたが、年を取つてから出て來た彼女の厭味の一つかも知れないのであつた。男は年を取るに從つて、洗練されて來る。しかし女はその反對だと思はれた。

「何だつてあんな大きな聲を出すんだ。」

暫くしてから、さく子が此方の家へ來て、茶の室の縁先で、そこに干してあつた足袋の位置をかへてゐると、津島が座敷の縁へ出て詰つた。

さく子はちよつと驚いたやうな顔を、こつちへ向けた。二人は昨日から口を利かないのであつた。

「何です。」
「あんな調子づいた顔を出して、どんな道樂を作るつもりなんだ。
「別に大きな顔なんか出しやしませんよ。」
こゝまで筒ぬけに聞えるぢやないか。隣ぢや何んな普請をするかと思つたに違ひないんだ。」
「可いぢやありませんか。別に悪いことをするんぢやないんですもの。」さく子はさう言つて部屋へ入りかけて、
「あゝ煩い。」と眉に小皺を寄せた。
津島とさく子が不快を感じ合つてゐたといふのも、今までも善くあつた彼女の弟のことからであつた。その弟が津島に對して金錢上で、ちよつと狡いことをやつた。預けたものを質へ入れて、放下しておいたのが、津島の氣を悪くした。その不正なことを、さく子も腹を立ててゐたけれど、其れ以外にも少し金錢上の取引があつて、そんな事には頭腦の働きの鈍い津島に、さく子はいくらか弟の非を蔽ふやうな説明を加へたのであつた。津島はその弟に可なりな補助を與へたこともあつたけれど、利き目のないのに懲りて、さうした交渉は作らないことに決めてゐたのであつたが、ふいと虚につけ込んで小遣をすくはれたのか、腹立しかつた。大體さく子も弟の悪いことは十分知つてゐた。大袈裟に津島の恩を弟に着せたりすると、それが津島には擽つたくもあつた。しかしその時は幾らか體裁を作るためにか、それとも氣づかずにか、とにかく曖昧にしようとした。が、其よりも差當つて質に入れられたものを、津島は取返さうとした。そして終に自分で金を拂つて、漸く取返すことができた。その金は僅かだつたけれど、人を舐めたやうな彼の態度が憎かつた。彼はさく子にも當らずにはゐられなかつた。そんな場合に、子供に甘いさく子たちの母親が、誠意をかいてゐることも津島を不快にした。
津島はさく子に移されて行つた不快が、まだ滓のやうに腹に殘つてゐたので、さうしたさく子の調子が、忽ち逆上性の神經を苛立せてしまつた。
津島は二言三言應酬してゐるうちに、さく子を打つた。いつもの通り、さく子はそれを避けも逃げもしないのであつた。人が止めるまでは打たせるのであつた。自分で手を上げることも、さう珍しくはなかつた。
津島は猛烈に打つた。彼女がいつも頭腦を痛がるのは、自分の拳のためだと意識しながら、打たずにはゐられなかつた。[illegible]に取つては、それはをかしいほど[illegible]れた、人々に遮へられたところで、床の間にあつた日本刀を持出して、拔きかけようとさへした。本當にそんな事のできる自分だとは思へなかつた。子供じみた脅しに過ぎないのを彼は知つてゐたけれど、そんな事を遣りかねない[illegible]性が、どこかに潛んでゐるやうにも思へた。彼はそんな時、幼少の折犬に咬まれて、その犬を殺すために、長い槍を提げて飛出して行つた老父の姿を思出したりするのであつた。ずつと年を取つて、體の起居の自由が利かなくなつてから、まるで駄々ッ兒のやうに、煙管を振りあげて母を打たうとした父の可笑しい表情も目についてゐた。母は悦けた手つきで踊りのやうな身振をして、却つて父を笑はせてしまつた。
さく子はしかし剽輕な女ではあつたけれど、決して踊りはしなかつた。若くなつて反抗するのであつた。
夕方になつてから、津島は大工が張つて行つた、湯殿の板敷を鐵で叩きこはしてゐた。
津島がやはり湯殿を利用した方が得だと思つ

て、妻と一緒に風呂桶を買ひに行つたのは、それから半月もたつてからであつた。そして其の翌日風呂桶が屆けられて、急拵への煙突なしで、石炭が焚かれた。

津島は久しぶりで、内湯へ入ることができたが、周圍が小汚いので、氣持は餘りよくなかつた。それに廣々とした湯殿へ入りつけてゐたので、さうやつて風呂桶のなかへ入つてゐるのが窮屈であつた。

「この桶は幾年保つだらう。」彼はいつもの癖でそんなことを考へた。

「おれが死ぬまでに、この桶一つで好いだらうか。」と、さうも思つて見た。

すると其が段々自分の棺桶のやうな氣がして來るのであつた。

秋立つ頃

風物の微妙な感じは、冬なら冬、夏なら夏が、靜かに春や秋と入れかはらうとしてゐる時に、最も人を怡しませも、傷ませもする。長い冬の眠りがさめかゝつて、春めいた潤ひがそこはかとなく空に感ぜらるゝ時、暑さが漸く峠を登りつめて、月光の影が動もすると薄ら寂しい感じを齎して來る時など、我々の自然に對する感覺が最も鋭敏に動く。たゞ最近自然界の現象は以前と大分樣子が異つてゐる。風物の感じが何となくばさけて來てゐる。春の半ごろに秋風に似た感じの風が吹いたり、夏の眞中に秋雨のやうな重い雨が降つたりすることも珍しくないが、このごろの月の色は又何といふ荒寥たる大陸的の凄さをもつてゐることだらう。

自分はこのごろになると、夜の涼しい縁側の茣蓙のうへに胡坐をかいて、松の梢の上を渡つて行く月足の迅さを眺めたり、竹の葉のざわめきを聞いたりして、時の移るのを忘れてゐることが多い。庭ごしの裏に、氣にかゝる廢屋が一つあつて、押入の少い物置とてもない此方の家に置きあまる我羅倶多が未だいくらか埃塗れになつてゐるが、醜い野犬がその床下で五匹もの子を産んだりして、一層氣分を暑苦しく憂鬱にした。この裏の家を毀して、密集しすぎた樹木を配置したり、好きな竹を植増したり、萩や桔梗でもあしらつたりしたら、少しは新鮮な空氣が通つて居心地が好くなるに決まつてゐる。自身に水をやつたり、木の植替をしたりすることが又何んなに心を慰めるか分らないのであるが、それよりも先きに整理しなければならないものが澤山ある。涼しくなればなつたで、多勢の子供の袷や綿入、蒲團の洗濯や、足りないものの補充や、そんな事がもう大分前から氣にかゝつてゐるのであつた。幸ひにＴ子もそんなものに氣を配るやうな心持になつてくれてゐるので、人任せであつた自分の家庭も寂寞から救はれるだらう。

折鞄

融は何時からかポオトフォリオを一つ欲しいと思つてゐた。會社員とか雜誌新聞記者とか、又は醫者のやうに、別段それが大して必要と云ふほどのことはなかつたけれど、しかし其があると便利だと思はれる場合が時々あつた。一日の汽車旅行とか、近いところへ二三日物を書きに出る場合とか、でなくて長い旅でもこま〳〵した手廻りのものを仕舞つておいて、手輕に出し入れのできる入れものが一つ有つた方が便利であつた。煙草、マッチ、薬、紙、ノオト、賴信紙、萬年筆、雜誌、小さな書冊、そんなやうな種類のものは、その全部でなくても、ちよつと出るにも洋服の場合は、ポケット、和服の場合は、袂や懐に入れておけないことはなかつたけれど、矢張何か入れ物に取纏めておく方が都合が好かつた。しかしもと〳〵事務的に出來てゐるポオトフォリオが、事務家とも遊民ともつかない老年の彼にふさふか何うか考へものであつた。融は時々手提の袋などを買つて、その當座二三度持つて歩いて惓んでゐたこともあつたが、何だかおぢむさい氣がして、いつでも棄ててしまつた。

「何うだらう、ポオトフォリオを一つ買はうかな。」

融は子供や妻と町を散歩したり、買ひものに出た場合などに、鞄屋の店頭や飾窓の前に善く立停つて言つたものであつた。勿論それは實用品といふ條、彼に取つては人のもつものを、ちよつと玩具に持つて見たい程度の、子供らしい慾望でもあつた。

「お父さんには少し可笑しいな。」子供は言ふのであつた。

融はその時は子供に遠慮するやうに、買ふことを止めたが、しかし何うかすると、鞄屋の前に足を止めることが、其の後も時々あつた。

すると大晦日ちかい或日のこと、彼は二三日それが續いたやうに、その晩も妻と大きい子供と町を散歩した。彼はその前の晩も三人で、本屋を三四軒覗いて、劇に關する著述と俳諧に關する書物を買つたが、その又前晩にも、妻と二人で[illegible]の道具を買つたりした。或晩なぞは途中で彼女が[illegible]に氣分が悪くなつて、急いで家へ引返した。

「何だか頭が變ですから、私歸りますわ。」

彼女は悲しげな顔で夫に告げるのであつた。

「あゝ、それあ可けない。大急ぎで歸らう。俺が手を引いてやらう。」融は吃驚して、彼女の顔を見ながら言つた。

「いゝんですの。そんなでもないんですけれど、何だか變ですの。」

融は若い時分から、時々出逢つてゐるやうに急に、足の鈍くなつた彼女が今にも往來に倒れさうな氣がした。それほど彼女の顔色が蒼かつた。顔全體の輪郭や姿も淋しかつた。

「お前の顔色は大變に悪いよ。まるで死人のやうだよ。明朝醫者においでなさい。何を措いても乾度だよ。」融は語調に力をこめて、少し脅かすやうに言つた。勿論顔色が凄いほど蒼かつたことは事實だし、秋以來ずつと健康を悪くしてゐることも解つてゐたけれど、その言葉には兎角病氣を等閑にしがちな彼女を、少し驚かしておかうといふ氣持の方が勝つてゐたことは事實であつた。

融は持病もちの彼女の健康に、彼女自身より

以上の不安を抱いてゐた。もう二十年の餘も前に、産後その病氣が發生したときほどの歎きと恐怖は、それほどでもなささうな其の後の經過と醫者の診察とで、時々に薄らいでゐて、年月がたつにつれて、慣れてしまつてゐたけれど、でも融はひゞの入つた危つかしい瀨戸物か何かを扱ふやうな不安から始終離れることが出來なかつた。そしてその病氣に慣れて來て何うかするとまるで餘所事のやうな顔をしてゐる彼女を腹立しく思ふことすらあつた。

「自分一人の體だと思はれては困るぢやないか。この頃はちつとも醫者へ行かないやうだが、近頃新聞によく出てゐる、腎臟から腦溢血を惹起して死ぬ人のことを讀む度に、俺はぞつとするよ。」

融はついこの頃も、朝早く起きて、子供の辨當なぞの支度をして、疲れた體をして長火鉢の傍にすわつてゐる彼女を嗜めたことがあつた。頭のわるい彼女は、朝起きを昔から辛がつてゐたが、ごたつく臺所の音が耳に入ると、矢張寢てもゐられないのであつた。それに一度起きると、ちよつと横になつて體を安めると云ふやうなことが、絶對に彼女には嫌ひであつた。

「早起きしたときは、子供を出してから少し寢るやうにしたら可いぢやないか。」融はさうも言つたが、しかし融が心配して何か干渉がましいことを言つても、彼女はいつでも素直に、

「さうしませう。」と答へたことはなかつたし、格段融の言葉が耳に逆ふ譯ではなかつたけれど、彼女の氣分は、融がじれ〳〵するほど硬くてむづかしかつた。融は煩く世話をやくことを、控へなければならないやうになつた。勿論融が氣づかない時でも、利尿劑とか、處方によつた藥などを、そつと飲んでゐることもあつて、融が苛々するほど、づう〳〵しくなつてゐる譯でもなかつた。

その晩も、それほど氣分が惡くなかつたけれど、一晩熟睡すると、翌朝はまた、何のこともなかつた。そして不斷のやうに働いてゐた。それで其の翌晩もまた町へ出て行つた。

それから又一日おいて、親子は三人で暮の町へ出て行つた。別に大した買ひものもなかつた。化粧品屋で何か二三品彼女が買つただけであつた。

「どこかへ行かうかな。」融は途中旅へ出る自分を想像した。

「行つていらつしやいよ。」彼女も勸めた。

「餘り遠いところは可けないし、近いところは一杯だらうしね。」融は不決斷に言つた。

彼等は、いつもの家で、彼女の好きな鮨を食べに寄つてから、歸路に就いた。

途中融は思出したやうに、鞄屋の飾店の前にふと立止つた。

「一つ買はうかな。」彼は子供のやうに惹着けられた。

「お買ひなさい、お買ひなさい。」妻も贊成した。

「お父さんが使はなければ、僕が持つて歩いてもいゝや。」

「それも可いだらう。」

三人はぞろ〳〵鞄屋へ入つて行つた。そして品物の選擇に取りかゝつた。あれかこれかと三人で[illegible]詮議した果に、彼女の助言で、[illegible]その中の一つに決めた。さう云ふ場合の彼女の助言が、いつも不決斷な融の意志を決定させた。必ずしも彼女がいつでも好い買ひものをするとは決まつてゐなかつたかも知れなかつたが、よく物を買ひそこなふ融には遠慮のない助言が必要であつた。

融は何だか嬉しかつた。そして家へ歸つてからも弄りまはしてゐた。彼はそれを[illegible]、

ちよつと何處かへ行つて見たいやうな氣がした。

その折鞄をさげ出して、融が驛前のホテルへ行つたのは、その翌日の晩方であつた。融は年のうちに遣らなければならない小さい仕事が、まだ二つ三つあつた。それに最近持病の胃腸が又ちよつと可けなくなつて、暫くお粥ばかり食べてゐたので、何處か暖かい海岸の温泉へでも行きたいと思つたが、仕事の都合でさうもいかなかつた。彼はしかし健康は害してゐたけれども、氣分は寧ろ積極的に傾いてゐた。今迄やつて來た仕事や、現在の生活境地に或飽足りなさと空虚を感じてゐたので、いくらか根本的な計畫に取りかゝりたい希望に急立てられてゐた。そして其と同時に、自分自身の健康と妻の健康とを悉皆よくしなければならないことを感じてゐた。そして若し經濟狀態が許すならば、家庭を離れて、靜かな孤獨の生活に入りたいとも願つてゐたが、長いあひだ染みこんだ家庭の臭み——それは重に彼女特有の氣分や流儀から割出されたところの、決してさう無趣味でも不愉快でもないながらに、餘りに世俗的で外面的な仕事に煩はされがちなことや、一應目端がきいて、しつくり彼の氣分に合つて行くらしく思はれる、日常生活の底に、どこか本當に融け合つて行くことのできない、性格や氣質から來てゐる矛盾が、遂に何うすることもできないものであることに、氣づいて來てゐたからであつた。極端に言へば、彼女がほんたうに彼のものになり切つてしまつたのは、三年前腦溢血で死んだ彼女の母を失つてからだと言つてもいゝくらゐであつた。それでもまだ、小心で臆病で勝氣な彼女は、ほんたうに自分の兩手をひろげて、良人の胸に體を投げかけて來ることのできないやうな、それは遠慮といつて可いか、頑固といつていゝか、兎に角良人を信じ切ることのできない硬い感じが、彼女をひどく窮屈で哀れなものにしてゐた。そして何かにつけ人情ぶかい彼女ではあつたけれど、本質的な深みのある夫婦愛には觸れえなかつた。恐らく融も、長いあひだの色々の場合に於ける自己保存の必要から、對立的に自我的にならずにはゐられない事情もあつて、彼女が母を失ふまでは、本當に彼女をいとしむことが出來なかつた。

「M—は郵便を出すのに不便だし、熱海や湯ケ原も億劫だし、いつそ[illegible]の内だけでも[illegible]へ出て見ようかと[illegible]。

融は二三日前、東京へ出る度に、いつも泊ることにしてゐる、そのホテルへ來てゐるS—氏夫妻に或劇場でひよつくり逢つて、一緒に觀劇に行つてゐた子供の一人をつれて、歸りに銀座のふじ屋の食堂へ入つてから、ホテルへ同道して、その部屋で暫く遊んで歸つた。その時「暫くこゝへ來てもいゝな。」とふと考へたので、ちやうどS—氏夫妻も來てゐるし、原稿を出すのにも便利なので、ポオトフ　リオをさげて、そこへ行つてみようかと思つた。子供のないS—氏夫人は、その時融の子供を見て、大きくなつたのに驚いてゐた。

「お湯へお入りになりませんか。」夫人はお愛想に言つた。

融の長男は、何んな人中へ出ても、どんな豪い人の前へ出ても、俛いたり硬くなつたりするやうな事は、決してなかつた。餘り卑俗な人間でさへなければ、何んな年長者とでも話の調子を合すことの出來る性質に生れついてゐた。そして融が辭退したところで、夫人は子供に勸めた。

「さあ。」彼はにこ〳〵してゐた。

「今用意させましたから。」

「さうですか。それなら入つても可いですが……。」

　後でS―氏の子供觀が出たりしたが、融は子供と一緒であつても、少しも父親らしいぎごちなさを感じなかつた。

　そのホテルで一週間ばかり書いたり談じたり讀んだりしようと思つて、彼は家を出て行つた。

「年越しには歸らうね。元旦の雜煮も家で食べるからね。」

「貴方が留守だと人も來ませんし、私も樂ですから。」妻もポオトフオリオに物をつめてゐる融の子供らしさを可笑しく思ひながら、笑ふこともできなかつた。

　兎に角彼は人目にかゝらないやうに、階段の設備のあるところが必要であつた。

　室を極めてから、彼はS―氏たちの部屋の戶を叩いた。戶が開いたところで、ぬつと顏を入れると、夫人は今湯から上つて、浴衣一枚であつたところで、ベッドの上に體を竦めてしまつた。融はあわてて廊下へ出た。

　暫くすると、夫人が着物を着かへて來た。そして脚本が上場されることについて、S―氏が劇場へ行つてゐることと、間もなく歸るであらうことを告げた。暫く話してゐるうち、夫人が、

「食堂へ入らつしやいませんか。」と言ふので、融も、

「行きませう。飯を食べて來ましたが、しかし紅茶くらゐなら。」

　案內役の夫人について、やがて融は食堂へおりて行つたが、時間がちよつと早かつたので、ホールで待つことにして、隅の方の椅子にかけた。融は彼自身と反對に子供に係累のないS―氏夫妻が、滿洲の家を閉め切りにして、大晦日だといふのに、東京へ出て來て、二人でホテル住ひなどしてゐる境遇が、如何にも羨ましくて仕方がなかつた。さう云ふ生活も餘り幸福なものでないことは、時々S―氏から聞かされたことだが、融のやうな家庭の囚となつてしまつたものには、それは寧ろ贅澤の沙汰だと云ふ氣がした。

　食堂の時間が來たところで、夫人は自分の食事の序に、融にも何か取つて、葡萄酒などを注がして待遇したが、その間に劇場の良人へ電話で融の來たことを通じたりした。

　間もなくS―氏が歸つて、食堂へやつて來た。そして食事をしながら、例の快活な調子で、舞臺の苦心の話などした。

　食事がすむと、又ホールへ出て煙草をふかしたが、夫人の發言で三人で銀座へ行くことになつた。

「行きませう。」夫人が言ふと、

「さあ。」S―氏は目を瞬かしたが、「昨夜は大變だつた。尾張町附近はまるで身動きが取れない。何が面白いんだか知らないけれど、外に行くところがないからな。」

　やがて四階へ外套なんか取りに行つてから、揃つて外へ出た。融はいつもの癖で、さうかつてゐても、やつぱり家のことが氣にかゝつたり、暮に書いた作品に對する不滿があつたりして、創作興味の緊張し切つてゐるS―氏の生活と藝術とがぴつたり一つのものになつてゐるのに比べて、餘りに自己分裂の多い生活の煩はしさに堪へ切れない自己を持てあまさずにはゐられなかつた。

　銀座はその晩も、步行が困難なくらゐ人出が多かつた。融は人込みの雰圍氣が好きであつたが、家のなかの氣分も惡くはなかつた。そして無數な肉體を歩きながらも、自分の子供達と同じ年齡時代の青年達などの愉快さうにぞろぞろ歩いてゐるのを見ると、何だか遠ひの人間

のやうな寂しさをすら感ずるのであつた。
「あゝ、あれが暮の銀座へ一度行つて見たいと言つてゐたつけ。」
融はふとそんな事を思ひだした。するとずつと以前の或る年の大晦日に、彼女と二人で此處へやつて來て、春の贈りものの半衿などを、彼女が選つてゐたことなどが思出されて、妙に氣が滅入るのであつた。
「どうせ春になれば、どこかへ行くつもりだ。來年は二人で伊勢へでも行かうかね。それから京都や大阪も見せてやらう。行かないかい。」
融はつい此の頃の晩も、そんな事を彼女に話した。
「え、よし子をつれて行ければね。」彼女は答へたが、餘り氣も進まないらしかつた。
「行つてらつしやい。」長男も傍から勸めた。
しかし二日でも三日でも家を棄てて夫婦で旅などして歩く氣分になりうる彼女ではなかつた。最近母を失つてからは、一層さうであつた。
母を失つてから、いつも淋しさうにしてゐる彼女を、融は痛ましく思ひながらも、弱くなつた彼女を勦りうることに、寧ろ今までにない年取つた夫婦の暖かい愛を感じうるのを悦ばずにはゐられなかつた。彼女は數日前も、彼女と子供と三人で、彼女の好きな文樂を淺草に聽きに行つた。家では頭から爪の先まで、彼女の世話になつて駄々つ兒のやうにふるまつてゐる、我儘一杯の融ではあつたけれど、一歩外へ出ると、今度は反對に持病のある彼女を、心持そつと勦らなければならない立場にあつた。その日も、融は粗雑な敷物のうへを上草履なしで歩いてゐる彼女が、その敷物を氣味わるがつてゐることを知つた。
「草履を出さないのは困りますわ。足が冷いんですよ。」
「さう。ぢや僕が草履買つて來てやらう。」融はさう言つて外へ出て行つた。そして可なり遠いところまで行つて、上草履を一足買つて來た。
「好いのがないんだ。」
「上等ですわ。これなら暖くて……。」
「スリッパがよかつたかな。」
「いゝえ結構ですわ。有難うございます。」彼女は嬉しさうにお禮を言つた。
そして一晩親子三人で大阪淨瑠璃を聽いて歸つた。そんな事もあつた。
「それあ、よし子をつれて行けば安心だけれど、大變だぞ。五日くらゐ可いぢやないか。」
「さう行きたいと思ひませんね。勿體ないですもの。子供がもつと大きくなつてから……。」
彼女は矢張氣が進まなかつた。
「子供が大きくなる時分には、此方が年を取りすぎてしまふ。」融は言つたが、病氣のある彼女が、長い旅に堪へるか何うかは不安であつた。
彼女が行くと言つても、融がつれて行つたか何うかは素より疑問であつた。彼の頭腦は最近殊に忙しかつた。行樂的な旅などする餘裕はなかつた。ホテルへ來る前の晩か、その前の晩かにも、彼は不斷のやうに、家庭の年末氣分とは全く離れた、彼一人の世界を考へてゐた。
「お餅を切つてくれませんか。」
ホテルへ立つ前の晩にも、餅を切つてゐた妻がいきなり融に言つた。不斷なら切つてやらうと言つても、後で手がふるへるのを案じて、切らさない彼女がどうしてそんな事を言つたかは、其の時の彼には全く氣のつかないことであつた。
「笑談ぢやない。おれはそれどころぢやないんだよ。」
融は讀みたい本を少しづつ集めようと思つ

て、その晩も子供をつれて、本屋を漁りに出た。妻も買ひものがてら從いて來た。

銀座から歸つてから、融はS――氏夫妻の部屋で、二時間も話しこんでしまつた。翌朝もS――氏夫妻と時に顔を合したが、重に新聞を覗いたり、雜誌を讀んだりした。晩には夫妻にさそひ出されて、風月の食堂へ行つた。

「やつぱり風月がいゝのかね。」

「何うだかわからんが、M――なんか一番旨いと言つてゐるね。あの連中は西洋にゐて、洋食の味は知つてゐるだらう。××屋（俳優）もよく行くよ。」

「僕も久しく行つてみないから――」

三人は自動車を傭つた。S――氏夫妻の生活振が、最近可なり餘裕のある幸福なものになつてゐることが、融にも感じられた。それも子がないからだと思はれた。彼は子供を多勢もつたことを、不仕合せとも仕合せとも考へなかつた。たゞさういふ風に運命づけられた自分の生活だと思ふだけであつた。自分のやうに何時までたつても子供つぽい人間には餘りふさはしい運命だとは思へなかつたが、子供で苦勞して來た自分が、眞實の自分だといふ感じもするのであつた。

「S――に多勢の子供をもたせたら。」融はちよつと皮肉な考へを浮べて見たりした。

兎に角子供をもたないS――氏の前では、自分が弱者であることを感じないではゐられなかつたが、それも世間的生活だけの意味であつた。事によると、それは單に經濟的な問題であるだけで、さう本質的なものではなかつた。

自動車の窓にうつる日本橋や京橋の大通は、昨夜と同じく人の海であつた。

風月の食堂ではS――氏夫妻はお馴染であつた。融は幾年目かで來たが――無論震災で昔の建ものは燒けたにしても少數の御定連に旨いものを喰はせる家だといふ落着いた感じがあつた。大晦日のことで、客はさう立てこんでもゐなかつたが、三人ばかりの子供をつれた、四十三四の紳士夫妻が、こゝで年越しの晩餐を樂しんでゐるのが、何となし融の目を惹いた。融は今頃家でも、妻の拵へた煮しめで、子供たちが打揃つて年越しをしてゐるだらうと思ふと、その方が旨く味へるやうな氣がした。大きい方は銀座でも歩いてゐるかもしれないと思つた。兎に角彼は家庭人の悲哀と言つたやうな氣分に頸いたやうな感じであつた。實際彼が家庭人か何うかは疑はしいので、今目の前に見る紳士のやうな愉樂は、感じてゐないのであつた。むしろ人間的な悲哀が、彼を繋ぎ止めてゐるに過ぎなかつた。

「これは旨いんだらうかね。」融はカリーフラワを食べながら言つた。

「こんなもの些ともおいしくはありませんわ。」夫人は若い娘のやうに言つた。

「こゝは一番レファインされた料理なんだらうが……。」

食事がすんでから、ストウブの傍でお茶を飲みながら料理の話をした。

「こゝのビステーキが有名なんださうだ。」

「ビステーキは確かに好いな。まあ食つたあとの腹工合の好いところを見ると、料理の好いことだけはわかるやうだ。さういふ點が好いんぢやないかな。」

それから其處を出てから、銀座へ出た。途中で近代畫の額緣からでも出て來さうな洋裝のH――氏夫妻に出會つた。連中がライオンへ來てゐることを、H――氏は告げたので、融もライオンへ寄つて、H――夫人達としばらく話をしてから、

やがて其處を出た。

元日の朝が來た。

融は少し寢過ぎて、時間がおそかつたけれど、約束がしてあつたので、電車で雜煮を祝ひにわざわざ家へ歸つた。雜煮は彼自身の好みで、いつも其に決めてゐるので、それでないと寂しかつた。

家へ歸ると、子供たちの多くは、もう屠蘇と雜煮を祝つたあとで、臺所も一片着けすんだところであつた。妻はちよつと億劫さうな顏をして、彼の來たことを、さう悅ばなかつたが、ガスに點火して支度に取りかゝつた。

「どうしたんだ、又子供と喧嘩でもしたのか。」融は不平さうに言つた。

雜煮の鍋を仕かけてゐる彼女の顏が、不斷でも蒼くあるやうに、その時も滯んだ色に少し脹んでゐた。でも、融は氣にもかけなかつた。彼女もいくらか元氣づいて來た。

風呂から上つて來た、十七になる愛子が、今にも消え入りさうな呻吟聲を立てて、緣側まで來て、ぐた〳〵と倒れた。融はあわてて妻を手傳つて寢床へ抱きこんで介抱した。

「逆上せたんですよ。」妻はさう驚きもしないやうに言つた。

愛子は間もなく顏色が出て來て、口もはつきり利くやうになつた。そこへ年始の客が來た。妻は愛想よくそれを迎へて、屠蘇の道具やお重のものなどを運んで煮ものを取配けたりした。部屋は例年のとほりに、狹いなりにきちんと片着いてゐた。

その客が歸つたのを機に、融もホテルへ歸らうとした。

「え、貴方は忙しいんだから。」彼女も言つた。

融は彼女が疲れてゐるのに氣づいてゐた。歸つてしまへば、後で寢るであらうことを期待しながら、第二番目に來た回禮者と前後して、表へ出た。そして忘れた藥や何かを取りに、一度ばかり小戻りしてから、急いで大通へ出た。

ホテルへ歸つてみると、S氏は卓子の前にかけて、一心に何か書きはじめてゐた。顏が緊張してゐた。融は部屋へ歸つて、雜誌を讀みはじめた。

その晩彼はS—氏夫妻と、帝國劇場へ行つたが、何か落着かない氣分であつた。愛子が若し可けないやうなら、ホテルへ電話がかゝるだらう、さうしたら此處へしらしてくれるだらう。彼はそんな事を考へながらも、いくらか珍らしい劇場の空氣に浸つてゐた。

翌朝彼ははけたゝましい電話のベルに呼び覺まされた。劇場から歸つた彼は、疲れてぐつすり寢込んでしまつたので、あわたゞしい其のベルの音の震動を耳にしながら、やゝ暫く其れがどこで鳴つてゐるのかを意識しなかつたが、ふと愛子のことが、仄かに頭腦に浮んで來たので、慌てゝベッドから辷りおちるやうにして、卓上電話にかゝつて行つた。

「もし〳〵。」彼は夢現のなかで呼びかけた。

「お父さんですか。僕ですが……お母さんが惡いんです。何うも腦溢血らしいんですが……。」

融は遽かに暗い氣持になつたが、腦溢血といふ言葉を其まゝに受容れることは困難であつた。

「ぢやね、今直ぐ歸るから、誰か好いお醫者を一人呼んでおいてくれ。」融は顫へる聲で、好い醫者に力をいれた。

融は大急ぎで、しかし割合に落着いて、着ものを着たり、折鞄に紙や萬年筆を仕舞ひ込んだりして、別れをS—氏に告げに行つた。S—氏はもう床を離れて、窓ぎはで仕事に熱中してゐ

た。
「家内が病氣ださうで、僕これから歸らうと思ふ。」融がいふと、
「さう。すつかり引揚げるですか。」S―氏も無論それほどの事とは思はないらしかつた。
融はそれから又一旦部屋へかへつて、下へ電話をかけて、會計と自動車を頼んでから、外套や衿卷をして、力ぬけのした足で、エレベータの乘り場へ出て行つた。
下へおりると、S―氏夫人が、もう其處へ出てゐて、口數は利かなかつたけれど、悲しげな目をして彼の降りてくるのを待つてゐた。融は滯在を略一週間ときめて部屋代を拂つてあつたので、殘り分の金を受取つて、しばらく自動車の來るのを待つてゐた。
「小型がよろしいんでせう。」夫人はさう言つて、二度ばかり出口までおりて見たりした。
靜かな朝の町に、初荷の荷馬車や、貨物自動車が動いてゐた。融は苦い經驗があるので、病氣といふと醫者の不快を買ふまでも、大騷ぎをする癖がついてゐた。で、その時も腦溢血といふ言葉を、そのまゝ妻の現在の病氣に引直して考へることは出來なかつた。それは劇場や電車のなかなぞで、[illegible]になつて仆れたことが、若いをりから三四回もあつたからで、今度も多分それだらうといふ氣がしたが、しかし其れにしても何時ものより重いと云ふ感じが強かつた。そして町が春氣分に耀いてゐただけに、彼の氣分も一層暗かつた。
家へ飛びこむと彼は部屋の隅にあつた座蒲團のうへに、折鞄を投げ出して、そこに横はつてゐる妻を見た。妻は彼の裏の家にゐるT―氏の夫人に介抱されて、靜かに目をつぶつて寢てゐたが、眠つてはゐなかつた。掛りつけの醫者のG―氏と、T―氏が融の机の傍に火鉢に當つてゐた。
「今ね、電話でお歸りを止めようとしてゐたところです。」
さう言つて皆が割合何でもなささうな顏をしてゐるので、融は出鼻を折られて、遙かに頭腦が輕くなるのを感じたが、決して樂觀はできないといふ氣がした。
「さうですか。心配ないんですか。」
「大丈夫ですよ。靜かにしておけば、落着きますよ。」G―氏は事もなげに言ふのであつた。
融は何だか安心出來ないやうな氣もして、そのまゝ火鉢の傍にすわつて、ホテルの話などしてゐるあひだも、時々G 氏にきいた。
「誰か一人呼ぶ必要はないでせうか。」
「いや、いつものあれですから、心配はないですよ。」G―氏は言ふのであつた。
融は腦溢血の危險なこと恐ろしいことは、十二分に分つてゐたけれど、診斷がむづかしいものだとは思はなかつた。で、今朝お雜煮をしまつたあとで、何時ものとほりに長火鉢にすわつてゐた彼女がふと嚔をしたところで、頭がぴりりと痛んだ。そして洟をかむと、痛みが一層強くなつたと同時に、顏の色が變つて體が崩れさうになつた。子供があわてて、背後へまはつて介抱しようとした時には、彼女はもうぐつたりとなつてゐた。
融は、ぼんの窪のところへ手をやつたり、鼻と耳のあひだを痛がつたりしてゐる彼女の狀態に不安を感じながら、割合醫者に信賴してゐたところもあつた。彼女は後腦のあたりに、ざくざく針が刺つてゐるやうな感じがしてゐるらしかつたので、何うやら腦溢血らしいと云ふ氣もしたが、それにしては口も利けるし、手も動くので、やつぱり醫者を信じていゝやうにも思つた。
「まあ夕方までかうやつておいて下さい。」G―氏は間もなく歸つて行つた。

融は病床へ寄つて行つた。

「何うだね。」

妻は目と顳顬のあたりへ手をやつて、痛みを訴へた。

「いつもとは違ひます。」彼女は低い聲で言ふのであつた。

融の頭は腦溢血だと云ふ直感が大部分を占めた。

「急いでM—博士を呼んで來てくれ。」彼は長男に命じた。

長男は出て行からとしたが、急に又彼女が止めるやうに何か言ふのであつた。そして同時に便通を訴へた。

「ぢや、ちよつと待つて。」融は子供に言つた。そして女中に便器をもつてくるやうに命じた。

「ぢいつとしておいで。大便は僕が取つてあげるからね。動いちや可けないよ。」

さう言つてゐるうちに、上半身を擡げた彼女は、苦しげな歪んだ顔に嘔吐を催して來たことを告げた。小さな洗面器が、持ち來されたところで、彼女の口から濁黄色をした惡いものが、だら〳〵と吐出された。そして吐いてしまふと、

「私もう駄目です。」と言つて、ぶる〳〵頬のあたりを顫はせながら、枕のうへに仆れた。が口籠つてしまつた。目もあがつてしまつた。

それを見ると融は遽かに大變だと云ふ氣がした。そして「早くM—さんを……それからG—さんにもさう言つて。」

G—氏が來て、一本注射をして間もなく、M—博士もあわたゞしい樣子で驅けつけてくれたけれど、何にもならなかつた。恐らく彼女はそれから一時間ともたゝなかつたであらう。そして其が彼女の生涯の終りであつた。

「毆られるあいつ」を觀る

「毆られるあいつ」はアンドレーフのなかでも傑作の方だらう。「毆られるあいつ」（人物の名）のやうな、あんなに壓迫された人間が、そして又、それを東洋風の忍從的でもなく、拗ねてゐるのでもなくて、曲馬團なぞのなかへ入つて、毎日毆られて生きて行くと云ふのは、空想もできないほど變な生活である。普通人には迚もあり得ない自己生存否定で、しかも必ずしも否定してゐるのではなくて、心持のうへでは立派に生きてゐるところに、この脚本の愉快さがある。その男がサーカスのスターで、無邪氣であると同時に、一個の美しい偶像にすぎないところの無智な女に愛をさゝげて、彼自身のローマンチックな氣分に陶酔すると同時に、女をメスメレズム的に、そこまで釣りあげようとするあたりは、迚も日本人なぞには企て及ばないところだが、それが概念でも抽象でもない。「毆られるあいつ」自身の實際の氣分として描かれてゐるのは、すぐれた腕だと思ふ。この男が、姦夫を侮辱するのは何うい ふものだらうか。自分の學問を偸んでそれを通俗化して、偉くなつてゐる、あの人格の卑しい姦夫に對する輕蔑の仕方は、曲馬團へまで入つて、自己の存在を晦ますことに、不思議な興味と滿足をもつてゐる彼としては、やゝ超越の仕方が至らないと思ふ。從つてあの劇の痛快味を殺いでゐるやうに思ふが、あの方が西洋風で、人として自然かも知れない。

元の枝へ

一

雙方の子供のことで融と衝突して、自分の子供をつれて、ほんの化粧袋と、大分古びのついた金絲などのきら〳〵する手提とを持つて、このあひだ子供を繼母の手から取るために暫く歸つて行つてゐた田舍の家で、母に拵へてもらつたばかりの、ちよく〳〵着の大島の羽織を着て、不斷はあんなに肌ざはりの柔かい、そして無邪氣で子供つぽい娘のやうな愛子も、自分の正義が少しでも枉屈されたと感ずると、すぐあんな風に神經がぴり〳〵して、鐵砲丸のやうに家を飛出してしまつてから、融は初めて自分がぼんやりしてゐる間に、足下から鳥がたつたやうな狼狽を感じたのであつた。

神經衰弱の發作とも言ふべき、しかもそれは融の持前のぼんやりさで、その時はすぐそのことの意味がわかりかねて、少したつとそれが段々批判的に解つて來る彼のことなので、愛子が今朝から融の側についてゐる融の機嫌を直さうとして、色々に氣をつかつてゐたにかゝはらず、何の意味もなしに、子供のやうに拗ねてゐるあひだに、多勢の融の子供たちのものである窮屈な家庭のなかに、繼母の手から漸く奪つて來たばかりの子供をつれて來てゐる彼女の微細な心遣が、子供をおいてやることが、何か愛子に對する面惡であるやうにでも思つてゐるとしか考へられない融に汲取れなくて、今朝の樣な態度に出られたことが、彼女自身の不滿と正義感を極度に激發してしまつて、融の前に長いあひだ號泣してゐた果に、到頭飛出してしまつたことが、今まで眠つてゐた融の頭腦に漸くわかつて來た。その事の是非は兎に角として、そんな激烈な感情の持主であることを、融は全く知らずにゐた。

若しかしたらと思つて、それとなく搜しに入つたM雜貨店にもゐなかつたところで、失望してそこを出て來た融の頭腦に、昨夕からのことが、初めて明瞭に浮んで來て、その時はさうも感じなかつた、ぴしつと彼の心を搏つて來た愛子の痛烈な言葉や、女らしい優しい囁きや、好子をだいてぢつと思案してゐた姿などが、はつきり思ひ出せて來た。

融は好子の手をひいて、すご〳〵家へ歸つて來た。そして机の前にすわつてぼんやりしてゐた。今し方まで洗面器に水を取つてくれたり、朝飯の給仕をしながら、そこにこちんと坐つて、箸を取つてゐる好子に、笑顏一つ見せることもできず、お愛想一つすることもしてくれない融のお給仕をしながら、幾度も臺所へ涙をふきに行つたり、融の談話筆記を見てくれたりしてゐた彼女のいぢらしい姿が、まだそこに在るやうな氣がした。勿論一旦厭になると、ぴしりとした態度で、弦を放れた矢のやうに思ひ切りよく離れて行く彼女であることは、融へ來るまでの外の場合の彼女の態度でもわかつてゐたけれど、あれほど自分に馴れ懷いて、何んなことがよしあらうとも離して行きさうには見えなかつた彼女が、迅雷耳をも掩ふに遑のない勢で出て行かうとは、思ひも設けなかつた。

融はまだ子供を引取らない前、愛子が出たといふよりは、融自身が彼女の自決を促したときと、それから今一つ、融が飛出したのと二つの場合の愛子を想出してゐた。

それには融がちよつとしたことで、子供らしい拗ね方をして、或夕方ふいと家を出たのであつた。勿論さう本質的な諍ひではなかつた。融の大きい子供の芳太郎が、その時妙に浮ついた調子で、彼女を或る劇場見物に誘つたことから、事件が、起つたのであつた。

「芳太郎さんが××劇場へ行かうと言つて下さるんですの。私先生と一緒ならいゝけれど、折角言つて下さるもんですから、行かないのも悪いでせう。お友達にお約束なすつたやうな様子なの。」

そんな話を二三日前から愛子が問題にして、二度ばかり融の顔色を覗つた。融は別に何とも言はなかつた。子供がそんな風に愛子に好意をもつてくれることは、彼も不愉快ではなかつた。しかし友達のなかへ愛子を引張り出さうとする動機には、何か知ら愛子に對する悪戯な企てが巧まれてあるやうに感じられた。彼は今漸と色々の風評が少し落着きかけて來たばかりの愛子が、そこいらをぶら／＼歩くことを快しとしなかつた。それに本質的には相當の思慮をもつてゐることは信じても可いとしても、背廣などを着込んで、銀座邊をぶらついてゐる芳太郎が、そんな事で浮つき出しては困るとも思つた。見かけによらない、ひどく大人ぶつたところのある愛子が、寧ろ一時的に青年を面白がつてゐることもわかつてゐたし、「先生は御自分のお子さんだからさうお思ひになるんでせうけれど、そんな気持があるなら、世間にずゐぶん澤山の若い人がゐるぢやありませんか。」などと言つてゐることも、彼女が人が思つてゐるほど、戀愛を遊ぶ女でなくて、事實はむしろ其の反對に、反つて實質を擇ぶ彼女であることを證據だてるくらゐだつたけれど、融は何うかすると、危險を豫想したり、家庭悲劇を頭腦に描いたりすることがあつた。

「これには私も困る！」愛子はさう言つて、困惑の色を浮べた。

「現代の、殊にあの學校の學生なんて、みなあゝなんですよ先生。そんな悪気なんて少しもありやしないのよ。たゞ若い女性が家庭にゐるといふことが、悪い感じがしないといふだけなのよ。先生もまさか本當にさう思つていらつしやるんぢやないでせうけれど、私も困るのよ。二人のことをよく解つて下さる芳太郎さんの感情を害しちや、立場に困ることもあるのよ。」

愛子はさう言つて自分を辯解したり、芳太郎を辯解したりしなければならないほど、何うかするとその頃の融は苦しんだ、[illegible]にとらはれたが、わざとさうした気分が高調に達してゐた頃であつた。

すると當日その時間少し前になると、行かうか行くまいかと迷つてゐた愛子が、何う決心していゝか判らなかつたので、困惑した表情で融のそばに寄つてゐるところへ、其の室の方に長男と二男の、帽子まで冠つて出るばかりにしてゐる、そは／＼した姿が往つたり來たりした。

「私困つてしまふわ。何うしたらいゝでせう。」

「行きたければ行けばいゝぢやないか。己は行つちやいけないと言つてやしない。」

「でも先生がお厭なら……。」

「厭ぢやないけれど、友達も行くといふのだつたら、ちよつと警戒しなければね。きつと皆で君を揶揄はうと言ふんだらうから。」

「それなら先生が、つれ出しては可けないと言つて下さると、私もお斷りはしいゝんですの。親爺なんかいゝんですよなんて言つてゐらしやるから。」

さう言つてゐるところへ、中折を少し阿彌陀に冠つた人の好ささうな表情をした芳太郎が、襖の蔭から手招きで「お出で／＼」をして見せ

た。

融は愛子が侮辱されてゐるのを感じた。

「何だ。手招きしたり何かして、何だと思つてゐるんだ。」融は不愉快さうに言つた。そして愛子の顔を見ると、行きたさうにも思へるのであつた。

「行きたいんなら行くといゝ。歸りに不二屋なんか入られちや困るけど。今は大事の時だから――行かないのも可笑しいからな。」

愛子は支度でもするつもりか何うか判らなかつたけれど、やがて融の傍を立つて茶の室の次ぎの部屋へ入つて行つた。そこには蝶子や美代子や、男の子供たちもゐた。芳太郎がまるで父を無視したやうに、連りに二男とふざけてそこいらを徘徊してゐた。

融は奥の室へ行つて見た。

「行くんなら行つてもいゝんだよ。」融は少し怒り氣味で言つた。

「だつて先生が決めて下さらなくちや。」

「君の氣持で決めた方がいゝんだ。己は君を束縛しようといふんぢやないんだ。」そして子供たちに向つて、

「お前たちは一體何うしたといふんだ。己は眞面目なんだ。愛子は當分餘り外へ出したくないんだからね。」と脅かすやうに言つた。

惡氣のない彼等は、驚いたやうな顔をして、少し退つて融の眞劍立になつた顔を見てゐたが、やがて外へ出て行つた。三四日たつてから判つたことであつたが、彼等は、懐の溫かい――その頃愛子の懐に、ちよつと、思ひがけなく大きく纒まつて、田舎から送られた金のあることを、しつてゐたので、彼女にうんと奢らせるつもりで、事によると舶來のネキタイでも買はせるつもりで、銀座あたりへ誘ひ出さうとしたのであつた。が、孰にしても融には同じ結果であつた。

多分近所へ球でも撞きに行つたらしい子供たちは、暫くすると勉強室に當ててある裏の彼等の家へ歸つて、樂器なんか弄つてゐた。電燈がついた頃で、明るい快活な彼等の話聲が庭ごしに聞えてゐた。それで先づ何のこともなく收まつた譯であつたが、融は何となくさつぱりしなかつた。愛子がゐるために、彼等の浮つくのも困ると思つたし、彼等のために折角新生活に入りかけようとしてゐる愛子が、踊り出すやうでも困ると思つた。

「少し噂の鎭まるまで、自重してゐてくれなくちや困る。子供なら、安心だけど、世間では變に思ふぢやないか。」

「だから私は行きたかないんですの。私をそんな女だとお思ひになつて？」

「でも君の態度がもつとちやんとしてゐたいと、子供たちにまで揶揄はれるぢやないか。」

「それあ先生、さう云ふ意味ぢやないんですの。今時の若い人達はみんな[illegible]さんや何か連れて歩いたり、若い女と一緒に喫茶店へ入つたりなさるんですの。大きい人達の御機嫌を損ねると、空氣が險惡になつて居辛くなるぢやございませんか。」

「君自身の判斷をもちたまへ。一々己にきくんぢや困る。」

感情が少しこぐらかつて來た。そして愛子の所謂小言の出て來た融は、「[illegible]い、[illegible]」と外套[illegible]とぷり〳〵した調子で、支度をすると、そのまゝ家を出た。

傍にはら〳〵してゐる子供たち[illegible]なかつたら、愛子は隅の方へ融を引張りこんで行つて、いつもするやうに、きつと[illegible]を抱きしめて、[illegible]情を釋すのに、さほど骨は[illegible]なかつたのであらうが、その時は子供たち[illegible]一緒にゐたので、彼女は玄關口の柱の[illegible]に立つたまゝ、默つて見てゐた。融は亡くなつた妻の[illegible]うに、背

筋立つて我張つてゐたり、全く敵對的態度に出たりするやうな、片意地さの少しもない愛子のさうした態度を見ると、出て行くにも張合がなかつた。何んな場合にも、眞から融を怒らせてしまふやうな厭な氣質は彼女のどこにも見出せなかつた。たゞ正當と思ふことを主張する場合の強さには、妥協性がなかつた。

融はぢつと見送つてゐた愛子が氣にかゝりながらも、いくらかせい〳〵したやうな氣持で、さつさと電車通の方へ歩いて行つた。晩春の宵で空氣はおどんでゐたが、町の灯影には何となし潤ひがあつた。そして三丁目から切通へ出て、廣小路の交叉點近くまで、ぶら〳〵と、しかし可なり迅い足どりで、久しぶりで落語でも聞かうと無意識に決めてゐたらしい方向の取り方で、すつすと歩いてゐた。

すると或る化粧品店の前を通つてゐるとき、脊のすらりとした一人の女が、いきなり肩が擦れあふばかりに後からやつて來て、すい〳〵と先を切つて歩いて行くのに氣がついた。看ると鼠色の横縞の、融の氣に入つてゐた縮緬の不斷羽織を無造作に着流して、フェルト草履をはいた其の後姿が、何だか後から來さうな豫感もしてゐた愛子であつた。

融はしかしちよつと狼狽した。そして愛子が五六間ばかり行つたところで、片意地にふと立ち止まつた。

「古い先生がまた出て來ましたね。」

よく愛子にさう言はれる融の癖であつた。「自然主義的否定」、「硬い小さい殼」、「ひねくれ根性」、「片意地な僻み」、そんなものが纏れて、美しい殉情や、ロマンチックな戀愛や、センチメンタルな憧憬やに生きようとしてゐる若い愛子によつて「古い先生の影」といはれる小癖であつた。そしてそんな點では、亡くなつた妻との長い同棲生活によつて、すつかり硬い殼となつてしまつた生活の苔のやうなものに封されてゐた融の感情も、愛子の若くて高い情操によつて、いくらかづつ釋し熔かされて行くやうな氣がするのであつた。婦人觀や社會觀などについても、はつきり知識的に自覺しながらも、氣質や體驗から來たイプセニズムが彼女の體に流れてゐることは看遁せなかつた。柔かい婉美な感傷的な情緒のなかに包まれたものは、花火のやうな彼女の情熱と性格の強さとであつた。纖細な鋭い神經が、それに繋いでゐた。小節にかゝはらない、男性的なこんな氣概のある女を、融は嘗て見たことがなかつた。

融は暗い横町へ姿を消さうと思つて、ちよつと踵を返したところで、立止つて後を振返つてゐる愛子に氣がついた。融は仕方なしに美術商の飾窓の前に立つて、見たくもない新畫や彫刻を見てゐた。すると其處へ愛子も寄つて來た。

「先生。」愛子はいつもの調子で呼びかけて、

「私足袋もはかずに、こんな身裝で飛出して來ましたの。先生を見はぐつちや大變だと思つて。どこへ入らつしやるお積りでしたの。」

「どこと云ふ當もないのさ。仕方がないから暇つぶしに寄席へでも入らうかと思つて。」融はその上小意地の張りやうがなかつた。

「さうつ。私寄席も嫌ひぢやないんですの。」

「行つたことある？」

「え、××屋にゐるとき。」

「誰と？」

「女中とだわ。」

「入つてみない？」

「入つてもよござんす。」

「一時間ばかりね。」

しかし彼女は餘り氣が進まないらしかつた。都會生活といつても、前後一年と少しばかりしか東京の空氣を吸つた譯ではなかつた。それ

も下宿か旅館で過されたのが、大部分で、都會の家庭生活にも享樂にも丸きり不通だといつても可いくらゐであつた。おほまかな田舍の家庭で、たぷ／＼した物資生活に育つて來た彼女の目には、都會化された人間ほど、都會ずれのした賢さをもつてゐるとしか見えなかつた。普通の大きな劇場は又單に衣裳を見せびらかしに行く子女の歡樂場としか思へなかつた。

明るい廣小路を、二人は肩をならべて歩いた。今夜に限らず、融は人の目を惹く愛子と竝んで歩くのが、何となく極りが惡かつた。これがもつと氣兼ねなしに一緒にあるけるやうな年頃の女だつたら……と彼は出る度にさう思つた。しかしそれにも段々狎れて來た。

寄席の前へ來た。しかしそこへ入るには、何んとなし愛子の氣分が相應はなかつた。融も愛子と一緒に、そんなだらけた娛樂場へなぞ入るのが、詰らなくなつて來た。

「何うしようかな。」融は躊躇した。

「先生。」愛子は呼びかけた。

「それよりか、今夜鏡を一つ買はうと思ふの。」

「鏡臺！」

「資生堂と思ふんですけれど、この邊で買つても可いの。やつぱり箪笥と鏡臺ぐらゐは自分のをもつてゐないと、子供さんが御母さんのものを使はれるなんて、變にお思ひになるらしいの。外の方はさうでもないけれど、鐵三郎さんが、それは煩いの。」

「あいつは仕樣がないな。」

「いゝえ、それは子供さんのことだし、別に惡氣はないんですけれど、何だかお茶もらひと言つた形で、私も辛いんですの。結婚すれば母もちやんとした支度はしてくれると言つてますのよ。それはそれとして、先の奥さんのものは、一つでも使ひたくないと思ふの。」

「お金があるの。」

「こゝに持つてゐますの。」

「引出したの。」融は咎めるやうに言つた。

「えゝあんなお金なんか、使つたつていゝんですわ。」

「可けないな。」

「でも本當に入るものだけは、何うしても買はなければなりませんもの。その代り着物と羽織とを、もう二三枚も落着いた地味なものを作れば、あとは何にもほしかありません。」

「それぢや、仲町にそんなものを賣る家がある。上物ばかりもつてゐる家だ。Tさんが取りつけの……。多分鏡臺もあつたと思ふ。」

Tさんといふのは、融の親友の、先の大きいブルジョアであつた。融は時々Tとこの邊へ散歩に來て、そこへ寄つたことがあつた。

「さう。それぢやそこでも可いわ。」

二人は明るい物綺麗な店のならんでゐる、賑かな狹い通へ入つて行つた。

藝者町にちかいその邊の店では、もう浴衣地なんかが出てゐて、愛子が融のために、一反自分で見立てると言つてゐたところから、そんな店をも覗いたりした。そして其の店で、下町の女がもつやうな夏向きの布の手提を一つ見つけて、買ひさうにしてゐた。

「およし、そんなもの。」

「でもあれは十分憊れてゐますし、芳太郎さんがずゐぶん汚くなりましたねつて言つてゐましたから。」

「そんなものはお止し。」融は頭ごなしに言つて、連れだしてしまつた。

それから福神漬など買つて、目ざして來た、色々な凝つた家具類をもつてゐる店の前へ來たとき、飾店に一つの桑の鏡臺の出てゐるのを、二人で暫く見てゐた。

「先生、私こんなんでなしに、丸いのがほしいんですけれど、でも其方に行くのが面倒だから、これでも可いわ。」
「ぢや入つて見よう。」融はさう言つて、ずんずん入つて行つた。
「鏡臺を一つ見たいんですが。」
すると愛子は傍から、「鏡が好くなくちやあ。」
番頭たちによつて、鏡臺が大小二つばかり其處へ持出された。
「鏡は皆上等でございます。」
ちよつと低く小ぢんまりして、意氣に出來たのは、木が少しわるい代りに、細工が特殊のものであつた。それが融の氣に入つたけれど、又餘り凝りすぎてゐるやうにも思へた。それに抽斗なぞもさう深く出來てゐなかつた。値段は大きい方が矢張高いのであつた。愛子はこんなものは鏡さへ正しければ、もう少し安いの方が手頃のやうに思つたらしかつたが、しかしそれも氣に入らないことはなかつた。で、暫く選擇に迷つた果に、やつぱり大きい方に決めてしまつた。愛子は帶のあひだから厚ぼつたいふくらんだ小型の蟇口を出して、金を拂つてゐたが、それと同時に、
「先生、今夜出て序に簞笥も一つ買ひたいわ。」
「お金があるの。」
「お金は少し餘分に出しておきましたの。」愛子は遠慮がちに言ふのであつた。
「簞笥屋がありますか知ら。どこか此の邊に。」
お神さんが中途から店頭へ來てゐて、
「ございます。手前共の懇意にしてゐる職人の店が、すぐ其處に電車通にございますから、何なら御案内申しませう。もう極手堅い男ですから、三越や何かでお求めになるよりか、好いお品がずつとお恰好に願へますので。」
やがてお神が福神漬をさげて案内してくれた。
簞笥は直に極まつた。愛子は華車な指頭で、ばら〳〵と札を數へてそこに置いた。
「ではお鏡臺と御一緒に明日おとどけ致しますですから。」
二人は店の前でお神に別れた。
「先生もやつぱり好いものが目についてしまふ方ね。」愛子は呟いた。
少し歩いてから融は獨言のやうに呟いた。
「死んだ家内が、あゝいふ簞笥を一つ買ひたがつてゐたんだけれど。」
「奥さんを思ひ出したの。買つてあげたくて可哀さうだとお思ひになるの。」
「そんなこともないけれど。」
「でも先生の奥さまは年齢よ、二十以上も年上にあんなに愛されていらしたんですもの。」
「愛しもしなかつたけれど、愛されもしなかつた。」
「でも皆が仲が好かつたと言つてゐたわ。」
「噓ごとよ。」
「先生には映らない奥さまだつたわ、あの丸髷がきよとんと上の方で高くなつて、あれでも少し低くなさるとよかつたのね。でも頸足の餘り長くない方でしたから。私奥さまを悪く言ふんぢやないのよ。あの方はあの方として、それは好い方なのよ。先生の奥さまはお若いときは意氣だつたんですね。」
「さあ！」
「よう〳〵。」愛子はいつも彼女の噂の出るときに、口にするやうなお揶揄かしを言つて、
「でも去年の秋、私が田舍へ歸るとき、蝶子ちやんの手をひいて宿へ來て下すつたときの束髪と着附は、よくお似合ひでしたわ。束髪があんなに能くお似合ひになつて、お上品に見えるのに、何うしてお結ひにならなかつたんでせう。お年を召して、毛がわるくなると、丸髷はいけ

ないのね。」
「もう止さうよ。」
「あの時貴方が一度宿へ行つてみませうと仰しやつたから、私御一緒に御飯を食べるつもりで、先生のお好きさうな御馳走をうんと誂へてお待ちしてゐたのに、先生つたら奥さまにお菓子なんかお持たせになつて。奥さまから戴くお土産なんかちつとも有難くなかつた。私あのとき何んなに先生をお待ちしたか。宅が上れないからなんて、随分だと思つたわ。」
「そんな事知らなかつたな。家内に何か話でもするかと思つてゐたんだ。結婚のことで悩んでさゐたから。それに僕は愛子の宿へなんか氣が差して迚も行けなかつた。」
「でもあの時の奥さまは、迚も感じがよかつたの。奥さまには随分冷淡に扱はれたけれど……」
「さう？」
「私苦しくなつてくると、よく先生のお宅へ遊びに上つたもんですけれど、あの牧場の[illegible]まで行くと、御門が開けにくくつて、いつでも躊躇したものなのよ。それで御門をくぐると、お玄關へ來てしまつた、と思ふのよ。先生のそのお目で、いつまでも私は見張られてゐるやうな氣もして、先生がいらつしやる時は、[illegible]いたゞけるんですけれど、お留守のときの奥さまの態度つたら、迚も侮辱を感じたわ。」
「その癖僕がゐたつて、長く話してはゐなかつたぢやないか。蒲團も敷かずに、入口の方に小さくなつて。」
「先生のお時間の貴重なことを、よく知つてゐますから。あの短い時間が迚も大切だつたの、さう云ふ快々するときは、Pカフェへ遊びに行つたらいゝでせうつて、先生が仰しやつたぢやありませんか。」
「そんなこと言つた。あの時は愛子の暗黒時代だ、もつと目を見張ればよかつた。」
「一度なんか、たしかに先生のお聲が聞えたの。先も随分に上るのが失禮だけれど。何でも奥さまと長火鉢のところに、お睦まじくお話していらしたに違ひないの。」
「そんなことはない。」融は擽つたさうに笑つた
「でも先生は奥さまをお好きだつたのね。」
「初めから、しかしかういふことは、豫想しようとも思はなかつた。」
それからそれへと過去の記憶が出た。暗い裏通の道程を通るとき、二人は少し離れてゐた。
「先生、もう今夜のやうに離れては[illegible]戴ね。私はら〳〵してしまふのよ。」
融はぎやふんと参つてしまつた。彼は腹をかかへるやうにして笑ひつゞけた。

二

そんな場合の愛子を、彼女に出て行かれた今、融は香に殘された甘さを味ふやうにそゞろに思ひ出してゐた。そんなに大人つぽい彼女なのに、融は父のやうな年をしてゐながら、飛出して行く彼女を止めることすら出來なくて、一緒に慣つてしまつたのであつた。そして其は、彼女が長けてゐると人に思はれてゐるらしい、戀愛のテクニックとも一概には言へなかつた。彼女の戀愛は決して都會ずれのした女のそれのやうにテクニカルのものではなかつた。勿論さうした情の場合と、今の、子供に關する、可なり深刻味の加はつて來た問題とは、一つに言へなかつた。同じ頭に手をあげるにしても、愛情のうへのことなら、彼女がいつも言つてゐるとほりに、怒らせなくても濟むのであつた
融はしかし、そんな場合の愛子が眞實なのか、今の愛子が眞實なのか、それも解らなくなつて來た。
融は又こんな場合の愛子をも、暗い心に思ひ

出してゐた。
　それは或る遲い朝、融が長火鉢の傍で、朝とも晝ともつかぬ飯を食つて、新聞なんか見てゐたときである。子供は一人も四邊にゐなかつた。古くから居なじんで家の勝手をよく知つてゐる女中のおしづが、散らかつた次ぎの四疊半を片着けてゐた。彼女はづんぐりした太鼓の胴のやうな軀の持主で、働き方が餘り敏捷でなかつた。その時も彼女は隅の方で、牛のやうに坐り込んで着物を丁寧に疊んでゐた。すると、其を看てゐた愛子がじれつたさうに少し尖つた聲で言つた。
「しづやさんはよく働いてくれるけれど、仕事が鈍くて困るわ。そんなに馬鹿丁寧にしなくても可いから、もつとさつさと速くするんですよ。」
　融は亡妻の仕事の丁寧すぎるのが、餘り氣に入つてゐなかつた。でもそれには氣轉が伴つてゐた。長いあひだ子供たちのために働いてくれた亡妻の母親は、それにまた輪をかけたほど丁寧で、氣が利くかはりに愚鈍さが伴つてゐる。しづやの働き方が、いくらか其に似たものであつた。
「亡くなつた家内のお仕込みだもの、仕方がない。」融は啄を容れた。
　すると愛子は頰を少しかくして、稀にある日に興奮の色を浮べた。
「奥さんはそれは先生の世話女房で、さう云ふことが生命でいらしたんですもの。長火鉢のお掃除だとか、お煮物だの、お漬物だの、そんなことがお上手だつたんでせうけれど、でも家庭人として、そんな匂のしみこんだ先生を見るのは、私迚も堪らない、藝術家としてお仕へする私の先生に、奥さまの影がさすのは、遣り切れないことだわ。」愛子は例の尖鋭な調子で、融にかゝつて來た。
「仕方がないぢやないか。」融も少し神經を苛つかせた。
「私奥さんを惡く言ふんぢやないのよ。奥さんは奥さんでそれで可いのよ。でも先生までが、さう云ふ風に、何でもかでも奥さんのお仕込みでなくてはならぬやうに仰しやられると、私考へなけあなりませんわ。」
　爭ひが少しつゞいた。融は鋭い愛子の舌鋒を受け切れなくなつた。それは毒氣のない、爽かな感じのものであつたけれど、同時に妥協性のないものでもあつた。
「そんなに言ふなら仕方がない。僕は今更家庭から遁れる譯にも行かない。[illegible]むづかしく考へるんなら、別れる外はない。」
「えゝ、これぢや私達も駄目。」愛子も眉をぴりりとさせた。
「ぢや即刻自決したまへ。もと様から進んで來たことで、僕は君の眞實を信じて此處まで進んで來たんだけれど、さう一々攻撃されちや遣り切れない。」
　愛子は俄かに長火鉢を離れて、簞笥のうへから鏡臺をおろした。そしてちやうど融の後に當る、次ぎの四疊半の片隅へ持出して、化粧に取りかゝつた。融もふいと書齋に立籠つてしまつたが、やつぱり心が引かれた。そして暫くすると、しづやに着ものを出させて、急いで外出の支度に取りかゝつた。
「僕はちつと出る。君の出て行くのを見てゐられないから。」融は鏡に向つて、白い肌を肩まで出して、お化粧をしてゐる愛子の後から聲かけて、そのまゝ家を出た。
　どこへ行かうかと迷つてゐる彼の足には、餘り彈力がなかつた。彼はほんとに怒つてはゐなかつた。愛子に對しては心からの怒りは發しえない彼であつた。彼は現在の愛子がほんとに自分を愛してゐることを知つてゐた。勿論いつま

でも一つの枝に止まりきりでゐられる愛子であるか何うかは解らなかつたし、若い前途の多い彼女を、いつまでも持ちきれる自分だとも思へなかつた。愛子をもつてゐるといふ其事が、老年にしては餘りにも生活の負擔の多い彼に取つては、既に業に一つの努力であつた。若い夢の多い、そして其と同時に、其の若い夢に、幻滅の悲哀を見るのが眼さに、相當打算ももたないではゐられないであらう彼女が、女性の美しさを保持するためばかりでも、融の家庭のやうな貧弱で、そして其は忍ぶとしても、何時までたつても自分のものには到底成切らない事情の見えすいてゐる小さな巣に縮こまつてゐる愛子でないことは、融にも略見當がついてゐた。

「私が最後のものである先生がお亡くなりになれば、私も死にます。」さう言ふ彼女の心持、その日その時には眞實であつても、それも彼女の憧憬から來た夢に溺れた言葉としか思へなかつた。

けれど頭腦のうへでさう思つても、彼の執着は既に強いものとなつてしまつてゐた。

融は自分が出たあとで、愛子が多分出るであらうと思つたが、しかし又出て行かないかも知れないと云ふ氣もしてゐた。彼は愛子との關係について、時々苦惱の遣場にしてゐた友人のTさんのところへと、自然に足が向いて行つた。

「多分もう歸らないだらうと思ふね。」融は憂鬱な表情に、強ひて落着を見せながら、否定的な口吻を洩した。

「さう。それなら其でもいゝぢやないか。」

Tさんはちやうど銀座へ買ひものに出かけるところだつたので、融も散歩がてら自動車に同乘することにしたが、實は呑氣な顏をして人の買ひものなどに附合つてゐるやうな餘裕はなかつた。それにあゝは言つても、出先をほゞ女中に示して出て來た心持がわかつてくれるなら、事によると家にゐるかも知れないと、融は心に望みを繋いでゐた。

「事によると愛子は家にゐるかも知れないんだ。」融は自動車に乘らうとして、ちよつと躊躇した。

「さうね。」Tさんは孰でもいゝと云ふ風ににこ／＼してゐた。

「氣にかゝるから、ちよつと見てこようかと思ふ。もし居たら連れて行つてもいゝかね。」

融はTさんも、個人としての愛子に好感をもつてゐることを知つてゐた。最初融が彼女を紹介したときから、Tさんに與へた愛子の印象は惡くはなかつた。で、融は大抵のことはTさんに打明けてゐた。Tさんの夫人がちやうど病氣であつたので、そんな買ひものに愛子を引張つて行くのも、さう不自然ではないと思はれた。

しかし融が急いで家へ引返してみると、愛子の履物が玄關にはみえなかつた。彼は目先が暗くなつた。

「やつぱり行つてしまつたんだ。」融はさう思ひながら、女中を呼び出して聽いた。

「先刻お出になりました。」

融は力がぬけたが、仕方なし通の方に待つてゐる、Tさんの自動車まで急いで行つた。

融は愈Tさんに附合つてゐる空もないほど、氣落ちがした。

「到頭行つてしまつた。」融は空洞な笑ひ方をした。

「さう。やつぱり若いから氣が變つたんだらう。それならそれで君も落着いた方がいゝぢやないか。」

しかし此の場合、融はさうは言つてゐられなかつた。不幸であるにつけ、幸福であるにつけ、彼の氣分はこの頃いつでも緊張しきつてゐた。

緊張するといふよりも、寧ろ今までの生活の全部を洗ひおとしたやうな、別の人間に投げかはらうとしてゐた。一切の生活興味の中樞が、愛子におかれてゐることを感じた。妻の突然の死によつて摧がれた彼の生活は、それが幾分彼を家庭の窒息から免れしめる機縁となりうるにしろ、それだけに又、たとひ一時であるにしても、翼の片方が折れてしまつたか、片足がもげてしまつたやうな生活上の支障を感じた。それよりも先づ第一に人の世の果敢なさと、幸福の日の先に横はつてゐる暗い陷穽の恐ろしさに戰いた。そして今彼はへたばらうとした地びたから、いきなり天上界への綱渡りのやうな危い藝當へと引張りあげられてゐた。底の知れない、暗いとも明るいとも、恐ろしいとも、樂しいともつかない、地獄の口をのぞいて來たやうな、絶望と安易との孰ともつかない、黄昏の寂しい空に懸つてゐるやうな彼の心は、辛くも愛子によつて、萎みがちな生命の衰へを支へてゐた。けれど、不自然な其の愛の生活の底に流れてゐる哀感が又二重に彼を悩ませてゐた。彼はそれを見まいとしてゐた。彼女の愛の前には、それが消されてゐた。

融たちの乘つてゐる自動車は、いつか下町の繁華の眞中へ乘り出してゐた。彼等の目にふれる一切のものが空虚で無價値であつた。その上をうよ／＼歩いてゐる人間の群といふ群が、石塊か木片のやうに馬鹿げて見えた。

融たちはやがて自動車をおりて、どこも此處もごろ／＼した雜貨店の人込みに揉まれて行つた。Tさんは先づ人形の並んでゐるところへと急いだ。それがちやうど五月幟の飾られようとしてゐる五月に近い頃だつたので。

一人の顔がみんな瓢簞のやうに間ぬけてみえる。肥つてゐれば、此の人は何だつてこんなに肥つてゐるんだらうと思ふし、脊の高い、のつぺりした人を見れば、この人は何だつてこんなにひよろ／＼してゐるんだらうと思はれた。

愛子がさう言つてゐるとほりに、融の今の目にも總ての女が遂に姿を消してしまつてゐた。美しければ美しいで物足りなかつたし、醜ければ醜いで亦詰らなくて仕方がなかつた。

Tさんはしかし融のそんな氣持とは風馬牛であつた。彼は何にも目に入らなかつたが、入らない理由が融とちがつてゐた。Tさんには平和な家庭や、親のそろつた子供たちがあつた。融は愛子を抜きにした自分の家庭を振返ると、そこには唯母をもたない哀れな子供たちの、散漫な集合があるだけであつた。

Tさんは片端から目についたものに取りかゝつた。田舎へ送る五月人形、[illegible]、それから靴足袋、キヤンデーやゼーールのやうな菓子、そしてさう言つた日用品をほゞ揃つたところで、更に家具を見たり、美術品を見てまはつたりした。二人は幾たびか室から室、階段から階段へと、目まぐるしい人の間を縫つて、ぐる／＼廻つてゐるうちに、買ひものの嵩ばつた包の數がふえ、持切れないほどTさんの兩手に垂下つてしまつた。Tさんは滿足してゐた。

融にはその時間が惜ましくてならなかつた。何を見ても興味がなかつた。妻と時々一緒に買ひものに來たときのやうな、それでもいくらかそんなものに興味をもつた彼の氣分は、妻を失つてからの彼には、どこにも見出せなかつた。

Tさんの買ひものを滿載した自動車に同乘して、家へ歸つて來たのは、懶い初夏の長い日も彼此夕氣づく頃であつた。

急いで門をあけて入ると、古びた格子戸をすかして、桃色の爪革のかゝつた黒塗の日和下駄が、ちやんとそこに爪先をそろへて愛らしく竝

んでゐるのが目についた。
融はやつと吻とした。
で、格子戸を開けて、上框へ上ると、茶の室の方から、黒い目をおど〳〵させながら、愛子がひよいと顔を出した。そして融が出した帽子を默つて受取つた。
融の頭腦はすつかり明るくなつてしまつた。くしや〳〵になつた心が、暢びやかに慰されて行つた。
「お歸りなさいまし。」彼女は机の前にすわつてゐる融に、遠いところから更まつてお辭儀をした。
「どこへ行つてゐたの。僕はTさんの買ひもののお供をして行つたけれど、少しも面白くなかつた。」
「私は子供のことで、此のあひだ手紙をよこしてくれた松木のお友達があつたでせう。丸の内の事務所にゐるの。その人に逢つて來ましたわ。」
「さう。銀座邊を歩きはしない。あの邊へ行けば、ちよつと行つて見たくなるぢやないか。」
「銀座へは行きませんでしたけれど、土橋で寫眞を寫して來ましたわ。」
「呑氣だな。僕はそれ處ぢやなかつた。」
「私も一人で詰らなかつたわ。」
愛子はさう言ひながら、彼の側へ寄つて來た。そしてしんなりした腕を彼の膝に差しのべた。
「何うして歸つて來たんだつて言はれるかと私思つたわ。でも貴方が帽子をお出しになつたんで……。」愛子はさう言つて、目に一杯の笑をたゝへながら、少し顔を紅らめた。
「何んなことがあつても、私を見捨てないでね。」
「僕をおいて行つちやいけない。僕は何處かへ行つてしまつたと思つた。何だつて出て行つたんだ。」
「卽刻白状しろなんて、あんなこと言はれて、づう〳〵しく私がゐられるもんですか。おい、君、白状したまへ！　先生つてば隨分思ひ切つたことを言ふ方ね。でも迚も好いわ。」
「君のまたあの攻め方の鋭さと言つたら、僕は迚も敵はない。」
夜が迫つて來た。

三

融はその時の愛子をも思ひ出した。その日や手がそつくり彼の感覺に宿つてゐた。しかし子供が出て來てからの愛子は、もう其時の愛子ではなかつた。彼女の心は二つに分裂しかけて來た。今の場合の愛子は、容易に歸つて來さうに思へなかつた。融は愛子が今頃何處へ落着いてゐるかと、それが氣になつてならなかつた。
するとちやうど其の時、蝶子が顔を顰めながら、二度ばかり厠へ通ふのに氣がついた。
「何うしたの。やつぱり悪いの。」
蝶子は茶の室で、しづやに縋つて、めそ〳〵してゐた。
「え、何だかお腹が痛いんですつて。」
融は急いで傍へ行つた。そして額に手を當てて見た。熱がいくらかあるやうに感じられた。やつぱり醫師に診てもらつた方がよかつたと思つた。
「寢んねしておいで、しづやにお床を延べてもらつてね。」
急に蝶子の姿までが寂しく見えて來た。
融はしづやに吩咐けて、掛りつけの醫師のN氏を迎へさせた。醫師の來るあひだも、蝶子は時々腸胃の痛みを訴へてめそ〳〵泣いてゐた。それは一つは愛子のゐなくなつた寂しさからでもあつた。
「をばちやんは！」蝶子は融の顔を見ると、遠慮がちさうにそつと訊いた。

「さあ、何處へ行つたかね。田舍へ歸つたかも知れないね。お父さんが惡かつたね。お前のをばちやんを出してしまつて。でもをばちやんがゐなくても可いだらう。をばちやんには好子があるんだからね。」

蝶子は目に一杯淚をためて、遣瀨ない表情をした。

「やつぱり居る方がいゝ？」

融は子供の傍を離れると、至急報で愛子の實家へ電報をうつた。それから愛子が家を出たので、多分そつちへ歸つたんだらうと思ふ。若しさうだつたら、この手紙を讀んでもらひたいと云ふ、斷り書をして、愛子への手紙を封じて、母親へあてた手紙も書いた。

さうしてゐるうちにN氏がやつて來て、蝶子を診察した。いつもの胃腸病であつた。お極りの手當が施された。

「ちやうど手がないので、迚も看護が行屆かないでせうから、お知合ひの看護婦があつたら一人お願ひしたいんですが。」融はN氏に賴んだ。

「さう！」N氏はそれも少し大業だと云ふ風に笑つてゐたが、融が少し興奮してゐるので、直ぐ誰か一人寄越すやうに言つて歸つて行つた。

融はこんな時、誰も寄りついて來るものもないことを、いくらか心細く思つた。しかし誰か賴む日になれば、やつぱり長い因緣が絡つて、それから其へと小煩い問題のために、兎角氣分を攪亂されがちになることは、今迄の經驗でよく悟つた。それも主婦があつてのことで、統御する主婦のない家庭では區々したそれらの人達の寄つてくることは、家庭を徒に混亂し爭鬪の禍のなかに陷れればとて、決して好い結果にならないことは、妻の存生中にすら嫌いほど經驗させられた融には、判りすぎるほど判つてゐた。彼等のなかには本當に善良で親切で、比較的賢かな妻の氣分に集まつて來る人も少くはなかつたが、身寄りのものとなると、大抵は氣の許せないものばかりであつた。今融は勝手口から入つてくる其等の人を、愛子を家へ入れると共に、ずば／＼切放してしまつてゐた。或るものは自發的に寄りつかなくなつてゐた。融は生活の單純化を欲してゐた。

融はしかし、氣持の上に大きな支柱であつた愛子に出て行かれると、それらの人々に頼り一國な態度を取つたことが心淋しくも思はれた。彼は電報と手紙を出してから、弱い心臟では迚も堪へ切れない惱みを推こたへようとして、ぢつと机の前にすわつてゐた。蝶子の苦痛を訴へる聲が、しみ入るやうに彼の胸にひゞいた。

「何うしたの。」融は傍へ行つた。

蝶子は劇しく胸が痛むらしかつた。融はそれを氷で冷させなどしながら、彼女の愛子に慕ひ方が普通の愛情以上のものであることが解つて來た。

「をばちやん、をばちやん！」蝶子はたら／＼淚を流しながら愛子を呼ぶのであつた。

看護婦の來たのは、九時頃であつた。三十ばかりの怜悧な顏をした、普通婦人としても物解りの好ささうな女であつた。夫が法學士であることも、後で解つた。

彼女は直に蝶子の傍に寄り添つて、體溫を計つたり、氷をつけ替へたりした。

「好い兒ですね。苦しいんですの。氷で冷しておくと直快くなりますからね。」看護婦は優しい言葉をかけながら、蝶子の蒲團の端に橫になつて休らうとしたが、優しくすればするほど、蝶子は親しみのない表情をして、後を向いてしまふのであつた。そして間歇的に、口について出る「をばちやん／＼。」を繰返してゐた。

融は仕方なし暫く其の傍に寢てゐたが、するうち蝶子はうつら／＼眠つた。

萬事まめ／＼しく實事に働いてくれてゐるのに氣がついた。融は一先づ救はれたやうに感じた。

「何うですか、今朝は。」

「お熱は少し下りましたの、胸のお痛みも、夜中にお吐きになつてから、いくらか治まつたやうですの。未だ何にも召食れませんの。お湯もお乳も。でも御心配は入りません。」

十時頃に朝寢坊の芳太郎が、裏の家からふらりとやつて來た。

「この狀態も惡くないな。單純で。」融は彼に話しかけた。

芳太郎はまるで關しないやうな顏をしてゐた。

「この分だと己も忘られさうだ。しかし田舍へ歸らないとすると、何處へ行つたものかな。」

「あの人のことだからどこか其の邊に、けろりとしてゐるんぢやないかな。」芳太郎はにやにやしてゐた。

「この邊にはゐない。」

昨夜女中の美代子の話をきくと、宵のうち彼女たちは愛子を慕ふ蝶子がいぢらしさに、この近所の旅館といふ旅館を、大抵きいて歩いたものらしいのであつた。終に五町も六町もの先まで、探しに行つたが、愛子はどこにもゐなかつた。

「どこか箱根へでも行つて遊んでるんぢやないか。」

「いや、そんな女ぢやない。さう云ふ風の都會趣味はない。」融は斷定した。

「Yさんのところへ行きやしないかな。」

Yさんといふのは、愛子が融に紹介されて、處女作を出してもらつたりした因緣から、いくらかパトロン格に親しくしてゐた男であつた。

「さうかとも思ふが、いくら何でもまさかね。そんな女でもないんだ。でも、何うだか知れないけれど。」

「行つて見れば判りますね。」

「電話でもいゝけれど。」

そんな話をしてゐるうちに、融の心臓が又うづきはじめてきた。彼は大分以前に融の親類の若い一人の作家が、愛子の問題について、話しにやつて來たとき、その男の言葉が餘りに屈辱的であつたので、堪へられなくなつて外へ飛び出して行つたときのことを思ひだした。愛子は途中で失神したやうにきよとんとして、交叉點に佇んでゐるところを、追つかけて行つた芳太郎につかまつたのであつたが、その時ちよつと神田に[illegible]へ[illegible]いて、[illegible]

そんな話を、愛子は後で融にしてゐた。融は今それを記憶のなかから引出してゐた。

「事によると神田邊かも知れないんだな。」融は言つた。

「何か心當りがあるんですか。」

「いや、心當りといつては無いけれど。」

「神田邊にしやがんでゐるなら、きつと神保町邊を歩いてゐますね。好子さんをつれて、晩方なんかきつと出ますね。」

「さうさ。」

「カフェを捜してあるけば、屹度見つかりますね。皆で一つ捜してやらうかな。少し運動費さへあれば。」

[illegible]は戦慄するだけの餘裕もなかつた。何か事件でも起つたやうに、しかし愛子を逃したことは、[illegible]はないにしても、父のためにちよつと惜しまれるやうな氣もしたのであつた。[illegible]つてゐればゐたで、ちよつと手をつけて見たい彼ではあつたけれど。

午後融に女客があつた。もう十年越し姿を見せなかつた彼女が、久しぶりにふと訪ねて來たのであつた。彼女は單身田舍から出て來て、

ゐたけで、[illegible]あられた。
「愛子は[illegible]にゐると死ぬんぢやないかしら。」
[illegible]は呟くやうに芳太郎に言つた。
「まさか、そんな事もないでせうが……。」
T氏のところへ自動電話でもかけてみようかと、父と子はそんな話をしながら、夜の町へ出て見た。
融は頭腦がふら／＼してゐた。二三日彼は胃腸を惡くしてゐた。外へ出てみると、體の衰へてゐるのが、一層よく判つた。
「事によるとそこにゐるんぢやないんですかね。」
三月頃まで愛子が止宿してゐた旅館の近くまで來ると、芳太郎がさう斷定したやうに言ふのであつた。そしてさう言はれると、融も何だかさういふ氣がした。三月頃融が幾日も幾晩も閉ぢこもつてゐた、二階の奥の部屋に、愛子が好子と坐つてゐるやうに思へてならなかつた。
「さうかも知れないな。」
「いきなり押しこんでやりませうか。」
若い馴染の番頭が家の前へ出てゐるのに、氣がついた。
「愛子はほんたうにゐないの。若しゐるなら、さう言つてくれたまへ。少しあの女に話があるんだから。何かあの女を怒らしたんだから。」
融は何だか今にも息が切れさうな調子で、脅すやうに哀願するやうに言つた。
番頭は笑つてゐた。融はその笑顔を見ると、愛子の居所を、彼が知つてゐるやうな氣がした。
「いゝえ、そんな譃なんか吐きません。松木さんは何だか、今日ちよつと見えたやうですけれど、直歸つて行つたさうです。お宅の近所の仕立屋さんに賴んだものがあるとかで、家の女中を使ひにやつたやうです。」
融は息が止まりさうになつた。彼は女中にきいたら居所が知れるだらうと思つて、内へ入つて行つた
そこへ見知りの年増と若いのと、女中が二人奥から帳場の方へやつて來た。
「愛子が今日來たさうですが、何處へ行つたか若し判つてゐたら。」
女中は胡散げな表情をしてゐた。
「えゝ今日ちよつとお子さんをおあづけに入らつしやいましたけれど、晩方つれてお歸りになりました。」
融は益〻眞着になるのを感じた。そんなに遠くまで[illegible]なら、[illegible]駄目なのだと思つた。[illegible]ふらと[illegible]出たが、[illegible]彼はよく[illegible]であつた。[illegible]格ができなくて[illegible]したこともあつた。今フランスにある友人と或る夜更に電車のなかで目が暗みだして、[illegible]飛出して町の廣場で二十分も人事不省で地べたに横はつてゐたこともあつた。
その發作が今やつて來さうに思へた。
「おれは倒れさうだ。」彼はさう言ひながら、ふら／＼歩いてゐたが、忽ち感覺を失つてしまつた。
薄明りがさして來るやうに、やがて、感覺が蘇りかけて來たとき、彼は或る酒屋の前の石疊のうへにぐしやりと平伏つてゐる自分を發見した。彼はやがて起きあがつた。誰か近所の人が醫者へ走つたやうであつた。芳太郎がステッキと帽子をもちながら彼を扶けおこした。
「ちつとも分らなかつた。いつの間に仆れたんだか。」
「仆れさうだといふんで、笑談かと思つてゐたら、ぐしや／＼となつてしまつて、抱きかゝへようとしても、もう駄目なんだ。」芳太郎はそん

な場合にも、彼の感情の細かさと緻かさとを失はなかつた。で、またそんな事は何でもないと言ふ風に、笑つてゐるのであつた。

「飾り見つともいゝ間ぢやないな。」

「番頭と話してゐる蝶子が、ちよつと困つたな。」芳太郎はそれかと言つて、返答もしなかつた。

「心臓がひどく弱つてゐる。」

「心臓が苦しいんですか。」

「もうそんなでもない。」

「あのまゝ蘇生しなかつたとしたら……まあそれでも可い訳だけど、變なことになるな。」

「そしたら愛子も生きちやゐられないだらう。」

蝶子は仕方なし笑つた。

芳太郎は「あはははは。」と大袈裟に笑ひだしてしまつた。

蝶子は帰るとすぐ医者にかゝつた。

「心臓は何うです。」

「何あに、大したことはありません。しばらく安静に、」

蝶子はその時昏々として睡つた。

うと／＼と夜中に目をさめると、亡き母がデッドマスクのやうな冷い顔を彼の枕へ寄せて来た。

暫くすると、彼女はまた苦しい眠りにおちた。明け方に目がさめると、今度は愛子の滑かな足が彼に絡りついてゐる感じが、破れた夢幻の跡に仄かに残されてゐた。

五

翌日はＣ女史が、作品を一つもつて来て、蝶子が病んでゐるのを見て、一日慰めてくれた。

「おや／＼。愛子さんゐないんですか。お話しようと思つて、折角来たのに。何うして又そんなことになつたんでせう。折角落着いていらしたのに。」

蝶子はまた其の顛末を説明しなければならなかつた。説明しないではゐられなかつた。

「おや／＼、そんなに貴方が悩んでおいでになつては。」

しかし彼女は好感を寄せてくれてゐた。そしてＹ氏へそれとなし電話をかけたりしてくれた。Ｙ氏は不在であつた。

「さあ、私もお暇にしませう。愛子さんきつとお帰りになりますよ。まさか今更Ｙさんのところへ行くやうな、そんな莫迦な眞似はしないだらうと思ひますね。」

「さうも思ふけれど、しかし一方に絶望すると、誰の胸へでも飛びついて行かなけあゐられない女だからね。Ｙ君にだつて、世話になつたこともあるらしいから。」

「そんな事ないでせうね。」

彼女は帰つて行つた。

夕方芳太郎がＹ氏へ電話をかけた。

「来るさうです、後ほど。」芳太郎が報告した。

Ｙ氏の来たのは、それから一時間ばかりしてからであつた。

「何うしたんです。」

「君に心配かけちや済まないんだけれど、若しかと思つたもんだから。」

「いゝえ。さう思はれやしないかと、私も今電話をいたゞいて、さう思つたんです。」

「そんな訳ぢやないんだけれど、蝶子が悩めてね、自分の子供があるから、迚も帰つちやこないだらうと思ふけれど。しかし迚も面白い女だね。あれも若し、小さい自分の世界に閉ぢこもつて、人の蔭口ばかり吐いてゐるやうな作家連の、合議式の女がありふれた激女型の女だつたら、僕は決してこんなに愛しはしないね。」

「さうですね。面白い人ですね。」Ｙ氏は内向き話に應答してゐた。

そこへ女中が二通の手紙をもつて来た。

「松木さんから。」女中の顔にも明りがさしてゐた。
　しづやは今も茶の室でしく〳〵泣いてゐた。愛子を慕ふ蝶子のいぢらしさに。
「ほう！」Y氏はさう言つて手紙を受取つた。
「差出人の所がないや。」彼は鼻の先で言つた。
　留は蝶子に宛てた一通から披いた。中から折紙の幾束かが出た。
「おい、これを蝶子にやつてくれ。」
　それから彼は自分に宛てた分を讀みはじめた。封書にはたゞ愛子としてあるだけであつた。手紙は五色の可愛らしい折紙十幾枚かに書かれあつた。
　何うしていらつしやいます事やらと只思はれます。
　でも側に眠るあどけない子供の顔を見て、あなたのあの朝のお言葉を思はされます時、私はどうしてもあなたのお側に上られません。いくら考へても、今度のことでは、私は自分を悪いと思はれます節は少しも御座いません。
　私に子供の戻つて參るのをわからずに、あなたは私をお入れ下さつたのですから、お體の毒とは重々存じますのですけれど。
　あなたはあの朝、私をおぶちになつてその上泣出した私に、「出て行くなら、歸つてこない積りで出て行け。」と仰しやいましたねえ。
　私の[illegible]は[illegible]身の[illegible]い、寄り所のないものです。その私が、それも來てから三日にしかならないのに、子供の事で、「今日といはないから、二日もしたら出て行つてくれ。」と仰しやられて、どうして置いていたゞけませう。私は分け隔てなく蝶子ちやんも好子も愛したつもりです。あなたと私の生活のよく靜かにゆきます爲めに。
　しかもそれは惡いことではない。一寸の間を子供と一緒において下さいと申し上げてあるのに。
　私は外のことなら、何んな辛いことでも我慢したでせうけれど、あゝしたことから、あんなつらい言葉を、私の最後の方と信ずるあなたからお聞きしようとは思ひませんでした。私はがむしやらに貴方から姿を消してしまひました。
　今はまた、行く路を失つてしまつた私なのです。總てがくろ〳〵とざされた行手です。私は一晩泣きとほして、何を感じたことでせう。
　私一人なら、あなたも愛して下さいました。しかし子供はたつた三日と愛しては下さいませんでした。子供のため、數奇な子供のため、どんな事をしても私は生きて行かねばなりません。最後の人として私の擇んだ貴方に愛されなかつた私の子供を、親として人としてかばつてやらねばなりません。てふ子さんがどうしてゐられるやらと思はれてなりません。よし子も噂いたしてをります。
　あなたは私が去つたら、後の方をお迎へなると、あの朝も仰しやいましたのねえ。苦しいけれど致し方もございません。
　あなたはあの朝あなたのお腹立ちを和めようとして微笑んでゐた私に、「圖々しい。」と仰しやいました。又どんな事をしても離れて行かない女がいゝとも仰しやられましたねえ。私は奴隷としてあなたに愛していたゞきたくはございませ

ん。あなたにお對しする私の愛は、そんなものでは無い、高い氣持のあなたを、清い心でお愛ししてゐる私は貴方の戀人だつたのです。一旦あなたの前を去れば、よし私がどんな理由の下にもせよ、私は今度も世間から惡い子にされてしまひます。あなたは今のうち自決しろと仰しやいました。

私の前に、高い誓いもこの儘でお消え去つてしまつたと悲しまれてなりません。もつと申し上げたいのですけれど、泣いても泣いても泣きつくせなかつた私も、今は涙も出てりました。一昨日あたりから胸がひどく痛みます。

私の事は御心配なさらないで下さいまし。すべての失禮をおゆるし下さいまし。

愛子より

光雄樣に

手紙には頷かれない節も無かつた。その上調[illegible]劇的[illegible]にはならずで、それも何か無理をしていい[illegible]いかに[illegible]はなかつた。

しかし田舎で[illegible]ない[illegible]手紙に、明日[illegible]消印のあつたことは、まだしも一縷の望みが繋がれてゐた。それは[illegible]町であつた。

Y氏は明日は自分も協力して、愛子を捜さうと言つて、やがて歸つて行つた。

「あの人活動の變り日に、きつと入るから、かうと、明日……明後日が日活館の變り日だから、一つ行つて見るんだな。」

Y氏は又、愛子が家族同士知つてゐる若い學生の下宿が、どこか紅梅町邊にある筈だから、その學生の友人が、ちやうどY氏の世話してゐるので、その所番地を、明日しらべて知らせすることを約束した。

翌朝融は早く目がさめた。彼はまた頭腦がふらふらしてゐた。食慾もまるで無かつた。しかし蝶子の枕元を見舞ふと、又驚くべき可憐らしさを見せられた。

「これをばちやんのお手紙！」蝶子はさう言つて枕の下に仕舞つておいた折紙と、折紙の一枚に書いた手紙とを、そつと引出して、そこに添寢をしてゐる融に見せた。

融はまだ體が十分でなかつたけれど、捜さずにはゐられないやうな氣がした。

融は蝶子を慰めて、起きあがつた。

「どこへ行くの。をばちやまのとこへ行くの？」

「あゝ捜して來てあげるからね。」

融はそんな早い朝に、外へ出たことは滅多になかつた。町にはまだ埃も立たなかつた。初夏の陽光や、街路樹や、水に撒かれた路面や、自轉車や、朝の通勤者たちなどのうへに、爽々しく輝いてゐた。

彼はステッキを突きながら、電車にも乘らずに、てくてく歩いて行つた。昨夜の手紙が思ひだされた。融を責めようとする言葉の強さの下に、女らしい弱さがあるやうに思へたり、今迄のことを、その手紙一本で打切るには、餘りに見えすいた根本の矛盾もあるやうに思はれた。

お茶の水をわたると、彼は交番について、愛子の知つてゐると云ふ其の學生の名を告げて、宿を調べてもらつた。しかしそんな名は、どこの宿にもなかつた。

それでも彼は失望しなかつた。どこか其處いらの宿に、愛子とよし子と、[illegible]して居るやうに思へてならなかつた。で、彼は[illegible]ら調べはじめた。一軒また一軒、[illegible]にある、三軒の旅館を、彼は訪ねて[illegible]た。しかし何處にもゐなかつた。

「この邊に、もつと外に下宿か旅館がないでせうか。」融は最後の家できいた。
「この先へおいでになつて××病院の横へお入りになりますと、宿屋は二軒ございますよ。」年取つた主婦が教へてくれた。
融は元氣よく又その横町へと入つて行つた。
そこには大きな新しい旅館が、兩側に三四軒あつた。
「こちらに松木愛子といふ、子供をつれた女の人が泊つてゐませんでせうか。」
融はわざと洒々した口調で、そんな風にきいた。しかしそれらしい女は何處にもゐなかつた。その横町の又横町が袋のやうに深く奥まつてゐて、そこにも安下宿が軒を並べてゐるのに目についた。融はステッキを振り／＼隅から隅まで尋ねて歩いた。しかし其も無駄であつた。
終に融は疲れて來た。そして莫迦々々しくなつて來た。絶望はしなかつたけれど、さうやつて自身捜しに出てみると、いくらかの紛らかしにはなつた。そして其の「紛かし」が、やがて諦めへの自然の階段に役立つのを感じた。
念のため彼は今一度、外の方面を二三軒捜して見たが、家を出たときの意氣込と熱心はなくなつてゐた。
融はぶらり／＼と、歸途に就いた。
「をばちやんは？」
蝶子は父の顏を見ると、直ぐきいた。
「をばちやん何處にもゐない。」融は素氣なく言つた。
「いゝだらう、居なくつたつて。お前にはお父さんや兄さんや、姉さんや、澤山あるんだからね。あんたをばちやん來ない方がいゝぢやないか。」
蝶子は唇をふくらませて、泣面をかいてゐた。終にしく／＼泣きだした。
「あゝ可し／＼。今にをばちやん歸つてくるからね。」融はあわてゝ機嫌を取つた。
芳太郎と三男とが寢てゐる、裏の家へ、融は行つて見た。
「おい／＼、猿樂町の方に宿屋町があるかね。」
芳太郎はぽつかり目を開いた。
「さあ！」
「知らない？　何だかあつたやうに思ふけれど。」
「あゝ在ります、二三軒。」
「ちよつ行つてみようかな。お前たちも一つ、手分して捜して見てくれないか。」
「行きます。」芳太郎は寢ぼけ聲で言つた。
「もう何時かな。」
「さあ、その時計は止つてゐるもんで……」
「ではね、十二時までに己は××、猿樂町へ行く、から、手分してあの方面を捜して、そこで落合ふことにしよう。」
「よござんす。すぐ出かけます。」
「藤三郎も一緒にね。」
「よござんす。」
融はやがて又家を出て行つた。今度は電車で、猿樂町の方へ、いきなり出て行つて、そして或る大きな洋物店の横町をふと覗いて見ると、そこに大東館と云ふ赤いメリンスの旗の出てゐるのが、ふと目についた。融は先づそれから取りつかうと思つた。勿論それもバラックであつた。
するとちよつと一二段高く築いた入口を入つて、陰氣な玄關口に立つて見ると、正面にある梯子段の際の方に部屋が一つあつて、その障子の三尺ばかりかゝつた奧の方に、大島着を着て、彼女獨特の髮を結つた愛子の坐つてゐる姿が、融の目についた。
融は夢のやうな氣がした。
「ごめんなさい。」融は聲をかけた。

小間使に雇つた愛想のいゝ主婦が、そこへ出て來ると同時に、その部屋の障子を閉めた。

「松本愛子がお宅にゐますね。今そこに見たんですが……。」

「貴方どなたでいらつしやいますか。」

融はステッキで其の部屋を指した。

「あゝ、さうですか。」主婦はさう言つて、その部屋に入つて行つたが、暫くすると、

「さあ何うぞ！」とにこ〳〵しながら、融を上へあげた。

融は勢ひこんで、その部屋へ飛びこまうとしたが、入口へ顔を出してみると、愛子は紅い顔をして、奥の方の隅に突立つてゐた。

「おい、何うしたんだ。」融はさう言つて尋ねた。

愛子は手で「二階へ、二階へ」と指した。

壁紙のやうなものが、部屋一杯に取りちらかつて、職人が二人そこにゐたけれど、融は目にも入らなかつた。

彼は主婦の案内で二階の部屋へ入つて行つた。部屋は明るい六疊で、見るとそこに小机があつた。色紙や玩具や子供雑誌や、手拭に日本のやうなものが、床の間にごちや〳〵してゐた。そこに椅子が一脚置いてあつた。

いつか、若しもその時愛子の氣が進むなら、結婚しようとまで約束したとかいはれる或る實業家、思想家と、愛子が或種の料理をしてもらふためにそこで幾度か逢つてゐることは、この前のとき愛子の口吻から推して、融には直ぐ頷けた。

しかし何よりも先づ、融を見て怯けた表情をしてゐる好子に、彼は目がついた。

「おい、好子、こんな處にゐたの。」融はさう言つて彼女を抱きしめた。

そこへ主婦が上つて來て、お茶をいれてくれた。

「ひどいな！」融は涙ぐんでゐた。

「いゝえね、今晩は何うしても歸ると仰しやつてでしたので。」

主婦と入れ代る愛子が少し紅い顔をして入つて來た。

「君は實にひどい。ひどいよ。何くらゐ俺ら知らしてくれたつて可かつたぢやないか。」融は聲もふるへもしさうな調子で、目を潤ませてゐた。

彼は袂の底からハンケチを取出して、ぼろぼろ落ちる涙をふいた。やがて彼は落ちついた。

「家ぢやあの日から好子が病氣してゐるし、一體何うするの。手紙を見たけれど、己も悪いが、ずゐぶん小酷く遣つつけるぢやないか。」

「だつて貴方が出て行けと言ふんですもの。私悲しかつたわ。電車に乗つても、ぼろ〳〵涙ばかり出て。」

「家の近所まで來たといふぢやないか。それだのに顔も出さないなんて。君は酷いよ。實に酷いよ。」

「でもあなたにあんな事言はれて、[illegible]しく居られる私ぢやありませんもの。」

「己はそれを聞いて卒倒してしまつた。」

「そッ！ ごめんなさいね。」

「歸るの。歸らないの。」融は性急にきいた。

愛子は落ちついてゐた。

「私先生に少しお願ひがございますの。今夜お話しに行かうと思つてゐましたんですけれど、當分この家によし子と二人下宿して、ちやうど近いところに音樂學校の幼稚園がありますから、そこへよし子を通はせて、私は毎日先生の宅へ通ふことに。」

「いけない、そんな事はいけない。」融は斷定的に否定した。

「その位ならいつそ綺麗に別れよう。」

「私榛原から壁紙なんか買つて來て、下の座敷を少し居心地よくしようと思つて。あの部屋なら安くおいてもらへるの、月五十圓くらゐで。」
「子供をこんな處で育てるのかい。」
「いけない？」
「いけないとも。しかし君がさうしようと言ふんなら、己も考へなけあならない。」
しかし其の話はそれきりになつた。
「おれは今朝からずゐぶん搜した。君は實にひどいよ。」
「私も歸りたかつたんですけれど、雙方に子供があつたんぢや、とてもうまく行きつこはないと仰しやられてみると、私も考へなけあならないと思ふわ。外の子供は兎に角として、よし子だけは私放したくないの。來てから三日もしないのに、あんな悲しいことが起つたとすれば、これから先のことも案じられますもの。」
「けど私はちつとも好子を冷遇してゐやしないぢやないか。」
「それあ可愛がつても下さつたわ。よし子も懐いてゐたんですもの。」
そして愛子は、そこにしよんぼりしてゐる好子を振向いて、
「よし子さん、下へ行つて女中さんと遊んでおいで。」と、そつと開き戸をあけて、廊下へ出すやうにした。
そこへ女中が通りかゝつて、手を取られはしないかと、おど／＼してゐる好子をだまして、下へつれて行つた。
「でも善く見つかつたものだね。」
「ほんたうね。何うしても縁があるんだと、さう思ふわ。」
「けど何うするの。」
「歸りますわ。」
二人はいつか相寄つてゐた。
「あなたの躍りこんだ態度つたら、私殺されるかと思つた。でも嬉しかつた。」
「君はひどいよ。己がこなければ、其れきりだ。」
「そんなものなの。」
「私行きたかつたの。」
暫くしてから融は思ひ出したやうに、
「××喫茶店に子供が待つてゐることになつてゐるんだから、僕は歸らう。××へ行かない。」
「今は行きたかないの。」
「ぢや直ぐお歸り。」
融は帽子を摑んだ。
「ちよつと！」愛子はさう言つて、キッスを求めた。
融は顏をもつて行つた。澄んだ愛子の目が耀いてゐた。
「……、……。」…………
……………………
融は晴々しい氣持で家へ歸ると、すぐ葉子の病床へ近づいて行つた。
「をばちやんが今に歸つて來ますよ。おとなしくしておいで。」
それを聞くと葉子の顏にも明りが射して來た。そこにゐる看護婦の石黒さんや、しつやのぶく／＼した顏にも、晴れやかな微笑が浮んだ。
「ようございましたね。お孃ちやん。」
融は今朝までの憂鬱な家の空氣が、すつかり何處かへけしとんでしまつたやうに思へた。
「芳太郎は？」
「もうちよつと先にお出かけになりました。」
女中が答へた。
「藤次郎は？」
「お二人でいらつしやいました。」
融はきつと××喫茶店だらうと思つたので急いで近所へ電話をかけに行つた。果してそこに

芳太郎がゐた。

「今ね、少し時間がおそくなつたけれど、此處へ來てゐるんです。お父さんは何處にゐるんですか。」

「今家へ歸つたところだ。愛子が見つかつたんだ。その家のすぐ近くの△△洋物店の裏に大幸館といふ旅館がある。そこに愛子がゐるんだ。今俥をやらうと思つてゐるけれども、ちよつと行つてごらん。」

「さうですか。おや、もう可いんですね。」

それで電話を切つた。

二時間餘もたつてから、愛子が晴々した顔をして、こて〳〵何か持ちこみながら上つて來た。何をおいても彼女は先づ[illegible]子を見舞はなければならなかつた。晴れやかな彼女の聲が四疊半から聞えてゐた。

やがて書齋へ出て來た。

「芳太郎は行かなかつた？」

「おいでになりました。今まであの部屋でお遊びになつて、」愛子はさう言つて、玄關の隣へおいて置いた黄色い[illegible]を二枚ばかり持込んで來て、

「[illegible]、隣の部屋へ敷かうと思つて、[illegible]て[illegible]したら、[illegible]し係りをかしくなかつたら、こゝへお敷きになつてはと」

「さうね。」さう言つて、隣は二人でそこへそれを敷いて見たりした。

「あすこへ貼りかけたあの壁紙、迚も好かつたわ。」

「惜しいことしたね。」

「でも介意ひませんわ。」

そこへ背廣姿の芳太郎が歸つて來て、座へまはつて來た。彼も上機嫌であつた。

「どうです、このネキタイは。」

青みとちよつと黄色のあるネキタイが、彼の顔によく似合つてゐた。

「まあ、迚も素敵。」愛子は言つた。

「ちよつと好いでせう。綺麗は綺麗だけど、迚も安いんですよ。十圓ぐらゐに見えない？」

「さあ！」愛子はにや〳〵してゐた。きつと愛子から金を貰つたんだらうと心に微笑まれた。

浄瑠璃の三味線

何よりも惜むべきは、浄瑠璃の三味線である。今の友二郎とか道八とかいふ人が、以前の團平とか何々左衞門とかいふ人と、どつちが偉いのか、私にはわからない。多分團平や何左衞門の方がえらいんだらうと思ふが、それにしても私はいつでも語り手よりも一段上のやうな氣がしてならない。日本人は一體におかしな[illegible]技術に器用なのだらうと思ふが、例へば今の洋樂のバイオリンやピアノを、學校で教はるのとは、稽古の仕方がまるで違ふのだと思はれる。名人から名人へ傳はつてゐて、洋樂のやうにテクニックは或ひはなかつたにしても、ずゐぶん[illegible]に魂を打ちこんだものにちがひない。もう[illegible]藝術は學校なんかで教はるべき性質のものではないので、名人から名人へ吹きこまるべきものだらうと思ふ。昔の藝事で何が[illegible]といへば、[illegible]なぞは實に其の一つで、その[illegible]に於ては西洋の一流提琴家や洋琴家にをさ〳〵劣らないものだと思ふ。

質物

或る日捨三は或るところから頂いた原稿料を懐にして、榮子の宿を訪問した。訪問といつても、彼に取つてはその宿の帳場の前を通つて行くことが、ちよつと極りのわるいことであつただけで、此の頃さう改まつた心持ではなくなつた。勿論最近まで、彼は榮子を訪問したことは、絶對になかつた。若し榮子を訪問するに適當な年輩であつたら、彼も或ひはこの三年間のあひだに、一度や二度くらゐは彼女を訪問したかもしれなかつた。しかし長いあひだ割合に頻繁に彼女の訪問を受けてゐる捨三が、その時々に奇しく纏つて行く運命と共に、兎角揺られがちな彼女の弱い心から出る訴へを、可なり利己的な立場から、同情ある慰めの言葉で受けてゐたに過ぎなかつたくらゐなので、彼女を訪問しようと思つたことは、嘗てなかつたと言つてもいゝのであつた。それは一つは捨三が妻に對して秘密をもてない性分であつたと同時に、少しでも他の女に心が動くやうに思はれるのが、決して氣持のいいことでなかつたからであつた。

それでも一度榮子の宿へ行く約束をしたことがあつた。それはその頃書いてゐた新聞の小説の女主ヒロインが活動の女優であつたところから、女優生活の雰囲氣を知る必要から、H　女優を訪問して話を聞かうと思つたのであつたが、最近その女優に榮子が逢つて來て家を知つてゐるので、一緒に行かうと言ふ約束をしたのであつた。

H女優は、捨三も以前よく知つてゐた。作品をもつて來たこともあつたし、舞臺姿を見たこともあつた。無精な捨三は作品を預かりながらも、何一つ彼女のために心を勞したこともなくて、ふとした第三者——それも捨三の極親しい親類の青年が、捨三と一緒に招待されて見たH女優の舞臺振だけなら未だいゝが、顏の印象について侮辱的な批評を書いたところから、極りわるかつたのか、怒つたのか、それきり捨三の家へは來なくなつてしまつた。榮子は田舎における新婚生活が破滅に終つた時、良人の勸めで映畫界に入らうとした時、その社會でも頭腦のしつかりしてゐるH—子を訪ねて、撮影所の裏面や、女優の生活を聽かされ、親切な忠言を與へられたことがあるので、H—子に感謝してゐた。併し榮子は撮影所へ入ることを、斷念めてしまつた。そして實家へ歸つて彼女は今迄の家庭生活を失ふと同時に、自由生活の眞中へ投り出されてしまつた。

捨三は獨りではちよつと極りがわるいので、榮子と一緒にH—子を訪問しようと思つて、その意味を洩すと榮子もそれを悦んで日まで約束したのであつたが、彼は矢張氣が差した。榮子の生活雰囲氣が悉皆かはつて、若い人達によつて取卷かれてゐるやうにも思はれたし、新しい婦人でも出來てゐるかのやうに思はれたので、つい遠慮するやうになつてしまつた。それに其の日は雪が降つたりした。

「××日に榮子と一緒にH—子を訪ねる約束をしたんだが……」捨三は時々妻の前に洩してゐたが、妻の表情がそれを阻むやうに見えたことも、彼を躊躇させた一つの原因であつた。

それから暫くして、榮子の感傷癖から書かれた手紙を受取つたが、わざ〳〵瀬戸の火鉢などを買つて待たれてゐたことは、この頃になつて漸と榮子の口から聽いたことであつた。榮子

のために、その火鉢を買つてくれたのも、彼女に尤も好い意味の好意をもつてゐた文壇の或る大家であつたことも最近知つたことであつた。

やがて世間へ公にされた彼女の作品によつて、彼女に憧憬の情を寄せた或る美術家との同棲生活が、惨めな最後を遂げてから、長いあひだ慈母の許へ歸つて、生死の苦しみを苦しんでゐたあひだに、結婚問題について一度東京へ出たことがあつた。それは土地の資産家で、榮子の理解者なので、偶には東京へも出てこられるし、讀んだり書いたりするだけの自由も與へてくれる筈だといふのであつた。

「結婚した方がいゝでせうね。貴女なぞが東京にゐれば益々苦しむばかりだから。」捨三は勸めた。

榮子はしかしさうなると氣の進まないことを訴へた。捨三にもその氣持がよく解るやうに思へた。彼女は今迄にない自由さで、それを語るのであつたが、美術家T―氏との同棲時代に失はれてゐた健康や、表情の晴やかさが、半歳ばかりの田舍生活ですつかり恢復されてゐた。それは何時の頃であつたらうか、季節には珍しい花の大きな植込なぞを持込んで來た。妹をつれて來たのも、その頃であつた。前の良人と一緒に、子供を一人つれて、初めて捨三の書齋に現はれた時分の派手でふくよかな美しさを捨三は久しぶりで彼女に發見した。心の惱みのほぼ癒えてゐることも想像された。

捨三はしかし、田舍へ歸る前に、もう一度話を聽きたいやうな氣がした。

「今度はいつ歸るんです。」

「明日歸らうと思ひます。」

「どこにゐるんです。」

「つい御近所なんですけれど……。」

「私も一度おたづねしませう。」

「え、何うぞ。先生なぞのおいでになるやうなところぢやございませんけれど、何時でも是非。」

しかし捨三は矢張誰か來るんぢやないかと云ふ氣がした。榮子は極力それを否定した。

「今度先生に結婚の御相談に上つたんですの。先生が行けと仰しやれば行かうと思つてあがつたんですけれど……。」

立つたといふ前晩に、捨三は自分が行くかはりに土産ものをもたせて、妻をやつた。そして其れきりであつた。

歸つてからの手紙には、用心ぶかい捨三も返辭を書かずにはゐられないほど、環境と妥協しがたい彼女の惱みが入染出てゐた。捨三の卓子のうへには彼女がおいて行つた植込の草花が今を盛りと咲き亂れてゐた。それはちやうど來る度に殘して行く彼女の雰圍氣の象徴のやうな感じで、彼に淡い魅惑に浸らせるのであつた。

その榮子の宿へ、彼はこの頃時々入りこむやうになつた。榮子は捨三の亡き妻の初七日に漸く間に合ふ頃に、再び田舍から出て來て、元の宿の[illegible]まつた一室に閉籠つて、美術家のT―氏と同棲生活をするまでの徑路や、その同棲生活が破滅に陷つて、到頭また田舍へ歸つて行くより外なかつた不幸な運命について、彼女自身の惱みと立場を明らかにすると共に、その刹那刹那を生命の限り思ひ詰めて生きて來た、懷しい愛の思出を筆にしようと思つて、熱心に創作の筆を進めてゐた。

原稿紙やノートや、手紙や食料品などの散らかつた、彼女の部屋が今は捨三に[illegible]いなり女の部屋で過したことのある[illegible]な[illegible]を思ひ出させるやうに、[illegible]しいものとなつてしまつた。彼はこの頃[illegible]から得た材料で書きはじめた作品中に出て[illegible]の[illegible]を、大分[illegible]

の助けによつて書くことが出來たので、その稿料を彼女に與へたく思つた。勿論、[illegible]子には榮子の傍へ來て執筆してゐた彼と、彼の家庭や子供たちを幸福にするために、もう可なりな金を使つてゐた。

捨三が入つて行くと、榮子はまだ寢てゐたが、机の前の羽二重友禪の蒲團へ來て坐る彼を見て、嫣然して白い手を差伸べた。

「ごめんなさいね、こんなに寢坊をして。今起きますわ。」

「いや、寢てゐてもいゝ。」

榮子はやがて起出した。そして寢衣姿で火鉢の傍へ寄つて來た。

「私汚いでせう。こんな頭髮して……。」榮子はさう言ひながら、本箱の際にある鏡臺の前へ行つて、ちよつと顏を直して來た。

捨三は大きな札を一枚出した。

「もつと上げてもいゝんだけれど。ずゐぶん飲食ひをしたからね。」

「何うして、そんなことを仰しやるの、それは何あに。私そんなもの入りませんよ先生。」榮子は西洋映畫にあるやうな、苦悶の表情をした。

「可いぢやないか。僕だつてしようと思へば、もつと出來るよ。」

「それあさうですけれど、先生は藝術家ですもの。そんなお金は勿體なくつて、迚も戴けませんわ。先生には物質的の要求は少しもしたくないの。たゞ先生の大きなお心で、愛してさへ下されば、それで私十分なの。」榮子は聲に力を入れて言つた。

「それは聞いてゐるけれど、しかし僕にだつてその位のことはさしてもらつて可いぢやないか。」

「先生さういふ風にお取りになるの。私の氣持がおわかりにならないの。それあ先生のお心持は有難いんですけれど、先生のお金なんか迚も勿體なくつて。」

「僕もさう餘計なことは出來ないよ。しかし僕の生活を好くするためには、僕自身にもしなければならないことがあると思ふ。僕の金が勿體ないなら、生活を質素にしてね。」

「質素にしますとも。私もう何にもいらない。着物なんかちつとも慾しいとは思はない。こんな宿屋生活なんかも、つくづく厭になつた。先生のお宅へ行くと、ほんとに落着いた氣持になれる。先生のお傍でお仕事の邪魔をしない程度で、編物をしたり本を讀んだりして靜かに暮せるやうな日が來たら、私何んなに幸福でせう。私この頃餘所から歸つて、この部屋へ入つてくると、つくづく厭になつて來るわ。今までの生活が呪はしくなつて來るの。」

「世間はさうは思つてゐないやうだね。」

「一頃はそれは私も自暴自棄になつてゐましたから、仕方がないわ。」

「僕が若し學生時代に、もうちよつと何とか出來たらばね。一度でもあの宿を訪ねてゐたら、何うにか出來たかも知れなかつたけれど、何しろ若くて淋しい人なんだし、家内が嫉妬なんで、無い腹を探られるのが厭だつたから。」

「あの時先生がおいでになるといふので、Kさんがこの火鉢を買つて下すつたんだわ。あの方だけよ、眞實の好い意味で私を見に下すつたのは。」

「それが何うして可けなくなつたんだらう。」

榮子は捨三の追窮に逢ふと、何もかも言つてしまはずにはゐられないほど、正直な弱い心の持主であつた。しかし捨三はそれだけに深く追窮することを好まなかつた。その他のことについては、辛辣な彼の追窮に逢ふと、何もかも打明けてしまはなければならなかつた。「先生は惡い方へばかりお取りになるのね。ずゐぶんお茶目さんね。」榮子はいつでもさう言つて笑つた。「このくらゐ言つても、まだお解りにならな

へお氣持わるくなければ、そのなかで若し、とし子さんに似合ふやうなものがあつたら、一枚でも二枚でも着ていたゞければ、私何んなに嬉しいか。」

「さう。とし子にも羽織を拵へてやる約束なんだけれど。あれは和服といつては、何にもないからね。僕が作らせなかつたんだ。」

「皆さんさうですわ。卒業間際に作るんですの。私なんぞも矢張さうでしたわ。」

榮子はそれから、前の緣家先が破産したので、なくされた振袖や、晴着や、簞笥や、鏡臺のことを思出した。

「振袖だけはお金さへもつて行けば、取返せないことはないんですけれど、他のものと一つになつてゐるから、それだけ拔くとなると、大變高いものについてしまふんですつて。」

捨三は時々結婚當時の話を、榮子から聽かされてゐた。榮子が何うして三人の子供まで取られたうへに、實家からさへも疎まれて獨りで世のなかの眞中へ泳ぎ出さなければならなかつたかと云ふ事情が、段々明かになつて來た、學窓を離れて五年ばかりの甘美な結婚生活に浸つて、憧憬と空想のほか、何一つ世間のことを知る機會のなかつた彼女が、いきなり生活を失つたときの頼りなさと寂しさを想像しないではゐられなかつた。然して彼女はあつちこつち運命に小突きまはされた果、田舎へ歸つて、第二の結婚へと急がせられたのであつた。そして脆くもそれに躓いたのであつた。祖母が死んだと云ふ田舎の裏の川で、幾度か死なうと思つたほど、惱み苦しんだのも、榮子としては無理のないことだと思はれた。

とにかく質を出さうといふ金の使途には、捨三も同感であつた。

「それあ可いだらう。しかし其だけで足りるかね。」

「ちやうど其の位だつたと思ふわ。」

「質屋へ自分で行くの。」

「えゝ、東京では何でもありませんわ。でもさう度々行つたことはないの。番頭さんは私が行くと皆笑つてゐるの。」

「僕も以前は三軒もの質屋とお馴染だつた。質屋から足を洗つたのは、つい此の六七年からのことですよ。」

やがて榮子はそは〳〵と出て行つた。

「直ぐ歸つて來ますからね。」

捨三は壁際に横になつて、しばらく待つてゐた。すると三四十分ほどたつてから、榮子が歸つて來た。鶴子に食料品や草花の鉢などをうんと抱へてゐた。

「お待たせしてすみません、少し買ひものをして來たものですから。」

「何だかこて〳〵買つて來たもんだね。」

「でも皆必要品ばかりですわ。この花好いでせう。先生のお宅の床の間におくの。それからこれは蘭なの。私蘭の花が大好きなんですの。好いもんぢやありませんか。」榮子はさう云つて、蘭の切花を、机のうへの大きなコップに生けた。

「これは何といふ花だつけ。」捨三は多分百合科だらうと思はれる、長い葉と莖をもつた、斑みと赤みの強い、鉢植の花を眺めた。それはいくらか毒々しさのある色であつた。

「何でしたつけ、今聞いて來たんですけれど。ちよつと好いでせう。そんなに高くはないんですわ。」榮子は言譯するやうに言つた。

「この花なら、そこの窓ざはにおくといゝ。赤いカアテンによく映るぢやないか。」

「でも此處では水をやらないから、花が可哀さうよ。」

行李がそこへ持込まれた。榮子は急いで蓋を取つた。さうして無造作に、派手な模樣の小袖

や羽織や帯や、紅い長襦袢などを引張りだした。そのなかには、榮子がはじめて良人や子供と捨三を訪問したとき締めてゐた、黒繻子に草花の刺繍のある帯などがあつた。

「その帯はおぼえてゐるな。」捨三はその時のおほらかな、そして虚飾や臆病さのない彼女の表情や態度を懐しく思出した。

「M——夫人時代から見ると、變つたものだね。」

「さうですつてね。あの時分ほんたうにぼつとして可かつたけれど、今は目が鋭くなつたつて、御母さんがよくさう言ひますわ。」

「その羽織にも覺えがあるな。」

「え、これもあの時分着てゐたものですわ。たしか先生のところへも着て行つたと思ふわ。だけど、私あの時分から見ると、可けなくなつた？」

「いゝや、そんな事はない。個性が出て來たんだらう。顔が近代的になつて來たんだ。しかし僕は夫婦で入つて來たとき、美しい夫婦が、僕の汚い書齋へ入つて來たものだと思つて、目を睜つたものさ。M——さんは寧ろ君よりも美しかつた。」

「あの人の母さんは、評判の美人だつたんですのよ。」

「僕としては、君をM——さんのところへ引張つて行くのが、一番僕らしい仕事なんだがな。」

「まだあんな事を言つていらつしやる。いくら言つたつて駄目なことは判つてゐるぢやありませんか。でも先生と一度北海道へ行きたいわ。餘所ながらも美津子を見たいと思ふわ。」

榮子はさう言つて、聲を沈ませた。

「みんな派手なものばかりだな。」

「さうね。」榮子はさう言つて、草花模様の海老茶色の小袖と、それよりか少しはつとした色氣の、矢筈絣の着物とを、そこへ取出した。

「これとし子さんに何うでせう。私きつと似合ふと思ふわ。」

それから又束繍模様の帯を取出して、

「私これ重くて困るの。物は好いんですけれど、多分二百五十圓ばかりだと思ふわ。これを二つに切つて、とし子さんに半分締めていたゞきたいと思ふわ。いけない。いけない！」

「いけないことはないが、いくら派手でも、子供には少し可笑しくはないか、まあ切らずにおきなさい。」

やがて二枚の着物と草花と、食料品とをもつて、二人は宿を出て、いそ〳〵捨三の家へ歸つて行つた。

句　十二

春雨の扉を開けば小鳥哉

法師原に打たゝかれ蚊の聲哉

山の邊に飾蒔るゝ雪解哉

はら〳〵と薔薇溢るゝ月夜哉

街市はその草ふめば草いきれ哉

むく〳〵と瓜なつ穴の噴井哉

蟷螂の生るゝ日なか日傘す

青林檎一つ轉げて魂祭

碧梧に暑き殘りこ[illegible]り

山の井に木の葉沈みこ秋の宵

無花果の秋となりけり水[illegible]

折々は夏のうとまし冬籠り

齒痛

M―市を通つてA―溫泉へ着いたのは、もう夜であつた。

今年は殊に萬遍なく暑さの續いた夏の半以上を東京で過した融は、愛子同伴で、次男の養子問題についての用件を帶び、旁々三四日の豫定で、山の空氣を吸ひにS―湖畔の親類を訪ねた歸りを、彼は煤烟に惱まされ通しの、中央線を避けて、途中どこかへ寄つて別の方面から歸るつもりで、交通の便利のいゝA―溫泉へと立寄ることにしたのであつた。彼がその溫泉を見るのは六七年目であつた。格別氣に入つてゐた譯ではなかつたけれど、死んだ娘を旅へ連れ出したのは、その溫泉より外にはなかつたので、何とはなし心を惹かれるのであつた。

「ほんの遊山場に過ぎないんだけれど、割合色々な人が行つてゐるんだ。」融はM―市を通過しつゝある自動車のなかでそんな話をした。

わづか三四日の旅行なので、成るべく有效に使ひたいと思つたし、この山國には行つて見たい處が澤山あつたけれど、結局そんな平凡な處へ落着くより外なかつた。子供達を海岸へやつてある關係から、東京を長く離れることは許されなかつた。

「さう。何處でも可いのよ。出た以上は少し旅行氣分を味つて歸りたいわ。」

「Aで一泊して、それから又途中どこかへ寄らう。何んなところか輕井澤へおりて見ようかしら。」

「好いわ。行きたい！」

融の亡妻の親類であるだけに、好意はもつてゐてくれても、愛子に取つては何となし息苦しい其の家を立つて來たので、彼女は遙かに元氣づいてゐた。

「私幸福よ！」愛子はさう言つて、袴をはいた彼の膝のうへに片手をおいた。

親類の家を立つとき、彼はごわ〳〵した袴を穿いた。平易な裝が好きな彼が何のために袴をはいたのか、それは彼自身にもわからなかつた。多分湖畔では、事によると何時かのやうに同好の人達が集つて、自分を招くやうなことがないとも限らないと、さう思つたので、[illegible]は用意して來たのであつたが、近頃衛生家としての彼の値打も大分下落してゐたのに、二晩しかゐなかつたので彼の來たことは融の耳にも觸れずに濟んだのであつた。トランク一杯なので、荷高を低くするためでもあつたが、愛子をつれてゐると、多勢の人に彼が誰であるかが直ぐ判るので、いくらか權威を繕ふ意志も働いてゐないとは言へなかつた。彼は形式家ではなかつたけれど、しかし又まるでそれを無視するほど超越してもゐなかつた。彼は汽車のなかで、時々それをかなぐり棄てたいやうな氣がしてゐた。

馴染の旅館の門の內へ自動車が辷りこんだ。そして二人は風通しのいゝ二階の一室へ通された。

「こゝなら好いね。」

「え、好うございますわ。おゝ好い氣持だこと。」彼女は手摺のところへ出て、M―市の町の灯の遠くに見える夜色を眺めてゐた。

「この室にはちよつと板りが惡いんだよ。」融は浴衣に着かへるべく、袴を取りながら言つた。

「さう。」

「前に來たとき、下の部屋で、女中が火をもつて來て、十能を引くら返して、取替へたばかりの青疊を臺なしにして了つたんで、其の上へ火鉢を置くやうにしてゐたけれど、歸つたあとで多分僕の所爲になつてゐやしないかと思ふんだ。」

「は、、」

「四月のことでその邊に菜花が咲いてゐたが、風邪が治らないんで、M—市の親類の家へ、豫定より早く引揚げたんだがね。後からわざ〳〵主人の弟が自身豆腐を運んでくれたりして……豆腐はこゝの名物だ。」

「さう。食べたい。けど、介意はないわ、そんな事！」

料理のうちに櫻豆腐も註文して、風呂へ行つた。丈の高い彼女は、つんつるてんの浴衣を着て、默りながら廊下へ出た。

風呂場の勝手が大分ちがつてゐた。いくつかの家族風呂が增築されたばかりでなく、部屋も新築されたらしく、新しい廊下を傳つて行くと、まだ甞て見られない個所があつたりした。

湯に浸りながら、□□今迄親類にのこして來た子供のことを思ひ出してゐた。總てを清算すると、融にしては暗いとも、年弱の□□定の世間に迎いられを、□く□□□□た彼ではあつたけれど、八方間跪いた果に行詰つて、あのやうに萎れてゐるところを見ると、やつぱり胸に痛みを感じるのであつた。

「それでいくらか實世間に觸れて、やつぱり順序正しく進んで行くより外はないと云ふことが解つてくれゝば、費つたものは惜しむに足りないんだ。己が何をしてゐたつて、お前達はお前達で勉強してゐれば可いぢやないか。己には己の生活があるんだし、お前達にはお前達の個人個人の生活があるんだから、混同しないやうにしなければ可けない。己を苦しめるのは可いとしても、自分の生活を壞すのは莫迦々々しいぢやないか。己も遲いかも知れないけれど、お前達に女はまだ早い。酒もぴつたり止しなさい。」

父と愛子との問題もあつたには違ひないが、一年休んでゐるうちに彼自身學校が厭になつて、もつと氣安い世間並の生活に取りつかうとしたことは明らかであつた。不良な友人と酒と女とが、弱い彼の頭腦を滅茶々々にしてしまつた。

親類の家にある彼の顏は、憑いてゐた狐がおちたやうに、けつそりしてゐた。日々の生活に退屈してゐるやうにも見えたし、水商賣のあ□□の葉子—して□看板に消いてゐるやうにも見えた。

「強ひて引立てるのも何うかと思ふんだね。」

「でも寂しさうだつたわ。今に東京へ出てくるでせう。先生のお子さん方には、先生の家よりよいところはないんですよ。」

「しかしあれはあれで可いんぢやないかな。そんな氣もする。」

何だかみつ子が泣いてゐるやうな幻が浮んで來た。十年前まだ四つか五つであつたみつ子は、その旅行のあひだよく泣いた。學校へ上るやうになつてからは、悉皆それを忍ぶことを覺えた。そして年々に誰よりも優れた頭腦と才能の芽生を見せて來た。

「あんな子が何うして死んだのかな。今でも不思議だな。」

いつかしら彼は愚に返つてゐた。

「死んだ家内はあれ一人を頼りにしてゐた。」

「葉子さんに似てるといふぢやありませんか？」

「いくらか似てゐるけれど……。」

彼女はまた、昨年の春に亡くなつた弟のことを言ひ出した。

□□は憂鬱になつてゐた。しかし部屋へ戻つてからは直に晴れやかになつた。二人は食膳に向つた。

「[illegible]だつた。」
「おいしいわ。でも少し酸いのね。鳥鍋の方がずつと好い。」
「何にもないね。」
「これで澤山だわ。氣分よ。餘所の家で食べるものを遠慮なんかするの厭！　食べたく／＼としなくて。先生の家ではそんな事ないけれど。」
　彼女は童女のやうにふるまつてゐた。
　翌朝は別の部屋にゐた。昨夜寢床がそこに延べられた。
　朝飯をすまして、一昨日から昨夜へかけて愛子が讀んだ小說の話なぞしながら、融は行先を決しかねてゐた。
「先生の好いところなら何處でも好いわ。」
　そこへ宿の主人が短册をもつて來た。
「いつか書いたときより、いくらか上手になつたかな。」
「里村先生にも何うぞ。」
「ふ。私なんか。」
「この人は歌です。字は此頃一茶を稽古してゐます。」
「さうですか、是非どうぞ。」
「これは[illegible]一茶に[illegible]たかね。」
「さう。」
「一茶のやうな字は書けないね。」
　主人は一茶のことを能く分つてゐた。彼は俳[illegible]人であつた。そして暫くすると、一茶の幅や草稿[illegible]幾つも持ちこんで來た。[illegible]
　彼は乞ひによつて[illegible]の[illegible]の箱に字を題してしまつた
　短册帖が其の後から二人の前に展げられた。
　　行く當てもないのに急ぐ旅路かな
といふ句がふと目を引いた。それはM、H氏のものだつたからであつた。
「面白い。あの男の全部だ。」融は聲を出して快笑つた。
「好いわね。」
「字も面白い。」
「さうよ。」
　輕井澤へ行く汽車の時間と道筋を調べなどしてから、二人は其處を立つた。
「町を少し見せて！」
　自動車が町へ入つて來たところで、彼女は言つた。
「さうね、かう云ふ町はどこも型が極まつてゐるからね、天主閣でも見るかね。」
「どこでも可いわ。」
　[illegible]
　彼女の[illegible]
「すこ[illegible]行つて[illegible]
の[illegible]
こ[illegible]
　M[illegible]市から[illegible]場所[illegible]
ことといつたらなかつた[illegible]滴もなかつた。しかし途中の自然は彼等の目を樂しませた。[illegible]人込み出た。頭腦[illegible]湧いてゐるやうに、感覺がもや／＼して來た。彼は今まで氣がつかずにゐたが齒齦の腫れあがつてゐるための發熱が、殊にも彼の氣分を惡くしてゐた。齒痛は時候の變り目などに、時々彼を惱ませた。彼の生活は近頃殊に不規則になつてゐたので、いつ根抵的に齒の療治をするといふ日もなかつた。[illegible]が、屢々骨までうづかせたが、でも年を取つたら何うなるかと思はれる齒が、順々に徐々に蝕まれて行つても、何うかかうか生命を支へるのに大した支障を來さない程度には保つて來たので、一本々々と衰へて行く齒に人生の黄昏を物

兎に角、多方面的な彼の仕事の質から言つても分量から言つても、最近の文壇的存在を輝かすに十分なものであるのに比べて、彼自身の破綻だらけな生活や卑小な仕事が、いかにも惨めなもののやうに思へた。融はそれを考へると内心明かに不愉快であつた。

「方向を轉じて、いつそ赤倉へでも行つてみれば可かつた。」

「赤倉て知らないわ。」

「僕も行つて見たことはない。しかし懷しい北の海が見えるといふから……。」

さうは言つても、彼は成るべく東京へ近づいて行きたかつた。汽車は碓氷峠へと差しかゝつてゐた。

夜の輕井澤へ二人はおりた。暗いステーション前には出迎への提灯の灯に照されて、ぴかぴかする自動車や、人の影が見えた。少し物怯したやうな態度で、融はそこへ出て行つた。そして誘はれるまゝにMホテルの自動車に乗つた。自動車は場末のやうな町を通つて、淋しい木立のなかの道へと縫つて行つた。そしてうねり曲つてゐるうちに、ホテルの本館の正面玄關から、左手の日本館へと引込まれた。通されたところは、幾つかの獨立した建物の中の一つで、狭い段梯子を上つた取りつきの部屋であつた。二間ぶつ通しであつた。

「餘り涼しくもないね。」融は寄宿人のやうになつた體を、床の前の座蒲團の上に投げ出した。

「今日は暑いのよ。でも部屋があつて可かつたわ。」

風呂に入らうとして、融が浴衣に着かへ、愛子がいつでもさうする通りに、斷髪のカアルの延びるのを恐れて、タオルで姉さん冠りをしてゐるところを、山颪もないのに、灯が一時にぱつと消えた。そこらは闇となつた。でなくとも、電燈は一體薄暗いのであつた。部屋のなかは勿論、外の木立なども見えなかつた。

湯氣に包まれた蠟燭の光をたよりに、水や何かに山國らしい感じのされる狭い風呂場で融と愛子はざつと汗を流した。やつと氣分が蘇生した。

飯を食ふ時分には、電氣も來てゐた。M、S――もこゝへ最近毎年來てゐて、ついこの夏も、若しかして來られるならば、借家を見つけても可いと言つてくれた程であつた。

「M、S君のところを、愛子は知つてゐる筈だつたね。」

「え、所書があつた筈よ。」彼女はそんなものをごみごみした手提のなかから捜してゐた。

「行つても可いけれど、呼んだら何うかね。惡いかしら。」

「惡いことないでせう。直ぐ使をやりませう。それからY、N子さんにも逢ひたい。」

「さうだ。」

M、S君へ使を出してもらふ事にした。

本來ならば、何は兎に角こゝへ來れば融はM、H氏夫妻を訪問するところであつた。しかし今は途中で逢つても、避けはしないまでも、餘り親しい感じはもてないであらうことを、融は寂しく思つた。途中も彼はM、Hのことは口へ出さなかつた。たゞ折々あの俳句を口にするだけであつた。

食後本館の外廊で、籐椅子にかけながら、夜氣に當つてゐた。M、S君が暗い木下闇の向うから其の姿を現はした。融たちはその時その邊を逍遙してゐた。庭は暗かつた。木の間を透けて噴水が微かに銀色に光つてゐるのと、誰かの煙草の火が見えるきりであつた。空はどんよりして、空氣が爽かを缺いでゐた。

て俳句も、僕は男の歌も嫌ひです。歌なんか詠む女も詰らないと思ふね。」M、S君が言ふ。
「さうですか。でも歌も好いぢやありませんか。」
「僕も歌はわからなかつたけれど、近頃はさうでもないな。女性のものとしては歌も情感があつて好いぢやないか。」
勿論愛子も歌をもつてゐた。
愛子が贈つたハタ／＼のお禮に、M、S君の贈つた詩集の話が出た。
「幼馴染に何とかして……お茶呑みに來たまへと言へど、人妻に何の語らひせんものぞ、かたみに別れ……何とか、あれ好きよ。」
鄕土氣分のものだけに、融にも其の歌の感じはよく解つた。
「M、S君は鄕里に庭を作つてゐると言ふぢやないか。輕井澤がひどく氣に入つた譯だね。」
「一頃は鄕里へ引込まうかと思つて、土地も買つたんですけれど……。」
「奥の方で少し不便だけれど、安い別莊があるのよ。私も勸められましたの。輕井澤がすつかり氣に入つちやつたから。買はうかと思つてるんですけれど。先生もお買ひにならないこと。」
Y、N子が言つた。
「此處がそんなに好いかね……」
「居なじむと、それあ好いところよ。愛子さん何う――」
「私？ 今來たばかりだから解らないけれど、來る途中汽車の中から見た此の邊の自然が素敵に好かつたわ。こゝも丁度好いと思ふの――」
「水の音がしないのでね。」融は難をつけた。
「水もあるのよ。翌朝方々お歩きになつて見ると可いわ。私たちお誘ひに來てよ。」
「いや、まあ……。」
融ははずまなかつた。そして二人が歸つてからも氣分がよくなかつた。彼は翌朝は伊香保へでも行かうかと思つたりした。
「愛子がゐるなら二三日殘つてゐても可い。」
何かの拍子に彼は不機嫌に言つた。
「いや、さういふことを言つてるんぢやないのよ。私獨りなら些とも面白くないのよ。貴方と二人ゐるのが幸福なんぢやありませんか。わかつてる癖に……。」
融は默つてしまつた。
翌朝融は廊緣へ出て、何の興味もない庭をぼんやり見てゐた。下がコック場になつてゐるとみえて、煮物や何かの匂がしたり、コックの姿が庭先へちらついたりした。高原らしい爽かさが、そこに感じられなかつた。日が下の[illegible]の窓に、[illegible]早く拭きとられたまゝになつてゐた。[illegible]だの、ボーイ達だの、新聞や[illegible]にするもの……それが融の目障りになるのであつた。
[illegible]をして、[illegible]に手拭をした女が、庭を掃いてゐた。掃いた處を[illegible]に行つては、また掻きよせてゐた。大抵隈なく掃除されてしまつた。しかし彼女は、すぐ融の目の下まで來ながら樋の蔭にたまつてゐる塵に觸れようとはしなかつた。氣がつかないのか、故意なのか、その上見廻つてゐる洋服の紳士も、どこからか遣つて來て、彼女を指圖してゐた。けれど其處は彼の目にも入らないらしかつた。
融は少し苛ついて來た。
「何だつてあの塵だけ殘つて行かないんだらう。氣になつて爲樣がない。」融は腹立しさうに呟いた。
「何うしたんです。莫迦ね。」愛子も言つたが、深く氣にもしなかつた。
約束はしてあつたが、愛子の電話でY、N子がやつて來た。彼等は廊緣へ出て、朗らかに談してゐた。やがて食堂へ出て行つた。
「先生も入らつしやらない？」

融は食慾がなかつた。
「よさう。」彼はさう言つて、疊に寢そべつてゐたが、二人が出て行つたあとで、女中に次ぎの部屋へ床を延べさせて、潛りこんでしまつた。
直に彼は眠りに陷ちた。
一時間ほど眠つたらう。愛子たちに、M、S君の聲もまじつて、話聲が耳に入つて、彼は目がさめた。
M、S君は心配らしい顏をしてゐた。
「御機嫌が惡いやうですね。」彼は愛子に言つてゐた。
融は汐を見て目を開けた。
「今M、Sさんが入らして見たら、先生がよく眠つていらしたので、そつとしてお置きになつたんですの。」
「胸がわるいですか。可けませんね。」
「いや、大したこともないんです。齒齦に膿をもつてゐるんで。」
「それあ可けませんね。」
「今皆さんで散歩に誘つて下すつてゐるのよ。行きませう。」
「行つておいで。僕はこゝにゐよう、これから立たうと思ふ。」
「さう、そ[illegible]、可いわ。」
「御氣分が惡くちやね。」
愛子はY、N子につれられて、その邊を一廻りして、汽車の時間の間に合ふやうに、ステーションで落合ふことにして、出て行つた。融は頻りに誘はれたけれど、感情が釋れなかつた。皆に惡いと思ひながら、何うすることも出來なかつた。
M、S君が、時間の許す範圍で、町をそつち此方見せてくれた。
ステーションへつくと、Y、N子と愛子はもう來てゐた。
その汽車の込むことと、暑いことと言つたら！ 融は筋肉がぐしやぐしやに熔けるかとおもふほど慵かつた。額に熱を感じた。齒齦から顎骨へかけて、氣味の惡い疼痛が襲つて來た。
愛子は先刻M、S君が、署名して持つて來てくれた、彼の最近の感想隨筆集を繙いて讀んでゐた。
「先生、M、Sさん大變貴方を讚めてゐるわ。ほら、これ御覽なさい。」愛子は融のペンネームの表題になつてゐる、其の評論文のところを開いたまゝ、嬉しさうに彼の前に差出した。
「お止し、見つともないから。」融は顏を顰めた。
愛子には其の聲が聞えなかつた。
「それ！ こゝを讀んでごらんなさいと言ふのに。」彼女は翳りのない、無邪氣な目をして、重ねて彼に押しつけるやうにした。
「ちよつ。止せつて言つてるぢやないか。」
融は咄嗟にそれを押し返すやうにして、愛子の手を、本のなかへ閉ぢこめたまゝ押伏せた。
愛子は吃驚して目を見張つた。やがて彼の怒つてゐるのに氣がついた。彼はひどく不機嫌に見えた。
「貴方つて人は變な人ね。貴方みたいな呆れた利己主義者もないもんだ。餘り好い見方をしてゐるから、見せてあげようと思つたのに、女の氣持なんて些とも判らない人ね。」
愛子は蒼くなつて言つた。
「お止しッ！」融は叱るやうに言つた。
融は事によると愛子が次ぎの驛で、汽車をおりてしまやはしないかと、そんな事を考へながら、[illegible]んだ硬い顏をして、窓の外へ目をやつてゐた。
側にゐた背の高い若い男が、その時鞄のなかから[illegible]を取出した。
疼痛[illegible]／＼浸みこんで來た。

尾崎紅葉

前置き

この研究では先生といふ敬語を悉く一切拔くことにしておかうと思つたが、矢張始末が惡いので、先生としておく。しかし師弟としての立場から離れて見たいと思ふ。その點は緣故の人々に御宥恕を願ひたい。勿論、師弟としての個人的な心持を忘れてゐる譯ではない。で、紅葉研究と言つても、僅か三十七年の生活で、藝術家として是から人生觀照の目も開き、人間としての自覺も出て來ようと云ふ時に亡くなつたので、その短い生涯には大して記錄すべきことのあらう筈がない。勿論それにしても驚くべき大人であつたと同時に、時代の先に立つて行つた偉大な作家であつたために痕跡は一般的に可也大きい。たゞ文字通りの過渡期の人であつたところから、所謂內面的生活は淺かつたし、文學的な內容が比較的薄いので、常識的には隨分偉大なものではあつたけれど、評論家の側にかゝると、いつも人氣ほどには買つてゐなかつたやうに思はれる。それかと言つて、通俗作家と稱するには、餘りに一種の藝術的天分の確かなもので、自分はその文章、乃至は描くことの巧みなことに至つては、前後類例がないほどの才分に惠まれてゐたし、努力も惜しまなかつたと思ふ。その點だけでも兎に角明治文壇の偉大な存在である。たゞ主義問題になつて來ると、兎角の議論を生ずるのである。何にしても先生を論ずる材料は少いと言つていゝ。自分は生立ちから始めて三十七年間の作家生活について、概觀を述べ、それから徐ろに作品に入らうと思ふ。これを述べるに當つて、松原至文氏の「明治文豪傳の內尾崎紅葉」に負ふところ最も多いことを明かにしておきたい。

生立ち

尾崎徳太郎（紅葉）は實に慶應三年十二月の[illegible]生で、芝中門前で產聲をあげたのである。[illegible]歳で母に死なれ、[illegible]のときを[illegible]町なる母方の祖父母荒木氏の許に引取られ、[illegible]なる祖父に育てられた。（中略）若者などはこの祖父をよく知つてゐるが、門弟などには[illegible]深い老翁であつた[illegible]ッ兒であつたが、荒木氏は多分上方であつたらうから、[illegible]ち下町ッ兒ともいへない氣分はあつた。實父は彫刻の名人で、當時のデカダンであつたらしいが、紅葉にも藝術家としては何等か遺傳はあつたものと見ていゝかも知れないが、有[illegible]几帳面な荒木氏であつたため、人としては實に常識圓滿な普通道德の實踐家であつた。洒落氣滿々たるものであつたことは無論で、それが氏の藝術の殆んど重なる要素であつたと言つても可いくらゐであるが、實際生活にかけては實に堅氣な江戶ッ兒の典型であつたと言つて可からう。田舍ものゝ自分などには、この洒落氣滿由の先生の面には餘り觸れてもゐないし、興味もなかつたけれど、先生も我樂多文庫時代の樂天的な戲作者肌の氣分は、後年に至つて次第に

無くなつて來たのである。

明治六年の七月七歳で寺子屋へ入つたが、師匠といふのが久我氏であつた。先生は幼時からウヰットに富んでゐた。文才も豐かであつた。神童とさへ言はれたさうである。腕白ではあつたが、利發で、且つ性格が几帳面であつた。十歳前後には友達を集めて新聞ごつこなどして遊んだといふが、それが一寸振つたもので、[illegible]木氏が[illegible]その當時愛讀してゐた讀賣新聞も亦[illegible]振だつたと云ふ。先生は後に讀賣新聞の記者となり、また小說を受持つて(後には小說專門で出社しなかつた)生涯の傑作は殆んど讀賣新聞の讀みものであつた。讀賣新聞への入社は、多分饗庭篁村氏の後ではないかと思ふが、入社の初めは雜報も偶には書いたものと見て可からう。その證據には筆者が博文館の編輯にゐる頃、先生は社の歸りとみえて、小倉の袴に薩摩絣の書生羽織、手に小汚い鞄を提げて、鬚髮も蓬々として、「伽羅枕」や「不言不語」などの婉美で洒落た作品を書く人とは受取れないくらゐ荒いところがあつた。[illegible]時の印象で平常を律することは出來ないけれど、兎に角その頃のあの頃の新聞記者[illegible]には[illegible]應はしいものであつたかも知れない。容貌は尋常で、目は大きく、口元は締まり、色は淺黒く、口髭は伸び〳〵して、藝術的結社の頭領として、明治新文壇の闘將として、實に覇氣滿々たる風があつた。自分は今東光氏が何處かにちよいと先生に似た面差をしてゐるので、懷しく思ふことがあるが、それのもつと線の大きい豪快なものと見てい〻。勿論大分違つてはゐるが、それでゐながらちよつと似てゐるのである。

話が[illegible]へ入るけれど、思ひ出すま〻に挿入するのだから、恕してもらひたい。

十三歳の時、田安御門外の中學に入り、在學二年にして、愛宕下仙臺屋敷の幕府の[illegible]岡鹿門氏に就いて漢學を修め、傍らまた明治十五年から三田英學塾に通つた。

明治十七年には大學の豫備門の試驗に登第し、四年間そこに通つたが、その頃から藝術欲求が鬱勃として禁ずることができなかつたらしい。同志六七人と計つて文友會なるものを起し、先生は緣山と號して詩文を作つた。緣山は誕生地芝の三緣山に因んだもので、後の雅號紅葉は紅葉山から出てゐる。次ぎに[illegible]といふのがあつて、それは詩文よりも[illegible]であつた。先生は可也な腕白で、[illegible]が大好きであつたやうである。

我樂多文庫の發行とその運命

硯友社といふ藝術的結社の機關として、我樂多文庫の發行されたのは、實に十八年の五月で、紅葉山人時に歳わづかに十九歳であつた。先生自身の談話として國木田獨歩氏の、「紅葉山人」なる評傳に記されたものに、左の如き數章がある。曰く、

その頃世間に持囃された讀みものは春のや君の書生氣質、南翠君の社會小說、それから篁村翁の讀賣新聞における輕妙な短篇であつた。それらを見て山田美妙とよく話し合つたことですが、此分なら一二年内には此方も打つて出て一合戰してみよう。末には天下を……などといふ大氣焰もあつたのです。

ところへ石橋思案が來て、唯かうしてゐても詰らんから、修行のため雜誌を拵へては何うかといふのです。で、會員組織にして、同志の文章を募らうといふので、山田石橋と三人手分けして會員を募ると、學友其他で二十五人を得ました。今日になつて[illegible]、[illegible]不明、[illegible]不[illegible]で、[illegible]

は機械輸入の商會にゐるもの一、地方判事一、法學士一、工學士二、地方病院長一、生命保險會社員一、鐵道驛長一、商館の番頭が二、漁業家建築家で米國にゐる者二、大阪と横濱とで銀行員二、三州の在で樹を植ゑてゐるのが一、中學教員が一、某省の屬官が一、石炭賣込が一、等々。

それについて獨歩氏はこんな事を言つてゐる。曰く、「果して然らば、運命の神の指揮如何によつては何々中學校は其教授に尾崎徳太郎を得たかも知れない。東海道何驛の驛長に文學好きの尾崎某を得たかも知れない。要するに當時大學豫備門にゐた一青年尾崎は、天職として一生を詩神に獻ぐべく決心して文壇に上つたのではないらしい。しかし運命の神に謝す！爾來二十餘年、兎も角余輩は紅葉山人を得た。我明治の文壇は洋裝文學の泰斗を得た。そして幸ひに横濱商館の番頭に尾崎徳太郎なる何處の馬骨とも知らない姓名を見出さないで濟んだ。紅葉山人！彼の名の今日何ぞ隆々たる！露伴と竝稱されて、政界の伊隈、劇界の團菊、文界の紅露といふ、何人も兎角の異議を挾むことの出來ない大立者の紅葉山人！余輩は彼の大成功を祝する。」云々。

しかし藝術家の出現は大抵かうしたものである。混沌たる明治文學の初期に於ては、特にさうである。夏目漱石氏も「ホトトギス」に「我輩は猫である」を書き初めなかつたら、一大學教授で終つたであらう。天才詩人露伴も亦、其の前身は北海道あたりの郵便局員であつたとか聞いてゐる。

硯友社の起り、我樂多文庫の發刊等については、様々の話が傳はつてゐるが、末梢的のことで、筆者の地方などにもさう云ふ企てはあつたのである。たゞ當時の硯友社の氣分を覗ふために、硯友社戯則といふのを掲げてみよう。

一、戯則は規則の洒落にして、國音驥足に通ず。驥足は笑名抄（これで和名抄とよむのサ）に馬の足とあり、これは初の中こそ馬の足でも本社の舞臺で腕を磨けば、つまり千兩々々といふ價値が出るとは、ハテ深い意味ね。

二、本社は男女老少粹不粹、水にすむ船頭、花をうる老爺、生きとしいけるものゝ會員たることを許すなり。但し自惚生酔の御客様は御入會堅く御斷申上候。

三、本社は毎月一回、我樂多文庫を刊行す。これは賣買禁制の品なれば、錢かねづくではとんと自由になりません。むかしの名妓によくある奴也。

四、會員は毎月金拾錢を納むべし、と云ふと他人がましいが、たゞ[illegible]京[illegible]

五、文庫は三門に種類を別け、第一門を小說とし、心[illegible]と名け、第二門を戯文狂歌俳句新體詩などゝし、千紫萬[illegible]と名け、第三門を五三桐の花落葉[illegible]洒落るノと名け、狂句端唄都々逸落語とす。どれもこれもとかく御氣に入るの門なり。

六、おやしきでは不義をきつい御法度とす。本社にては燒直しが大の禁物なり、それもコンガリ狐色なら編輯方が方寸の中にあります。

七、第六の戯則を破り、至つて腹の黒い裏表が、折々忍びこむときは、編輯方がすかさず曲者待てと引戻しても、當身をくらつて取逃し、ウスドロの鳴物で紙上へあらはることなきにあらず、方々御油斷めさるな。右の條々肝に銘じ、掌へかき付、舐めて置くべき者也。

これは勿論紅葉先生の筆で、洒落にしても幼稚なものだが、鼻うごめかして得意滿面の惡戯な樣子が目に見えるやうである。

硯友社は、初め先生と山田美妙齋氏、石橋思案氏などが發頭らしいが、美妙氏は先生よりも年長で、學校でも二年ほど先輩である。幼時隣合せで、竹馬の友であつたのが、後しばらく相逢ふ機會なく、大學豫備門で再び相見た時には、實に手を取つて互に泣かんばかりの喜びであつたといふのであるが、後美妙氏は硯友社をぬけて金港堂へ入り「都の花」を發刊して、やゝ口語體に近い言文一致で、清新な小說や韻文を盛んに發表して、その頃の文壇では實に花々しいスタートを切つてゐたものである。筆者の記憶するところによれば、當時の文壇では、坪内逍遙とか、二葉亭四迷とか嵯峨の屋御室とか外國文學の影響を多分に受けた人を除いて、獨歩氏の所謂洋裝文學　變な名だが　その實日本文學では、美妙氏の作品などは文獻上看過すべからざるものである。しかも西洋文學の影響は、むしろ紅葉先生などよりか深く多くて、今から見ては頷かれる詩的內容をもつたものも少くないのである。のみならず、初めは可也奇矯で、獨りよがりではあつたけれど、思ひ切つた言文一致で小說を書いたものは恐らく美妙氏が先鞭で、その文學的功績に至つては、紅葉先生の下ではないと思ふものである。この美妙氏が奇禍を負つて、中途挫折し、世間から忘れられ、最初の訂盟者であり、後の競爭者であつた紅葉先生の盛名とは比較にならぬ敗殘の晩年を送つたのは、個人としての何等かの缺陷があつたのかもしれないけれど、藝術家としての運命は確かに不幸である。筆者はこれを社會的歷史的不公平と思ふと同時に、美妙氏の才分が本當に饒かに暢びなかつたことを惜しむものである。紅葉先生も亦友情として同感であつたのではないだらうか。この二人の交友の事については、筆者も何等知るところはない。

さて我樂多文庫は其後益々隆盛で、一時は毎號三千部を刷り、月二回發行で、一部の定價が三錢であつたが、初めは各々鞄のなかに詰込んで、學校の休憩時間などに、大聲に呼び歩いたりした。先生の風采はといふと、紫ズボンと綽名された、柳原仕入れの染返しの紺へルのズボン、日向へ出ると紫色してゐるのを穿き、日蔭町物の茶羅紗の半變色になつた、ぼて〳〵重い外套を引かけ「現金でなくちや可かんよ」などと呼んで歩いたといふ話である。それが遂に三千部を發行するやうになつたので、當時の執筆者は美妙齋、思案外史、丸岡九華、巖谷漣山人、それに新加入の川上眉山人。

しかし幾許もなく、明治二十一年八月美妙氏が同社を脫退して、金港堂の聘に應じて當時創作雜誌の唯一の女王「都の花」を發行してから、本格的な營業雜誌でもなかつた「我樂多文庫」は僅かに先を失ひ、後二十二年十月終刊の悲運に遭遇した。爾來吉岡書店の「文庫」が其の後を繼ぎ、柳浪、眉山、水蔭、乙羽が執筆、[illegible]や露伴なども寄稿した。

それから「小文學」「江戶紫」など、創亡常なき有樣で、二十四年に至つた譯である。

そこで先生は何うして大學を止したか。勿論文學熱に浮かされたためであつたらうが、初め回覽雜誌風のものであつた「我樂多文庫」が賣品となつたとき、編輯員として先生も署名してゐたところから、學校の注意を受けた。先生には文學雜誌だから可からうと考へたが、何彼と不快なこともあつて、一時は煩悶してゐたが、到頭文科に入つて二年目に斷然退學してしまつた。

吉岡書店が「新著百種」を發刊した時、先生は第一冊目に、「色懺悔」といふ有名な美文もどきの作品を載せてゐる。[illegible]露伴氏が「[illegible]」を發表して、名を馳せた後なので、先生も「色懺悔」の一冊には隨分力瘤を入れたといふ話である。

美妙氏の先驅的言文一致とはちがつて、先生のは雅俗折衷であつた。三馬や也有や西鶴などから出た新文體で、實に凝つたものであるが、まだ小説といふほどのものではなかつたかと思はれる。しかし其の文名は一時に高く、二十三年十二月、まだ在學中であつたに拘はらず、讀賣新聞から禮を厚うして招聘された。爾來先生の作品は大抵讀賣新聞に載ることになつたが、人氣作家として海内に文名を播したのも、一つはさうした舞臺を得たからでもあらうし、多數の讀者を前において、努力精進したためでもある。

春陽堂主和田篤太郎氏が最近まで連綿續いた「新小説」を發刊するに方り、須藤南翠、森田思軒、饗庭篁村など、當時一流の大家三名の名を以つて先生と小波氏へ寄稿を賴んで來た。和田氏との親密な關係はこれから始まつたものと見て可からうと思ふが、筆者が先生に聞いたところでは和田氏は紅葉といふ稱號に感服せず、美妙齋か何んとかいつた、もつと豪さうな號がいゝと言つたといふのである。

「色懺悔」について、「巴波川」と云ふのが、これは好個の短篇小説である。「拈華微笑」、「此ぬし」なども、瀟洒な好短篇であるが、「夏痩」、「二人女房」などになると、もう本格的な立派な大作である。二十四年「伽羅枕」と云ふ、西鶴風の作品が紙上に連載されるに及んでは、その麗筆忽ち江都の子女を魅し、「夏小袖」「三人妻」等續いて、又江湖に喧傳されるに至つた。

「三人妻」「不言不語」「冷熱」「隣の女」「青葡萄」「八重襷」など、今でも其の名は一般子女の耳に懐しい響を與へるであらう。その中には翻案ものもあるが、先生の筆にかゝると外國の臭は少しも見えないで、渾然珠の如き日本好みの藝術品となつてしまふのである。

有名な「多情多恨」は明治三十年の作で、「我家の小説は米の飯なり」と云ふ抱負をもつて書かれたもので、先生はその頃は漸く三十を越したばかりだと思はれるが、絢爛の境を通りこして、平淡の味を欲するに至つたものと見てよからうし、これを大きく言へば、人生味といふものが、漸く出て來たのだと言ふことも出來よう。それ故この作品は先生の製作品のなかでは、尤も自然なもので、艷麗な文章の衒ひは先つないと言つて可い。

「多情多恨」で人間の日常生活を描き、平淡の境に入つた作者が、何うした動機でか、一代の傑作とうたはるゝ「金色夜叉」と云ふ大きな山に取りかゝつたのは、頗る注目に値ひする。當時の讀者は聊かその時の状況を知つてゐるが、慌忙しい師走の巷に黒い夜叉や紅い火焔を描いた立看板が配置されたのは、恐らく新聞小説の宣傳としては未曾有のことではなかつたらうか。何にしても物凄い勢ひであつた。そして「金色夜叉」の掲載されたのは、三十一年の一月からだつたかと思ふ。

先生はこゝに大きな結構と目論見のある作品で、人生觀といへば人生觀、社會觀といへば社會觀のやうなものが、筋の運びと、その心理描寫と經緯を成して、到るところに披瀝されてゐる。恐ろしく理窟つぽいところもあつて、常識哲學とも言はるべきであらうが、文體は和漢洋を折衷したもので、「多情多恨」でのろのろ田圃道を拾つてゐたものが、忽ち高い山嶽を攀ぢはじめ、深林大澤を跋渉するの概がある。

しかし「金色夜叉」は先生の一面の代表作ではあらうが、意圖と態度から言つて、決して先生の本領であつたとは言へないであらう。藝術品として優秀なものは、むしろ「むき玉子」、「おぼろ舟」、「紫」、「青葡萄」などスケッチ風の小品や短篇であつた。先生もさうした意氣なものが好きであつたので、西鶴やモーパッサンが氣

に入つてゐたのも、その爲である。あの頃の文壇、殊に年の若い先生が、何の程度に西鶴やモーパッサンを理解したかは、一つは時代の問題でなくてはならないが、しかし筆者の記憶するところによれば、その頃連りにライトタッチといふ事が先生の口にされた。これはモーパッサンの作風から來たことであつたらうと思ふが、先生も一種のスタイリストであると見て可い以上、人生の觸れ方が輕くていゝくらゐの程度のものであつたらうと想像される。先生のところへは上田敏氏などが來てゐた。千葉鑛藏氏も遊びに見えてゐた。田山花袋氏は千葉鑛藏時代から、執筆者の一人であつたやうに聞いてゐる。先生はシャロットブレームあたりの通俗小説を、餘り上手でない發音で讀んでゐられたが、以上敏氏から外國文學のことは聞いてゐられたやうに思ふ。モーパッサンは正しく上田氏の輸入で、ライトタッチと云ふ言葉も其邊から出たのではなかつたか。筆者が初めて耳にしたときにはヂッケンスの話なども出たほどで、外國文學については、時代相當の知識はあつたものと見て可い。晩年病床に就いてゐられた頃、枕頭にハウプトマンの「寂しき人々」やオストロフスキイの「嵐」などがあつたのを、筆者は借りて來て讀んだことを記憶してゐるが、それらは千葉鑛藏氏が寄せられたものであつた。

「金色夜叉」のやうな長篇は、勿論先生が試みた最初のものであるので、あの一篇をもつて先生の特質を論ずるのは間違つたことかも知れないし、若しも四十五十乃至西洋の大家のやうに七十八十までの壽を保たれたならば、體驗も加はり、人生觀も深まり、偉大な作品が出來たかも知れないが、短い生涯を通じての上では、決して得意の作とはいへない。先生も亦「金色夜叉」執筆中屢それを口にされた。

先生の晩年は健康も衰へてゐたし、藝術についても煩悶があつた。想なしとか、淺薄だとかいふ批評もあつたので、「金色夜叉」を執筆しながら、それから後の藝術家としての態度や何かについて、可なり苦しまれたことと思ふが、「金色夜叉」がざつと六年もかゝつて、あれだけの量であつたことを想ふと、苦吟であつたことは想像に難くない。人氣と比較して、社の待遇がそれほどでもないといふところに、先生も少し自重の態度を取つたことも、筆者は今から想像し得るのであるが、それにしても長篇小説の筋を作るのは、先生に取つては餘り樂な仕事でなかつたことは判る。

この事は作品批評に讓るとして、筆者の知つてゐる先生の性行の片鱗を示さう。

先づ何よりも先生は文字を弄くることが大好きであつた。文章を捻くることが畢生の道樂であつた。俳句なぞに凝つたのも、その流儀から來てゐるので、來客も多かつたし、座談も好きであつたけれど、先づ終日机にへばりついて何か彼か字を弄くつてゐたものと言つて可い。自分が先生を或種のスタイリストといふのも其處から來てゐるので、一作一作ごとに何かしら目先の變つた文體を試みようとしたものであるが、文章に凝り性であつたことは言ふまでもなく、俳句もなか〳〵遲吟であつた。字體にも亦ずゐぶん苦心したものだが、本の裝幀とか口繪とかに至つても、總て自分の好みで、獨特の工夫を凝らすことに腐心したものである。で、机の前に胡坐を組んで何か彼かひねくつてゐられたが、健啖も亦有名なもので、[illegible]いにしては又非常なお茶好みであつた。酒は一杯で眞赤になつて、直ぐ横になつてしまふ。座談は殊に面白い方で、當意卽妙の洒落が口をついて出るのであるが、決して輕薄ではなかつた。

生活は實にきちんとしたもので、物質に對しては殊に、ルーズなところが少しもなかつた。

これは收入が澤山なかつたからでもあらうし、夫人の心掛が好かつたからでもあらうが、自體先生の物質觀には堅實なところがあつた。人の面倒を見るのにも、平日の用意がいゝからで、人氣作家が陷り易い生活の破綻などは見られなかつた。これが亦濫作をしない先生の性癖と合致したもので、すら〳〵と書き流せば流せないこともないのであるが、自重してといふよりは、道樂氣の凝り性がそれをさせなかつたのである。「此ぬし」は一夜漬のものだといふことを聞いてゐる。「男心」なども、先生にしては珍しく書き流しのものらしい、水の流るゝやうな文章であるところを見ると、生來文才に惠まれた質で、文章だけでは決して遲筆ではなかつたのである。たゞ物を疎かにしない氣質が、先生を凝り性にしてしまつたのである。

先生には人間性に對する議論とか、人生についての談話とかいふやうなものはなかつたし、重に江戸ッ兒趣味に基いた人情美とか意氣とか云ふものが、いつも話の味をつけてゐたものだが、口を開けば乃ち文章であつたのである。俳句がまた非常に好きで、運座に出ないと機嫌が惡かつた。自分達はよく箪笥町の塾で、夜おそく上の先生の家からおりて來る先生を迎へて、一室に團欒して、徹宵俳談で明したこともあるが、屢々自分達だけで運座が開かれた。

硯友社員がおしまひまで友情で固つてゐたのは、先生の愛黨心、結束力といふやうなものが與つて力があつたが、しかし親分氣質の黨派心がまた祟りを成して、世間から睨はれたことも少くなかつたし、快からず思つた人もないとは言へなかつた。眉山氏などは多分さうだつたらうと思ふが、友情といふことになると、何處までも親分肌の先生は、何うかすると好い意味でのイゴイストであつたと言つて可からう。忌憚なく言へばお山の大將でありすぎる場合もあつたのであるが、それは寧ろ先生の目下に對する愛の深さから來てゐるし、また江戸ッ兒風の時代的氣質の現はれでもある。

先生は何か個人雜誌か同人雜誌のやうなものを出すことが、一つの道樂で、その道樂は生涯を通じて終始してゐる。文藪といふパンフレットは晩年のもので、小品と俳句とを載せ、先生は小西増太郎氏の譯にかゝる「アンナカレニナ」を抄略し文飾して、ほんの少しづつ載せてゐたが、筆者にも文章を徴せられたのに對して、何うした氣持だつたか、元來無性な筆者のことゝて今回はお間に合せかねるといふ慇懃な手紙を出したところ、それが先生の諧謔に觸れたものとみえて、朱でもつて筆者の文句に、一々嘲罵の言辭を插入して突返されたので、早速ちよつとした小品を差出したことを憶えてゐる。

その著作

筆者は上來略々紅葉山人の爲人を印象的に敍述したつもりであるが、書けば書くことは未だ澤山あるのである。しかし其等は僞りにも個人的のことで、書いても書かなくとも、紅葉研究には大した影響がないことばかりである。たとへばその日常生活のうへでは、先生はひどく食味通のやうに言はれてゐる。勿論一代の通人だけあつて食道樂であつたには違ひないが、今から見るとそれもさう範圍の廣いものだとは思へない。知識はあつたらうし、各方面の食味にも通じてゐられたらうけれど、今日の一流どころの流行作家に比べれば、寧ろ質素であつたと言つて可い。家庭の食膳なぞも、夫人が煮ものがうまかつたし、先生も口喧ましい方ではあつたらうが、牛肉のロースなんかが好い方ではなかつたらうかと思はれる。これは先生の經濟から割出しても當然のことで、先生には養育の恩ある荒木老人夫妻がゐられたし、お子さんは

受けない以前のもので、通俗的な人情と世俗的な道徳理念といつたやうなものの上を流れてゐる。先生にはヒユモアの才が多分にあつたが、そのヒユモアも江戸傳來の洒落が明治化されたやうな種類のもので、その洒落の才分が作品の隨處に横溢して、一般讀者の興味を唆るところのあつたのは言ふまでもない。

ずつと初期のもので「色懺悔」が先生の出世作といつて可いのであらう。これは山田美妙が「都の花」によつて斬新な言文一致で、作品の名は忘れたが、兎に角形式の全く新しい續きものを書き出した、ちよつと後のことで、文章はずゐぶん捻つたものであるが、まだ小説といふほどの内容形體を具へるに到らないもので、言つて見れば文章のための文章といつた形のものである　一種の情緒はあるけれど、頗る甘い道樂氣の多いものである。これから見ると、「新色懺悔」は、ずつと進歩したもので、若い西鶴といつたやうな、先生なりの人生に觸れたところがある。

筆者は先生が小説家といふよりか、むしろ一種のスケッチライタアではないかと思つたこともあるが、これは「金色夜叉」に晩年の六星霜を苦しんだといふことから來てゐるので、その他に長篇はあつても、結構のあるものが少いやうに思つたからであるが、しかし必ずしもさうではない。「おぼろ舟」、「安知ピリン」、「青葡萄」といつたやうな傑れた小品もあるが、又「二人女房」や、「三人妻」のやうな最も話の面白い小説もある。「伽羅枕」は長篇としては初期のもので、これは先生の作家としての才分の豐かなことを裏書したもので、先生の理想——と言つては少し大業かも知れないが、兎に角江戸ッ兒の心意氣といつたやうなものを、佐太夫といふ一人の遊女によつて、幽艷の才筆で浮彫にして見せてゐる。文飾が餘り絢爛なために却つて眞實味を缺いてゐるところもあるが、作風が寫實とは言ふものの、外國文學の影響を受けた、所謂リアリズムの寫實とはちがつて、こゝにも先生の享けて來た江戸文學風の、一種日本的想念とでもいふやうな觀念が模糊として、その文章の綾の間に漾つてゐる。佐太夫が遊女になる動機にはドラマチカルなものがあつて、これをもつと近代風に飜譯することも不可能ではないし、遊女としての佐太夫の心意氣などにも藝術的要素は多分にある。この心意氣は、武士階級の武士道、つまり大和魂といつたやうなものの、較々大衆的になつたもので、デカダン式に混濁し腐爛したところのあるのは勿論で、先生はこれを相當氣品のある文章で、藝術家の同感をもつて書いてゐるので、必ずしも大衆文藝には墮してゐない、作家としての天分のほどが十分覗はれるのである。人間の運命を取扱つたものは、先生の作品には外には澤山はない。この「伽羅枕」と「金色夜叉」と二つくらゐのものであらう。その點でもこの作品は先生の仕事としては、他の作品よりも有意義なものではないかと思はれるが、藝術品としての香氣は「金色夜叉」よりも寧ろ「伽羅枕」の方が高いんではないだらうか。尤も先生は大の話好きで、場面場面の場景を、少し冗漫ではないかと思はれるほど、長々と描寫することが得手であつて——といふよりも其が西洋文學の影響を受けてゐない證據で、默阿彌の狂言などにもこれと同じだれ氣味がある。尤も「伽羅枕」はむしろその缺點の少い方であらう。「隣の女」とか、「三人妻」と云ふやうなものには、最もそれが多い。これは先生が話術が餘り上手に過ぎるからで、調子に乘つて委曲を悉しすぎる結果、面白くは讀ませるが深みをなくする憾みがある。「伽羅枕」は初期の作品だけに、話術はさう達者ではない。むしろ餘情に富んでゐる方である。

筆者は今度三つばかり讀んで見た。「夏痩」、「むき玉子」、それに「三人妻」である。これは第二期のもので、先生の才華の最も爛熟した時期のものかと思はれる。これと同系のものは「二人女房」、「おぼろ舟」などで、やはり同期のものかと思はれる。この期間のこの種類の作品は、恐らく先生の作家的生活の高調を樂しんだ時で、戯作振があると同時に、得意になつて書いてゐるといふ風がある。その後段に感ずるやうになつた藝術家の煩悶といつたやうなものが、少しもその影を落してゐない。勿論西鶴ほど純粹な客觀描寫で、しかも寫實の筆が、伽羅枕時代の想念にかゝつたものを擺脱し來つて、別に紅葉一流の常識哲學、常識道徳といつたやうな、堅固な批判性を具へて來ながら一層リアリスチックに事相人物が明瞭になつて來てゐる。

一體先生の作品には、この常識道徳の分子が非常に多い。その説法が到るところに出てゐる。筆者などもよくそれを聽いたものであるが、その説法が獨特のヒュモア或ひは洒落と織りまざつてゐるので、嚴肅味を缺くと同時に、愛嬌が加はつて來る。道徳的説法は大抵處世的のもので、人情觀念なぞもそれから出發してゐた。一體先生は人情ぶかい方で、どの作を見ても同情があふれてゐる。センチメンタリストに陷らないのは、都會人的洒落があつたからで、この第二期時代には、殊に先生の人情美に對する讃美が出てゐると同時に、洒落氣分が多いのである。

「夏痩」は純然たる人情話である。圓朝の作品なぞに比べて遙かにロマンチックな分子が少いと同時に、遙かに寫實的であるが、しかも人情話といふ點では大同小異のもののやうである。たゞ濃艶な才華と、通人風な豐富な知識が、極彩色に人間を塗りあげ、涙を江戸ッ兒風な洒落で緩和してゐる點が、先生が一般の人氣を呼んだ所以で、書くことの巧さに至つては類が少い。

以上の諸作は大抵西鶴風の形式文章に型どつたもので、雅俗折衷といふのであらうが、年が若いせゐもあつたらうし、江戸の戯作の脈を享け繼いでゐたので、西鶴のやうな廣い人生の背景がない。勿論大陸の藝術のやうに、その描くところの事件なり人生が、大自然や宇宙の悠久性を背景としたものでもない。自然主義以前のものは大抵さうで、客觀描寫といつても、極常識的な自然さと必然性とを具備してゐるだけである。

それにしても書くことの何と云ふ巧さであらう。そして又通人的な何といふ豐富な知識であらう。「三人妻」に至つて、先生は心持よくそれを傾けつくしてゐる。

以上の作品には甘い人情が蜜のやうに滴つてゐる。普通一般の婦女子に受けるやうな話ばかりである。悲劇的な深刻味は藥にしたくもない。生きることの惱みなどは何處を搜してもない。勿論戀愛の惱みなぞは到るところに出てゐるし、貧乏人の苦しみもないことはないが、それらは皆通人的な物の見方と洒落とに撫でそやされて、見るから美しい愉しいものになつてゐる。

「夏痩」には在來の日本婦人の最も悦ぶ、日本人的忍從以上の犧牲的精神が顯現されてゐる。これらは近代風に考へれば、最も東洋的な惡ごすい利己的な道徳觀のやうにも考へられるのであるが、主人公の美代の性格や心理には少しもさうした心理の影がない。美代は曾て奉公した主家の令孃、淫奔なゆかり子のために愛する良人を偸まれて、人間の最も美しい犧牲を發揮し、その不義の子供まで引取つて育てるといふに至つては、やゝ舊劇風の二番目ものの甘い人情に陷りすぎて、センチメンタルすぎる

興味があるのであるが、美代の性格が駘蕩たる春風のやうなものなので、格別賢婦らしい意識もなしに、いと易々とさうした道德を實行してゐる。そして其が奇蹟のやうに、何の破綻も澁みもなく、すら〳〵と實現され、ひどく目出度い結果になつてゐる。美代の爲てゐることは何といつても洒落氣の多い江戸ッ兒である。男で苦勞しぬいて來た、商賣人あがりか何かでなければ出來ない藝當である。美代はそれにしては餘りに無邪氣にその一大事を、する〳〵と容易く仕遂げてゐる。筆者が巧みな人情話だといふのはその點である。

一つこの作品に特異な點は、最後の四五行に現はれた作者の道德若しくは意氣である。

その後震策は勤直にして、美代は貞實にして、不義の娘震子は健康なり。當年十四五の男子が、嫁ほしき時節にはこの子年頃なれば、うかと色に引かれて之を娶りたまふな。不義の土に貞操の花咲かず、震子の性質心元なければ誰も用心あるべし。(士族蓮田震策長女震子、幾度も肝に銘じ忘れたまふべからず。これは不義の子なり。震子は不義の子なり。

先生の面目は以上の數行に躍如としてゐる。

「むき玉子」はこれと殆んど材料こそ違へ、人情の描かれた人情美と話術の巧妙さに於て、文章の豐麗な點に於て、姉妹篇とも言つていゝ作風である。しかも淫蕩なる令嬢と男との戀愛があるだけ、「夏痩」の方に事件的の深みがあるが、これは畫家とモデルとの幼々しい愛を、先生一流の巧妙な描寫で、極めて自然に表現したものである。文章もさう大して彫琢の迹を留めてゐないが、この戀愛描寫の段取りの巧みなことは、篤々に堪へたものである。

「二人妻」は以上二篇に比べると、題材を花柳界に取つたものでもあり、筋や人物も複雜多樣であるだけに、先づ長篇小說といつて可い。筆者は前篇だけ讀んだのである。描寫の筆の濃艶で精緻且つ自由なことは、以上二篇の比ではない。誠にこれは先生の作家としての手腕を傾倒したものではなからうかと思はれると同時に、他の二篇の人情美を謳つてゐるに反して、これは爛れた享樂世界の繪卷物である。これは又紅葉山人の通人としての一面を最も自由に發揮したもので、艶つぽい點と、遊蕩生活のテクニックに通じてゐる點に於て、眞に一代の才人たる先生の代表作たるに恥ぢないものであらう。この作品では先生はたしかに遊蕩文學、耽美主義的藝術家の要素を生れながらに十分にもつてゐるかを證據立てるに十分である。勿論これにも先生一流の道德說法もそれに伴つていた社會觀が皆無だとは言はないけれど、以上二作から見ると、遙かに戲作氣分の勝つたものである。今作品の年代を詳かにしないが、恐らく是は二期といつても大分前のものではないだらうか。その筆の爛熟した點と、結構の大きな點に於ては、以上二作よりも寧ろ作家的天分の豐かさを力強く語るものであらうが、戲作氣分の多いことから見ると、或ひは前のことかとも思ふ。これは年表を見れば直ぐわかることであるが、しかも作品としては、「伽羅枕」と伯仲のあひだにある傑作ではないだらうか。讀んで面白いことは、今の大衆文藝家などの遙かに及ばないところである。勿論作品の內容から言へば、全篇を讀まないから解らないけれど、これを今日の標準で藝術品と呼ぶには餘りに放漫なもので、單にそれが放埒な享樂世界の繪卷物であるがためばかりではなく、又その人物が殆んど人格らしい何等の陰影をもたない、極めて低級な當時の請負師とか藝者とか遊蕩兒のやうなものであるがためばかりでなく、作品の動機が戲作者風の道樂から來てゐると看るより外ない。

娛樂的讀みものとしては、文字を解するものに取つて上等の讀みものであらうが、內容は可なり粗漫なものである。柳橋藝者の意氣を見せた面白いところを一節ぬいておく。

卑しき言分なれど、我は十年來曾て土器色の紅裏に置觸れしことなく、小紋の星直しを引張りしこと無く、新しく染むる時は薄色にして、後を濃くして二度の勤めの重ねを身に着けしこともあらず。此等は圓助應來の實見藝者の當し紛れの內證なり。此細の事なれど、雀の羽色は鶴に似るべくもあらず、鷹は穗を啄まざる理にして、彼等とは一樣にはならぬ柳屋の才藏樣は、心から外見まで自然と柳橋藝妓に出來たる正銘物。かゝる御方を色に持つこそ、男と生れたるもの、此上無き冥加と心得して、寢るにも此方へ足を向けず、其肖像を掛地にして、朝夕御酒に玉子酒、供物には饅頭の蒲燒を供へ、逢はぬ日も在ますがごとく事ふべきに、木綿といふこと知らぬ男め、我を日本に幾人と無風にある女か何ぞのやうに思ひ、鯛くひつけたる口に鰯の鱠の撮喰ひして旨がる犬の邪鬼、冥利を知らぬ奴に才藏さまの有味を知らせて遣るべし。

言草が先生一流の理窟である。この意氣の高い才藏といふ藝者のきりゝとしたところは、しかし、其の口の割には出てゐない。それがひどく善人に出來てゐるところに、藝術家としての先生が、如何に溫和な人情家だかといふことが解るのである。

尙、後篇は讀まないが、その中に劇場の描寫がある。此の種の描寫としては上乘のものであると思ふから一節をぬいておく。

幕間に二人の立つを見るより、男はつと身を起し、疾足に跡を慕ひて茶屋を見屆け、頓て物案じ顏にて歸りけるが、眼色も尋常ならず、心の落着かぬ輕躁に、火のつかぬ卷莨を銜へて、人無き鶉も可懷しく待つに程なく、どろ〳〵と雪颪の音凄く聞ゆる頃、二人は紺の中形の浴衣に衣更へて、見るから涼しげに打扮ち、茶屋の女房を始め、五六人の男女に送られて入來りぬ。彼男は幕の開きかゝるにも關はず、また外を伴出して、假花道の口より鶉の椅子を窺ひて、幾時待むを制せられ、階子を昇りて三階の運動場に、銘酒賣る店の椅子に腰かけ、欲しくもなき葡萄酒を一杯取りて、卷紙硯箱を借り、四邊に人のあらぬを幸ひに、假名にて細く認め、引結びて手の中に藏るゝほどの文にして袂に入れ、此後は見ぬ氣にて悠々酒を飲み、後は氷ラムネ、胸のすくはずの水も萠へて、半分にして立ちぬ。場所へは還らず、柝の音を餘所に聞きて、何れく姐の思ある方を望み、折々は舞臺を覗きて、此幕の長きを待遠なる顏色。

以上諸作は元祿風の雅俗折衷體であるが、「三人妻」は殊に西鶴風である。先生の言文一致は何の作が初めてだか、筆者は今記憶してゐないが、生涯に文體の幾變遷してゐることは明かである。「多情多恨」あたりでは、大分それが調つて來てゐるけれど、「隣の女」の文章などは、先生にしては餘り上出來ではない。兎角文語が口語とこなれ合つてゐない。

「多情多恨」は恐らく先生一代の傑作でもあらうか、以上諸作のやうなストーリィ風の、若しくはロマンチックな色彩から脫して、日常生活を取扱つてゐる。以上が江戸文學の繼承なら、「多情多恨」はたしかに現代當時の生活の描寫である。人間を描くにも、單にその外貌や一般的人情に止まらず、個性的なものに心理描寫を試みてゐる。これは確かに先生の進步であ

る〻しかしこゝでも深刻であるべき悲劇が往々にして洒落と揶揄のために、擽りの喜劇となつてゐる。先生をヒュモリストと看れば、それも結構である。多少先生もそれを自覺してゐたのか、モリエルの飜案を試みたものもある。「夏小袖」、「八重襷」がそれである。

これは勿論先生が直接譯したものではない。誰かの譯したものを、紅葉流に燒直したものである。

西洋からもつて來たものは、倘その他にも澤山ある。「隣の女」はモーパッサンのやうに記憶してゐるが、分明でない。飜案であることだけは間違がない。「寒牡丹」もさうである。「冷熱」がデカメロンの燒直しであることは勿論だが、「寒牡丹」は兎に角、「冷熱」も「隣の女」も甚だ脂の乘らないもので、文章も生硬だと思ふ。

「多情多恨」には藍本がある。それは英國か米國の通俗小説から來てゐる。筆者はその原作を先生の家からもつて來て見たことがある。

更に筆者の知るかぎりでは、「金色夜叉」も或ひはその主題は外國の作品から來たものではないかと思ふのである。今詳しく覺えてゐないが、確かに其からヒントを得たらしいものを、同じ先生が讀んだものの中に讀んだことがある。

これは勿論ヒントだけである。

「多情多恨」は先生が「我家の小説は米の飯なり」と自負しただけあつて、平々淡々のうちに、愛妻を失つた若い男の悲しみと孤獨の寂しさのうちに、亡妻の妹や、葉山と親友夫婦の家庭との交渉などを、先生にしては粉飾のない寫生文式の筆で叙したものであるが、詩味の乏しくないものである。尤も先生の第三期の作品が、殊に常識的な處世哲學のやうなものの多いことであるが、「多情多恨」にもそれが多いけれど、この作品はヒユモアをもつて優つてゐるので、その底に一味の感傷が流れてゐる。戲作風のところは先づないと言つて可い。テーマも新しくて氣がきいてゐる。鷲見が段々葉山の細君に愛を感じて行くところも自然である。

作中の副主人公葉山は紅葉先生自身の畫像といつても可いくらゐ、先生の友情や、洒落や、家庭觀や、處世哲學が出てゐる。それは俗世間を知つてゐるといふだけのもので、常識の範圍を出ないのであるが、それなりに可なり條理立つたものであるから、先生の或時の座談と思つて左に摘出する。

尤も人間と云ふ奴は弱いもので、世帶を持つた日には、から意氣地は無いものさね。幾許才子だの色男だのと頤を撫でても、それは[illegible]のソップを喰つてゐる時分の[illegible]樂で、[illegible]と[illegible]を擧げて[illegible]ると、貴方また差[illegible]が來ましたよ、などゝ脅迫されるやうな始末だ、[illegible]ずには居られないよ。何と云つたつて、獨身の内のやうに氣散は無いのさ。割前で蕎麥を食つて、歸りがけに、一寸その時計を貸し給へ、などゝ云ふ鹽梅に物事が手輕に行きません。……夫婦の間は魚と水との如しさ。君などは別して睦じかつたから、穴と[illegible]との如しだつたよ。亭主は動き廻るから魚だ、内君は澄してゐるから水だらう。その魚を求めるのだよ、……と言ふと、何だか私が酷く細君に恐入つてゐて、君が常住來るのを細君が陰で可厭な顏でも爲る所から、その禁厭に些と胡麻を摺つて置いてくれ、と頼むやうに聞えるけれど、那樣不見識なのぢやないよ……。

しかし何と言つても此の作は少し理詰めで、先生が家庭人として、次第に眞面目に、道徳的になつて來たことが、この作品で覗へるのである。冗長の嫌ひはあるが、先生の轉機を示すに十分である。

「金色夜叉」は最後の作で、勿論先生の傑作の一つである。

「多情多恨」は言ふ迄もなく、その他の作も、長篇小説らしい結構のものは少い。併し、細かく丁寧なので相當に長くなつてはゐるやうなものの、質から言つて短篇小説といふべきものが多いのであるが、「金色夜叉」に至つて、先生は初めてヤマの多い小説に取りかゝつたのである。筆者はこの作を全部讀んではゐないが、新聞の讀みものとしては、筋立の極めて面白い、場面の變化の多い、先づ成功したものと言はなければならない。しかも、此の作にはモデルがある。先頃、小波氏が「金色夜叉の眞相」と題して、發表されたところによると、小波氏の色女であつたところの紅葉館の××といふ女が、或る實業家に嫁いたので、友人の紅葉先生が、友人を裏切つたのを憤慨して、紅葉館の玄關先で、その人を足蹴にしたとか云ふ、それが作品では、熱海になつてゐるのださうである。勿論、熱海の場面が、最も熱が籠つてゐるし、芝居にしても、最も當受けのするところであるが、筆者などには、何となく厭味であるのは、情熱すぎるからではないだらうか。

先生が文章に凝つたことは、「金色夜叉」が其の最もひどいもので、この文體を案ずるだけでも可なり苦しんだものである。一作毎に、スタイルをかへるのが先生の味噌で、文章が何よりも大事だつたのである。「金色夜叉」は、歐文脈のやうなものが、多少入つてゐるが、言文一致に進んだ先生が、更にこの怪奇な文章へ行つたのは、やゝ「多情多恨」の平淡味に興を失つたからではないだらうか。最も結構にふさはしいものとなると、最も力強い文章を選ばなければならなかつたのである。

この「金色夜叉」は漱石氏の「吾輩は猫である」と、或る部分は同時代であつたと思ふが、ずゐぶん時代の違つたものであるといはなければならない。

先生の身邊小説ともいふべきものに、「青葡萄」といふ事實の記錄のやうな寫實的な作品がある。これは「多情多恨」などよりも前のものかと思はれるが、先生と風葉、春葉兩氏の關係、後進に對する温かい心遣ひなどが、實によく出てゐる。しかしそれよりも興味のあるのは、その頃の文學青年に對する先生の憤慨で、それにも先生の喧ましい道德家であつたことが窺へるので左に錄しておく。

凡そ天下に小説家と稱するものは、近來後進とか稱へる修業中の小説家である。彼等の禮を心得ぬことは山猿より甚しい。一面識もないのに卒業と刺を通じて……何處へでもお世話を願ひたい——驚かざるを得ぬ、呆れざるを得ぬ。……是等は未だ可い。二度でも三度でも斧正を辱うして、何か恁か世間に紹介してもらつて、覺束なくも獨歩も出來るやうになる、さあその御無沙汰、近火があらうが、それから十日經たうが顏を出すでもない。……然し未だ可い、現在立派に門下生と稱して、草稿も持つてくれば、互いお世話にもなつてゐながら、陰へ廻ると、先生を同輩に遇つて、其名を呼捨にしたり、「あれ」がなどゝ云ふ代名詞を用ゐたりして其人物を貶し、其文章を罵るのである。

以上は紅葉研究といつても、ほんの粗末な感想に過ぎないのである。勿論研究といふほどのものではない。唯、紅葉研究の多少の參考になれば幸ひである。(秋聲)

年譜

明治四年（未歲）十二月二十三日、加賀國金澤市横山町に生る。末雄と命名。

三四歲にして當時生活事情として横山町の邸宅を引拂ひ、居を淺野町に移す。そこに數年の幼少年時代を送る。

十二年春、養成小學校に入學。

十五六年の交、更に居を御歩町に移すと同時に、尋常を卒業、仙石町の金澤小學校（高等小學）に移る。生來體質尫弱、發育不完全、屢藥餌に親しみ、憂鬱なる少年時代を送つたが、この頃より稍健康。

十九年、石川縣專門學校に受驗入學す。後幾許もなく學令改まり、專門學校が高等學校となるに及び、同豫科に入學す。多病の幼少年期には女子と嬉戲し、又劇場の空氣に浸ること多く、高等學校豫科に入つても、幼稚な舞臺を作つたりしてゐたが、銃を擔ぐ頃には、やゝ硬派になつて歷史や人物評を好み、又別に漢學塾に通つて、殊に漢學を修めた事もある。

二十二年十月父を喪ふ。同時に學校を退く。

是より先、蘇峰の「國民之友」や雪嶺の「日本人」が發刊され、青年の血を湧き立てたが、明治の文藝が漸く曙光を放つた時代で、東海散士の『佳人の奇遇』、末廣鐵腸の『雪中梅』など啓蒙期の作品や、純文藝的な、坪内逍遙の『書生氣質』や、二葉亭四迷の『浮雲』などが出てゐた。小說雜誌「都の花」、「新小說」、續いて「文藝倶樂部」の出たのも、その前後である。山田美妙、尾崎紅葉、幸田露伴など、漸く青年に親しまるゝ一方、「早稻田文學」に於ける坪内逍遙、「しがらみ草紙」に於ける鷗外漁史の名が、その評論や飜譯と共に、青年の文藝熱を煽る。近松や西鶴の盛んに活字に附されたのも、その頃である。

彼は英語や漢文などは好かつたが、代數幾何が不得手であつたと同時に、家計も不如意がちなので、學校生活を迂遠に思ひはじめてゐた矢先、父に訣れたのを機會に、文學に有りつかうと志した。

二十四年四月上京、間もなく輕微の天然痘にかゝり、大阪に赴き、身を長兄の許に寄す。一ケ年關西に漂泊、徒らに空しき月日を送る。

二十五年、再び學業繼續の意志をもつて、長い浪人生活から郷里へ歸つた秋聲は、母と二人の妹の許に、又も代數學などを勉強する身となつたが、勿論苦學の覺悟で、豫め新聞社へ入つたりしたが、人の逆りに誘ふまゝに、一日だけ英語の試驗を受けただけで、ふらりと越後路へ旅立つことになつた。長岡で新に發刊される新聞の主筆が彼を惹きつけたのであつたが、彼はそこで再擧を謀らうと考へた。

二十六年一月、再び上京。長岡で知つた小金井代議士の紹介を得て、博文館に入る。博文館に入る前、同鄕人の許に身を寄せ、或る學校で英語を教へたこともあつたが、生活は相當苦酸であつた。

二十七八年のころ、尾崎紅葉の門に入ると共に、創作に志し、『藪柑子』を漸く「文藝倶樂部」に載せることが出來た。不評ではなかつた。材料の關係から特別に賞讃した批評家もあつた。

冬の初め、博文館を退き、神田の下宿に籠つて、地方新聞の小說を書く旁ら、芳賀博士の仕事を手傳ひなどしてゐた。

三十年十二月、文壇的に擡頭した小栗風葉が、紅葉山人の玄關を出て、その裏に塾を始めたとき、一日彼も風葉の誘ふまゝに、そこに一間張の机を持込むこととなつた。主盟は風葉で、泉斜汀、柳川春葉、外に、中山白峰、田中涼葉、藤井紫明など寄り集まる。鏡花は既に大塚に一家を成してゐた。

三十三年二月、塾解散、彼は牛込築土前の下宿に入る。

三月、美文學報の記者として、「讀賣新聞」に入社し、下宿を神田の錦町に移す。社へ通勤にいくらか便利なためである。

その夏、胃擴張に罹る。長いあひだの不規則な生活に、引續いて神田の下宿生活が、生來の胃弱であつた彼の健康を惡化させてしまつた。彼は療治のため、錦町の鈴木某氏の病院に通ふ傍ら、發奮して「讀賣」紙上に長篇「雲のゆくへ」を書きはじめた。文名やゝ擧る。

三十四年、「讀賣新聞」を退く。是より先、春葉は博文館に入り、「新小說」の編輯にたづさはつてゐたので、彼は短篇を同誌に書き、續いて、「後の恋」、「前だ人」などの個人主義的な傾向をもつた作品も同誌に載せられた。貧乏下宿にある間、生活のために、彼は翻譯などの無駄な仕事を爲しつゞけて來た。「中央新聞」に載せた「ザ、スイクレット、オブ、スマッグラルス」の飜案などが辛うじて記憶に殘つてゐると云ふ。

三十五年の暮の三十日、彼は飄然として關西の旅に上る。幼年時代から大阪浪華期へかけて、何彼と親も及ばない激勵と保護を惜しまなかつた長兄を見たかつたのである。

同二月の末、大阪より瀨戸內海を渡つて、九州別府の溫泉に遊ぶ。まだ癒り切らない病を養ふため、嫂に勸められて、彼女の叔母なる人をたよつたのである。明るい內海の風景は、旅らしい旅をしたことのなかつた彼を恰しませた。彼はその時、「惡漢兒」と云ふ飜案とも作ともつかない仕事の報酬を、大阪で新潮社から受取つた。原作はドウデイである。彼はその可憐な作品の主人公兄弟の關係が、長兄と彼自身によく似てゐるのに感じたらしい。

三十六年、故紅葉が夏の朝風にそよぐ頃、京都を經て歸京し、再び築土前の下宿の客となる。

同四月の末、同窓であつた友人太田四郎の勸めにより、同じく友人田中千里が學資を得る方便として小石川表町に建築した借家の一つに移り、初めて一戸を構ふ。

その頃、金港堂出版に係る文藝雜誌の主筆佐々醒雪から寄稿の申出の手紙を、九州で受取つた彼は、二號の卷頭を飾るべく執筆を急いだ。旅行が彼の藝術境に轉換を與へてゐたが、その作品も表題も作者の記憶に殘つてゐない。

その夏、濱子と結婚。

その冬、紅葉山人逝く。尚永く胃癌に惱んだ末、終に不歸の客と成つたのである。

三十七年の秋、長男を擧ぐ。

三十八年の冬、居を本鄕森川町に移す。長篇小說「少華族」を、「萬朝報」紙上に掲げたのは其頃である。

時しも三十七八年の日露戰爭で、小說は軍事に關するものでない限り、顧みられなかつた。彼も亦戰爭小說を書かねばならなかつた。勿論劇場なども自ら鎖されてゐたが、戰爭が熄んで間もなく、本鄕座が久しぶりで高田一派によつて開場されたとき、「少華族」が脚色されて上演された。

三十九年夏、長女を擧ぐ。

四十年、「おのが縁」を「萬朝報」に掲ぐ。同紙に「二十七八」を書いたのも、その翌年頃かと

とかと思はる。

四十一年秋、「國民新聞」文藝欄擔當者としての高濱虚子の好意により、新しき中篇小説を試む、本集卷頭の「新世帶」がそれである。自然主義的、人生派的傾向の最初の試みと言ふにふさはしい。新潮社より上梓。世評高し。

四十二年二月、短篇集「花束」を出版す。

同四月、「出産」上梓。

長篇「焔」を「國民新聞」に掲げ、「凋落」の「讀賣新聞」に載つたのも其の前後である。

短篇集「秋聲集」の易風社より出版されたのも其頃と覺しい。時は自然主義物興期で、生活に目ざめた彼の作風が其傾向と合致するところ多く、作家としての地位も亦定まつたと言はれる。

四十五年一月、長篇『黴』を新潮社より出版。漱石の推薦により前年「朝日新聞」に掲げ、好評を博したるもの、單行本として世に出づるに及び、世評益々高く、漸く文壇的地位を確保す。

同四月、『足迹』出版。これは『黴』以前の作に係り、「讀賣新聞」に連載せしもの、花袋の如きは『黴』以上の傑作と稱す。

大正二年七月、『爛』を出版。「國民新聞」紙上に掲ぐるところのもので、愛慾描寫の技巧神に入り、官能細叙を究む。

四年十月、「讀賣新聞」所載の『あらくれ』出版。

同九月、「奔流」を「朝日新聞」に執筆。

六年七月、長女瑞子を失ふ。この秋『犧牲』の作あり。

七年、「婦人公論」に「祕めたる戀」を執筆。

八年、「東京日々」に「誘惑」を掲げ、「婦人之友」に「闇の花」を書く。いづれも長篇。

九年、「蒼白き月」などの好短篇あり。暮に花袋と共に五十年祝賀會あり。『灰燼』「中外商業」に出づ。

十年十二月、「大阪朝日」に「斷崖」を書き、「時事新報」に『何處まで』を書く。

十一年秋、「東京日々」に『二つの道』を書く。「或賣笑婦の話」を初めとして短篇多し。

十二年、「報知新聞」に中篇「無駄道」を書く。蓋し自敍傳の一少部。「不安のなかに」を四月の「中央公論」に掲ぐ。

十三年、「改造」に「花が咲く」「風呂桶」、「中央公論」に「車掌夫婦の死」などの短篇あり。一月以來「婦人之友」に『草は萌る』を連載。

十四年一月、「中央公論」紙上に「挿話」を書き、四月に「未解決のまゝに」、又改造に「[illegible]」「人騒ぎ」、「女性」に「黒い煙」、その他「二つの小品」など好短篇頗る多し。「東京日々」に『蘇生』を書く。

十五年一月、妻を喪ふ。

この年、「萬朝報」に「亂れ髮」を書く。三月、『折鞄』の作あり。

同八月、「元の枝へ」『暑さに喘ぐ』の諸作あり。

昭和二年四月、「春來る」に續いて各種の短篇あり。冬、「和む」「犬を逐ふ」等を書く。

三年一月、「歯痛」の作あり。

著者の言葉

自分は今この集の撰に当つて、また自らの貧しい作家的生活を振返らないではゐられないと共に、多くの無駄な作品を書いて来たなかから、幾許かのものを撰ぶことの出来るのを悦ぶものである。

人には夫々の稟質がある。才分がある。修養や精進も亦全く不必要のことではないのみならず、大いに必要なのであらうが、いくら骨を折つて書いたところで、資質以上に大きくなることは容易のことではない。四十年足らずの私の芸術的生活も、今になつて決算して見れば、大体本集に編まれた程度のものしか出来なかつたのである。

自分は一個の作家としての自分の芸術的生活は全く言ふに足らない。生来の迂愚で、人生を知らなかつたし、技巧も極めて拙劣であつたのは論を待たない。たとへば『桎梏』とか『怠けもの』とか、今は表題も内容も忘れてしまつたやうな作品も可なり沢山あるのである。その中には残存してゐるものの悪いものよりか、或ひはいくらか優つてゐるものがあるかも知れないが、悉く湮滅してしまつてゐる。年譜に掲げてあるのは記憶に残つてゐるものだけだが、その中にも今見ようと思つても、どこへ何う紛れこんでしまつたか、薩張行方の知れないものも二篇や三篇ではない。新聞に書いた長篇で、単行本になる運びがなくて、闇に葬むられたものも数篇あるが、短篇に至つては幾十篇だか数へられない。最近の作でも手がかりのないものが数篇ある。記憶にあるものでは『梅を買ふ』とか『復讐』とか言つたやうなものである。

本集作品の排列の順序には、別に根拠はない。大凡年代順といつてもいゝが、まるきり年次を顛倒したものもある。まあ、ざつと種類別にしてある訳だが、それも厳密な意味ではない。作の分量から一つところに寄せた傾向もあるのであるが、それもさう厳密ではない。

他の全集——と言つても四五年前に出版された新潮社の『現代小説全集』のことだが——に載せたものは此の集には成るべく載せたくないと思つたが、世間が認めて代表的作品としてゐるものは勿論、好いとおもふ作はさう沢山はないので、已むを得ずその中からも好ささうなものを引こぬいて来た。自分のやうに作品の多いものは、殊にも無駄が多いからである。最近四五年の短篇は是非とも網羅したいと思つたが、長いものが頁を塞げたので、大分割愛したものも多い。載せたくも原稿の見当らないものもあつた。殊にお詫びをしておかなければならぬのは『抱擁』を逸したことである。これは私に同表題の作が二つあるところから起つた間違である。

一作一作の余白の埋め草に至つては、時々の感想文が、これも自分の無精から、大抵紛失してしまつたので、駄文が多い。これもお詫びしておきたい。

「評傳尾崎紅葉」は自分の思ひつきで載せることになつたので、この文章の「評傳」としては、素より飽足りないものであらうが、自分の見るところは相當に正しい積りである。

自分はひどい無性ものである。無性ものは大抵頭腦の惡い臆病ものである。自分は自らの仕事を後から振返ることが出來ないほど、自分の仕事に自信がもてない。或程度の自信はもつてゐるけれど、それ以上に不斷の不滿をもつてゐる。從つて自分は作品を讀みかへすのが、如何にも厭なのである。自分が校正その事は嫌ひでない癖に、作品を讀みかへすのが厭さに本が出るときには校正はいつも人委せである。過去の出版は悉くそれであると言つてもいゝ。自慢にはならないが、書き卸しの原稿と大分違つたものになつてゐるに違ひない。勿論校正してくれる人は、原稿に忠實で、寧ろ作家の字の間違などを訂正してくれる場合もあらうとは想像されるが、また思ひがけない間違も生じ易いのである。原稿紙に書きおろした時も、自分は讀みかへすといふことをした事がない。この惡癖は喫煙癖とともに、何うかして矯正したいものだと思つてゐるが、だらしがないので、今以て悛めることができない。

本集は好い校正者が、數種を集めて彼此參酌してくれたさうだから、多分大した間違はないことと思ふ。尤も解らないところだけを指摘してもらつて自分に正した個所もあつた。

年譜も大抵間違はないつもりだが、自分に何の手扣もないので、新潮社の「現代小說全集」のものに據り、少しばかり訂正したり、手を入れたりしたが、我ながら何うも年月が直り來ないやうなところもある。間違だらけといふほどではないが、一年づつ順に送つた方が好いやうなところもないことはない。しかしこんな心配も生きてゐる間のことで、死んだ後のことまで氣にしてゐるのではない。

序だから一言しておくが、自分のは兎に角、明治から大正昭和へかけて、ずゐぶん好い作品を書いた人がある。藝術的良心があり、藝術的良心を保持しうるだけの境遇にもゐた中年の人では、この集一冊で過去半生の作品を網羅してゐる向きもある。その結晶が一本一圓といふに至つては、實に驚くべき廉價といはなければならない。これを纏めたのは改造社である。餘計なおせつかいかも知れないが、自分は數十萬の讀者が、この擧を最後まで扶けられんことを餘白をかりて熱望して止まない。

著者識す

昭和三年十月二十五日印刷
昭和三年十一月一日發行

現代日本文學全集　第十八篇

著者　德田秋聲

發行者　山本美
東京市芝區愛宕下町四丁目六番地

印刷者　杉山愛二
東京市牛込區市ケ谷加賀町一ノ一二

發兌　改造社
東京市芝區愛宕下町四丁目六番地
振替東京八四〇二番
電話芝(五)一一二一番・一一二二番・一一二三番・一一二四番

秀英舍印刷　[illegible]